千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書　XVI

— 印西市船尾白幡遺跡 —

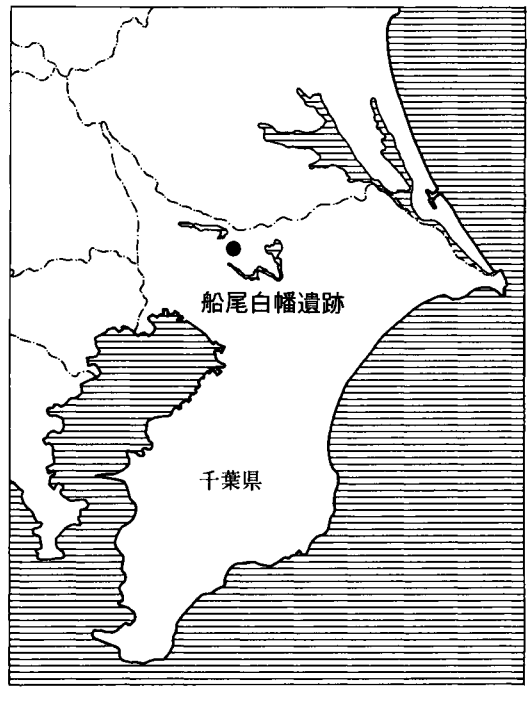
平成16年３月

都市基盤整備公団千葉地域支社
千葉ニュータウン事業本部

財団法人　千葉県文化財センター

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書　XVI

— 印西市船尾白幡遺跡 —



SI113遺物出土状況

SI076出土遺物

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告第477集として，都市基盤整備公団千葉地域支社の千葉北部地区新市街地造成整備事業関連に伴って実施した印西市船尾白幡遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，弥生時代及び奈良・平安時代の遺構群や多数の墨書土器・線刻土器が検出され，この地域の古代史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行にあたり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関，また，発掘作業から整理作業まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年３月

財団法人千葉県文化財センター

理　事　長　　清　水　新　次

凡　　例

1　本書は，都市基盤整備公団による千葉北部地区新市街地造成整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は千葉県印西市大字船尾字白幡322-1ほかに所在する船尾白幡遺跡（遺跡コードＣＮ705）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団）千葉地域支社の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は，第２章及び第８章第１節の一部を上席研究員　田島　新，第３章の一部及び第８章第３節を研究員　小笠原永隆，それ以外を室長　糸川道行が担当し，編集は糸川が行った。

6　文字資料については，国立歴史民俗博物館　平川　南教授に，判読していただいた。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，都市基盤整備公団千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部及び印西市教育委員会の御指導，御協力を得た。

8　本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第１図　　国土地理院発行　1/50,000地形図「竜ヶ崎」（Ｎ1-54-19-13）「佐倉」（Ｎ1-54-18-14）

第２図　　印西市発行　1/2,500地形図22・26

第３・４図　千葉県企業庁千葉ニュータウン事業部(当時)　平成２年６月発行

平成４年12月　修正　千葉ニュータウン平面図59・60

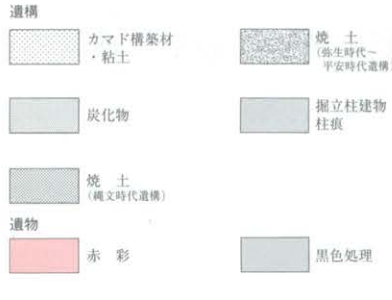
9　写真図版１の周辺航空写真は京葉測量株式会社による昭和48年撮影のものを使用した。

10　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北（日本測地系）である。

11　本書で使用したスクリーントーンは挿図で指示した以外は下記のとおりである。

12　本書第２章で使用したインスタントレタリングは下記のとおりである。

13　本書での小グリッド呼称法は下記のとおりである。



小グリッド呼称法（例：7Dグリッド）

7	D									
	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
	10	11								
	20		22							
	30			33						
	40				44					
	50					55				
	60						66			
	70							77		
	80								88	
	90									99

器種	ナイフ形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台形石器	角錐状石器	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	削片	R・フレイク	剥片	砕片	剥片利用石器	石核	石斧	敲石	礫
	★	☆	▲	△	✱	✱	■	□	◫	▲	△	◉	●	○	☼	✱	◉	⊗	ⓘ
石材	黒曜石	チャート	珪質頁岩	頁　岩	メノウ	安山岩	流紋岩	砂　岩	変成岩	凝灰岩	石英斑岩	珪化木	片麻岩	泥　岩	ハレイ偉				
	●	▲	✱	★	✱	○	△	■	□	✱	◎	●	●	⊖	◎	—	—	—	—

本文目次

序　文
凡　例
第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　１．調査の経緯と経過……1
　　２．調査の方法……2
　第２節　遺跡の位置と環境……2
　　１．遺跡の位置と地理的環境……2
　　２．遺跡の歴史的環境……5
第２章　旧石器時代……9
　第１節　概要……9
　第２節　第１文化層……10
　第３節　第２文化層……10
　第４節　ブロック外の遺物……55
第３章　縄文時代……57
　第１節　遺構とその出土遺物……57
　　１．炉穴……57
　　２．陥穴状土坑……63
　　３．竪穴住居・竪穴状遺構……67
　第２節　縄文時代及び時期不明の石器……72
　第３節　遺構外出土土器……77
第４章　弥生時代……91
　第１節　遺構……91
　　１．竪穴住居……91
　第２節　遺物……103
　　１．竪穴住居……103
　　２．遺構外……120
第５章　古墳時代……129
　第１節　遺構……129
　　１．竪穴住居……129
　第２節　遺物……129
　　１．竪穴住居……129
　　２．遺構外……132
第６章　奈良・平安時代……136

第１節　遺構 ……136
１．竪穴住居 ……136
２．掘立柱建物 ……190
３．ピット群・土坑 ……201
４．井戸状遺構 ……203
第２節　遺物 ……203
１．竪穴住居 ……203
２．掘立柱建物 ……258
３．ピット群 ……259
４．遺構外 ……259
第７章　中・近世及びその他の遺構・遺物 ……282
第１節　遺構 ……282
１．土坑 ……282
２．溝状遺構 ……288
第２節　遺物 ……290
第８章　まとめ ……291
第１節　全体の概要 ……291
１．旧石器時代 ……291
２．縄文時代 ……291
３．弥生時代 ……292
４．古墳時代 ……295
５．奈良・平安時代 ……296
６．中・近世その他 ……296
第２節　奈良・平安時代集落の様相 ……297
１．竪穴住居・出土遺物の時期区分 ……297
２．集落の変遷 ……299
３．文字・記号資料について ……302
４．土器の打ち欠き・穿孔及び破壊について ……307
第３節　SI024出土貝類の分析 ……320
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺地形図 ……3
第２図　遺跡地形図 ……4
第３図　遺構全体図 ……6
第４図　下層全体図 ……8
第５図　第１ブロック器種別分布図 ……11
第６図　第１ブロック石材別分布図 ……11
第７図　第１ブロック出土遺物（１）……12
第８図　第１ブロック出土遺物（２）……13

第９図　第２ブロック器種別分布図 ……15
第10図　第２ブロック石材別分布図 ……15
第11図　第２ブロック出土遺物 ……16
第12図　第３ブロック器種別分布図 ……17
第13図　第３ブロック石材別分布図 ……17
第14図　第３ブロック出土遺物（１）……18
第15図　第３ブロック出土遺物（２）……19
第16図　第４ブロック器種別分布図 ……25
第17図　第４ブロック石材別分布図 ……25
第18図　第４ブロック出土遺物（１）……26
第19図　第４ブロック出土遺物（２）……27
第20図　第４ブロック出土遺物（３）……28
第21図　第４ブロック出土遺物（４）……29
第22図　第５ブロック器種別分布図 ……31
第23図　第５ブロック石材別分布図 ……31
第24図　第５ブロック出土遺物 ……32
第25図　第６ブロック器種別分布図 ……32
第26図　第６ブロック石材別分布図 ……32
第27図　第６ブロック出土遺物 ……33
第28図　第７ブロック器種別分布図 ……34
第29図　第７ブロック石材別分布図 ……34
第30図　第７ブロック出土遺物 ……35
第31図　第８ブロック器種別分布図 ……36
第32図　第８ブロック石材別分布図 ……36
第33図　第８ブロック出土遺物 ……36
第34図　第９ブロック器種別分布図 ……38
第35図　第９ブロック石材別分布図 ……38
第36図　第９ブロック出土遺物（１）……39
第37図　第９ブロック出土遺物（２）……40
第38図　第10ブロック器種別分布図 ……41
第39図　第10ブロック石材別分布図 ……41
第40図　第10ブロック出土遺物（１）……42
第41図　第10ブロック出土遺物（２）……43
第42図　第11ブロック器種別分布図 ……50
第43図　第11ブロック石材別分布図 ……50
第44図　第11ブロック出土遺物（１）……51
第45図　第11ブロック出土遺物（２）……52
第46図　第11ブロック出土遺物（３）……53
第47図　第11ブロック出土遺物（４）……54
第48図　第12ブロック器種別分布図 ……55
第49図　第12ブロック出土遺物 ……55
第50図　ブロック外出土遺物 ……56
第51図　SK038……57
第52図　SK084……58
第53図　SK084出土遺物（１）……59
第54図　SK084出土遺物（２）……61
第55図　SK084出土遺物（３）……62
第56図　SK115……63
第57図　SK006・018・033・034 ……64
第58図　SK074・075B出土遺物 ……64
第59図　SK040・043・068・074・075B ……66
第60図　SI095・105・111及びその出土遺物 ……68
第61図　SI112及びその出土遺物（１）……70
第62図　SI112出土遺物（２）……71
第63図　縄文時代石器（１）……73
第64図　縄文時代石器（２）……74
第65図　縄文時代石器（３）……75
第66図　縄文時代及び時期不明の石器（１）……76
第67図　縄文時代及び時期不明の石器（２）……77
第68図　遺構外出土土器（１）……78
第69図　遺構外出土土器（２）……79
第70図　遺構外出土土器（３）……80
第71図　遺構外出土土器（４）……81
第72図　遺構外出土土器（５）……82
第73図　SI046・072 ……92
第74図　SI073・075A……94
第75図　SI076 ……95
第76図　SI076遺物出土状況 ……96
第77図　SI079 ……98
第78図　SI080・081 ……99
第79図　SI082 ……101
第80図　SI098・100・107 ……102
第81図　SI109 ……103
第82図　SI046・072出土遺物 ……104

第83図　SI072・073・075A出土遺物 ……106
第84図　SI076出土遺物（1） ……109
第85図　SI076出土遺物（2） ……111
第86図　SI079・080出土遺物 ……114
第87図　SI080・081・082出土遺物 ……116
第88図　SI082・098出土遺物 ……118
第89図　SI107・109・遺構外出土遺物 ……121
第90図　SI054 ……130
第91図　SI056・133 ……131
第92図　SI054出土遺物 ……133
第93図　SI056・133・遺構外出土遺物 ……134
第94図　SI002 ……137
第95図　SI003 ……138
第96図　SI008 ……139
第97図　SI009 ……140
第98図　SI009遺物出土状況・SI010……141
第99図　SI014・015 ……143
第100図　SI015カマド・SI022……144
第101図　SI023・024 ……146
第102図　SI025 ……148
第103図　SI030 ……149
第104図　SI031・032 ……151
第105図　SI035・036 ……152
第106図　SI037 ……155
第107図　SI039 ……156
第108図　SI041 ……158
第109図　SI042・044 ……159
第110図　SI045 ……161
第111図　SI047・049 ……162
第112図　SI049カマド・SI050……163
第113図　SI051 ……165
第114図　SI052・053 ……166
第115図　SI053カマド・SI055……168
第116図　SI057・058 ……169
第117図　SI058・059 ……171
第118図　SI059・061 ……173
第119図　SI069・077 ……174
第120図　SI077・078 ……176
第121図　SI078カマド・SI083A ……178
第122図　SI087 ……179
第123図　SI088・092 ……180
第124図　SI093A・102A・102B……182
第125図　SI103A・103B・103C・104 ……183
第126図　SI108 ……185
第127図　SI110 ……186
第128図　SI113 ……187
第129図　SI114・124A・124B ……189
第130図　SB007・016 ……191
第131図　SB062・063 ……192
第132図　SB064A・064B・065・067……194
第133図　SB066・070A・070B ……196
第134図　SB071・086 ……198
第135図　SB091・094 ……199
第136図　SB101・106 ……200
第137図　SH060・090，SK119・120・121 ……202
第138図　SK001……203
第139図　SI002出土遺物 ……204
第140図　SI003出土遺物 ……206
第141図　SI003・008出土遺物 ……208
第142図　SI008・009出土遺物 ……210
第143図　SI009出土遺物 ……211
第144図　SI009・010・014出土遺物 ……212
第145図　SI014・015出土遺物 ……214
第146図　SI015・022・023・024出土遺物 ……216
第147図　SI024・025・030・031出土遺物 ……218
第148図　SI031・032・035出土遺物 ……220
第149図　SI035・036・037出土遺物 ……222
第150図　SI037出土遺物 ……224
第151図　SI037出土遺物 ……225
第152図　SI039・041出土遺物 ……227
第153図　SI041・042・044出土遺物 ……229
第154図　SI044・045出土遺物 ……230
第155図　SI045・047出土遺物 ……232
第156図　SI047・049・050・051出土遺物 ……234

第157図　SI051・052出土遺物 ……236
第158図　SI053・055・057出土遺物 ……238
第159図　SI057・058出土遺物 ……240
第160図　SI058・059出土遺物 ……242
第161図　SI059出土遺物 ……243
第162図　SI061・069・077出土遺物 ……246
第163図　SI077・078出土遺物 ……248
第164図　SI078・083A・087・088出土遺物 ……250
第165図　SI088・092・093A・102A出土遺物 …252
第166図　SI102B·103·104·108·110出土遺物 …255
第167図　SI110・113出土遺物 ……257
第168図　SI114・124B，SB062・064A・
064B・066・070A，SH060，
遺構外出土遺物 ……260
第169図　竪穴住居出土遺物補遺 ……260
第170図　土坑（1）……283
第171図　土坑（2）……286
第172図　土坑（3）……288
第173図　土坑（4）……289
第174図　中・近世遺物 ……290
第175図　集落の変遷 ……300
第176図　文字・記号資料集成（1）……304
第177図　文字・記号資料集成（2）……305
第178図　奈良・平安時代土器の打ち欠き状況　308
第179図　SI024内貝層サンプル ……322
第180図　SI024内貝層サンプル貝種組成及び計測
結果 ……322
第181図　シオフキ及びハマグリの左殻における
殻高と殻長の相関 ……323
第182図　SI024出土の貝類 ……325

表　目　次

第1表　船尾白幡遺跡発掘調査概要 …… 1
第2表　船尾白幡遺跡整理作業概要 …… 2
第3表　船尾白幡遺跡遺構種別一覧 …… 7
第4表　第1ブロック石器観察表 ……11
第5表　第1ブロック石器組成表 ……11
第6表　第2ブロック石器観察表 ……14
第7表　第2ブロック石器組成表 ……14
第8表　第3ブロック石器観察表 ……20
第9表　第3ブロック石器組成表 ……21
第10表　第4ブロック石器観察表 ……21
第11表　第4ブロック石器組成表 ……30
第12表　第5ブロック石器観察表 ……30
第13表　第5ブロック石器組成表 ……32
第14表　第6ブロック石器観察表 ……33
第15表　第6ブロック石器組成表 ……34
第16表　第7ブロック石器観察表 ……35
第17表　第7ブロック石器組成表 ……35
第18表　第8ブロック石器観察表 ……36
第19表　第8ブロック石器組成表 ……37
第20表　第9ブロック石器観察表 ……37
第21表　第9ブロック石器組成表 ……38
第22表　第10ブロック石器観察表 ……43
第23表　第10ブロック石器組成表 ……45
第24表　第11ブロック石器観察表 ……46
第25表　第11ブロック石器組成表 ……49
第26表　第12ブロック石器観察表 ……55
第27表　第12ブロック石器組成表 ……56
第28表　ブロック外石器観察表 ……56
第29表　縄文時代及び時期不明石器観察表 ……74
第30表　遺構外出土縄文土器観察表 ……83
第31表　弥生時代竪穴住居観察表 ……123
第32表　弥生時代出土遺物観察表 ……124
第33表　古墳時代竪穴住居観察表 ……134
第34表　古墳時代出土遺物観察表 ……135
第35表　奈良・平安時代竪穴住居観察表 ……261
第36表　掘立柱建物観察表 ……263
第37表　奈良・平安時代出土遺物観察表 ……264
第38表　竪穴住居の時期区分 ……297

第39表　文字・記号主要資料一覧 ……303
第40表　奈良・平安時代打ち欠き・穿孔・
　　被破壊土器一覧 ……309
第41表　SI024内貝層サンプル集計 ……322

図版目次

巻頭図版　SI113遺物出土状況
　　SI076出土遺物
図版1　遺跡周辺航空写真
図版2　1　調査区北部航空写真（北から）
　　2　調査区北部航空写真（東から）
図版3　1　調査区中央部近景（南から）
　　2　調査区南部航空写真（南東から）
　　3　調査区南部航空写真（北西から）
図版4　1　第1ブロック
　　2　第3ブロック
　　3　第4ブロック
図版5　1　第5ブロック
　　2　第6～第10ブロック
　　3　第11・第12ブロック
図版6　1　SK038
　　2　SK115
　　3　SK084
　　4・5　SK084遺物出土状況
図版7　1　SK006
　　2　SK018
　　3　SK033
　　4　SK034
　　5　SK040
　　6　SK043
　　7　SK068
　　8　SK074
図版8　1　SI095
　　2　SI105
　　3　SI111
　　4　SI112
図版9　1　SI046
　　2・3　SI046遺物出土状況
　　4　SI072
図版10　1　SI073
　　2　SI073遺物出土状況
　　3　SI075
　　4　SI076
図版11　1・2・3　SI076遺物出土状況
　　4　SI076焼土堆積状況
　　5　SI076遺物出土状況
　　6　SI076土層断面
図版12　1　SI079
　　2・3　SI079遺物出土状況
　　4　SI080
　　5　SI080遺物出土状況
図版13　1　SI081
　　2　SI082遺物出土状況
　　3　SI082
　　4　SI098遺物出土状況
　　5　SI098
図版14　1　SI100
　　2　SI107
　　3　SI109
図版15　1　SI054カマド
　　2　SI054
　　3・4　SI054出土遺物
　　5・6　SI054遺物出土状況
図版16　1　SI056
　　2・3　SI056遺物出土状況
　　4　SI133
図版17　1　SI002カマド
　　2　SI002

3 SI003カマド
4 SI003
5 SI008カマド
6 SI008
図版18 1 SI009
2 SI010
3 SI014
図版19 1 SI015
2 SI022カマド
3 SI022
4 SI023
図版20 1 SI023カマド
2 SI023カマド遺物出土状況
3 SI024
4 SI024遺物出土状況
5 SI024貝出土状況
6 SI024貝・土器出土状況
図版21 1 SI025カマド
2 SI025
3 SI025カマド・遺物出土状況
4 SI025カマド断面
5 SI030カマド
6 SI030
図版22 1 SI030ベッド状遺構
2 SI030壁柱穴
3 SI031
4 SI032
図版23 1 SI035カマド
2 SI035
3 SI035カマド・遺物出土状況
4 SI035遺物出土状況
5 SI036遺物出土状況
6 SI036
図版24 1 SI037
2 SI037カマド
3 SI037遺物出土状況
4 SI039建て替え後
5 SI039カマド
図版25 1 SI039カマド遺物出土状況
2 SI039建て替え前
3 SI041カマド
4 SI041
5 SI042
図版26 1 SI044
2 SI045
3 SI045遺物出土状況
4 SI047
図版27 1 SI049
2 SI050
3 SI051カマド
4 SI051
図版28 1 SI051カマド遺物出土状況
2 SI051カマド
3 SI052
4 SI052遺物出土状況
5 SI053
6 SI053カマド
図版29 1 SI055
2 SI057カマド
3 SI057
4 SI057カマド遺物出土状況
5 SI057遺物出土状況
図版30 1 SI058建て替え後
2 SI058建て替え前
3 SI058遺物出土状況
4 SI058炭化材・遺物出土状況
5 SI058炭化材主要部分
図版31 1 SI059カマド
2 SI059
3 SI061カマド
4 SI061
5 SI069遺物出土状況
6 SI069
図版32 1 SI077

2 SI077カマド
3 SI078
4 SI078カマド
5 SI078炭化材出土状況
6 SI078炭化材（部分）
図版33 1 SI083Aカマド
2 SI083A・083B
3 SI087
4 SI088カマド遺物出土状況
5 SI088
図版34 1 SI092
2 SI093A
3 SI093A遺物出土状況
4 SI102A・102B
図版35 1 SI103A・103B・103C
2 SI104カマド遺物出土状況
3 SI104
4 SI108遺物出土状況
5 SI108
図版36 1 SI110
2 SI113
3 SI113カマド
4・5 SI113遺物出土状況
図版37 1 SI124A・124B
2 SI114
3 SB007土層断面
4 SB007
5 SB016
図版38 1 SB062
2 SB062土層断面
3 SB063
4 SB064A・064B
図版39 1 SB070A・070B・071
2 SB086
3 SB091
図版40 1 SB065・067
2 SB065柱痕
3 SB066
4 SB094
図版41 1 SB101
2 SB106
3・4 SH060
図版42 1 SH090 P1
2 SH090 P2
3 SH090 P3
4 SH090 P4
5 SK119
6 SK120
7 SK121
8 SK001
図版43 1 SD048
2 SK093B
3 SK097
4 SK004
5 SK005
6 SK099
7 SK116
8 SK117・118
図版44 1 SK122
2 SK126
3 SK125
4 SK123
5 SK128
6 SK129
7 SK130
8 SK131
図版45 第1ブロック出土遺物
第2ブロック出土遺物
図版46 第3ブロック出土遺物
図版47 第4ブロック出土遺物（1）
図版48 第4ブロック出土遺物（2）
図版49 第4ブロック出土遺物（3）
第5ブロック出土遺物
第6ブロック出土遺物

図版50　第７ブロック出土遺物
第８ブロック出土遺物
第９ブロック出土遺物
図版51　第10ブロック出土遺物
図版52　第11ブロック出土遺物（１）
図版53　第11ブロック出土遺物（２）
図版54　第11ブロック出土遺物（３）
第12ブロック出土遺物
図版55　旧石器時代ブロック外出土石器・
縄文時代石器・時期不明の石器
図版56　縄文時代石器・時期不明の石器
図版57　SK084・SI112出土土器
図版58　SK084・074・075B出土土器
図版59　SK075B・SI095・105・111出土土器
図版60　SI112出土土器，SK084・SI105出土石器
図版61　遺構外出土縄文土器（１）
図版62　遺構外出土縄文土器（２）
図版63　遺構外出土縄文土器（３）
図版64　遺構外出土縄文土器（４）
図版65　遺構外出土縄文土器（５）
図版66　遺構外出土縄文土器（６）
図版67　SI076出土土器
図版68　SI072・079・080・081出土土器
図版69　SI082・098出土土器，
SI072・073・076・080・098出土石器
図版70　SI046・072出土土器
図版71　SI072・073・075A出土土器
図版72　SI075A・076・079出土土器
図版73　SI080・081・082出土土器
図版74　SI082・098出土土器
図版75　SI107・109出土土器，
遺構外出土弥生土器（１）
図版76　遺構外出土弥生土器（２），
SI046・109出土土器，SI079出土土製品，
SI082出土石製玉
図版77　SI054・056出土土器，
遺構外出土古墳時代土器
図版78　SI002・003出土土器
図版79　SI003・008・009出土土器
図版80　SI009・010・014・015・022・023・024
出土土器，SI023出土石製品
図版81　SI024・025・030・031・032・035出土土器
図版82　SI035・036・037出土土器
図版83　SI037・039・041出土土器
図版84　SI041・042・044・045・047出土土器
図版85　SI049・051・052・053・055・057・058
出土土器
図版86　SI058・059・069出土土器，SI058
出土石製品
図版87　SI069・077・078出土土器
図版88　SI078・083A・087・088・092・093A
出土土器
図版89　SI102A・102B・104・108出土土器
図版90　SI108・110・113出土土器
図版91　SI113・114・124B・SH060出土土器，
種子・石製品，紡錘車
図版92　砥石，軽石・鉄床石
図版93　土製品，土製支脚
図版94　鉄製品（１）
図版95　鉄製品（２）
図版96　鉄製品（３）・銅製品・鉄滓
図版97　文字・記号資料（１）
図版98　文字・記号資料（２）
図版99　文字・記号資料（３）
図版100 文字・記号資料（４）
図版101 文字・記号資料（５）
図版102 文字・記号資料（６），
中・近世陶器，銭貨
図版103 奈良・平安時代土器打ち欠き・穿孔状況

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1．調査の経緯と経過

財団法人千葉県文化財センターは，千葉北部地区新住宅市街地開発事業関連の埋蔵文化財調査として住宅・都市整備公団（現　都市基盤整備公団）の業務委託を受け，船尾白幡遺跡の発掘調査を実施した。発掘調査の年度は平成6・7年度，平成8年度，平成10年度の延べ4年度である。（第2図）。

全体の調査対象面積は上層が24,800㎡，下層が22,850㎡である。確認調査面積は上層が8,804㎡，下層が1,080㎡，上層の本調査面積は18,415㎡，下層の本調査面積は688㎡である。

発掘調査開始から報告書刊行に至るまでの発掘調査・整理概要及び各年度の調査担当者等は第1表・第2表に記したとおりである。

なお，今回の調査を遡る昭和49年に，塚1基を含む6,500㎡の発掘調査が実施されており，その分については既刊の報告書に所収されている[1)]。また，今回の調査範囲と地続きの地点が船尾白幡遺跡Ⅱとして，平成7年度・9年度に発掘調査が実施されている。

第1表　船尾白幡遺跡発掘調査概要

調査年度	発掘調査面積		期間	所長	担当職員
平成6年(1994)	確認調査	上層 1,500/16,000㎡	11/1～3/24	谷　旬	土屋潤一郎
	本調査	上層 11,600㎡			鶴岡　則幸
					糸原　清
平成7年(1995)	確認調査	下層 776/15,000㎡	4/5～6/30	谷　旬	花島　理典
	本調査	上層 1,600㎡			糸原　清
		下層 488㎡			
平成8年(1996)	確認調査	上層 7,000/7,000㎡	6/17～11/29	谷　旬	宮　重行
		下層 268/7,000㎡			沖松　信隆
	本調査	上層 4,850㎡			
		下層 200㎡			
平成10年(1998)	確認調査	上層 304/1,800㎡	7/6～8/12	折原　繁	鈴木　弘幸
		下層 36/850㎡			
	本調査	上層 365㎡			
		下層 0㎡			

注1　古内　茂他　1976　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』　（財）千葉県文化財センター
なお，6,500㎡分は船尾白幡遺跡，塚1基は船尾中峠遺跡として報告されている。

第２表　船尾白幡遺跡整理作業概要

調査年度	整理作業内容	期　　間	所　　長	担当職員
平成11年(1999)	水洗・注記		折原　繁	
平成12年(2000)	水洗・注記，記録整理 分類・選別，復元， 実測の一部まで	4／1～3／31	石田　廣美	金丸　誠 榊原　弘二 川端　保夫 立石　圭一 落合　章雄 沖松　信隆
平成13年(2001)	実測の一部から挿図・ 図面作成，原稿執筆の 一部まで	4／1～3／31	石田　廣美	池田　大助 金丸　誠 糸川　道行 落合　章雄 小笠原永隆
平成15年(2003)	原稿執筆の一部から編集 報告書刊行	4／1～12/31	古内　茂	糸川　道行

２．調査の方法

発掘調査を始めるに当たり，公共座標に合わせて，調査対象区域に40m×40mの大グリッドを設定した。さらにその大グリッド内を4m×4mに分割し，100個の小グリッドとした。大グリッドは西から東へA，B，C，……，北から南へ１，２，３，……，と記号をつけ，小グリッドについては北西隅を起点に00，01，……98，99と番号を付け，これらを組み合わせて6C35のように呼称することにした。

調査は，上層確認調査→上層本調査→下層確認調査→下層本調査の順で実施した。上層確認調査については調査対象区域全体に公共座標を合わせて，主に10m×２mのトレンチを設定した（第３図）。なお，本書記載の公共座標は，日本測地系によるものである。遺構が見つかったトレンチは適宜拡張を行い，原則として調査対象面積の10%を調査し，遺構と遺物の分布状況を確認した。下層確認調査については調査対象区域全体に公共座標を合わせて，２m×２mのグリッドを設定し（第４図），石器検出グリッドを随時拡張して調査対象面積の4%を調査し，遺物の分布状況を確認した。

第２節　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置と地理的環境

船尾白幡遺跡は，北総線「千葉ニュータウン中央駅」から1.5kmほど南に位置する。中央駅の東側には県道船橋印西線があるが，この道路が遺跡の一部を南北に貫いて通っている。地形的には，印旛沼西端から北に延びる支谷に面した舌状の台地上に立地する。台地は25m～26m前後の標高である。台地の西方は南北に細長い谷部であり，小河川である戸神川が流れている。戸神川は，印旛沼西端部に西やや北方から注ぐ神崎川の支流であり，沼端部近くで神崎川と合流している。現在，印旛沼は治水事業により流域面積が減少しているが，沼西端部は明治年間に至っても，船尾白幡遺跡の所在する台地から台地一つを挟んで南側まで達していた。当時の沼尻から遺跡までの直線距離はおよそ1.2kmである。

第１図　遺跡の位置と周辺地形図（１／50,000）

第２図　遺跡地形図（１：5,000）

2．遺跡の歴史的環境

鳴神山遺跡や向新田遺跡等，本遺跡に近い位置にある遺跡の報告書が近年相次いで刊行されている[1)]。したがって，詳細はそれら既刊の報告書に譲り，本項では本報告において主体を占める弥生時代後期，奈良・平安時代を中心に近在の遺跡を概観する。

本遺跡の所在する印旛沼西部北岸地域では，弥生時代後期～古墳時代前期の比較的大規模な遺跡が見られる。船尾町田遺跡（第１図５）・向ノ地遺跡（６），向新田遺跡（９），松崎Ⅰ遺跡，松崎Ⅱ遺跡（８）等があげられるが，船尾町田遺跡は本遺跡からは谷部を介在した南方の台地上に位置する。また，向ノ地遺跡は船尾町田遺跡に隣接する遺跡であるが，環壕が検出されたことで注目される。本遺跡から谷部をはさんで西方の台地に所在する戸神遺跡（７）は，小規模な調査が行われ，３棟の竪穴住居が見つかっている[2)]。出土遺物から１棟は古墳時代前期，１棟は古墳時代後期と考えられる。台地の面積から古墳時代前期のまとまった集落となる可能性がある。近年では，佐山台遺跡（25），道地遺跡（26），間見穴遺跡（26），栗谷遺跡（30）・上谷遺跡（31）等の調査により印旛沼西部南岸地域周辺でも様相が明らかになってきた。

奈良・平安時代では，本遺跡西方の谷部に西根遺跡（２）が所在する。水路跡からは長文墨書土器等，多数の土師器坏や木製の人形・馬形等の祭祀遺物が見つかっている。谷部の西根遺跡をはさんで対岸西方の台地上には鳴神山遺跡（３）・白井谷奥遺跡（４）がある。以上の遺跡群は印旛郡船穂郷の中核となる遺跡と思われる。船尾白幡遺跡の北方の台地上には南西ヶ作遺跡（11）が所在する。鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡と同じ谷筋の集落遺跡である。南西ヶ作遺跡の西方には大塚前遺跡（12）がある。奈良・平安時代の寺跡であり，遺構の状況とともに下総国分寺の同笵瓦が出土したことで注目される遺跡である。船尾白幡遺跡の東方には松崎遺跡群（８）があり，Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ遺跡で遺構・遺物が検出されている。西方では北の台遺跡（10）があり，土製の人形・馬形が出土している。また，印旛沼西部南岸地域は上谷遺跡(31)，向境遺跡（29）等の調査により，奈良・平安時代においても様相が明らかになりつつある。

注１　鳴田浩司・田形孝一　1999　『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡―』（財）千葉県文化財センター

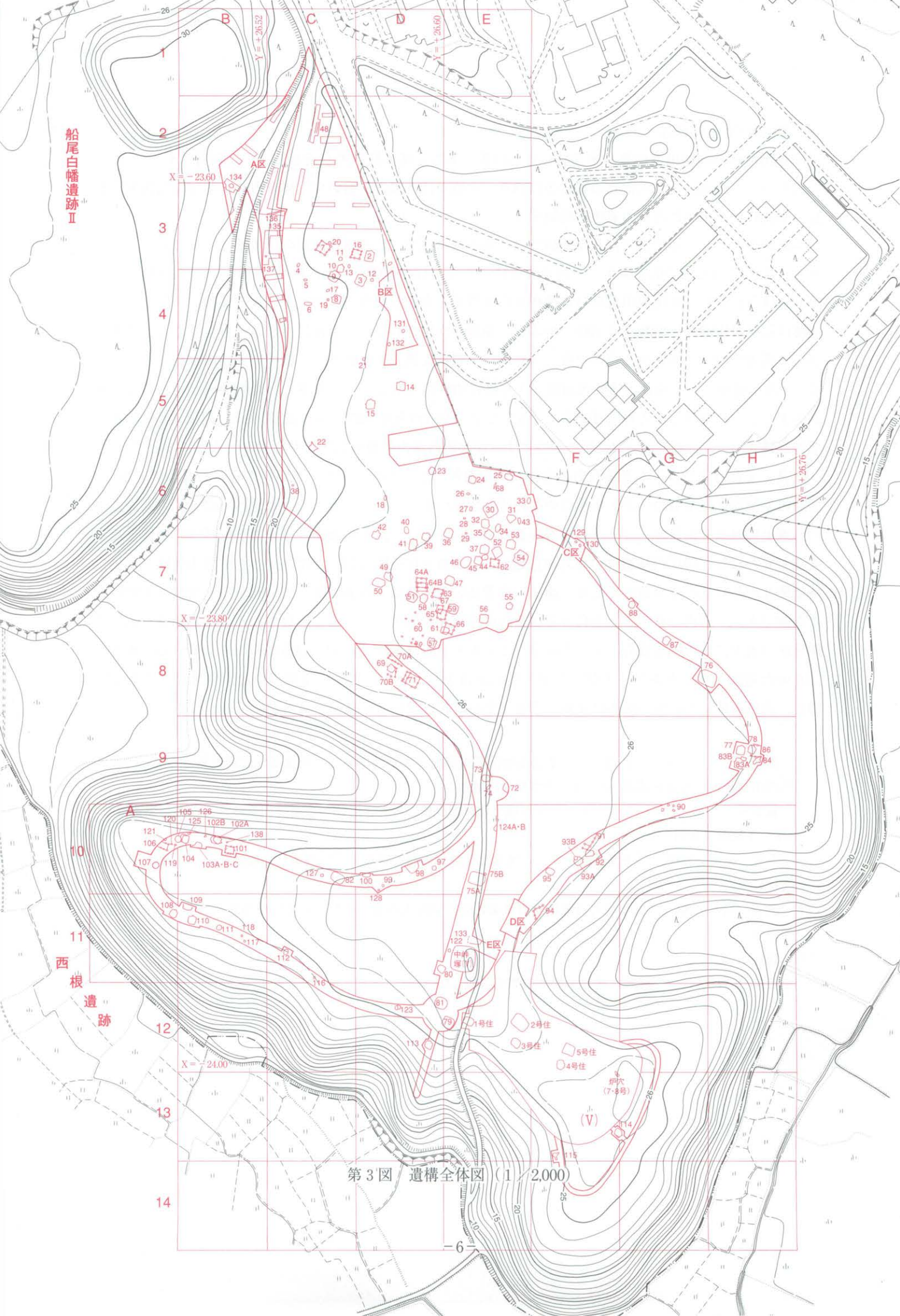
萩原恭一　2000　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ―印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡―』（財）千葉県文化財センター

金丸　誠他　2002　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅤ―印西市向新田遺跡―』（財）千葉県文化財センター

２　渋谷　貢　1980　『東京電力送電塔建設事業に伴う発掘調査報告書』　八千代市遺跡調査会　船橋市遺跡調査会

〈参考文献〉

田形孝一　1997　「下総国印旛郡船穂郷の歴史景観」『千葉史学』第31号　千葉歴史学会

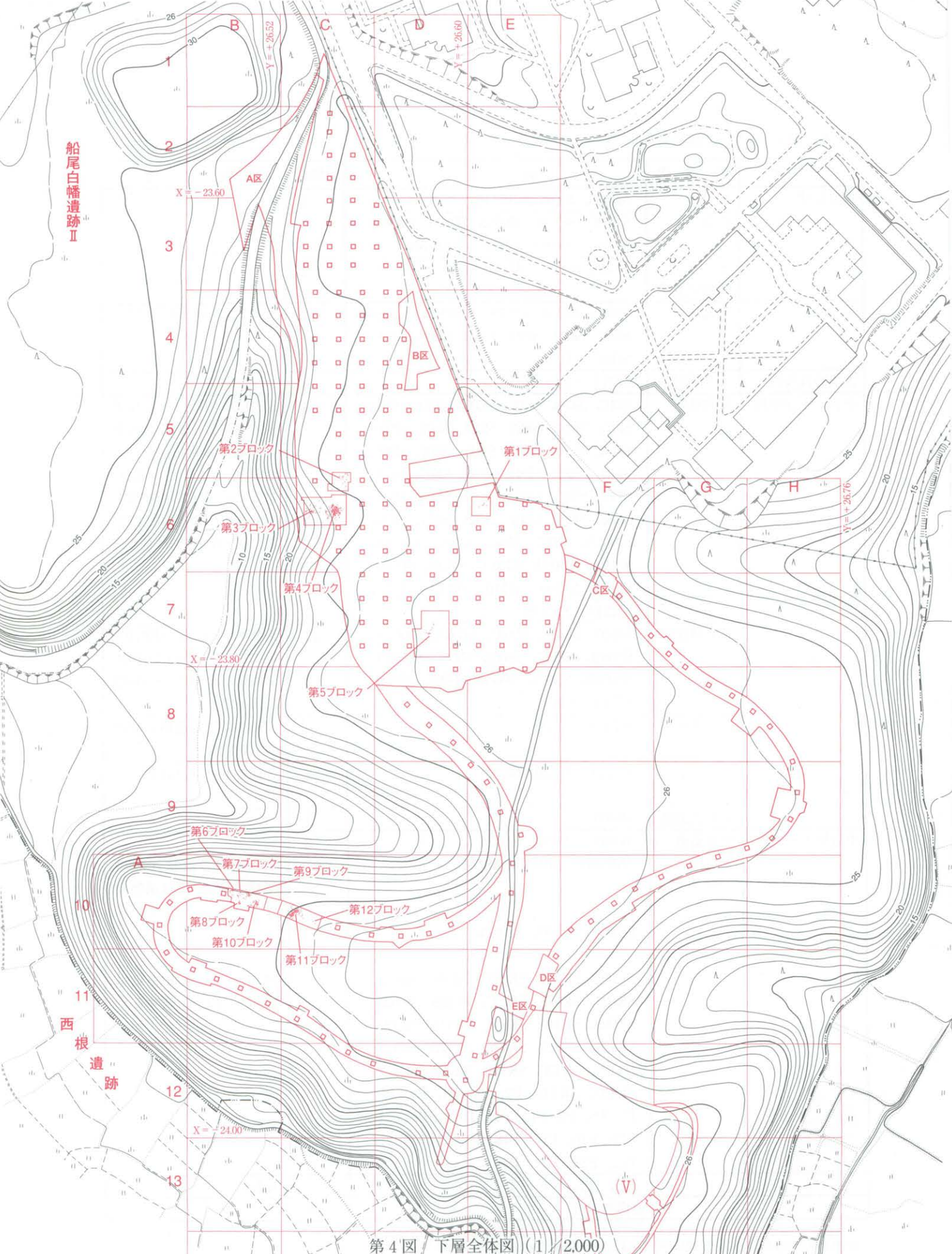


第3図　遺構全体図（1／2,000）

第3表　船尾白幡遺跡遺構種別一覧

時　代	遺構名	遺構番号	遺構数	備　考
縄文時代	炉穴	SK038, SK084, SK115	3	
	陥穴	SK006, SK018, SK033, SK034, SK040, SK043, SK068, SK074, SK075B	9	
	竪穴住居・竪穴状遺構	SI095, SI105, SI111, SI112	4	
弥生時代	竪穴住居	SI046, SI072, SI073, SI075A, SI076, SI079, SI080, SI081, SI082, SI098, SI100, SI107, SI109	13	SI075Aの遺物注記は075
古墳時代後期	竪穴住居	SI054, SI056, SI133	3	
奈良・平安時代	竪穴住居	SI002, SI003, SI008, SI009, SI010, SI014, SI015, SI022, SI023, SI024, SI025, SI030, SI031, SI032, SI035, SI036, SI037, SI039, SI041, SI042, SI044, SI045, SI047, SI049, SI050, SI051, SI052, SI053, SI055, SI057, SI058, SI059, SI061, SI069, SI077, SI078, SI083A, SI087, SI088, SI092, SI093A, SI102A, SI102B, SI103A, SI103B, SI103C, SI104, SI108, SI110, SI113, SI114, SI124A, SI124B	53	SI103A・B・Cは3棟重複の可能性があるが様相不明瞭。遺物の注記は，103で，A・B・Cの区別はなし。SI102Bは102B SI124A・Bの注記は124で，A・Bの区別はなし。
	掘立柱建物	SB007, SB016, SB062, SB063, SB064A, SB064B, SB065, SB066, SB067, SB070A, SB070B, SB071, SB086, SB091, SB094, SB101, SB106	17	遺物の注記は，SB070Aは070，SB070Bは070B，SB064Aは064A，SB064Bは064B
	ピット群	SH060, SH090	2	SH060は複数遺構に分離する可能性大
	土坑	SK119, SK120, SK121	3	3基とも掘立柱建物の一部か
	井戸状遺構	SK001	1	
中近世・その他	溝状遺構	SD048, SD135, SD136	3	
	土坑	SK083B, SK093B, SK097 SK004, SK012, SK013, SK005, SK011, SK017, SK019, SK020, SK021, SK026, SK027, SK028, SK029, SK099, SK116, SK117, SK118, SK122, SK123, SK125, SK126, SK127, SK128, SK129, SK130, SK131, SK132, SK134, SK137, SK138, P2, P3, P4, P5, P6, P7, P8, P9, P10, P11, P12, P13, P14, P15, P16, P17, P18, P19, P20, P21, P22, P23, P24, P25	57	SK083Bの遺物注記は083B，SK093Bは遺物なし SK075Bの遺物注記は075B　SK138は遺物なし
		085, 089, 096, P1		欠番
遺構数　計			168	

※　遺構番号で数字の前の英文字はすべて整理段階で付与したもので，遺物の注記では記入していない。　整理段階で新たに付けた遺構番号は，数字+A，064B，103B，103C，124B，138である。その他については，調査時の遺構番号をそのまま使用した。



第4図　下層全体図（1／2,000）

第２章　旧石器時代

第１節　概要

今回の船尾白幡遺跡の調査では，第１ブロック～第12ブロックの12地点に石器集中と第４ブロック・第５ブロック・第７ブロック・第８ブロック・第10ブロックの５地点に礫群が検出された。これらのブロックは調査区のほぼ全面に分布している。また，これらのブロックは，Ⅶ層からⅢ層にかけて出土し，石器形態，石器組成，石器に使用される石材の違いから計２枚の文化層に細分することができた。また，確認調査時にグリッドの遺物として一括出土したものには第２黒色帯下部（Ⅸａ層）のものがあり，本来は３枚の文化層があるものと思われる。

なお，調査区の基本的な層序は次のとおりである。

Ⅰ層：表土層。

Ⅱ層：暗褐色土層。地点によってはａ～ｃの３枚に分層される。

Ⅲ層：ソフトローム層。クラックが発達し，地点によってはⅥ層にまで及ぶ。

Ⅳ層：黄褐色土層。船尾白幡遺跡では完全な一枚の層として確認できる。Ⅲ層に比べ，赤味を増し，やや暗い。

Ⅴ層：暗黄褐色土層。第１黒色帯に相当する。

Ⅵ層：明褐色土層。この層全体にＡＴパミスが拡散して混入している。赤色スコリアを多く含み，堅緻である。

Ⅶ層：暗褐色土層。第２黒色帯上部に相当する。第３ブロックは２枚に分層され，Ⅶ２層はⅦ１層に比べ，暗い。

Ⅸ層：第２黒色帯下部に相当する。地点によってはａ～ｃの３枚に分層される。

Ⅹ層：立川ロームの最下層である。

ここでは検出した12ブロックについて，時期の最も古いⅦ層に属するブロックを第１ブロックとし，このブロックを基準にそれぞれの文化層に属するブロックについて便宜的に番号付けを行った。

それぞれの文化層に属するブロック及び層序は次のとおりである。

第１文化層（Ⅶ層）

第１ブロック（６Ｅグリッド）

第２文化層（Ⅳ層下部～Ⅲ層）

第２ブロック（５Ｃ，６Ｃグリッド），第３ブロック（６Ｃグリッド），第４ブロック（６Ｃグリッド），第５ブロック（７Ｄグリッド），第６ブロック（10Ｂグリッド），第７ブロック（10Ｂグリッド），第８ブロック（10Ｂグリッド），第９ブロック（10Ｂグリッド），第10ブロック（10Ｂグリッド），第11ブロック（10Ｃグリッド），第12ブロック（10Ｃグリッド）

船尾白幡遺跡で検出した各ブロックを構成する石器の石材は多種多様であり，同一名称の石材でも色調や質感が異なるものが多い。ここではまとめて記述することが困難なため，各文化層の概要のところでそ

れぞれ記述したい。

また，石器の長・幅・厚の計測には（株）ミツトヨのデジパッ PC-15Jを，重量の計測には（株）タニタのポケッタブルスケール ハンディミニ1476を使用した。

第2節　第1文化層

第1文化層は船尾白幡遺跡で検出した石器集中地点のうち，最も古い段階に属するブロックであり，出土層位は第2黒色帯上部（Ⅶ層）に属する。第1ブロックのみがこの文化層に属する。

ブロックを構成する石器の中には定型的な石器は含まれず，安山岩製及び頁岩製の剥離痕ある剥片（いわゆる調整痕ある剥片や使用痕ある剥片の総称）が2点出土している他は剥片である。群馬県産と思われる頁岩が出土している。また，縦長の石刃状の剥片を主体とし，稜上調整の施された剥片もみられる。

使用される石材の種類及び特徴は以下のとおりである。

安山岩：器表面は原石面，剥離面ともに水和層が発達しているため黄土色を呈し，欠損面は黒色を呈する。風化面，欠損面ともにきめは細かいが，風化面はざらつき感があり，欠損面は光沢がある。

頁岩：器表面は原石面は水和層が発達しているため黄土色を呈し，剥離面は黒色を呈する。原石面，剥離面ともにきめは細かいが，原石面はざらつき感があり，剥離面は光沢がある。群馬県産と思われる。

第1ブロック（第5～8図，第4・5表，図版4・45）

調査区の東側，標高26.5～26mの台地の中央部に位置する。

石器は長径3.4m，短径1.4mに分布する。

出土した石器の中には定型的な石器は含まれず，頁岩製の剥離痕ある剥片が1点出土している他は剥片で総計7点である。

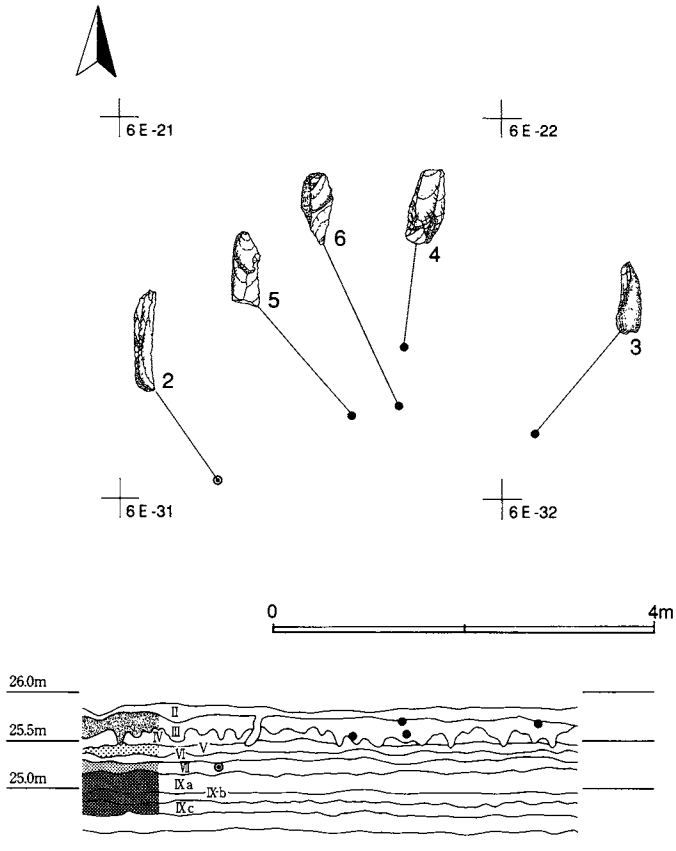
ブロックを構成する石器の石材は安山岩及び頁岩である。

出土遺物

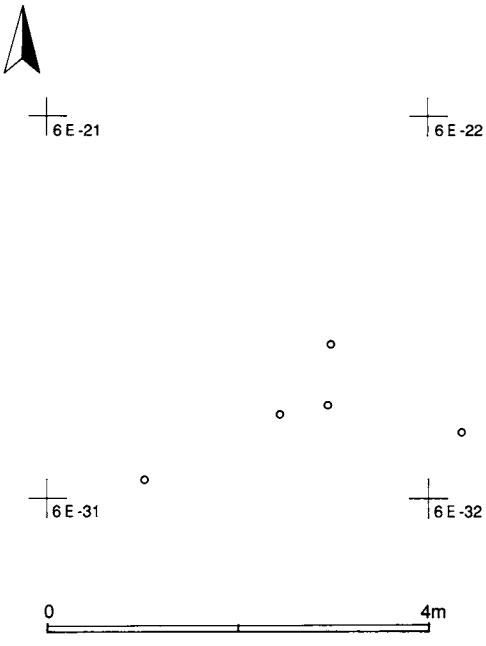
1は頁岩製の剥離痕ある剥片である。裏面左側縁中央に大きな剥離痕がみられる。この2回目の剥離の衝撃により2つに折損した可能性がある。また，中央下半部に稜上調整と思われる剥離痕が観察される。群馬県産の頁岩と思われる。2は安山岩製の剥片である。中央下半部に稜上調整と思われる細かい剥離痕が観察される。打面は欠損する。3は安山岩製の剥片である。ほとんど全面が自然面である。4は安山岩製の剥片である。一部に自然面を残し，下端部に左方向からの剥離痕がみられるが，それ以外は主要剥離面と同方向の剥離痕が観察される。打面は欠損する。5は安山岩製の剥片である。左側面に自然面がみられる。6は安山岩製の剥片である。左側面に自然面を残し，上下両方向の剥離痕がみられる。左下端部を欠損する。

第3節　第2文化層

第2文化層に属するブロックは第2ブロック～第12ブロックの計11ブロックであり，そのうち第4ブロック・第5ブロック・第7ブロック・第8ブロック・第10ブロックの5地点に礫群が検出された。出土層位はⅣ層下部～Ⅲ層である。



第5図　第1ブロック器種別分布図



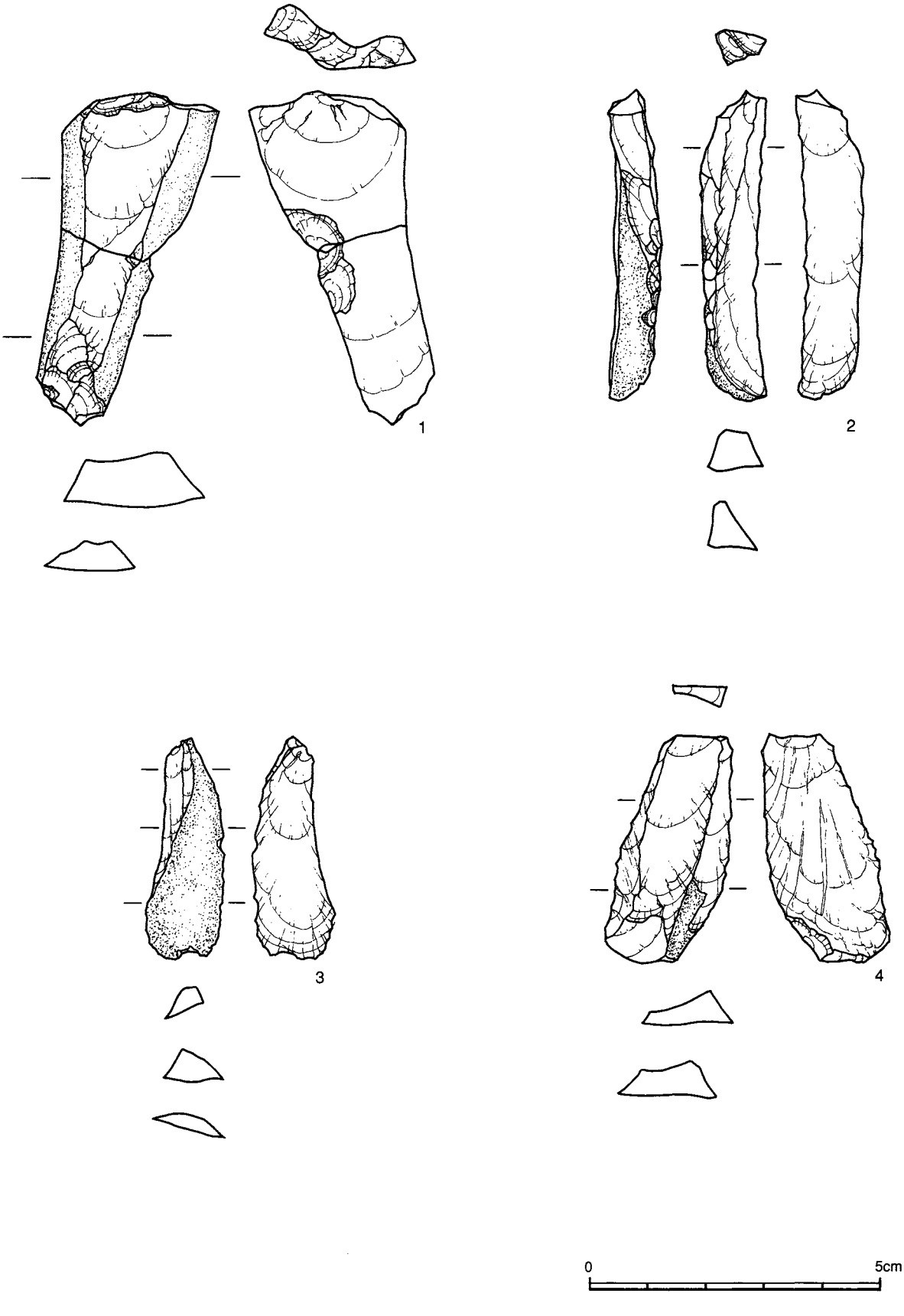
第6図　第1ブロック石材別分布図

第4表　第1ブロック石器観察表

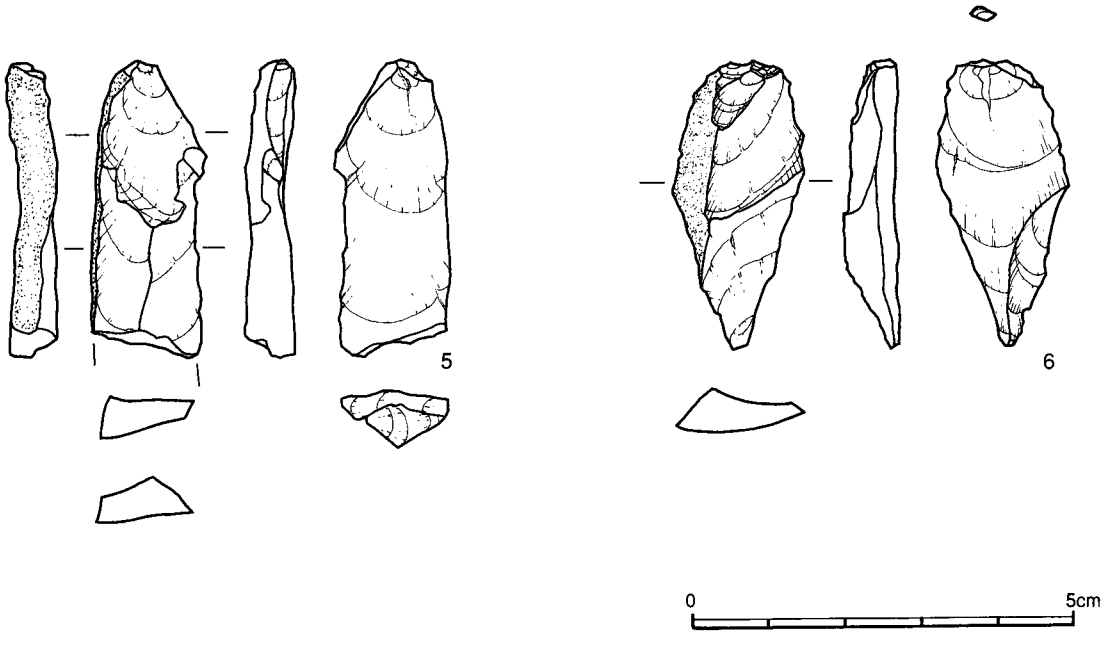
挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第7図　1	6E-21,1a･1c	剥離痕ある剥片	頁岩	5.64	3.65	0.92	13.59	群馬県産　下層確認グリッド一括
第7図　2	6E-21,2	剥片	安山岩	5.27	1.10	0.83	5.50	
第7図　3	6E-22,1	剥片	安山岩	3.79	1.25	0.52	2.47	
第7図　4	6E-21,5	剥片	安山岩	4.03	1.83	0.62	5.26	
第8図　5	6E-21,4	剥片	安山岩	3.92	1.43	0.56	4.26	
第8図　6	6E-21,3	剥片	安山岩	3.78	1.72	0.59	3.64	
	6E-21,1b	剥片	安山岩	4.23	2.97	0.57	8.45	

第5表　第1ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
安山岩	−	−	−	−	6	−	−	−	−	−	6
	−	−	−	−	85.7%	−	−	−	−	−	85.7%
頁岩	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1
	−	−	−	14.3%	−	−	−	−	−	−	14.3%
計	−	−	−	1	6	−	−	−	−	−	7
	−	−	−	14.3%	85.7%	−	−	−	−	−	100.0%



第7図　第1ブロック出土遺物（1）



第8図 第1ブロック出土遺物（2）

ブロックを構成する石器はナイフ形石器，角錐状石器，掻器，削器，剥離痕ある剥片，剥片，砕片，剥片利用石核，石核，敲石，礫でいわゆる武蔵野台地のⅣ層下部に相当する石器群である。

使用される石材の種類及び特徴について図示したものを中心に記述した。

黒曜石：色調は黒色で黒灰色の層と黒色の層がみられ夾雑物を含むもの，色調は黒灰色の半透明で夾雑物をほとんど含まないもの，色調は黒色の半透明で夾雑物を含むもの，色調は黒色で夾雑物を含むものがある。

安山岩：器表面は原石面，剥離面ともに水和層が発達しているため黄土色ないし灰黄色を呈し，欠損面は黒色を呈する。風化面，欠損面ともにきめは細かいが，風化面はざらつき感があり，欠損面は光沢があるもの。器表面は原石面，剥離面ともに水和層が発達しているため灰黒色を呈し，欠損面は黒色を呈する。風化面，欠損面ともにきめは細かく，欠損面は光沢があるものがある。

珪質頁岩：色調は褐灰色ないし灰褐色を呈し，きめが細かく光沢があるもの，色調は黒褐色を呈し，きめが細かく光沢があるもの，色調は黄褐色を呈し，きめが細かく光沢があるもの，色調は褐灰色を呈し，きめが細かく光沢があるもの，色調は黒褐色を呈し，きめが細かく光沢があるものがある。

頁岩：色調は緑灰色を呈する。きめが細かく若干光沢がある。

砂岩：色調はやや青みがかった緑灰色を呈し粒子が均一に細いもの，色調は緑灰色を呈し粒子が均一に細いものがある。

礫岩：色調は褐色を呈し粒子は粗い。礫の素材である。

チャート：色調は青灰色を呈し緻密で光沢があるもの，色調はやや暗めの緑灰色を呈し，緻密で光沢があるものがある。

メノウ：色調は灰白色または半透明で橙色の箇所が部分的にみられるもの，色調は橙色のものがある。

凝灰岩：色調は表面は緑色を帯びた青灰色，欠損面は暗い青灰色を呈する。水和層が発達し，表面には粉をふいたような感があり，傷が付きやすい。

石英斑岩：礫のみ出土した。色調は原石面は淡黄褐色，内面は白色を呈する。被熱面は赤褐色であるが，器表面は剥落する様子はみられず，滑らかで光沢もある。混入する石英粒の大きさは1mm～3mmほどである。

第2ブロック（第9～11図，第6・7表，図版45）

調査区の西側，標高25.5～26mの台地の縁辺部に位置する。

石器は長径9m，短径5mに分布する。

出土した石器の内，定型的な石器はナイフ形石器が1点で，残りは剥片，砕片，礫で総計16点である。

ブロックを構成する石器の石材は黒曜石，安山岩，砂岩である。

出土遺物

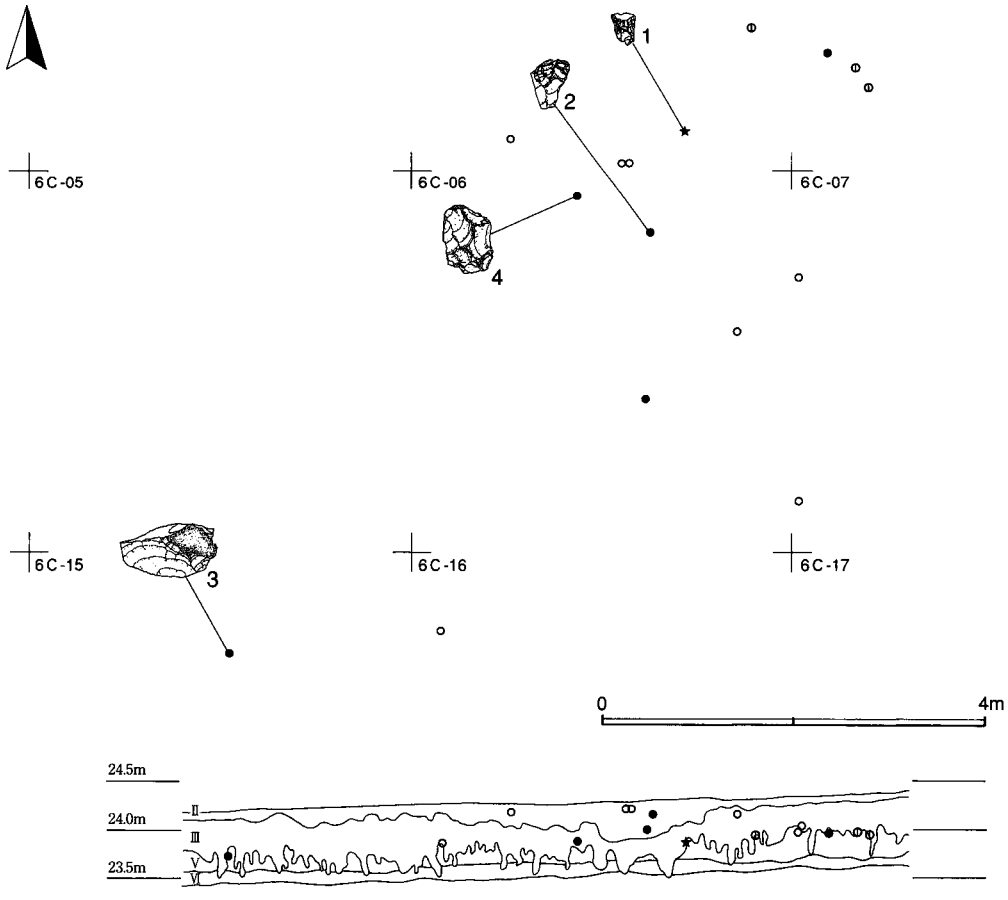
1は黒曜石製のナイフ形石器である。上半部のほとんどを欠損しているため別の器種の可能性もある。横長剥片を素材とする。2は安山岩製の剥片である。表面には求心的な剥離痕がみられる。3は安山岩製の剥片である。一部に自然面がみられる。4は安山岩製の剥片である。上部に細かい剥離痕が多数みられることから楔形石器の製作に伴う剥片の可能性がある。

第6表　第2ブロック石器観察表

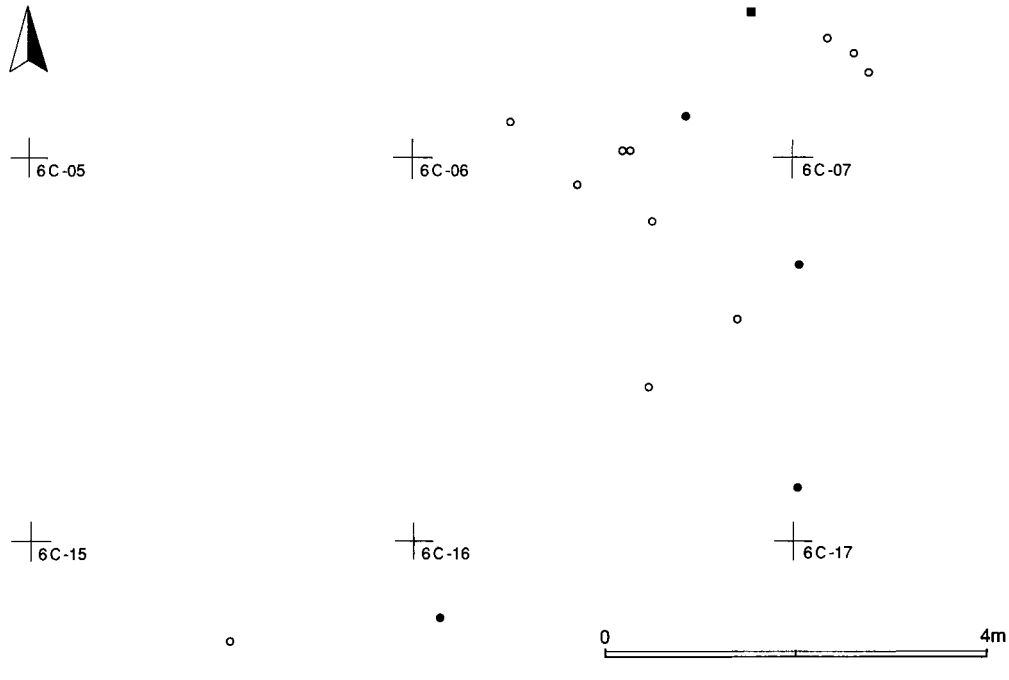
挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第11図 1	5C-96,2	ナイフ形石器	黒曜石	1.65	1.31	0.90	1.60	
第11図 2	6C-06,5	剥片	安山岩	3.58	2.59	0.62	6.16	
第11図 3	6C-15,1	剥片	安山岩	3.18	5.02	1.83	20.99	
第11図 4	6C-06,6	剥片	安山岩	2.56	2.03	0.31	1.67	
	5C-96,1a	砕片	安山岩	1.00	2.03	0.36	0.95	
	5C-96,1b	砕片	安山岩	2.19	1.36	0.28	0.84	
	5C-96,3	礫	安山岩	4.16	3.26	1.70	21.14	
	5C-96,4	砕片	安山岩	2.81	1.72	0.33	1.51	
	5C-97,1	礫	安山岩	1.02	0.78	0.68	0.39	
	5C-97,2	礫	安山岩	6.26	3.96	1.94	40.97	
	5C-97,3	剥片	砂岩	2.76	2.89	0.70	6.18	
	6C-06,3	剥片	安山岩	3.49	1.97	0.63	4.55	
	6C-06,4	砕片	安山岩	1.41	1.63	0.19	0.46	
	6C-07,1	砕片	黒曜石	0.80	0.81	0.27	0.16	
	6C-07,2	砕片	黒曜石	1.22	0.83	0.22	0.27	
	6C-16,1	砕片	黒曜石	1.64	1.63	0.59	1.34	

第7表　第2ブロック石器組成表

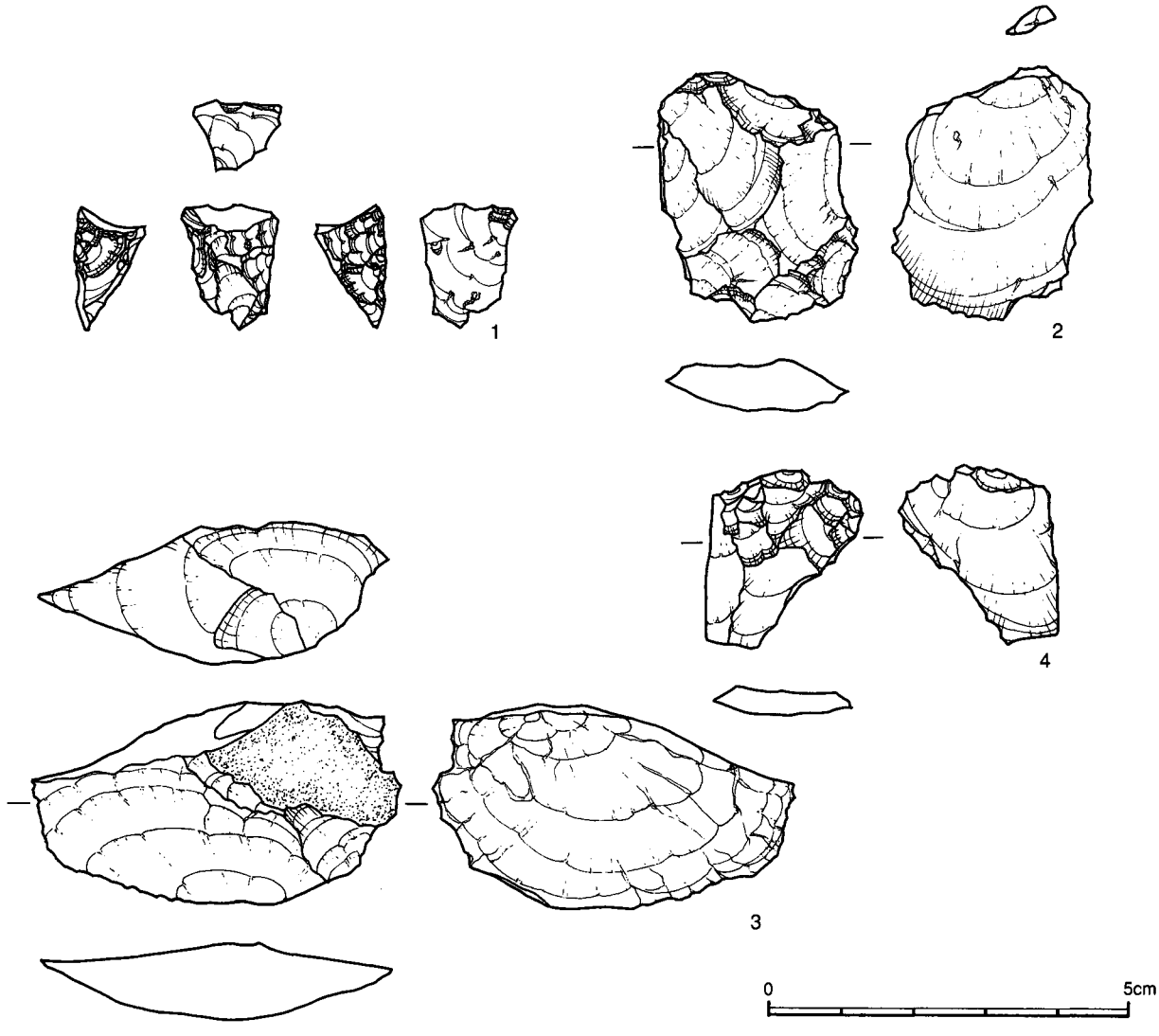
	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
黒曜石	1	－	－	－	－	3	－	－	－	－	4
	6.3%	－	－	－	－	18.8%	－	－	－	－	25.0%
安山岩	－	－	－	－	4	4	－	－	－	3	11
	－	－	－	－	25.0%	25.0%	－	－	－	18.8%	68.8%
砂岩	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
	－	－	－	－	6.3%	－	－	－	－	－	6.3%
計	1	－	－	－	5	7	－	－	－	3	16
	6.3%	－	－	－	31.3%	43.7%	－	－	－	18.8%	100.0%



第９図　第２ブロック器種別分布図



第10図　第２ブロック石材別分布図



第11図　第２ブロック出土遺物

第３ブロック（第12～15図，第８・９表，図版４・46・47）

調査区の西側，標高22～23.5mの台地の縁辺部から斜面部にかけて位置する。

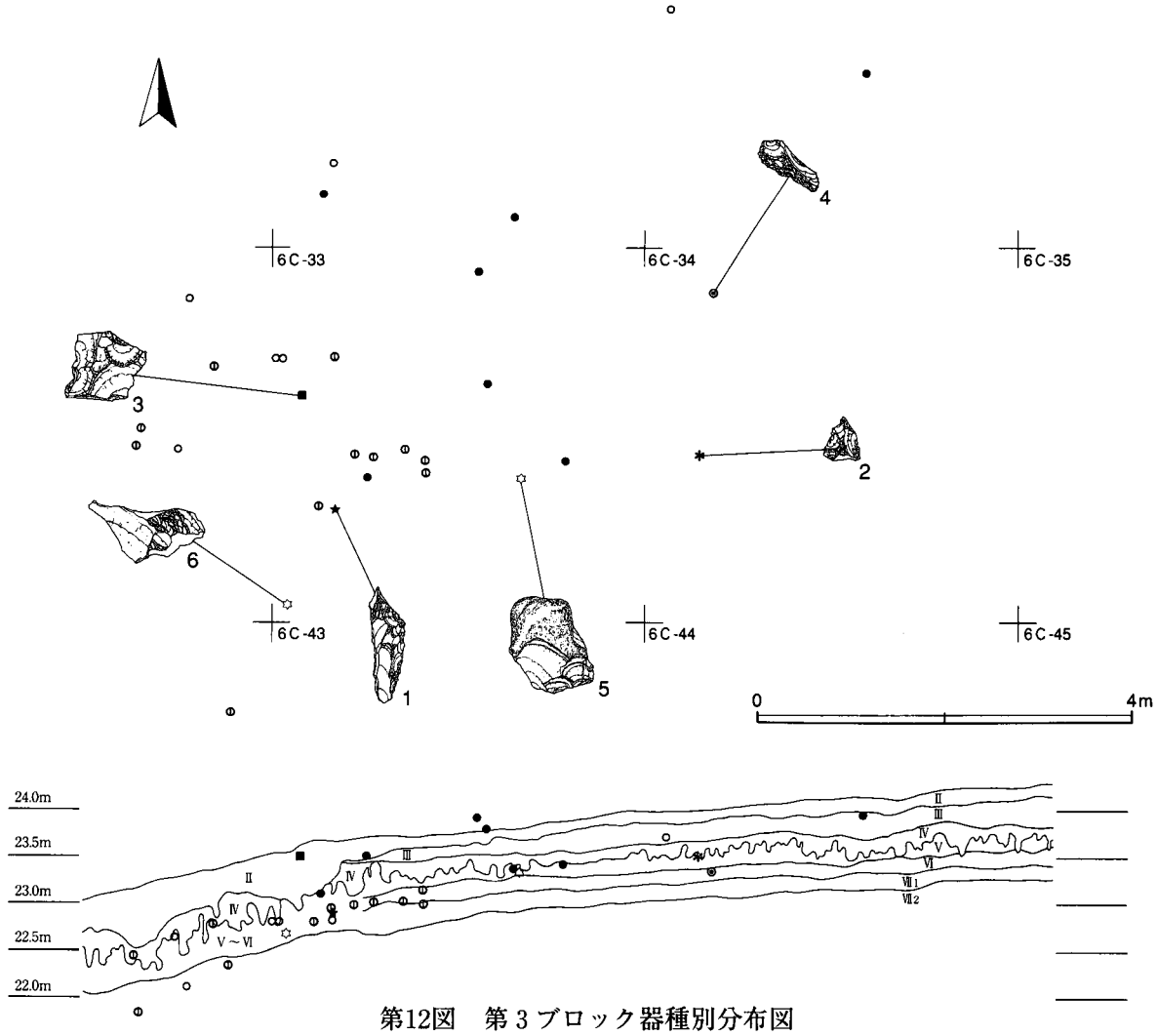
石器は長径10m，短径５mに分布する。

出土した石器はナイフ形石器，掻器，削器，剥片，砕片，剥片利用石核，石核で総計32点である。定型的な石器や石核の占める割合が高い。

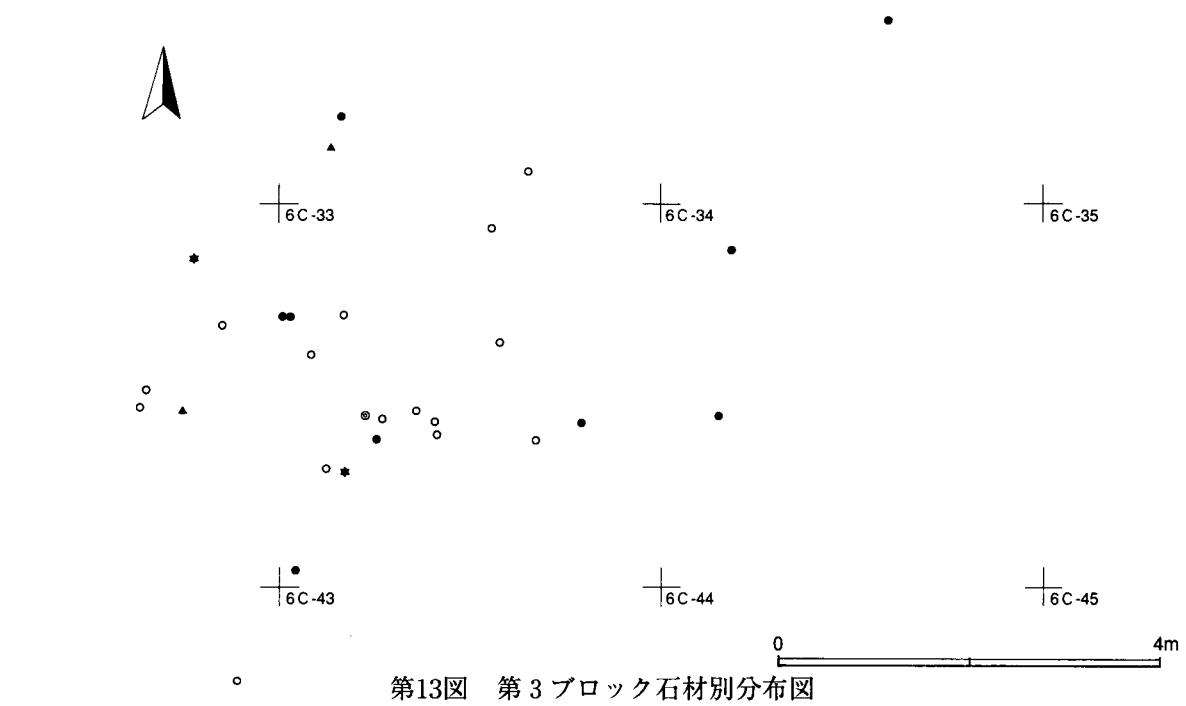
ブロックを構成する石器の石材は黒曜石，安山岩，珪質頁岩，チャート，石英斑岩である。

出土遺物

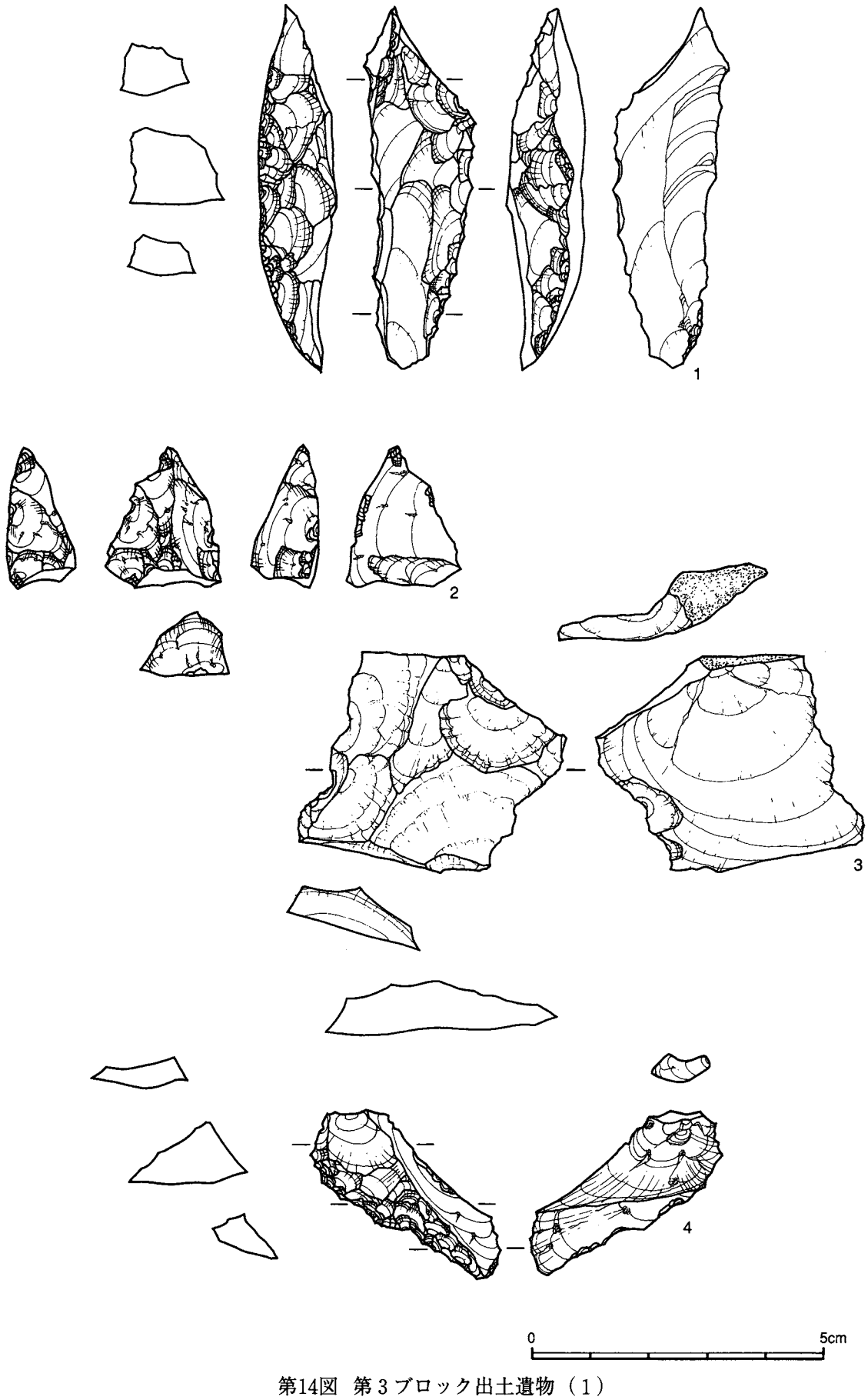
１は珪質頁岩製のナイフ形石器である。厚みのある縦長剥片を素材とし，先端部の両側縁を残し急角度の大きな剥離を施している。２は黒曜石製の角錐状石器である。下半部のほとんどを欠損するため，詳細は不明である。横長剥片を素材とする。３は頁岩製の削器である。正面左側縁，正面下端部，裏面左側縁に１cm程度の調整痕がみられる。連続した調整痕がないことから剥離痕ある剥片かもしれない。４は黒曜石製の剥離痕ある剥片である。正面左側縁に細かい調整が施されている。右側縁の一部にも微細な剥離痕がみられる。５は安山岩製の剥片利用石核である。自然面を残す比較的厚い剥片を素材とし，下端部か



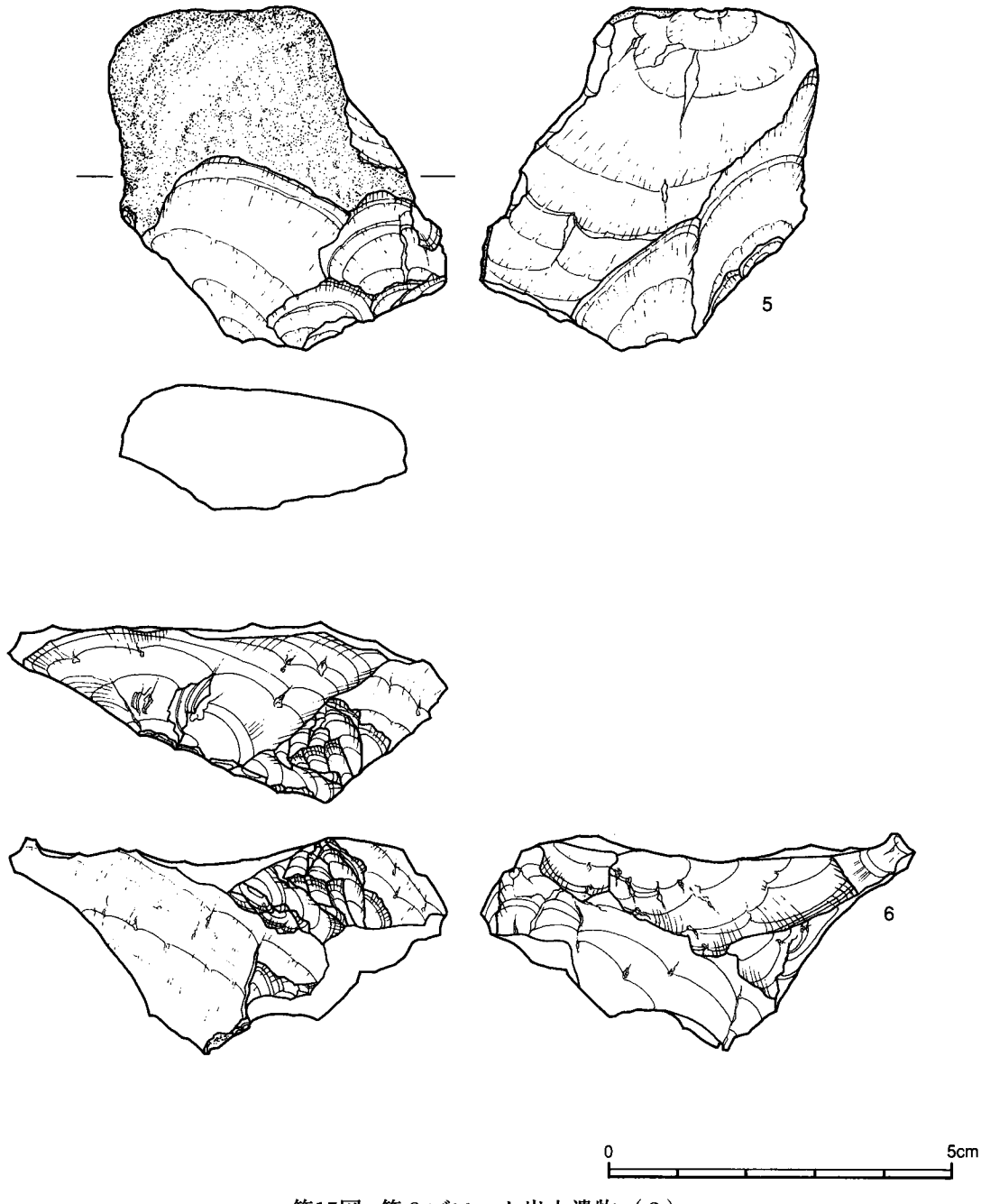
第12図　第３ブロック器種別分布図



第13図　第３ブロック石材別分布図



第14図　第３ブロック出土遺物（１）



第15図　第３ブロック出土遺物（２）

ら２枚の横長の剥片を剥離している。６は黒曜石製の剥片利用石核である。裏面下半の剥離面が主要剥離面である。下半部を欠損する。また，正面左及び上面右上半の剥離面について図上では剥離面として表現したが，自然面の可能性がある。

第４ブロック（第16～21図，第10・11表，図版４・47～49）

調査区の西側，標高23.5～24mの台地の縁辺部に位置する。

石器は長径7.4m，短径6.8mに分布する。

出土した石器はナイフ形石器，角錐状石器，掻器，剥離痕ある剥片，剥片，砕片，剥片利用石核，敲石，礫で総計143点である。最も数量の多いブロックである。

第8表　第3ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第14図　1	6C-33,14	ナイフ形石器	珪質頁岩	6.25	1.83	1.36	14.22	
第14図　2	6C-34,10	角錐状石器	黒曜石	1.96	2.37	1.08	3.20	
第14図　3	6C-33,3	掻器	安山岩	3.67	4.59	0.96	17.06	
第14図　4	6C-34,1	剥離痕ある剥片	黒曜石	3.90	1.50	1.10	3.77	
第15図　5	6C-33,7	剥片利用石核	安山岩	5.46	3.84	1.76	45.52	
第15図　6	6C-33,19	剥片利用石核	黒曜石	3.96	6.29	2.33	27.62	
	6C-23,1	剥片	安山岩	3.41	2.91	0.82	6.18	
	6C-23,2	剥片	チャート	2.51	1.89	0.63	4.43	
	6C-23,3	砕片	黒曜石	0.78	1.12	0.31	0.25	
	6C-24,1	砕片	チャート	1.79	1.34	0.41	1.26	
	6C-24,2	剥片	黒曜石	1.57	2.81	0.53	1.98	
	6C-32,2	砕片	珪質頁岩	1.53	1.18	0.16	0.24	
	6C-32,4	礫	安山岩	4.24	2.80	2.90	29.96	
	6C-32,5	砕片	チャート	1.56	1.17	0.41	0.87	
	6C-32,6	礫	安山岩	3.74	3.66	2.58	35.15	
	6C-32,7	礫	安山岩	6.96	4.36	2.56	70.81	
	6C-33,1	剥片	安山岩	2.84	1.77	0.65	3.18	
	6C-33,2	剥片	安山岩	3.88	2.91	1.03	13.03	
	6C-33,4	剥片	黒曜石	3.12	1.96	1.26	5.54	
	6C-33,5	礫	安山岩	1.78	1.12	0.92	1.65	
	6C-33,6	剥片	黒曜石	2.50	5.06	1.71	15.86	
	6C-33,8	礫	安山岩	2.38	2.29	1.76	10.28	
	6C-33,9	礫	安山岩	3.43	3.38	2.13	22.37	
	6C-33,10	礫	安山岩	4.22	4.09	2.86	8.82	6C-33,11と接合
	6C-33,11	礫	安山岩	3.55	3.02	2.83	39.49	6C-33,10と接合
	6C-33,12	礫	安山岩	3.23	2.55	1.56	11.47	
	6C-33,13	礫	石英斑岩	4.19	3.61	2.32	37.79	
	6C-33,15	礫	安山岩	3.96	3.14	1.56	15.69	
	6C-33,16	礫	安山岩	6.50	3.98	3.67	80.55	6C-36,17･19､6C-45,4･6･7と接合
	6C-33,17a	砕片	黒曜石	1.82	1.62	0.29	0.92	
	6C-33,17b	砕片	黒曜石	0.73	0.87	0.13	0.10	
	6C-42,1	礫	安山岩	3.84	3.63	2.68	32.11	

ブロックを構成する石器の石材は黒曜石，安山岩，珪質頁岩，砂岩，凝灰岩である。

出土遺物

1は黒曜石製のナイフ形石器である。両側縁に調整を施したもので先端の刃部はほぼ水平である。2は黒曜石製のナイフ形石器である。右上半部を欠損するため，詳細は不明だが，残存部については左側縁に調整を施されている。3は黒曜石製の角錐状石器である。これも右半分を欠損するため，詳細は不明である。横長剥片を素材とするものと思われる。なお，この石器については，5の調整加工との類似性から掻器の可能性もある。4は黒曜石製の角錐状石器である。器体中央で破損した資料が2点接合している。横長剥片を素材とし全周に大きな調整を施している。5は黒曜石製の掻器である。剥片の末端及び右側縁に

第9表　第3ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
黒曜石	−	1	−	1	3	3	1	−	−	−	9
	−	3.1%	−	3.1%	9.4%	9.4%	3.1%	−	−	−	28.1%
安山岩	−	−	1	−	3	−	1	−	−	12	17
	−	−	3.1%	−	9.4%	−	3.1%	−	−	37.5%	53.1%
珪質頁岩	1	−	−	−	−	1	−	−	−	−	2
	3.1%	−	−	−	−	3.1%	−	−	−	−	6.2%
チャート	−	−	−	−	1	2	−	−	−	−	3
	−	−	−	−	3.1%	6.3%	−	−	−	−	9.4%
石英斑岩	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3.1%	3.1%
計	1	1	1	1	7	6	2	−	−	13	32
	3.1%	3.1%	3.1%	3.1%	21.9%	18.8%	6.3%	−	−	40.6%	100.0%

調整を施し刃部を作り出している。6は黒曜石製の剥離痕ある剥片である。比較的厚い剥片の上面と下端部の一部に細かい剥離痕がみられる。7は黒曜石製の剥離痕ある剥片である。裏面右側縁の一部に細かい剥離痕がみられる。下半部を欠損する。8は黒曜石製の剥離痕ある剥片である。正面右側縁の一部に細かい剥離痕がみられる。下半部および右側縁を欠損する。9は黒曜石製の剥離痕ある剥片である。正面左側縁の一部にかなり大きな剥離痕がみられる。上半部および下半部を欠損する。10は黒曜石製の剥離痕ある剥片である。正面左側縁の一部に大きな剥離痕，裏面右側縁に細かい剥離痕がみられる。下半部を欠損する。11は黒曜石製の剥離痕ある剥片である。末端に細かい剥離痕がみられる。上半部および右側縁を欠損する。

12は黒曜石製の剥離痕ある剥片である。裏面末端に細かい剥離痕がみられる。上半部を欠損する。

13は黒曜石製の剥離痕ある剥片である。裏面左側縁の一部に微細な剥離痕がみられる。14は黒曜石製の石核である。比較的小型の剥片を作出した痕跡を残す。15は凝灰岩製の敲石である。上下両端に剥離痕が残るが，特に下端部が顕著である。16は黒曜石製の剥片である。正面頭部に細かい剥離痕がみられる。

17は安山岩製の剥離痕ある剥片2点の接合資料である。器体の中央で左右に破損する。残された剥離痕の大きさから剥片利用石核とした方がよいかもしれない。

第10表　第4ブロック石器観察表

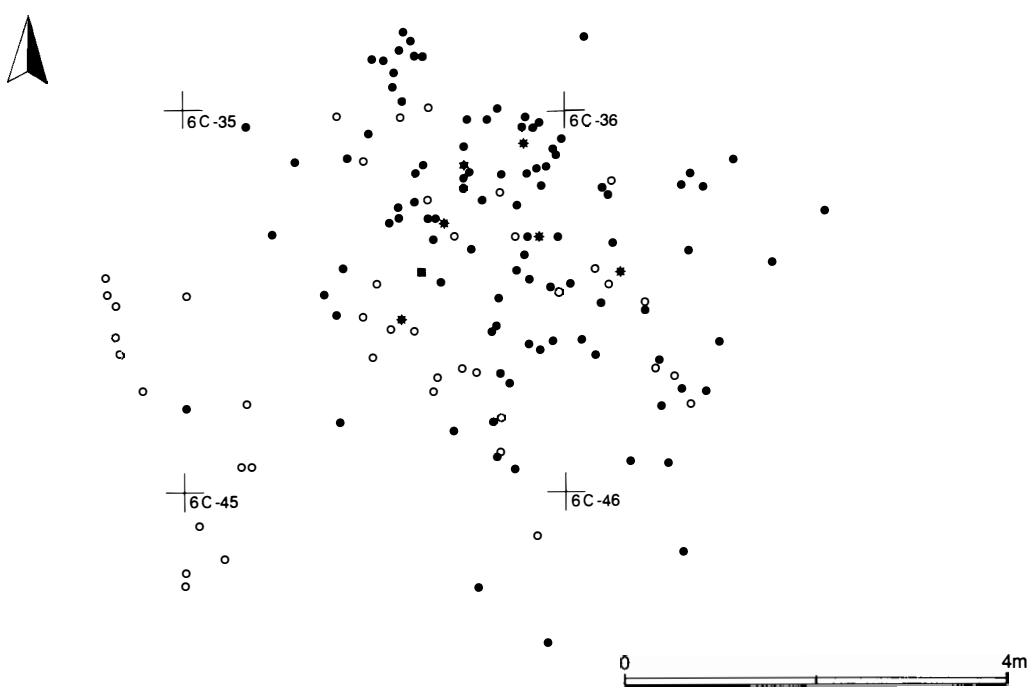
挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第18図　1	6C-35,37a	ナイフ形石器	黒曜石	2.73	2.02	1.06	4.65	
第18図　2	6C-36,37	ナイフ形石器	黒曜石	2.37	1.16	0.74	2.07	
第18図　3	6C-46,1	角錐状石器	黒曜石	3.37	1.21	1.17	4.52	
第18図　4	6C-35,34･54	角錐状石器	黒曜石	5.48	1.49	1.51	10.87	
第18図　5	6C-35,62	掻器	黒曜石	3.33	2.87	1.24	11.66	
第18図　6	6C-35,44	剥離痕ある剥片	黒曜石	2.75	2.80	1.34	8.36	
第18図　7	6C-35,3	剥離痕ある剥片	黒曜石	1.52	1.83	0.59	1.79	
第19図　8	6C-35,64	剥離痕ある剥片	黒曜石	2.37	3.62	0.92	7.29	
第19図　9	6C-35,43	剥離痕ある剥片	黒曜石	2.23	2.52	0.82	5.22	
第19図　10	6C-45,3	剥離痕ある剥片	黒曜石	2.39	2.04	0.68	2.10	
第19図　11	6C-25,2	剥離痕ある剥片	黒曜石	2.79	2.71	1.17	8.27	

第19図　12	6C-35,41	剥離痕ある剥片	黒曜石	2.32	2.35	1.02	4.61	
第19図　13	6C-36,40	剥離痕ある剥片	黒曜石	3.90	2.93	1.42	10.04	
第20図　14	6C-35,82	剥片利用石核	黒曜石	4.08	4.18	2.63	31.99	
第20図　15	6C-36,3	敲石	凝灰岩	7.04	3.12	2.63	62.58	
第21図　16	6C-35,55	剥片	黒曜石	3.84	3.35	0.91	9.43	
第21図　17a	6C-35,86	剥離痕ある剥片	安山岩	3.65	4.21	1.15	16.10	6C-35,12と接合
第21図　17b	6C-35,12	剥離痕ある剥片	安山岩	3.23	2.53	1.28	9.63	6C-35,86と接合
	6C-25,1	剥片	黒曜石	2.53	2.43	1.17	5.85	
	6C-25,3	砕片	黒曜石	1.00	1.73	0.19	0.29	
	6C-25,4a	剥片	黒曜石	1.44	1.94	0.43	0.98	
	6C-25,4b	砕片	黒曜石	0.71	1.20	0.16	0.15	
	6C-25,5	剥片	黒曜石	2.43	2.50	0.54	2.99	
	6C-25,6	剥片	安山岩	2.81	2.45	0.76	6.84	
	6C-25,7	砕片	黒曜石	1.76	1.54	0.63	0.82	
	6C-25,8	砕片	黒曜石	0.74	1.27	0.26	0.30	
	6C-25,9	砕片	黒曜石	1.81	2.35	0.39	1.16	
	6C-25,10	砕片	黒曜石	1.51	1.29	0.19	0.48	
	6C-25,11	砕片	黒曜石	1.77	1.33	0.57	1.08	
	6C-26,1	剥片	黒曜石	1.93	3.47	1.08	5.51	
	6C-34,2	礫	安山岩	6.17	5.07	2.92	82.41	
	6C-34,3	礫	安山岩	6.17	3.57	2.90	79.24	
	6C-34,4	礫	安山岩	5.32	5.05	2.21	64.74	
	6C-34,5	礫	安山岩	2.60	1.94	1.07	5.84	
	6C-34,7	礫	安山岩	4.46	2.98	1.94	30.78	
	6C-34,8	礫	安山岩	3.49	3.36	2.23	19.79	
	6C-35,1	剥片	黒曜石	2.75	3.03	0.99	4.35	
	6C-35,2	剥片	珪質頁岩	2.72	2.23	0.70	4.28	
	6C-35,4	砕片	黒曜石	2.23	1.24	0.32	0.80	
	6C-35,5	砕片	黒曜石	1.52	1.02	0.30	0.31	
	6C-35,6	砕片	黒曜石	1.63	2.08	0.46	1.03	
	6C-35,7	剥片	黒曜石	1.33	2.48	0.56	2.19	
	6C-35,8	砕片	黒曜石	1.75	1.11	0.53	0.61	
	6C-35,9	砕片	黒曜石	1.26	2.30	0.36	0.94	
	6C-35,10	剥片	黒曜石	1.98	2.75	0.99	3.96	
	6C-35,11	剥片	黒曜石	2.38	2.38	0.53	2.61	
	6C-35,13	礫	安山岩	4.84	4.24	3.52	84.62	
	6C-35,14	剥片	安山岩	2.43	1.70	0.83	18.75	
	6C-35,15	礫	安山岩	1.54	1.36	1.19	2.27	
	6C-35,16	砕片	黒曜石	1.90	1.45	0.70	1.65	
	6C-35,17	砕片	黒曜石	0.71	1.20	0.36	0.25	
	6C-35,18	砕片	黒曜石	2.49	1.09	0.44	1.06	
	6C-35,19	剥片	黒曜石	1.83	1.97	0.29	1.10	
	6C-35,20	砕片	黒曜石	1.80	0.73	0.21	0.21	
	6C-35,21	剥片	安山岩	1.74	2.16	0.57	2.30	

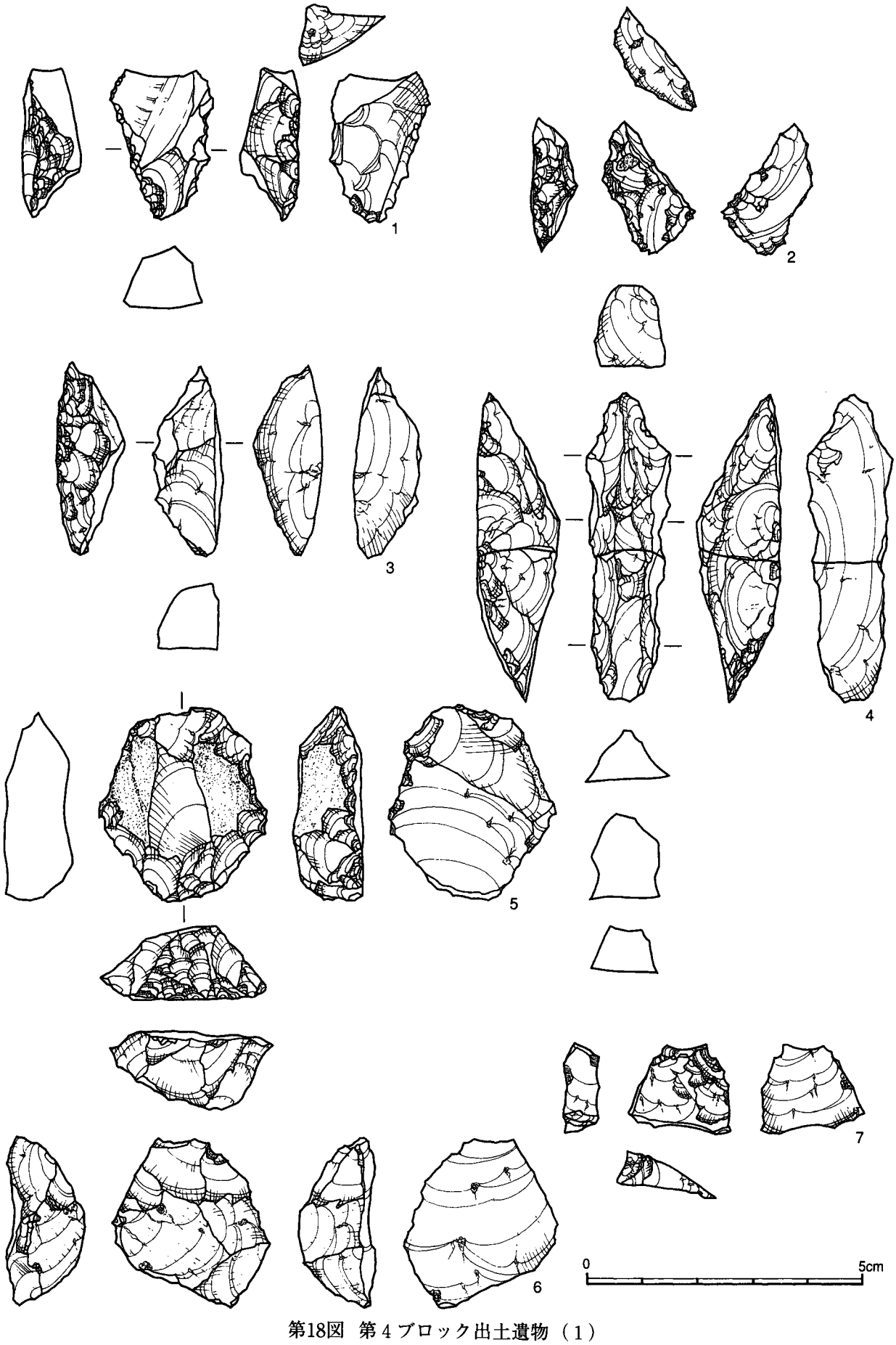
	6C-35,22	砕片	黒曜石	−	−	−	0.02	
	6C-35,23	砕片	黒曜石	0.63	1.07	0.13	0.09	
	6C-35,24	砕片	黒曜石	0.36	1.70	0.19	0.12	
	6C-35,25	砕片	黒曜石	0.72	0.86	0.37	0.25	
	6C-35,26	砕片	凝灰岩	−	−	−	2.48	
	6C-35,27	砕片	黒曜石	0.53	1.37	0.31	0.17	
	6C-35,28	砕片	黒曜石	0.84	0.95	0.21	0.15	
	6C-35,29	礫	安山岩	2.81	2.28	2.22	12.75	6C-35,83と接合
	6C-35,30	剥片	黒曜石	1.40	2.28	0.38	1.21	
	6C-35,31	礫	安山岩	1.98	1.34	1.31	2.76	6C-35,60、6C-36,32、6C-45,2・5と接合
	6C-35,32	剥片	黒曜石	1.85	2.17	0.54	1.88	
	6C-35,33	剥片	黒曜石	2.23	2.61	1.03	3.15	
	6C-35,35	砕片	黒曜石	1.16	1.60	0.42	0.71	
	6C-35,36	砕片	黒曜石	1.27	1.40	0.35	0.58	
	6C-35,37b	砕片	黒曜石	1.37	1.16	0.19	0.26	
	6C-35,38	砕片	黒曜石	1.43	1.03	0.21	0.31	
	6C-35,39	砕片	黒曜石	1.18	2.01	0.34	1.07	
	6C-35,40・52	剥片	凝灰岩	4.93	2.51	1.36	9.00	
	6C-35,42	砕片	黒曜石	2.27	0.89	0.35	0.71	
	6C-35,45	砕片	黒曜石	1.13	1.11	0.18	0.38	
	6C-35,46	剥片	黒曜石	2.41	1.79	0.71	2.48	
	6C-35,48	砕片	黒曜石	1.42	0.96	0.22	0.32	
	6C-35,49	剥片	安山岩	2.37	2.42	0.91	5.54	
	6C-35,50	砕片	黒曜石	0.97	1.78	0.23	0.34	
	6C-35,51	剥片	安山岩	4.41	3.80	1.63	20.64	
	6C-35,53a	砕片	黒曜石	1.12	1.75	0.33	0.47	
	6C-35,53b	砕片	黒曜石	0.46	0.69	0.17	0.07	
	6C-35,56	礫	砂岩	1.39	0.96	0.44	0.47	
	6C-35,57	礫	安山岩	5.40	4.36	3.44	81.91	6C-35,59・76、6C-36,24と接合
	6C-35,58	砕片	凝灰岩	−	−	−	1.11	
	6C-35,59	礫	安山岩	5.58	4.91	3.43	89.75	6C-35,57・76、6C-36,24と接合
	6C-35,60	礫	安山岩	3.21	3.11	2.30	23.28	6C-35,31、6C-36,32、6C-45,2・5と接合
	6C-35,61	砕片	黒曜石	1.03	1.20	0.32	0.47	
	6C-35,63	剥片	安山岩	4.42	2.57	1.47	20.72	
	6C-35,65	剥片	黒曜石	2.63	2.50	0.72	3.50	
	6C-35,66	砕片	黒曜石	1.63	1.60	0.67	1.04	
	6C-35,67	砕片	黒曜石	1.42	1.55	0.32	0.61	
	6C-35,68	剥片	安山岩	4.17	3.32	1.26	3.07	
	6C-35,69	砕片	黒曜石	1.27	2.26	0.80	1.69	
	6C-35,70	剥片	黒曜石	2.61	2.87	0.83	5.08	
	6C-35,71	剥片	安山岩	2.14	2.13	0.88	4.46	
	6C-35,72	砕片	黒曜石	2.02	1.19	0.43	1.06	
	6C-35,73	剥片	黒曜石	1.83	3.28	0.58	2.82	
	6C-35,74	砕片	黒曜石	1.76	1.22	0.28	0.42	

	6C-35,75	剥片	黒曜石	2.57	2.86	1.08	7.10	
	6C-35,76	礫	安山岩	3.88	2.71	1.78	14.54	6C-35,57・59、6C-36,24と接合
	6C-35,77	剥片	黒曜石	2.68	2.63	1.19	4.71	
	6C-35,78	砕片	黒曜石	1.19	2.41	0.70	1.54	
	6C-35,79	礫	安山岩	5.37	3.17	2.22	43.36	
	6C-35,80	剥片	安山岩	4.46	2.75	0.78	10.43	
	6C-35,81	礫	安山岩	2.09	2.02	1.56	7.53	
	6C-35,83	礫	安山岩	3.52	2.64	2.35	24.11	6C-35,29と接合
	6C-35,84	剥片	黒曜石	1.71	2.09	0.57	1.25	
	6C-35,85	剥片	安山岩	3.86	2.71	1.51	10.24	
	6C-35,87	礫	安山岩	3.84	2.02	1.00	9.70	
	6C-36,1	剥片	黒曜石	1.84	3.13	0.48	2.28	
	6C-36,2	礫	安山岩	2.92	1.52	1.44	3.92	
	6C-36,4	剥片	黒曜石	2.68	2.03	0.54	1.34	
	6C-36,5	砕片	黒曜石	1.11	1.52	0.33	0.51	
	6C-36,6	砕片	黒曜石	0.92	1.04	0.43	0.45	
	6C-36,7	砕片	黒曜石	0.68	0.78	0.21	0.11	
	6C-36,8	剥片	黒曜石	2.87	1.91	0.59	2.82	
	6C-36,14	剥片	黒曜石	1.31	2.64	1.50	4.17	
	6C-36,15	砕片	黒曜石	1.83	0.58	0.12	0.17	
	6C-36,16	砕片	黒曜石	0.45	0.72	0.22	0.09	
	6C-36,17	礫	安山岩	4.38	3.05	2.31	31.23	6C-33,16、6C-36,19、6C-45,4・6・7と接合
	6C-36,18	砕片	黒曜石	0.87	1.07	0.13	0.18	
	6C-36,19	礫	安山岩	5.49	3.97	3.37	74.60	6C-33,16、6C-36,17、6C-45,4・6・7と接合
	6C-36,20	剥片	黒曜石	1.93	1.89	0.37	0.95	
	6C-36,21	砕片	安山岩	1.00	1.53	0.62	0.88	
	6C-36,22	砕片	黒曜石	0.48	0.50	0.20	0.06	
	6C-36,23	剥片	黒曜石	1.96	1.75	0.57	1.83	
	6C-36,24	礫	安山岩	3.20	2.84	1.47	11.92	6C-35,57・59・76と接合
	6C-36,29	剥片	黒曜石	2.12	5.04	0.71	4.98	
	6C-36,31	砕片	黒曜石	1.17	0.64	0.20	0.21	
	6C-36,32	礫	安山岩	2.48	2.45	1.89	11.86	6C-35,31・60、6C-45,2・5と接合
	6C-36,33	砕片	黒曜石	1.23	1.17	0.39	0.57	
	6C-36,34	砕片	黒曜石	0.87	0.81	0.33	0.22	
	6C-36,35	剥片	黒曜石	5.12	2.87	1.08	11.26	
	6C-36,36	砕片	黒曜石	1.32	1.29	0.18	0.19	
	6C-36,38	礫	安山岩	8.37	4.77	2.90	114.47	
	6C-36,39	砕片	黒曜石	0.61	1.41	0.26	0.23	
	6C-45,1	砕片	黒曜石	1.73	1.35	0.64	1.25	
	6C-45,2	礫	安山岩	3.62	3.09	1.41	17.72	6C-35,31・60、6C-36,32、6C-45,5と接合
	6C-45,4	礫	安山岩	4.73	3.60	2.46	35.39	6C-33,16、6C-36,17・19、6C-45,6・7と接合
	6C-45,5	礫	安山岩	5.16	3.24	2.29	39.63	6C-35,31・60、6C-36,32、6C-45,4・7と接合
	6C-45,6	礫	安山岩	4.22	2.31	1.60	18.87	6C-33,16、6C-36,17・19、6C-45,4・7と接合
	6C-45,7	礫	安山岩	3.75	2.85	2.57	23.49	6C-33,16、6C-36,17・19、6C-45,4・6と接合

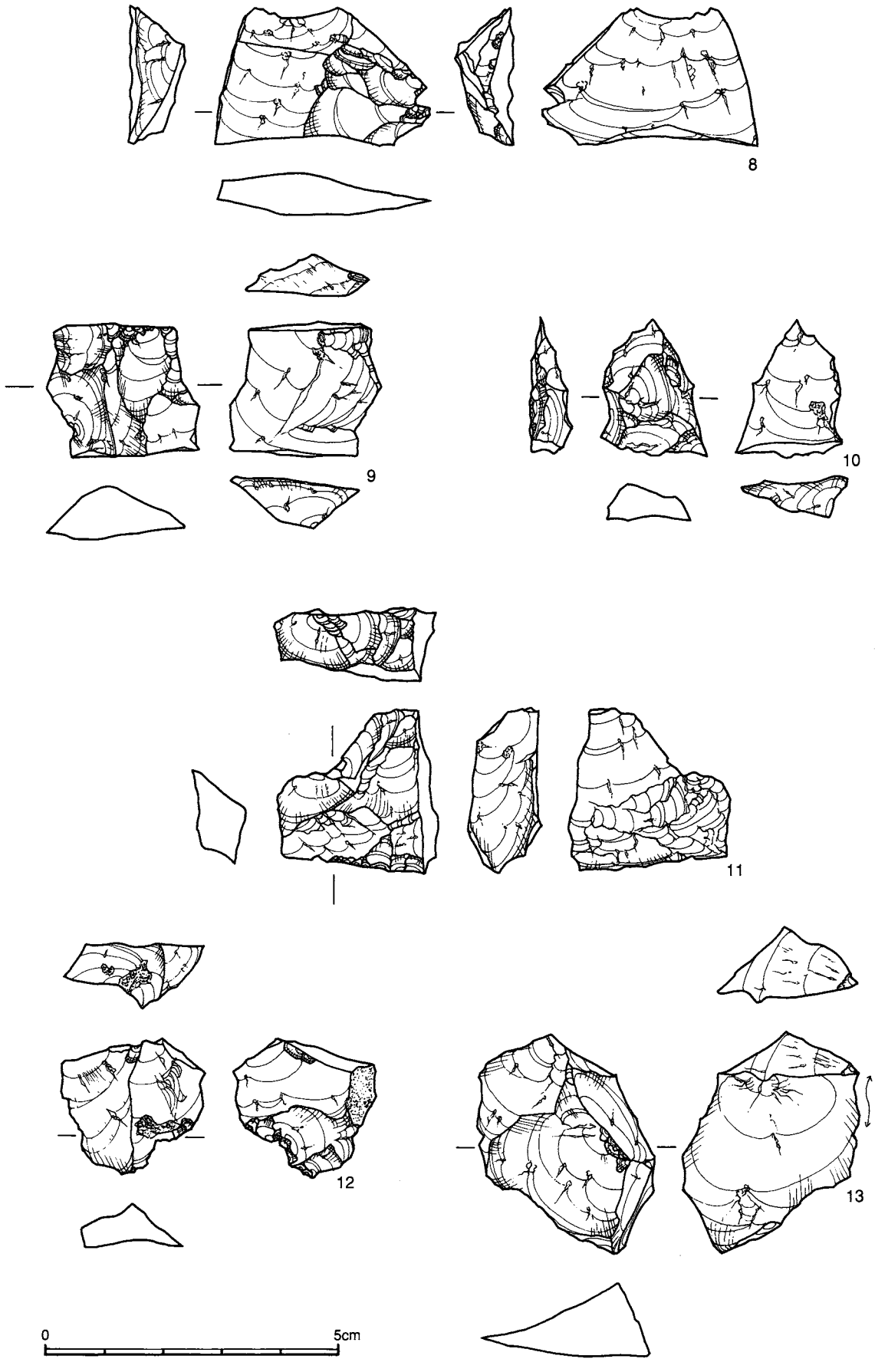
第16図　第４ブロック器種別分布図



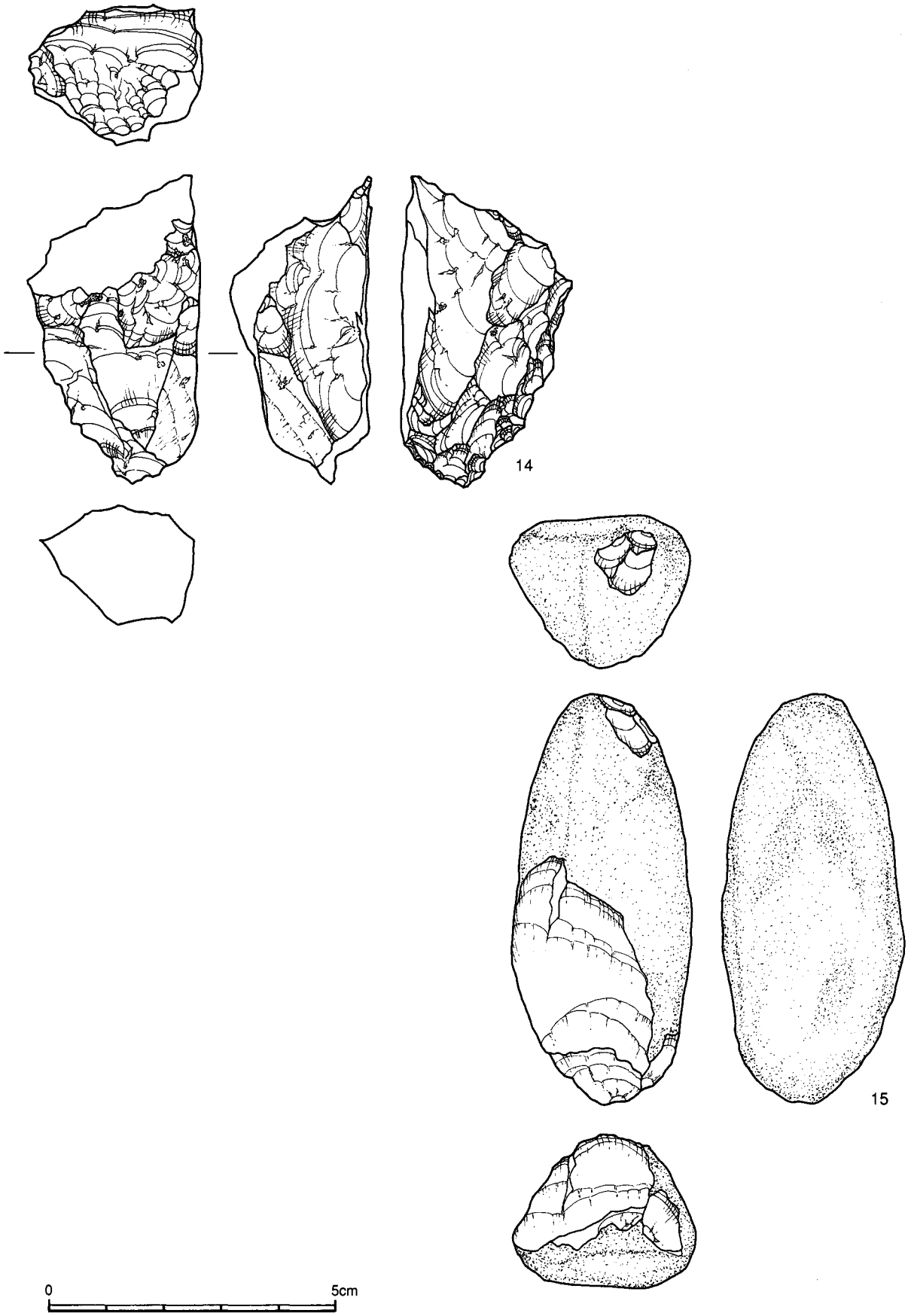
第17図　第４ブロック石材別分布図



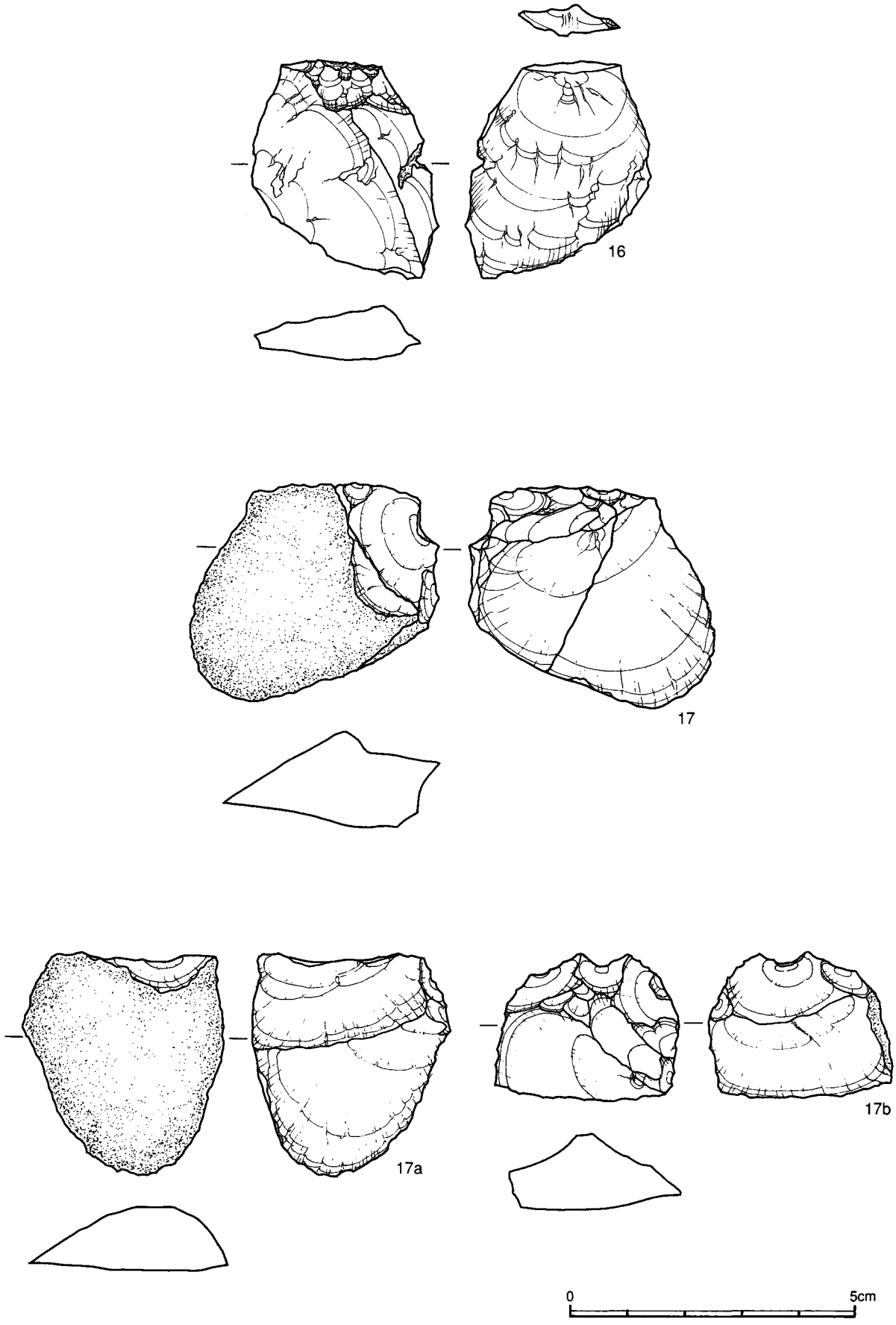
第18図　第４ブロック出土遺物（１）



第19図　第４ブロック出土遺物（２）



第20図　第４ブロック出土遺物（３）



第21図　第４ブロック出土遺物（４）

第11表　第４ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
黒曜石	2	2	1	8	28	53	1	−	−	−	95
	1.4%	1.4%	0.7%	5.6%	19.6%	37.1%	0.7%	−	−	−	66.5%
安山岩	−	−	−	2	10	1	−	−	−	29	42
	−	−	−	1.4%	7.0%	0.7%	−	−	−	20.3%	29.4%
珪質頁岩	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1
	−	−	−	−	0.7%	−	−	−	−	−	0.7%
砂岩	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
	−	−	−	−	−	−	−	−	−	0.7%	0.7%
凝灰岩	−	−	−	−	1	2	−	−	1	−	4
	−	−	−	−	0.7%	1.4%	−	−	0.7%	−	2.8%
計	2	2	1	10	40	56	1	−	1	30	143
	1.4%	1.4%	0.7%	7.0%	28.0%	39.1%	0.7%	−	0.7%	21.0%	100.0%

第５ブロック（第22～24図，第12・13表，図版５・49）

調査区のほぼ中央，標高25mの台地の中央部に位置する。

石器は長径4.8m，短径1.6mに分布する。

出土した石器は剥離痕ある剥片，砕片各１点で，残りは礫が９点の総計11点である。安山岩の小礫を主体とする礫群である。

ブロックを構成する石器の石材は安山岩，チャート，メノウである。

出土遺物

１はメノウ製の剥離痕ある剥片である。

第12表　第５ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第24図　1	7D-66,1	剥離痕ある剥片	メノウ	2.02	1.83	0.24	1.25	
	7D-56,1	礫	安山岩	6.22	4.60	2.67	65.72	7D-56,2･3､7D-65,1･2･3･5と接合
	7D-56,2	礫	安山岩	5.19	2.86	2.49	30.48	7D-56,1･3､7D-65,1･2･3･5と接合
	7D-56,3	礫	安山岩	3.12	2.10	1.19	5.63	7D-56,1･2､7D-65,1･2･3･5と接合
	7D-65,1	礫	安山岩	4.56	4.44	3.22	48.25	7D-56,1･2､7D-65,2･3･5と接合
	7D-65,2	礫	安山岩	5.72	4.64	3.06	59.39	7D-56,1･2･3､7D-65,1･3･5と接合
	7D-65,3	礫	安山岩	3.10	2.59	1.44	9.14	7D-56,1･2､7D-65,1･2･5と接合
	7D-65,4	礫	安山岩	2.26	2.08	1.62	8.17	
	7D-65,5	礫	安山岩	4.92	3.93	2.87	47.38	7D-56,1･2･3､7D-65,1･2･3と接合
	7D-65,6	礫	安山岩	2.79	1.19	2.18	8.44	
	7D-66,2	砕片	チャート	0.86	0.81	0.30	0.26	一括

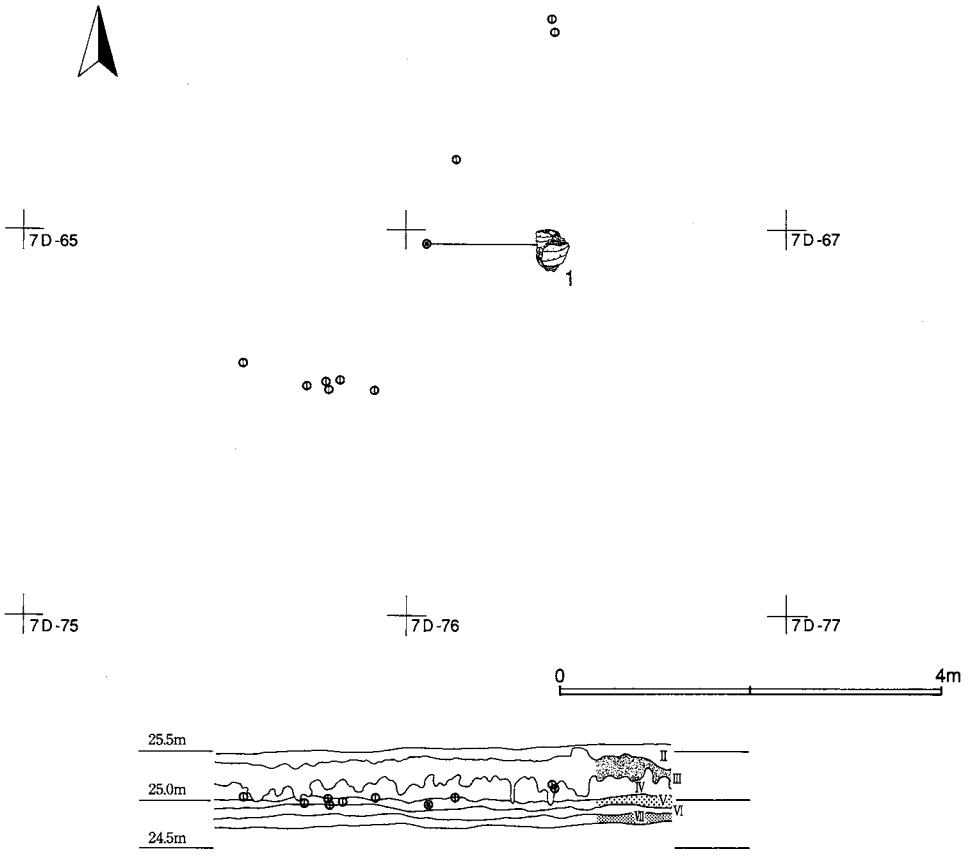
第６ブロック（第25～27図，第14・15表，図版５・49）

調査区の西側，標高23～23.5mの台地の斜面部に位置する。

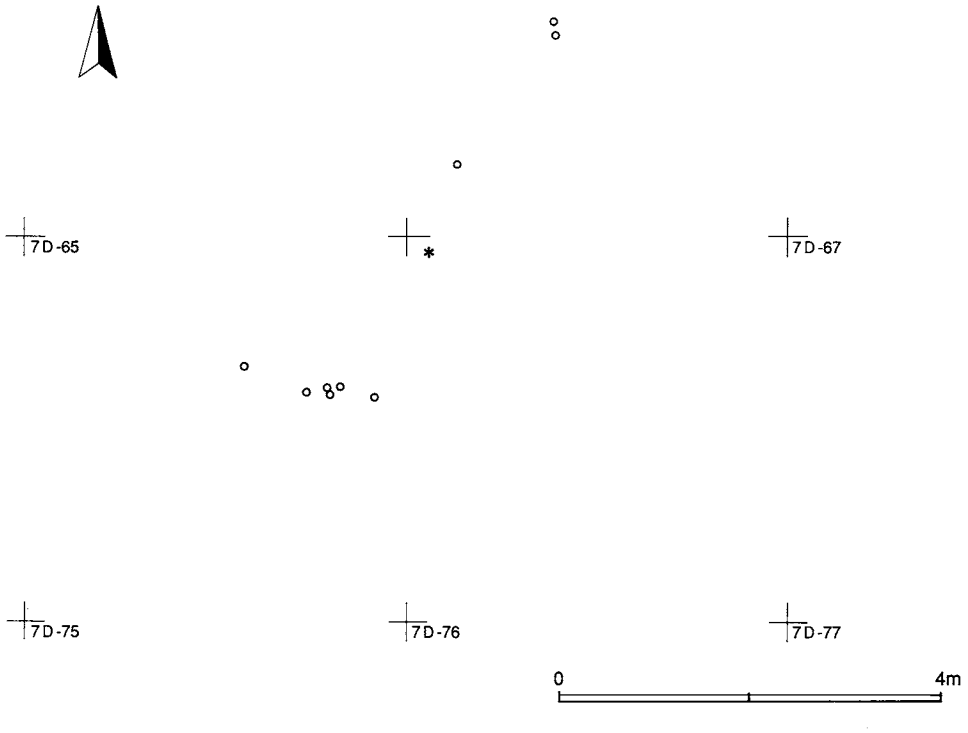
石器は長径３m，短径２mに分布する。

出土した石器は角錐状石器，剥片，砕片，敲石，礫で総計11点である。

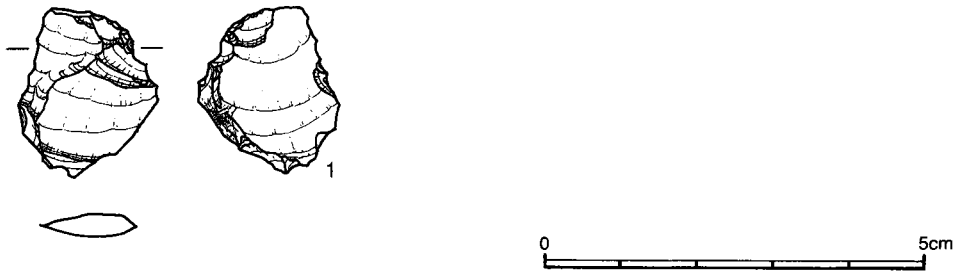
ブロックを構成する石器の石材は安山岩，珪質頁岩，頁岩である。



第22図　第５ブロック器種別分布図



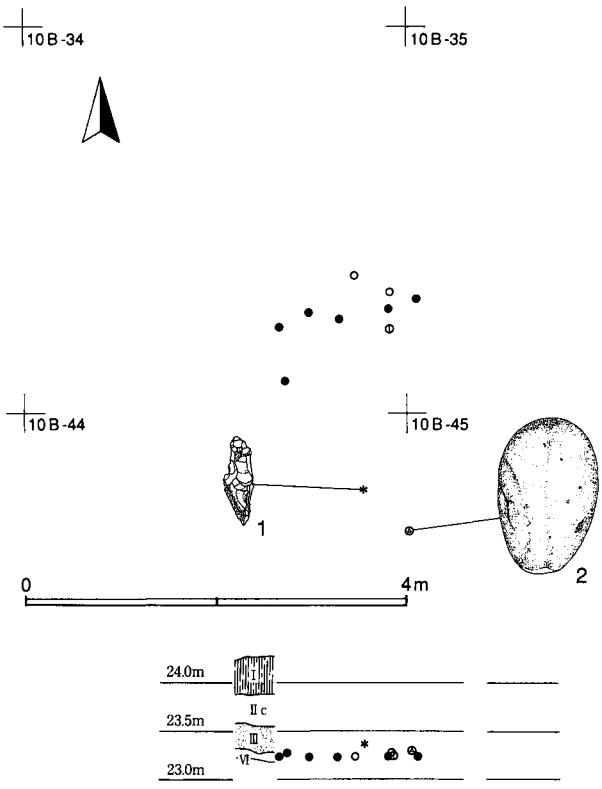
第23図　第５ブロック石材別分布図



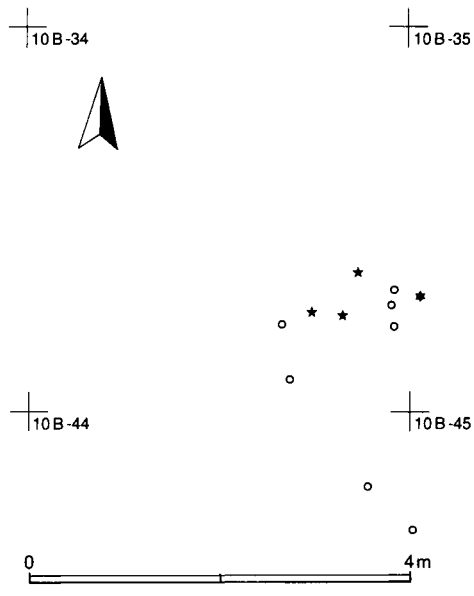
第24図　第５ブロック出土遺物

第13表　第５ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
安山岩	−	−	−	−	−	−	−	−	−	9	9
	−	−	−	−	−	−	−	−	−	81.8%	75.0%
チャート	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1
	−	−	−	−	−	9.1%	−	−	−	−	8.3%
メノウ	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1
	−	−	−	11.1%	−	−	−	−	−	−	16.6%
計	−	−	−	1	−	1	−	−	−	9	11
	−	−	−	9.1%	−	9.1%	−	−	−	81.8%	100.0%



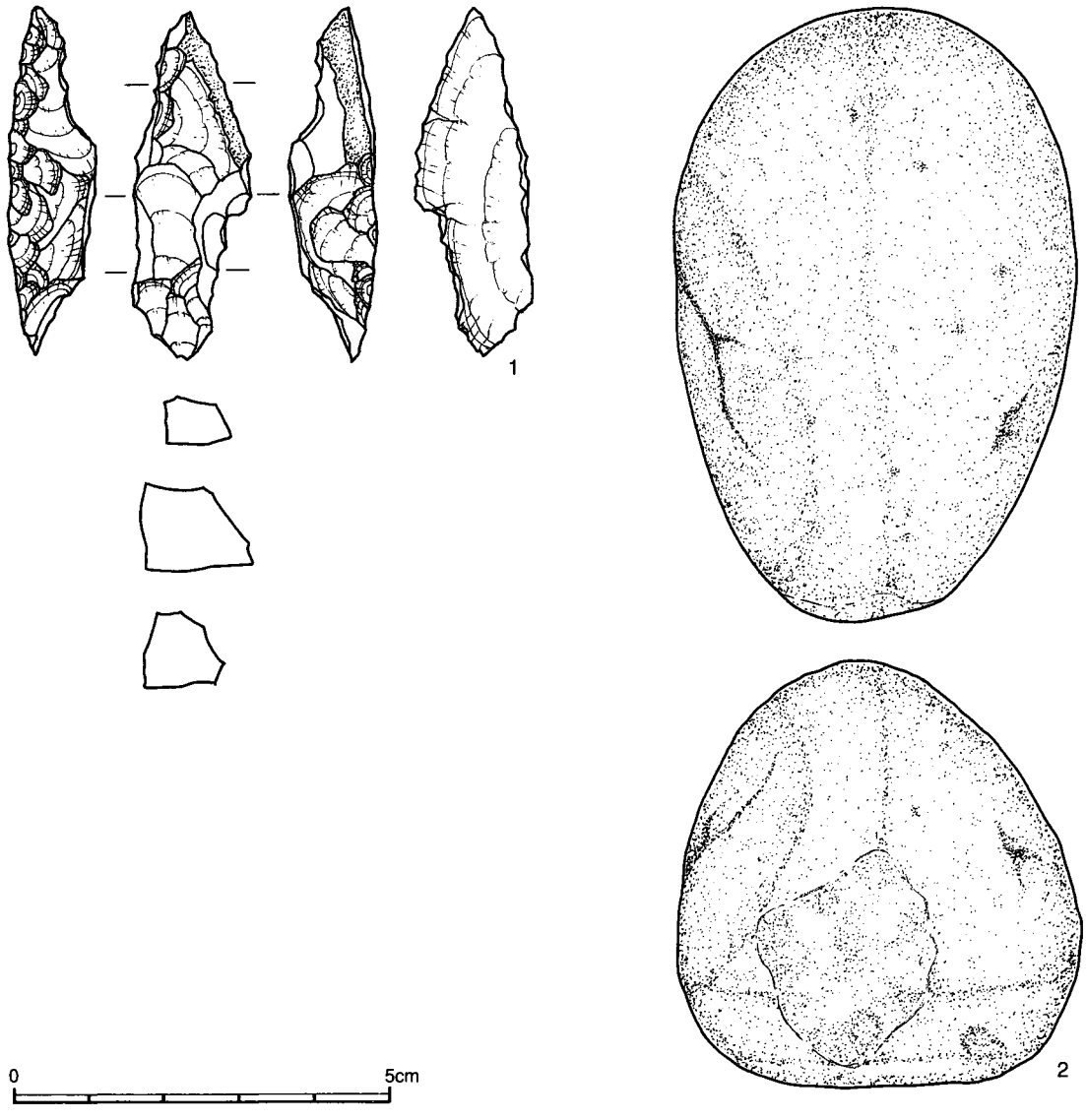
第25図　第６ブロック器種別分布図



第26図　第６ブロック石材別分布図

出土遺物

１は安山岩製の角錐状石器である。右側縁上部に自然面を残す。２は安山岩製の敲石である。



第27図　第6ブロック出土遺物

第14表　第6ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第27図　1	10B-44,1	角錐状石器	安山岩	4.61	1.47	1.16	7.45	
第27図　2	10B-45,1	敲石	安山岩	3.07	5.88	5.29	321.14	
	10B-34,1	砕片	安山岩	1.03	2.01	0.69	1.14	
	10B-34,2	剥片	安山岩	1.70	2.09	0.47	1.33	
	10B-34,3	礫	安山岩	5.93	3.08	3.42	77.69	
	10B-34,4	砕片	頁岩	1.73	1.13	0.43	0.86	
	10B-34,5	剥片	頁岩	2.49	2.20	0.43	2.17	
	10B-34,6	剥片	頁岩	1.47	2.56	0.37	0.98	
	10B-34,7	剥片	安山岩	2.70	4.89	1.72	17.18	
	10B-34,8	剥片	安山岩	4.34	6.43	1.49	33.07	
	10B-35,1	剥片	珪質頁岩	2.03	2.51	0.73	2.94	

第15表　第６ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
安山岩	－	1	－	－	3	1	－	－	1	1	7
	－	9.1%	－	－	27.3%	9.1%	－	－	9.1%	9.1%	6.4%
珪質頁岩	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
	－	－	－	－	9.1%	－	－	－	－		9.1%
頁岩	－	－	－	－	2	1	－	－	－	－	3
	－	－	－	－	18.2%	9.1%	－	－	－	－	27.3%
計	－	1	－	－	6	2	－	－	1	－	11
	－	9.1%	－	－	54.6%	18.2%	－	－	9.1%	－	100.0%

第７ブロック（第28～30図，第16・17表，図版５・50）

調査区の西側，標高23.5mの台地の斜面部に位置する。

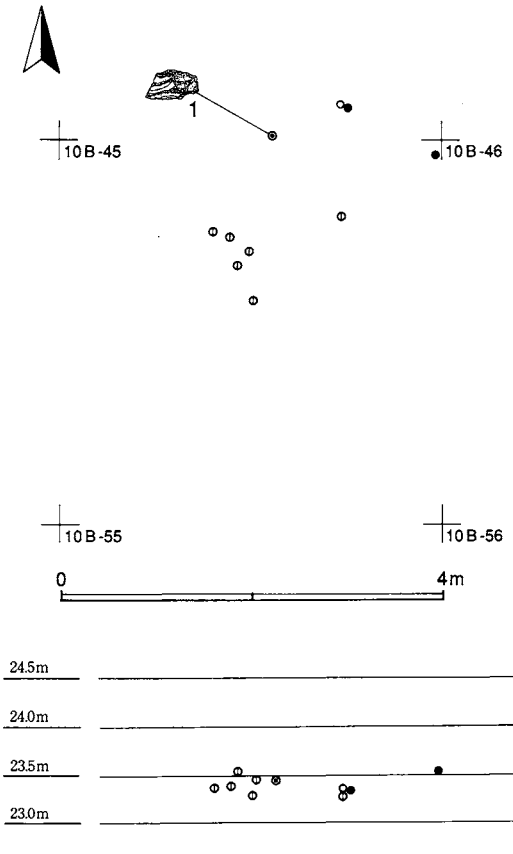
石器は長径2.2m，短径1.4mに分布する。

出土した石器は剥離痕ある剥片，砕片，礫で総計10点である。

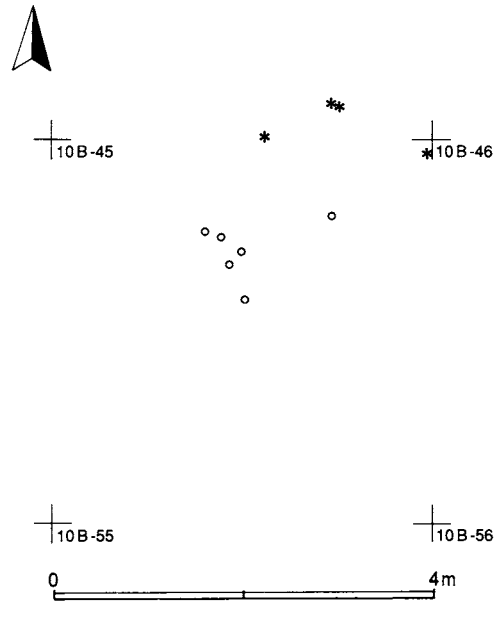
ブロックを構成する石器の石材は安山岩，砂岩，メノウである。

出土遺物

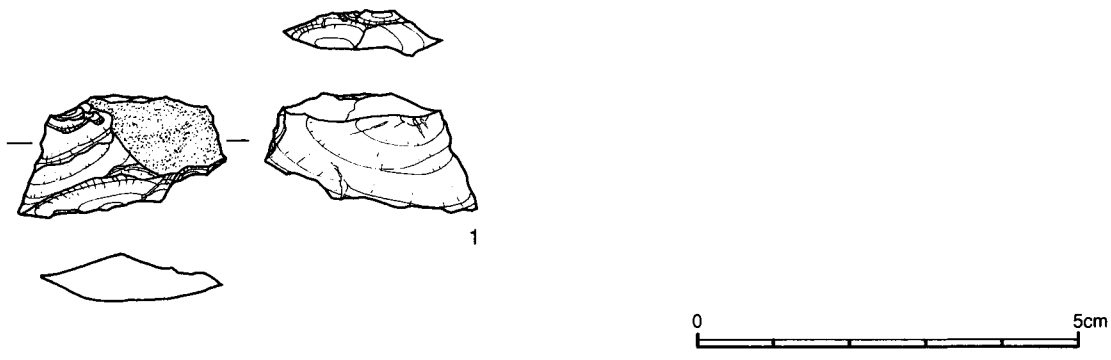
１はメノウ製の剥離痕ある剥片である。裏面左側縁に微細な剥離痕がみられる。



第28図　第７ブロック器種別分布図



第29図　第７ブロック石材別分布図



第30図　第７ブロック出土遺物

第16表　第７ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第30図　1	10B-35,2	剥離痕ある剥片	メノウ	1.42	2.74	0.59	2.45	
	10B-35,3	剥片	メノウ	1.64	2.84	0.73	2.65	
	10B-35,4	砕片	メノウ	1.81	1.92	0.34	1.03	
	10B-45,4	礫	安山岩	3.72	2.53	1.57	11.73	
	10B-45,5	礫	安山岩	4.12	1.93	1.25	10.99	
	10B-45,6	礫	安山岩	1.77	1.02	0.69	1.14	
	10B-45,7	礫	安山岩	3.24	1.69	2.14	13.28	10B-45,8と接合
	10B-45,8	礫	安山岩	4.09	2.64	1.44	16.50	10B-45,7と接合
	10B-45,9	礫	安山岩	1.35	1.16	0.89	0.99	
	10B-45,10	剥片	メノウ	3.81	3.38	0.77	5.54	

第17表　第７ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
安山岩	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	5
	−	−	−	−	−	−	−	−	−	50.0%	50.0%
砂岩	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
	−	−	−	−	−	−	−	−	−	10.0%	10.0%
メノウ	−	−	−	1	2	1	−	−	−	−	4
	−	−	−	10.0%	20.0%	10.0%	−	−	−	−	40.0%
計	−	−	−	1	2	1	−	−	−	6	10
	−	−	−	10.0%	20.0%	10.0%	−	−	−	60.0%	100.0%

第８ブロック（第31～33図，第18・19表，図版５・50）

調査区の西側，標高23.5mの台地の斜面部に位置する。

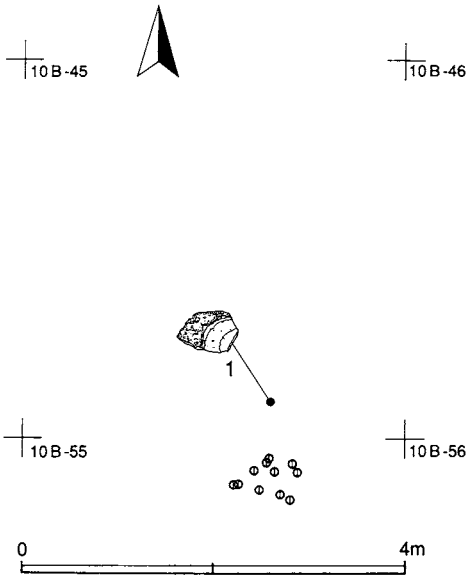
石器は長径1.2m，短径0.8mに分布する。

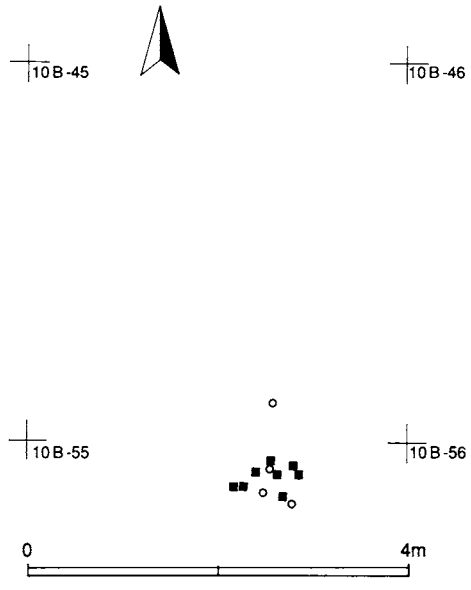
出土した石器は剥片１点で，残りは礫が11点の総計12点である。砂岩を主体とする礫群である。

ブロックを構成する石器の石材は安山岩，砂岩である。

出土遺物

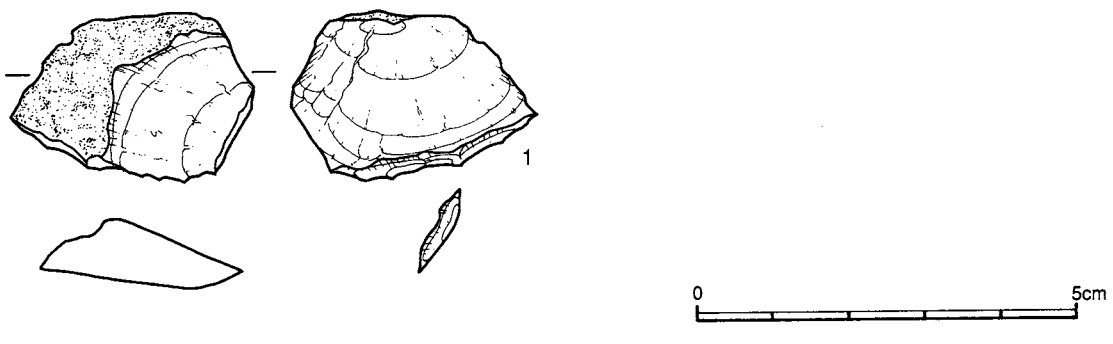
１は安山岩製の剥片である。





第32図　第８ブロック石材別分布図

第31図　第８ブロック器種別分布図



第33図　第８ブロック出土遺物

第18表　第８ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第33図　1	10B-45,2	剥片	安山岩	2.13	3.18	0.81	5.50	
	10B-55,1	礫	砂岩	2.25	1.99	0.32	1.89	
	10B-55,2	礫	安山岩	4.37	3.53	2.68	36.16	
	10B-55,3	礫	安山岩	0.94	0.59	0.27	0.18	
	10B-55,4	礫	砂岩	3.93	2.79	0.51	5.24	
	10B-55,5	礫	安山岩	4.66	4.12	2.31	44.36	
	10B-55,6	礫	砂岩	3.31	2.38	0.67	4.71	
	10B-55,7	礫	砂岩	3.27	3.11	0.67	6.86	
	10B-55,8	礫	砂岩	1.41	1.13	0.44	0.71	

	10B-55,9	礫	砂岩	3.60	2.44	1.36	6.77	
	10B-55,10	礫	砂岩	3.04	2.26	0.57	4.63	
	10B-55,11	礫	砂岩	2.27	2.11	0.62	3.33	

第19表　第８ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
安山岩	−	−	−	−	1	−	−	−	−	3	4
	−	−	−	−	8.3%	−	−	−	−	25.0%	33.3%
砂岩	−	−	−	−	−	−	−	−	−	8	8
	−	−	−	−	−	−	−	−	−	66.7%	66.7%
計	−	−	−	−	1	−	−	−	−	11	12
	−	−	−	−	8.3%	−	−	−	−	91.7%	100.0%

第９ブロック（第34～37図，第20・21表，図版５・50）

調査区の西側，標高23.5mの台地の斜面部に位置する。

石器は長径3.4m，短径2.2mに分布する。

出土した石器はナイフ形石器，剥片，砕片，剥片利用石核，礫で総計22点である。

ブロックを構成する石器の石材は安山岩，メノウである。

出土遺物

１はメノウ製のナイフ形石器である。縦長剥片の２側縁に調整を施した左刃のもので，右側縁上部の加工は器体中央の稜からである。２はメノウ製のナイフ形石器である。剥片の基部及び右側縁上部に調整を施したものである。３はメノウ製のナイフ形石器である。剥片の右側縁に調整を施したものである。４はメノウ製のナイフ形石器である。剥片の右側縁下半部及び左側縁上部に調整を施したものである。５はメノウ製の剥片である。自然面を大きく残す。６はメノウ製の剥片利用石核である。

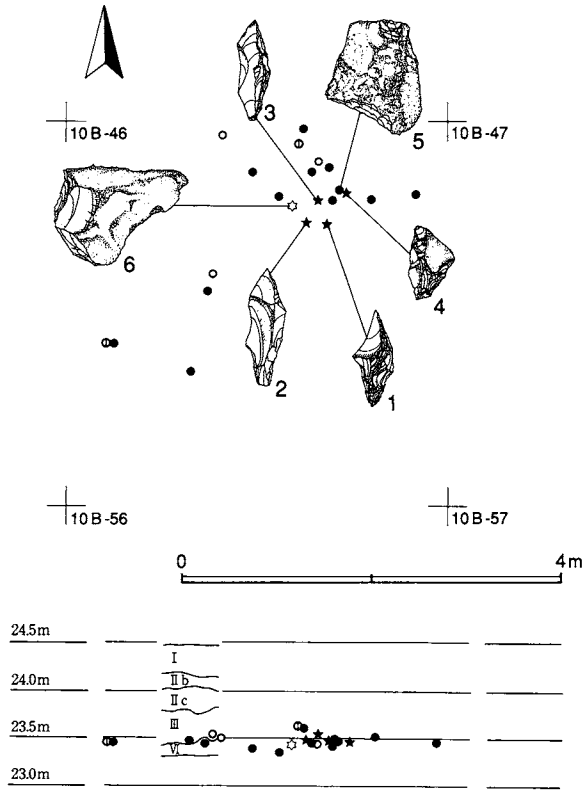
第20表　第９ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第36図　1	10B-46,12	ナイフ形石器	メノウ	4.93	2.17	1.16	7.44	
第36図　2	10B-46,10	ナイフ形石器	メノウ	6.03	1.99	0.84	9.28	
第36図　3	10B-46,11	ナイフ形石器	メノウ	5.07	1.74	0.92	6.76	
第36図　4	10B-46,15	ナイフ形石器	メノウ	3.81	2.33	0.88	6.11	
第37図　5	10B-46,14	剥片	メノウ	5.78	5.03	1.99	55.34	
第37図　6	10B-46,9	剥片利用石核	メノウ	5.27	7.28	3.71	77.50	
	10B-46,1	砕片	安山岩	1.75	1.94	0.63	1.91	
	10B-46,2	剥片	安山岩	2.83	3.42	0.63	6.52	
	10B-46,3	剥片	メノウ	2.33	1.81	0.29	1.27	
	10B-46,4a	礫	安山岩	4.06	3.88	2.48	39.88	
	10B-46,4b	剥片	メノウ	1.48	3.21	0.64	2.25	
	10B-46,5	礫	安山岩	3.12	2.21	1.68	11.46	
	10B-46,6	砕片	メノウ	1.51	1.77	0.39	0.72	
	10B-46,7	剥片	安山岩	1.71	2.83	0.59	2.07	
	10B-46,8	剥片	安山岩	2.53	2.91	0.73	3.86	

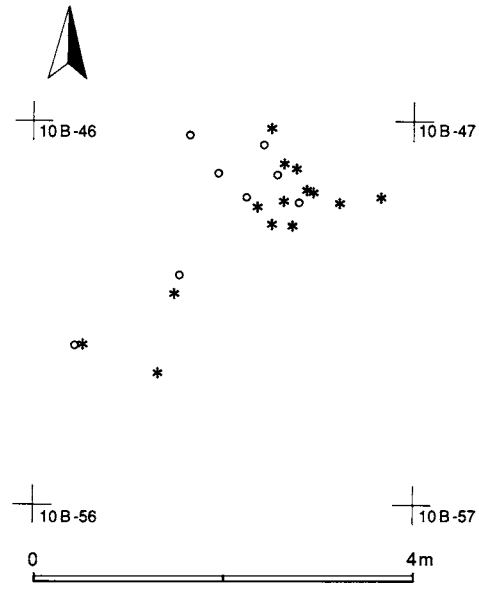
	10B-46,13	剥片	メノウ	1.76	1.83	0.41	1.54	
	10B-46,16	剥片	メノウ	2.62	2.24	0.52	3.56	
	10B-46,17	剥片	メノウ	3.48	3.66	1.23	15.78	
	10B-46,18	砕片	安山岩	0.98	1.52	0.13	0.31	
	10B-46,19	剥片	メノウ	3.10	4.46	1.19	19.75	
	10B-46,20	剥片	メノウ	3.04	2.56	0.70	4.63	
	10B-46,21	剥片	安山岩	4.18	3.15	1.30	14.12	

第21表　第９ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
安山岩	−	−	−	−	4	2	−	−	−	2	8
	−	−	−	−	18.2%	9.1%	−	−	−	9.1%	36.4%
メノウ	4	−	−	−	8	1	1	−	−	0	14
	18.2%	−	−	−	36.4%	4.5%	4.5%	−	−	0.0%	63.6%
計	4	−	−	−	12	3	1	−	−	2	22
	18.2%	−	−	−	54.6%	13.6%	4.5%	−	−	9.1%	100.0%



第34図　第９ブロック器種別分布図



第35図　第９ブロック石材別分布図

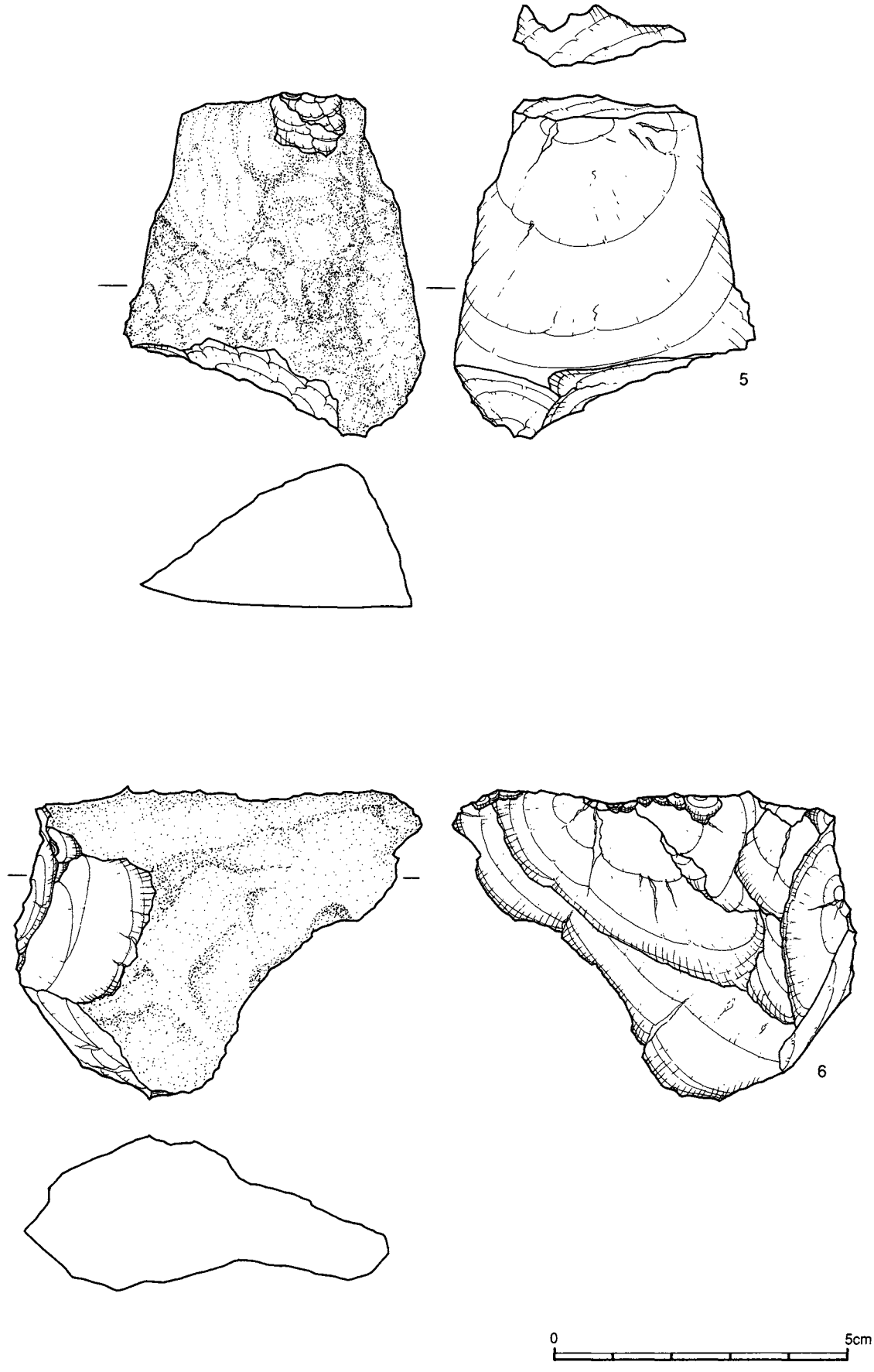
第10ブロック（第38～41図，第22・23表，図版５・51）

調査区の西側，標高23.5～24mの台地の斜面部に位置する。

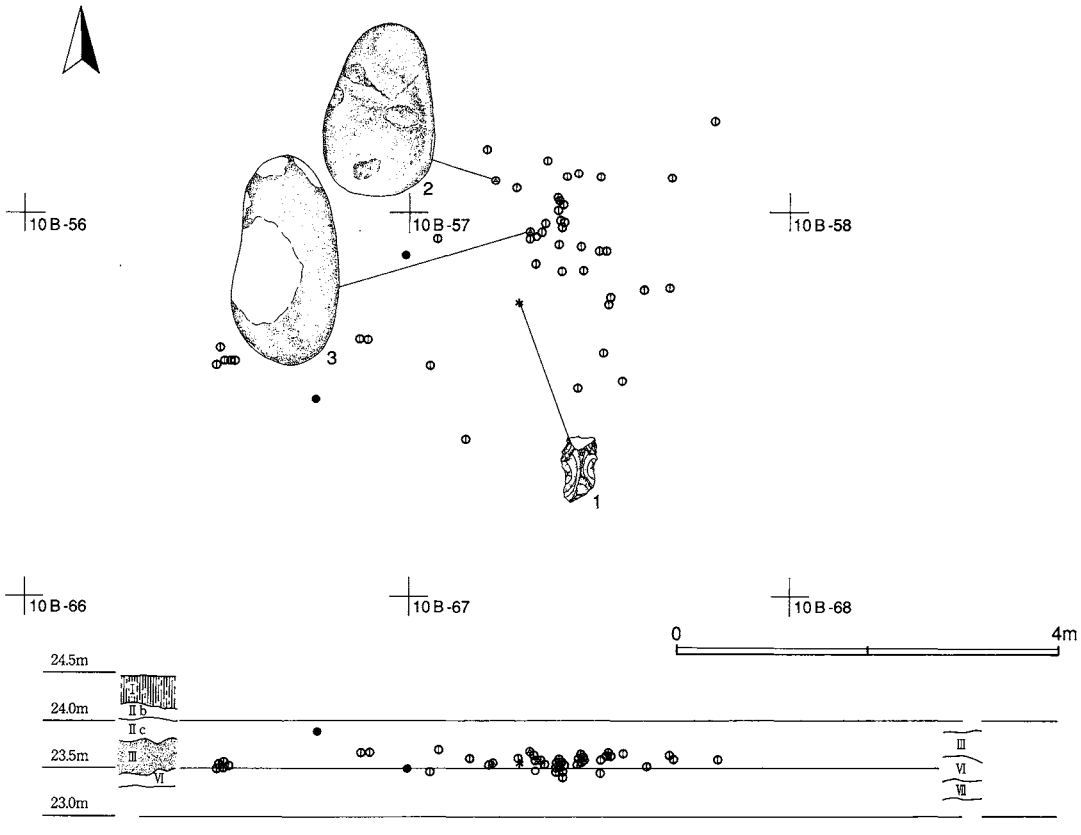
石器は長径6.4m，短径３mに分布する。

出土した石器は角錐状石器，剥片，砕片，礫で総計51点である。礫を主体とする礫群である。

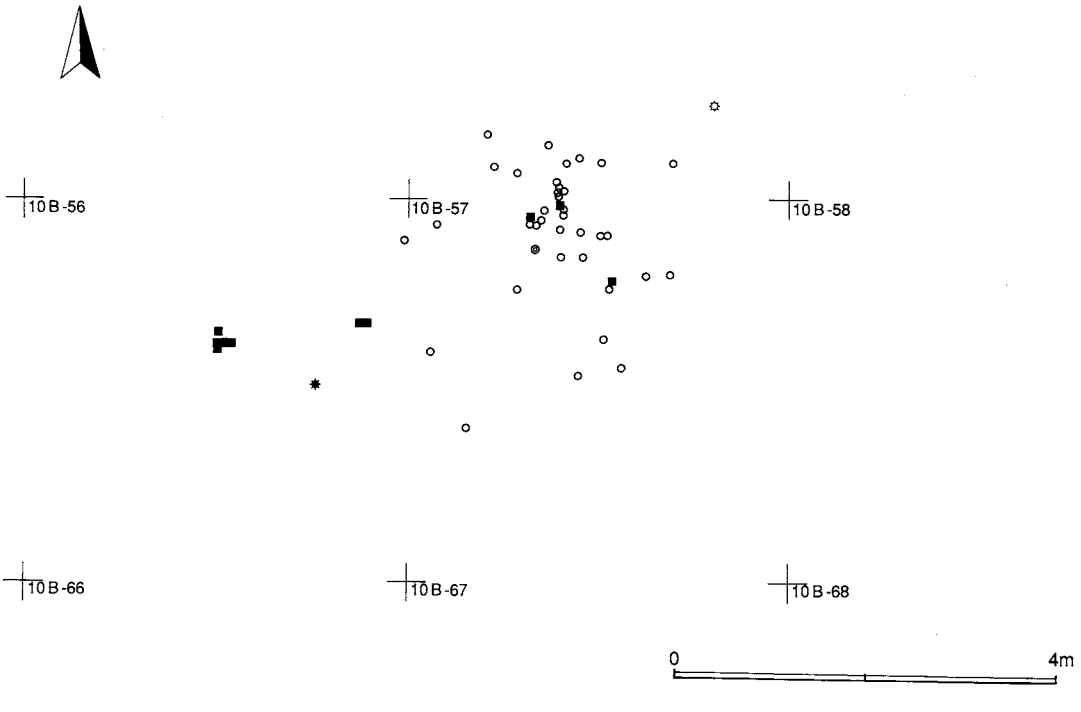
第36図　第９ブロック出土遺物（１）



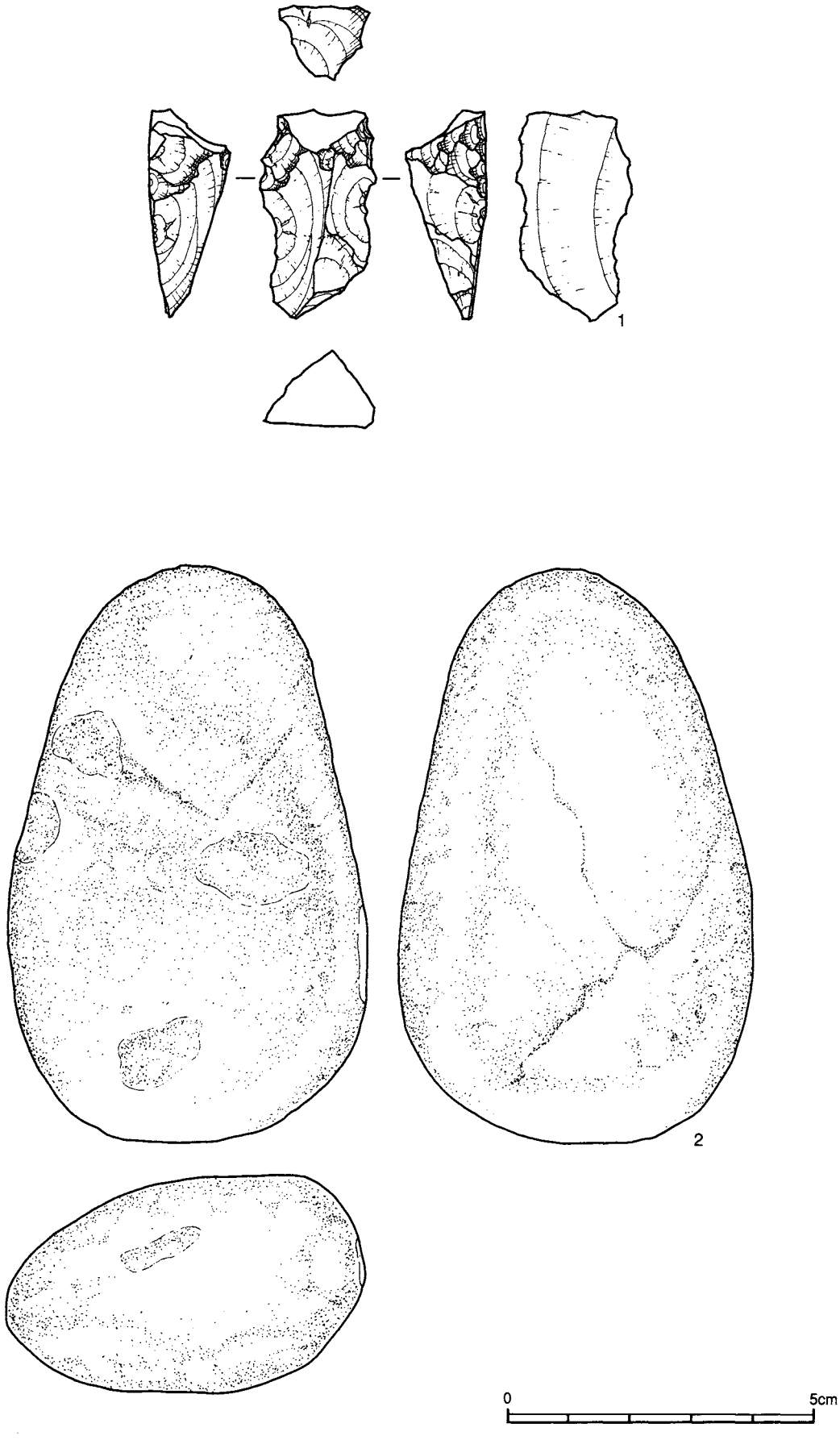
第37図　第９ブロック出土遺物（２）



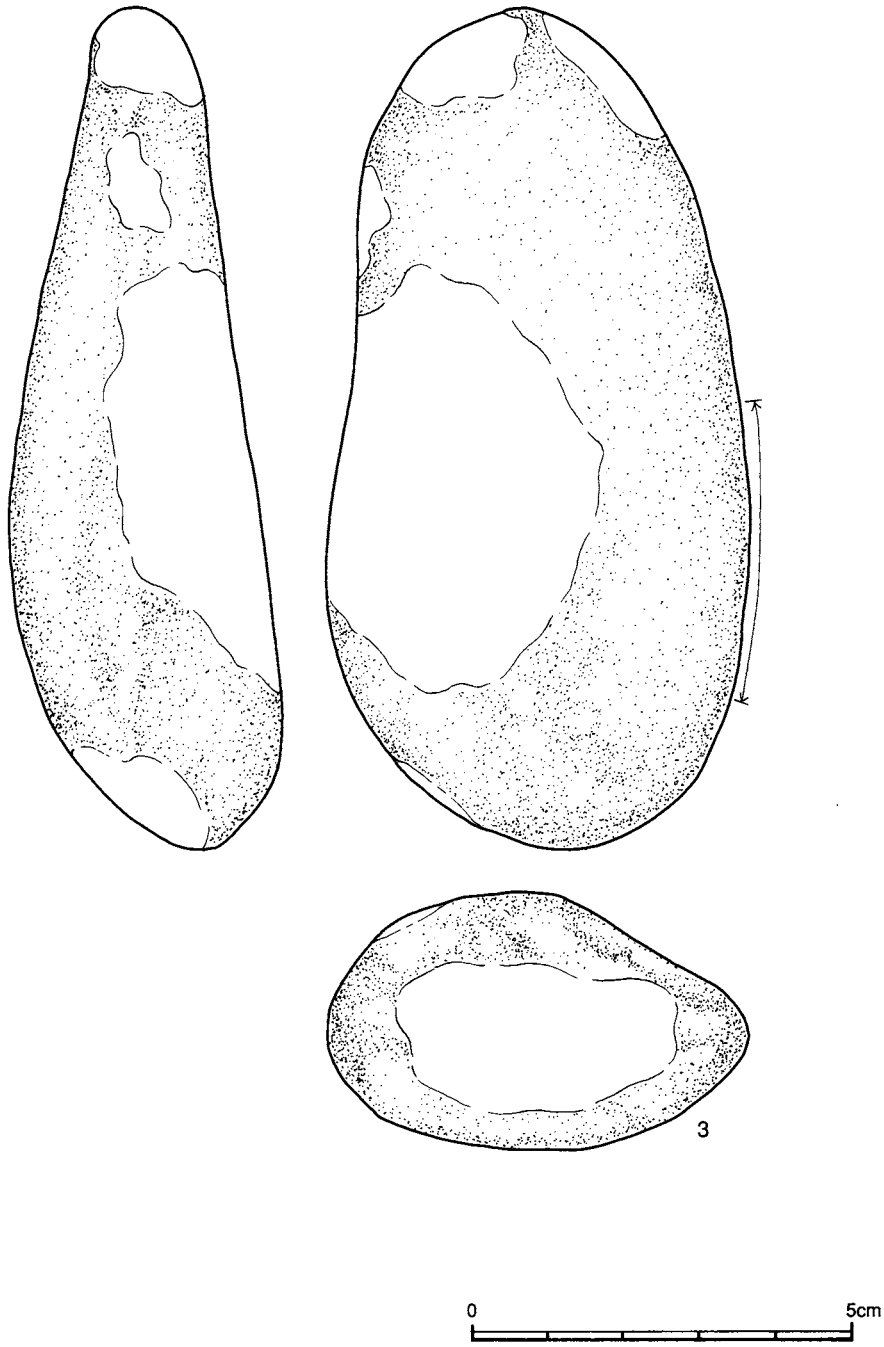
第38図　第10ブロック器種別分布図



第39図　第10ブロック石材別分布図



第40図　第10ブロック出土遺物（1）



第41図　第10ブロック出土遺物（2）

ブロックを構成する石器の石材は安山岩，砂岩，礫岩，凝灰岩，石英斑岩である。

出土遺物

1は安山岩製の角錐状石器である。2は安山岩製の敲石である。3は安山岩製の敲石である。

第22表　第10ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第40図　1	10B-57,15	角錐状石器	安山岩	3.40	1.86	1.21	7.46	
第40図　2	10B-47,8	敲石	安山岩	9.27	5.86	3.70	256.40	
第41図　3	10B-57,2a	敲石	砂岩	11.12	5.49	3.44	262.91	

	10B-47,1	礫	礫岩	8.60	6.93	2.76	240.68	
	10B-47,2	礫	安山岩	5.66	2.83	2.26	43.54	
	10B-47,3	礫	安山岩	2.69	1.84	1.41	6.88	10B-47,4･6･7･10･12･13･14、10B-57,3と接合
	10B-47,4	礫	安山岩	4.59	2.31	1.66	19.93	10B-47,3･6･7･10･12･13･14、10B-57,3と接合
	10B-47,5	礫	安山岩	2.38	2.06	1.38	5.92	
	10B-47,6	礫	安山岩	5.07	4.02	4.36	82.56	10B-47,3･4･7･10･12･13･14、10B-57,3と接合
	10B-47,7	礫	安山岩	2.14	2.13	2.33	10.26	10B-47,3･4･6･10･12･13･14、10B-57,3と接合
	10B-47,9	礫	安山岩	6.63	5.09	2.86	67.76	
	10B-47,10	礫	安山岩	5.59	3.82	4.54	107.95	10B-47,3･4･6･7･12･13･14、10B-57,3と接合
	10B-47,11	礫	安山岩	2.20	1.22	0.20	0.80	
	10B-47,12	礫	安山岩	4.81	4.08	2.28	46.30	10B-47,3･4･6･7･10･13･14、10B-57,3と接合
	10B-47,13	礫	安山岩	4.72	3.53	2.93	37.90	10B-47,3･4･6･7･10･12･14、10B-57,3と接合
	10B-47,14	礫	安山岩	3.28	1.90	1.23	7.00	10B-47,3･4･6･7･10･12･13、10B-57,3と接合
	10B-56,1a	礫	砂岩	4.45	2.69	2.54	36.36	10B-56,1b･2･4b･6と接合
	10B-56,1b	礫	砂岩	5.52	4.75	2.16	46.62	10B-56,1a･2･4b･6と接合
	10B-56,1c	礫	砂岩	2.36	1.70	1.39	5.49	
	10B-56,2	礫	砂岩	5.35	2.50	2.57	44.32	10B-56,1a･1b･4b･6と接合
	10B-56,3	剥片	凝灰岩	3.04	1.56	0.64	2.20	
	10B-56,4a	礫	砂岩	1.18	1.11	1.13	1.80	
	10B-56,4b	礫	砂岩	1.10	0.72	0.40	0.45	10B-56,1a･1b･2･6と接合
	10B-56,5	剥片	安山岩	2.27	5.02	0.73	6.60	
	10B-56,6	礫	砂岩	2.22	1.20	1.01	3.29	10B-56,1a･1b･2･4bと接合
	10B-57,1	礫	安山岩	3.92	2.17	2.04	11.20	
	10B-57,2b	礫	安山岩	2.77	2.03	1.32	7.39	
	10B-57,3	礫	安山岩	4.28	2.64	2.91	27.33	10B-47,3･4･6･7･10･12･13･14と接合
	10B-57,4	礫	砂岩	6.97	4.68	3.14	120.25	
	10B-57,5	礫	安山岩	6.34	3.82	3.09	61.53	
	10B-57,6	礫	安山岩	5.63	2.97	2.34	59.22	10B-57,11･24と接合
	10B-57,7a	礫	安山岩	2.80	2.66	1.46	8.90	10B-57,12a･b･c･16と接合
	10B-57,7b	礫	安山岩	1.27	1.15	0.65	0.71	
	10B-57,9	礫	安山岩	2.77	1.73	1.61	6.33	
	10B-57,10	礫	安山岩	1.75	1.40	0.85	2.64	10B-57,18と接合
	10B-57,11	礫	安山岩	5.47	2.42	2.56	31.73	10B-57,6･24と接合
	10B-57,12a･b･c	礫	安山岩	3.10	3.04	2.28	19.80	10B-57,7a･16と接合
	10B-57,13	礫	安山岩	3.12	1.84	1.27	7.64	
	10B-57,14	礫	石英斑岩	6.10	4.86	2.09	61.67	
	10B-57,16	礫	安山岩	2.26	2.04	1.97	9.52	10B-57,7a･12a･b･cと接合
	10B-57,17	礫	安山岩	1.13	1.08	0.77	0.88	
	10B-57,18	礫	安山岩	1.79	1.61	0.92	2.20	10B-57,10と接合
	10B-57,19	礫	安山岩	2.82	2.50	1.40	9.20	10B-57,20と接合
	10B-57,20	礫	安山岩	2.44	2.25	1.62	9.87	10B-57,19と接合
	10B-57,21	礫	砂岩	1.33	1.09	0.94	1.69	
	10B-57,22	礫	安山岩	6.01	4.25	4.97	156.50	
	10B-57,23	砕片	安山岩	1.35	1.54	0.27	0.55	

	10B-57,24	礫	安山岩	2.22	1.84	1.28	5.60	10B-57,6・11と接合
	10B-57,25	礫	安山岩	1.31	0.73	1.07	0.95	

第23表　第10ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
安山岩	−	1	−	−	1	1	−	−	1	32	36
	−	2.0%	−	−	2.0%	2.0%	−	−	2.0%	65.3%	73.5%
砂岩	−	−	−	−	−	−	−	−	1	9	10
	−	−	−	−	−	−	−	−	2.0%	18.4%	20.4%
礫岩	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2.0%	2.0%
凝灰岩	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1
	−	−	−	−	2.0%	−	−	−	−	−	2.0%
石英斑岩	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2.0%	2.0%
計	−	1	−	−	2	1	−	−	2	43	49
	−	2.0%	−	−	4.1%	2.0%	−	−	4.1%	87.7%	100.0%

第11ブロック（第42～47図，第24・25表，図版５・52～54）

調査区の西側，標高24～24.5mの台地の斜面部に位置する。

石器は長径7.2m，短径5.6mに分布する。

出土した石器はナイフ形石器，剥離痕ある剥片，剥片，砕片，剥片利用石核，石核，礫で総計141点である。第４ブロックに次いで数量の多いブロックである。また，第９ブロック同様，ナイフ形石器の出土量が顕著である。ここでは第２文化層（Ⅳ層下部の石器群）として扱ったが，ナイフ形石器の形態から異なる文化層とした方がよいかもしれない。

ブロックを構成する石器の石材は安山岩，珪質頁岩，チャートである。

出土遺物

１は珪質頁岩製のナイフ形石器である。縦長剥片の２側縁に細かい調整を施した右刃のものである。２は珪質頁岩製のナイフ形石器である。横長剥片の２側縁に細かい調整を施した右刃のものである。３は珪質頁岩製のナイフ形石器である。縦長剥片の正面左側縁及び裏面左側縁に細かい調整を施したものである。４は安山岩製のナイフ形石器である。縦長剥片の２側縁に細かい調整を施した右刃のものである。５は安山岩製のナイフ形石器である。縦長剥片の左側縁の一部に細かい調整，右側縁に大きな調整を施した左刃のものである。６は珪質頁岩製のナイフ形石器である。縦長剥片の２側縁に細かい調整を施した右刃のものである。７は安山岩製のナイフ形石器である。横長剥片の左側縁に大きな調整を施した右刃のものである。８は安山岩製のナイフ形石器である。縦長剥片の左側縁に細かい調整を施した右刃のものである。正面に自然面を残す。９は安山岩製のナイフ形石器である。縦長剥片の２側縁の下半部に細かい調整を施したものである。10は珪質頁岩製のナイフ形石器である。横長剥片の両側縁に細かい調整を施したもので先端の刃部はほぼ水平である。11は安山岩製のナイフ形石器である。下半部の大半を欠損するため詳細は不明である。12は珪質頁岩製のナイフ形石器である。下半部の大半を欠損するため詳細は不明であるが，縦長剥片を素材として２側縁に細かい調整を施した右刃のものであろうか。13は安山岩製のナイフ形石器である。先端部を欠損するが，剥片の右側縁に細かい調整を施したものである。14は安山岩製の剥離痕ある

剥片である。縦長剥片の右側縁下部に調整がみられる。下端部の一部を欠損する。15は珪質頁岩製の剥片である。16は安山岩製の石核である。比較的厚い楕円礫を素材とし，上下両方向の剥離痕がみられる。17は安山岩製の石核である。上端に打面を作出し，縦長の剥片を剥離している。また，右側面には横長剥片を作出した剥離痕が残る。片面に自然面を大きく残す。18は安山岩製の石核である。比較的厚い楕円礫を素材とし，全体的に求心的な剥離痕がみられる。一部に自然面を残す。19は安山岩製の石核である。扁平な礫の一端から加撃を行い，縦長の剥片を作出している。20は安山岩製の剥片利用石核である。比較的厚めの剥片を素材とし，上下両方向の剥離痕がみられる。21は安山岩製の剥片利用石核である。剥片を素材とし，ほぼ全面に上下両方向の剥離痕がみられる。

第24表　第11ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第44図 1	10C-51,29	ナイフ形石器	珪質頁岩	3.47	1.22	0.32	1.34	
第44図 2	10C-51,38	ナイフ形石器	珪質頁岩	3.29	1.14	0.41	1.60	
第44図 3	10C-61,15	ナイフ形石器	珪質頁岩	2.93	1.03	0.47	1.58	
第44図 4	10C-61,8	ナイフ形石器	安山岩	3.07	1.09	0.37	1.22	
第44図 5	10C-61,56	ナイフ形石器	安山岩	4.36	1.80	0.70	4.54	
第44図 6	10C-61,29	ナイフ形石器	珪質頁岩	3.92	0.91	0.45	1.69	
第44図 7	10C-61,46	ナイフ形石器	安山岩	3.03	1.70	0.76	3.53	
第44図 8	10C-51,48	ナイフ形石器	安山岩	2.56	1.20	0.32	0.92	
第44図 9	10C-61,51	ナイフ形石器	安山岩	3.03	1.12	0.50	1.50	
第45図 10	10C-51,41	ナイフ形石器	珪質頁岩	3.13	1.26	0.19	1.29	
第45図 11	10C-61,40	ナイフ形石器	安山岩	1.86	1.02	0.53	0.80	
第45図 12	10C-51,37	ナイフ形石器	珪質頁岩	2.05	1.11	0.32	0.83	
第45図 13	10C-51,53	ナイフ形石器	安山岩	2.67	1.56	0.64	2.83	
第45図 14	10C-51,15	剥離痕ある剥片	安山岩	3.56	1.93	0.73	5.23	
第45図 15	10C-61,13	剥片	珪質頁岩	4.13	2.33	0.59	5.53	
第45図 16	10C-61,7	石核	安山岩	4.40	3.67	2.16	46.22	
第46図 17	10C-60,1	石核	安山岩	4.24	3.75	2.37	41.25	
第46図 18	10C-51,34	石核	安山岩	6.29	5.40	3.24	104.31	10C-51,46と接合
第47図 19	10C-62,3	石核	安山岩	7.01	4.79	3.43	112.15	
第47図 20	10C-61,62	剥片利用石核	安山岩	4.52	4.52	1.64	37.43	
第47図 21	10C-61,36	剥片利用石核	安山岩	4.13	3.15	1.74	25.81	
	10C-50,1	砕片	安山岩	1.96	2.43	0.36	1.44	
	10C-51,1	剥片	安山岩	2.47	1.52	0.57	3.01	
	10C-51,2	剥片	安山岩	4.94	3.33	0.94	11.04	
	10C-51,3	砕片	安山岩	1.97	1.96	0.37	1.17	
	10C-51,4	剥片	安山岩	3.50	4.19	1.30	16.43	
	10C-51,5	砕片	安山岩	1.92	1.17	0.13	0.38	
	10C-51,6･42	剥片	安山岩	3.84	5.82	1.14	29.16	
	10C-51,7	剥片	安山岩	2.74	2.21	0.42	2.23	
	10C-51,8	砕片	安山岩	1.50	1.53	0.46	1.36	
	10C-51,9	砕片	安山岩	1.14	2.15	0.34	0.91	

	10C-51,10	砕片	安山岩	1.16	1.93	0.20	0.36	
	10C-51,11	砕片	安山岩	0.99	1.16	0.17	0.22	
	10C-51,12	剥片	安山岩	1.70	2.89	0.57	3.93	
	10C-51,13	剥片	安山岩	2.88	3.46	0.66	6.52	
	10C-51,14	砕片	安山岩	1.70	2.41	0.39	1.31	
	10C-51,16	剥片	安山岩	2.16	3.05	0.60	4.59	
	10C-51,17	砕片	安山岩	0.75	0.88	0.19	0.16	
	10C-51,18	剥片	安山岩	3.13	2.89	0.94	9.00	
	10C-51,19	砕片	安山岩	0.87	1.23	0.88	0.22	
	10C-51,20	剥片	安山岩	2.36	2.79	0.53	3.32	
	10C-51,21	剥片	安山岩	2.17	2.32	0.43	2.60	
	10C-51,22	砕片	安山岩	1.22	1.43	0.33	0.59	
	10C-51,23	砕片	安山岩	1.83	1.13	0.19	0.52	
	10C-51,24	剥片	安山岩	3.84	2.22	0.68	4.70	
	10C-51,25	砕片	チャート	1.51	1.52	0.93	2.44	
	10C-51,26	剥片	安山岩	2.63	1.53	0.27	1.11	
	10C-51,27	砕片	安山岩	1.20	1.43	0.43	0.65	
	10C-51,28	砕片	安山岩	1.56	1.39	0.15	0.46	
	10C-51,30	砕片	チャート	0.92	1.27	0.23	0.32	
	10C-51,31	砕片	安山岩	1.92	1.35	0.38	0.98	
	10C-51,32	剥片	安山岩	2.43	3.02	0.74	5.49	
	10C-51,33	砕片	安山岩	1.97	1.73	0.29	1.17	
	10C-51,35	剥片	安山岩	1.61	1.84	0.22	0.71	
	10C-51,36	剥片	安山岩	2.13	1.62	0.24	0.81	
	10C-51,39	砕片	安山岩	1.53	1.47	0.48	0.74	
	10C-51,40	砕片	安山岩	1.31	1.62	0.60	1.59	
	10C-51,43	剥片	安山岩	2.70	1.52	0.30	1.48	
	10C-51,44	砕片	安山岩	1.16	1.02	0.31	0.35	
	10C-51,45	砕片	安山岩	1.51	1.12	0.32	0.53	
	10C-51,46	剥片	安山岩	4.43	4.13	1.05	24.38	10C-51,34と接合
	10C-51,47	剥片	安山岩	3.77	2.23	0.76	4.80	
	10C-51,49	剥片	安山岩	2.29	2.41	0.42	2.78	
	10C-51,50	砕片	安山岩	1.14	0.98	0.13	0.18	
	10C-51,51	剥片	安山岩	3.35	1.77	0.62	3.78	
	10C-51,52	砕片	安山岩	0.96	0.63	0.28	0.17	
	10C-51,54	剥片	安山岩	2.06	2.21	0.29	1.06	
	10C-51,55	剥片	安山岩	2.96	4.96	1.12	20.99	
	10C-51,56	剥片	安山岩	1.92	2.04	0.40	1.60	
	10C-52,1	剥片	安山岩	3.96	2.80	0.52	6.66	
	10C-52,2	剥片	安山岩	4.76	2.83	0.72	8.16	
	10C-52,3	剥片	珪質頁岩	4.67	5.12	0.68	11.25	
	10C-60,2	剥片	安山岩	2.06	2.03	0.60	2.16	
	10C-60,3	剥片	安山岩	3.57	3.20	0.68	8.69	

	10C-60,4	剥片	安山岩	5.55	1.73	0.73	10.74	
	10C-60,5	剥片	安山岩	5.00	3.38	2.16	46.17	
	10C-60,6	砕片	安山岩	1.69	1.01	0.46	0.47	
	10C-60,7	剥片	安山岩	3.02	3.18	0.52	6.35	
	10C-60,8	剥片	安山岩	4.54	1.52	1.05	6.65	
	10C-60,9	砕片	安山岩	1.30	1.51	0.51	1.22	
	10C-61,1	剥片	安山岩	2.79	2.56	0.44	3.17	
	10C-61,2	剥片	安山岩	3.01	2.60	0.80	5.92	
	10C-61,3	剥片	安山岩	2.77	0.93	0.52	1.14	
	10C-61,4	剥片	安山岩	3.79	3.33	0.53	7.60	
	10C-61,5	砕片	安山岩	1.20	0.81	0.14	0.22	
	10C-61,6	剥片	安山岩	3.11	3.17	0.90	7.26	
	10C-61,9	剥片	安山岩	1.27	2.94	0.33	1.35	
	10C-61,10	砕片	安山岩	2.51	1.10	0.29	0.78	
	10C-61,11	砕片	安山岩	2.03	1.07	0.30	0.63	
	10C-61,12	剥片	安山岩	3.33	4.02	1.01	12.56	
	10C-61,14	砕片	安山岩	1.00	0.89	0.12	0.15	
	10C-61,16	剥片	安山岩	2.27	3.43	0.57	5.11	
	10C-61,17	剥片	安山岩	3.03	5.68	1.03	16.32	
	10C-61,18	剥片	安山岩	2.22	3.27	0.78	5.98	
	10C-61,19	砕片	安山岩	2.08	1.55	0.34	1.15	
	10C-61,20	剥片	安山岩	2.76	1.39	0.87	2.99	
	10C-61,21	剥片	安山岩	1.77	3.13	0.99	4.21	
	10C-61,22	砕片	安山岩	1.31	1.20	0.22	0.45	
	10C-61,23	剥片	安山岩	3.23	2.49	0.88	8.54	
	10C-61,24	剥片	安山岩	2.47	1.80	0.40	1.43	
	10C-61,25	剥片	安山岩	2.67	2.37	0.57	4.42	
	10C-61,26	剥片	安山岩	2.13	2.83	0.52	2.58	
	10C-61,27	剥片	安山岩	5.18	1.82	0.67	7.80	
	10C-61,28	砕片	安山岩	2.61	1.02	0.60	1.19	
	10C-61,30	剥片	安山岩	2.84	1.33	0.67	1.85	
	10C-61,31	剥片	安山岩	3.54	1.52	0.65	3.34	
	10C-61,32	砕片	安山岩	4.42	3.31	1.09	13.71	
	10C-61,33	砕片	安山岩	2.03	0.63	0.40	0.62	
	10C-61,34	砕片	安山岩	0.96	1.47	0.16	0.31	
	10C-61,35	剥片	安山岩	2.03	2.54	0.52	1.95	
	10C-61,37	剥片	安山岩	2.39	3.32	0.66	5.55	
	10C-61,38a	剥片	安山岩	2.49	2.82	0.64	4.31	
	10C-61,38b	剥片	安山岩	1.96	2.18	0.41	1.51	
	10C-61,39	砕片	安山岩	1.41	1.37	0.34	0.67	
	10C-61,41	剥片	安山岩	3.63	5.03	0.94	13.38	
	10C-61,42	砕片	安山岩	1.06	1.43	0.34	0.81	
	10C-61,43	砕片	安山岩	0.42	0.76	0.12	0.05	

	10C-61,44	砕片	安山岩	1.70	1.23	0.21	0.55	
	10C-61,45	砕片	安山岩	1.08	1.01	0.32	0.37	
	10C-61,47	剥片	安山岩	3.09	4.29	1.23	17.53	
	10C-61,48	砕片	安山岩	1.96	1.31	0.23	0.54	
	10C-61,49	剥片	安山岩	4.12	4.31	0.83	13.66	
	10C-61,50	砕片	安山岩	1.61	1.43	0.32	0.83	
	10C-61,52	剥片	安山岩	3.23	2.99	0.39	3.50	
	10C-61,53	砕片	安山岩	1.83	1.16	0.22	0.52	
	10C-61,54	砕片	安山岩	1.49	0.82	0.22	0.34	
	10C-61,57	砕片	安山岩	1.92	1.70	0.30	1.17	
	10C-61,58	砕片	安山岩	1.53	2.19	0.33	1.22	
	10C-61,59	砕片	安山岩	1.37	0.60	0.17	0.17	
	10C-61,60	剥片	安山岩	1.50	1.77	0.88	2.36	
	10C-61,61	砕片	安山岩	1.41	0.95	0.22	0.32	
	10C-61,63	剥片	安山岩	1.54	2.51	0.54	1.88	
	10C-61,64	剥片	安山岩	3.23	3.12	1.12	12.08	
	10C-61,65	砕片	安山岩	1.38	1.48	0.33	0.82	
	10C-61,66	砕片	安山岩	0.67	0.58	0.17	0.09	
	10C-61,68	砕片	安山岩	1.57	0.82	0.44	0.52	
	10C-61,69	砕片	安山岩	1.42	2.46	0.37	1.32	
	10C-62,1	剥片	安山岩	4.31	3.40	1.07	19.65	
	10C-62,2	砕片	珪質頁岩	1.63	1.62	0.11	0.29	
	10C-62,3	砕片	安山岩	7.01	4.79	3.43	112.15	
	10C-62,4	礫	安山岩	4.43	2.20	1.50	14.23	

第25表　第11ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
安山岩	7	−	−	1	63	52	2	4	−	1	130
	5.0%	−	−	0.7%	44.7%	36.9%	1.4%	2.8%	−	0.7%	92.2%
珪質頁岩	6	−	−	−	2	1	−	−	−	−	9
	4.3%	−	−	−	1.4%	0.7%	−	−	−	−	6.4%
チャート	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	2
	−	−	−	−	−	1.4%	−	−	−	−	1.4%
計	13	−	−	1	65	55	2	4	−	1	141
	9.2%	−	−	0.7%	46.1%	39.0%	1.4%	2.8%	−	0.7%	100.0%

第12ブロック（第48・49図，第26・27表，図版5・54）

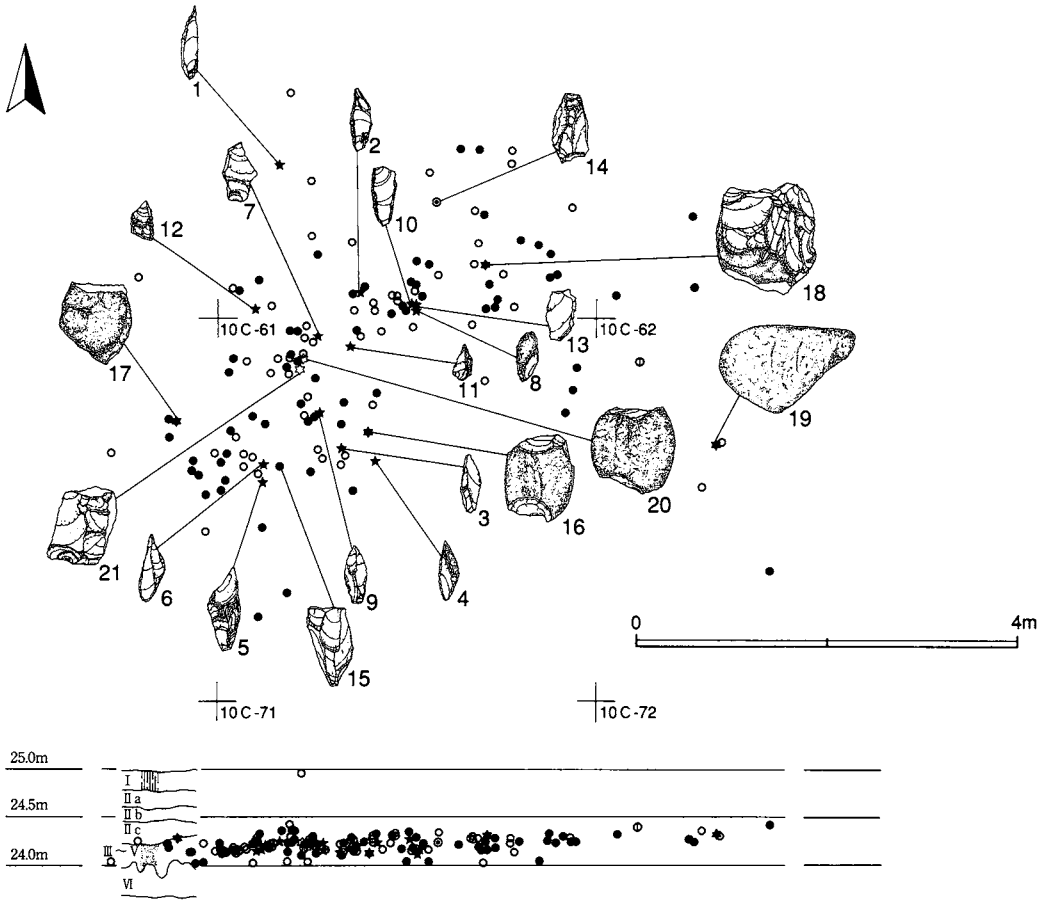
調査区の西側，標高24.5mの台地の斜面部に位置する。

出土した石器は剥片，砕片で総計2点である。

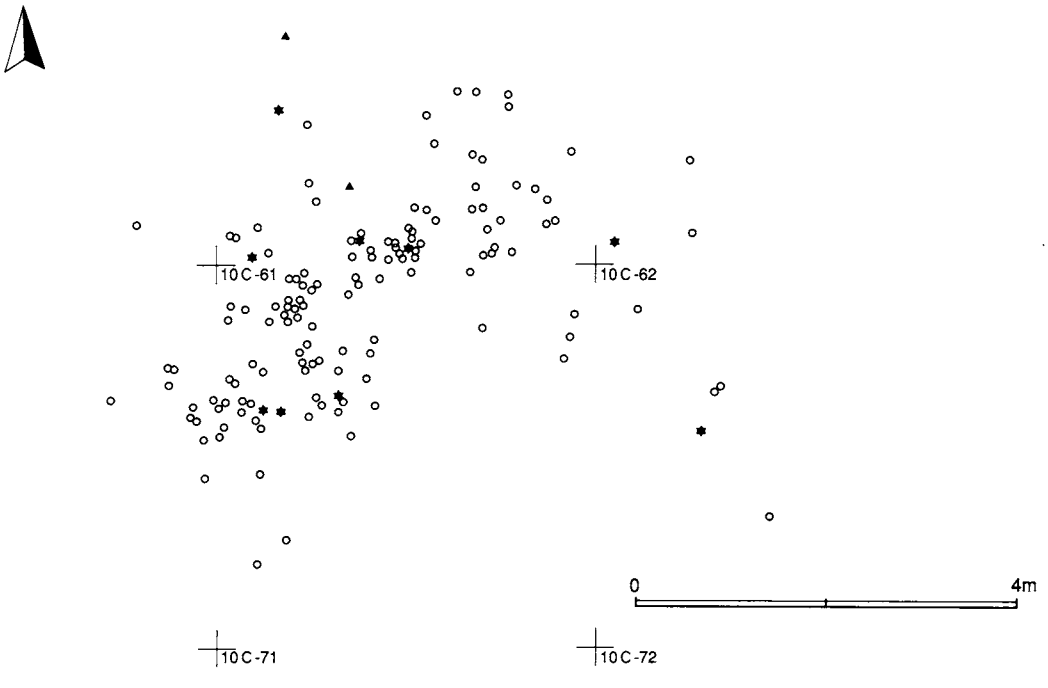
ブロックを構成する石器の石材は黒曜石，安山岩である。

出土遺物

1は黒曜石製の剥片である。

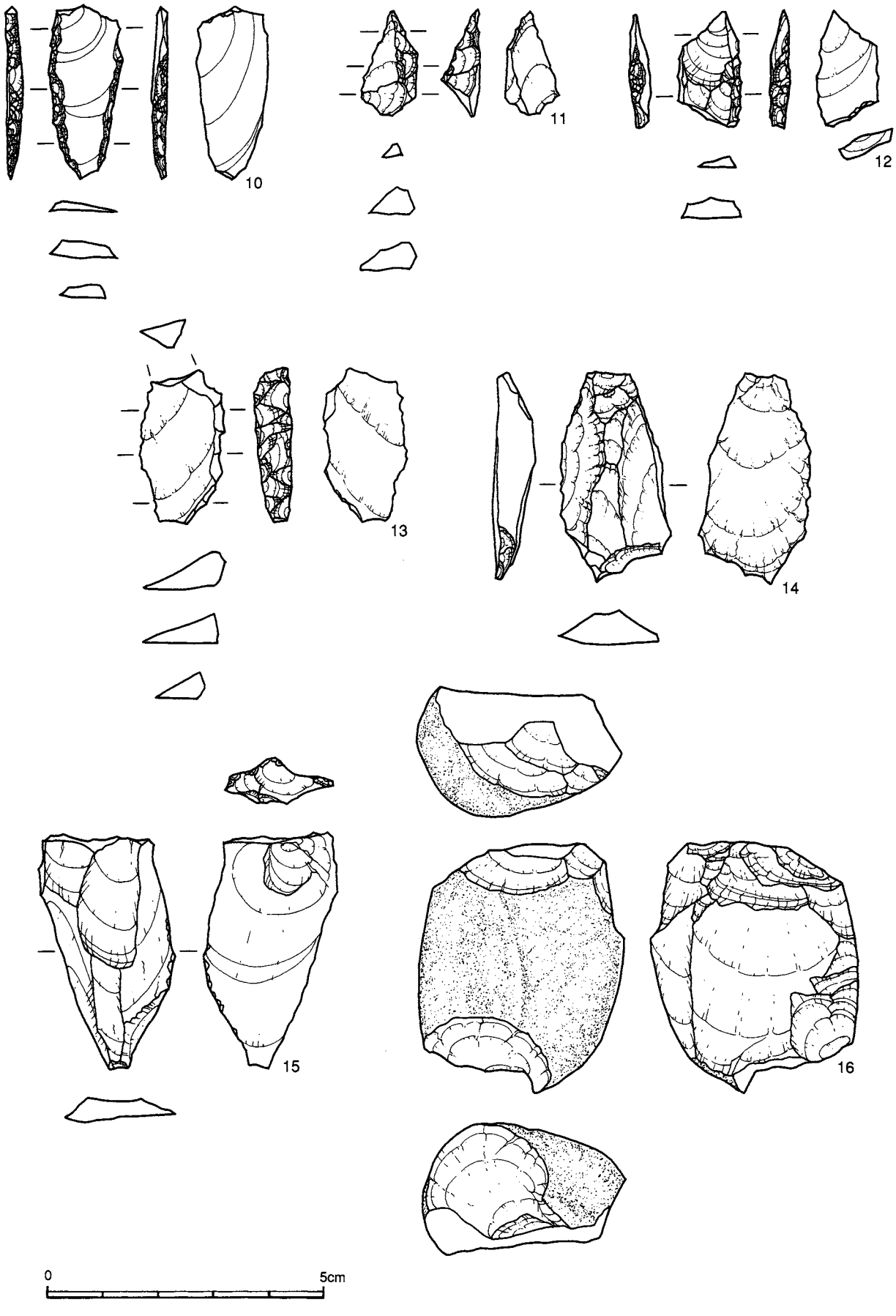


第42図　第11ブロック器種別分布図

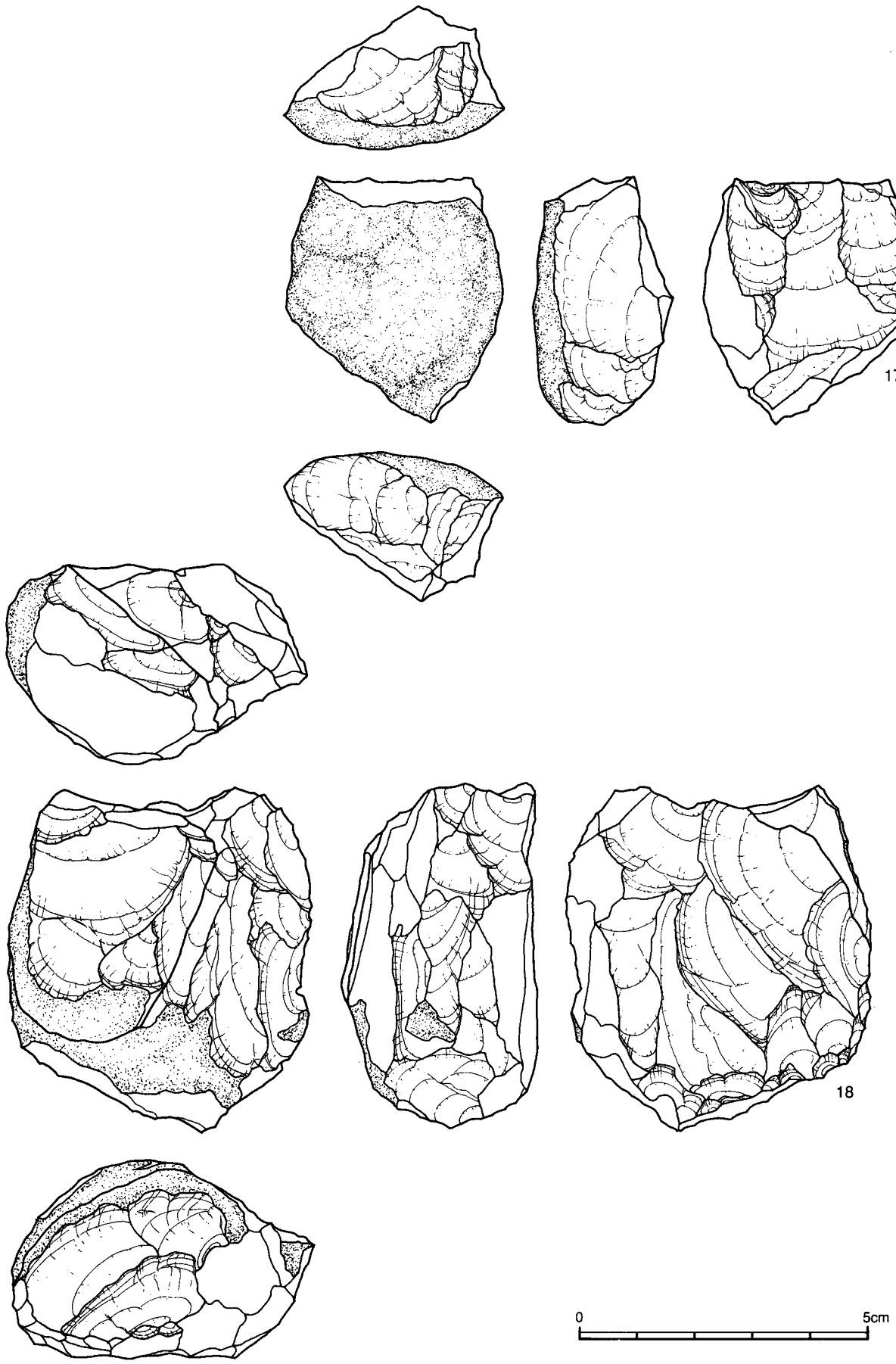


第43図　第11ブロック石材別分布図

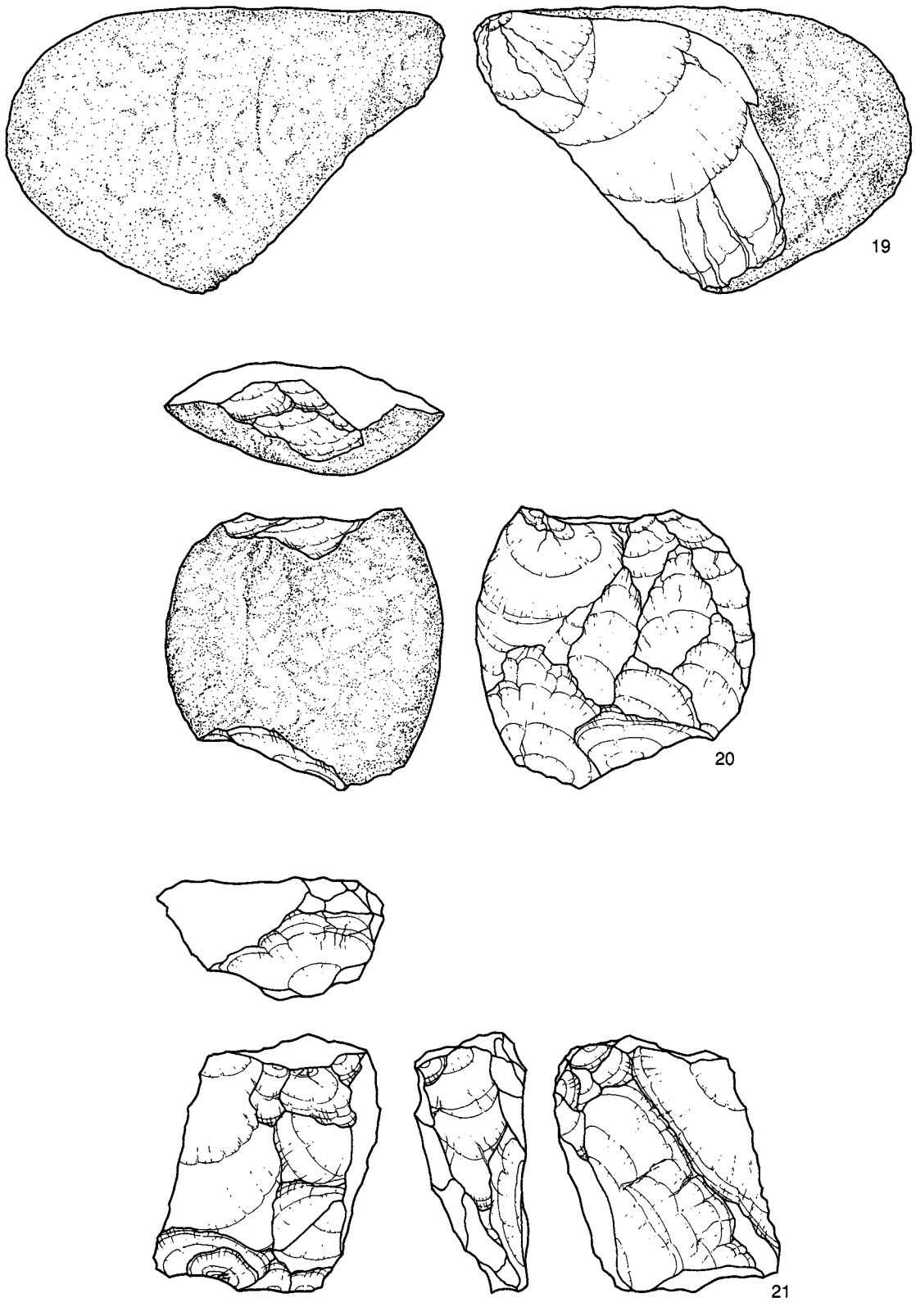
第44図　第11ブロック出土遺物（1）



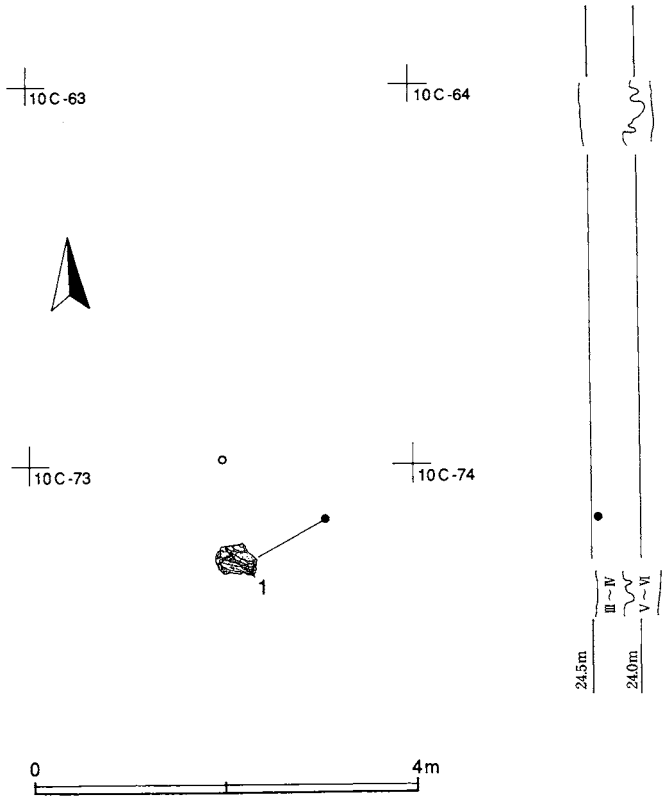
第45図　第11ブロック出土遺物（２）



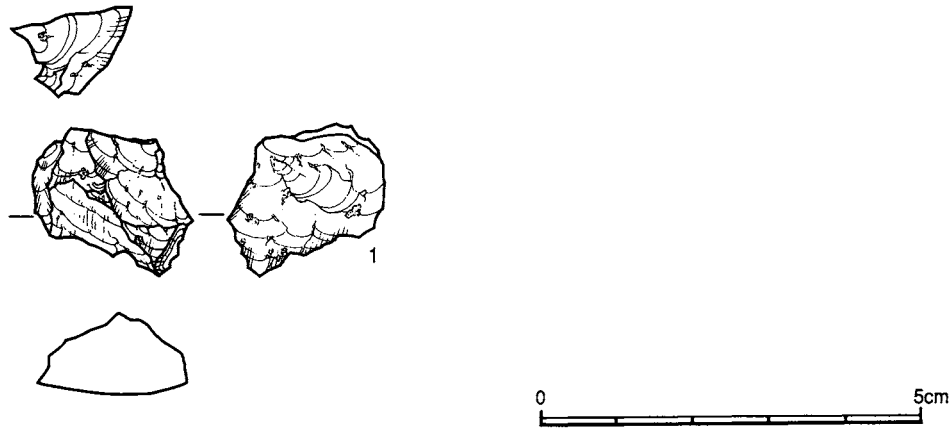
第46図　第11ブロック出土遺物（３）



第47図　第11ブロック出土遺物（４）



第48図　第12ブロック器種別分布図



第49図　第12ブロック出土遺物

第26表　第12ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第49図　1	10C-73,1	剥片	黒曜石	2.28	1.83	1.18	3.55	
	10C-63,1	砕片	安山岩	2.28	1.64	0.43	1.54	

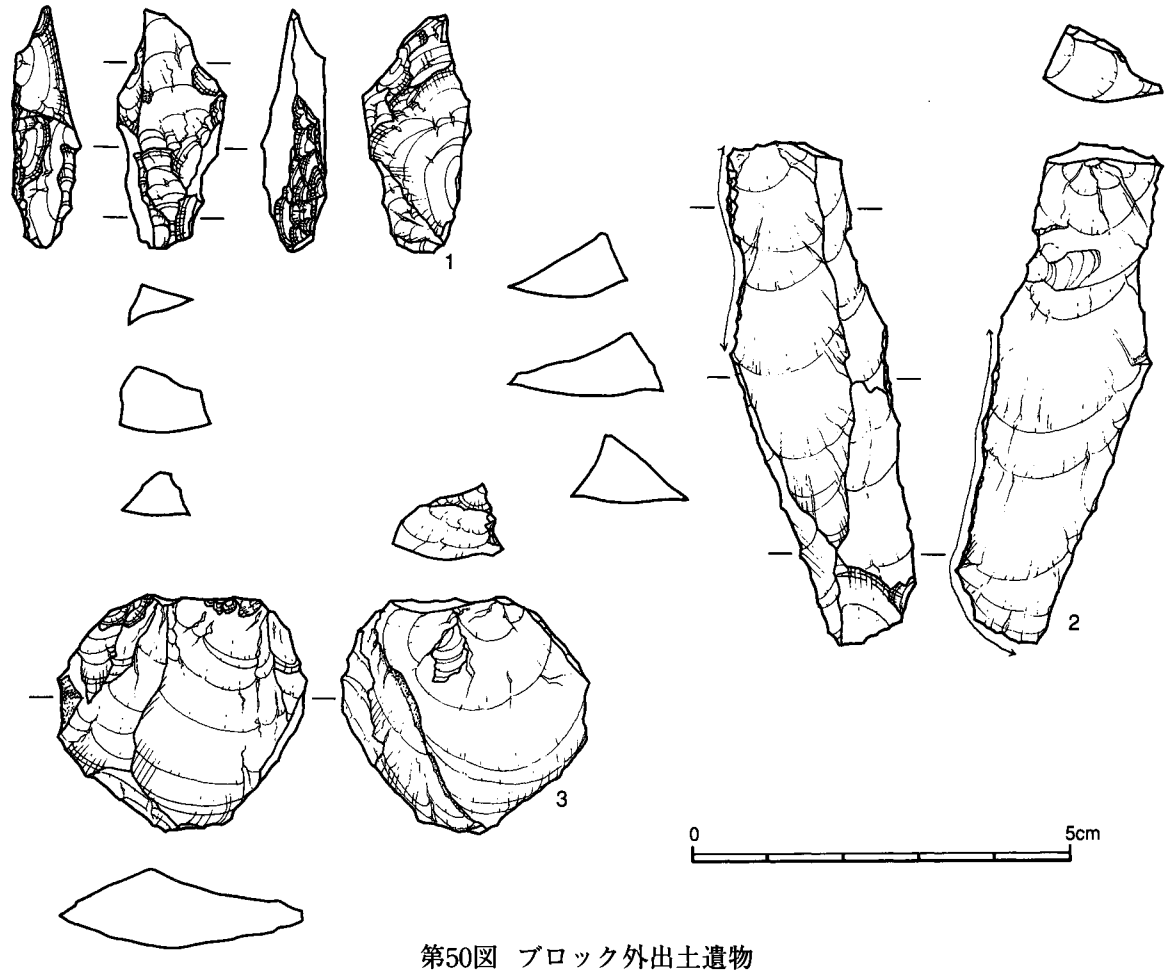
第4節　ブロック外の遺物（第50図，第28表）

1は黒曜石のナイフ形石器である。黒曜石の特徴などから第2文化層に属するものと思われる。2は珪質頁岩の剥離痕ある剥片である。正面左上半部の縁辺と裏面左下半部の縁辺から下端にかけて微細な剥離

第27表　第12ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻器	剥離痕ある剥片	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	敲石	礫	計
黒曜石	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1
	−	−	−	−	50.0%	−	−	−	−	−	50.0%
安山岩	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1
	−	−	−	−	−	50.0%	−	−	−	−	50.0%
計	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	2
	−	−	−	−	50.0%	50.0%	−	−	−	−	100.0%

痕がみられる。石材はチャートの可能性もある。重機による確認調査時のものではあるが，Ⅸａ層の出土である。3はチャートの剥片である。この遺物も重機による確認調査時のものではあるが，Ⅸａ層の出土である。



第50図　ブロック外出土遺物

第28表　ブロック外石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第50図　1	表採0009	ナイフ形石器	黒曜石	3.06	1.41	0.69	3.07	
第50図　2	4C-26,1	剥離痕ある剥片	珪質頁岩	6.67	2.07	0.83	11.16	ｸﾗﾑｼｪﾙによる出土、Ⅸa層
第50図　3	6E-56,1	剥片	チャート	3.03	3.11	1.02	9.02	ｸﾗﾑｼｪﾙによる出土、Ⅸa層

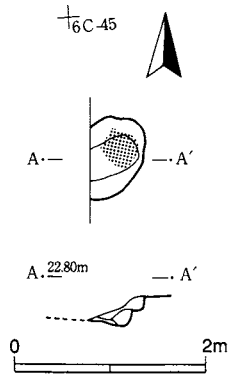
第３章　縄文時代

第１節　遺構とその出土遺物

１．炉穴

SK038（第51図，図版６）

調査区中央部北西端の6C－45グリッドに位置する。下層本調査で焼礫の広がりを調査中に見つかった遺構である。遺物の出土は見られないが，遺構の状態から縄文時代早期の炉穴と判断した。確認面からの深さは，52～62cmである。プラン西側は下層調査時に失われたため長さは不明であるが，約90cm遺存している。上端の幅は75cmである。底面は高低差があるが，幅は35cmである。焼土面が底面の東端から壁の立ち上がりにかけて見られる。火を受けた様相が著しく，ロームが赤色化及び硬化している。焼土面は不整形で，径はおよそ35cmである。この焼土面から見た本跡の長軸方向は北東―南西方向になると思われる。覆土は３層に分かれ，上から１層は斑状のローム粒と焼土粒を若干含む暗褐色土，２層は若干のローム塊とやや多量の焼土粒を含む暗褐色土，３層はローム粒・塊主体の黄褐色土である。遺物の出土は無かった。なお，本跡と焼礫の直接的な関係は不明である。



第51図　SK038

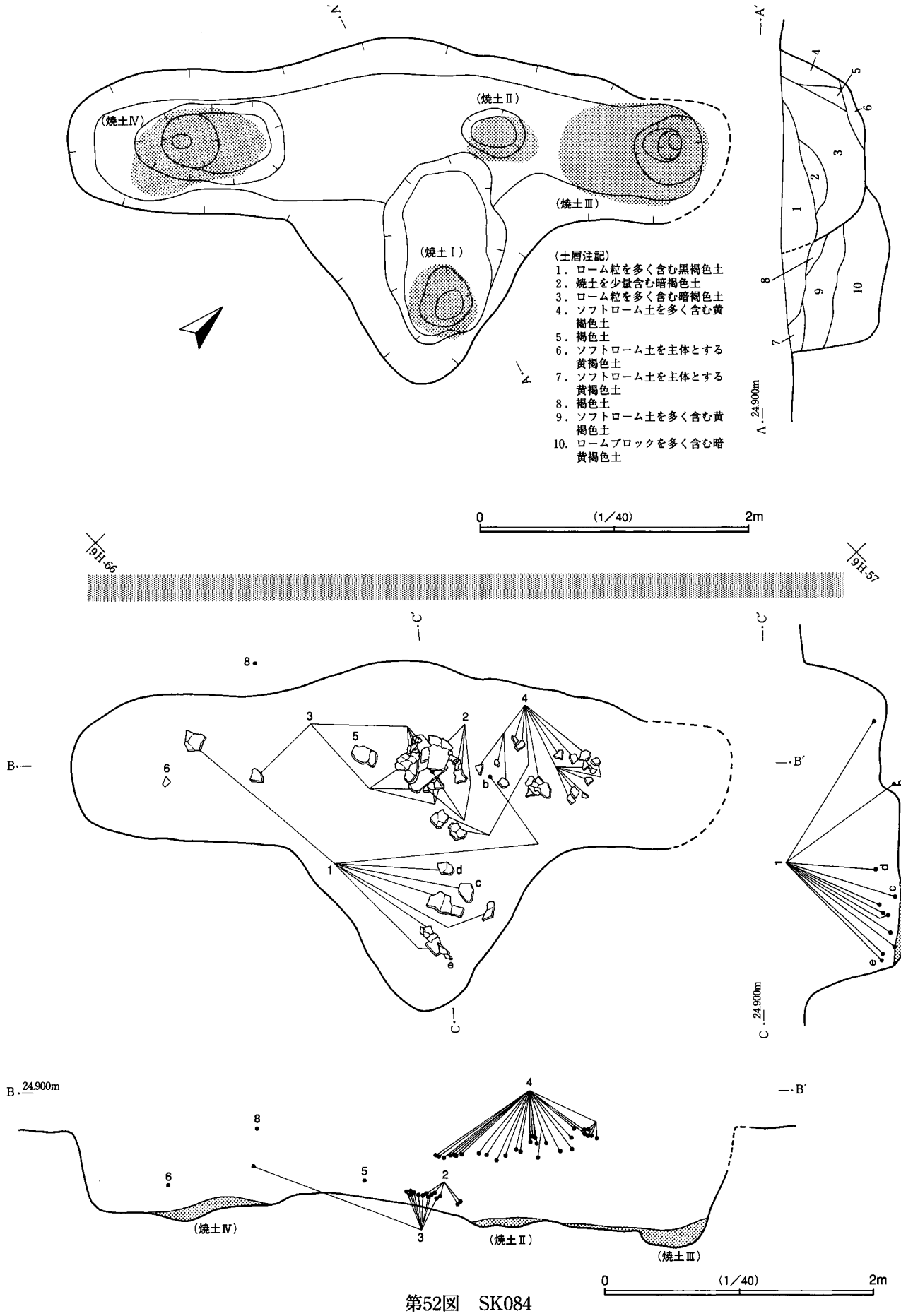
SK084（第52～55図，図版６・57・58・60）

調査区東部，9H－56グリッド付近に位置する。遺物と形状から，縄文時代早期後半の炉穴と判断される。掘込み面からの深さは，60cm～80cm程度である。焼土面の数から，少なくとも４基が重複していると考えられる。新旧関係については判然としない部分が多く，築造工程の復元はなしえなかった。だが，断面図に記載した切り合いの状況から，「焼土Ⅰ(旧)→焼土Ⅱ(新)」という関係が想定される。遺物の出土状況についてみると（第52図），１は焼土Ⅰに伴うと考えられることから，最初に廃棄された土器と言える。つづいて出土標高から，３→２→４という廃棄順序を読みとれるが，２と３は重なって出土しており，ほぼ同時の廃棄と考えられる。さらに，４の出土状況は，焼土Ⅱのほぼ直上で東から西に向かって緩く傾斜しており，焼土Ⅱに伴う炉穴がかなり埋まった段階の廃棄と考えられる上に，焼土Ⅲに伴う炉穴を切っていることが明白となる。さらに，３の破片の一部が焼土Ⅳ近くにあり，焼土Ⅳに伴う炉穴も切っていることが想定される。その他の土器片については，５は２及び３と同時期程度，６は焼土Ⅳに伴うと思われる。以上のことから，次のような焼土形成の順序及び伴出土器を示すことができる。

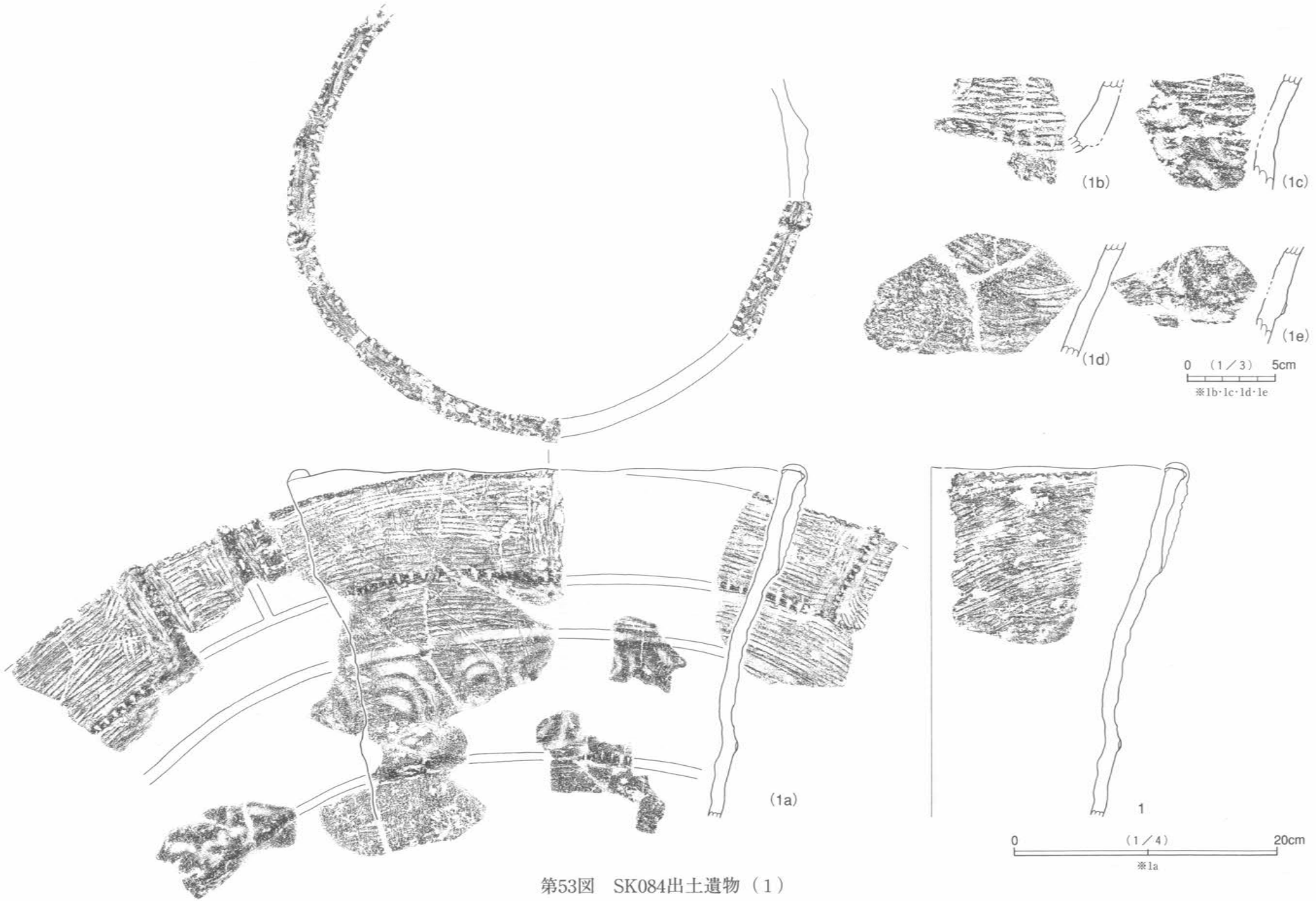
焼土Ⅰ(１)→焼土Ⅲ・焼土Ⅳ(６)→焼土Ⅱ(２・３・５→４)　※（　）内の数字は伴出土器を示す。

土器は７個体分出土している。本報告では小片を除き全個体を図示した（第53～55図）。なお，混入したと思われる７をのぞき，早期後半の茅山下層式後半期に位置づけられる資料である。この時期の土器資料は，一括性に乏しいものが多く，文様等の組成が判然としない。本遺構事例は，各個体の廃棄時間差が極めて短いと考えられ，茅山上層式との関係を解明するための貴重な事例である。

第53図１は，約30%程度の遺存であるが，底部付近を除いて，全体の器形を復元することができた。最大径が約39.2cmである。胎土に繊維を多く含み，全体が被熱して器表面の赤化及び荒れが著しく，遺存状


(焼土Ⅳ)
(焼土Ⅱ)
(焼土Ⅲ)
(焼土Ⅰ)
(土層注記)
1．ローム粒を多く含む黒褐色土
2．焼土を少量含む暗褐色土
3．ローム粒を多く含む暗褐色土
4．ソフトローム土を多く含む黄褐色土
5．褐色土
6．ソフトローム土を主体とする黄褐色土
7．ソフトローム土を主体とする黄褐色土
8．褐色土
9．ソフトローム土を多く含む黄褐色土
10．ロームブロックを多く含む暗黄褐色土
A.24.900m
0 (1/40) 2m
9H-66
9H-57
B.24.900m
C.24.900m
(焼土Ⅰ)
(焼土Ⅱ)
(焼土Ⅲ)
(焼土Ⅳ)

第52図　SK084



第53図　SK084出土遺物（1）

況は極めて悪い。小突起を有する平縁で，単純な深鉢形を呈する。内外面共に横位方向を基調とする条痕が顕著であるが，胴下半部では条痕は徐々に消え，ナデ調整になる傾向がある。文様は口唇部に小突起が認められ，二本一組みのものと一本のものがそれぞれ一対ずつあり，そのまま垂下する刻みを持つ比較的扁平な隆線となる。これは，口縁部を横位区画する同様の隆線まで垂下する。胴部中央には上部が凹線，下部を隆線で横位区画される施文帯がある。この中には浅い凹線による曲線状文様が認められるが，残存部の少なさと器表面の荒れにより，全体の構成は不明である。

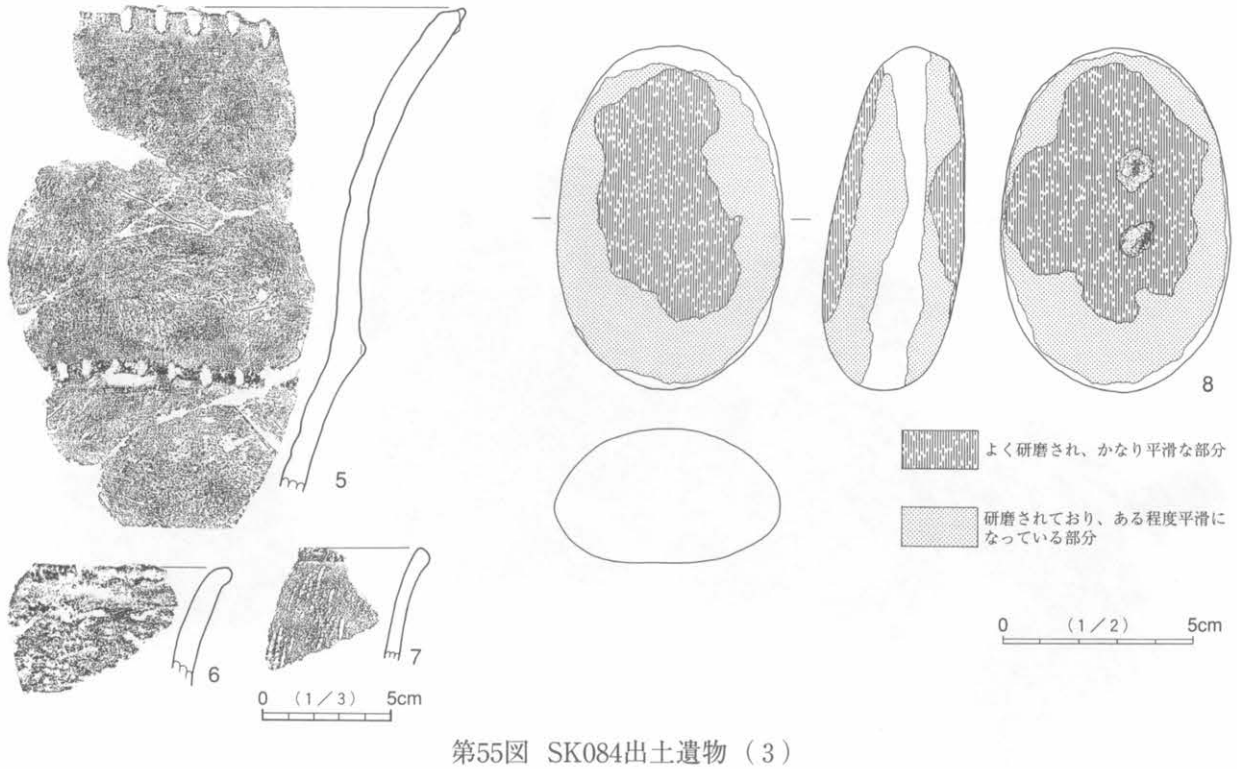
第54図２は，約50%が遺存しているが，底部付近は残存していなかった。最大径が約32cm，平縁で，口縁部近くでやや大きく開く砲弾形の器形である。胎土には繊維を含んでいるが，焼成は良好である。色調は，上半部の外面が黒褐色，内面が灰褐色であり，下半部の内外面が赤褐色である。この外面的特徴は，煮炊きの結果を示しているものであろう。器面には，内外面全面に横位方向を基調とする条痕が密に施され，口唇部にも横位の条痕が施されている。口縁の上部には，ほぼ一定の間隔（約35㎜）で貫通する円形刺突文（直径約７㎜）が施文されている。口縁部の下端は細隆線により横位区画されている。

第54図３は，遺存が約40%ほどであるが，底部付近を除き，全体の器形を復元し得た。上方から復元した円周を見るとゆるい径が30cm前後の楕円形をなすと考えられる。また，口縁はゆるい波状をなし，口縁上部で外側にやや大きく開き，胴上部にゆるい屈曲部をもつ深鉢である。焼成は良好であるものの，胎土には繊維が多く混入されており，全体的に脆くなっている。色調は上半部の外面が黒褐色，内面が灰褐色，下半部の外面が赤褐色，内面が黒褐色であり，２と同様に煮炊きの痕跡を良く残しているものと思われる。器面調整は，内外面共に横位・斜位の条痕が顕著である。口唇部の端部両側には，棒状工具による刻みが施文される。口縁の上部にはほぼ一定の間隔（約28㎜）で貫通する円形刺突文（直径約５㎜）がみられる。胴上部の屈曲部に棒状工具による縦位の刻みを密に施し，明確に上下を区画している。区画内には，指頭による弧状の「なぞり」が多段，連続的に施されることにより，浅い凹線による連弧状文様が描出されている。しかし，第54図１の胴下部区画内文様と同じく，文様として強調する意識は低いものと考えられる。

第55図４は，約30%ほどの遺存であるが，底部付近を除き，全体の器形を復元することができた。最大径が36.2cmほどで，４単位の小突起を有するゆるい波状口縁をなすと考えられる。胴下部に屈曲部をもち，上方に向かって大きく開く深鉢である。波頂部は肥厚し，その上面には浅い凹みを形成している。胴下部の屈曲部は隆帯状に肥厚しており，丸棒状状工具による刻みをやや間隔を開けながら施し，上下を明確に区画している。上部区画内には，幅15㎜ほどの先割れ状工具を用いた連続刺突文が，口縁の形状に沿うように波状で，数段にわたって施文されている。破損部が多く明確でないが，少なくとも２段目の刺突列に関しては，次のような施文の特徴が観察される。拓影図（第56図４）の正面，波頂部の左側は，器面に対して工具を立てるように施文を行うのに対し，右側は工具をかなり寝かすようにして施文を行っている。結果として，前者はやや深めに，後者はやや浅めの刺突となり，異なった施文効果が描出されている。なお，器面の調整には横位方向を基本とする条痕が密に施されるが，外面上部区画内はナデにより条痕を，不完全ながら磨り消している。胎土には繊維が多く含まれ，色調は明褐色である。

第55図５は口縁部破片のみの出土である。口縁部付近でやや大きく開く器形であり，口唇部は内削ぎ状に製作され，外端には丸棒状工具（径約５㎜）による刻みが施されている。胴上部に屈曲部があり，４と同様に肥厚し，ほぼ一定の間隔をもって丸棒状工具による刻みが施されている。内外面共に比較丁寧なナデ調整が施され，器面は平滑である。色調は内外面共に黒褐色である。胎土には繊維が多く混入されてい

第54図　SK084出土遺物（２）



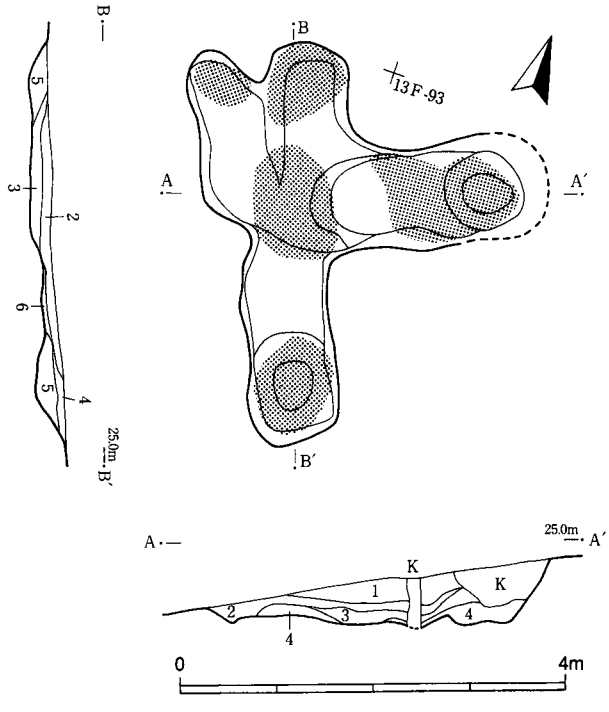
第55図　SK084出土遺物（３）

るが，比較的良好な焼成である。6は口縁部の小破片である。内削ぎ気味で丸棒状の口縁部形態をなし，先端部付近でやや外側へせり出している。器面は内外面共に擦痕調整であり，胎土には繊維を多く含んでいる。7はいわゆる撚糸文土器である。

第55図8は遺構外であるが，本遺構に隣接して検出された研磨痕のある磨石と敲石の兼用品である。質量は271.2g，流紋岩製である。

SK115（第56図，図版6）

調査区南部，13F－92・93グリッドに位置する。遺物の出土は見られないが，遺構の状況から縄文時代早期の炉穴と判断される。全体の形状及び火床面の数から，少なくとも4基は重複していると考えられる。基本的に隅丸長方形の炉穴を，長軸方向を変えながら改築していったと思われる。規模は，確認面で長さ1.8m～2.5m，幅0.7m～1m程度である。確認面からの深さは，10cm～60cm程度でかなり高低差のある底面である。なお，各炉穴の新旧関係については判然としない。覆土については6層に分層した。1層がローム粒を含む黒褐色土，2層がロームブロック，焼土粒・ブロック，炭化物を含む暗褐色土，3層が焼土粒・ブロックとやや多量のロームブロックを含む褐色土，4層が多量の焼土を含む赤褐色土，5層が焼土層，6層はローム主体の黄褐色土である。東側の一部は木根の攪乱を受けている。



第56図　SK115

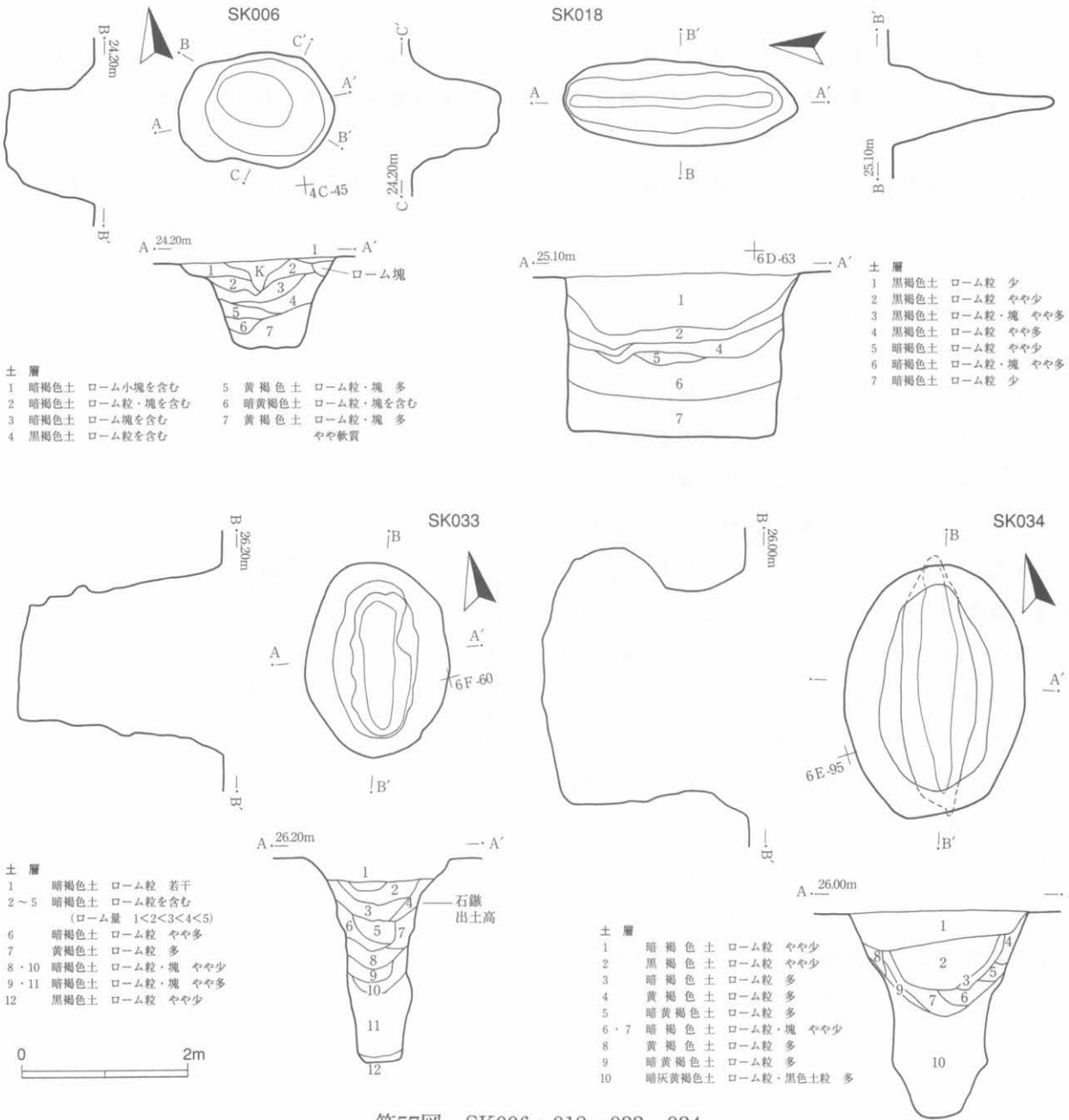
2．陥穴状土坑

SK006（第57図，図版7）

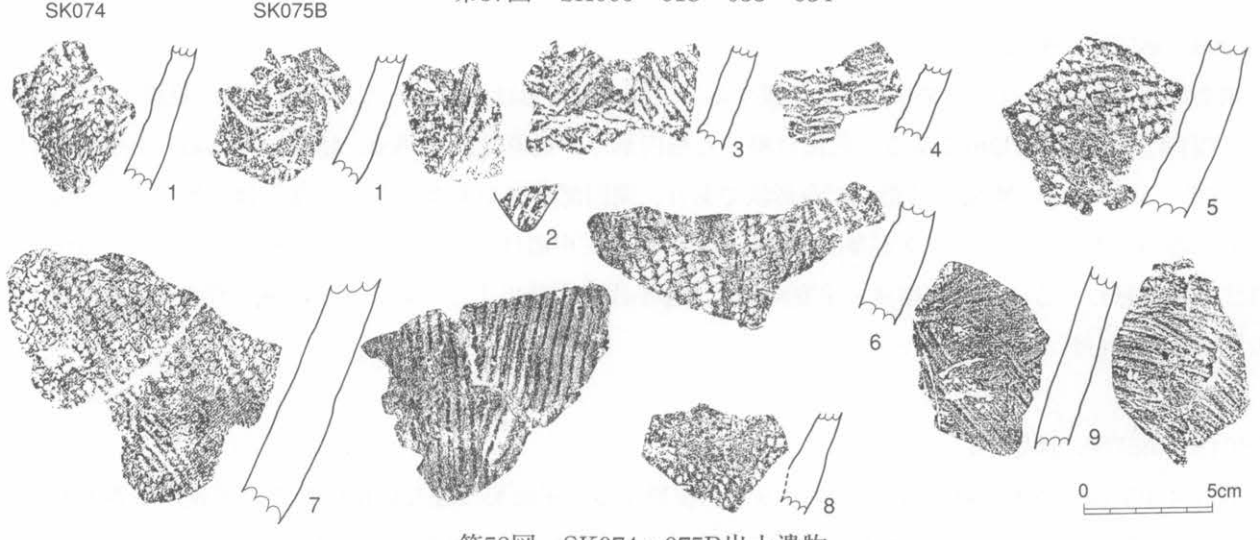
調査区北部，4C－34・35グリッドに位置する。上面の平面形はかなり歪んだ楕円形で，規模は長さ1.83m，幅1.41m，深さ1.09mである。底面は整った楕円形で，規模は長さ95cm，幅68cmである。長軸方位はN－63°－Wである。断面形は歪んだ台形状であり，開口部がやや大きく開く。覆土は下層に壁の崩落と思われるハードロームブロックが多く堆積している。上・中層はローム粒を含む暗褐色土である。全体に自然堆積と思われる。遺物は奈良・平安時代の土器小片が少量出土しているが，形態・覆土から縄文時代の陥穴と考えられる。

SK018（第57図，図版7）

調査区中央部北寄り，6C－53・63グリッドに位置する。平面形は細長い楕円形で，規模は長さ2.86m，幅1.05m，深さ1.99m，長軸方位はN－4°－Wである。断面はV字状であり，底面幅が12cm程度にまで狭



第57図　SK006・018・033・034



第58図　SK074・075B出土遺物

まる。底面は長さ2.49m，幅10cm～20cmで，ほぼ平坦である。遺物の出土は見られなかった。

SK033（第57図，図版７）

調査区中央部北寄り，6E－59・69グリッドに位置する。平面形は楕円形で，規模は長さ2.35m，幅1.76m，深さは2.34m～2.49m，長軸方位はN－12°－Eである。底面は細長い形態であり，長さ1.56m，最大幅38cmである。覆土は最下層に黒褐色土が堆積する。遺物は上層から石鏃が１点出土している（第66図10）。

SK034（第57図，図版７）

調査区中央部，6E－86・96グリッドに位置する。確認面の平面形は楕円形で，規模は長さ2.99m，幅2.21m，深さは2.1m～2.5mである。底面は細長く，長さ2.74m，最大幅47cmである。長軸方位はN－14°－Eである。断面形態は，短軸方向が緩いY字状，長軸方向は下半で膨らむフラスコ状となっている。両端はオーバーハング状に抉れており，特に北側で著しい。覆土は下層は壁の崩落と思われるロームを多く含み，上層は黒褐色土・暗褐色土主体である。遺物の出土は見られなかった。

SK040（第59図，図版７）

調査区中央部，6D－95・96グリッドに位置する。確認面の平面形は楕円形で，規模は長さ3.47m，幅2.06m，深さは1.81m～2.03mである。底面は細長い形態で，長さ2.12m，最大幅29cmであり，中央付近がやや深い。長軸方位はN－7°－Wである。覆土は最下層が黒褐色土で，下層から中層はハードロームブロックを多く含み，上層は黒褐色土主体である。遺物の出土は見られなかった。

SK043（第59図，図版７）

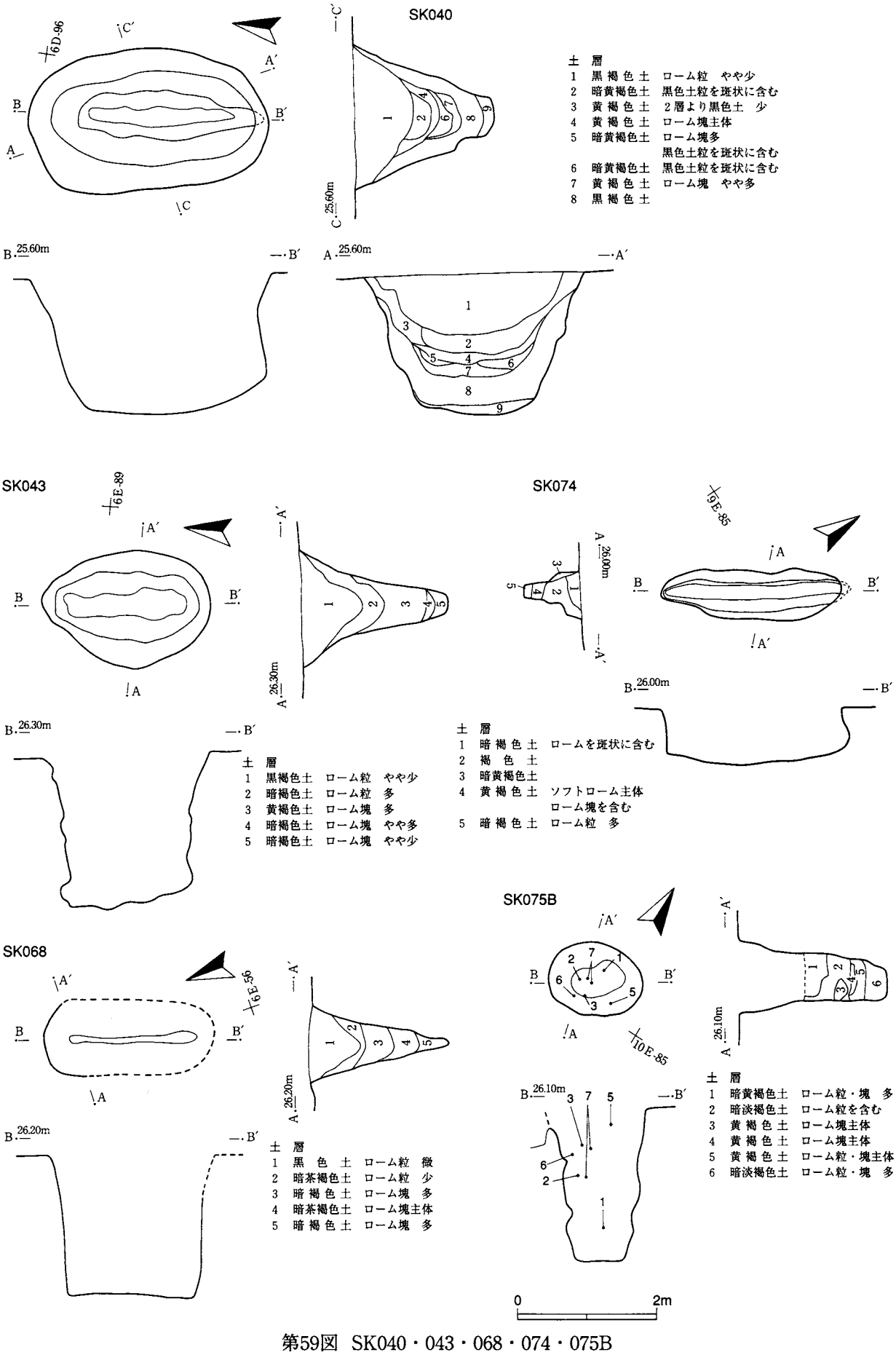
調査区中央部，6E－78・88グリッドに位置する。確認面の平面形は楕円形で，規模は長さ2.39m，幅1.69m，深さは1.97m～2.19mである。底面は細長く長さ1.71m，幅27cm～ 46cmで，長軸方位はN－5°－Wである。底面は南側から北側へとやや深くなり，両端はオーバーハング状に抉れている。覆土は最下部が暗褐色土，中層～下層はロームを多く含み，上層は黒褐色土主体である。遺物の出土は見られなかった。

SK068（第59図，図版７）

調査区中央部北側，6E－45・46グリッドに位置する。下層確認調査中に検出したため，図上復元よりも幅広になる可能性がある。推定規模は長さ2.5m，幅1.3m程度，深さは約２mである。底面は幅狭で細長く，長さ1.84m，幅８cm～17cmである。長軸方位はN－5°－W，底面はほぼ平坦である。覆土の下層はロームを多く含み，上層は黒色土主体である。遺物の出土は見られなかった。

SK074（第58・59図，図版７・58）

調査区南部中央寄り，9E－75・85グリッドに位置する。平面形は細長い楕円形で，確認面での規模は長さ2.6m，幅68cm，深さは60cm～80cmである。底面は長さ2.66m，幅19cmである。長軸方位はN－33°－Eである。底面は中央が両端よりやや深い。北東壁はオーバーハング状だが，南西壁はほぼ垂直である。覆土は下層がロームを多く含み，上層は暗褐色土主体である。



第59図 SK040・043・068・074・075B

遺物は覆土中から出土した縄文土器片1点を図示した。深鉢の胴部片で，胎土に繊維を多く含む。焼成は良好で，色調は外面が暗褐色，内面が黒褐色である。外面上部は無節縄文rが，下部は無節縄文lが施文され，羽状となっている。時期は早期後半～前期初頭と思われる。

SK075B（第58・59図，図版58・59）

調査区南部，10E－74・84グリッドに位置する。平面形は円形に近い楕円形で，規模は長さ1.36m，幅1.06m，深さは2.18mである。西側上部が弥生時代の竪穴住居であるSI075Aと重複して損なっている。底面も楕円形であるが，一部不整である。底面の規模は長さ78cm，幅45cmである。長軸方位は確認面上端のプランを基にするとN－70°－Eである。底面はほぼ平坦である。覆土は上層を図示していないが，黒褐色土，暗褐色土の順に堆積している。なお，最上層はロームがほとんど含まれない。中層以下はローム粒及びロームブロックを多く含む。

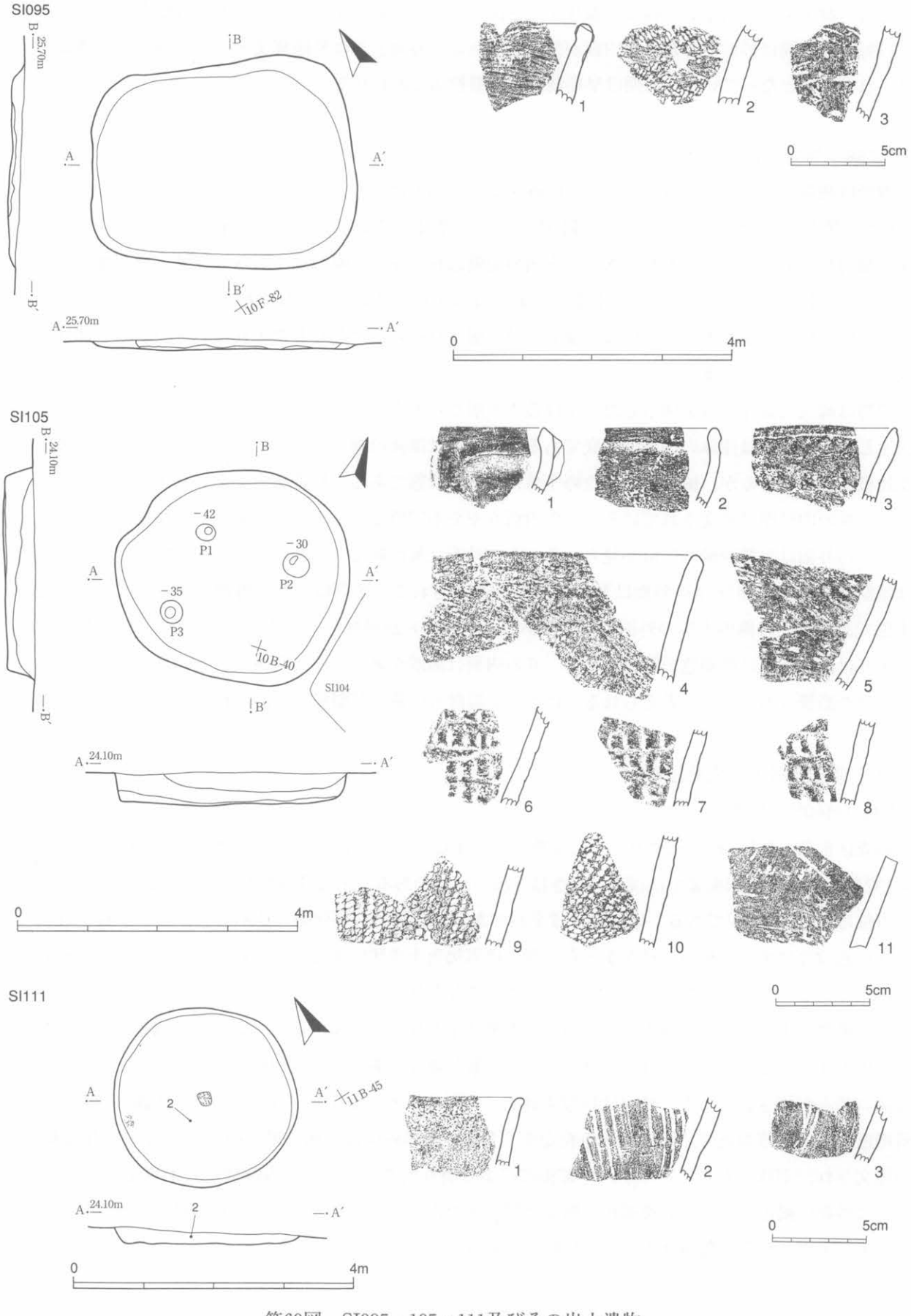
遺物は縄文土器片9点を図示した。1は覆土下層から出土し，2・3・5～7は中層から上層にかけて出土している。2は深鉢の底部で尖底である。その他は深鉢の胴部である。すべて繊維を含む。焼成は3が比較的良好であるが，繊維を含むため全体にもろい状態である。貝殻条痕文が2・4の外面，1・7の内面，9の内外面に施文されている。5の内面もやや不明瞭であるが，貝殻条痕文が施文されている。また，1の外面は貝殻腹縁の圧痕が見られる。3の外面は無節縄文が羽状に施文されている。5・8の外面は単節縄文LRが，6・7の外面は単節縄文RLが施文される。色調は1が内外面暗褐色，3は内外面暗赤褐色である。その他の土器の外面は褐色である。内面は8が黒褐色であるが，4～7・9は褐色である。5・6は断面内部に黒褐色の部分がある。6の内面は剥離が著しいが，色調に赤褐色の部分もあり，火熱を受けた影響もあるものと考えられる。以上の土器群の時期は早期後半～前期初頭と思われる。

3．竪穴住居・竪穴状遺構

SI095（第60図，図版8・59）

調査区南部，10F－61・62グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で，確認面での規模は長軸3.77m，短軸2.91mである。床面までは浅く，深さは5cm～16cmである。床面は長軸3.56m，短軸2.54mである。長軸方位はN－60°－Wである。床面はほぼ平坦である。軟質で，硬化面は認められない。炉跡・柱穴・出入り口施設等はすべて検出されなかった。覆土は黒褐色土主体であるが，下層はローム粒を多量に含む黄褐色土である。また，壁際はローム粒をやや多く含む褐色土である。

出土遺物は少量であり，覆土中から出土した縄文土器片3点を図示した。いずれも繊維を含み，前期前半の黒浜式に比定される。1は口縁部，2・3は胴部破片である。1は口縁端部が角張り，棒状工具による深い刻みが施されている。外面は貝殻条痕文，内面はナデにより調整されている。色調は外面が褐色・暗褐色，内面は暗褐色で，胎土は白色粒を多く含む。2の外面は上部に単節縄文LR，下部に単節縄文RLが施文され，羽状となっているが，一部擦痕により磨り消されている。内面は貝殻条痕文が施文される。色調は外面が褐色，内面が暗黄褐色，断面は黒褐色である。3の外面は条痕調整の後，ナデが施され，内面はナデ調整される。色調は内外面，橙褐色である。



第60図　SI095・105・111及びその出土遺物

SI105（第60・63・65図，図版８・59・60）

調査区南西部，10A－39グリッド周辺に位置する。平面形はほぼ円形であるが，一部分がやや張り出している。確認面での規模は径3.02m～3.36m，深さは34cm～46cmである。床面は径2.71m～3.05mである。床面には，深さが30cm～40cm程度のピットが３箇所検出された。床面はほぼ平坦で，硬化面は認められない。なお，炉跡などの施設は検出されなかった。覆土は３層に分かれる。上から１層はローム粒を若干含む黒褐色土，２層はローム粒を多く含む暗黄褐色土，３層はローム粒主体の黄褐色土である。

出土遺物は縄文時代，弥生時代，奈良・平安時代の土器が混在している。遺構の形態等から奈良・平安時代土器については混入品と判断した。縄文時代の土器片は早期，中期，後期が各々少量出土し，弥生時代の土器は後期が１点出土している。弥生時代の竪穴住居は遺物がごく少ない場合があるが，本遺構の帰属時期については最も遺物量の多い縄文時代中期と判断した。

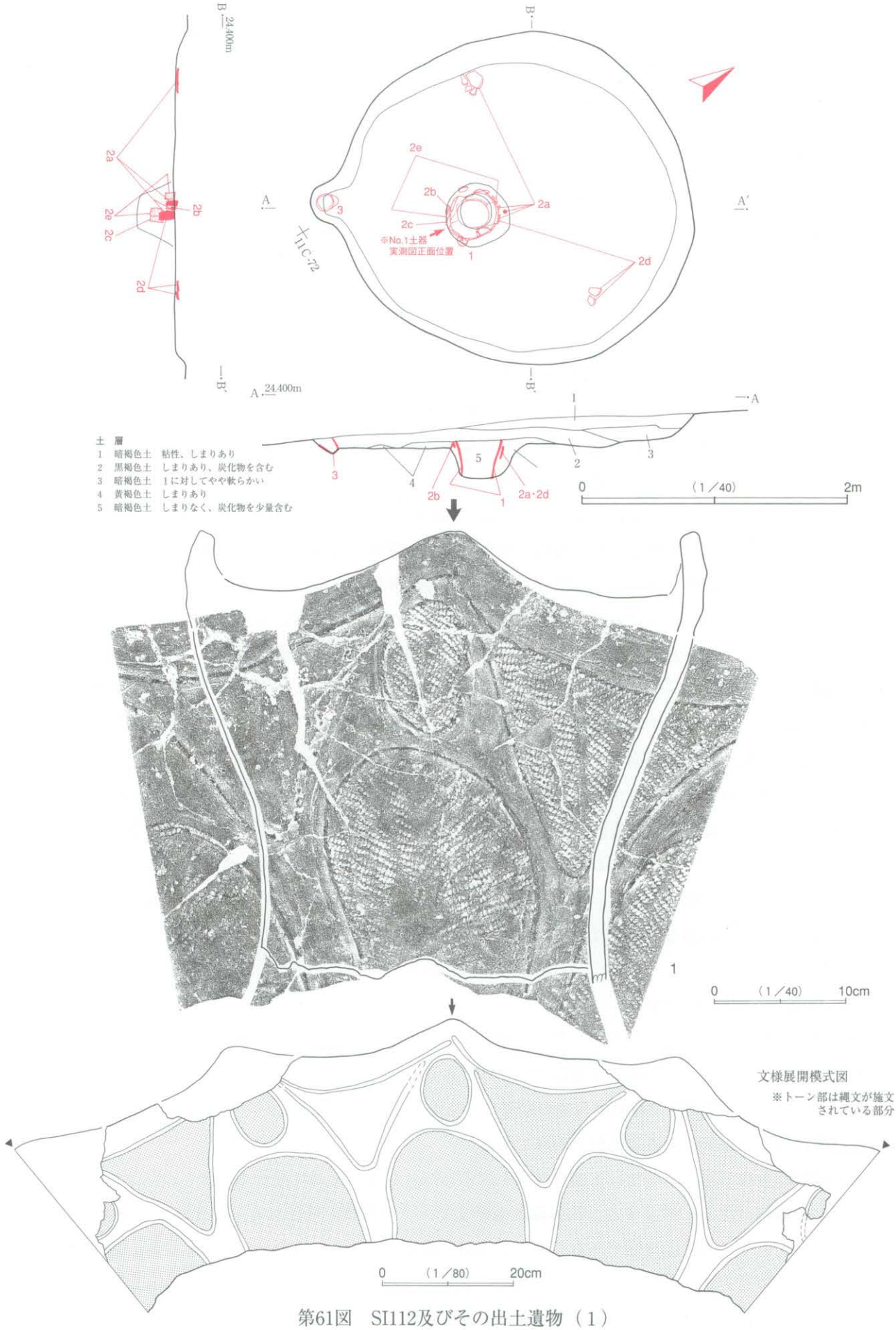
図示した土器片は11点で，いずれも覆土中から検出された。第60図１～４は口縁部の破片である。１の口縁部は隆帯により枠状に区画され，その内部は隆帯に沿って浅い凹線が施される。口唇部は先尖状となり，口縁内面に稜が形成される。胎土は雲母粒・小石・白色粒を多く含み，色調は暗赤褐色で，焼成良好である。２は幅１cmほどの口縁部が肥厚し，その下端は凹線によって区画される。胎土・色調・焼成等は１と同様である。３は口縁端部外面に輪積み痕があり，沈線状の効果となっている。破片下部にも輪積み痕があり，ひだ状の装飾が施される。胎土は白色粒等の細砂粒を含む。色調は外面が赤褐色，内面が黒褐色で，焼成は良好である。４は外削ぎ気味の口縁部形態をなす。内外面とも無文であり，内外面共ナデ調整が施される。胎土は小石及び細砂粒を多量含む。色調は淡褐色で，焼成はやや悪い。５・11は４と似た質感の胴部片である。６～８は胴部片で，同一個体と思われる。外面はいずれもひだ状に装飾された輪積み痕が見られる。内面はナデ調整される。色調は外面がいずれも橙褐色で，内面は６・８が黄褐色，７が暗褐色である。胎土は小石を含み，焼成は比較的良好である。９・10は外面に単節縄文LRが施文される。内面はナデ調整される。色調は９の外面が暗褐色～黒褐色，内面が褐色で，10は内外面とも淡褐色である。９の焼成は良好で，10も比較的良好である。以上の資料は中期阿玉台式（前半）に比定できる。

石器は４点出土している。いずれも出土位置は不明である。第63図１は砥石かと思われる安山岩の石製品である。混入品の可能性もある。２・３は磨石片で，石材はともに流紋岩である。第65図12はチャート製の石鏃である。最終的な調整痕は表面に集中する。未製品の可能性もある。

SI111（第60図，図版８・59）

調査区南西部，11B－34・44グリッドに位置する。平面形は円形で，規模は径2.56m，床面までの深さはやや浅く，11cm～22cmである。床面は径2.38mである。床面中央には焼土散布範囲があり，位置的に炉と思われる。また，焼土散布範囲は西側の壁際にも見られる。床面はほぼ平坦で，硬化面は認められない。覆土は暗褐色土が斑状に入る黒褐色土のみである。

出土遺物は少量である。遺物は土器片３点を図示した。２は中央部付近から出土した。１は口縁部の破片で，口縁端部は僅かに外反する。内外面とも無文で，ナデ調整が施される。胎土は小石を多量に含み，色調は暗黄褐色で，焼成は良好である。２・３は同一個体と思われ，外面には縦位の条線が施される。内外面ともナデ調整が施されていると思われるが，器面の摩耗により判然としない。胎土は細砂粒を含む。色調は淡褐色を基調とする。前期後半興津式に比定される。



第61図　SI112及びその出土遺物（1）

第62図　SI112出土遺物（２）

SI112（第61・62図，図版８・57・60）

調査区南西部，11C－62グリッド周辺に位置する。平面形は円形に近い。南側には小規模な突出部が見られる。確認面での規模は直径2.7ｍほどで，深さは６㎝～20㎝である。長軸方位はＮ－34°－Ｅである。突出部の規模は確認面上端で長さ20㎝程度，幅は30㎝程度である。

遺構の中心からやや突出部側に寄った位置に埋設土器（１）がある。炉体土器の状況によく似るが，土器内及び周辺に焼土は見られず，果たして炉として使用されたものか不明である。埋設土器は胴部下部～底部，４単位の波状口縁のうち３つの波頂部が，それぞれ打ち欠きされている。埋設土器の上部外側は別

の土器片（２）が囲うように配置されている。この資料の一部は東西の両壁際からも検出されており，意識的に配置されたものと思われる。埋設部は円形に掘り込まれ，径48cm，深さは19cm～24cmである。

南側の突出部で小型の深鉢（３）を検出した。底部と胴部下部の一部が埋め込まれている状態であり，竪穴の使用時にこの状態ならば，突出部は床面より高く直接の生活面ではなかったと考えられる。

床面は北東側が高く，出入り口のある南側が低い。壁の立ち上がりはそれほど傾斜が急ではない。柱穴及び出入り口ピットは検出されなかった。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体とする。

第61図１は深鉢で，キャリパー形の器形である。先にも記したように口縁部から胴部中位まで遺存し，４単位波状口縁の波頂部は１箇所のみの遺存である。微隆線で区画された口縁部には無文帯が巡り，弧線文の下部は入り組み状の文様が施文される。逆三角形・小楕円・大楕円の各形状の区画内部には単節縄文ＬＲが縦位に施文されるが，拓影図左側の逆三角形状区画の１箇所は無文である。逆三角形状区画は波頂部間にあり，小楕円形状区画は波頂部下にあり，その下に大楕円区画形状が配置される。内面は波長部下10cm前後のところまで剥落が著しく，色調も赤褐色に変色している。その下部の色調は褐色であるが，内外面ともやや黒ずんでいる。外面は煤の付着も見られる。焼成は良好で，胎土は細砂粒・小石を含む。第62図２（ａ～ｅ）は深鉢で，１と同様にキャリパー形の器形となる。沈線によって弧線状の文様が描かれ，磨消縄文が施されている。磨消縄文を追うと，波頂部から波長部間を斜位・横位に流れ，途中で分岐してＪ字状となる。２ｄを見ると，楕円形状となる部分もあるようである。器面状態を観察すると，内面は所々で剥落が見られ，外面も荒れている。色調は内面が赤褐色となる部分が多いのに対し，外面は概ね暗茶褐色部分と淡黄褐色部分に分かれる。また，二次的な被熱のためかやや荒れている。胎土は１と同様で，細砂粒・小石を含む。

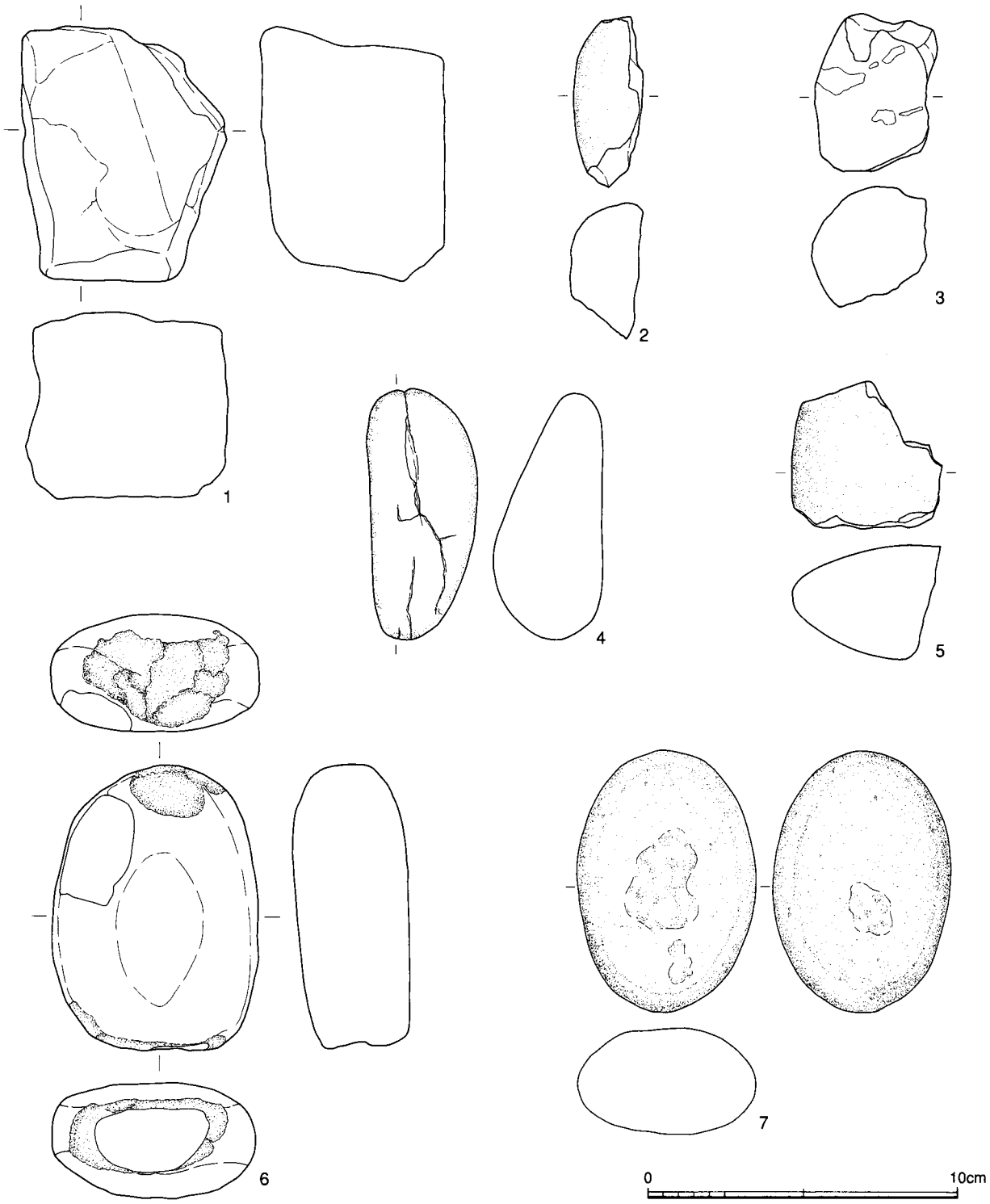
第62図３は小型の深鉢である。胴部中位から底部のみの遺存である。沈線によって逆Ｔ字状及び弧線状の文様が描かれ，２の磨消縄文技法とは逆に沈線間が無文となり，そのほかの部分に単節縄文ＲＬが施文される。胴下部は縄文が磨り消されて無文となっているようである。底部外面もナデが施され，無文である。器面状態を見ると，内面は剥離痕が満遍なく見られる。また，外面も荒れている。色調は褐色であるが，内面はやや赤みを帯び，外面は淡い色調となる部分と赤褐色の部分がある。焼成はやや悪く，胎土は細砂粒を多く含む。以上の土器群は，中期加曽利Ｅ４式末葉～称名寺１式に相当する時期と考えられる。製作と廃棄の同一性という問題をはらむものの，同一遺構の床面直上に近い形で出土した資料であり，併行関係を検討する上でも重要である。

第２節　縄文時代及び時期不明の石器（第63～67図，第29表，図版55・56）

１～25は縄文時代あるいは時期不明の遺物である。なお，遺構出土の石器はSK084の第55図８を除いて，遺構外の石器と通し番号としている。表には全て掲載した。

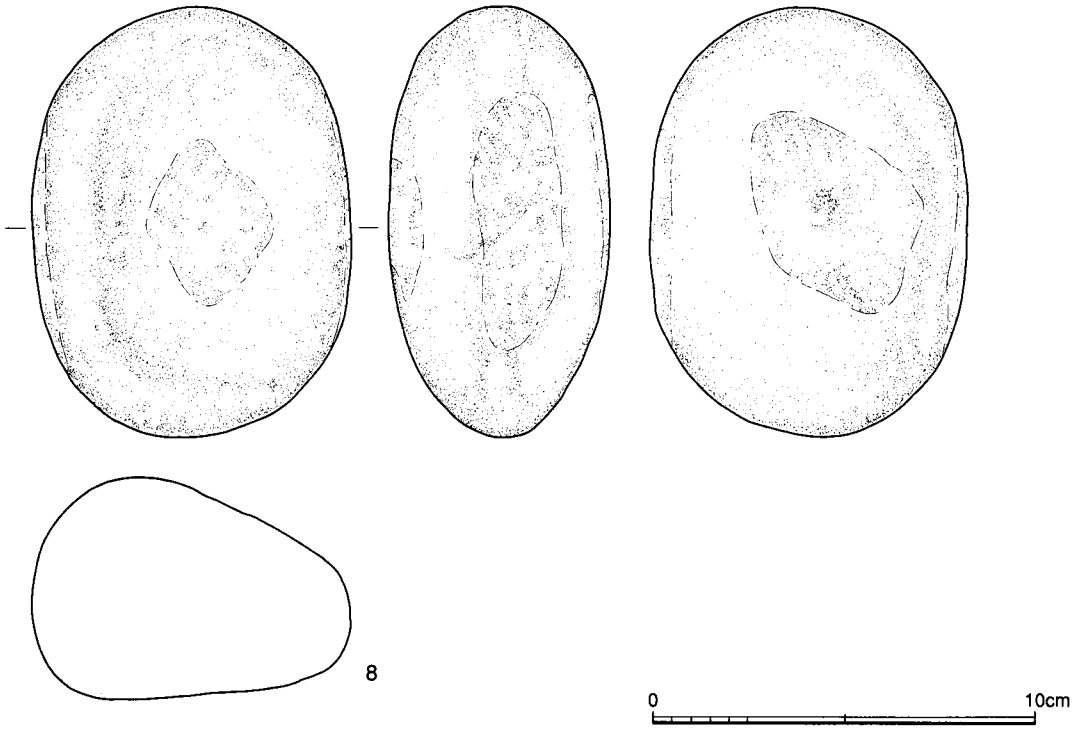
第63図１・２・３はSI105のところで記述した。４は砂岩の焼礫である。５は磨石片である。石材は砂岩である。第63図６・７・第64図８は敲石と研磨痕のある磨石の兼用品である。石材は６・７が安山岩，８が砂岩である。６は図示した表面と側面に敲打痕がみられる。短側面の敲打痕が顕著である。７は表裏に敲打痕がみられる。８は表裏及び側縁に敲打痕がみられる。

第65図９～17は石鏃である。９は黒曜石の石鏃である。表裏とも最終的な調整痕は左側縁に集中する。10はチャートの石鏃である。最終的な調整痕は表裏にみられる。11はチャートの石鏃である。最終的な調



第63図　縄文時代石器（1）

整痕は表裏にみられる。12はチャートの石鏃で，SI105から出土した。13はチャートの石鏃である。最終的な調整痕は表裏にみられる。脚部の一部が欠損している。14はチャートの石鏃である。表裏とも最終的な調整痕は左側縁に集中する。先端部が欠損している。15は流紋岩の石鏃である。最終的な調整痕は表裏にみられる。脚部の一部が欠損している。16は黒曜石の石鏃の未製品である。17は黒曜石の石鏃の未製品

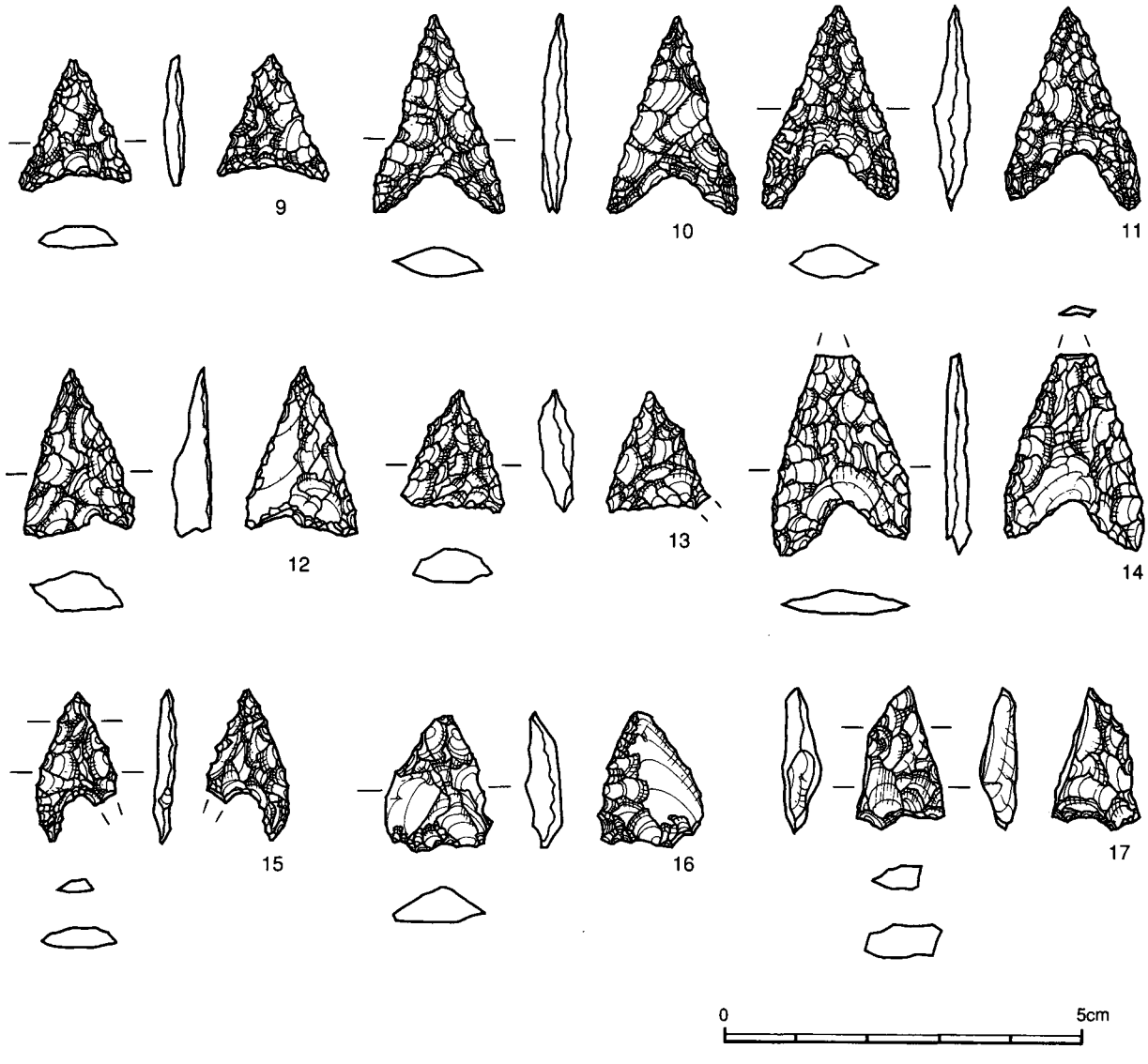


第64図　縄文時代石器（２）

第29表　縄文時代及び時期不明石器観察表

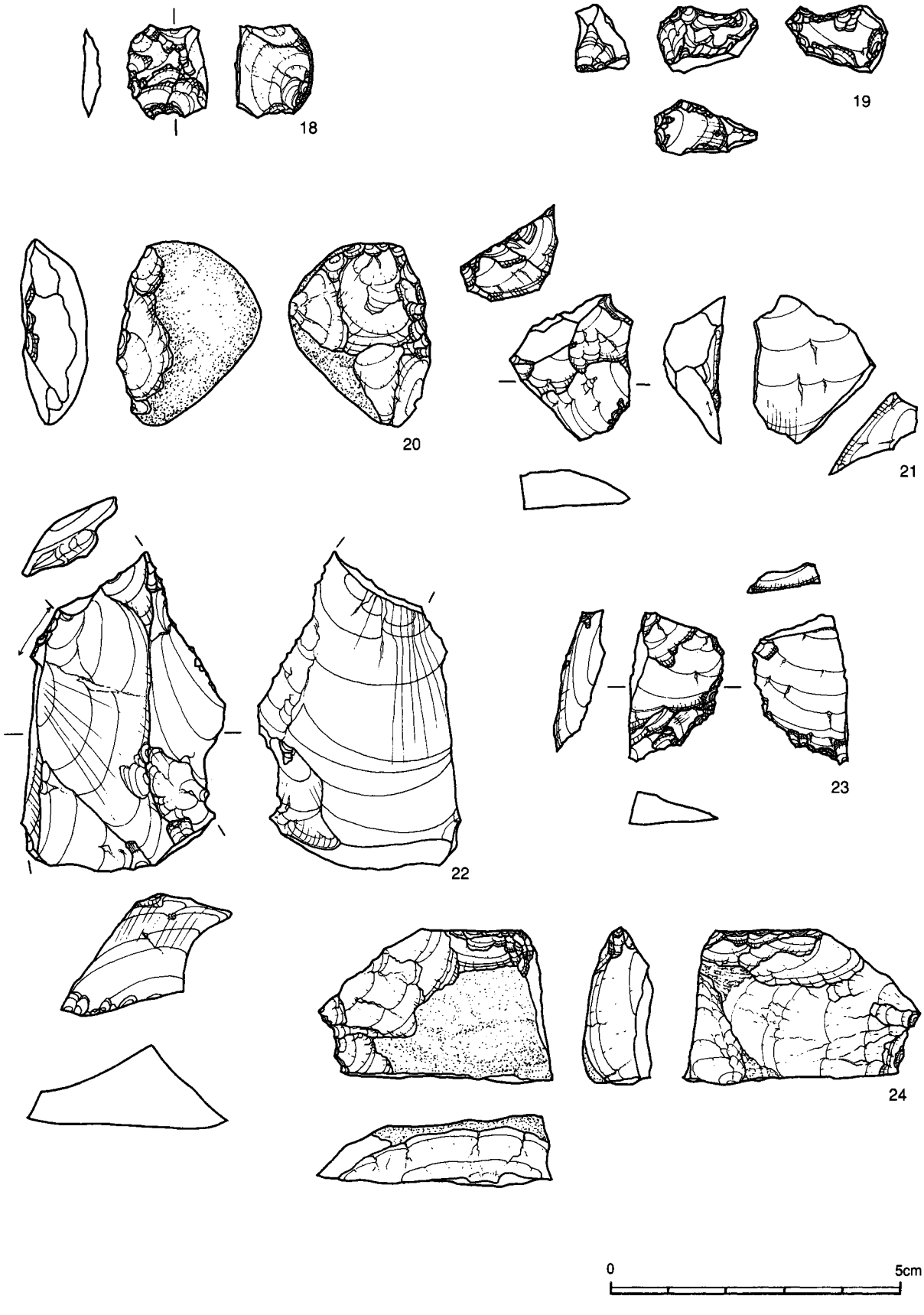
挿図番号	遺物番号	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第55図　8	084,42	磨石･敲石	流紋岩	8.95	6.0	3.6	271.2	これのみ遺構土器からの通し番号
第63図　1	105,1	不明	安山岩	8.3	6.5	5.9	490.0	以下の石器は通し番号
第63図　2	105,1	磨石か	流紋岩	5.5	2.2	4.3	62.5	
第63図　3	105,1	磨石か	流紋岩	5.1	3.6	3.5	80.8	
第63図　4	110,1	焼礫	砂岩	8.1	3.5	3.5	113.6	
第63図　5	126,1	磨石か	砂岩	4.7	4.8	3.7	84.0	
第63図　6	表採	敲石･磨石	安山岩	9.1	6.65	3.6	345.0	
第63図　7	10E,13	敲石･磨石	安山岩	8.3	5.7	3.4	232.9	
第64図　8	6D,4	敲石･磨石	砂岩	11.3	8.3	5.9	780.3	
第65図　9	10E,3	石鏃	黒曜石	1.63	1.44	0.23	0.53	
第65図　10	033,1	石鏃	チャート	2.62	1.81	0.45	1.30	
第65図　11	6D,10	石鏃	チャート	2.70	1.89	0.34	1.36	
第65図　12	105,1	石鏃	チャート	2.27	1.55	0.52	1.40	
第65図　13	082,1	石鏃	チャート	1.70	1.43	0.52	0.90	
第65図　14	082,25	石鏃	チャート	2.85	1.96	0.35	1.60	
第65図　15	2B,3	石鏃	流紋岩	2.01	1.06	0.25	0.47	
第65図　16	9E,1	石鏃	黒曜石	1.82	1.46	0.49	1.13	石鏃未製品
第65図　17	6C-36,9	石鏃	黒曜石	1.17	1.84	0.43	0.91	石鏃未製品
第66図　18	6C,8c	楔形石器	チャート	1.57	1.28	0.26	0.73	
第66図　19	045,3	楔形石器	黒曜石	1.19	1.75	0.95	1.70	石核?
第66図　20	6C,7	剥離痕ある剥片	チャート	3.16	2.32	1.02	8.85	

第66図　21	051,94	剥離痕ある剥片	黒曜石	2.50	2.05	0.95	3.90	
第66図　22	11C,2	剥離痕ある剥片	黒曜石	5.43	3.52	1.84	25.00	
第66図　23	082,27	剥離痕ある剥片	黒曜石	2.55	1.65	0.60	2.40	
第66図　24	109,1	剥片利用石核	チャート	2.68	4.52	1.21	16.80	
第67図　25	072,12	石核	流紋岩	2.77	3.65	2.30	14.40	

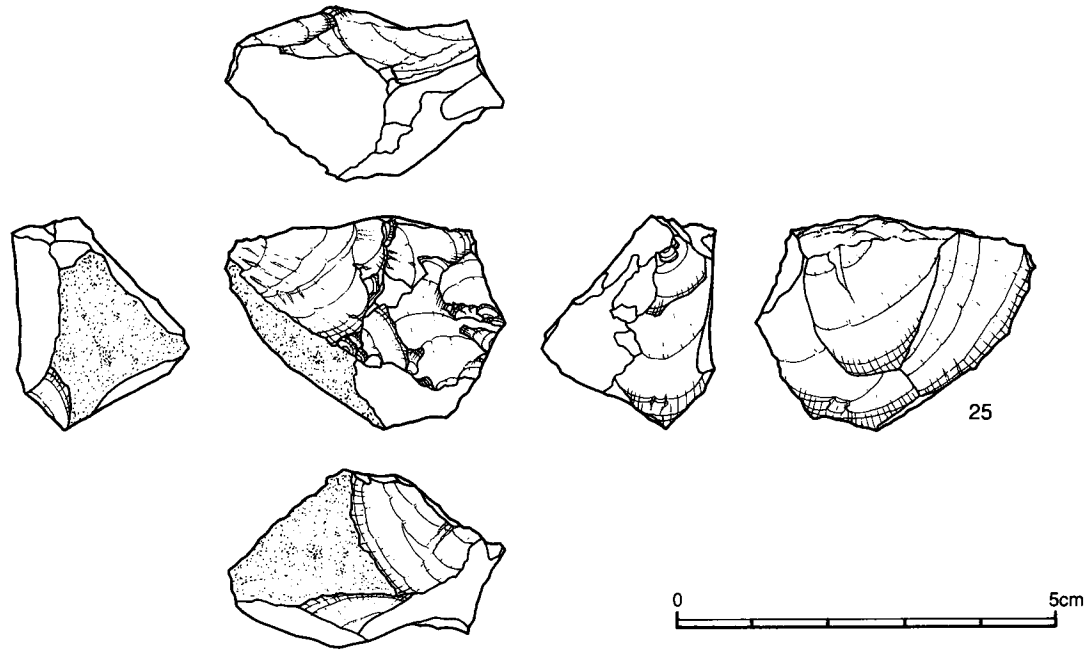


第65図　縄文時代石器（3）

である。第66図18はチャートの楔形石器である。裏面に主要剥離面を残す。第66図19は黒曜石の楔形石器である。厚い剥片を素材としている。石核の可能性もある。第66図20はチャートの剥離痕ある剥片である。石核の可能性もある。第66図21は黒曜石の剥離痕ある剥片である。正面右側縁の一部に微細な剥離痕がみられる。第66図22は黒曜石の剥離痕ある剥片である。正面左側縁の一部に微細な剥離痕がみられる。上下両端が欠損している。第66図23は黒曜石の剥離痕ある剥片である。正面左側縁及び裏面下部に微細な剥離痕がみられる。第66図24はチャートの剥片利用石核である。縦長剥片を素材とし，1～2cmの剥片を剥離している。第67図25は流紋岩の石核である。礫を分割した剥片を素材とする。



第66図　縄文時代及び時期不明の石器（1）



第67図　縄文時代及び時期不明の石器（2）

第3節　遺構外出土土器（第68～72図，第30表，図版61～66）

ここでは縄文時代の遺構以外から出土した遺物について扱う。なお，個々の遺物の詳細な特徴や遺物番号・出土グリッド等の情報については観察表に記した。

早期の土器（第68図1～40）

1～17はいわゆる撚糸文土器である。1～4は井草2式，5～13は夏島式，14～17は稲荷台式～花輪台式併行に比定できる。15・16については東山式土器（原田1991ほか）と密接な関連を持つ資料と思われる。

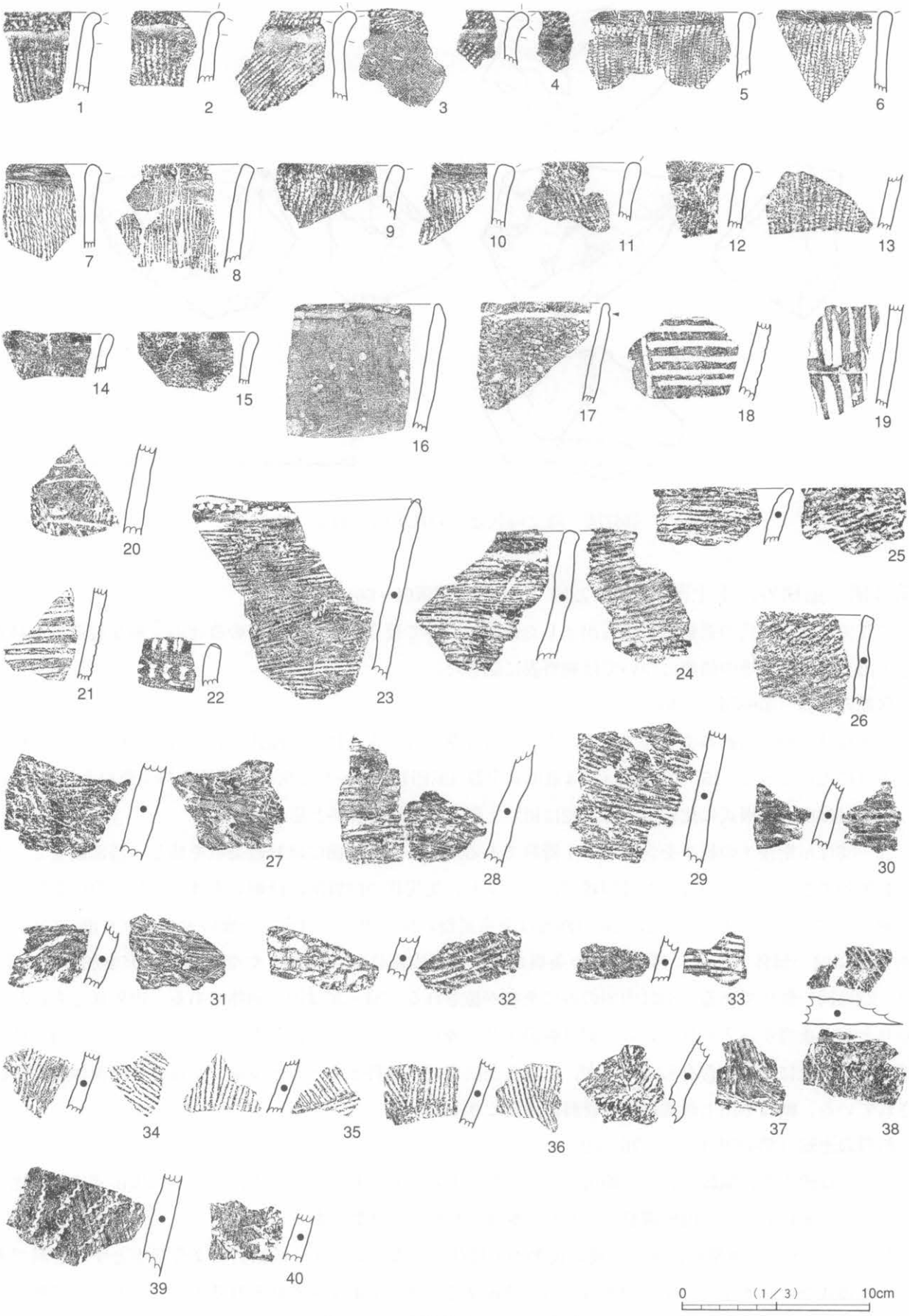
18～21は田戸下層式に比定できる。22は田戸上層式終末期の資料と思われる。

23～38は早期後半の繊維を含有する土器群である。23～38の器面には貝殻条痕を施し，器面調整とともに装飾効果をもたせている。23は口縁部破片であり，先尖状の口唇部には細い丸棒状工具の腹面を横圧した刻みが施されている。26・27・30の外面は条痕調整の後，ナデを加えて条痕の大半を擦り消している。28・29は同一個体である。外面に浅い条痕が施され，内面には条痕地をやや丁寧なナデを加えている。31・32は同一個体である。33は内面のみに条痕が施される。34～36は同一個体である。内外面ともにしっかりとした条痕が加えられている。37は胴最下部の資料である。底面は欠損している。39・40は同一個体である。胎土に繊維を含有しているが，上記の条痕を持つ資料と比べると少量である。貝殻復縁紋が施紋されている。概ね茅山上層式以降の資料に比定できる。

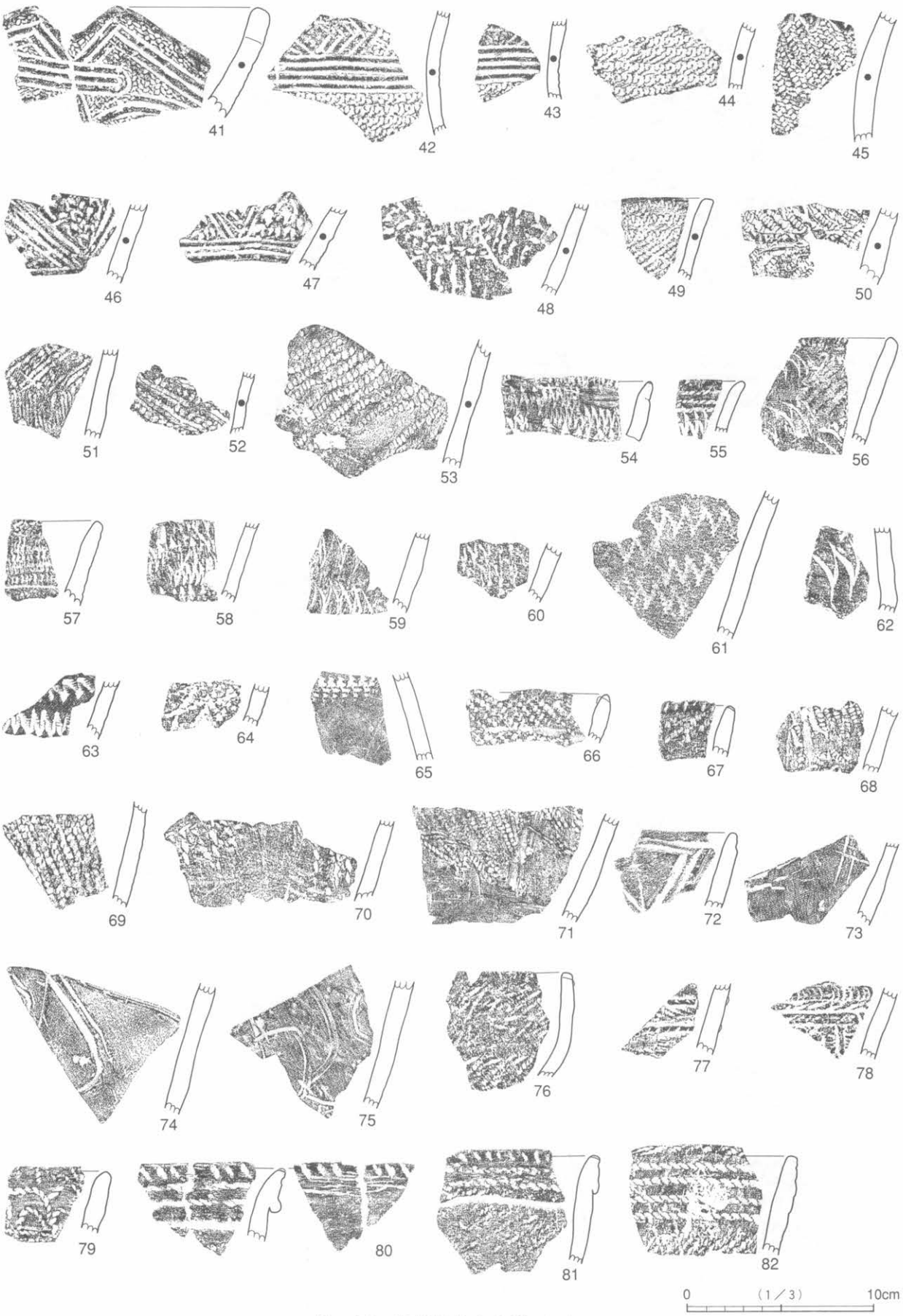
前期の土器（第69図41～67・76～82）

41～53は胎土中に繊維を含む前期前半の土器群である。41～45は関山式に，46～53は黒浜式に概ね比定できる。いずれも丁寧に内面調整が行われ，焼成も良好で，堅緻である。

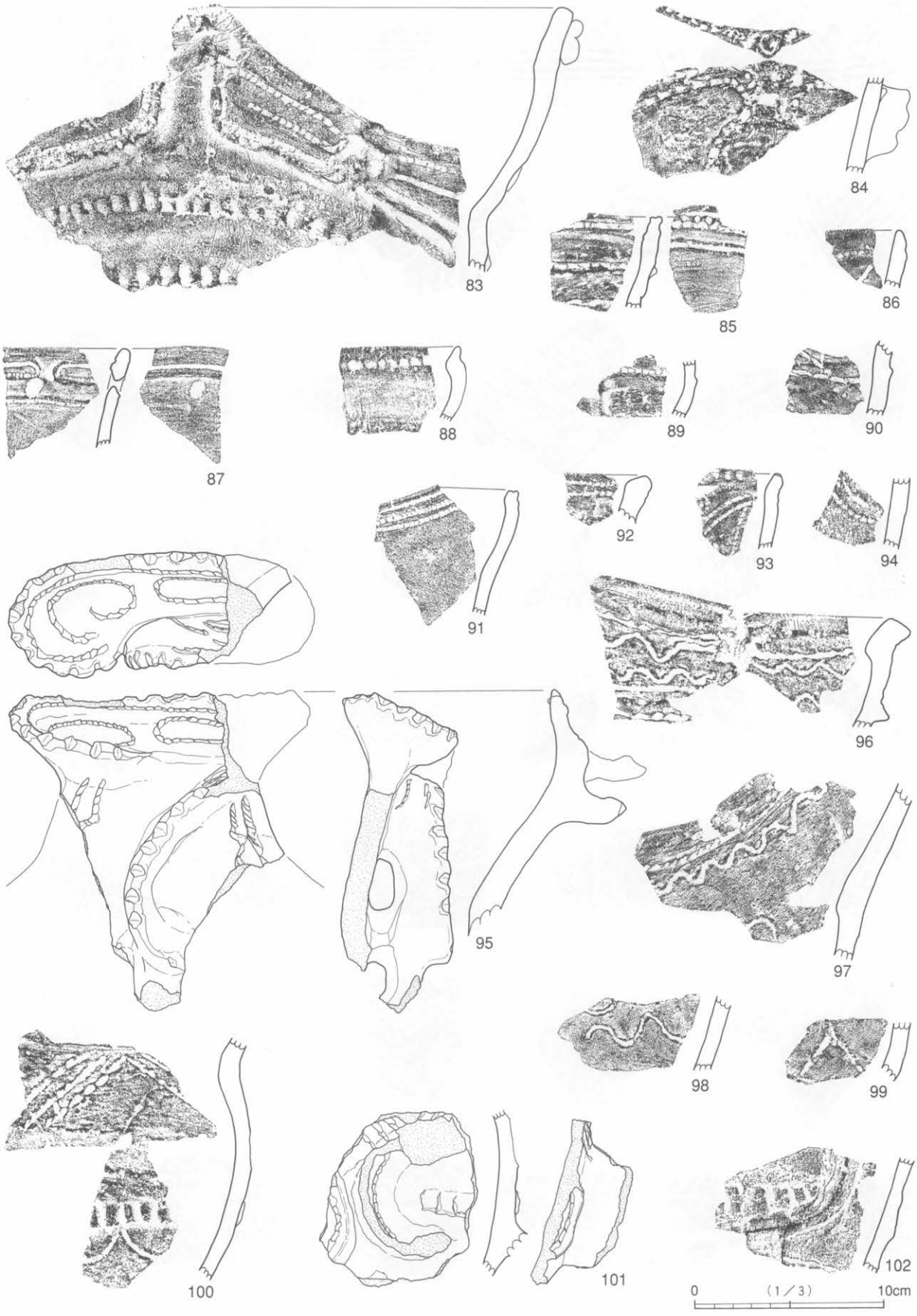
4～82は胎土中に繊維を含まない前期後半の土器群である。54～76は波状貝殻文を基本とする資料であり，浮島式ないし興津式に比定できる。77は浮線文を，78は爪形文をそれぞれ基本としており，諸磯b式に比定できる。79～82は原体の側面圧痕を口縁部に施文するものであり，東北地方大木式の影響を強く受



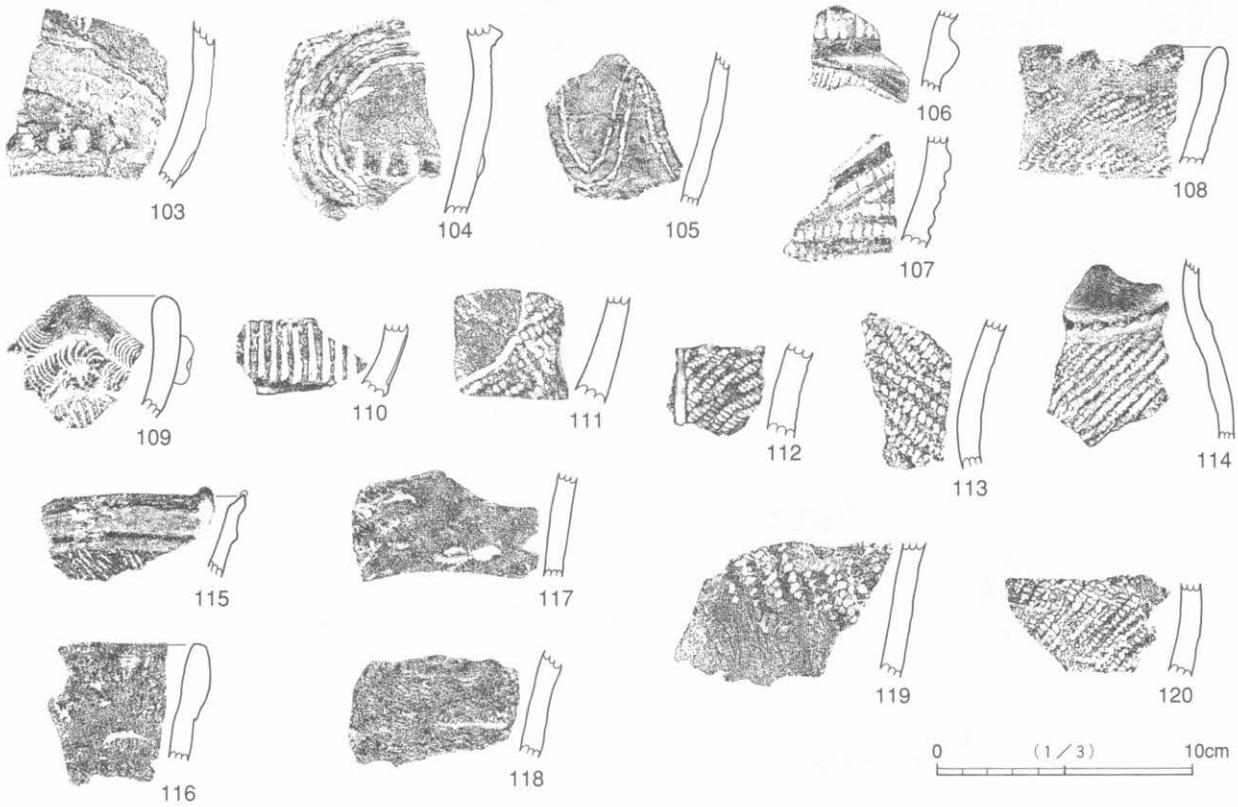
第68図　遺構外出土土器（1）



第69図　遺構外出土土器（2）



第70図　遺構外出土土器（3）



第71図　遺構外出土土器（４）

けている「粟島台式」に比定できる。66～69・76は縄文のみが施文される資料である。胎土等の外面的特徴から本時期と判断した。

中期の土器　（第70図83～102，第71図103～120）

83～105・108は阿玉台Ⅰｂ式に比定できる。胎土には小石（径0.5㎜～１㎜）をはじめとして雲母細粒，細差粒を多く含んでいる。106・107・109・110は阿玉台Ⅰｂ式に共伴すると思われるが，西関東を中心に分布する勝坂式の影響を強く受けている資料と理解できる。111～115は加曽利Ｅ３式ないしＥ４式に比定できる。116～118は無文，119・120は縄文のみが施文されている資料である。胎土等の特徴から加曽利Ｅ式土器に併行する資料と思われる。

後期の土器　（第69図70～75・第72図121～161）

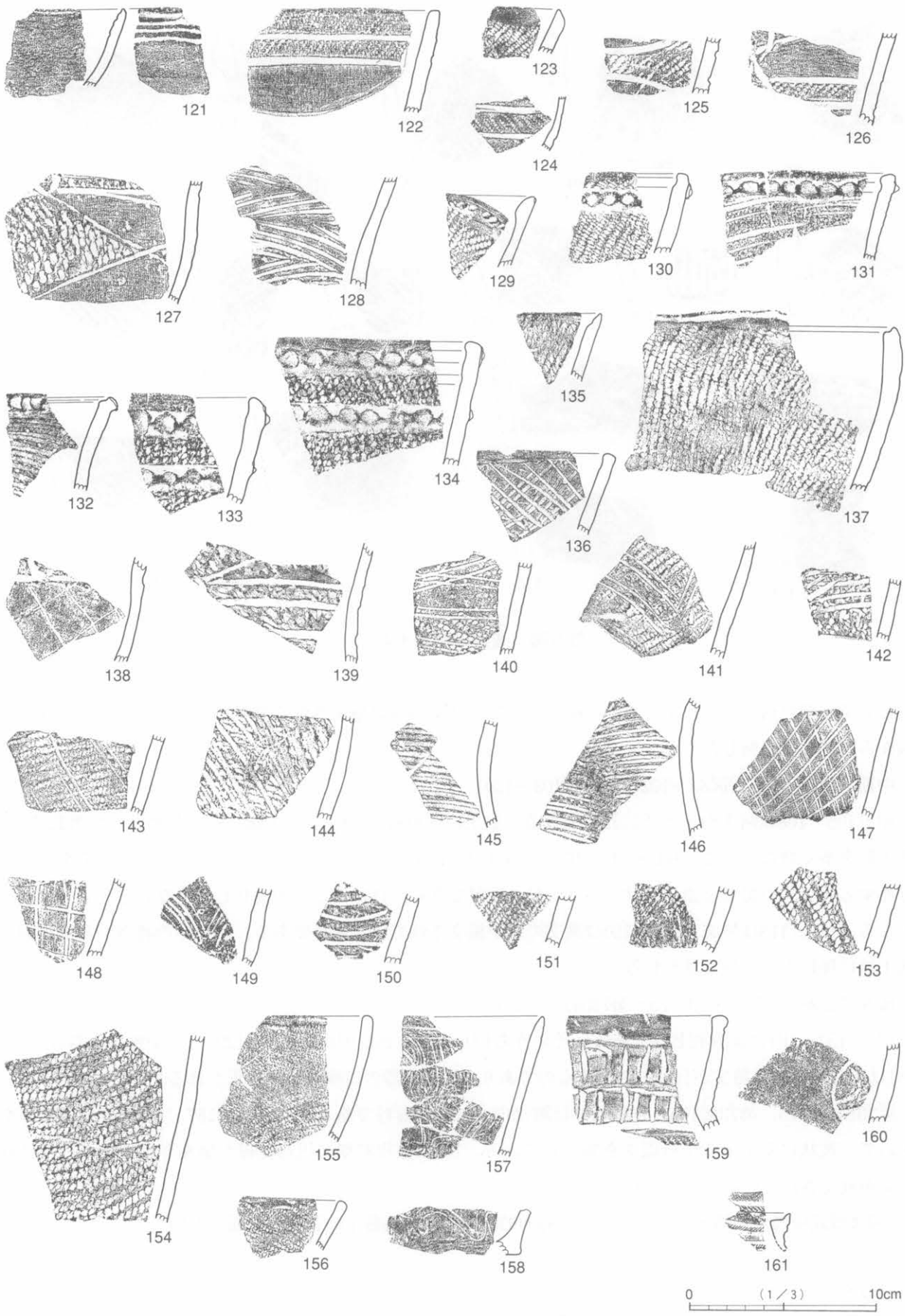
121～154・161は加曽利Ｂ式である。そのうち121～128・161が精製土器，129～154が粗製土器になる。161は非常に精密に施文が行われているものであり，注口土器の口縁部破片と思われる。

第70図70～75，第73図155～158・160は堀之内式に伴う資料である。74・75・157・158は半截竹管等を用いて，波状に垂下する平行線文を施文している。160は破片右側に円形沈線が施文され，その内部に意匠文が施文されている。

159は型式帰属が判然としない。胎土等外面的特徴から後期前半の資料と判断したい。

〈参考文献〉

原田　昌幸他　1991　『撚糸文系土器様式』ニューサイエンス社



第72図　遺構外出土土器（5）

第30表　遺構外出土縄文土器観察表

挿図No.	時　期	型式（分類）	部　位	文　様　調　整	備　考	遺物番号・出土地点
第68図1	早期（撚糸文）	井草Ⅱ	口縁部	口唇部肥厚にて外反、口唇部・外面縦位の撚糸文、口唇部直下ナデ	2と同一個体か	082－4（10C）
2	早期（撚糸文）	井草Ⅱ	口縁部	口唇部肥厚にてやや外反、口唇部・外面縦位の撚糸文、頸部ナデ	1と同一個体か	082－3（10C）
3	早期（撚糸文）	井草Ⅱ	口縁部	口唇部肥厚にてやや外反、口唇部内外面・胴部外面斜位の撚糸文、頸部ナデ	4と同一個体か	6D－1
4	早期（撚糸文）	井草Ⅱ	口縁部	口唇部肥厚にてやや外反、口唇部内外面・胴部外面斜位の撚糸文、頸部ナデ	3と同一個体か	8E－2
5	早期（撚糸文）	夏島	口縁部	口唇部わずかに肥厚・丁寧なナデ、外面縦位の縄文		120－2（12D）
6	早期（撚糸文）	夏島	口縁部	口唇部わずかに肥厚・丁寧なナデ、外面縦位の縄文		120－2（12D）
7	早期（撚糸文）	夏島	口縁部	口唇部わずかに肥厚・丁寧なナデ、外面縦位の撚糸文		081－4（12D）
8	早期（撚糸文）	稲荷台	口縁部	口縁部直立して口唇部無文、外面間隔の粗い縦位の撚糸文		12D－2
9	早期（撚糸文）	稲荷台	口縁部	口縁部直立して口唇部無文、外面縦位の縄文		079－69（12E）
10	早期（撚糸文）	稲荷台	口縁部	口縁部直立して、口唇部わずかに肥厚し無文、外面縦位の縄文		079－72（12E）
11	早期（撚糸文）	稲荷台	口縁部	施文圧痕浅く摩滅激しい、外面間隔の粗い縄文か		079－71（12E）
12	早期（撚糸文）	稲荷台	口縁部	施文圧痕浅く摩滅激しい、外面間隔の粗い撚糸文か		079－70（12E）
13	早期（撚糸文）		胴部	外面縦位の撚糸文		079－71（12E）
14	早期（撚糸文）		口縁部	無文土器		079－71（12E）
15	早期（撚糸文）		口縁部	無文土器		079－71（12E）
16	早期（撚糸文）		口縁部	無文土器・外面擦痕顕著		4D－1
17	早期（撚糸文）		口縁部	無文土器・外面口唇部直下横位の凹線		9H－6
18	早期（沈線文）	田戸下層	胴部	外面複数の横位太沈線	石英多	6C－6
19	早期（沈線文）	田戸下層	胴部	外面複数の横位太沈線		6C－6
20	早期（沈線文）	田戸下層	胴部	外面複数の横位の細沈線、貝殻圧痕（沈線区画内を充填か）		098－8（10D）
21	早期（沈線文）	田戸下層	胴部	外面複数の横位太沈線		8D－1
22	早期（沈線文）	田戸上層	口縁部	口唇部刻目、外面半截竹管による横位の連続刺突列		079－71（12E）

挿図No.	時　期	型式（分類）	部　位	文　様　調　整	備　考	遺物番号・出土地点
23	早期（条痕文）	茅山系	口縁部	外面貝殻条痕文、口唇部刻目、直下ナデ		10A48－1
24	早期（条痕文）	茅山系	口縁部	内外面貝殻条痕文		6C－6
25	早期（条痕文）	茅山系	口縁部	内外面貝殻条痕文		6C－6
26	早期（条痕文）		口縁部	内面指頭圧痕、外面貝殻条痕文		100－2（10E）
27	早期（条痕文）		胴部	内外面貝殻条痕文か		10E－11
28	早期（条痕文）	茅山系	頸部？	器形一段の弱い屈曲、内外面とも貝殻条痕文		5C－2
29	早期（条痕文）		胴部	内外面貝殻条痕文		9H－4･5
30	早期（条痕文）	茅山系	胴部	内面貝殻条痕文		7C－5
31	早期（条痕文）		胴部	内面貝殻条痕文		表採－9（10E）
32	早期（条痕文）	茅山系	胴部	内面貝殻条痕文、外面無節縄文圧痕		075－2（10E）
33	早期（条痕文）	茅山系	胴部	内面貝殻条痕文		7C－5
34	早期（条痕文）		胴部	内外面貝殻条痕文		105－1（10A10B）
35	早期（条痕文）		胴部	内外面貝殻条痕文		105－1（10A10B）
36	早期（条痕文）		胴部	内外面貝殻条痕文		105－1（10A10B）
37	早期（条痕文）	茅山系	底部	内外面貝殻条痕文、平底		10F－1
38	早期（条痕文）	茅山系	底部	内面貝殻条痕文、底部平底、木葉痕		061－17（8E）
39	早期（末葉）		胴部	外面貝殻条痕文の地文に貝殻腹縁文		10E34－8
40	早期（末葉）		胴部	外面貝殻条痕文の地文に貝殻腹縁文		10E－2
第69図41	前期（前半）	関山	口縁部	頂部双頭の波状口縁,外面ループ文を地文とし半截竹管による平行沈線文		114－1（13G）
42	前期（前半）	関山	頸部？	外面ループ文を地文とし半截竹管による横位の平行沈線文に鋸歯状文		6C06－1
43	前期（前半）	関山	頸部？	外面ループ文を地文とし半截竹管による横位の平行沈線文に鋸歯状文		6D－1
44	前期（前半）	関山	胴部	外面ループ文		6C06－1
45	前期（前半）	関山	胴部	外面ループ文を地文とし半截竹管による波状文か		114－1（13G）

挿図No.	時　期	型式（分類）	部　位	文　様　調　整	備　考	遺物番号・出土地点
46	前期（前半）	?	胴部	外面貝殻腹縁文を地文とし半截竹管による複数条の横位平行沈線文・鋸歯状文		6C－3
47	前期（前半）	?	胴部	外面貝殻腹縁文を地文とし半截竹管による複数条の横位平行沈線文・鋸歯状文		6C－6
48	前期（前半）	?	胴部	外面貝殻腹縁文		079-56・69・70（12E）
49	前期（前半）		口縁部	口縁部外反、外面全面縄文（蕨状縄文か）		6C06－1
50	前期（前半）		胴部	外面地文に羽状縄文、内面貝殻条痕文か		1.00E－08
51	前期（前半）		胴部	外面接合痕を残す、縄文（付加条縄文か）に接合部縦位の櫛歯状文		114－1（13G）
52	前期（前半）		胴部	外面付加条縄文		7C－2
53	前期（前半）		胴部	外面地文に縄文		7C－2
54	前期（後半）	浮島	口縁部	口唇部刻目、外面輪積み痕を残し貝殻腹縁による連続波状文		105－1（10A10B）
55	前期（後半）	浮島・興津系	口縁部	外面口唇部直下３条の横位の撚糸圧痕文、胴部貝殻腹縁による連続波状文		103－2（10B）
56	前期（後半）	浮島・興津系	口縁部	外面地文に無節斜縄文か、主要文様として貝殻腹縁文		079－40（12E）
57	前期（後半）	興津	口縁部	外面口縁部細い沈線による区画内に貝殻腹縁による貝殻波状文を充填		098－11（10D）
58	前期（後半）	浮島	胴部	外面貝殻腹縁による連続波状文		104－4（10B）
59	前期（後半）	浮島・興津系	胴部	外面貝殻腹縁による連続波状文		079－20（12E）
60	前期（後半）	浮島・興津系	胴部	外面貝殻腹縁による連続波状文		079－69（12E）
61	前期（後半）	浮島・興津系	胴部	外面貝殻腹縁による間隔の広い連続波状文		098－1（10D）
62	前期（後半）	浮島・興津系	胴部	外面貝殻腹縁による間隔の広い連続波状文		081－3（12D）
63	前期（後半）	浮島・興津系	胴部	外面貝殻腹縁による連続波状文		6C06－1
64	前期（後半）	浮島・興津系	胴部	外面貝殻腹縁（サルボウ）による連続波状文		079－14（12E）
65	前期（後半）	浮島・興津系	胴部	外面上位貝殻腹縁文あるいは貝殻波状文か、下位無文		098－3（10D）
66	前期（後半）		口縁部	口唇部に押捺を１ヶ所残す、外面縄文（羽状か）		102A－2（10B）
67	前期（後半）		口縁部	口唇部刻目、外面縄文		105－1（10A10B）

挿図No.	時　期	型式（分類）	部　位	文　様　調　整	備　考	遺物番号・出土地点
68	前期（後半）		胴部	外面縄文		10E-2
69	前期（後半）		胴部	外面縄文に擦痕を残す		102A-1（10B）
70	前期（後半）		胴部	外面縄文に擦痕を残す		10C61-67
71	前期（後半）		胴部	外面縄文を地文にナデの擦痕を残す		10E55-1
72	前期（後半）	興津	口縁部	外面無文地に口唇部直下２条の横位の平行沈線、以下複数の平行沈線による鋸歯状文か		105-1（10A10B）
73	前期（後半）	興津	胴部	外面２条の平行沈線による幾何学文か		105-1（10A10B）
74	前期（後半）	興津	胴部	外面半截竹管による幾何学文か		104-11（10A10B）
75	前期（後半）	興津	胴部	外面半截竹管による幾何学文か		4C-4
76	前期（後半）	諸磯系	口縁部	口唇部縄文による刻目を２ヶ所残す、外面斜縄文		079-17（10E）
77	前期（後半）	諸磯系	胴部	外面縄文の地文に細かな刻目を施した横位の２条の浮線文		109-1（11B）
78	前期（後半）	諸磯系	胴部	外面半截竹管による平行沈線文に爪形文		082-4（10C）
79	前期（後半）		口縁部	口唇部縄文原体による圧痕、外面縄文側圧痕による弧線文か		105-1（10A10B）
80	前期（後半）	大木系	口縁部	口唇部刻目、内面口唇部直下に横位の条線、外面口縁部粘土紐貼付文に２段縄側面圧痕、胴部縄文か		102A-2（10B）
81	前期（後半）	大木系	口縁部	口唇部刻目、外面口縁部粘土紐張り付け文に２段縄側面圧痕、胴部付加条縄文		101-2（10B）
82	前期（後半）	大木系	口縁部	口唇部縄文、外面口縁部４段縄側面圧痕、胴部斜縄文		10E-2
第70図83	中期	阿玉台	口縁部	口縁部内湾、口唇部内面に稜、外面口唇部直下縦位の隆帯に帯状貼付文、口縁部刻目を伴う隆帯に添った１列の角押文、以下に２段の輪積痕の装飾		6D-2
84	中期	阿玉台	口縁部	頂部渦巻き状の刻みを施された棒状粘土貼付文、１条の角押文を付随させた隆帯		10B45-1
85	中期	阿玉台	口縁部	口唇部面取り後１条の沈線、内面口唇部刻目、直下２段の角押文、外面無文、口唇部直下に１条の角押文と１条の角押文を付随させた隆帯、輪積痕		102A-1（10B）
86	中期	阿玉台	口縁部	外面隆帯に添った角押文と結節沈線か		8E-1

挿図No.	時　期	型式（分類）	部　位	文　様　調　整	備　考	遺物番号・出土地点
87	中期	阿玉台	口縁部	口唇部内面に稜を有し張出部に1条の沈線、外面貼付区画された隆帯に沿って竹管押引による角押文、胴部無文範囲を残し、焼成後の補修孔を1ヶ所残す		5D-1
88	中期	阿玉台	口縁部	口縁部内湾して内面に稜、外面口唇部直下1条の角押文に帯状貼付の剥離痕		065-1 (7D)
89	中期	阿玉台	口縁部	外面無文、隆帯に添った角押文		079-72 (9H)
90	中期	阿玉台	胴部	外面隆帯に添った横位と弧状の角押文か		060-5 (8D)
91	中期	阿玉台	口縁部	口縁部湾曲、口唇部面取り後1条の有節沈線文、外面口唇部直下に2条の、胴部無文		10B08-2
92	中期	阿玉台	口縁部	内面口唇部に稜、外面口唇部直下2条の有節沈線文		076-1 (8H)
93	中期	阿玉台	口縁部	口唇部刻目、口唇部内面に稜を持ち外面から円を描くように隆帯に添った2条の結節沈線文		10E-5
94	中期	阿玉台	胴部	外面2条1単位の結節沈線文		076-1 (12E)
95	中期	阿玉台	口縁部	頂部をU字状にくぼませた波状口縁、頂部に刻目を施した扇状把手、口縁頂部及び外面口縁形状に沿って直線と波状の2列の結節沈線文	97と同一個体か	9H-1
96	中期	阿玉台	口縁部	波状口縁、口縁部内湾、口唇部内面に稜、外面口縁部断面三角の隆帯による帯状区画内に結節沈線による平行文と波状文		078-1·2·3·97(9H)
97	中期	阿玉台	口縁部	胴部から屈曲する波状口縁、外面口唇部直下直線と波状の2条1単位の結節沈線文	95と同一個体か	077-60 (9H)
98	中期	阿玉台	胴部	外面結節沈線による2条の波状文		078-35 (9H)
99	中期	阿玉台	胴部	外面弧状の結節沈線文		063-5 (7D)
100	中期	阿玉台	胴部	3条1単位の結節沈線による三角文、横位の貼付剥離痕に1段の輪積痕の装飾、1条の結節沈線による半弧文		063-28 (7D) 078-90 (9H)
101	中期	阿玉台	口縁部	外面結節沈線文を付随させた隆帯及び把手を付す、把手内に1段の装飾した輪積痕、把手から3条1単位の結節沈線を延ばす		078-10 (9H)
102	中期	阿玉台	胴部	外面断面三角の隆帯に添った結節沈線と装飾された輪積痕		077-29 (9H)
第71図 103	中期	阿玉台	胴部	外面隆帯の剥離面に1段の装飾された輪積痕と結節沈線文		083-39 (9H)

挿図No.	時　期	型式（分類）	部　位	文　様　調　整	備　考	遺物番号 ・出土地点
104	中期	阿玉台	口縁部	外面内側に2条1単位の結節沈線を付随させた断面三角形の隆帯を楕円形に貼付、内に1段の装飾された輪積痕		078-98 (9H)
105	中期	阿玉台	胴部	外面2条1単位の結節沈線による波状文		078-84 (9H)
106	中期	阿玉台	胴部	外面隆帯に沿った幅広の爪形文		7C-2
107	中期	阿玉台	胴部	外面複数条の角押文による三角文か		076-2 (8H)
108	中期	阿玉台	口縁部	外面口唇部ナデ、直下縄文（羽状縄文か）		103-5 (10B)
109	中期	勝坂系	口縁部	内湾する波状口縁、口唇部細かい爪形文、口縁部爪形文を施した渦巻き状隆帯を貼付、区画内に縦の沈線を充填		083-2 (9H)
110	中期	勝坂系	胴部	外面区画内を縦の沈線にて充填		080-24 (11D)
111	中期	加曽利E	胴部	外面沈線区画された磨消縄文		061-8 (8E)
112	中期	加曽利E	胴部	外面単節縄文に縦の沈線		7E-5
113	中期	加曽利E	胴部	外面単節縄文		114-20 (13G)
114	中期	加曽利E	胴部	外面頸部無文帯の下、横位の押捺を施した隆起線文を貼付、胴部縄文		2B -3
115	中期		口縁部	口縁部肥厚にて輪積痕を残す、無文		表採-8 (10B)
116	中期		胴部	内外面接合痕、無文		102B-1 (10B)
117	中期		胴部	内外面接合痕、無文		102-3 (10B)
118	中期		胴部	外面縄文に磨消擦痕を残す、横位の刻目を施した細い隆帯に胴部縄文		101-1 (12E)
119	中期		胴部	外面縄文に磨消無文帯		079-15 (10E)
120	中期		胴部	外面縄文		10E-9
第72図 121	後期	加曽利B	口縁	浅鉢、口唇部尖り、内面3条の横位押引沈線、外面口唇部沈線から変化した稜、無文	精製	9E-6
122	後期	加曽利B	口縁部	口縁部外反あるいは直立、口唇部面取り、外面口唇部直下縄文を沈線で区画する2段の横帯文に上下対の弧線文か	精製	069-9 (8D)
123	後期	加曽利B	口縁部	外面口唇部入念な調整にて無文で尖る、以下単節斜縄文	精製	7D-7
124	後期	加曽利B	胴部	薄手、外面平行沈線の横帯文	精製	7D-8

挿図No.	時　期	型式（分類）	部　位	文　様　調　整	備　考	遺物番号・出土地点
125	後期	加曽利B	胴部	外面上下対の弧線文	精製	069-42（8D）
126	後期	加曽利B	胴部	外面入組文を持つ横帯文か	精製	069-12（8D）
127	後期	加曽利B	胴部	外面篦描沈線による入組文をもつ横帯文、菱形文か	精製	7E-1
128	後期	加曽利B	胴部	外面無文地に矢羽状沈線文	精製	8D-3
129	後期	加曽利B	口縁部	波状口縁、内面口唇部に稜を持ち外面口唇部刻目、地文に単節斜縄文	粗製	2B-1
130	後期	加曽利B	口縁部	口唇部面取り、内面口唇部直下1条の沈線、外面縄文を地文に口唇部直下連続押圧を施した1条の粘土紐	粗製	086-4（7D）
131	後期	加曽利B	口縁部	口唇部面取り後内面口唇部直下に1条の緩やかな沈線、外面口唇部直下連続押圧を施した1条の粘土紐、縄文を地文に条線による弧状文	粗製	104-17（10B）
132	後期	加曽利B	口縁部	口唇部面取り後内面口唇部直下に沈線から変化した稜、外面に連続押捺、地文に縄文に条線文	粗製　外面煤付着	073-1（9E）
133	後期	加曽利B	口縁部	口唇部面取り、内面口唇部直下に緩やかな1条の沈線、外面縄文を地文に口縁部2条の連続押圧を施した粘土紐	粗製	086-4（9E）
134	後期	加曽利B	口縁部	口縁直立、口唇部面取り、内面口唇部直下緩やかな2条の沈線、外面縄文を地文に口縁部に2条の連続押圧を施した粘土紐	粗製	10B33-1
135	後期	加曽利B	口縁部	口唇部尖り、内面口唇部直下1条の沈線から変化した稜、外面無節斜縄文	粗製	9D-1
136	後期	加曽利B	口縁部	口唇部面取り、内面口唇部直下緩い1条の沈線、外面無文地に条線による斜格子目文	粗製	4D-1
137	後期	加曽利B	口縁部	口縁部緩やかに内湾、口唇部面取り沈線、外面単節斜縄文	粗製	4D-2
138	後期	加曽利B	胴部	外面棒状工具による入組文を持った横帯文か、以下無文地に篦状工具による斜格子目文	粗製	069-15（8D）
139	後期	加曽利B	胴部	外面縄文を地文に入組文を持った複数段の横帯文に弧線文か	粗製	7E-1
140	後期	加曽利B	胴部	外面縄文を地文に半截竹管による斜位の沈線に磨消縄文	粗製	2B-1
141	後期	加曽利B	胴部	外面縄文を地文に半截竹管による斜位の沈線、磨消縄文、弧状文か	粗製	2B-4
142	後期	加曽利B	胴部	外面縄文を地文に条線	粗製	7C-2
143	後期	加曽利B	胴部	外面縄文を地文に半截竹管による斜位の沈線	粗製	2B-3

挿図No.	時　期	型式（分類）	部　位	文　様　調　整	備　考	遺物番号・出土地点
144	後期	加曽利B	胴部	外面縄文を地文に斜位の条線文	粗製	10C61-67
145	後期	加曽利B	胴部	外面縄文を地文に条線文	粗製	073-1 (9E)
146	後期	加曽利B	胴部	外面縄文を地文に弧状条線文	粗製	073-2 (9E)
147	後期	加曽利B	胴部	外面無文地に条線による斜格子目文	粗製	4C-1
148	後期	加曽利B	胴部	外面無文地に篦状工具による斜格子目文	粗製	069-17 (8D)
149	後期	加曽利B	胴部	外面無文地に複数の弧状の平行沈線	粗製	10B-2
150	後期	加曽利B	胴部	外面縄文を地文に平行沈線による円あるいは弧線文か	粗製	7C-2
151	後期	加曽利B	胴部	外面斜縄文	粗製	7D-9
152	後期		胴部	外面斜縄文	粗製	10E34-2·8
153	後期		胴部	外面斜縄文	粗製	8E-2
154	後期		胴部	外面単節縄文	粗製	082-5·28 (10C)
155	後期		口縁部	口縁部緩やかな面取り、外面縄文	小形土器?	049-3 (7D)
156	後期		口縁部	口縁部緩やかな面取り、外面縄文	小形土器?	049-1 (7D)
157	後期		口縁部	外面口唇部直下半截竹管による横位の平行沈線、胴部無文地に半截竹管による曲線を主体とした幾何学文	小形土器（ミニチュア）、158と同一個体	075-4 (10E)
158	後期		底部	外面半截竹管による曲線を主体とした幾何学文	小形土器（ミニチュア）、157と同一個体	075-1 (10E)
159	後期？		口縁部	屈曲あるいは、丸みを帯びた胴部から直立した口縁、口唇部面取り、外面口縁部2段に区画された横位の平行沈線区画内に縦位の沈線を充填		5C-3
160	後期？		胴部	外面ミガキが施された無文地に円あるいは弧状の沈線		054-89 (7E)
161	後期		口縁部	小型、口縁部屈曲して立つ、内外面とも沈線区画された細かな縄文を残す	異形台付土器	069-38 (8D)

第4章　弥生時代

第1節　遺構

1．竪穴住居（第31表）

弥生時代の竪穴住居は調査区内では13棟見つかった。規模や主軸方位等の計測値については観察表に記載したので，以下の記述では省略する。

SI046（第73図，図版9）

調査区中央部に位置する。平面形は円形である。4本柱の主柱穴は無く，細く浅い壁柱穴が巡らされている。壁際のものは6本で，やや内側に位置するものは8本である。内側に位置するものがすべて柱穴かどうかは断定できず，特に炉に近いものは疑わしい。また，中央にもピットが存在するが，これも柱穴かわからない。出入り口部にはやや規模の大きい掘り込みがある。炉は中央からやや片側に寄っている。床面には硬化面が炉の周囲から出入り口側にかけて広がっている。出入り口部分付近の竪穴壁から約60cm外側に深さ60cmのピットがあるが，これも伴うものかわからない。覆土は黒褐色土主体で，自然堆積と思われる。

遺物はあまり多くなく，散在的に出土している。

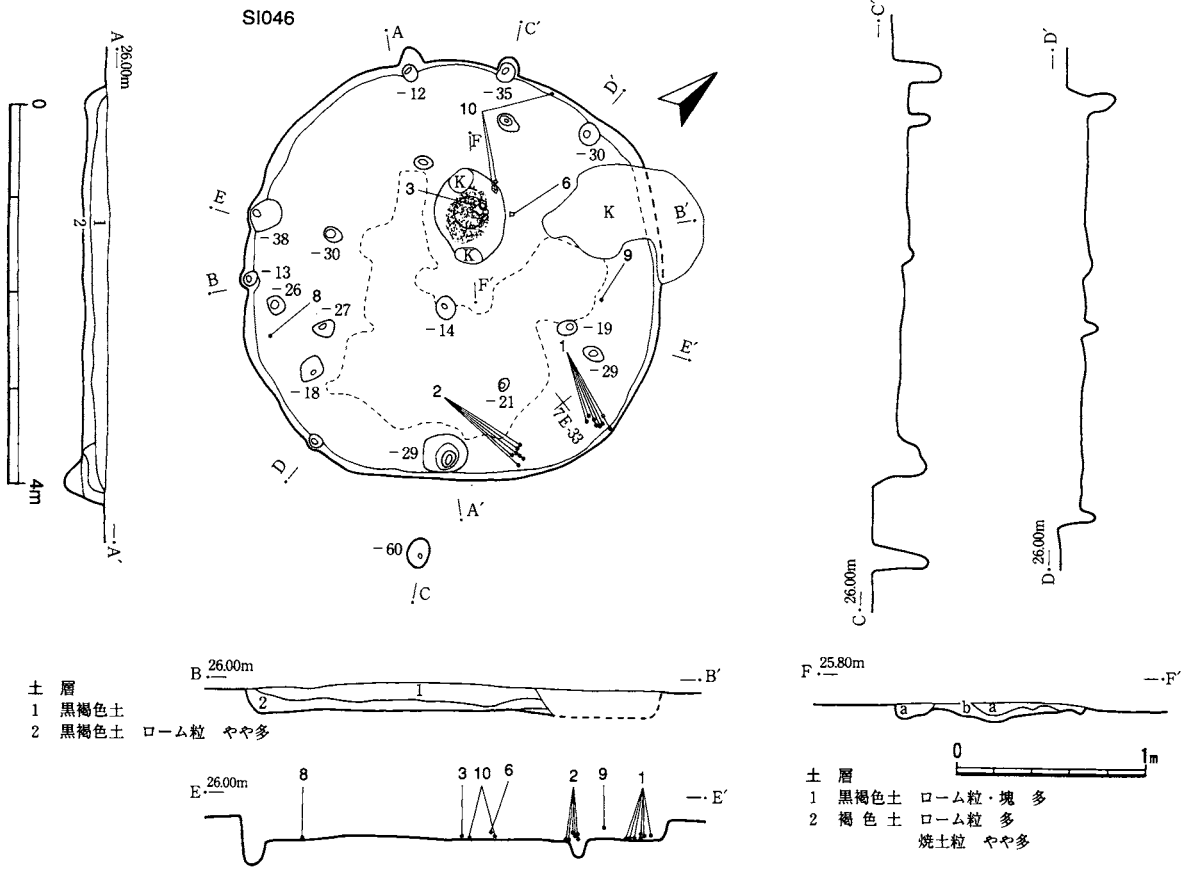
SI072（第73図，図版9）

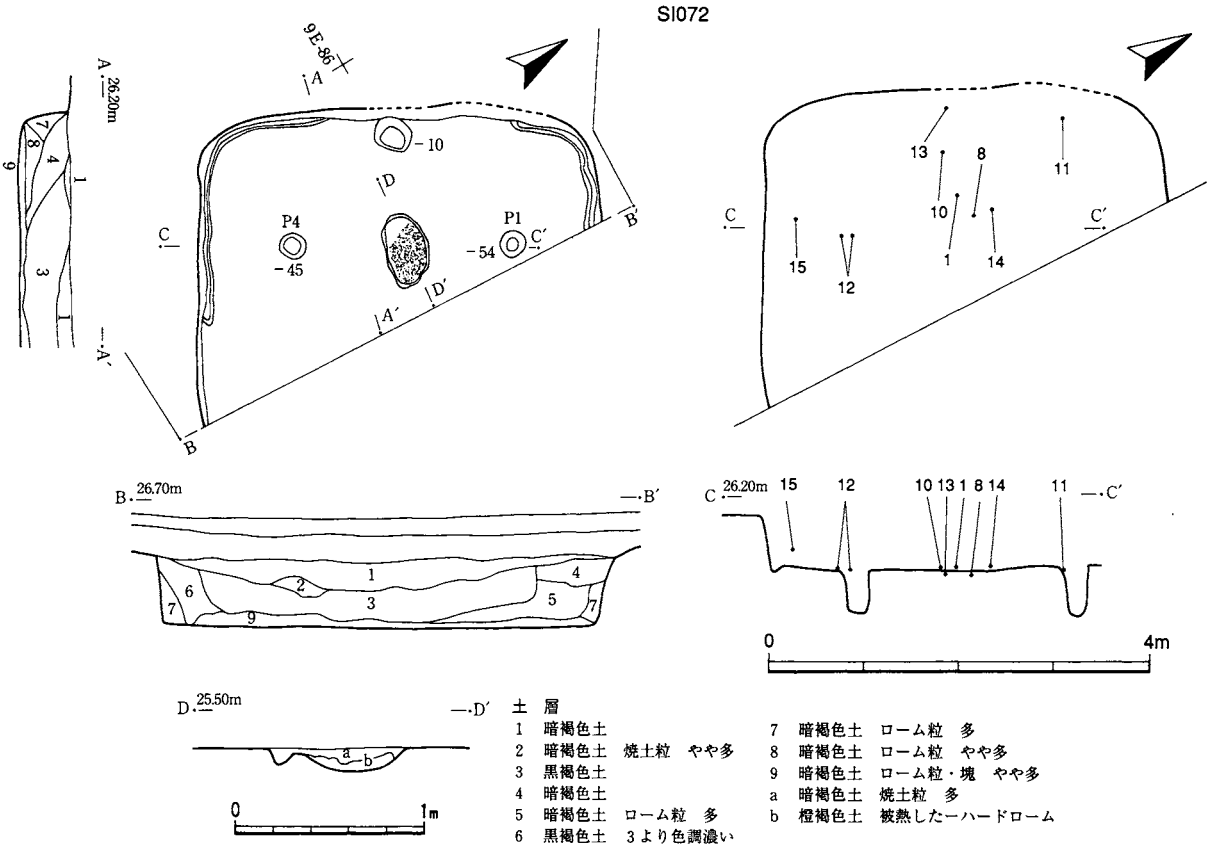
調査区南部やや中央寄りに位置する。東側が調査区外となるため，発掘調査したのは，炉のある方の片側2/5程度である。平面形はやや隅の丸い長方形であろう。4本柱の主柱穴が存在すると思われるが，調査区内で見つかったのは西側の2本である。北西壁際中央に深さ10cmのピットが存在するが，本遺構を構成するものかわからない。なお，竪穴住居観察表に記載した面積は推定値であるが，柱穴間の長さが発掘した2本の柱穴と全て同じであること，柱穴から壁までの間隔が発掘した部分と同様のバランスであること，の2点を仮定して算出したものである。目安程度のものであることを断っておく。壁溝は北隅・西隅付近に見られるが，北西壁中央と南西壁中央はまわらない。北東壁側は調査区外に続いていく。炉は2本の柱穴を結ぶラインの中央に位置する。出入り口は調査区外の南東壁側にあると考えられる。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体とするレンズ状の堆積で，3層以上には遺物もほとんど含まれていない。自然堆積と思われる。

遺物の出土は少なく，分布は散在的である。床面から下層にかけて出土している。

SI073（第74図，図版10）

調査区南部やや中央寄りに位置する。平面形はやや隅の丸い長方形である。西壁側が攪乱により破壊されている。4本柱の主柱穴は無く，他に柱穴や出入り口に関わるピットも見つからなかった。床面はハードローム層に達しており，やや凹凸がある。全体に硬質であるが，中央部が周囲よりもやや軟質である。炉の所在は不明である。中央から西寄りに焼土範囲があるが，床面上に炭化材と他に焼土範囲が見られることから，炉であるか判然としない。ただし，東西に長軸をとる他の竪穴住居の多くが，西寄りに炉をも





第73図 SI046・072

つことから，本遺構も同様である可能性が高い。炭化材・焼土の分布は北壁側に多い。家屋の焼却または焼失に伴うものであろう。その上の覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体とし，自然堆積と思われる。

遺物の出土は非常に少ないが，土器小片4点を図示した。

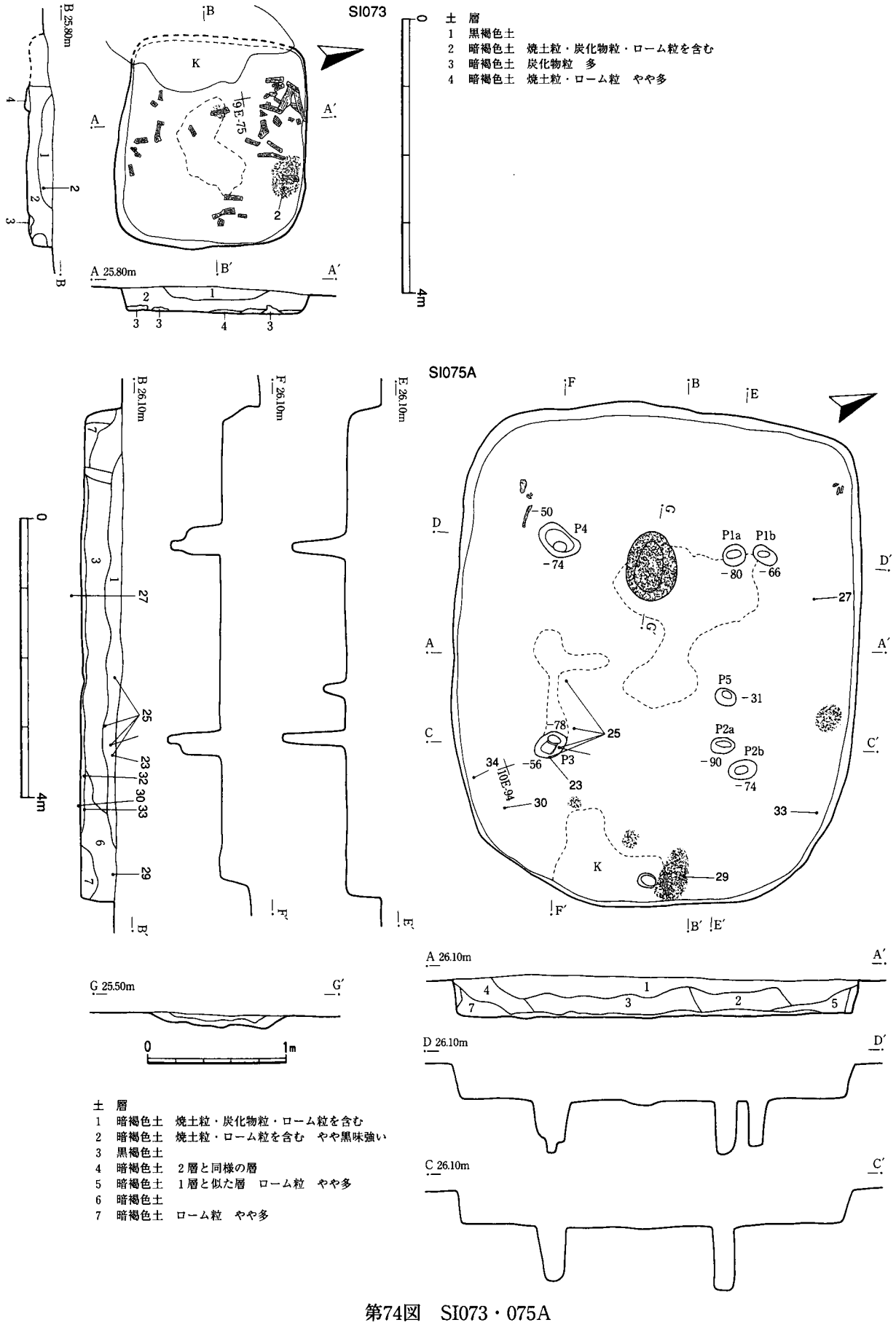
SI075A（第74図，図版10）

調査区南部に位置する。平面形は隅丸長方形で，東壁はかなり丸みがある。4本の主柱に伴う柱穴があるが，北東側の柱穴（P1）と南東側の柱穴（P2）が2箇所ずつある。4箇所ともかなりの深さがあることから，建て替えが考えられる。P3・P4は各々1箇所であるが，底面の深さに段差があることから，こちらも少々柱位置が動かされていると思われる。P1・P2の内側の柱穴をP1a・P2aとすると，P1a・P2aの間にP5が位置する。これらは一直線上に並ぶことから，組み合わさることが考えられる。P5は深さ31cmであり，補助柱穴であろう。これにより，必然的にP1b・P2bの組み合わせとなる。P1a・P2aは深く，P1b・P2bはやや浅いことから，断定はできないがP3・P4についても同様の組み合わせとなる可能性が考えられる。柱穴間のプランもバランスが良いと思われる。この組み合わせが妥当であるならば，主柱は内側からやや外側への移動あるいはその逆となる。新旧の判定は難しい。柱穴の形は長楕円形で，板材ないしは半裁丸太を用いた柱であったと考えられる。出入り口部の東壁際中央には小規模なピットがある。深さの記録が漏れてしまったが，写真を見る限りではあまり深くないようである。東壁際は攪乱を受けているが，床面が若干削られた程度である。床面はハードローム層に達しており，概して柱穴間の外側が若干高く，ほぼ平坦である。柱穴の内側は，ローム塊を突き固めて貼り床状にしており，やや軟質な範囲がある。炉はP1とP4を結ぶラインのほぼ内側中央に位置する。ほぼ全面的に焼けている。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体で，自然堆積と思われる。床面上には少量の炭化材と焼土が所々に見られる。

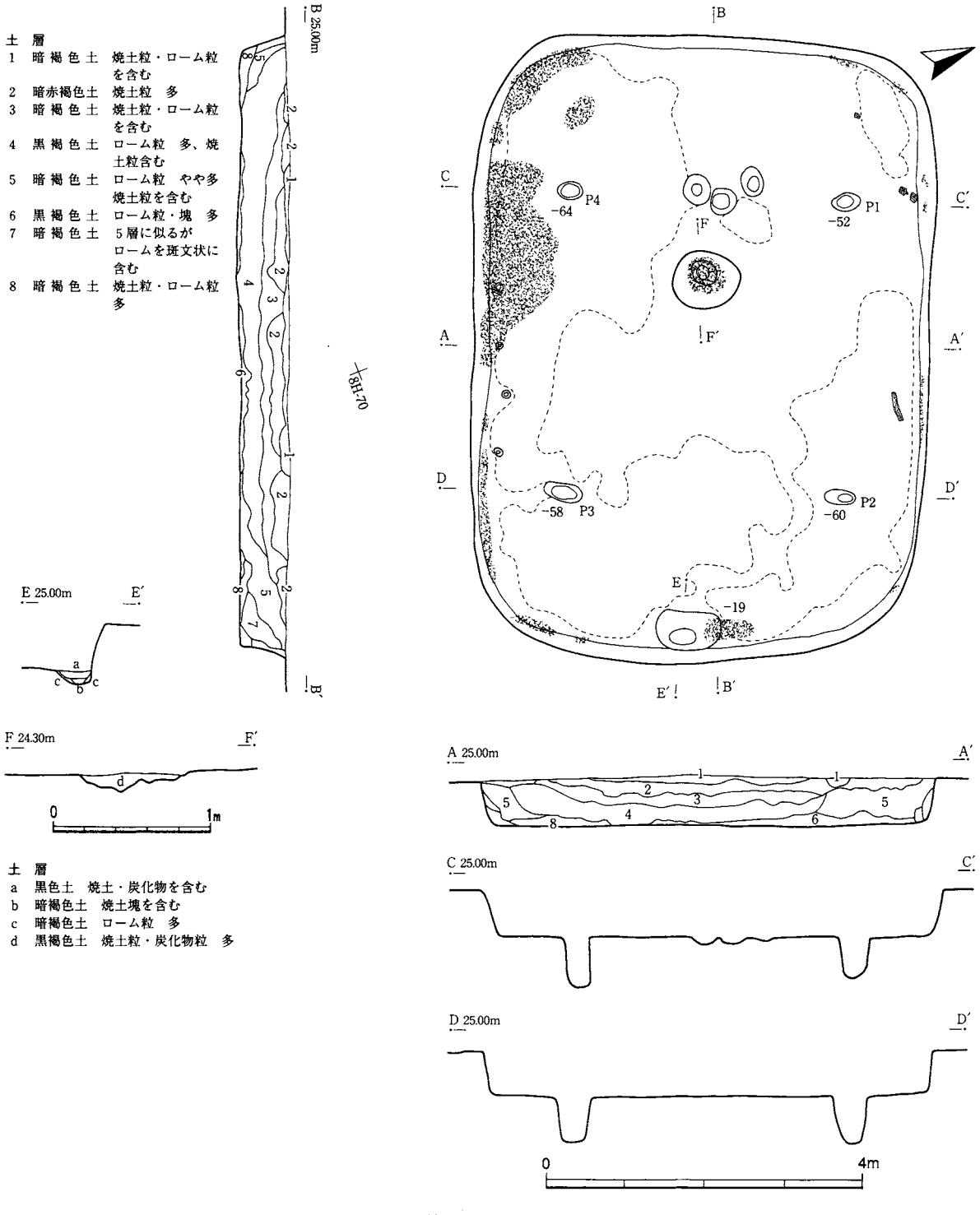
遺物の出土はあまり多くない。分布も集中するところはないが，南東側がやや多い。図示した遺物の高さは床面・下層と上層に分かれる。

SI076（第75・76図，図版10・11）

調査区東部に位置し，平面形は隅丸長方形である。4箇所の主柱穴があるが，平面形が長楕円形であり，柱は板材ないし半裁丸太と考えられる。柱穴は竪穴の規模の割りに小さい。主柱間はやや距離があり，柱穴内の空間が広い。短軸の東壁側のP1とP4間に浅いピットが3箇所あるが，補助柱穴であろうか。しかし，他には補助柱穴が見られないこと，また炉に近いことから，補助柱穴ではなく，台所機能に関わるものかもしれない。長軸の南壁際中央付近に，壁柱穴が4箇所ある。本来はぐるりと廻っているものと考えられるが，小規模なため，他には見つかっていない。出入り口部の東壁際中央には，不整な楕円形状の掘り込みがある。規模は大きいが，深さは19cmとやや浅い。床面は中央から北隅付近までは軟質で，他は硬化している。出入り口部ピット奥からP3側にかけての部分が特に硬化している。炉は中央から西寄りに位置する。P1とP4を結んだラインより内側である。炉の中央は凹んでいる。床面上では焼土の堆積が南壁を中心として壁際に見られる。家屋の焼却が行われたものと思われる。中央部には焼土の濃い分布がないが，片づけられたのであろう。覆土は大きく見れば，下半分に黒褐色土（4層）が厚く堆積し，その上の暗褐色土（3層）をはさんで，上層には再び焼土を多く含む層（2層）が見られる。4層・3層は若干の焼土が含まれるものの，自然堆積と思われる。2層の焼土は床面上の焼土とは異なり，竪穴住居廃絶後の



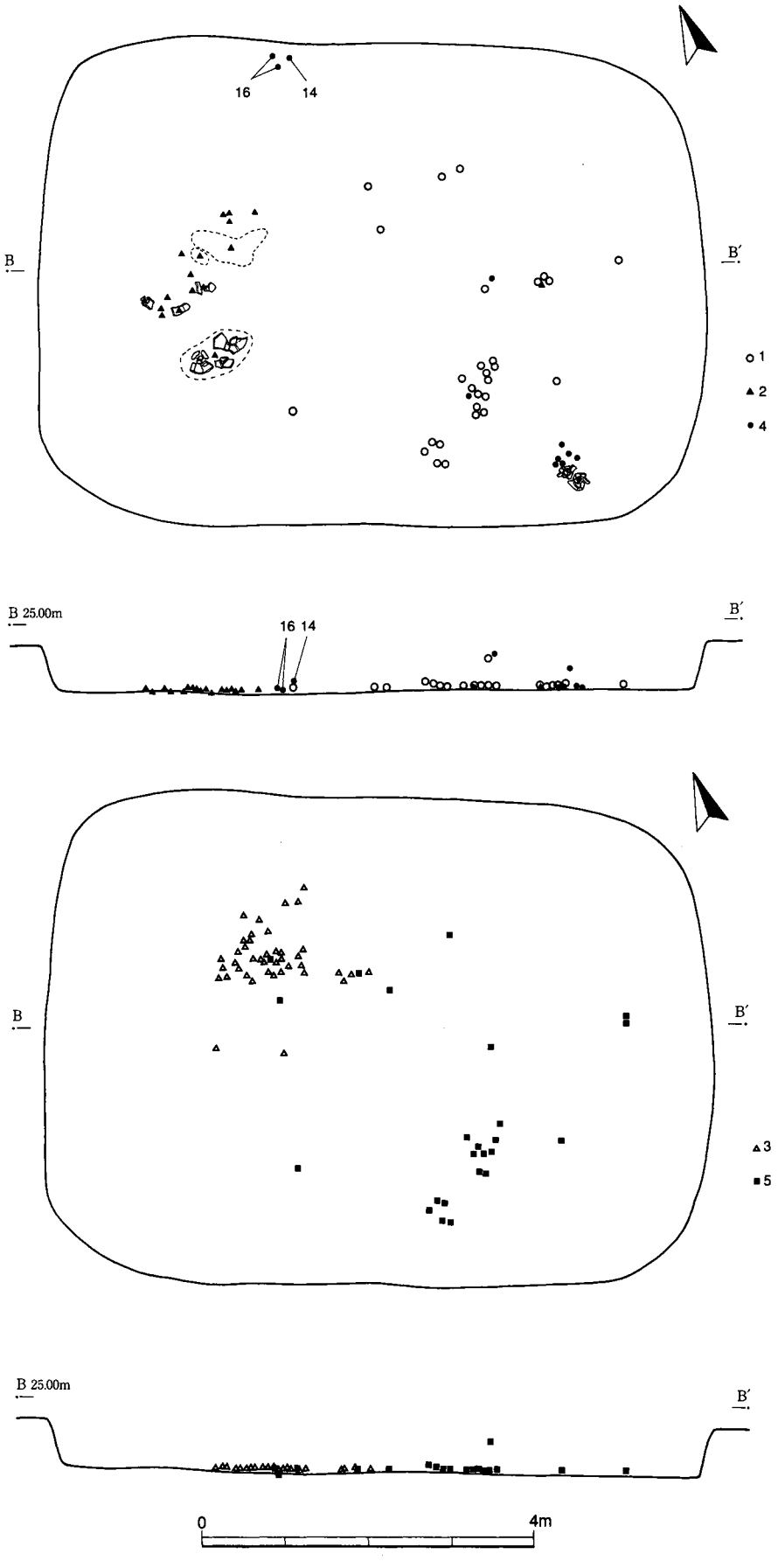
第74図 SI073・075A



第75図　SI076

窪地に廃棄されたか，焼却があったものと思われる。

遺物は床面上で遺存の良い土器が5点出土した。いずれも割れているが，各々集中的な分布状態である。分布の主体は，壷1がP3の内側，壷2が炉の西寄りで，P1・P4間，壷3は炉の北側，壷4はP3から南東隅寄り，壷5はP3の内側，西寄りである。また，石鏃14と敲き石16が北壁際北西隅寄りの床面・下層から出土している。石製品はその他に位置がわからないが，砥石15が出土している。その他は少量の土器片であり，床面・下層を除いて覆土に含まれる遺物は少ない。



第76図　SI076遺物出土状況

SI079（第77図，図版12）

調査区南部に位置し，平面形は隅丸長方形であるが，やや方形に近い形態である。4箇所の主柱穴がある。平面形は小さいが，深さはかなりある。補助柱穴や壁柱穴は見つかっていない。出入り口部の東壁際中央には，比較的大きな浅い掘り込みがあり，その奥には深さ36cmのピットがある。奥のピットは階段梯子など出入り口施設に伴う柱穴，壁際のものは貯蔵穴と考えられる。床面はハードローム層に達している。硬化面は比較的明瞭であり，中央と西壁側を除く床面に広がりが見られる。炉は西側に寄っており，P1とP4を結ぶラインの中間がほぼ炉の中央である。覆土は上層に焼土層が見られるが，その下層は暗褐色土・黒褐色土主体であり，基本的には自然堆積と思われる。

遺物はそれほど多くはない。平面的には中央部の炉・P1寄りに集中している。椀1・台付甕2・甕3は上層出土で，他の遺物よりもやや新しい様相をうかがえる。紡錘車20も上層の遺物で，P4近くから出土している。その他の遺物では，位置を記録できた甕11・壷17・甕18は，下層・床面からの出土である。

SI080（第78図，図版12）

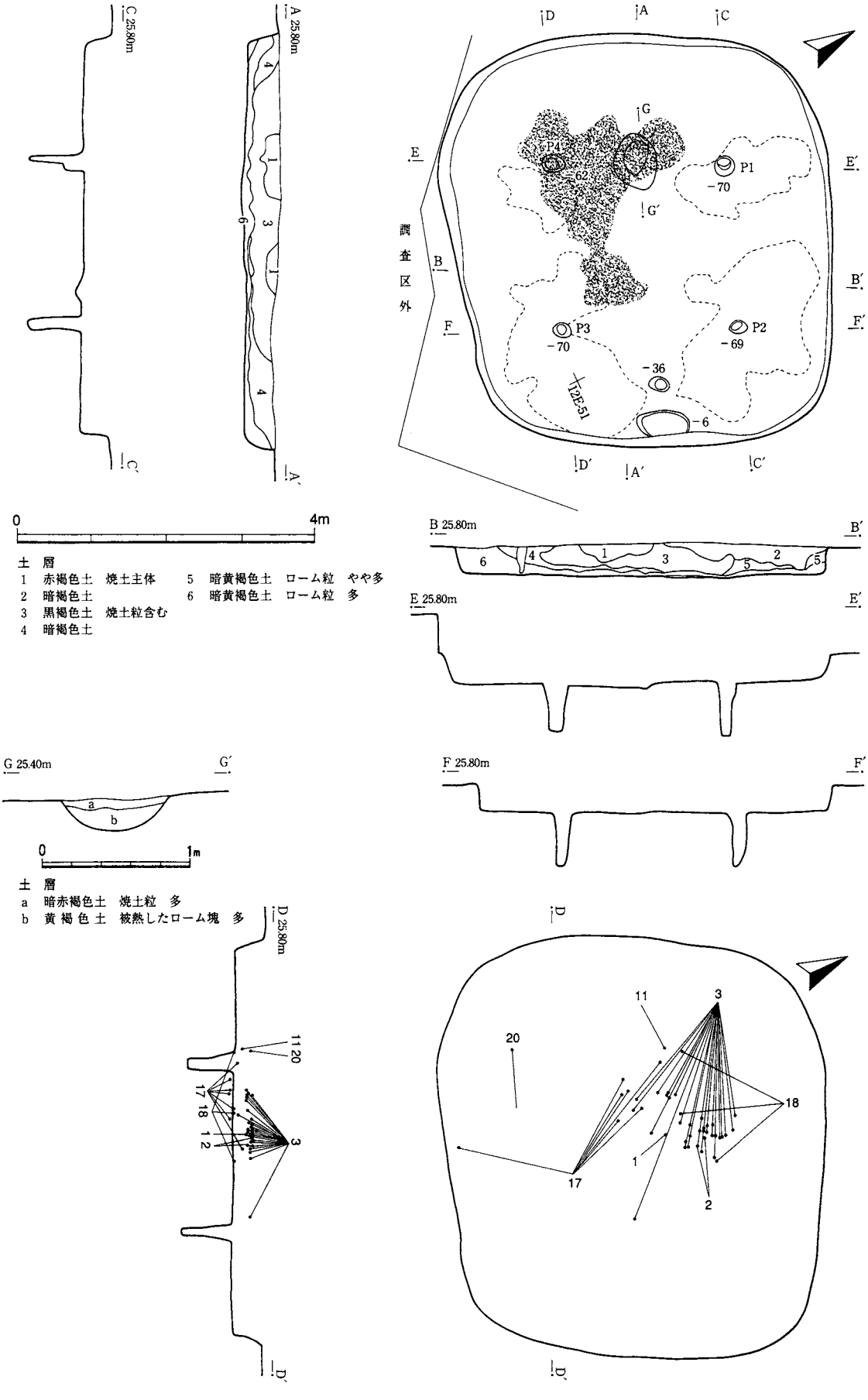
調査区南部に位置する。平面形は隅丸長方形と楕円形の中間的な形態である。小規模なプランであり，4箇所の主柱穴は見られない。また，壁柱穴も見つかっていない。出入り口側の南東壁際中央には，方形の浅い掘り込みがあり，貯蔵穴と思われる。竪穴の規模の割りには大きい。その奥には深さ29cmのピットがある。ピットの中心から壁まで80cm強あり，かなり離れてしまうが，出入り口施設に伴う柱穴と考えられる。床面はハードローム層に達している。硬軟の差は特に見られず，全体に硬質である。炉は中央からやや北西側に寄っている。火床部の周囲も凹んでおり，特に中央側に広がっている。炭化材が北側の床面や炉火床部近くに堆積している。覆土は上・中層は黒褐色土・暗褐色土であり，一気に埋め戻された土層ではないと思われる。

遺物は竪穴全体に散在的に見られる。蓋1と甕2は比較的遺存が良い。1は北隅近くの中層から，2は東隅の床面からの出土である。2の近くの床面からは砥石24も出土している。その他は土器片であり，量的にはそれほど多くないが，図示した点数は比較的多い。出土層位は床面から上層まで及ぶが，高い位置のものが多い。

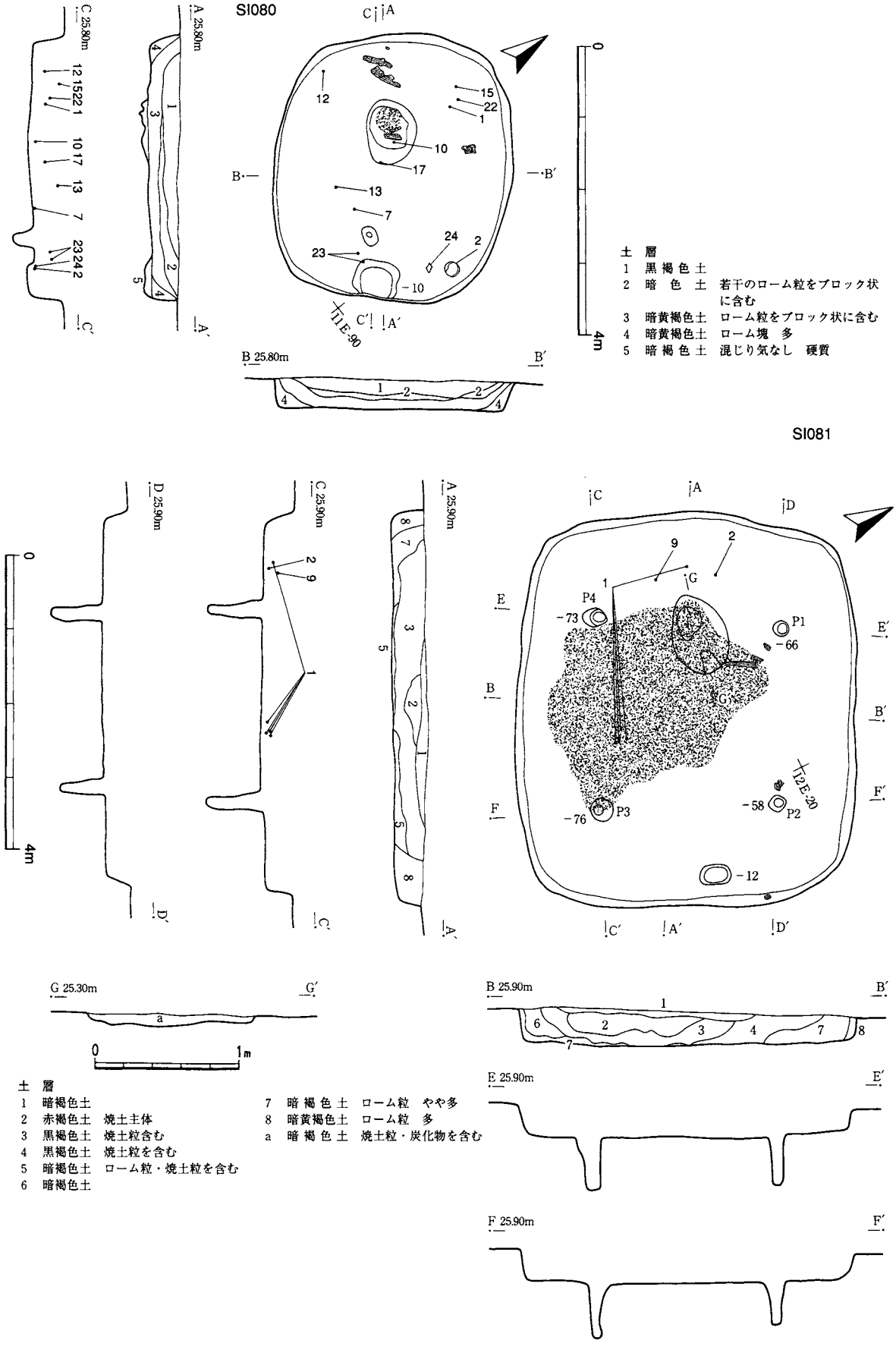
SI081（第78図，図版13）

調査区南部に位置し，平面形は隅丸長方形である。4箇所の主柱穴があり，柱穴の平面形は小さいが，深さはかなりある。補助柱穴や壁柱穴は見つかっていない。出入り口部の東壁際やや右（北）寄りに，やや大きい横長の掘り込みがある。深さは12cmであり，浅い。炉は中央から西側に寄っており，P1とP4を結ぶラインの中間がほぼ炉の中央である。焼土層が中央部の上層に堆積している。その下層は黒褐色土主体で，焼土はそれほど多くは含まれない。3層以下は基本的には自然堆積であり，窪地に，焼土を多く含む土が廃棄されたか，焼却行為があったのであろう。

遺物は少ないが，甕1は比較的遺存の良い土器である。平面分布は西壁側から中央部南側にかけて散在的である。層位はやや高い位置のものもあるが，概して下層・床面からの出土である。


C 25.80m
A 25.80m
C'
A'
0
4m
土 層
1 赤褐色土 焼土主体
2 暗褐色土
3 黒褐色土 焼土粒含む
4 暗褐色土
5 暗黄褐色土 ローム粒 やや多
6 暗黄褐色土 ローム粒 多
D
A
C
G
E
E'
P4
P1
-62
-70
G'
調査区外
B
B'
F
F'
P3
P2
-70
-69
-36
12E51
-6
D'
A'
C'
B 25.80m
B'
E 25.80m
E'
F 25.80m
F'
G 25.40m
G'
a
b
0
1m
土 層
a 暗赤褐色土 焼土粒 多
b 黄 褐 色 土 被熱したローム塊 多
D 25.80m
D'
11
20
17
18
1
2
3
D
D'
11
3
20
18
1
17
2

第77図 SI079



第78図 SI080・081

SI082（第79図，図版13）

調査区南部やや西寄りに位置する。平面形は隅丸長方形というよりは小判形とした方がふさわしい形態である。主柱穴は4箇所で，その他に5箇所のピットがある。P1・P2間の2箇所のピットのうち，中央寄りのものは深さもあり，補助柱穴と思われる。その近くのピットはやや浅いが，補助柱穴の可能性は考えられる。また，P4から約85cm西側にあるピットもP3・P4からほぼ直線上に位置し，補助柱穴と思われる。北壁際東寄りのピットと南壁際中央のピットは壁柱穴の位置であるが，壁柱穴にしては数が少なすぎる。ただし，南壁際のピットが浅いため，他のピットが見つからない可能性も考えられる。南壁際のピットは中央であり，位置的には悪くない。また，北壁際のピットはP2に対する補助柱穴かもしれない。出入り口部の東壁際には，隅丸長方形状の大きな浅い掘り込みがあり，貯蔵穴と思われる。壁溝が南壁付近と北西隅付近に見られ，全体の1/2強程度巡っている。床面は中央がやや軟質であるが，他は硬化している。炉は中央から西寄りに位置する。中心はP1とP4を結んだラインよりやや外側となる。炉の平面形はかなり大きい。焼土層が中央から西寄りにかけての上層に堆積している。その下層は黒褐色土，暗黄褐色土で，焼土は含まれるが，多量ではない。SI081など他の竪穴建物と似た傾向である。窪地での焼却か，焼土の廃棄が考えられる。3層以下について埋め戻しの様相はうかがえないが，下層はローム粒の含有が多い。

遺物は竪穴の規模が大きいことを考えるとあまり多くない。平面的には東壁側から北壁際にかけて散在的に分布している。甕1・甕2はやや大型の破片である。1は床面から伏せた状態で出土し，2は床面から上層まで散っている。図示した他の遺物の層位は床面から中層まで見られる。

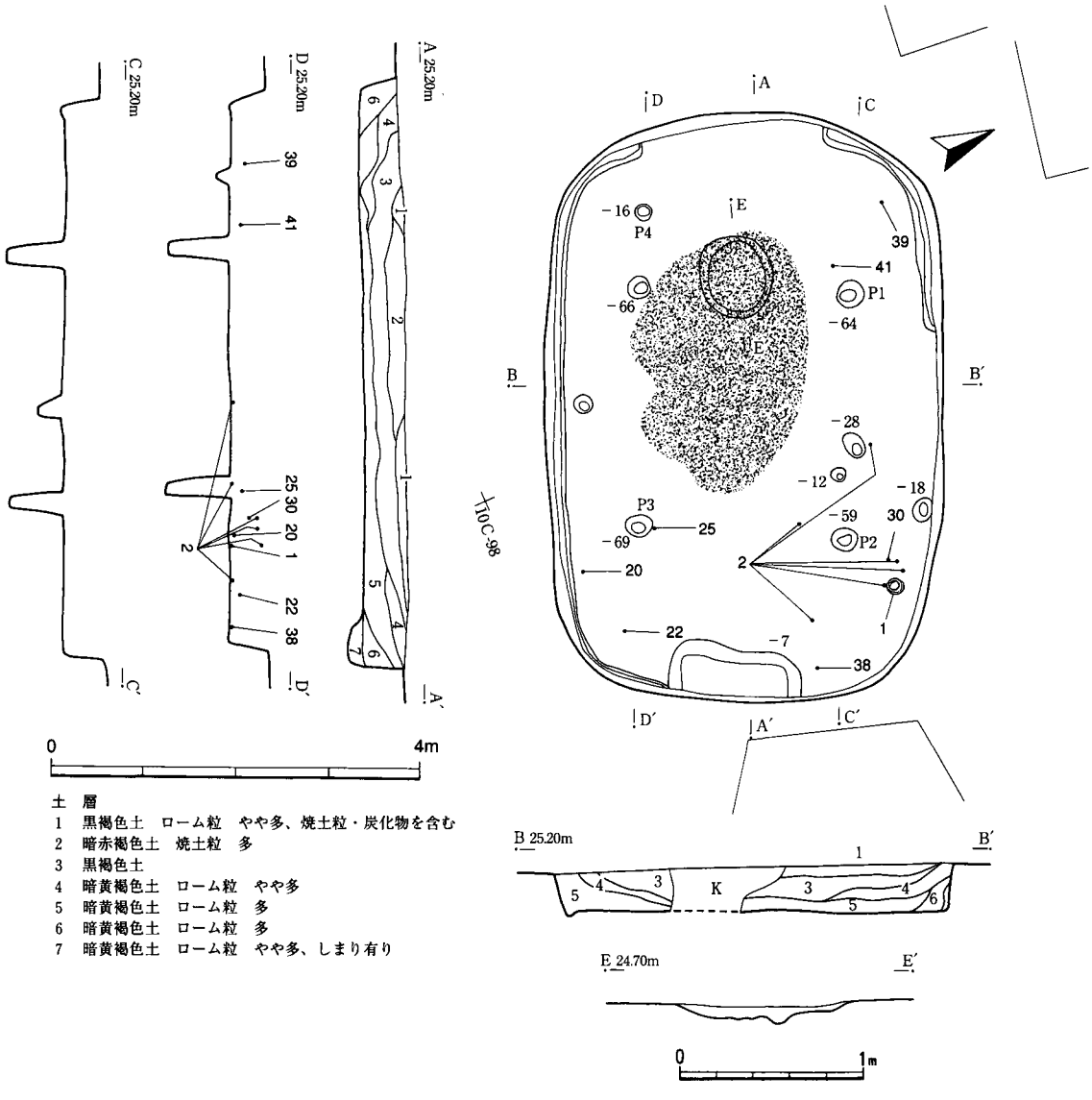
SI098（第80図，図版13）

調査区南部に位置する。北西壁から北東壁北寄りにかけての部分が調査区外であり，発掘調査したのは全体の3/4程度である。平面形は隅丸長方形であるが，やや方形に近い。4本柱の主柱穴が存在するが，北側の柱穴（P1）は調査区外に位置する。他の3箇所は調査区内で見つかり，P2・P3は横長の（長）楕円形であることから，柱は板材ないし半裁丸太と考えられる。出入り口部の南東壁際には，やや規模の大きい浅い掘り込みが中央やや右寄りの位置にある。その他に8箇所のピットがあるが，本遺構を構成するものかわからない。床面は平坦で，全体に硬質である。特に踏み固められた面は認められない。炉は中央から北西壁側寄りに位置する。P4と調査区外のP1を結ぶラインの内側中央に位置するものと思われる。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体で，自然堆積と思われる。

遺物の出土は少ないが，南関東系の壷口頸部が東隅の床面から伏せた状態で出土した。また，砥石14が南東壁側やや左寄りの下層から出土している。その他，位置を記録した土器片は南東壁側・北東壁側から希薄な出土状況である。層位は下層から上層まで見られる。

SI100（第80図，図版14）

調査区南部に位置する小型の竪穴住居である。北側が調査区外である。平面形は隅丸長方形と思われるが，長軸長が不明であり，方形に近い形態かもしれない。床面には3箇所のピットがあるが，浅く，位置もやや不整である。南側の柱穴及び出入り口施設に伴うピットとなるか疑問である。床面はほぼ全面が硬化している。炉は北側の調査区外にあると思われる。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体で，自然堆積と思われる。



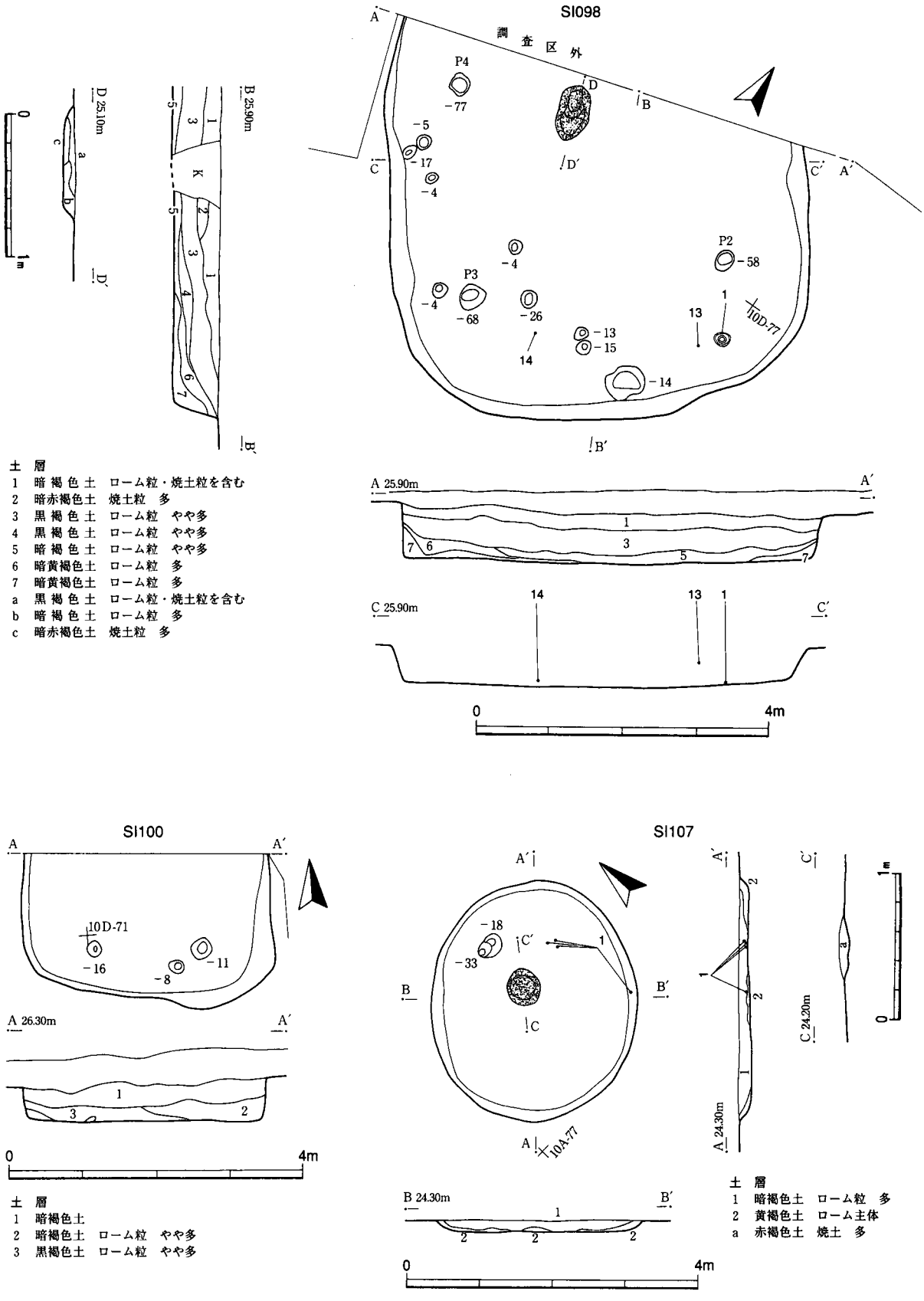
第79図 SI082

遺物は弥生時代のものは無く，奈良・平安時代の土器片がごく少量出土した。平面形の隅がやや丸みをもつこと，周囲に弥生時代の竪穴住居が多く所在することから，本項で扱ったが，奈良・平安時代の竪穴住居である可能性も考えられる。なお，他の弥生時代竪穴住居で，遺物量自体は奈良・平安時代の方が多い場合があり，遺物だけで時代の判定をするのは難しい。

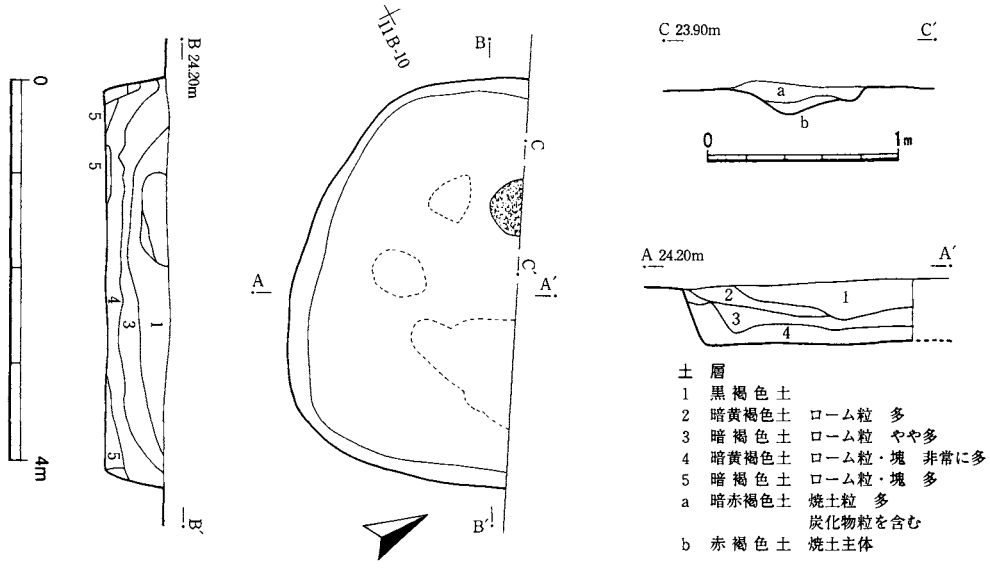
SI107（第80図，図版14）

調査区南西部に位置する。平面形は楕円形である。小規模なプランであり，4箇所の主柱穴は見られない。また，壁柱穴も見つかっていない。出入り口は南西壁側と思われるが，掘り込みは見られない。炉がプラン中央にかかる位置にあるが，中心はわずかに北側に寄っている。炉の北側にピットがあるが，本遺構に伴うものかわからない。2つのピットが重なったような形態である。深さも18cm，33cmで差がある。確認面から床面までは浅く，ソフトローム層中に留まる。

遺物量は少ないが甕1は比較的大型の破片である。炉の東側から出土している。



第80図 SI098・100・107



第81図　SI109

SI109（第81図，図版14）

調査区南西部に位置する。北側が調査区外であり，発掘調査したのは全体の半分強程度である。平面形は隅丸長方形である。主柱穴・壁柱穴，出入り口部に伴う掘り込みなどのピットは全て見つからなかった。炉は中央から西側に位置するが，一部は調査区外である。炉側に対向する東壁側が出入り口部であろう。床面は平坦で，硬化面が東壁側と炉の南側に認められる。覆土は上層が黒褐色土，下層が暗黄褐色土である。下層にロームが多いが，自然堆積と思われる。

遺物量は少なく，全て一括の取り上げである。甕1が比較的大型の破片である他は土器小片である。

第2節　遺物

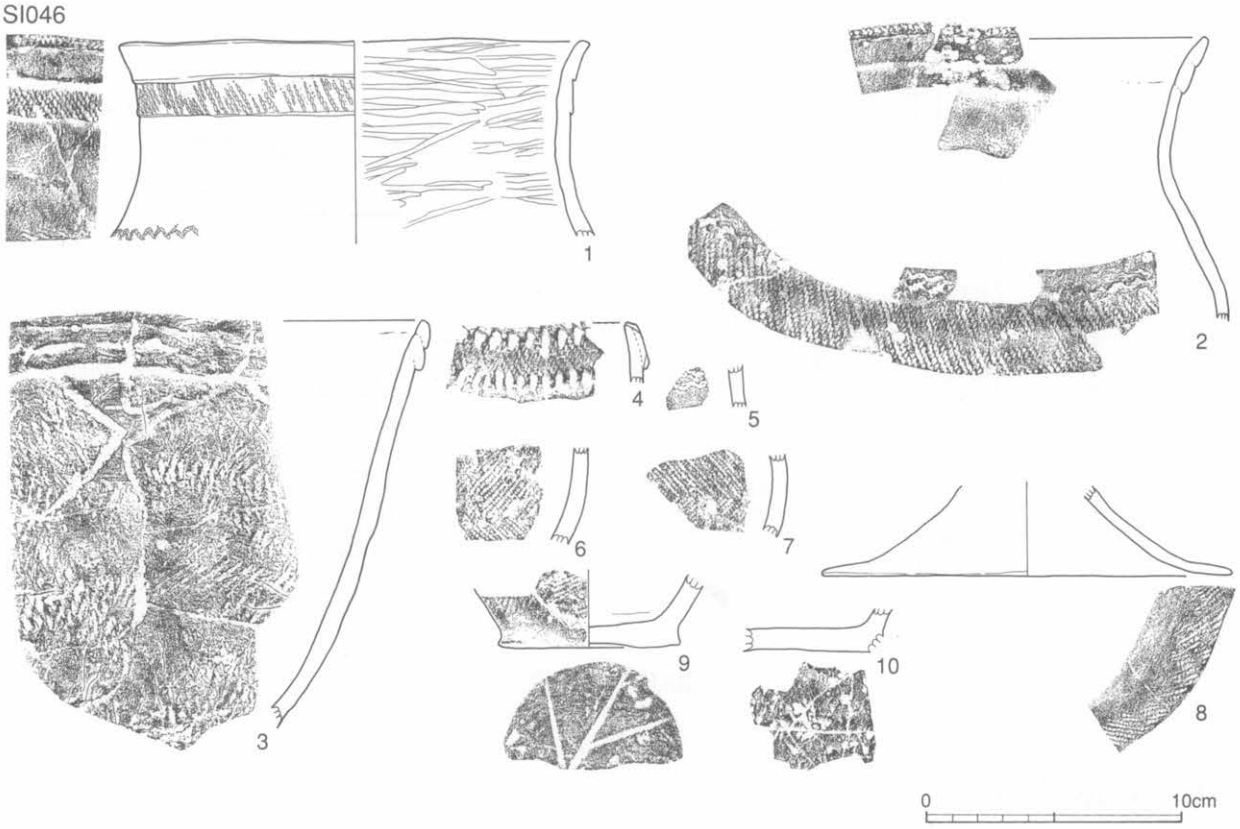
1．竪穴住居

SI046（第82図，図版70・76）

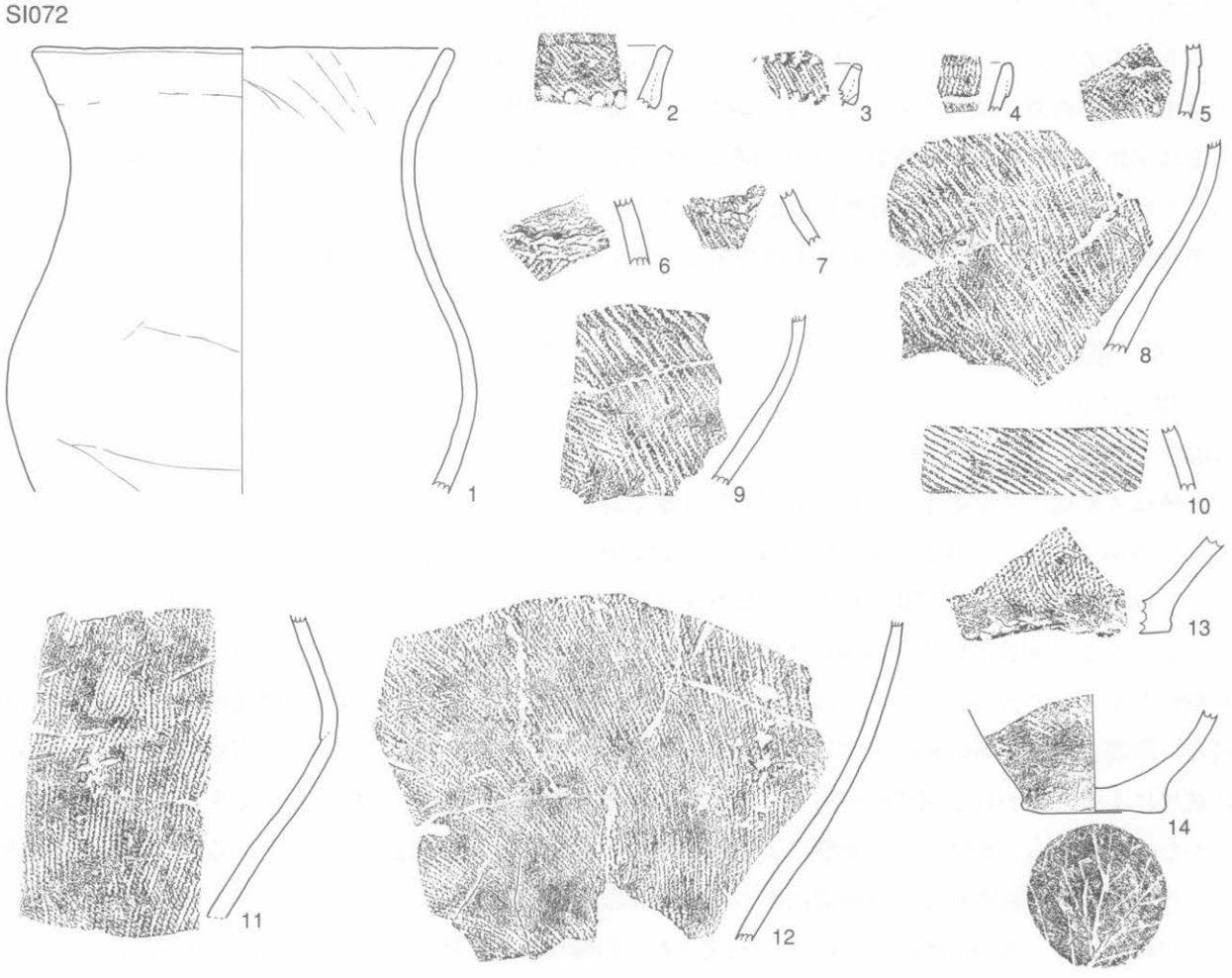
器種は4が椀，8が蓋または鉢である以外は甕である。1～3は2段の複合口縁をもつが，器形にかなり違いがある。1は口縁部外面上段は無文，下段は縄文（RL）が施文される。また，口唇部も下段縄文と同じ施文具による縄文が見られる。頸部外面は無文帯があり，その下に横位のS字状結節文が2条見られるが，そこで割れている。内面はナデ・粗いヘラミガキが施される。ナデは強くヘラケズリ状であり，砂粒が左から右に動いている。2は口縁部・頸部外面が無文であるが，口唇部は縄文原体による刻み目が巡る。胴部上位に2条の横位S字状結節文が巡り，その下に付加条縄文（L－RL）が施文される。内外面に被熱によると思われる剥離痕がある。3は胴部から口縁部まで直線的に開く器形である。口縁部はゆるやかな波状である。段は一部が調整により消される。また，一部に3段のところがある。胴部外面は無節の原体が無作為に施される。口縁部内面の一部に接合痕が残る。4は口縁部の破片で，帯状貼付を巡らす複合口縁である。外面は撚糸文（RL）が施文され，口縁部上下に縄文原体による刻み目が巡る。

5は2条の横位S字状結節文が巡り，1と同一個体と思われる。6・7は羽状縄文が施文されている。

SI046



SI072



第82図　SI046・072出土遺物

8は蓋として図化した。小破片から復元図化したため，実際の大きさは図と前後する可能性がある。口縁部内面は横位の斜縄文（RL）が施文される。その他はナデと指頭押捺による調整である。

9・10は底部周辺の土器片である。底部外面はともに木葉痕が残る。9の胴部外面は横位の斜縄文が施される。

SI072（第82・83図，図版69～71）

土器の器種は10が壷と思われる他は甕である。1は複合口縁をもつが段差はわずかで，接合痕はナデにより消される部分もかなりある。内外面とも文様は見られず，胴部外面はややヘラケズリ的な強いナデが右から左に施される。口縁部内面も強いナデが右下から左上へ施される。胴部内面は横方向のナデで，器面が荒れている。

2・3・4も口縁部が複合口縁の土器片である。2は口縁部・口唇部に縄文（単節RL）が施文され，複合口縁下端は棒状工具による刻み目が施される。内面の調整は横方向のヘラナデである。3は口縁部に横位の斜縄文（RL）が施文され，口唇部と口縁下端部には縄文原体による刻み目が施される。4も口縁部・口唇部に横位の斜縄文（RL）が施文される。

5は胴部片で，撚糸文（RL）が施文される。接合痕があり，その上下はナデにより撚糸文がやや消えている。6・7は頸部片で，2条の横位S字状結節文があり，その下に6は縄文（単節LR）が，7は付加条縄文（RL）と思われる文様が施文される。8・9・12は縦位及び斜位の撚糸文（RL）が施文されており，同一個体の可能性がある。被熱により内面が荒れており，特に12は剥落が顕著である。また，外面も所々で剥離が見られる。

10はかなり大型の土器の胴部である。横位の斜縄文（単節RL）が施される。内面は荒れ，剥離も著しい。

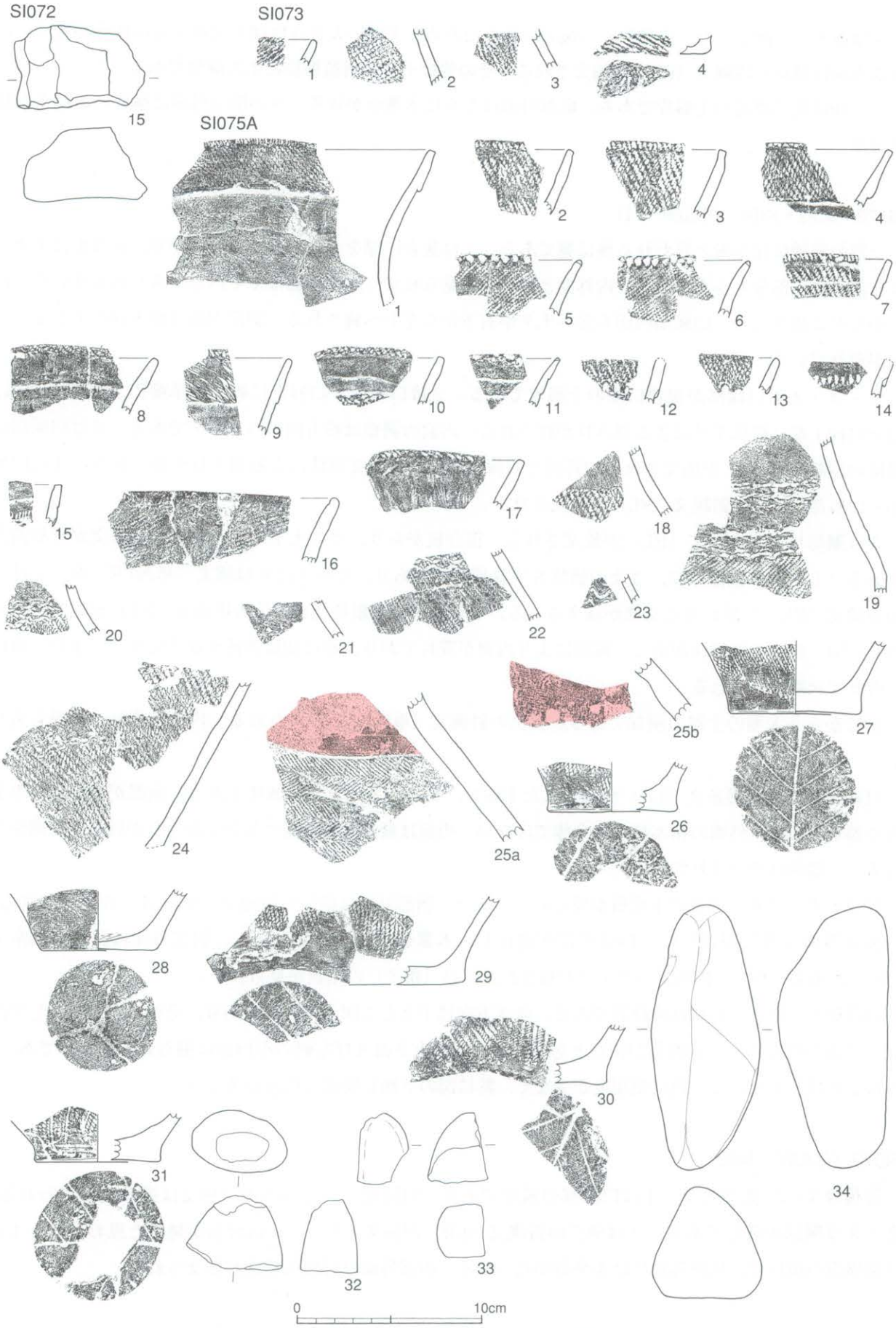
11はやや斜位の撚糸文（LR）が施された土器で，8・9・12とは別個体である。胴部がかなり丸みをもつ器形なので，外面の拓本は破片全体ではない。内面は最も丸みを持つ部分で接合痕が残る。一部煤が付着し，器面はやや荒れている。

13はわずかに残る底部に木葉痕が見られる。また，胴部外面は横位の斜縄文（単節RL）が施文される。内面は器面の荒れが著しい。14は底部が遺存し，木葉痕が鮮明に見られる。胴部外面は斜位の撚糸文（RL）が施文される。内面はヘラナデが施され，工具（指？）の圧痕が見られる。

15は砥石である。石材は流紋岩である。研ぎ方向は主として図の横方向であり，その方向を縦にして図化した方が砥石らしい雰囲気が出たと思われる。図の上下面及び左側の小口面は擦られて滑らかであり，特に下面は凹んでいる。他は使用度が少なく，特に図の下側長側面は凹凸が著しい。

SI073（第83図，図版71）

器種はすべて甕である。1は口縁部の破片である。口唇部・口縁部外面の施文は撚糸文と思われる。2・3は胴部の破片である。2は横位の斜縄文（LR）が施文される。3は付加条縄文と思われる。4は底部周辺の破片で，底部外面には木葉痕が見られる。胴部外面は付加条縄文が施文される。



第83図　SI072・073・075A出土遺物

SI075A（第83図，図版69・71・72）

器種は25（a・b）が壷であるが，その他は甕と思われる。1～17は口縁部または口頸部の破片である。口縁部が複合口縁のものは1・2・3・4・5・7・8・9・12・14・15で，6・13も複合口縁と思われる。2・3は段差がないが，その上部の破片と思われる。10は2段の輪積痕がある口縁部，11は3段以上，15は2段以上の輪積痕のある口縁部である。施文・調整手法を見ていくと1～4・7・9は口縁部に横位の斜縄文が施文され，口唇部も同一原体による縄文が見られる土器である。1～4・7の縄文はRLである。2の口縁部は一部ナデにより，縄文が消されている。5は薄い複合口縁で，口縁部は横位の斜縄文（LR）が施文され，口唇部は縄文原体による刻み目が施される。6は5と同一個体と思われる。8は口唇部に縄文（単節RL？）があるが，口頸部は無文である。内面は斜め方向のヘラナデが施される。9も薄い複合口縁で，口縁部は無節の縄文または撚糸文が施文され，口唇部も同一の原体による施文が見られる。10は口縁部が無文で，頸部に無節縄文または撚糸文が施文される。口唇部の縄文は面取り後ではなく，丸みをもつ端部の内面寄りに施文される。11も口縁部は無文であるが，口唇部は内面からの押捺による刻み目が施される。12は口縁端部が欠損しており，施文は不明である。口縁部は横位の斜縄文（RL）が施文され，下端部は棒状工具による刻み目が施される。13も12と同様な施文であるが，口唇部も斜縄文が見られる。12と同一個体の可能性があるが，やや厚みが異なる点が気にかかる。14も口縁端部が欠損する。口縁部下端部はヘラ状工具による刺突が施される。15も薄い複合口縁である。わずかに残る口唇部に縄文が見える。口縁部下段部下端に櫛歯状工具による刺突文が施文される。16・17は口縁部が単口縁である。16は口縁部に横位の斜縄文（LR）が施文される。口唇部は無文である。口縁端部内面に一条の浅い沈線が見られる。器面がかなり摩耗している。17の口唇部は縄文が施文されるが，その他は無文で，外面はやや強い縦方向のヘラナデが施される。

18～22・24は縄文やS字状結節文のある甕の頸部・胴部破片である。18は頸部無文帯の下部に横位の斜縄文（RL）が施文される。端末の当たりが顕著である。19は上から無文帯，3条の横位S字状結節文，無文帯，3条の横位S字状結節文，横位の斜縄文（LR）と続く。内面はヘラナデが施されるが，器面の剥離がやや目立つ。20も無文帯の下部に3条の横位S字状結節文があり，その下部は横位の斜縄文または撚糸文（RL）が施文される。21は上部に無文帯，下部に縄文がわずかに見られるが，その間の施文が不明瞭である。22は上部に2条の横位S字状結節文，下部に付加条縄文が施文される。S字状結節文は付加条縄文の端末に重なるように施文されたものであろうか。2条の間に縄文が見られる。付加条縄文は下部の端末の当たりが顕著である。24は横位の斜縄文（RL）が施文されているものと思われる。

23は横位の櫛描波状文が施された甕頸部の破片である。

25（a・b）は壷胴部の破片で，同一個体である。南関東系の土器で，かなり厚みがある大型土器である。25aの上部はヘラミガキの後，赤彩される。その下部は横位の平行沈線文をはさんで，羽状の縄文帯となる。羽状縄文は上帯がRL，下帯がLRで，3単位見られる。25bは横方向のハケメ後ヘラミガキが施され，その後赤彩されるが，赤彩は器面の摩耗によりかなり失われている。25aも器面の剥離が著しく，赤彩の遺存は一部である。内面は外面以上に剥落しており，調整手法は全く観察できない。

26～31は底部周辺の土器片である。28以外はいずれも底部外面に木葉痕が残る。26の胴部は横位の斜縄文（RL）が施文される。胎土に小石の混入が多く，内面は小石が多く剥落したため，細かい凹凸がある。27・28は胴部に撚糸文と思われる施文（RL）がある。28の底部外面はナデが施され，木葉痕の痕跡はう

かがえない。わずかに縄文が見られる。29の胴部は横位の斜縄文または付加条縄文（RL）が施文される。30の胴部は横位の斜縄文（RL）が施文される。31の胴部の施文は撚糸文と思われる（LR）。28・31の内面は荒れが著しい。

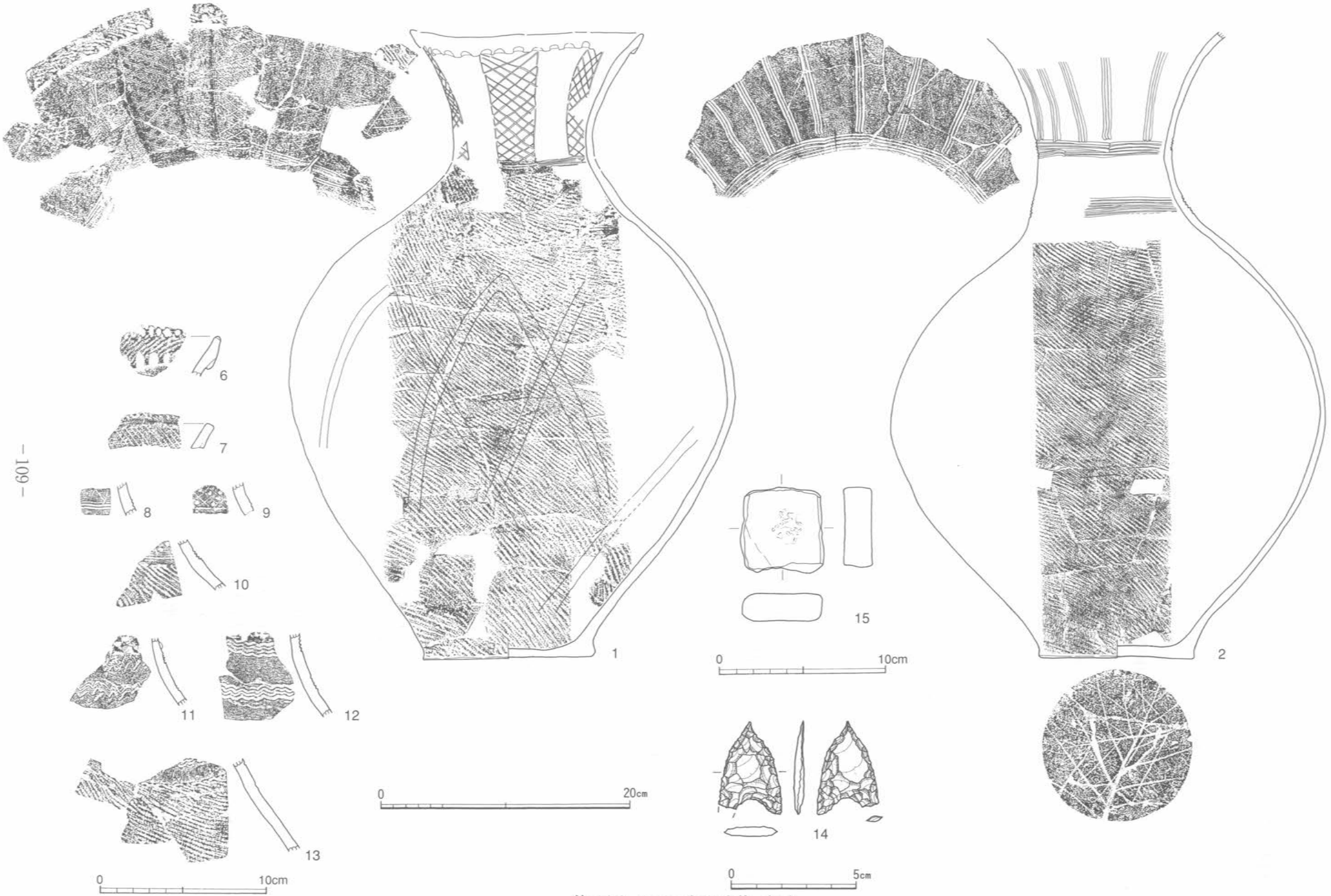
32・33・34は石製品である。32は敲石の破片と思われる。礫の頂部を打ち欠いて使用面としたものであろう。33は磨石の破片である。34は礫を利用した敲石である。両端部に使用痕跡がうかがえる。石材は32が流紋岩，33・34が砂岩である。

SI076（第84・85図，図版67・69・72）

1～5は壷である。1の口縁部は複合口縁で，外面は斜縄文（RL）が施文される。胴部と同一原体と思われる。口縁部下端は棒状工具または指頭の押捺による刻み目が巡る。頸部は縦位の櫛描き沈線文で10箇所に区画され，個々の区画は櫛描き沈線による格子目文帯と無文帯が交互に5箇所ずつ見られる。櫛描き沈線文はすべて一本描きで，縦沈線が最初であるが，格子目文は右下がり→左下がりの場合と，左下がり→右下がりになる場合の二通りがある。前者が3区画，後者が2区画であるが，交互に見られる。5区画あるので，そのうちの2区画は同じ方向になる。基本的に交互に施文されることが意図されているものと思われる。頸部文様帯の下部は横位の櫛描き沈線文が6条巡る。その下部，胴部外面は横位・斜位の付加条縄文（RL）が全面に施文される。胴部外面にはかご目痕が中央部主体に見られる。かご目痕は大きく斜格子状に見られ，他の部分がやや黒ずむのに対して淡い色調であり，汚れていないといった印象である。かご目痕が見られるのは1/2周弱であり，黒斑部分は特にわかりずらい。底部外面は全面に木葉痕が残る。図示していないが1枚の大きな葉が敷かれたものである。器面は被熱によるものか，内面は全面的に剥落が著しく，調整不明である。外面も荒れており，特に胴部外面上部は剥離が目立つ。なお，口頸部と胴部の接合部が少なく，口縁部を水平に復元しすぎたきらいがある。1の図で見た場合，右側がやや下がるものと思われる。

2は口縁部が欠損している。頸部上位には縦位の櫛描き沈線文が巡る。3本同時施文具による沈線で，上から下へ引いている。現状では9箇所見られるが，破損部分を考慮すると，11箇所と想定される。頸部中央は，横位の櫛描き沈線文が巡る。縦位の沈線文と同じ施文具により，下から上へ2回に分けて施文され，方向は向かって右から左である。一部重複により，6条ではなく，4～5条のところがある。縦位沈線の半数近くに切られていることから，中央横位→上位縦位の順であることがわかる。また，頸部下部にも中央と同様に横位の櫛描き沈線文が巡る。以上の沈線文間は無文であり，頸部下部の沈線文の下部にも無文帯がある。胴部外面は横位の付加条縄文（RL）が全体に施文される。端末の当たりは明瞭である。底部外面は全面に木葉痕が見られる。大きな葉が2枚敷かれたことがわかる。1と同様に内面の剥落が著しく，調整不明である。

3は口縁部と胴部下部・底部が欠損している。頸部は無文帯をはさんで横位の櫛描き沈線文が2箇所巡る。櫛描き沈線文は3～4条見られるが，やや雑な施文であり，特に下部は明瞭さに欠ける。器面も荒れており，2条のところや全体に消えている部分もある。ハケメと似た印象を受ける。頸部下部で横位に一条の沈線が巡っており，胴部との境になっている。こちらも一部は浅く，細くなり，廻し方も雑なところがある。胴部は沈線直下から全面に横位の付加条縄文が施文される。基本的にRLの縄文であるが，上部の一部に斜位のLR縄文が見られる。1・2同様，内面の剥落が著しい。外面も荒れており，特に胴部上



第84図　SI076出土遺物（1）

面の剥離が目立つ。

4は口縁部から胴部上部まで欠けている。胴部全面に横位及び斜位の付加条縄文（RL）が施文される。底部は一部しか残っていないが，木葉痕が明瞭に見られる。内面はナデ，ヘラナデが施される。1～3とは異なり，器面は剥落がほとんど無く，平滑である。

5は本遺構の壷形土器の中で最も大型の土器である。口縁部から胴部上部が欠損するが，割れ口が比較的平らで，研磨されていることから，欠損後も再利用されたものと思われる。粘土帯接合部で割れた土器を，加工したのではないだろうか。胴部は全面に斜位の付加条縄文（LR）が施文される。内面はナデが施される。胴部内面中央部の3箇所程度と底部内面の剥離が著しいが，剥落していない部分の方が多く，1～3とは異なっている。底部外面はナデが施され，木葉痕は見られない。底部は中央部が径8cm程度に割れて接合しているが，色調が黒色であり，外周部の色調と明瞭に分かれている。破片となった後，黒色化するような条件で火熱を受けたことが考えられる。

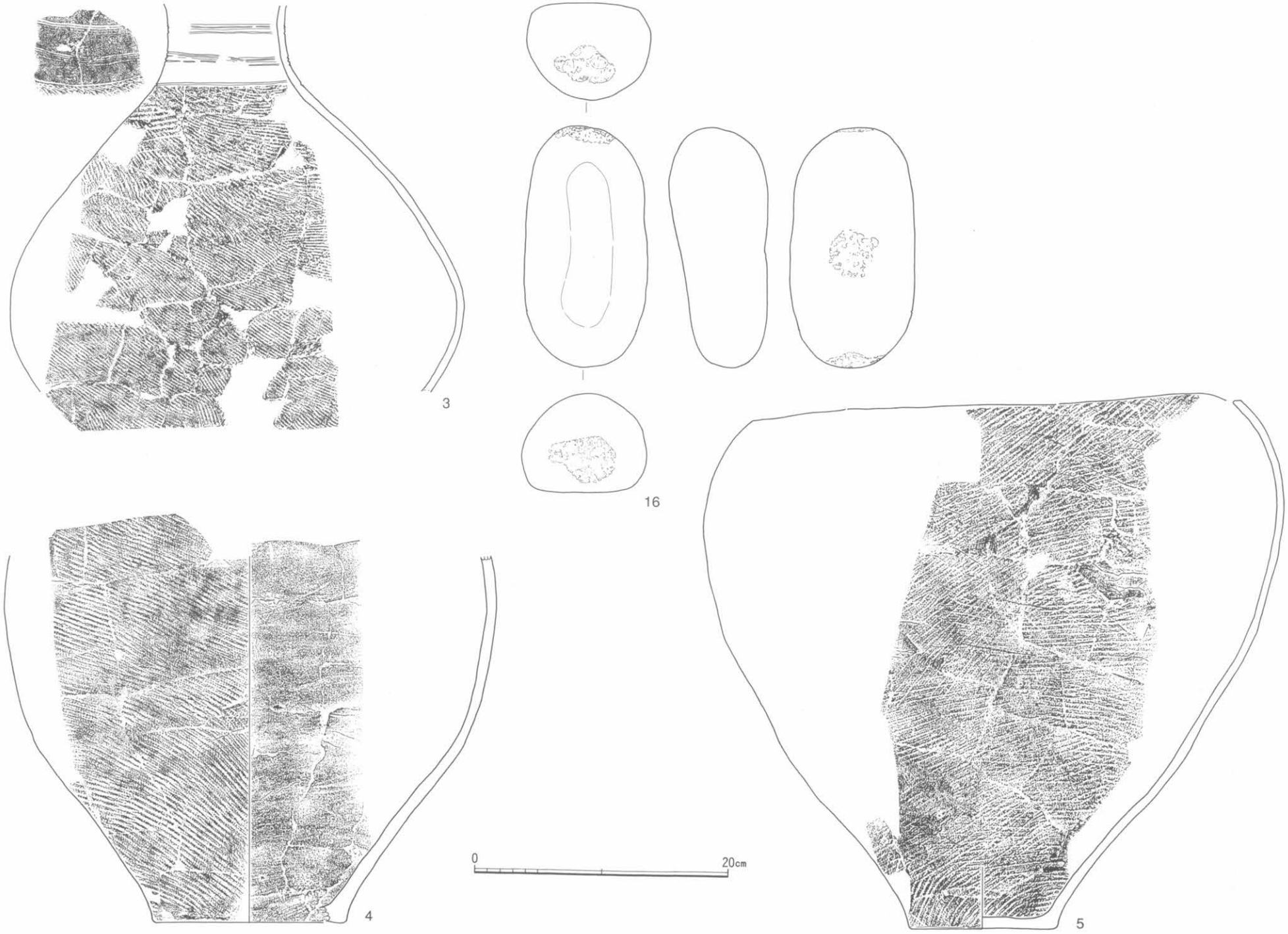
6・7は甕で，口縁部の破片である。ともに複合口縁である。6は口縁部に横位の斜縄文（LR）が施文され，口唇部にも縄文原体による刻み目がある。また，口縁部下端も棒状工具の押捺による刻み目が巡る。7は段差の上部の破片であるが，断面の様相から複合口縁と考えられる。口縁部は横位の斜縄文（RL）と思われるが，撚糸文の可能性もある。口唇部は面取りされ，同一原体の斜縄文が施文される。

8～10は壷の頸部破片である。いずれも1～3とは別個体である。8は3本同時施文具による横位の櫛描き沈線文があり，その上部には櫛描き格子目文が見られる。施文の順序は沈線文→格子目文である。9は2条（以上か）の横位櫛描き沈線文が巡り，その上部には櫛描き格子目文がある。そして，格子目文の中には竹管状工具による円形刺突文が見られる場合が多い。10も9と似た文様である。4条の横位櫛描き沈線文の上部に格子目文・竹管文がある。施文の順序は8同様沈線文→格子目文である。沈線文の下部は斜縄文（RL）が施文される。

11は壷の頸部片，12・13は壷または甕の頸部片である。11は外面上部に横位の紐状隆帯があり，棒状工具による刻み目が施されたものと思われる。その下部には4条1単位の横位櫛描き波状文が無文帯をはさんで2段施文される。12も11同様，2段の櫛描波状文があるが，11よりも太く，緩やかである。13は外面上部に横位の櫛描波状文が僅かに残る。2条見られるが，それ以上の条数であろう。その下部は無文帯をはさんで横位の斜縄文（RL）が施文される。端末の当たりが顕著である。12・13は同一個体かもしれない。

14はいわゆる黒色緻密質安山岩の石鏃である。両面の器体中央に大きな剥離面を残し，周辺に調整剥離を行っている。裏面の右側縁の一部を除いて正面に最終的な剥離痕が集中する。特に，上半部の加工は入念で特異な先端部が作り出されている。先端部及び両脚部に摩耗した痕跡がみられる。左脚部を欠損する。長さ3.75cm，幅2.51cm，厚さ0.43cm，重さ3.8gである。

15は扁平な形状で表裏面とも平滑な磨面をもつ。砥石と思われるが，図示した面に敲打痕がある。その裏面も顕著ではないが，若干の敲打痕跡がうかがえる。敲石としても使用されたのであろう。石材は砂岩である。左右の両側面も滑らかで，かなり使用されているが，上下の両小口面はやや凹凸があり，使用頻度は少ない。16は敲石であるが，磨面もあり，砥石及び磨石としての機能が考えられるなど複合機能をもつ石器である。石材は砂岩である。上下に顕著な敲打痕が見られる。また，図示した右側の面を裏面とすると，中央部に敲打痕があり，やや凹んでいる。裏面は平坦であり，敲打痕の上下は磨られてやや平滑で



第85図　SI076出土遺物（2）

ある。表面は裏面に比べ丸みがあるが，中央に細長い平坦面をもつ。平坦面からは鈍い稜を介してなだらかに側面へ続く。平坦面は稜よりも僅かであるが凹む。また，平坦面及びその周囲は磨られて，非常に滑らかである。

SI079（第86図，図版68・72・76）

1は椀である。口縁・体部外面に接合痕が見られる。底部の一部に若干の粘土塊が付着する。全体に赤褐色の色調で，内面の一部は淡灰色の部分もあるなど，火熱を受けた様相が顕著である。2は台付甕の脚部である。脚部外面は縦方向の粗いハケメが施される。脚端部は内面に粘土がはみ出している。火熱を受け，器面の摩耗が著しい。3は甕である。口縁部が欠損する。また，胴部上・中位と胴部下位・底部は接合しないが，図上で復元した。胴部外面は縦方向のハケメが施されるが，下位はナデ及び器面の荒れのため見られない。胴部下位は接合部で緩やかな段差をもつ部分がある。底部外面はナデ調整である。器面は摩耗している。内面は所々に接合痕が見られる。内面も下位は斜め方向のハケメが施される。ハケメには上位の粘土帯がかぶさり，2段階に成形されたことがわかる。中・上位は斜め及び横方向のヘラナデが施される。ヘラナデは一部ヘラケズリ状で，砂粒が右から左に動いている。上半部は指頭状の圧痕も見られる。内面は器面の剥離もあり，特に下半部が著しい。以上1～3は土師器的な様相の土器である。

4～15・18・19は甕と思われる。4～9・12は口縁部の破片である。7が不明である以外は複合口縁である。7も複合口縁の可能性があると思われる。4～8は口縁部が無文であるが，口唇部はいずれも施文されている。4は縄文原体の押捺による刻み目と思われるが，施文具がやや不明瞭である。5は口唇部が面取りされ，斜縄文が施される。加圧により内面に粘土がはみ出している。7も斜縄文が施文される。6は指頭の連続押圧が施され，8は棒状工具による内面からの連続押圧が施される。9は口縁部に横位の斜縄文（単節RL）が施文され，口唇部も面取り後，同一原体による縄文が見られる。12は口縁端部が欠損する。口縁部は無文であるが，下端に連続した斜めの刻み目が施される。

10・11は頸部～胴部の破片である。10は頸部無文帯の下部に3条の横位S字状結節文が巡り，結節文の直下から斜縄文（無節？RL）が施文される。11は頸部に4段以上の輪積み痕をもつ甕である。各段に連続して指ナデを施す部分がある。

13～15は胴部の破片である。いずれも横位の斜縄文が施文される。13・14は無節のLRと思われる。15は反撚のLLであろうか。13は内面の下部で明瞭な接合痕があり，2段成形されたものと思われる。

16は壷の頸部と思われる破片である。4条を基本とする櫛描沈線文が縦位，横位，斜位に見られる。横位の櫛描沈線文で頸部と胴部が区画され，胴部は沈線文直下から横位の斜縄文（RL）が施文される。頸部は，横位櫛描沈線文の上部が縦に区画され，区画内は山形文または格子目文あるいは連弧文が充填されたものと思われる。内外面とも器面の剥離がかなり目立つ。

17（a・b）は南関東系の壷である。17bは頸部の破片である。横位の平行沈線文で区画された間に縄文帯がある。器面の摩耗が著しいため，施文が不明瞭であるが，縄文は網目状に見える。2段ないし3段でLR，RLの縄文が重複しているものと思われる。羽状縄文の重複か不明である。2条の沈線文の上下は無文帯であり，赤彩が施されているが，遺存は痕跡的である。内面はナデ調整と思われるが，剥落が著しく，やや不明瞭である。17aは胴部上部の破片で，横位の沈線文の上部は無文帯で赤彩が施される。沈線文の下部は羽状の縄文帯（LR－RL）である。器面の摩耗は17bと同様である。他に同一個体の破片がい

くつかある。頸部上部から見ていくと，無文赤彩部→沈線→網目状縄文帯→沈線→赤彩無文帯→沈線→羽状縄文帯→沈線→無文赤彩部となると思われる。

18・19は甕で，底部を含む破片である。18の胴部下部の遺存部分は無文で，ナデが施される。底部もナデが施され，木葉痕は見られない。内面はやや荒れている。19の胴部外面は横位の斜縄文（単節RL）が施文される。小片であるが，底部外面には木葉痕が明瞭に見られる。

20は土製紡錘車である。上面は孔を中心に2本一対の櫛描沈線文が放射状に6箇所施文される。下面は無文である。側面は中央に横位の櫛描沈線文が巡り，上下2段に区画している。その後，上下段とも櫛描沈線による山形文が施文される。山形は面積の広い上段が9箇所である。下段は8箇所であるが，右の沈線が省略されるところが1箇所あり，変則的である。最後に山の間隔が詰まったため，省略されたものであろう。21は棒状の土製品である。両端を見ると，孔を意識したと思われる点もあるが，断定し難い。

SI080（第86・87図，図版68・69・73）

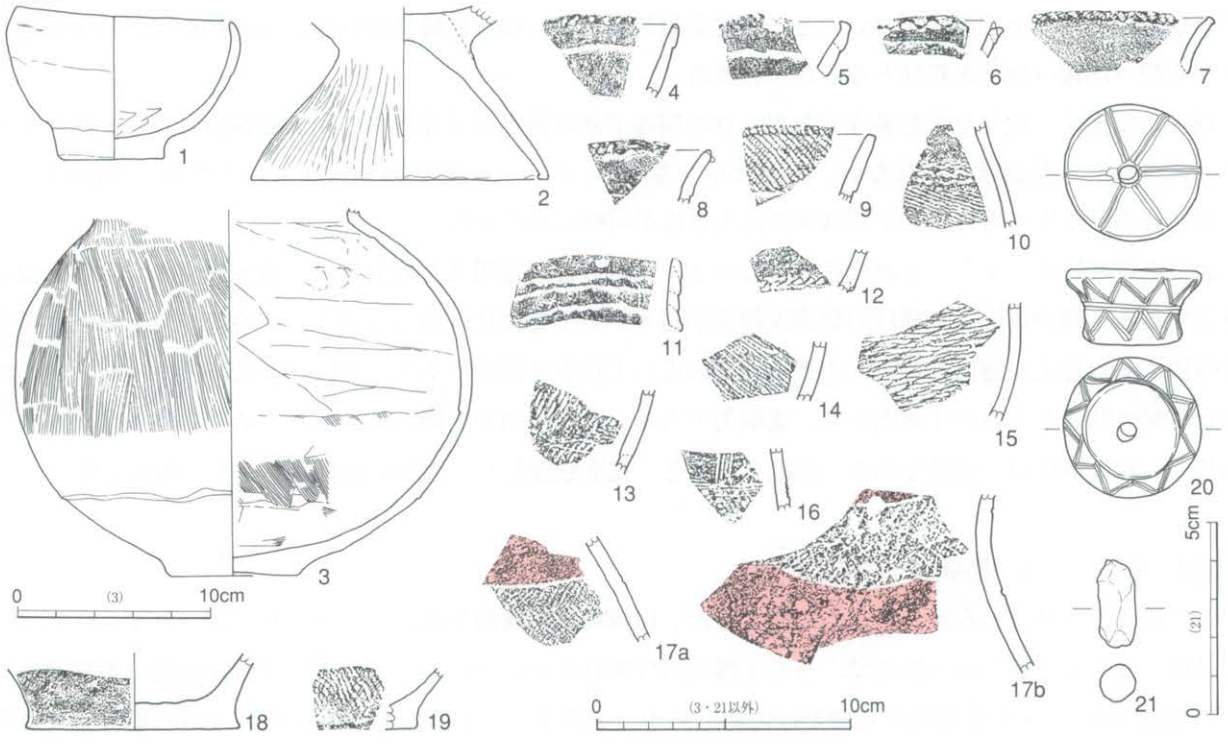
1は蓋または鉢であるが，蓋として図示した。口縁部に焼成前穿孔が2箇所一対で見られる。破損しないで残っているところは2箇所で，うち1箇所の片側は上下に穿孔されている。ほぼ反対側の破損部分にも一対見られる。180度対向する側だけにあるのか，全周するのか断定しがたいが，全周の場合完全な等間隔とはならない。内面は中位から天井部にかけて器面の剥離が目立つ部分がある。

2は甕で，口縁部を欠くが，それ以外は遺存の良い土器である。頸部は4段の輪積み痕があり，そのまま口縁部へと続くのであろう。最下段の下端部に刻み目がある。棒状工具によるものと思われる。輪積み痕は一部に指頭圧痕があり，磨り消されている部分も見られる。胴部外面は粗いヘラミガキが施される。接合痕が内外面に残る部分がある。内面はナデ調整され，頸部は指頭圧痕が見られるところもある。胴部上位から頸部内面は細かい器面の剥離が目立つ。底部外面はナデが施される。

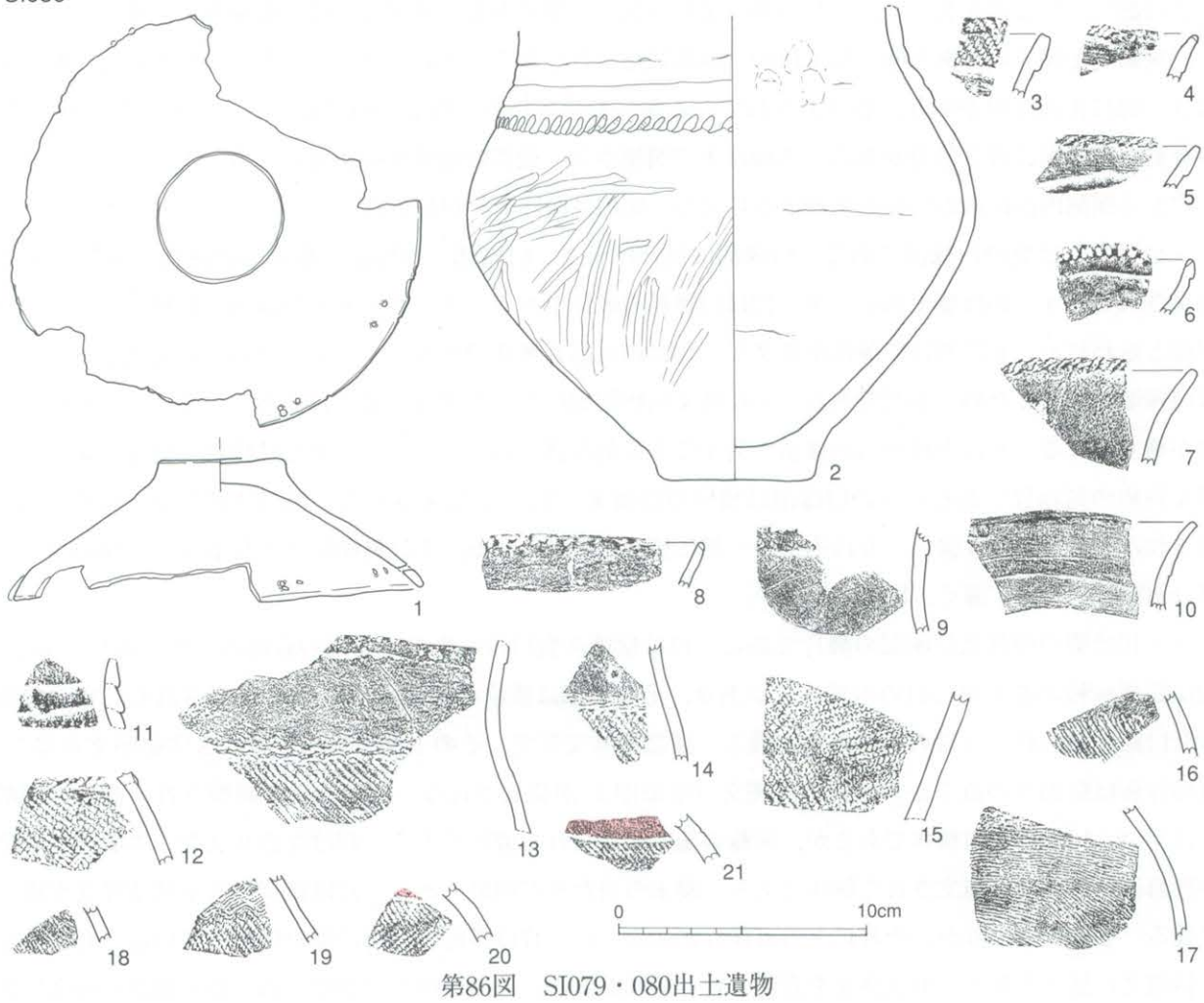
3は壷または甕の口縁部である。口縁部は複合口縁で，口縁部・口唇部に横位の斜縄文（単節RL）が施文される。4～19は甕である。4～10は口縁部の破片である。4～6・9・10は複合口縁，7・8は単口縁と思われる。9以外は口縁部が無文で，10は口唇部も無文である。4～8は口唇部に施文される。9は口縁端部を欠くため，不明である。4は縄文原体押捺による不規則な刻み目である。5・7は付加条縄文が施文される。6は内面からの棒状工具？による刻み目である。8もヘラまたは棒状工具等による不規則な斜めの刻み目である。9の口縁部は横位の斜縄文（RL）が施文される。頸部は無文で，斜め方向に施されるナデはかなり強い。6は内面の一部に接合痕が見られる。7は外面に煤が付着する。10の複合口縁は明瞭であるが，薄く，段差が小さい。

11～19は甕の頸部及び胴部の破片である。11は輪積み痕口縁の甕で，3段の輪積みが残る破片である。12は頸部輪積み段下端に斜めの刻み目があり，その下部は横位の斜縄文（RL）が施文される。13も輪積み痕口縁と思われ，1段の輪積み痕が残る。頸部は無文帯で，その下部に横位3条のS字結節文が巡る。胴部外面は結節文の直下から横位の斜縄文（単節RL）が施文される。内面はナデ調整され，器面の剥離が目立つ。14は13と別個体であるが，同様の施文が見られる破片である。16は頸部無文帯下の胴部に横位の無節付加条縄文が施文された個体である。端末の当たりが明瞭である。17は横位のS字状結節文が僅かに残る。2条見られるが，それ以上の可能性がある。16・17は外面の一部に煤が付着している。15は胴部に斜縄文が施文される。羽状縄文を意図した可能性がある。内面が所々で剥離する。18の胴部の施文は縦

SI079



SI080



第86図　SI079・080出土遺物

位の撚糸文と思われる。19は上部に横位の櫛描波状文が巡り，その下部は横位の斜縄文（RL）が施文される。波状文は7条1単位で，2周しているものと思われる。

20・21は南関東系壷の破片で，同一個体である。横位の沈線文が1条巡り，その上部は無文であるが赤彩される。沈線文下は羽状縄文帯となる。内面も赤彩される。

22・23は底部を含む甕破片である。ともに横位の斜縄文が施文されるが，22は単節RLで，23は無節LRである。22の底部外面は強いヘラナデが施され，木葉痕は見られない。23は木葉痕が鮮明である。

24は砥石である。石材は砂岩である。左図上の図で見ると，上と左の側面は割れ口で，使用されていない。その他の面はよく使用され，滑らかである。広い面は片側（左図）が中央でやや凹み，反対側（右図）は全く平らである。

SI081（第87図，図版68・73）

器種は6が壷と思われる他は甕である。1は頸部から底部まで連続して接合する個体である。頸部は無文で，粘土紐の接合部で割れているが，輪積み痕は見られない。胴部は付加条縄文（RL）が施文される。頸部との境で端末の当たりが顕著な部分とナデにより消される部分がある。底部外面は木葉痕が鮮明に残る。底部から胴部への立ち上がりは指頭圧痕が見られる。内面はややミガキ的なナデにより平滑である。ただし，底部周辺はやや荒れており，上部も若干の剥離はある。外面は胴部中央部等に煤の付着が見られる。2～5・9は甕口縁部の破片である。2・9は複合口縁で，似ているが別個体である。口縁部・頸部外面はともに無文であるが，口唇部は2が無文であるのに対し，9は縄文が施文される。2の内面は剥離が目立つ。5は輪積み痕口縁で，3・4も複合口縁とするよりは輪積み痕口縁とした方が妥当であろう。5は4段以上，3・4は2段以上の輪積み痕をもつ口縁である。いずれも口縁部外面は無文であるが，口唇部には施文される。3は口唇部面取り後，付加条縄文が施文される。4は口唇部内外から縄文原体が連続して押捺されている。5も口唇部内外から施文具が連続押捺されている。

6は複合口縁で，口縁部・口唇部とも無文である。砂質で，内面は摩耗が著しく，調整が不明である。7は甕の頸部片で，横位のS字状結節文が見られる。2条単位で複数段になるものと思われる。8も頸部を含む破片である。横位のS字状結節文が2条見られるが，それ以上の可能性がある。胴部は横位の付加条縄文（RL）が施文される。8の内面は摩耗が著しい。

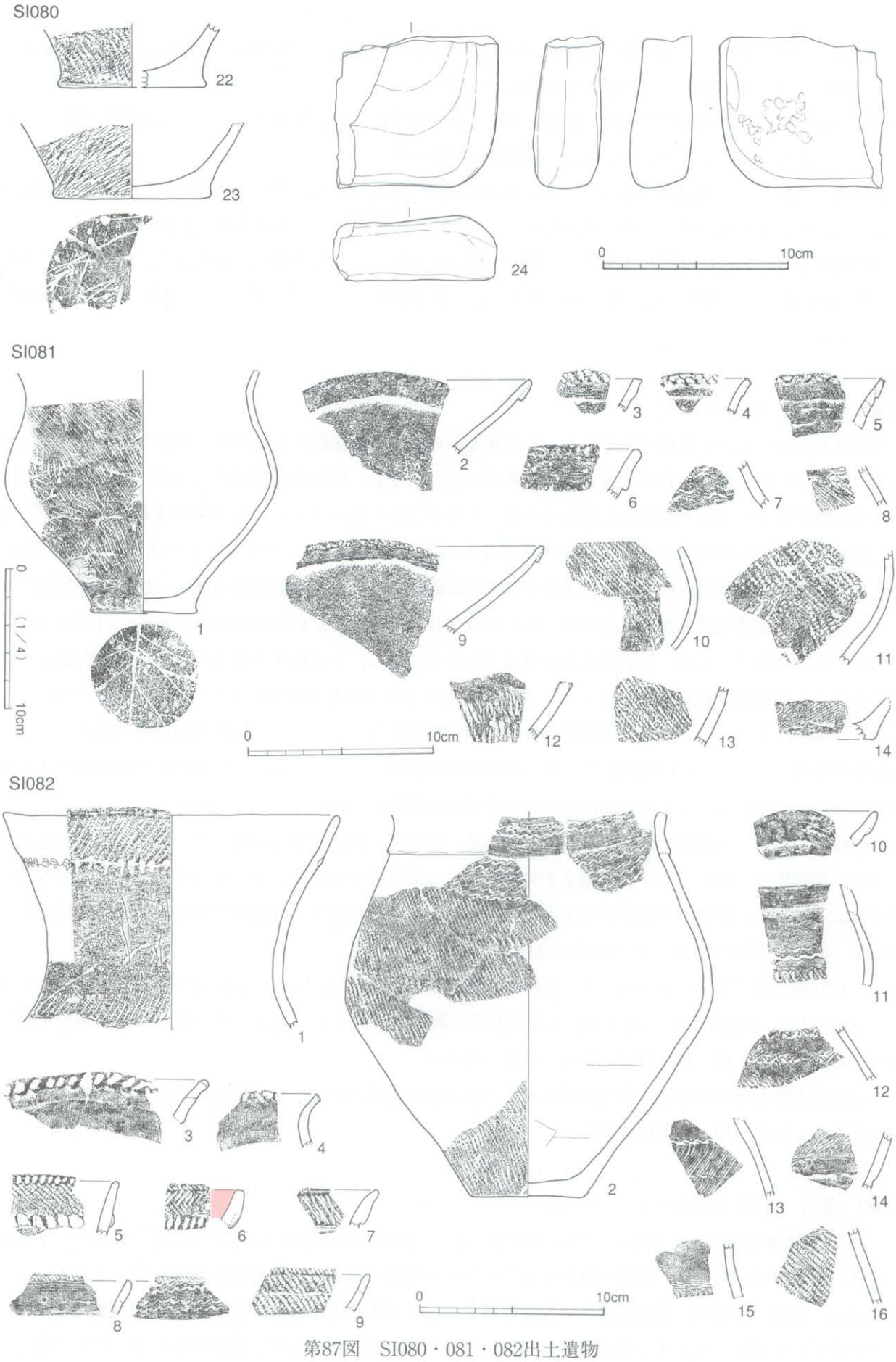
10～13は胴部片である。10・11・13は横位の付加条縄文（いずれもRL）が施文される。12は縦位の縄文（反撚RR？）が施される。図上部に2段成形時の接合痕がみられ，縄文が消されている。胴部下部の破片であろう。11・12・13は内面の荒れ・剥離が目立つ。

14は底部を含む破片である。胴部外面は横位の斜縄文が施文される。底部外面は遺存が少なく，木葉痕があるかもしれないが，不明瞭である。

SI082（第87・88図，図版69・73・74・76）

1はやや壷的な器形の甕である。口縁は複合口縁で，横位の付加条縄文（LR）が施文される。下端は刺突される。焼成があまく，器面の摩耗が著しいため不明瞭であるが，口唇部も縄文が施文されていると思われる。頸部は無文で，胴部は横位の付加条縄文（LR）が施文される。端末の当たりは明瞭である。

2は甕で，頸部から底部までの破片がある。上部，下部の2片に分かれ，接合しないが，図上で復元し



第87図　SI080・081・082出土遺物

た。頸部は輪積み痕を何段か有して口縁部へ続く形態となるものと思われる。遺存部分上位に2条1単位の横位S字状結節文が巡り，その下部は若干の無文帯となる。頸部と胴部の境は段差があり，胴部上位は2条1単位の横位S字状結節文が3列，計6条施される。その下部は横位の斜縄文（RL）が施文される。縄文は結節文の直下から施文されるが，ナデにより一部消されている。底部外面はナデが施され，木葉痕は見られない。内面は若干の接合痕が残る。胴部中位の剥離がやや目立つ。

3～5・7～9は甕の口縁部である。3は輪積み痕口縁で，2段目の輪積み痕が僅かに残る。口縁部は無文であるが，口唇部は縄文原体による斜めの刻み目が施文される。4は単口縁と思われる。口縁部は無文であるが，口唇部は面取り後，連続押捺が施される。5・7は複合口縁である。5は口縁部に横位の斜縄文が施文され，下端には連続押捺が施される。頸部との段差はごく僅かである。口唇部は刻み目が施される。7の口縁は付加条縄文が施文される。口唇部は無文である。8は輪積み痕口縁で，2段以上である。口縁部外面は無文であるが，口唇部は面取り後，縄文が施文される。また，口縁部内面は2条1単位の横位S字状結節文が2列見られる。9も輪積み痕口縁で，2段以上である。口縁部は横位の斜縄文（単節RL）が施文され，口唇部も面取り後，縄文が施される。

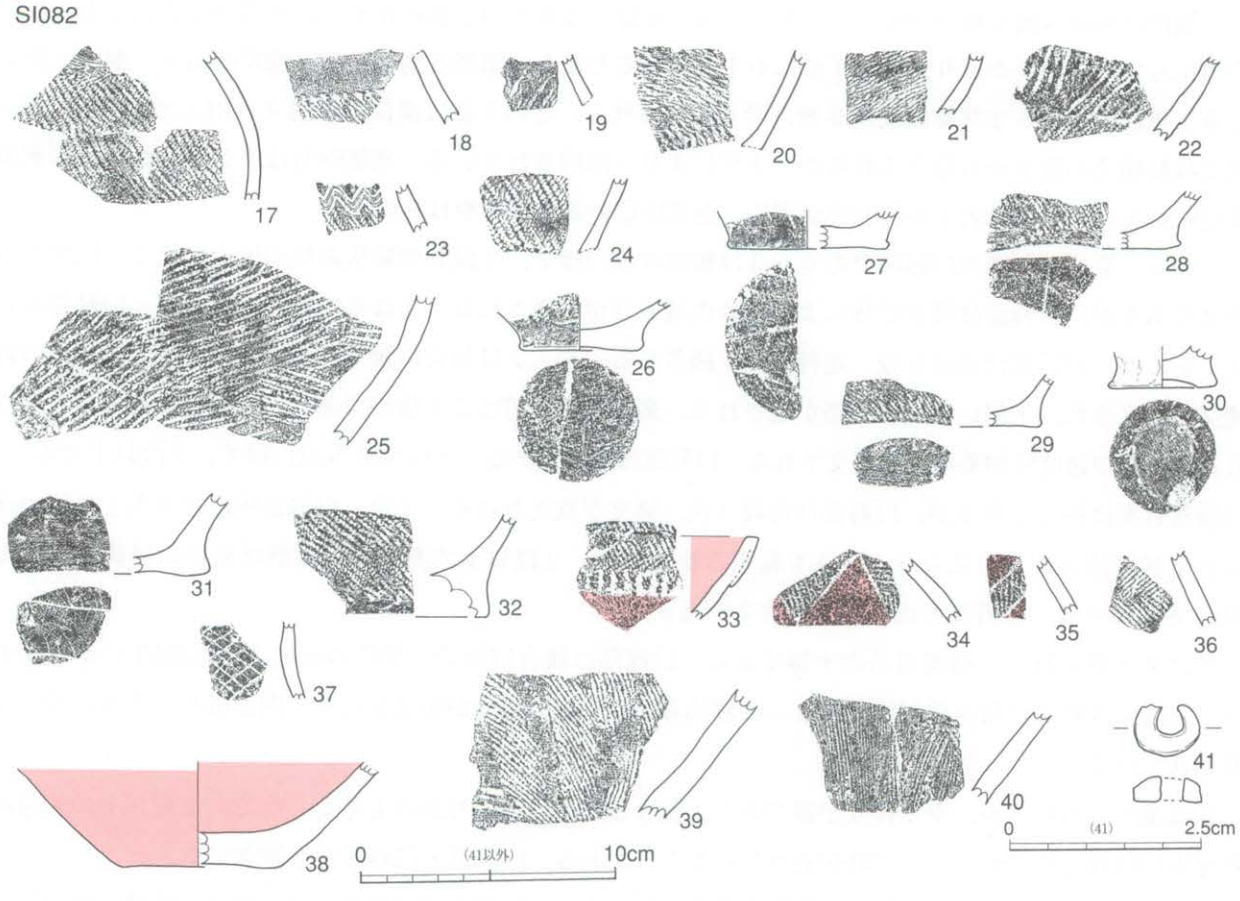
6は鉢と思われる。南関東系の土器である。口縁部は複合口縁で，横位の斜縄文（単節RL）が施文され，下端には斜めの刻み目が施される。口唇部も面取り後，縄文が施文される。内面はヘラミガキ後，赤彩されている。

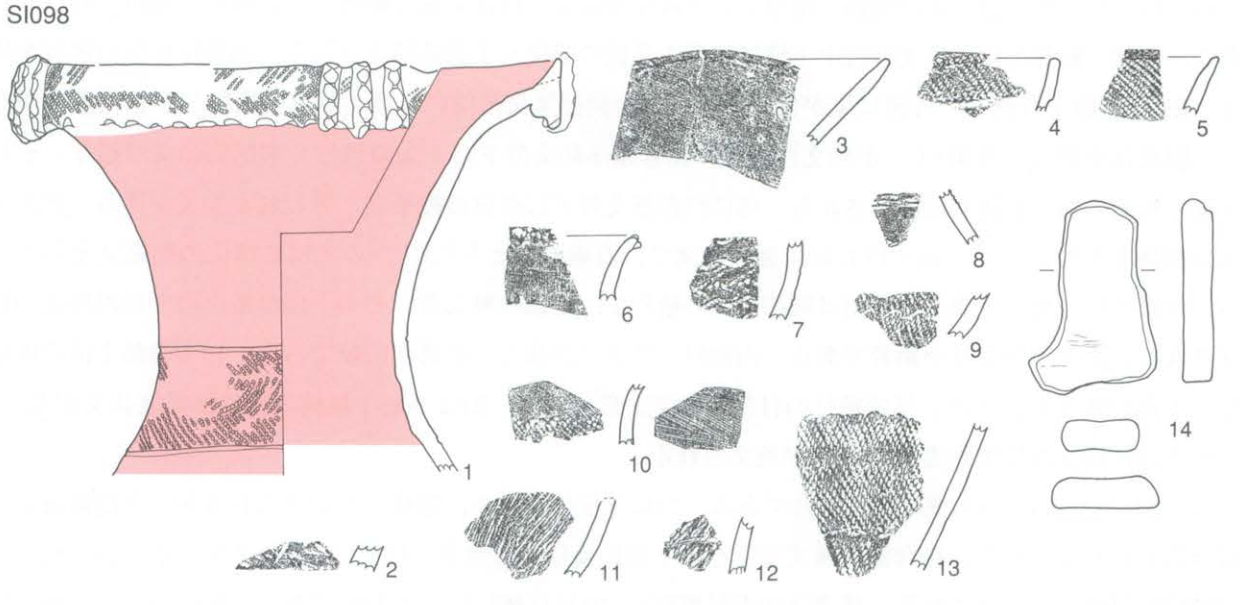
10は甕と思われるが，やや作りが雑であり，椀など他の器種の可能性も考えられる。2段以上の輪積み痕をもつ口縁であるが，ナデで段が消されるところがある。口縁部・口唇部とも無文である。

11～13・15～19・23は甕の頸部～胴部上位の破片である。11は上部に輪積み段が残り，輪積み痕口縁である。頸部～胴部上位の無文帯間中下位に2条1単位の横位S字状結節文が巡る。胴部は横位の付加条縄文（RL）が施文される。外面に煤が付着する。12も頸部無文帯間に2条1単位の横位S字状結節文が巡る。胴部は斜縄文（単節RL）が施文される。13も頸部無文帯下に1条の横位S字状結節文が巡り，その下部に無節の横位斜縄文が施文される。15は頸部無文帯下に横位の撚糸文と思われる施文が巡る。撚糸文下は斜縄文と思われる。16・17も15同様の施文で，斜縄文（ともにRL）の上部に横位の撚糸文と思われる。17は外面に煤が付着する。18は胴部上位の破片で，上部は無文帯，その下部は横位の無節斜縄文が施文される。端末の当たりが顕著である。内面のヘラナデが強く，痕跡が明瞭である。19も胴部上位の破片で，上部が無文帯，その下部は横位の付加条縄文と思われる。23は5条1単位の横位櫛描波状文が巡り，その下部に横位の付加条縄文（RL）が施文される。

14・20～22・24・25も甕の胴部破片である。14は下位の破片で，輪積み痕が見られるが，2段階成形の接合箇所と考えられる。接合部は無文で，その上部に横位の斜縄文（反撚L）が施文される。20・21・24は横位の斜縄文が施文される。縄文は20が反撚R？，21は反撚L？，24はRLである。外面の一部に煤が付着する。22は横位の付加条縄文（LR）が施文される。25も横位・斜位・縦位の付加条縄文（LR）が施文される。内面の剥離が著しく，元々の器表面がほとんど残っていない。

26～29・31・32は甕底部周辺の破片である。胴部外面の施文は，26・28・29・32が斜縄文（いずれもRL）で，27も斜縄文と思われる。32は端末の当たりが顕著である。31の底部際は無文である。底部外面に木葉痕が残るのは，26・27・28・31であるが，26はナデによりほとんど消されている。また，28も26ほどではないが，ナデが施される。31は鮮明である。32は木葉痕があるように思われるが，底部の遺存が少





第88図　SI082・098出土遺物

なく，不明瞭である。29の底部外面には布目圧痕が見られる。26の内面はヘラナデが施され，当たりが顕著である。27・28の内面は剥離が見られ，29も内面の摩耗が著しい。長石等の白色粒の含有が多い。32もかなり器面が荒れる。

30は鉢の底部と思われる。底部は外周が高く，内側が凹んでいる。全体的にナデによる調整であり，体部外面は指頭圧痕が残る。

33～39は6同様，南関東系土器である。33は鉢であろう。口縁部は複合口縁で，横位の斜縄文が羽状に施文される（RL－LR）。下端は縄文原体による刻み目が施される。口唇部も面取りされ，同一原体による縄文が施文される。頸部外面と内面は赤彩される。内面はヘラミガキが施される。

34～37・39は壷である。34・35は同一個体で，胴部片である。山形の平行沈線で区画され，沈線間は斜縄文が施文される。沈線外は無文部で，赤彩される。器面は内外とも摩耗するが，特に内面は著しく，調整手法が観察できない。36は横位の沈線があり，その下部に横位の斜縄文が羽状に施文される（LR－RL）。37は頸部片で，ヘラ状工具による格子目文が施文される。内面は剥離が著しく，調整不明である。39は胴部片で厚みのある土器である。外面に縦位の斜縄文が施文される。無節の縄文である。内面のナデはやや強く，一部ハケメ的なところがある。

38も南関東系の土器で，鉢と思われる。体部下部・底部の破片である。底部外面を除いて赤彩される。外面はナデ，内面はナデ・ヘラミガキが施される。6と質感が似ており，同一個体かもしれない。

40は甕の胴部片で，土師器的な土器である。胴部外面に縦方向のハケメが施される。内面はヘラナデが施され，ヘラの当たりが顕著である。

41は臼玉であるが，一部が途切れている。この状態で研磨されており，欠損しているわけではない。本来はまわっていたが，破損したため，再度研磨されたものかもしれない。石材は滑石である。

SI098（第88図，図版69・74）

1は壷で，南関東系土器である。頸部中位以上はほぼ遺存するが，口縁部端部は遺存部分が少ない。口縁部は複合口縁で，幅の広い直立する口縁帯をもつ。口縁帯の施文は羽状縄文（LR－RL）で，下端は棒状工具の連続押捺により小波状となる。3本単位の棒状浮文が口縁帯に貼付されるが，上から見て90度に分割する4箇所の位置である。棒状浮文には縄文原体による連続押捺が施される。なお，4箇所のうち，2箇所は3本とも残っているが，1箇所は1本半であり，もう1箇所は3本とも剥がれている。頸部上部は大きく外反して口縁帯へ続く。上中部は無文で，縦方向のヘラミガキが施される。頸部外面下部は横位の平行沈線で区画され，区画内は羽状縄文（RL－LR－RL）が施文される。下位の沈線下は無文帯である。頸部は赤彩されるが，口縁帯に近い部分は施されていない。赤彩は下位沈線下の無文帯にも及ぶ。赤彩は内面にも施されるが，器面の剥落が著しく，どこまで赤彩されるか不明瞭である。図示は頸部外面の下位沈線と同じ深さまでとした。器面の剥落は内面のように全面的でないが，外面にも見られる。特に頸部中位以下が目立つ。

2も南関東系の壷である。1とは別個体と思われる。胴部片で，外面に斜位の沈線が2条見られる。山形文になるものと思われる。遺存が少なく，縄文の施文は不明である。器面の荒れが著しい。

3は鉢であろうか。比較的小型の土器と思われる。口縁部は単口縁で，口唇部は緩やかに面取りされている。口縁部内外面ともナデ調整され，無文である。

4・5・6は甕の口縁部である。4は複合口縁で，5も同様と思われる。6は単口縁である。4・5の口縁部は横位の斜縄文（ともにRL）が施文され，口唇部も4は縄文，5は面取り後に縄文が施文される。6は口縁部が無文で，口唇部は棒状工具の連続押捺による刻み目が施される。7～13は甕の頸部・胴部の破片である。7は幅広の羽状縄文が施文されていると思われる。そしてその上に1条の横位S字状結節文が間をあけて2条巡る。8は3条の横位櫛描沈線文が見られる。その下部は無文である。9は付加条縄文

(RL) が施文され，その上に1条の横位S字状結節文が見られる。内面は若干の剥離が見られる。10は頸部無文帯下に斜縄文（RL）が施文される。また，縄文施文部には横位の連続刺突文も見られるが，その部分で割れている。内面は横方向のハケメが施される。外面には煤が若干付着する。11は無節の斜縄文が施文され，12・13は横位の斜縄文が施文される。12の縄文は反撚LLと思われ，13はRLである。

14は砥石である。全面が使用されている。広い面はともに平坦で，側面はやや丸みがある。石材は砂岩である。

SI107（第89図，図版75）

1は甕で，頸部から底部まであるが，胴部下部で接合しない。図では復元的な器形を示した。頸部は無文で，胴部との境には3条の横位S字状結節文がある。胴部は横位の斜縄文（RL）が施文される。中央部で横方向のナデが施され，縄文が消えている部分がある。また，胴部下部の底部際はヨコナデが施され，縄文は見られない。底部外面は木葉痕が残る。外周が摩耗している以外は鮮明である。内面は接合痕が見られる。器面は荒れており，特に内面の剥落が著しい。

2は甕の胴部片である。横位のS字状結節文が4～5条残るが，もともとはそれ以上であろうか。胴部は横位の斜縄文（単節RL）が施文される。

SI109（第89図，図版75）

1は甕で，口縁部から底部まであるが，胴部片が足りず，連続して接合しない。図では復元的な器形を示したが，器高は推定値である。口縁部は複合口縁であるが，段差は少なく，一部ナデで消されている。口縁部は無文であるが，口唇部は縄文が施文される。頸部も無文である。頸部と胴部の境は4条1単位の横位櫛描沈線文を胴部の縄文施文後に巡らせている。胴部は横位の斜縄文（反撚LL）が施文される。底部の遺存は僅かであるが，木葉痕が鮮明に見られる。胴部下部の底部際はヨコナデが施される。内面はナデが施される。胴部中位に器面の剥落する部分がある。また，外面に煤が付着する部分がある。

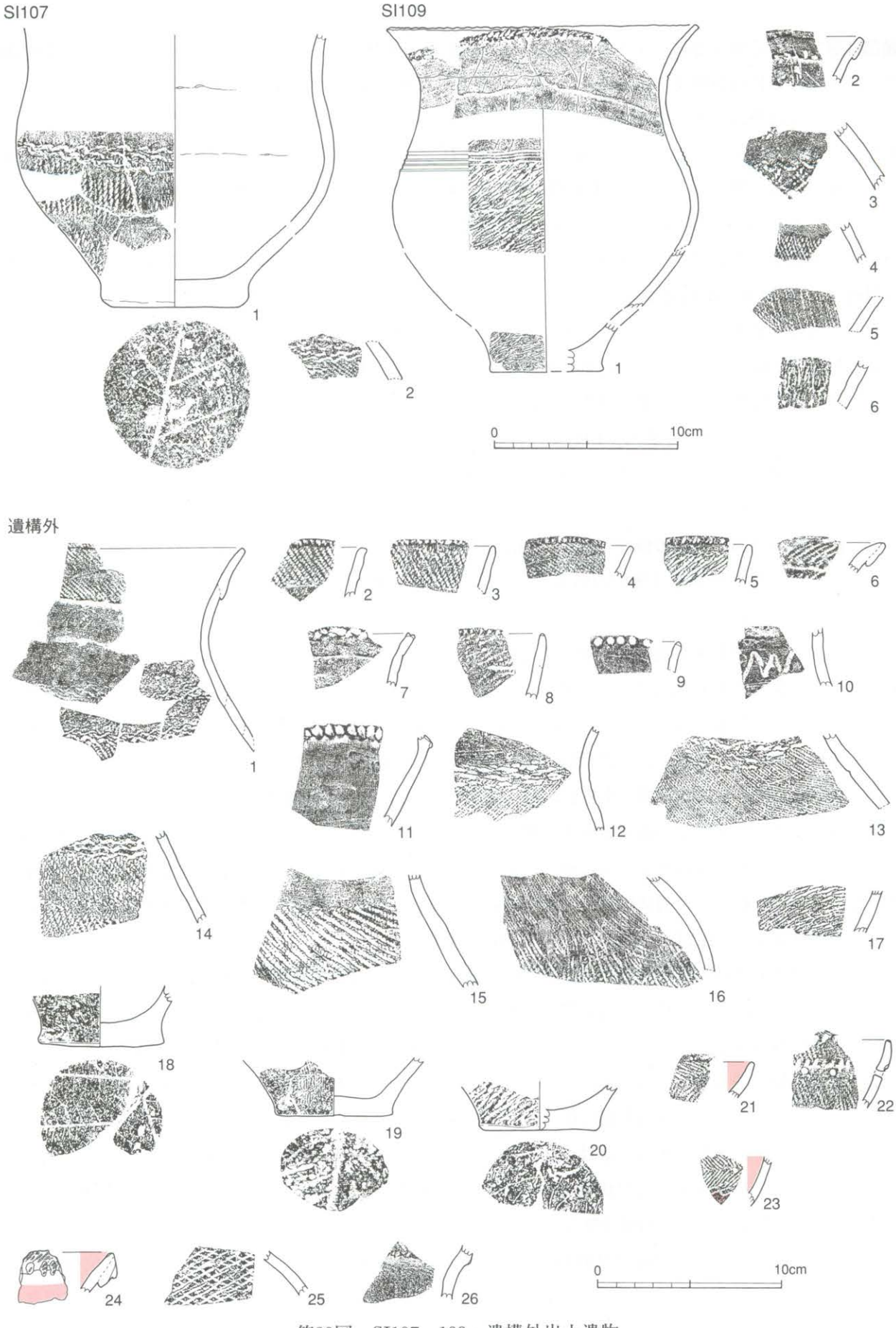
2は壷と思われる口縁部の破片である。複合口縁で，口縁部は無文であるが，下端に斜めの刻み目が施される。口唇部は面取りされるが，無文と思われる。ただし，器面が荒れているためやや不明瞭である。頸部は縦位の櫛描沈線文で区画される。外面の剥離が著しい部分があるため，不明瞭であるが4条1単位であろうか。区画内は斜位の櫛描沈線文と列点文が見られる。沈線文は縦区画の右側で2条残り，左側でもかろうじて2条残っているように思われる。

3は厚みがあり，壷か甕か判然としない。胴部上部の破片で，上部は無文である。中央に1条の横位S字状結節文が巡り，その下部は横位の斜縄文（単節LR）が施文される。胎土は白色の小石を多量に含む。

4は甕の頸部・胴部破片である。頸部は無文で，胴部は横位の斜縄文（RL）が施文される。5・6も甕の胴部片である。5は付加条縄文（RLか）が施文される。6は横位の無節縄文が施文される。6は内面の剥落が著しく，元の器表面がほとんど残っていない。

2．遺構外（第89図，図版75・76）

1は甕の口縁部から胴部上位までの破片である。接合しない2片の破片であるが，同一個体である。口縁部は複合口縁で，横位の斜縄文（単節RL）が施文される。口唇部も同一原体により縄文が施文される。



第89図　SI107・109・遺構外出土遺物

頸部は無文で，その下部に2条単位の横位のS字状結節文が無文帯をはさんで2段巡る。胴部は下位の結節文直下から横位の斜縄文（単節RL）が施文される。火熱を受けて，外面の摩耗と赤色化が著しい。

2～7・9は甕口縁部の破片である。2・6は複合口縁，7・9は輪積み痕口縁である。3・4は段差がないが，それより上部の破片で，複合口縁と思われる。ともに輪積み痕も若干見られる。5は複合口縁か単口縁か断定し難い。2～5の口縁部は横位の斜縄文が施文され，口唇部も縄文が施文される。縄文は2・3・4が単節RL，5は無節Lである。2は頸部との段差は少ない。また，頸部に縄文が見られるが，口縁部への施文のさい付いたものと思われ，施文を意図していないと思われる。6は口縁部と頸部に横位の斜縄文（単節LR）が施文される。口唇部は遺存が少なく，施文は不明瞭である。口縁部と頸部の段差はかなりある。胎土は白色粒を多く含む。7の口縁部は輪積み痕のみで無文であるが，口唇部は連続押捺による刻み目が施される。9も口縁部は無文であるが，口唇部は縄文原体による刻み目が施文される。

8は単口縁の破片である。甕ではなく，鉢とした方が良いかもしれない。口縁部外面は不定方向の斜縄文（無節L）が施文される。また，口唇部は斜めの刻み目が施文される。

10は壷の頸部片と思われる。棒状工具による1条の横位波状文が見られる。

11は鉢の口縁部片と思われる。口唇部は連続押捺による刻み目が施文される。内面の荒れが著しい。

12～17は甕の頸部・胴部の破片である。12は頸部が無文帯で，その下部に3条1単位の横位S字状結節文が巡る。その直下の胴部は横位の斜縄文（単節LR）が施文される。内面はヘラナデが施されるが，一部幅の広いハケメ状である。外面の一部に煤が付着する。13は胴部に横位の付加条縄文（RL）が施文され，その直上に横位のS字状結節文が3条見られるが，そこで割れている。内面に接合痕がある。14も3条1単位の横位S字状結節文が巡り，その直下に横位の斜縄文（単節RL）が見られる。15は頸部が無文帯，胴部は横位の付加条縄文（RL）が施文される。端末の当たりが顕著である。16は付加条縄文（RL）が施文されるが，上部は強く，下部は弱く施される。内面の剥離が著しい。17は横位の斜縄文（反撚LL）が施文される。出土位置が不明であるが，SI109の1と似ており，同一個体ではないかと思われる。

18～20は甕で，底部周辺の破片である。底部はいずれも木葉痕が残る。特に18は鮮明である。18の胴部下部はナデが施され，ほぼ無文であるが，ごく僅かに縄文が見られる。内面は器面の摩耗が著しい。胎土は白色粒を多く含む。19の胴部は横位の無節斜縄文が施文される。外面の所々に剥離が見られる。20の胴部は横位の斜縄文（反撚LL）が施文される。内面は摩耗が著しい。

21～25は南関東系の土器である。21は椀の口縁部片である。口縁部は複合口縁と思われるが，段差の上部の破片である。口縁部は横位の羽状縄文（RL・LR）が施文される。口唇部は施文されていないようであるが，やや不明瞭である。内面はヘラミガキ後赤彩される。22も椀で，口縁部は複合口縁である。口唇部と口縁部下端に縄文原体による斜めの刻み目が施される。口縁部・体部はともに横位の斜縄文（RL）が施文される。口縁部下，体部上部に径3㎜の焼成前穿孔が2箇所にある。外面側から内面側に穿孔されたものである。穿孔のある体部上部はナデが施され，縄文は見られない。23も椀で，端部は欠損するが，口縁部の破片である。口縁部は羽状縄文（RL・LR）が施文され，その下部に2条1単位の横位S字状結節文が巡る。結節文の下部と内面は無文であるがヘラミガキが施され，赤彩される。24は壷の口縁部片である。複合口縁であるが，口縁部は断面三角形状に折り返されている。口縁部外面上位は横位の斜縄文（単節LR）が施文され，下位は無文である。中央と口唇部は縄文原体による刻み目が施される。口唇部は内面からの施文である。頸部は赤彩され，内面もヘラミガキの後，赤彩されている。25も壷で，胴部上位

の破片である。外面は網目状文が施文される。26も壷である。土師器的な土器である。有段口縁の頸部片と思われる。段部に浅い斜めの刻み目が施される。頸部外面は無文で，入念なヘラミガキが縦方向に施される。内面も横方向のヘラミガキが施される。

第31表　弥生時代竪穴住居観察表

計測値（　）内の数値は推定値

遺構No.	平面形	規模（主軸×副軸m）	主軸方位	面積（上:床面積 ㎡）（下:柱穴内面積 ㎡）	壁高（cm）	柱穴深さ（cm）	壁溝	出入口施設・貯蔵穴（長径×短径×深 cm）	炉（長径×短径 cm）	備考
SI046	円形	4.42×4.42	N－46°－W	15	22	12～38	無	46×38×29	100×74	壁柱穴あり
SI072	長方形	—×4.20	N－57°－W	(20) (5.4)	49～55	P1　54 P2　? P3　? P4　45	有　一部	?	78×46	
SI073	長方形	(3.10)×2.68	N－78°－W	(7)	21～36		無	無	?	炭化材・焼土堆積
SI075A	隅丸長方形	7.16×5.84	N－67°－W	35.5 6.9 9.1	45～51	P1a　80　P1b　66 P2a　90　P2b　74 P3　78　56 P4　74　50 P5　31	無	26×20×?	96×72	平面形東側短辺が楕円形的建て替え 炭化材・焼土少量堆積
SI076	隅丸長方形	8.00×5.80	N－65°－W	39.9 13.4	50～56	P1　52 P2　60 P3　58 P4　64	無	82×48×19	86×72	遺物が多量に出土
SI079	隅丸長方形	5.66×5.14	N－62°－W	24.3 5.25	37～41	P1　70 P2　69 P3　70 P4　62	無	出　28×20×36 貯　70×34×6	76×60	炭化材・焼土少量堆積
SI080	楕円形	3.70×3.30	N－45°－W	9.6	29～38		無	出　28×20×29 貯　60×48×10	90×70	平面形が楕円形的 炭化材少量堆積
SI081	隅丸長方形	5.38×4.64	N－62°－W	21.3 6.2	28～44	P1　66 P2　58 P3　76 P4　73	無	42×26×12	110×76	焼土が多量に堆積
SI082	隅丸長方形	6.40×4.34	N－63°－W	23.5 6	38～44	P1　64 P2　59 P3　69 P4　66	無	144×56×7	76×60	平面形短辺が丸みをもつ 焼土が多量に堆積
SI098	隅丸長方形	—×5.70	N－34°－W	(29) (9.5)	42～61	P1　? P2　58 P3　68 P4　77	無	54×42×14	80×42	
SI100	隅丸長方形	—×3.24	N－5°－E		24		無	?	?	
SI107	楕円形	3.26×2.82	N－46°－E	6.45	10～14		無	無	50×46	
SI109	隅丸長方形	4.29×—	N－45°－W	(12.5)	58～66		無	無か	58×—	
第1号址	隅丸長方形	5.2×4.4	N－55°－W	18.7 5.6	35	奥右　87 前右　74 前左　78 奥左　83	無	77×45×9	78×75	昭和49年調査時遺構 覆土上層に焼土堆積
第2号址	隅丸長方形	7.7×5.9	N－50°－W	40.1 12.1	85	奥右　75 前右　85 前左　78 奥左　70	無	出　33×26×45 貯　157×66×14	100×75	昭和49年調査時遺構 壁柱穴あり　深20～28cm 覆土中に焼土・炭化材堆積
第3号址	隅丸長方形	4.8×3.8	N－49°－W	15 (3.5)	60	奥右　? 前右　? 前左　56 奥左　55	無	50×39×10	100×55	昭和49年調査時遺構 覆土上層に焼土堆積

第32表　弥生時代出土遺物観察表

（　）は推定値　［　］は現存値を表す。口径・底径・器高の単位はcm

遺構	挿図No.	器種	遺存状態	口径	底径	器高	色調	焼成	遺物番号
SI046	1	甕	10%	(17.7)		[7.8]	内面褐色、外面暗褐色	良好	2.3.4.5.16.18.19.20.25
	2	甕	口縁部片				内外面明褐色	良好	6.7.8.21.22.23.24.25
	3	甕	35%				内面暗褐色、外面黒褐色	良好	28.30.
	4	椀	口縁部片				内面橙褐色,外面橙褐色・黒褐色	良好	26
	5	甕	頸部片				内面褐色、外面暗褐色	良好	26
	6	甕	胴部片				内面明褐色、外面橙褐色	良好	32
	7	甕	胴部片				内面明褐色、外面暗黄褐色	良好	28
	8	蓋または鉢	10%	(15.9)		[3.5]	内外面明褐色	良好	9.26
	9	甕	底部片	(7.0)		[2.8]	内面暗褐色、外面橙褐色	良好	1.28
	10	甕	底部片				内面黒褐色、外面暗褐色	良好	15.29
SI072	1	甕	30%	(16.2)		[12.5]	外面黄褐色・暗褐色、内面黒褐色	良好	
	2	甕	口縁部片				内外面橙色	良好	2
	3	甕	口縁部片				内面暗褐色、外面黒褐色	良好	2
	4	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	2
	5	甕	胴部片				内面褐色、外面暗褐色	良好	2
	6	甕	頸部片				内面黒褐色、外面黒色	良好	2
	7	甕	頸部片				内外面暗黄褐色	良好	2
	8	甕	胴部片				内面暗褐色・黒褐色、外面暗褐色	良好	2.19
	9	甕	胴部片				内面暗褐色・黒褐色、外面暗褐色	良好	2
	10	壷？	胴部片				内面淡黄色・黒褐色、内面淡黄色	良好	
	11	甕	胴部片				内面橙色・黒褐色、外面黒褐色	良好	14
	12	甕	胴部片				内面明褐色・黒褐色、外面暗褐色	良好	12
	13	甕	胴部片				内面黒色、外面黒褐色	良好	10
	14	甕	15%		5.2	[3.9]	内面橙色、外面黄褐色・黒褐色	良好	13
	15	砥石		長さ 6.6	幅 4.6	厚さ 4.0	重さ　160.54g　石材:流紋岩		6
SI073	1	甕	口縁部片				内面淡褐色、外面暗褐色	良好	1
	2	甕	胴部片				内外面褐色	良好	1
	3	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	1
	4	甕	底部片				内外面淡橙褐色	良好	1
SI075	1	甕	口縁部片				外面明赤褐色・黒褐色、内面黒褐色	良好	4
	2	甕	口縁部片				外面灰褐色、外面黒褐色	良好	4
	3	甕	口縁部片				外面灰褐色、外面黒褐色	良好	4
	4	甕？	口縁部片				内面赤褐色、外面明褐色	良好	25
	5	甕	口縁部片				外面黒褐色・暗褐色、外面黒褐色	良好	1.2
	6	甕	口縁部片				内面暗褐色、外面黒褐色	良好	
	7	甕	口縁部片				内面黒褐色・暗赤褐色、外面黒褐色	良好	2
	8	甕	口縁部片				内面黄褐色、外面明黄褐色	良好	3.84
	9	甕	口縁部片				内面暗黄褐色、外面黒褐色	良好	4
	10	甕	口縁部片				内外面暗横灰色	良好	2
	11	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	3
	12	甕	口縁部片				内外面暗灰黄色	良好	3
	13	甕	口縁部片				内面黄褐色、外面暗黄褐色	良好	4
	14	甕	口縁部片				内面明黄褐色、外面淡橙褐色	良好	4
	15	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	2
	16	甕	口縁部片				内外面赤褐色・黒褐色	良好	1.3
	17	甕	口縁部片				内面黄褐色・黒褐色、外面黄褐色	良好	2
	18	甕	頸部片				内面暗褐色、外面黄褐色	良好	4
	19	甕	頸部片				内面暗黄褐色、外面灰褐色～黒褐色	良好	4
	20	甕	頸部片				内外面明赤褐色	良好	25
	21	甕	頸部片				内面明褐色、外面黒褐色	良好	4
	22	甕	胴部片				内外面明赤褐色・黒褐色	良好	2.3.25

遺構 挿図No.	器　種	遺存状態	口　径	底　径	器　高	色　　調	焼　成	遺物番号
23	甕	頸部片				内面明褐色、外面暗黄褐色	良好	7
24	甕	胴部片				内面黒褐色、外面淡橙褐色・暗褐色	良好	4
25	壷	胴部片				内外面明黄褐色	良好	7.8.10
26	甕	底部片		(6.8)	[2.6]	内面黒褐色、外面黒褐色・赤褐色	良好	26
27	甕	10%		(6.8)	[3.9]	内外面明赤褐色	良好	24
28	甕	10%		6.0	[3.2]	内外面黒褐色	良好	4
29	甕	胴・頸部片				内面淡黄橙褐色・黒褐色、外面淡黄橙褐色	良好	1.2.4.18
30	甕	底部片				内面黒色、外面明赤褐色	良好	16
31	甕	底部片		(6.5)	[2.6]	内面灰黄褐色、外面灰黄褐色・黒褐色	良好	3
32	敲石		長さ 3.9	幅 5.1	厚さ 3	重さ74.91g　石材:流紋岩		3
33	磨石		長さ 3.7	幅 3	厚さ 2.8	重さ35.28g　石材:砂岩		19
34	敲石		長さ 14	幅 5.8	厚さ 5.9	重さ606.19g　石材:砂岩		15
SI076　1	壷	85%	18.7	13.2	51.4	内面明黄褐色、外面淡橙褐色・黒褐色	良好	1.4.26.27.101.102.103.104.106.107.108.109.110.111.112.113
2	壷	75%		12.2	[51.2]	内面明黄褐色・黒褐色、外面淡橙褐色・黒褐色	良好	3.37.71.72.77.130.167
3	壷	50%		12.5		内面淡橙褐色、外面淡橙褐色・黒褐色	良好	2.3.4.6.33.34.35.36.38.39.40.41
4	壷	25%		(14.8)	[29.5]	内面黒褐色、外面淡橙褐色・黒褐色	良好	1.108.128.136.137.142.143.144.145
5	壷	45%	(39.2)	(11.2)	42.3	内外面明赤褐色	良好	1.4.27.95.101.103.107.108
6	甕	口縁部片				内面灰黄褐色、外面黒褐色	良好	4
7	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	1
8	壷	頸部片				内面淡褐色、外面淡橙褐色	良好	3
9	壷	頸部片				内面黒褐色、外面黄褐色	良好	1
10	壷	頸部片				内面黒褐色、外面黄褐色	良好	3
11	壷	頸部片				内面明黄褐色、外面淡橙褐色	良好	1
12	壷？	頸部片				内面黒褐色・灰黄褐色、外面黄褐色	良好	1
13	壷？	胴・頸部片				内面明黄褐色・黒褐色、外面黒褐色	良好	2
14	石鏃	95%	長さ 3.75	幅 2.51	厚さ 0.43	重さ3.8g　石材:黒色緻密質安山岩		29
15	砥石・敲石	100%	長さ 5	幅 4.8	厚さ 1.6	重さ78.48g　石材:砂岩		1.4
16	敲石・磨石	100%	長さ 19.1	幅 9.8	厚さ 7.85	重さ1914.69g　石材:砂岩		30.31
SI079　1	椀	95%	8.3	3.8	6.0	内面赤褐色・黒褐色、外面赤褐色・褐色・黒褐色	良好	64
2	台付甕	15%		11.5	[6.8]	内面赤褐色、外面赤褐色・暗褐色	良好	31.65
3	甕	55%		6.5	[13.9]	内外面赤褐色	良好	2.4.5.6.8.9.10.12.13.17.18
4	甕	口縁部片				内外面暗褐色～褐色	良好	69
5	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	70
6	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	69
7	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	69
8	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	70

遺構	挿図No.	器種	遺存状態	口径	底径	器高	色調	焼成	遺物番号
	9	甕	口縁部片				内外面黒褐色色	良好	70
	10	甕	胴部片				内外面淡橙褐色	良好	70
	11	甕	頸部片				内面暗黄褐色・黒褐色、外面黒褐色	良好	55
	12	甕	口縁部片				内面黄褐色、外面淡橙褐色	良好	70
	13	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	70
	14	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	70
	15	甕	胴部片				内面明褐色、外面黒褐色	良好	70
	16	壷	頸部片				内面黒褐色、外面黄橙褐色	良好	70
	17	壷	胴部片				内面淡橙褐色、外面淡橙褐色・赤褐色	良好	36.50
	18	甕	10%		8.2	[2.8]	内面淡橙褐色、外面赤褐色・黒褐色	良好	59.60.63.70
	19	甕	底部片				外面淡橙褐色・黒褐色	良好	70
	20	土製紡錘車	100%	上面径 5.3	下面径 3.8	高さ 3.0	孔径7㎜　重さ72.74g　外面明赤褐色	良好	1
	21	土製品	100%	長さ 2.3	径 0.9		重さ2.42g　外面淡橙褐色	良好	69
SI080	1	蓋または鉢	75%	(16.5)	4.8	5.7	内外面淡橙褐色・黒褐色	良好	24
	2	甕	70%		5.7	[19.9]	内外面褐色・黒褐色	良好	22
	3	甕？	口縁部片				内外面淡橙褐色	良好	25
	4	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	25
	5	甕	口縁部片				内外面暗褐色	良好	24
	6	甕	口縁部片				内面暗淡褐色、外面黒褐色	良好	27
	7	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	17
	8	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	27
	9	甕	頸部片				内面黒褐色、外面暗茶褐色	良好	24
	10	甕	口縁部片				内面橙褐色、外面暗橙褐色	良好	21
	11	甕	頸部片				内外面淡黄褐色	良好	26
	12	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	10
	13	甕	頸部片				内外面暗黄褐色	良好	11
	14	甕	胴部片				内面褐色・黒褐色、外面黒褐色	良好	24
	15	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	5
	16	甕	胴部片				内面淡褐色、外面黒褐色	良好	25
	17	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	20
	18	甕	胴部片				内面褐色、外面淡橙褐色	良好	29
	19	甕	胴部片				内外面淡橙褐色	良好	26
	20	壷	胴部片				内面赤褐色、外面淡橙褐色	良好	26
	21	壷	胴部片				内面赤褐色、外面淡橙褐色・赤褐色	良好	27
	22	甕	10%		(7.7)	[3.5]	内面黒褐色、外面褐色・黒褐色	良好	7.24
	23	甕	10%		(8.4)	[4.2]	内面黒褐色、外面暗赤褐色・黒褐色	良好	12.13.26
	24	砥石		長さ 8.9	幅 8.2	厚さ 3.3	重さ43.12g　石材:砂岩		23
SI081	1	甕	50%		7.3	[17.5]	内面黒褐色、外面淡褐色・黒褐色	良好	1.3.4.5.7.9.10. 11.12.13
	2	甕	口縁部片				内面黒褐色・暗褐色、外面橙褐色	良好	8
	4	甕	口縁部片				内面黒褐色、外面褐色	良好	3
	5	甕	口縁部片				内外面褐色・黒褐色	良好	4
	6	壷	口縁部片				内面淡黄褐色、外面暗黄褐色	良好	1
	7	甕	胴部片				内面淡褐色、外面黒褐色	良好	2
	8	甕	胴部片				内面黒褐色、外面暗褐色	良好	2
	9		口縁部片				内面淡褐色、外面暗褐色	良好	6
	10	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	1
	11	甕	胴部片				内面黒褐色、外面暗褐色	良好	1.2
	12	甕	胴部片				内面黒褐色、外面淡褐色	良好	2
	13	甕	胴部片				内面暗赤褐色、外面淡赤褐色	良好	1
	14	甕	底部片				内外面黒褐色	良好	2
SI082	1	甕	20%		18.8	[6.6]	内外面淡橙褐色	やや不良	1.3.29

遺構 挿図No.	器　種	遺存状態	口　径	底　径	器　高	色　　調	焼　成	遺物番号
2	甕	30%		(5.8)	[20.1]	内外面淡橙褐色・黒褐色	良好	1.2.3.4.10.12.13.15.17.18
3	甕	口縁部片				内外面暗赤褐色	良好	4
4	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	2
5	甕	口縁部片				内面淡褐色、外面黒褐色	良好	1
6	鉢	口縁部片				内面赤褐色、外面淡黄褐色	良好	1
7	甕	口縁部片				内面淡褐色、外面黒褐色	良好	1
8	甕	口縁部片				内面淡褐色、外面黒褐色	良好	4
9	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	2
10	甕？	口縁部片				内外面橙褐色	良好	2
11	甕	胴部片				内面暗褐色、外面黒褐色	良好	4
12	甕	胴部片				内面黒褐色、外面淡橙褐色	良好	4
13	甕	胴部片				内面暗橙褐色、外面黒褐色	良好	4
14	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	1
15	甕	頸部片				内面淡橙褐色、外面黒褐色	良好	1
16	甕	胴部片				内面暗赤褐色、外面淡橙褐色	良好	3
17	甕	胴部片				内面暗赤褐色、外面黒褐色	良好	1.4
18	甕	胴部片				内面淡橙褐色、外面黒褐色	良好	4
19	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	4
20	甕	胴部片				内面黒褐色、外面淡橙褐色	良好	22
21	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	4
22	甕	胴部片				内面黒褐色、外面淡黄褐色	良好	5
23	甕	胴部片				内面明黄褐色、外面黒褐色	良好	1
24	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	1
25	甕	胴部片				内面暗褐色、外面暗黄褐色	良好	19
26	甕	10%		4.6	[2.0]	内面暗褐色、外面黒褐色・暗褐色	良好	3
27	甕	底部片		(6.0)	[1.5]	内面黒褐色、外面暗赤褐色・黒褐色	良好	26
28	甕	底部片				内面黒褐色、外面暗赤褐色・黒褐色	良好	4
29	甕	底部片				内面淡黄褐色、外面暗褐色	良好	1
30	鉢？	10%		4.0	[1.6]	内面暗褐色、外面褐色	良好	20
31	甕	底部片				内面黒褐色、外面黒褐色・淡橙褐色	良好	1
32	甕	底部片				内面淡黄褐色、外面橙褐色	良好	4
33	鉢	口縁部片				内面赤褐色、外面暗黄褐色	良好	4
34	壷	胴部片				内外面淡橙褐色	良好	1
35	壷	胴部片				内面淡橙褐色、外面淡橙褐色・赤褐色	良好	1
36	壷	胴部片				内外面淡橙褐色	良好	2
37	壷	頸部片				内面淡橙褐色、外面暗黄褐色	良好	4
38	鉢	20%		(6.0)	[4.0]	内外面淡橙褐色・赤褐色	良好	14
39	壷	胴部片				内外面淡橙褐色	良好	8
40	甕	胴部片				内面黒褐色、外面暗褐色	良好	4
41	石製臼玉		径 0.9	厚さ 0.3	孔径 0.3	重さ0.24g　石材:滑石		21
SI098　1	壷	20%	21.0		[15.4]	内外面淡橙褐色・赤褐色	良好	1.10
2	壷	胴部片				内外面淡橙褐色	良好	2
3	鉢	口縁部片				内外面淡橙褐色	良好	11
4	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	11
5	甕	口縁部片				内外面暗褐色	良好	2
6	甕	口縁部片				内面淡黄褐色、外面暗黄褐色	良好	2
7	甕	胴部片				内面淡黄褐色、外面淡橙褐色	良好	11
8	甕	頸部片				内面褐色、外面暗褐色・褐色	良好	11
9	甕	胴部片				内外面暗褐色	良好	2
10	甕	胴部片				内面淡黄褐色、外面暗褐色・黒褐色	良好	2
11	甕	胴部片				内面淡褐色・黒褐色、外面褐色	良好	11
12	甕	口縁部片				内外面淡黄褐色	良好	2
13	甕	胴部片				内外面淡黄褐色	良好	6

遺構	挿図No.	器種	遺存状態	法量			色調	焼成	遺物番号
				口径	底径	器高			
	14	砥石		長さ 7.6	幅 4	厚さ 1.2	重さ64.73g　石材:砂岩		8
SI107	1	甕	15%			[10.9]	内外面暗赤褐色・黒褐色	不良	1.4.8
	2	甕	胴部片				内外面淡橙褐色	不良	2
SI109	1	甕	25%	(16.6)		[12.5]	内面褐色・黒褐色、外面淡橙褐色・黒褐色	良好	1
	2	壷	口縁部片				内面黒褐色、外面淡橙褐色	良好	1
	3	壷？	胴部片				内外面淡橙褐色	良好	1
	4	甕	胴部片				内面褐色、外面暗褐色	良好	1
	5	甕	胴部片				内面褐色、外面暗褐色	良好	1
	6	甕	胴部片				内面黒褐色、外面淡橙褐色	良好	1
遺構外	1	甕	口縁部・胴部片				内面淡褐色、外面赤褐色	良好	037-30.40
	2	甕	口縁部片				内面淡黄褐色、外面暗褐色	良好	035-1
	3	甕	口縁部片				内面淡橙褐色、外面橙褐色	良好	103-1
	4	甕	口縁部片				内外面黒褐色	良好	110-3
	5	甕	口縁部片				内面黒褐色、外面暗褐色	良好	11E-1
	6	甕	口縁部片				内外面淡黄褐色	良好	077-4
	7	甕	口縁部片				内面黒褐色、外面暗黄褐色	良好	110-4
	8	鉢	口縁部片				内面黒褐色、外面暗褐色	良好	104-1
	9	甕	口縁部片				内面黒褐色、外面暗褐色	良好	056-2
	10	壷	頸部片				内面淡褐色、外面暗灰黄褐色	良好	5C-3
	11	鉢	口縁部片				内面淡黄褐色、外面暗黄褐色	良好	080-16
	12	甕	頸部片				内面淡橙褐色、外面黒褐色	良好	056-6
	13	壷	胴部片				内面淡黄褐色、外面淡黄褐色・黒褐色	良好	11E-1
	14	甕	胴部片				内外面暗褐色	良好	8E-3
	15	甕	胴部片				内外面黒褐色	良好	076-145
	16	壷	胴部片				内面淡黄褐色、外面暗黄褐色	良好	11E-1
	17	甕	胴部片				内面褐色・暗褐色、外面褐色・黒褐色	良好	表採-8
	18	甕	底部片		(6.7)	[3.3]	内面暗灰黄褐色、外面淡黄褐色	良好	113-1.2
	19	甕	底部片		(6.4)	[3.2]	内面黒褐色、外面褐色	良好	080-6.080-24
	20	甕	底部片		(6.2)	[2.4]	内面黒褐色、外面褐色・黒褐色	良好	024-57.86
	21	椀	口縁部片				内面赤褐色、外面淡橙褐色	良好	045-4
	22	椀	口縁部片				内面淡橙褐色、外面淡黄褐色	良好	037-4
	23	椀	口縁部片				内面黒褐色・赤褐色、外面暗黄褐色・赤褐色	良好	10E-5
	24	壷	口縁部片				内面赤褐色、外面淡橙褐色・赤褐色	良好	035-2
	25	壷	胴部片				内面淡黄褐色、外面黒褐色	良好	055-1
	26	壷	頸部片				内外面暗赤褐色	良好	2B-3

第5章　古墳時代

第1節　遺構

1．竪穴住居（第33表）

SI054（第90図，図版15）

調査区中央部に位置する。平面形は整った方形で，壁溝は全周する。4か所の主柱穴をもち，出入り口ピットは南東壁側のほぼ主柱穴間に位置する。カマドは北西壁中央に設置され，比較的残りが良く，周囲への構築材の流出は少ない。カマド内からの遺物の出土は極めて少なかった。覆土は自然堆積と思われる。柱穴内も大差はないがロームの含有が多い。南西壁側中央の覆土中に焼土塊が少量堆積する。

遺物のうち，土師器甑15及び甑15内に入っていた土師器甕13はP4内上部からの出土であり，意図的な廃棄行為と思われる。これにより柱は抜き取られていたことがわかる。竪穴住居廃絶の際の祭祀行為に伴う遺物と思われる。土師器坏3・5はP4脇の床面から伏せて重なった状態で出土した。5が下，3が上である。以上4点の遺物は本遺構に伴う可能性が考えられる。そのほかにも比較的多くの遺物が出土したが，床面よりもかなり高い位置での出土である。住居廃棄後に周囲から廃棄された，または流入した遺物が主体であり，須恵器蓋1・土師器皿8など時期的に降る遺物がみられる。

SI056（第91図，図版16）

調査区中央部に位置する。平面形は不整の方形で，壁溝は南西隅付近とカマド右脇の一部にある。床面には多くのピットがあるが，陶器の出土により中世以降のものと思われ，4か所の主柱穴はみられない。出入り口ピットは東壁際のものにその可能性があるが，不明瞭である。床面は硬化面がカマド前面から北壁側等にみられるが，中央から南壁側はピット・撹乱の影響でやや軟質となっている。カマドは西壁右寄りに設置され，北西隅に近い位置にある。覆土は暗褐色土主体で自然堆積と思われる。

出土遺物は少ないが，残りの良い土師器甑1と土製支脚3がカマド前面の床面から出土した。

SI133（第91図，図版16）

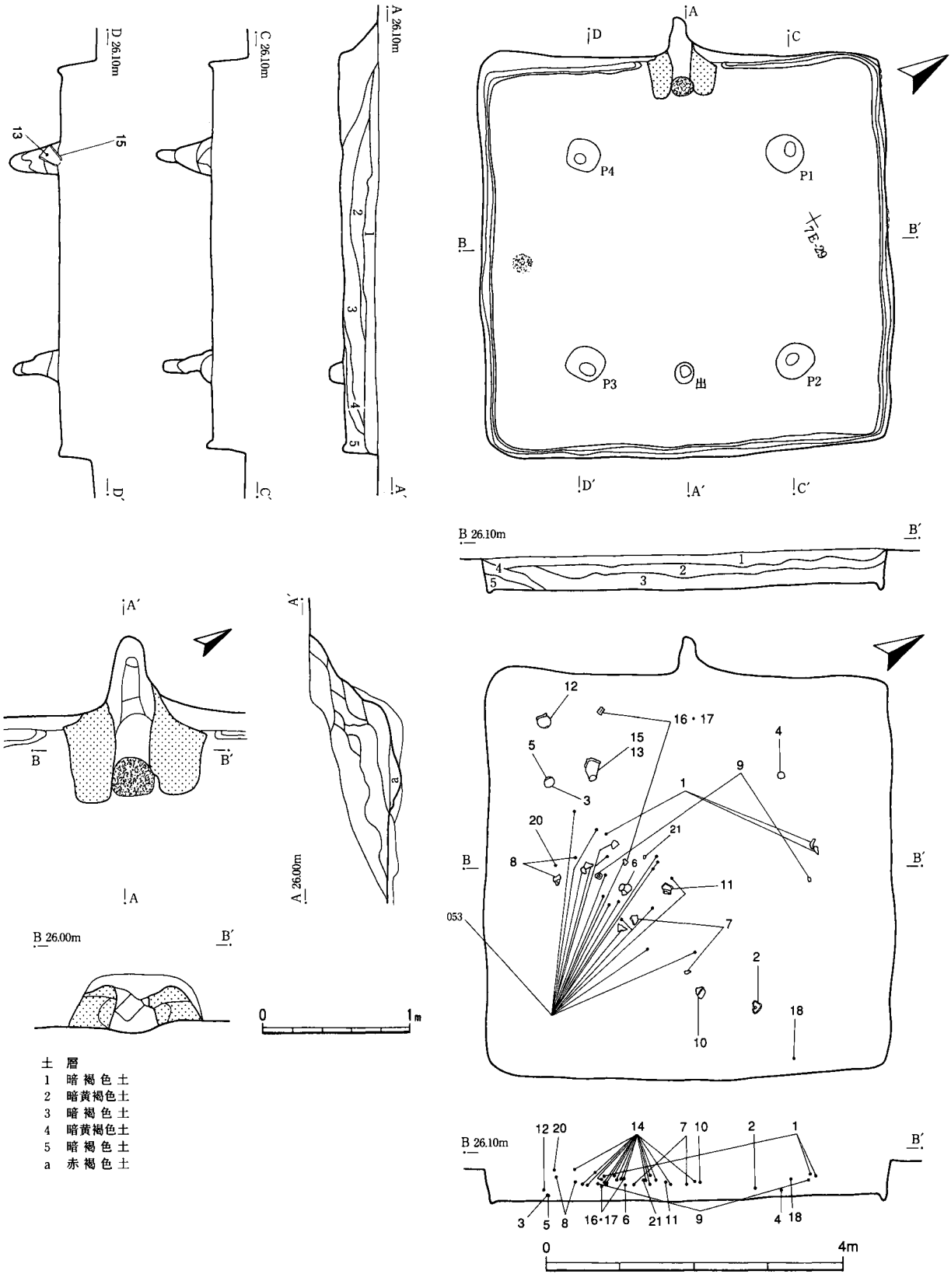
調査区南部に位置する。平面形は方形であるが，遺存が悪いことと北半部が調査区外であることから，検出した壁は南東隅部付近にとどまった。壁溝は現状ではみられないが，有無は不明とすべきであろう。主柱穴は4か所であるが，調査したのは出入り口側の2穴である。出入り口ピットは南壁側の主柱穴間やや壁寄りに位置する。その他のピットは伴うものとは思われない。カマドは調査区外の北壁にあると考えられる。覆土は自然堆積と思われる。柱穴内は基本的に3層で上層が暗褐色土，中層が暗黄褐色土，下層が黄褐色土である。下層はローム塊を多く含む。

遺物は竪穴の遺存が悪いため少量である。土師器坏片2点を図示した。

第2節　遺物

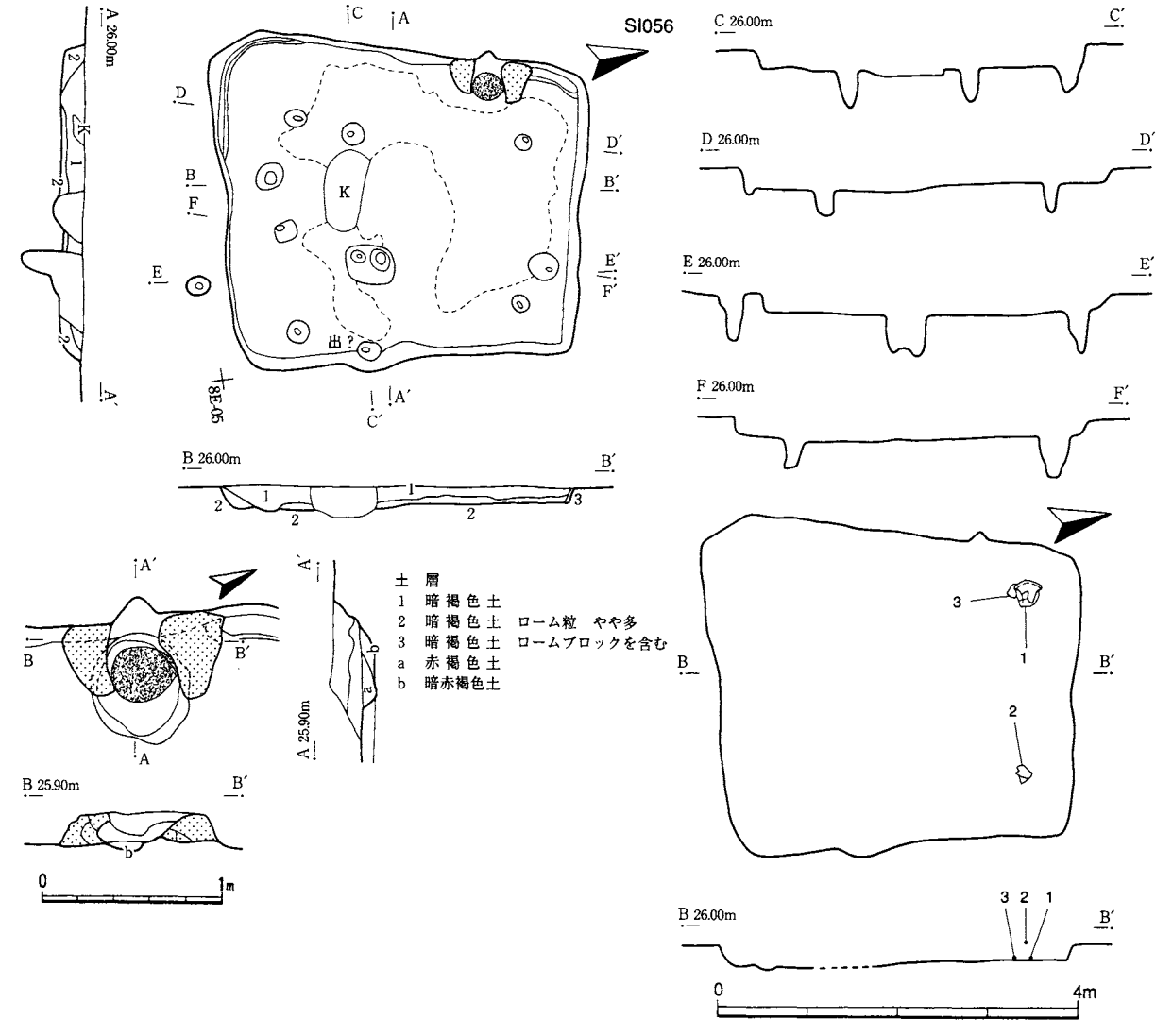
1．竪穴住居（第34表）

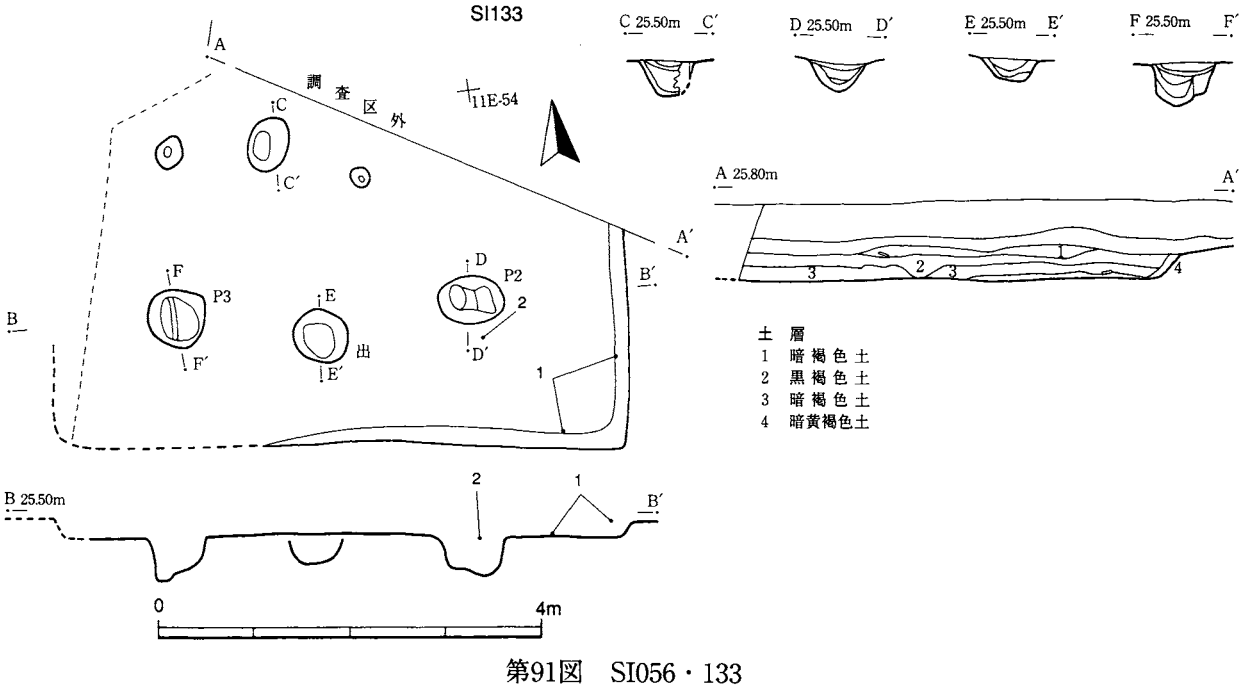
SI054（第92図，図版77・91・92・97）



土 層
1 暗褐色土
2 暗黄褐色土
3 暗褐色土
4 暗黄褐色土
5 暗褐色土
a 赤褐色土

第90図 SI054





第91図　SI056・133

1は須恵器坏蓋で，新治窯産と考えられる。扁平な擬宝珠形のつまみと口縁部内面に鈍いかえりを有する。白雲母・長石・石英等の混入物を多く含む。色調は黄色味を帯びた灰色である。焼成は軟質で，内面はナデあるいは使用時の擦痕で一部ロクロ目が消えている。内面に「×（+）」状の線刻がみられる。「×」の近くややや離れたところにも筋があり，意図的なものではないかもしれないが，線刻の「×」等は近年古くさかのぼる資料があることが指摘されており[1)]，記号資料としておきたい。あるいはヘラ書きかもしれないが，器面の摩耗によりやや不明瞭である。もともと深く刻まれていないと思われる。2は須恵器蓋坏である。湖西窯産と思われる。外面がやや摩耗し，特に底部には擦痕がみられる。3～7は土師器坏である。須恵器蓋模倣と思われるが，小形の4は口縁部の稜がやや不明瞭である。5・6は漆仕上げが施されている。3も可能性があるが，炭素吸着による黒色処理あるいは両方為されているとした方が良いかもしれない。3・6の外面は不明瞭であり，4も漆仕上げの可能性があるが不明瞭である。8は土師器皿で，内外面赤彩が施される。火熱を受け，内外面に剥離痕がある。9は土師器高坏である。外面赤彩，内面黒色処理が施される。10は土師器鉢である。内外面にヘラミガキが施され，ていねいな作りの土器である。11～14は土師器甕である。11～13は小形の甕であるが，11は鉢的で，口縁部から胴部へのくびれが少ない。13は器壁が厚く，重量感のある土器である。14は常総型の甕である。15は土師器甑である。13は完形で，底部にひびが入っている程度の良好な個体である。12もほぼ完形，15も口縁部が所々欠損する程度で遺存良好である。11～15はいずれも火熱を受けた痕跡が明瞭である。やや壷的な形の13も胴部内面の摩耗は著しい。16・17は土製支脚である。同一個体と思われる。18は石製丸玉である。19は軽石である。20は砥石である。図示した上面には使用により窪んだ部分がある。21は石製紡錘車である。

以上の遺物のうち，須恵器坏蓋1と土師器皿8は明らかに他の多くの土器よりも下降する時期のものであり，常総型甕14も時期が降る可能性がある。

SI056（第93図，図版77・93）

1は土師器甑である。内面の一部，底部からの高さが8㎝くらいのところに接合痕がある。また，内面は一部でヘラの当たりが顕著である。内面の中位から下部は火を受けたことや・使用に伴う器面の剥落がやや目立つ。2は土師器甕である。常総型の甕で，胴部下部から底部にかけての小片であるが，復元形はかなり大きな土器である。器面が荒れ，火熱を受けた痕跡が明瞭である。3は土製支脚である。

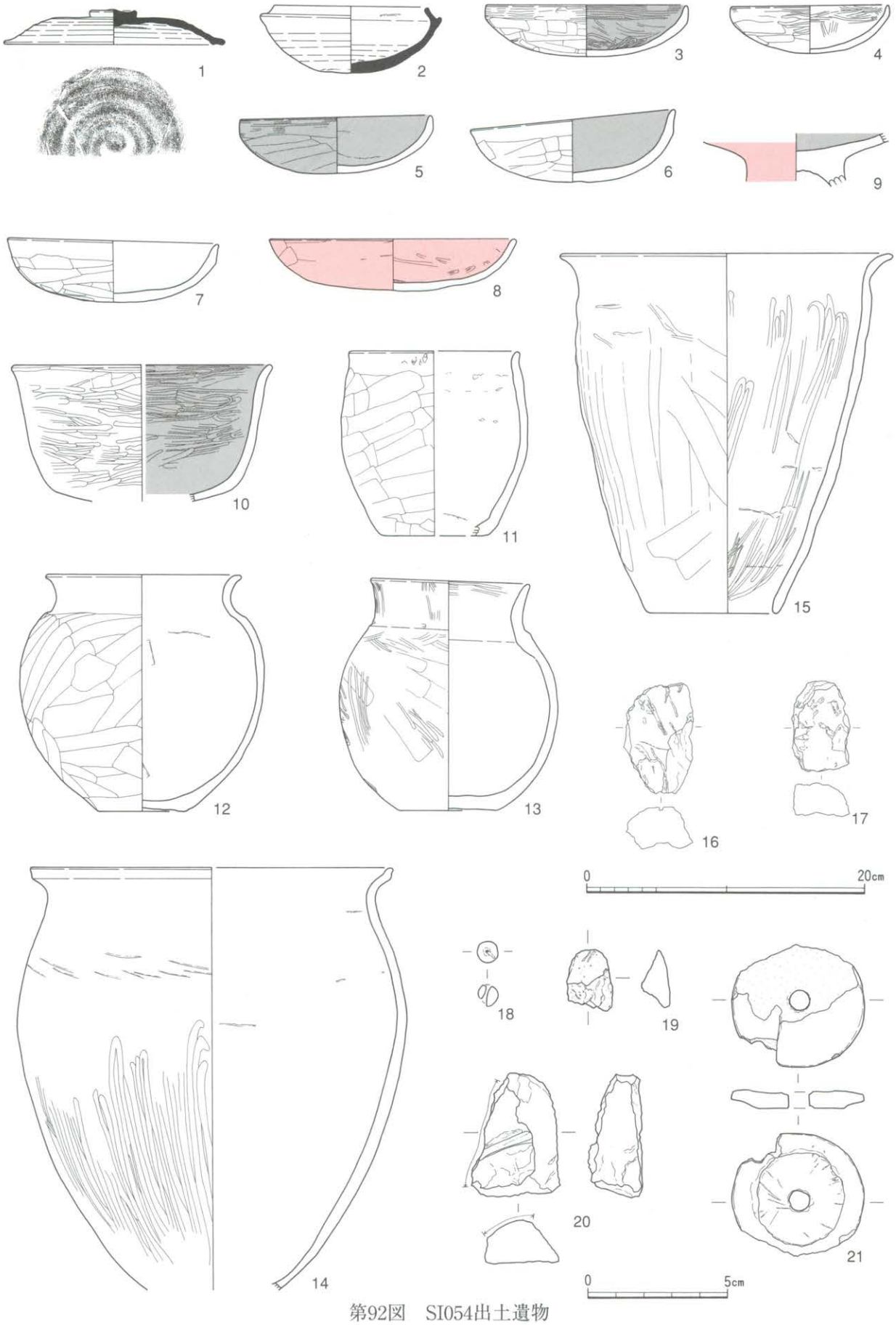
SI133（第93図，図版77）

1・2は土師器坏である。1は須恵器蓋模倣，2は須恵器坏身模倣の坏である。

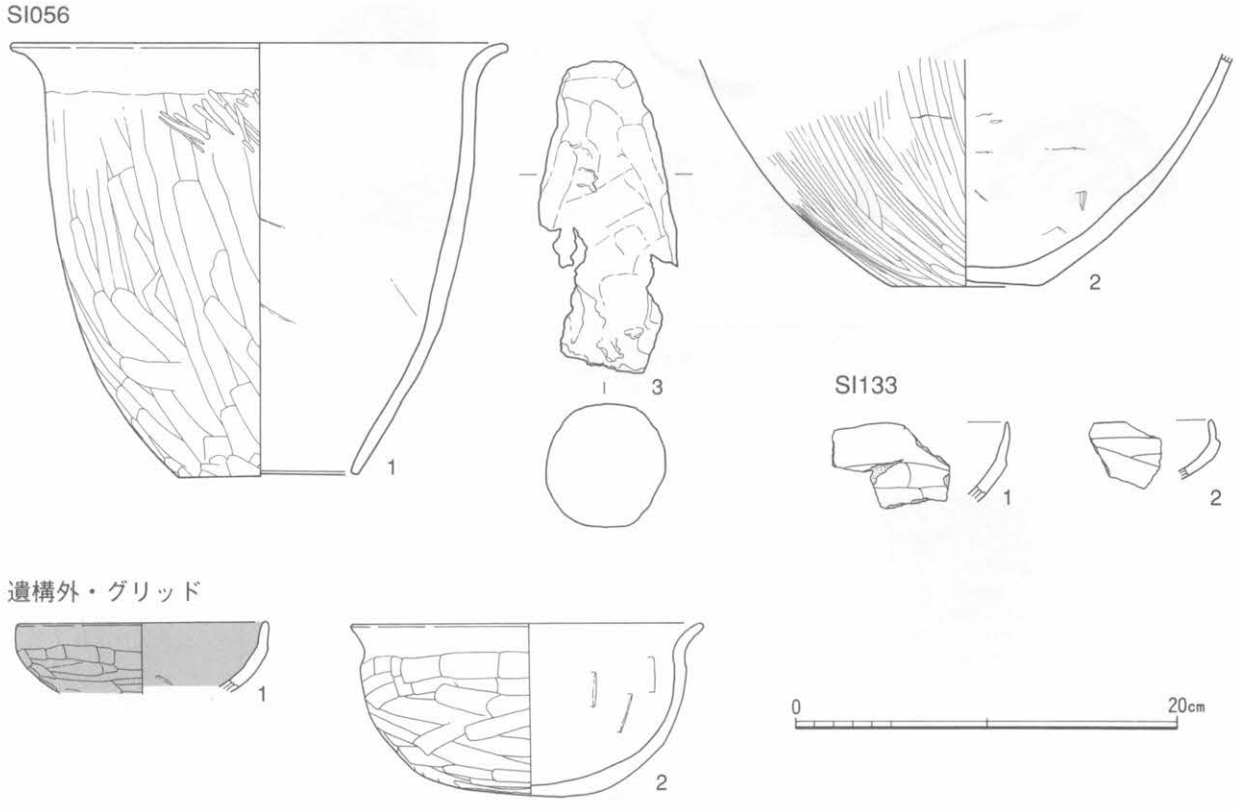
2．遺構外（第93図，第34表，図版77）

1は土師器坏である。須恵器蓋模倣と思われる。内外面とも漆仕上げが施されている。2は土師器鉢である。胴部外面は痕跡が明瞭でないがヘラケズリの後粗いヘラミガキが施されており，器面はやや平滑である。1・2とも弥生時代のSI076竪穴住居からの出土であり，近くに古墳時代の竪穴住居が存在することを示唆する遺物である。

注1　山下孝司　2000　「墨書土器・刻書土器にみる魔除け符号」『山梨縣考古學協會誌』第11号



第92図　SI054出土遺物



第93図　SI056・133・遺構外出土遺物

第33表　古墳時代竪穴住居観察表

計測値（　）内の数値は推定値

遺構No.	規　模 （主軸×副軸m）	主軸方位	面　積 （上:床面積 ㎡） （下:柱穴内面積 ㎡）	壁　高 （cm）	柱穴深さ （cm）	出入口 （cm）	壁　溝	カマド位置	特記遺物・備考	時　代
SI054	5.43×5.5	N－61°－W	27.78 7.93	41～48	P1　74 P2　65 P3　60 P4　67	19	全周	北西壁中央	P4上部に甑	7C 第2四半期
SI056	3.53×3.88	N－77°－W	12.36	20～29	?	29?	南西隅周辺	西壁右寄り		後期
SI133	—×(6)	N－6°－E	(36) (10)	16～33	P1　? P2　42 P3　46 P4　?	28	無?	?		7C
第5号址	4.75×4.55	N－30°－E	18.8	40	?	30	ほぼ全周周	北東壁中央	昭和49年調査 カマド内から貝殻出土	7C前半

第34表　古墳時代出土遺物観察表

（　）は推定値　［　］は現存値　口径・底径・器高の単位はcm

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
SI054　1	須恵器蓋	15.7		2.6	80%	灰白色	良好	ロクロ成形　内　ヘラナデ　外　天井部回転ヘラケズリ　常陸新治窯産　混入品	11.81.82
2	須恵器坏	(11.1)	受け部径13.15	[5.0]	65%	灰色	良好	ロクロ成形　湖西窯産　砥ぎ具に転用?	46
3	土師器坏	14.4		3.75	100%	内　黒褐色　暗赤褐色　外　暗赤褐色	良好	内　ヘラミガキ　外　ヘラケズリ　粗いヘラミガキ　内面黒色処理	74
4	土師器坏	11.3		3.55	100%	淡褐色	良好	内　ヘラミガキ　外　ヘラケズリ　ヘラミガキ　被熱	79
5	土師器坏	13.65		4.2	100%	内　黒褐色　外　暗茶褐色	良好	内　ヘラナデ　ヨコナデ　ヘラミガキ　外　ヘラケズリ　ヨコナデ　ヘラミガキ　内外面黒色処理	77
6	土師器坏	14.65		5.0	75%	内　橙褐色　外　褐色	良好	内　ナデ　外　ヘラケズリ　被熱　漆仕上げ	63
7	土師器坏	15.05		4.6	50%	橙褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　ナデ　外　ヘラケズリ　一部内外面口縁部同じ箇所に煤付着	62.85
8	土師器皿	17.5		3.8	60%	淡褐色	良好	内　ヘラナデ　ヘラミガキ　外　ヘラケズリ　ヘラミガキ　全面赤彩　被熱により内外面に剥離　混入品	1.2.71.72
9	土師器高坏			[4.8]	25%	内　黒色　外　褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ヘラケズリ　ナデ　坏部内面黒色処理　外面赤彩	68
10	土師器鉢	(18.3)		[9.8]	35%	内　黒色　外　橙褐色	良好	内　ヘラミガキ　外　ヘラケズリ　ヘラミガキ　底　ヘラケズリ　ナデ	55
11	土師器小型甕	(12.0)	(7.9)	13.25	100%	内　黒褐色　外　暗赤褐色	良好	内　ヘラナデ　ナデ　外　ヘラケズリ　底　ヘラケズリ　内外面に接合痕あり　被熱	59
12	土師器甕	13.8	6.5	17.0	100%	内　褐色　外　赤褐色	良好	内　ヘラナデ　ナデ　外　ヘラケズリ　ヨコナデ　底　ヘラケズリ　内面接合痕あり	75
13	土師器甕	11.25	7.1	16.5	35%	内　橙褐色　外　明褐色	良好	内　ヘラナデ　ヘラミガキ　外　ヘラケズリ　ヘラミガキ　底　ヘラケズリ　ヘラミガキ　黒斑	92
14	土師器甕	(25.7)		[30.4]	95%	内　黒褐色　外　淡赤褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ナデ　ヘラナデ　ヨコナデ　ヘラミガキ　小石多　内面接合痕　常総型　混入品か	053-4.20.054-1.2.3.4.5.6.9.10.12.13.21.28.30.31.32.37.41.53.58.60.64.67.69.70
15	土師器甑	23.5	外径9.4　内径8.6	25.95		内　暗褐色　外　淡赤褐色	良好	内　ヘラナデ　ヘラミガキ　外　ヘラケズリ　ヘラミガキ　内面接合痕あり	76
16	土製支脚	長径7.9	厚さ3.0	短径4.9		橙褐色	もろい		25
17	土製支脚	長径6.5	厚さ2.5	短径4.05		橙褐色	もろい	16と同一個体と思われる	9
18	石製丸玉	径0.75	厚さ0.75					孔径1㎜　重さ0.4g　石材:不明(ホルンフェルスまたは砂岩か)	45
19	軽石	長径2.0	厚さ1.0	短径1.6		淡褐色		重さ1.06g	4
20	砥石	長径4.4	厚さ1.6	短径3.2		灰白色		重さ23.4g　石材:凝灰岩	19
21	紡錘車	上面径4.8	厚さ0.65	下面径3.3		茶黒色		孔径0.75　重さ23.9g　滑石製	7
SI056　1	土師器甑	25.6	9.4	22.9	90%	橙褐色	良好	内　ヨコナデ　ナデ　ヘラナデ　外　ヘラケズリ　ヨコナデ　ヘラミガキ	1.5.13
2	土師器甕		(8.4)	[12.0]	10%	内　暗灰黄色　外　淡褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ヘラミガキ　底　手持ちヘラケズリ　常総型　内外面接合痕あり　被熱	1.1
3	土製支脚	長径16.6	厚さ6.4	短径7.4		褐色～橙褐色	良好		14
SI133　1	土師器坏				破片	内　暗橙褐色　外　暗褐色	良好	内　ヨコナデ　ナデ　外　手持ちヘラケズリ　ヨコナデ	4.6.28
2	土師器坏				破片	内　淡橙褐色　外　淡褐色	良好	内　ヨコナデ　ナデ　外　手持ちヘラケズリ　ヨコナデ	8
遺構外　1	土師器坏	12.85		[3.65]	70%	内　黒褐色　暗褐色　外　暗赤褐色　黒褐色	良好	内　ナデ　外　手持ちヘラケズリ　ナデ　ヘラミガキ　内外面漆仕上げ	SI076-2.3.7.19.161
2	土師器鉢	18.3		9.15	85%	内　暗橙褐色　外　暗赤褐色	良好	内　ヘラナデ　ナデ　外　手持ちヘラケズリ　粗いヘラミガキ	SI076-1.3.4.6.16.22.26.28.160.205

第6章　奈良・平安時代

第1節　遺構

1．竪穴住居（第35表）

奈良・平安時代の竪穴住居は調査区内では53棟見つかった。規模や主軸方位等の計測値については観察表に記載したので，以下の記述では省略する。

SI002（第94図，図版17）

調査区北部に位置する。平面形はやや縦長の方形である。出入り口ピットは南壁際中央わずかに右寄りに位置する。4箇所の主柱穴は見られない。壁溝は南壁の南東隅側で一部途切れる他は巡る。掘形底面は床面よりかなり深く，ローム塊を多く含む暗（黄）褐色土で埋め戻されて平坦な床面が作られている。

カマドは北壁中央に設置され，方形プランから外側へかなり突出している。前方に構築材が多少流出しているが，火床部上方に完形の土師器甕22があり，全体的には遺存が良い。

遺物の出土量は比較的多く，竪穴全体から出土しているが，カマド内及びカマド前方が多い。特にカマド内からは遺棄された甕以外にも，土師器坏4や高台付皿17等ほぼ完形の遺物が出土した。その他の遺物は床面ないし床面に近い所から出土しているものもあるが，全体的にはやや高い位置のものが多い。

SI003（第95図，図版17）

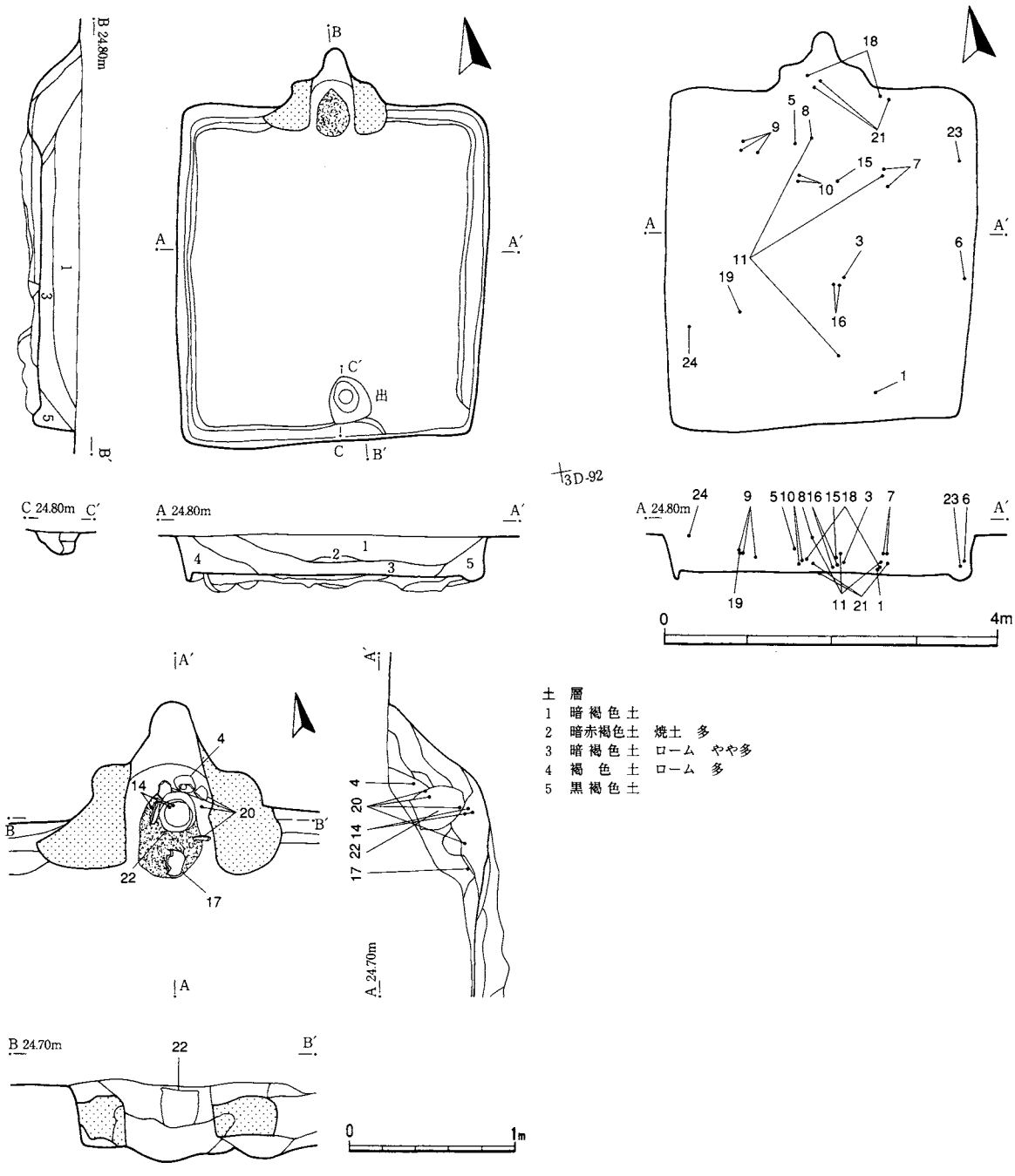
調査区北部に位置する。平面形はやや縦長の方形である。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。4箇所の主柱穴は見られない。壁溝は全周し，やや幅が広い。床面には硬化面が中央から出入り口付近まで認められる。床面中央やや出入り口寄りの所に被熱による硬化・赤色化範囲があり，床面から6～8㎝の深さで浅く窪んでいる。位置的に炉かと思われるが，本遺構の周囲に中近世以降と思われる土坑があることから，新しい時期のものとも考えられる。覆土は暗褐色土主体で自然堆積と思われる。掘形底面は全体に床面より深く，ローム塊を多く含む暗褐色土で埋め戻されている。

カマドは北壁中央に設置される。袖部は下部が多少のロームを含む暗褐色土で，その上に山砂主体の土で構築されている。両袖間には崩壊した天井部構築材が厚く堆積する。

遺物の出土量は多く，北東隅と南西隅部がやや薄い以外は竪穴全体から出土している。床面ないし下層から出土した遺物も10数点あり，それらも竪穴全体から出土している。

SI008（第96図，図版17）

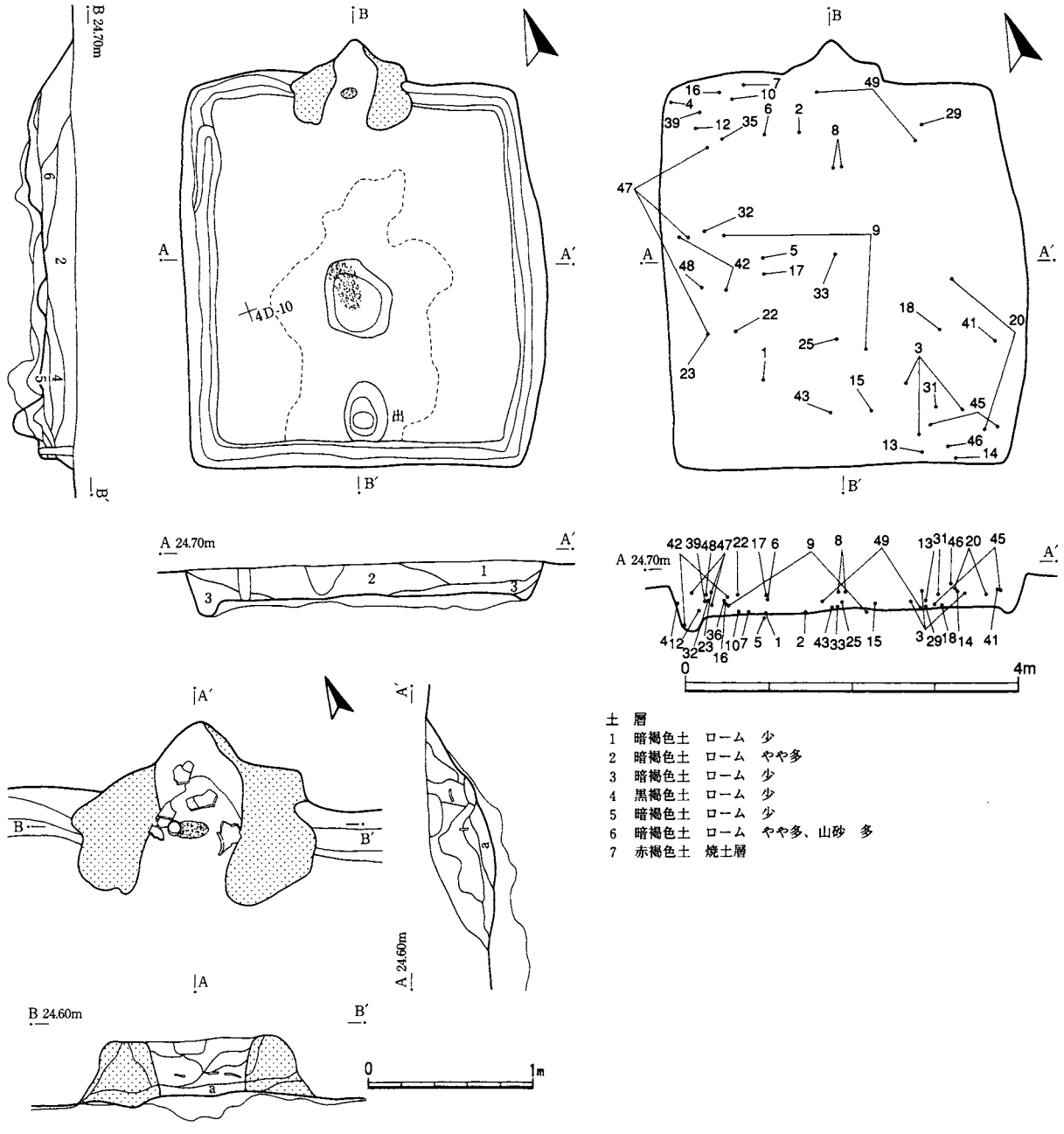
調査区北部に位置する。平面形は方形である。出入り口ピットは東壁際中央に位置する。4箇所の主柱穴は見られない。壁溝は全周する。床面は硬化面が広く認められる。竪穴の南西隅からカマドの左袖にかけて，床面から5㎝弱ほど盛土がされていた。盛土上面は固くしまっており，床状を呈していた。盛土の下も固くしまっていたので，床面を作った後にあらためて盛土したものと考えられる。ただし，攪乱を受けており，形をおさえることができなかった。1ｍ×50㎝ほどの長方形を呈していたのではないかと推測される。この部分に接して若干の焼土を含む土が南壁側中央寄りの床面上に堆積していた。ただし，床面



第94図　SI002

は焼けて硬化していないので，竪穴廃棄後の焼土の廃棄あるいは一時的な焼却に伴うものであろう。覆土は中・下層がローム粒を多く含むが，下部ほど粒径が大きくなる。掘形底面は床面との高さの差は少なく，当初から比較的平坦に掘られている。

カマドは西壁中央右（北）寄りに位置し，竪穴が小さいため袖に向かって右側がすぐ北西隅となる。煙道部は方形プランから外側へ鋭角的に突出している。カマドは遺存があまり良くない。袖は基底部が地山のハードローム層を掘り残したもので，その上に山砂に加えてロームを多く含む土を盛っている。火床部奥には土製支脚が立って残っていた。ただし，もろく整理中に崩れたために実測図を作成できなかった。遺物の出土は平面的にはカマド内及びカマド側半分に多く，中央部が少ない。出土層位は床面から上層ま

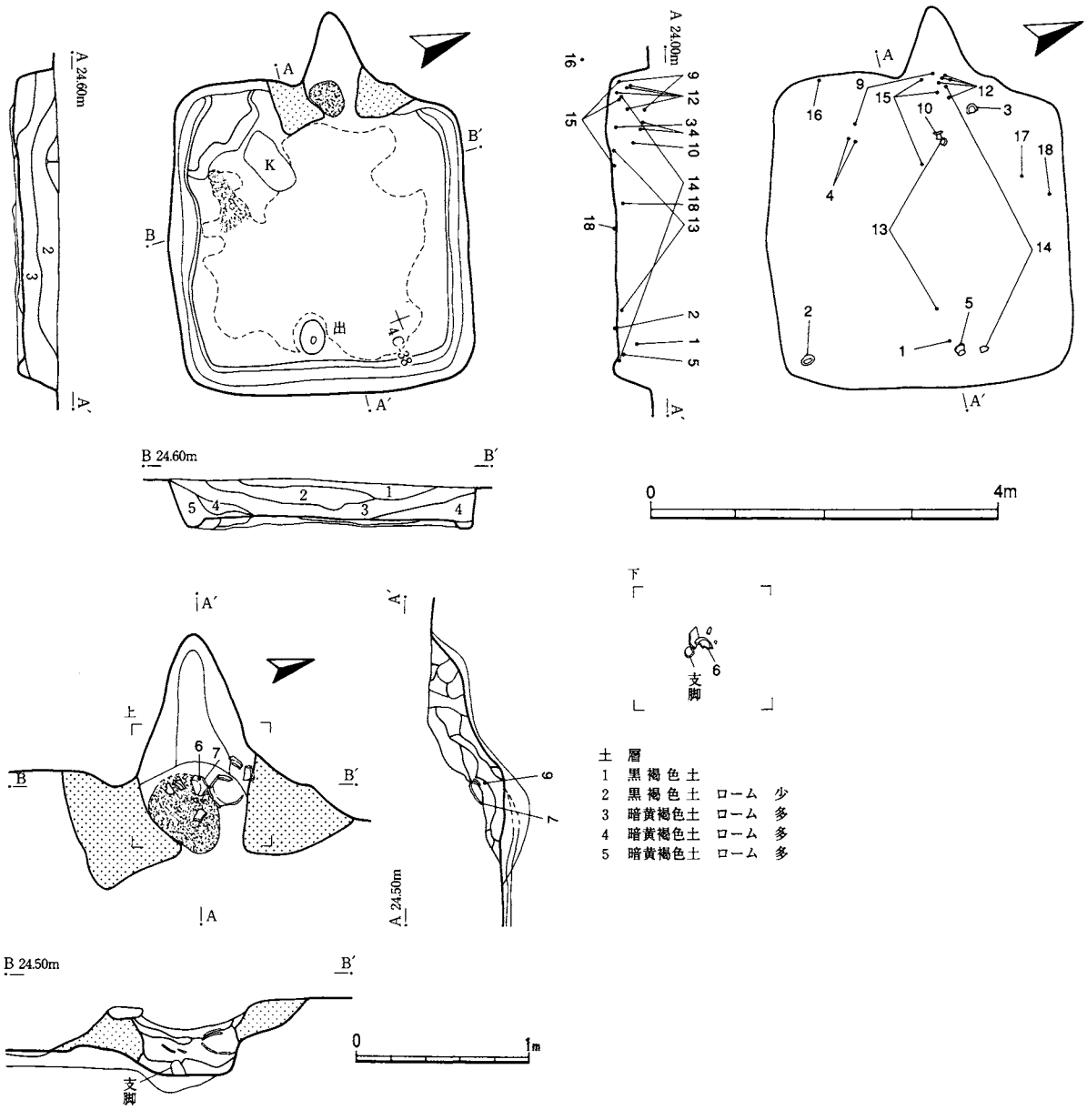


第95図　SI003

で見られる。

SI009（第97・98図，図版18）

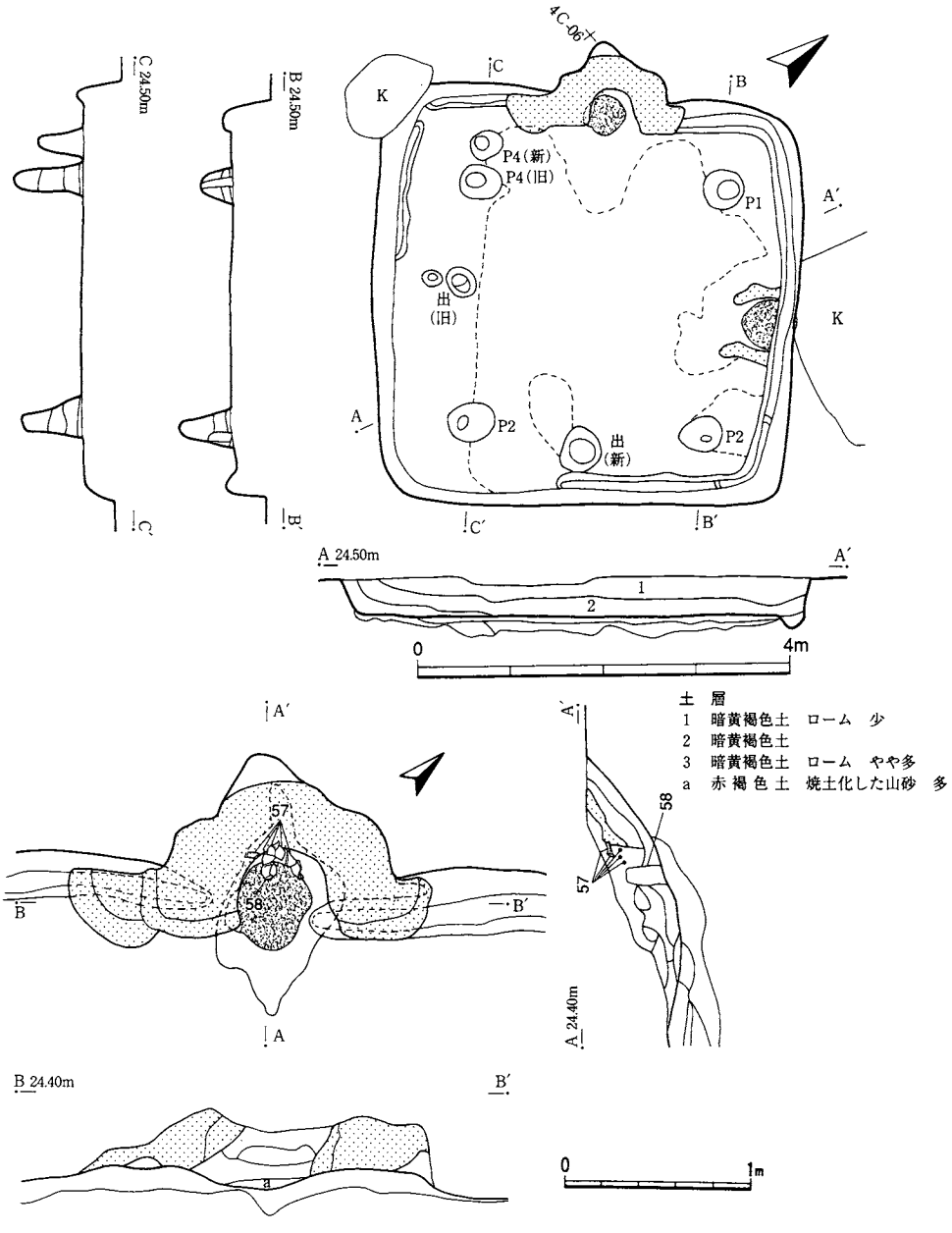
調査区北部に位置し，SI010が北東側近くに存在する。平面形は方形で，主柱４本に伴う柱穴がある。建て替えがあり，新旧のカマド，新旧の出入り口ピット，主柱穴の１箇所に新旧のピットがある。カマドの新旧の区別については，遺存の良い方を新カマドとした。新カマドは北西壁中央にあり，そのカマドに対向する南東壁際のピットが新しい出入り口ピットである。旧カマドは北東壁中央にあり，そのカマドに対向する南西壁際のピットが古い出入り口ピットである。ただし，南西壁際のピットは２基あり，壁際が深さ11cm，その隣が深さ20cmである。双方が出入り口ピットであるならば，出入り口ピットの付け替えか，



第96図　SI008

あるいは建て替えが1度ではなかったことを意味するものと思われる。主柱4本に伴う柱穴のうち，西隅に近い柱穴（P4）は近い位置に2基ある。新旧の区別については，規模の大きいピットを旧とした。柱抜き取りのさい周囲の床面を多少削ったものと考えられることによる。新しいピットは壁に寄っているが，49cmの深さから柱穴として良いものと考える。P1～P3は各々1基であるが，上端がやや広がっていることから，同じ位置に柱を建て替えたものと考えたい。

壁溝があるのは新旧カマドのある北西・北東壁，そして南西・南東壁のおよそ半分で，南隅付近は見られない。床面には硬化面が北西カマド前面から南東出入り口付近まで認められる。南西壁側及び北西壁側の一部は中央部ほど硬化していない。また，北西カマドの前方から出入り口（新）にかけて5cm程度低くなっている部分がみられた。この部分は他の床面とはなだらかに続いている。掘形が床面よりもかなり深く掘られており，充填土が多く入れられている竪穴なので，出入り口に伴い，若干落ち込んだものかもし



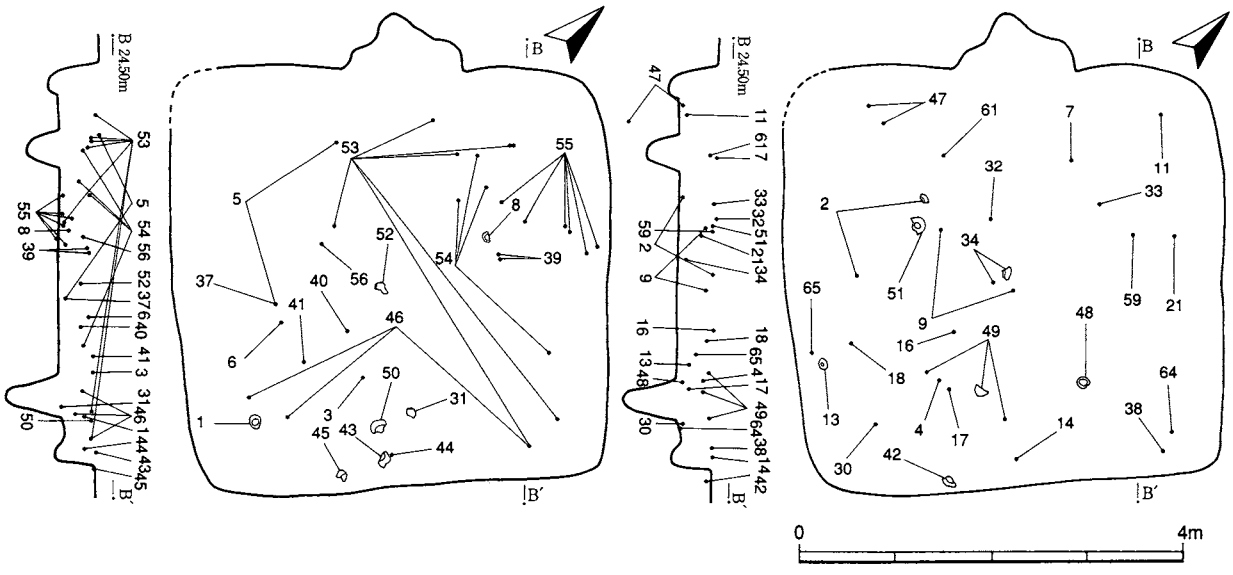
第97図　SI009

れない。充填土は多量のローム粒・塊に若干の焼土・山砂を含む暗黄褐色土である。P1は覆土断面に黒褐色土の柱状部分があり，柱痕と思われる。竪穴廃棄時に柱の根本部分が残っていたものと考えられる。他の柱穴に柱が残っていたかどうかは，P2に可能性があるが断定するのが難しい。P3・P4は不明である。P3の下層は焼土を含むが，竪穴全体の覆土は焼土を多く含んではいない。柱穴の覆土は柱痕を除いてはおおむねやや多くロームを含む暗褐色土である。

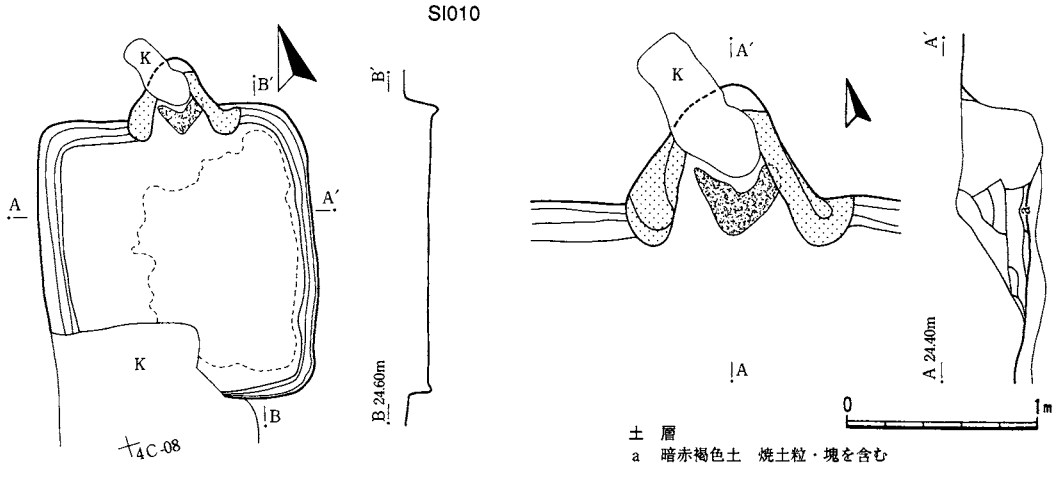
新しい北西カマドは構築材がやや崩れているが，火床部奥に土製支脚が立った状態で遺存しており，火床部から煙道部の遺存は良い。構築材は山砂を主体とし，若干の暗褐色土を含む。古い北東カマドは建て替えに伴う北西カマドの設置により除去されているが，床面上に焼けた痕跡があり，火床部と把握された。また，袖部も床面上に残る山砂から痕跡を確認することができた。

遺物の出土量は多く，竪穴全体から出土している。出土層位は床面・下層からの出土は少なく，中・上

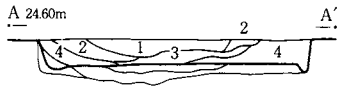
SI009遺物出土状況



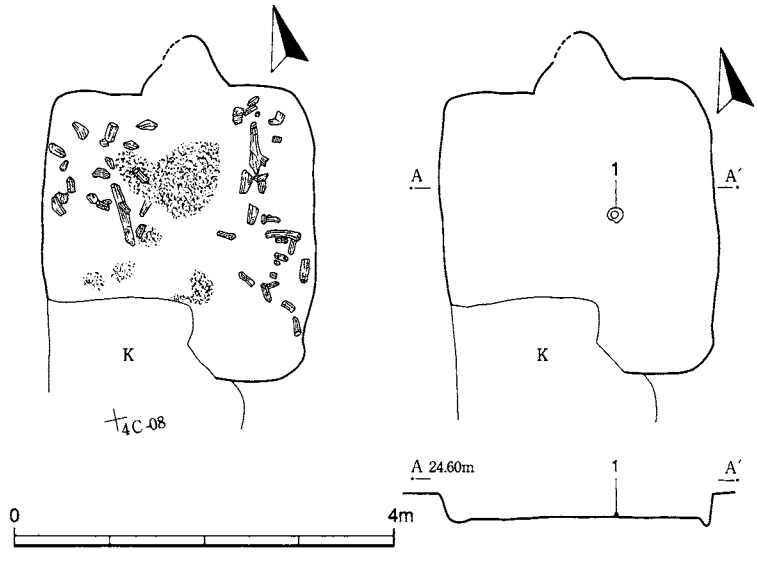
SI010



土　層
a　暗赤褐色土　焼土粒・塊を含む



土　層
1　暗黄褐色土
2　暗黄褐色土　ローム　やや多
3　暗赤褐色土　焼土粒・塊　多
4　暗黄褐色土　ローム　少



第98図　SI009遺物出土状況・SI010

層からの出土が多い。

SI010（第98図，図版18）

調査区北部に位置する。SI009南側近くに存在する。平面形は方形で，小規模の竪穴である。南西隅付近から南壁側の多くを攪乱により損なっている。出入り口ピットは攪乱により不明である。4箇所の主柱穴は見られない。壁溝は攪乱部分が不明であるが全周するものと思われる。床面は硬化面が西壁側とカマド前を除いて認められる。床面から10cm程度まで一面に焼土・炭化材がみられた。炭化材は丸太状で，短く切られたものが大半である。また，規則的な状況では無かったため，屋根が消失したものとは考えられない。竪穴の廃棄後，廃材等を焼却したものと推測される。掘形底面は床面よりもかなり深く，ロームを多く含む暗褐色土で埋め戻されている。

カマドは北壁中央に設置され，方形プランから大きく突出している。火床部後方から煙道部が攪乱により損なわれ，遺存が良くない。

遺物は出土量が非常に少ないが，完形の土師器坏（1）が中央付近の床面から出土した。

SI014（第99図，図版18）

調査区北部に位置する。平面形はわずかに横長の方形である。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。4箇所の主柱穴は見られない。壁溝はカマドのある北壁を除いて全周し，西壁側はやや幅が広い。床面は硬化面が広く認められる。ただし中央部と東西両壁際に攪乱があり，特に中央部の攪乱は規模が大きい。掘形底面は床面からあまり深くない。

カマドは北壁中央に設置され，方形プランから大きく突出している。火床部後方から煙道部が攪乱により損なわれ，遺存が良くない。

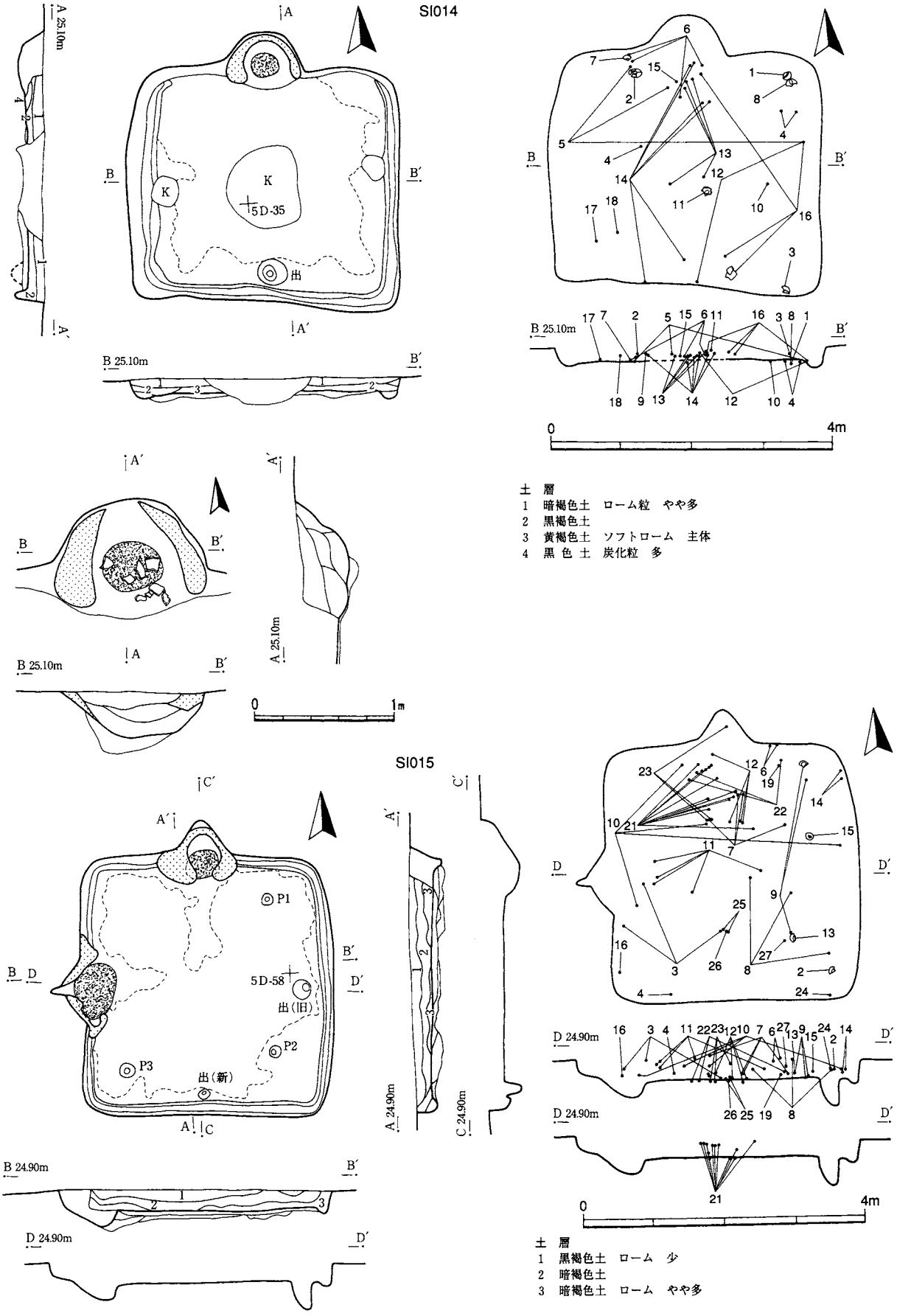
遺物の出土量は竪穴が浅いことや攪乱を受けていることを考慮すれば多いといえる。平面的にはカマド周辺がやや多いが，全体的に散っている。出土層位も床面から下層が多い。

SI015（第99・100図，図版19）

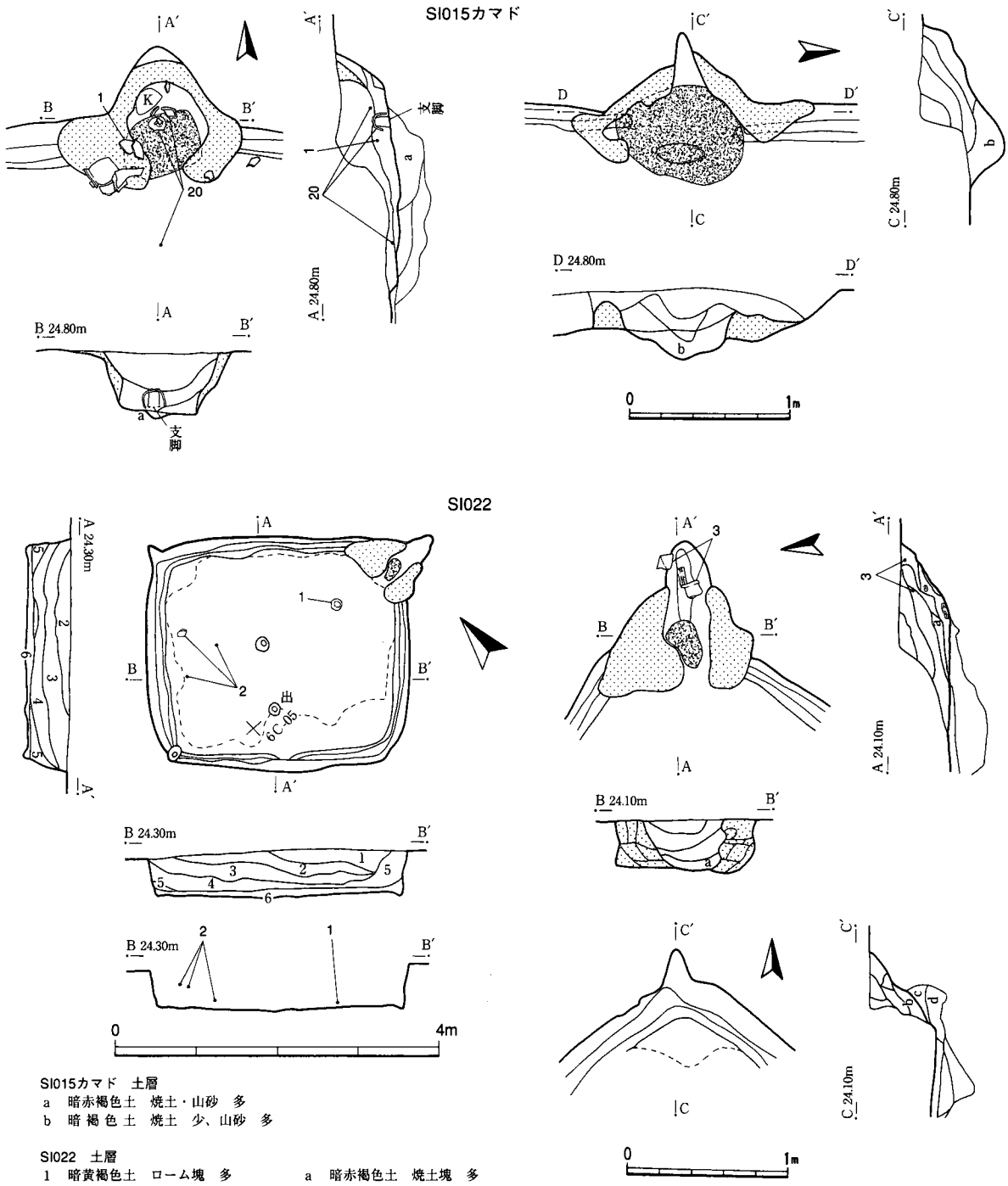
調査区北部に位置する。平面形は方形である。カマドが2基あるが同時存在ではないと思われるので，カマドの付け替えが行われた建物である。新旧のカマドに対応して出入り口ピットも新旧2箇所あるので，建て替えを考えた方が自然であろう。カマドの新旧については，遺存の良い北カマドが新，悪い西カマドが旧と考えられる。出入り口ピットは北カマドに対面する南壁際のものが新，西カマドに対面する東壁際のものが旧である。4本柱が存在したと思われるが，確認できる柱穴は3箇所であり，北西隅に近い柱穴が見あたらない。3箇所の柱穴は掘形の発掘時に見つかったもので，規模が小さく，浅い柱穴である。北西隅に近い柱穴が見つからないのも浅いことによるのだろう。柱は建て替えのさいに抜かれたとしても同じ位置に立てられたと考えられる。壁溝は全周する。床面には硬化面が一部を除き，広く認められる。

覆土は自然堆積と思われる。掘形底面は床面から部分的に深く，充填土はロームを含む暗褐色土である。

北カマドは北壁中央に位置する。火床部の後ろ側に土製支脚が立って残っており，その上に小形甕20をかぶせていた。さらにその上に甕の小破片3点がみられた。これら一連で支脚の役目を果たしたもので，小破片は高さを調節するために置かれたものであろう。西カマドは西壁中央に位置し，大きく壊されてい



第99図　SI014・015



第100図　SI015カマド・SI022

る。新カマドの設置に伴い邪魔な部分を撤去し，整備されたものと考えられる。

遺物の出土は，平面的には北カマド周辺が多く，南西側がやや少ない。あまり深くない竪穴であるが，出土層位は床面から上層まで見られる。個別にみると土師器坏9は主として北カマド右脇から正位で，土師器坏13は南東部の床面から正位で，土師器坏15は倒位で出土している。

SI022（第100図，図版19）

調査区北部に位置する。平面形はやや横長の方形である。カマドが隅部に2基あるが遺存状況から同時存在ではなく，カマドの付け替えあるいは建て替えに伴う設置箇所の変更である。カマドの新旧については，遺存の良い東隅カマドが新，悪い北隅カマドが旧である。出入り口ピットはやや中央に寄っているが，南西壁側にあるピット1箇所が相当すると思われる。カマドの位置変更があっても，出入り口側には変更が無かったと考えられる。4箇所の主柱穴は見られない。壁溝は全周する。床面は硬化面が南西壁際を除いて広く認められる。中央部に深さ29cmのピットがあるが，柱穴かどうか断定しがたい。

覆土は1層にローム塊が多いが，2層以下は均一な層である。掘形はカマド前が深く掘られているようであるが，それ以外は不明瞭である。床面下をあまり深く掘り込まずに床面を形成していると思われる。

東隅カマドは遺存が比較的良好である。構築材は山砂を主とするが，基底部は暗褐色土やローム粒を含む。煙道部付近には厚さ5～8cmの焼土が堆積していたが，天井部の構築材等が赤色化したものが崩れたものと思われる。袖内側もかなり焼土粒が見られる。北隅カマドは構築材・火床部等の痕跡は全く無く，煙道の掘り込みだけが確認された。東隅カマドの設置に伴い，除去されたものと考えられる。煙道部壁には赤色硬化範囲がみられた。煙道部下部は壁溝掘削後にローム及びロームを多く含む暗黄褐色土を埋め戻してカマドを構築したものと思われる。

遺物の出土は少なく，図示した個体も3点である。土師器坏1は東隅カマド前方の床面から正位での出土である。土師器皿2は覆土が若干堆積した後に流入したような状態を示す。

SI023（第101図，図版19・20）

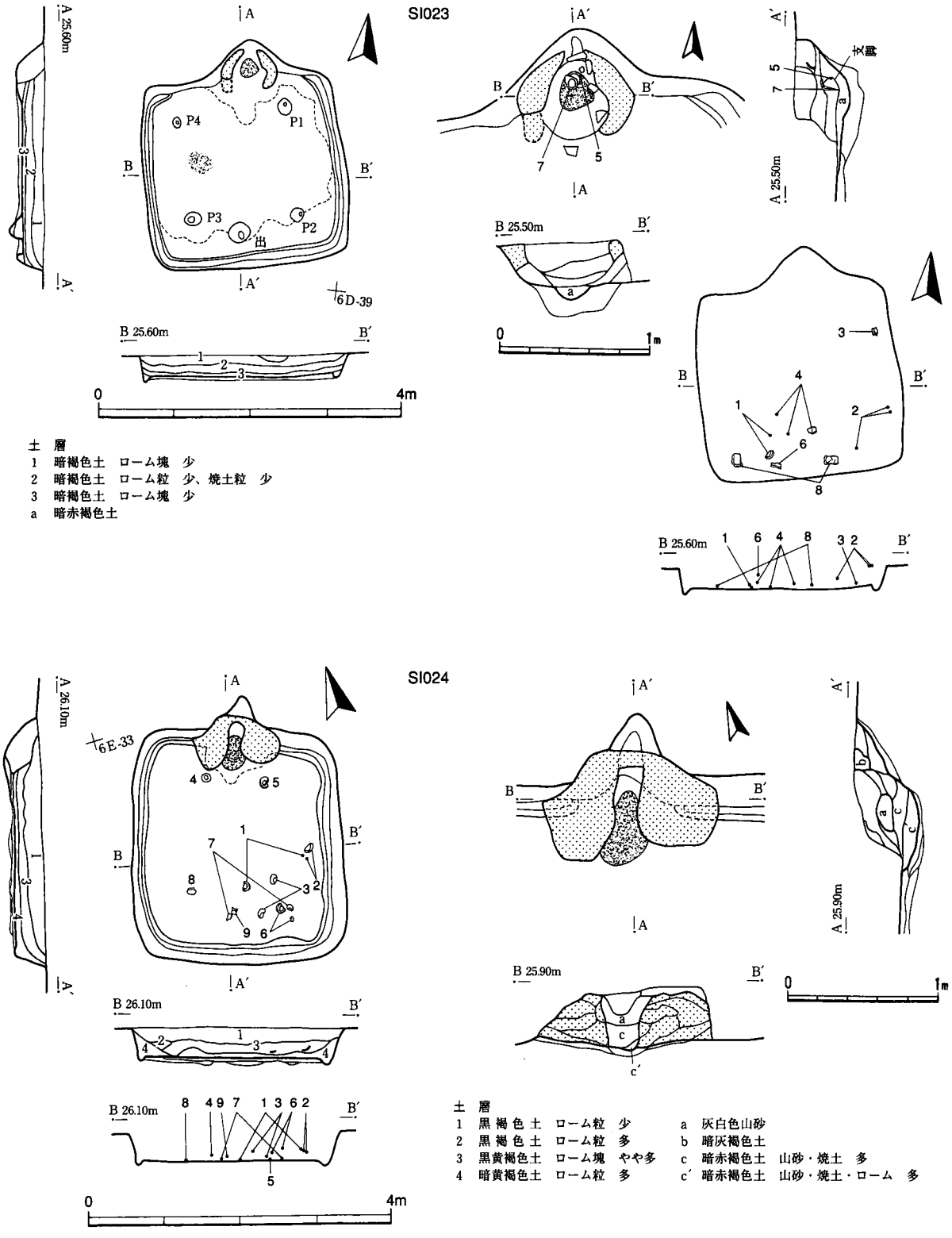
調査区中央部北寄りに位置する。平面形は方形である。4箇所の主柱穴をもち，出入り口ピットは南壁側に位置する。中央からわずかに左側である。壁溝は北壁を除いてまわる。床面は硬化面がカマド前と南壁際を除いて広く認められる。柱穴のうち北側の2箇所は底に行くほどすぼまっており，特徴的な掘形である。覆土は自然堆積と思われる。西側中央部で床面よりわずかに高い位置で焼土の堆積がみられた。掘形底面は床面からは浅く平らである。

カマドは北壁中央やや右側に位置する。遺存は良くなく，特に左袖は多く失損している。袖の下部は山砂よりもローム塊や暗褐色土を多く含む。火床部後ろ側には土製支脚があり，その上に小型甕の下半部（7）をかぶせていた。このセットで支脚として機能したものである。

遺物の出土量はあまり多くない。平面分布は南側で目立つ。そのうち，土師器坏1は床面近くから正位で出土した。また，大形の砥石8も床面及び下層から出土したものである。出土層位は上層のものも見られる。カマド内からは支脚の周辺で土器片が出土した。

SI024（第101図，図版20）

調査区中央部北寄りに位置する。平面形はやや縦に長い方形である。主柱穴，出入り口ピットとも床面精査段階だけではなく，貼床除去後も見つからなかった。壁溝は全周する。床面はカマド前を除くほぼ全面が硬化している。壁際に若干の覆土が堆積した後，竪穴の北東隅部に焼土が廃棄されている。そして，焼土の上に一部重なって貝が投棄されている。この貝層については第8章第3節において詳細に記述しているので，参照されたい。掘形底面は床面からは浅い。



第101図　SI023・024

カマドは北壁中央に位置する。遺存は良好で，両袖間に前天井部であったと思われる構築材の山砂が堆積していた（a）。また，後天井部分と思われる山砂を多く含む土層も見られる（b）。構築材は山砂を主としてローム粒・塊，暗褐色土，焼土を含む。一部に焼土塊が多い。袖下部はロームの含有が多い。構築

材の中に焼土が含まれる理由として，補修による可能性が考えられる。

遺物は土器の出土量はあまり多くないが，坏は比較的遺存の良い個体が目立つ。平面的には竪穴南側にやや集中し，カマド前からも土師器坏4や5が出土した。壁際は少ない。出土層位は床面から中層である。図示した個体は上層からは出土していない。5は貝ブロックの下の床面から正位で出土し，4は下層から倒位で出土した。

SI025（第102図，図版21）

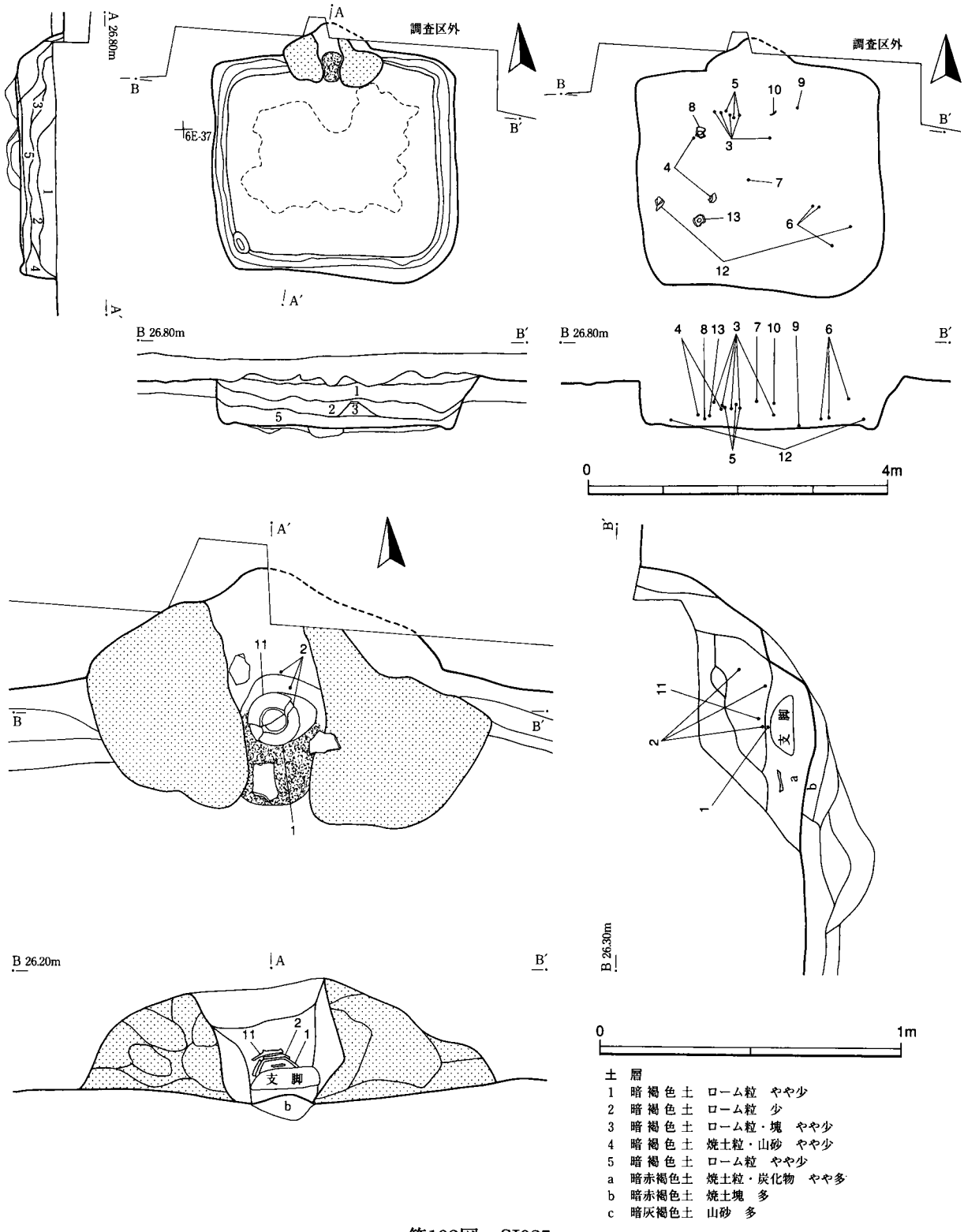
調査区中央部北寄りに位置する。平面形は方形である。主柱穴，出入り口ピットとも見つからなかった。壁溝は全周する。床面は中央部が硬化している。覆土は暗褐色土主体でほとんど差が無く，自然堆積と思われる。掘形底面は一部で床面から深い。充填土はローム塊を多く含む暗黄褐色土を主体とする。

カマドは北壁中央に位置する。遺存は良好であるが，煙道部煙出口付近は調査区外である。火床部のやや後ろ側の位置に，土製支脚が若干の流入土の上に横倒しで置かれていた。そして支脚の上には3点の土器が伏せて重ねて置かれていた。下から土師器坏1，土師器坏2，土師器皿11の順で，1は完形，2は85%，11は40%程度の遺存度である。これらの遺物群の解釈としては，一連で支脚の機能を果たしたと考えることが一案である。弱くなった土製支脚を横にして使用し，その上に高さを確保するため3点の土器を重ねたことが考えられる。もう一案はカマド廃絶儀礼に伴う遺物群という解釈である。土器の状態をみると，1は灰色に変色した部分があることから，火を強く長期に受けたものと思われる。したがって前者の可能性が高いと考えておきたい。構築材は山砂を主体とするが，基底部はローム塊を多く含む。遺物の分布は壁際は少ないが，それ以外は全体的に見られる。カマド内の遺物を除いて，中層から出土した遺物が多い。

SI030（第103図，図版21・22）

調査区中央部に位置する。平面形は方形で，本遺跡の奈良・平安時代の竪穴住居の中では大型の住居である。4箇所の主柱穴をもち，出入り口ピットは南東壁際中央に位置する。壁溝は全周する。南西壁側の壁溝は底部が約1m～1.5mの間隔で段差をもつ。中央部が高くその両脇は3cm～5cm程度低く，南隅はさらに数cm低くなっていた。壁の立ち上がりはオーバーハングしている。壁柱穴らしき掘り込みがカマドのある北西壁を除いて各1箇所，計3箇所認められた。位置は北東壁やや東寄り，南東壁南寄り，南西壁中央付近である。深さは壁溝まで達していない。床面には多くのピットがあるが，本遺構に伴うピットが主柱穴と出入り口ピット以外にあるかわからない。床面には2箇所のベッド状遺構が見られる。1箇所はカマド右脇から北隅部分，もう1箇所は北東壁際中央部で，近い位置にある。これらは床面よりも約10cm程度高く，床面上にローム塊・炭化物を含む暗褐色土を盛ったものである。上面は床面ほどではないが，硬くしまっている。ベッド状遺構の下には硬い面が無く，竪穴構築当初から盛土されたものと考えられる。床面はほぼ全面が硬化しており，ベッド状遺構の間にも認められる。覆土は全体にローム塊の混入が多い。また，若干の炭化物・焼土粒を含む。P1・P4は黒褐色土層が縦にみられ，柱痕と思われる。柱穴内のそれ以外の土層はローム粒・塊を含む暗褐色土である。掘形底面は床面からあまり深くないが，四隅はやや深く掘られている。充填土はローム粒・塊を含む暗黄褐色土である。

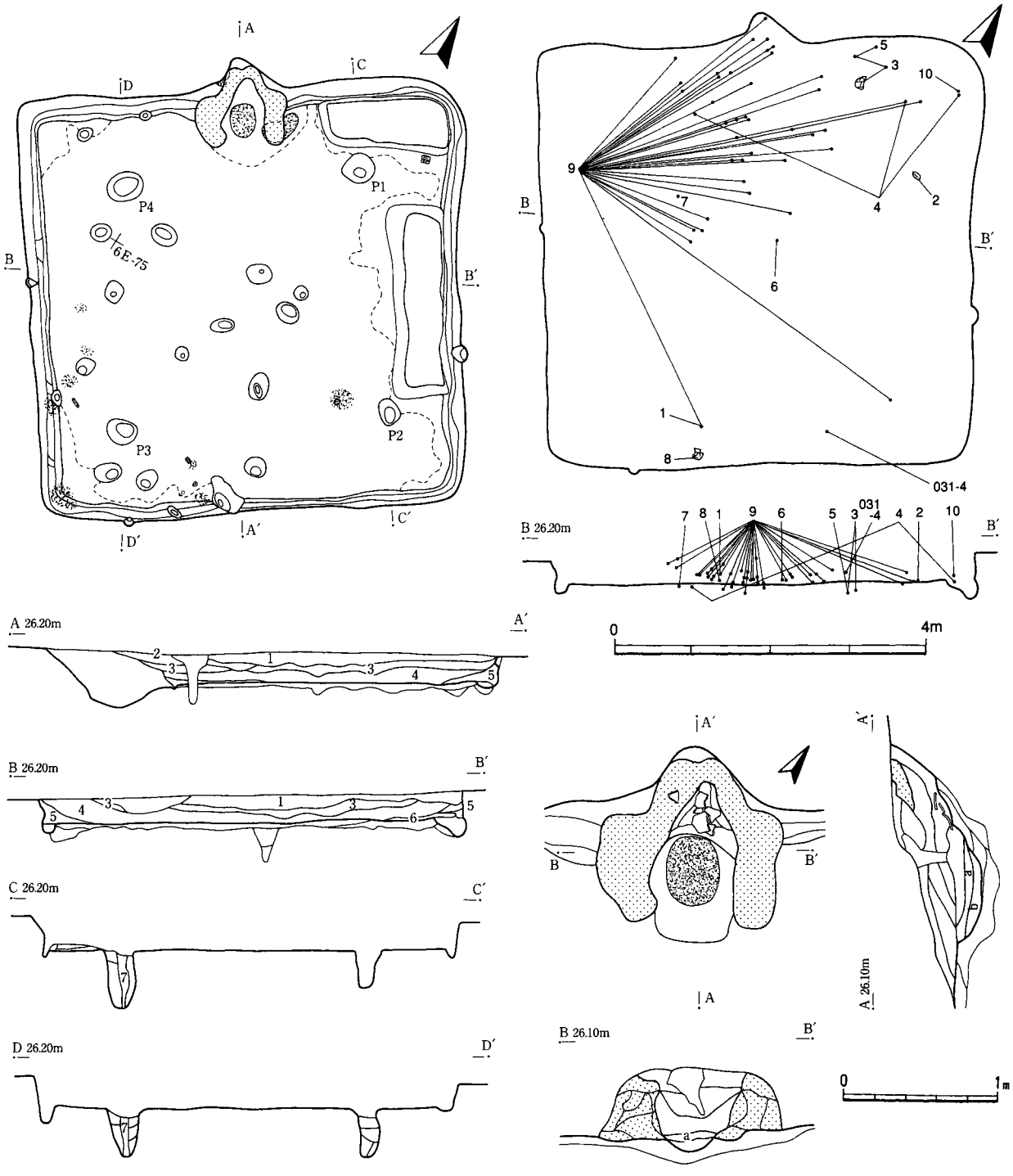
カマドは北西壁中央に位置する。遺存は良く，両袖部はしっかりとしている。構築材は山砂主体で，内



第102図　SI025

壁はかなり赤色化している。左袖後方の壁面の一部に焼土化したロームがみられたが，使用時に崩落した上に補修をした痕跡かもしれない。また，右袖の下にも焼土化した山砂の分布がみられた。

遺物は土師器甕9がカマド周辺から中央部にかけて広く散って出土しており，出土層位も床面から上層まで及ぶ。土師器甕9を除くと，北隅側にやや目立つが散在的で，中央から南東壁側半分は希薄である。



土　層

1　暗褐色土
2　暗褐色土　ローム粒・塊　多
3　暗褐色土　ローム粒・塊　多、炭化物・焼土粒　やや少
4　暗褐色土　ローム塊・焼土粒　やや少
5　黒褐色土
6　暗褐色土　ローム塊・炭化物　やや少
（ベッド状遺構盛土）
7　黒褐色土

a　暗赤褐色土　焼土粒　やや多
b　暗赤褐色土　焼土粒　多

第103図　SI030

出土層位は床面・下層のものが多い。遺存の良い土師器坏3は掘形調査の段階で伏せた状態で見つかり，土師器鉢8は床面から正位で出土している。

SI031（第104図，図版22）

調査区中央部に位置する。平面形は方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南東壁際に位置し，中央よりわずかに右に寄っている。壁溝は全周する。床面は硬化面が壁際を除いてほぼ全面に認められる。床面及び壁溝内にいくつかのピットがあるが，本遺構に伴うピットかどうかわからない。深さを記述すると，北東壁際中央で壁溝にかかるピットは25cm，南西壁際中央のものは14cm，西隅の壁溝内のものは12cm，南隅の壁溝内のものは6cmである。覆土は自然堆積と思われる。掘形底面は床面からあまり深くない。ローム塊を含む暗褐色土によりならされて，床面が形成されている。

カマドは北西壁中央に位置する。後天井も残るなど遺存が良い。構築材は山砂主体であるが，焼土塊の混入が多い。焼土塊の混入した素材を用いてカマドを構築したものと思われる。基底部はローム塊もやや多く含む。

遺物量はあまり多くない。土師器甕7がカマド右脇の床面から出土したが，それ以外の遺物は中央部にまとまっており，出土層位も上層である。覆土がかなり堆積した後，まだ窪んでいる竪穴中央部に廃棄された様相をうかがえる。図化していないが土製支脚の破片がカマドの上面に接して出土している。

SI032（第104図，図版22）

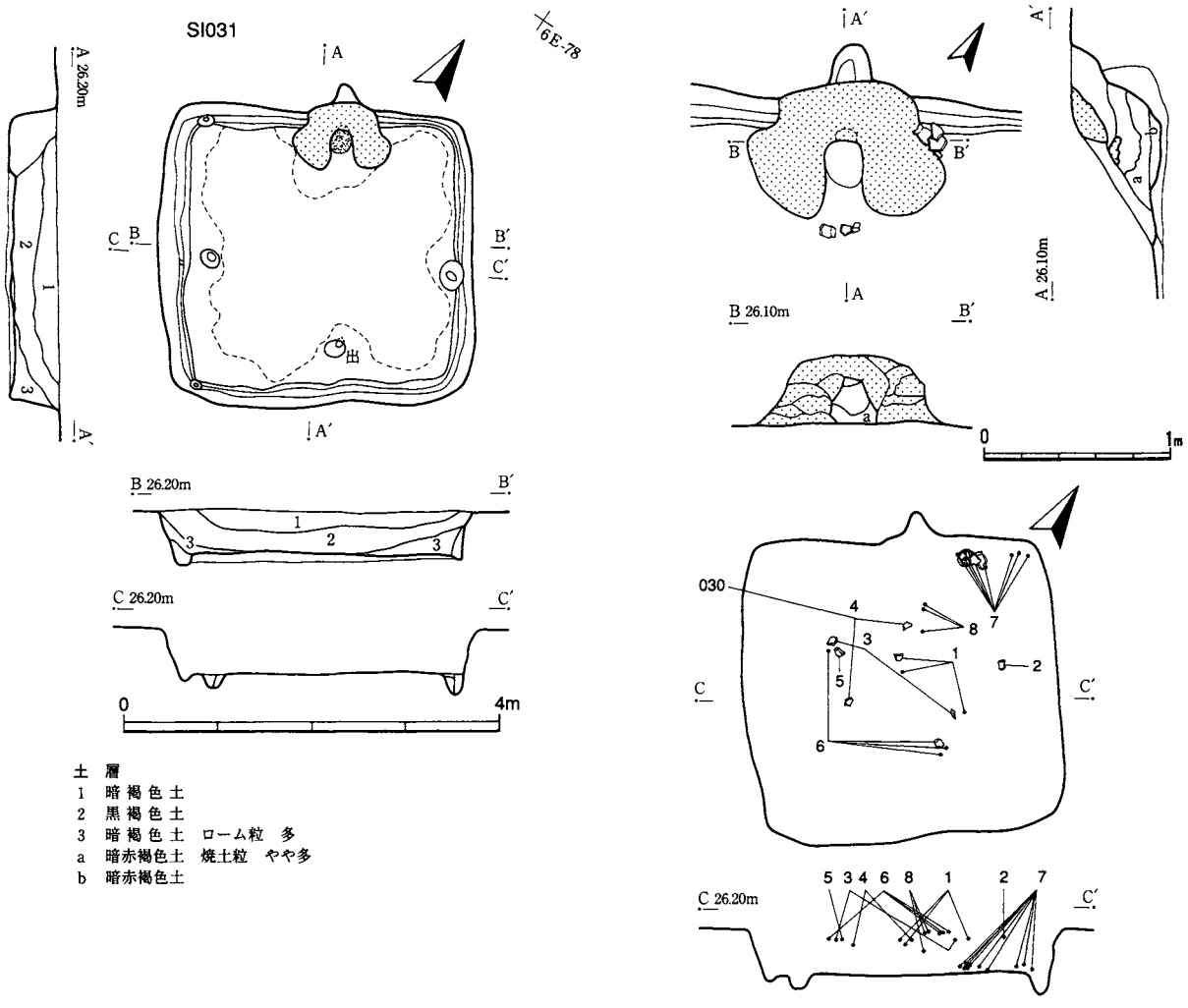
調査区中央部に位置する。平面形はやや縦長の方形である。4箇所の主柱穴をもち，出入り口ピットは南壁側に位置する。壁溝は西壁の北側と南壁の西側で見られないが，他は巡っている。主柱穴・出入り口ピット及びカマドの位置がプランに対して西側（左側）に寄っている。そのため，東壁側の空間が西壁側に比べて広い。柱穴間の面積が竪穴の規模に比較して狭いともいえる。床面はほぼ全面が硬化している。床面には主柱穴と出入り口ピット以外にピットが3箇所ある。深さは，北東隅に近いものが24cm，南東隅に近いものが32cm，出入り口ピットとP3の中間のものが37cmである。東壁側のものは主柱穴が左に寄っていることもあり，位置的に補助柱穴かとも思われるが，竪穴の規模から必要なものか疑問もある。覆土は自然堆積と思われる。床面上の所々に炭化材と山砂が見られるが，焼土は少ない。掘形底面は床面からあまり深くない。ローム粒・塊を含む暗褐色土によりならされて，床面が形成されている。

カマドは北壁西（左）寄りに位置する。左脇はすぐ北西隅である。方形プランから大きく突出している。竪穴そのものが確認面から床面まで深くないので，上部はかなり失われている。構築材は山砂主体であるが，暗褐色土を含む。内壁は若干赤色化している。火床部は強い赤色範囲が見られない。

遺物の出土量は少なく，散在的な出土である。須恵器甕8はカマド内からの出土である。また，遺存の良い土師器坏1と高台付皿7は床面からやや高い位置で出土した。

SI035（第105図，図版23）

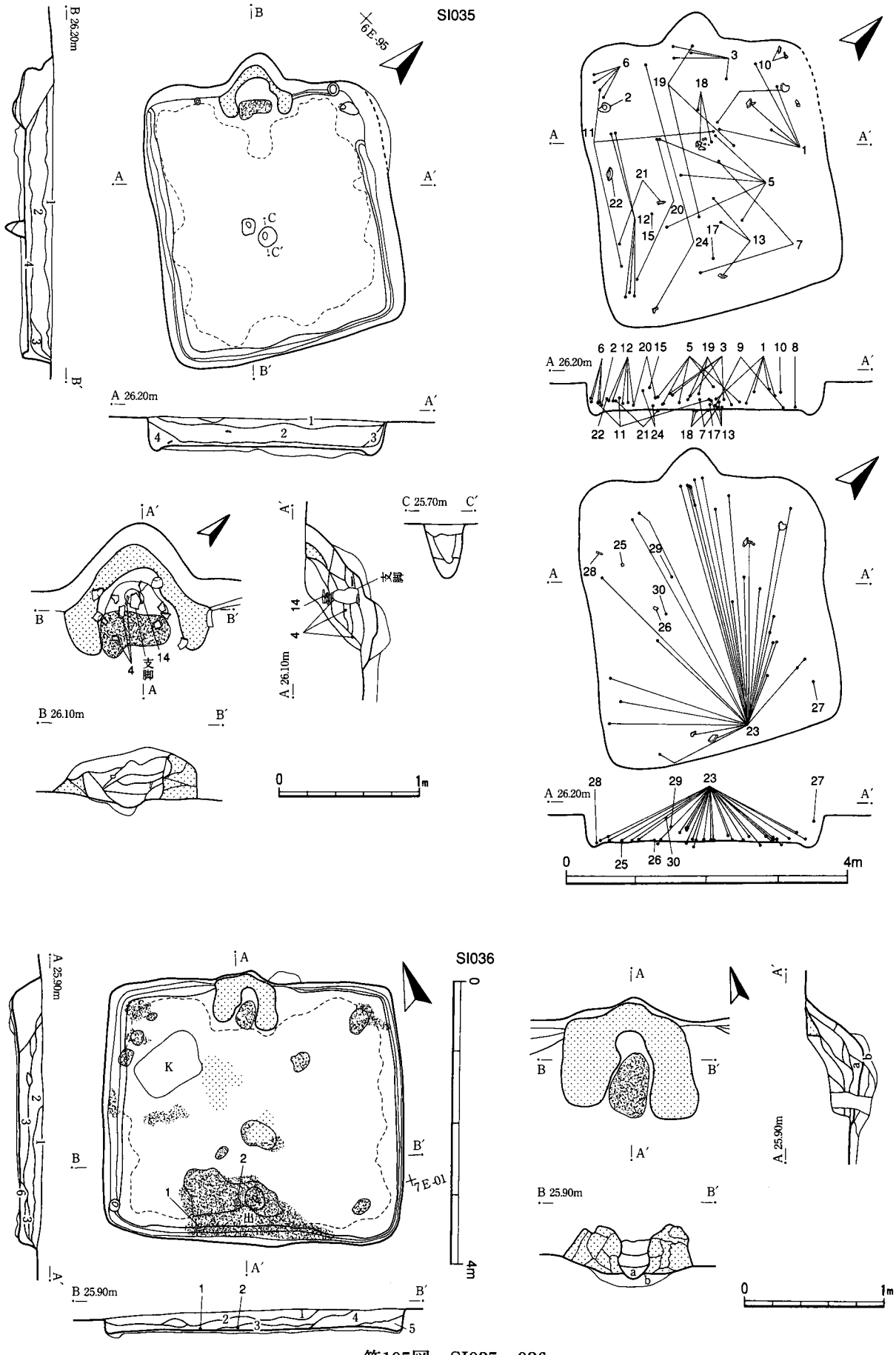
調査区中央部に位置する。平面形は縦長の不整な方形である。北隅部分が攪乱を受けている。4箇所の主柱穴は見られないが，中央に2箇所のピットがある。やや大きい方が深さ50cm，小さい方が深さ23cmである。深い方が主柱穴で，やや浅い方が補助柱穴かもしれない。やや浅いピットは貼り床を除去した段階で見つかったものである。出入り口ピットは見つからなかった。カマドの両脇の壁際にピットがあり，しっかりした掘形と底のあたりをもっていることから柱穴と考えられる。深さは右脇のものが24cm，左脇のものが13cmである。右脇のピットに近い北隅部にあるピットは根の攪乱と思われる。壁溝はカマド左脇の



土　層
1　暗褐色土
2　黒褐色土
3　暗褐色土　ローム粒　多
a　暗赤褐色土　焼土粒　やや多
b　暗赤褐色土

土　層
1　黒褐色土
2　暗褐色土　炭化物・山砂を含む
3　暗褐色土　ローム粒　やや多

第104図　SI031・032



第105図　SI035・036

壁際と攪乱を受けた北東壁隅部寄り部分を除いて巡る。床面は硬化面がカマド前や一部の壁際を除いてほぼ全面に認められる。覆土は暗褐色土主体で，自然堆積と思われる。２層は若干の焼土塊を含み，４層はややローム粒が多い。中央部の深いピットの覆土は中央の層がローム粒の混入が少なく，柱痕の可能性がある。周囲はロームをやや多く含む暗褐色土である。掘形底面は床面から10cm前後の深さで，比較的均一である。充填土はローム塊を含む暗褐色土である。

カマドは北西壁中央に位置する。カマドの前側と左袖の遺存が良くないが，後ろ側の遺存は良い。火床部の後ろ側では正立した土製支脚があり，その上下には土師器甕や坏などの土器片が重ねられていた。上部の土器片は７枚重ね（土師器坏４・14等）であり，土器間には焼土が充填していた。下部は２枚重ねである。また，この一群の左脇にも土器片が立てかけられていた（４）。これらの遺物群に対する解釈として，カマド廃棄に際して据え付けたと考えることが一案である。縦断面を見ると，土製支脚の位置はかなり高い感があり，周囲の土も倒れないように廃棄儀礼時に埋め戻している可能性がある。もう一つはこれら全体で支脚の機能を果たしたとする見方である。土器間に詰められた焼土も崩れないように粘性の高い土で固めたものが焼土化したとみることもできよう。火床部の位置も使用に伴い，高くなったものかもしれない。土師器坏14を見ると，灰色に変色している部分があり，長期に火熱を受けた様相をうかがえるので，後者の可能性の方が高いように思われる。しかし，竪穴全体の出土遺物群の様相をみると，口縁・体部を大きくえぐった土師器坏２や底部を穿孔した土師器高台付皿22及び墨書土器等祭祀的な遺物が見られる。このことと，７枚重ねがやや不自然と思われることから，支脚に転用した土器を最終的にカマド祭祀に使用した可能性も残しておきたい。構築材は山砂主体であるが，カマド後ろ側は焼土塊を多く含む。もともと構築材に焼土塊が多く含まれていた可能性が考えられる。袖の基底部はローム塊を含む。埋め戻しかと思われるカマド内堆積土は焼土粒・塊，山砂を多く含む暗褐色土である。

遺物量は多く，竪穴全体から出土している。出土層位は床面から上層に及ぶが，中・下層出土の遺物が多い。須恵器甕23は竪穴全体に散っている。

SI036（第105図，図版23）

調査区中央部に位置する。平面形は横長の方形である。４箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。掘形調査時に見つかったピットである。壁溝は全周する。床面はほぼ全面が硬化している。覆土は全体として暗褐色土主体である。２層は若干の焼土粒を含み，３層はローム粒をやや多く，４層はローム塊・山砂を多く，５層はローム粒を多く含む。また，６層はローム粒・焼土粒を多く含む。焼土は壁際を主として全体的に堆積しており，南壁側などかなり厚い部分も見られる。ただし，炭化材は少なく，小片のみである。焼土層の下の床面は焼けている範囲が多い。竪穴が埋まる前に不要物を焼却したと推測されるが，大きな材木は少なかったのであろう。床面と掘形底面はあまり高さの差が無い。

カマドは北壁中央に位置する。一部で攪乱を受けているが比較的遺存が良い。ａ層は暗赤褐色土で，焼土粒を多く含む。火床部上に堆積した土層である。構築材は山砂を主体とし，基底部はローム塊をやや多く含む。袖部内壁下部は焼土化しているが，内部も赤色化の著しい部分がある。カマド部分は底面を掘り窪め，ローム塊を含む暗褐色土（ｂ層）で埋め戻し，その上に構築している。ただし，火床部下が深いのはかき出しに伴うものかもしれない。

遺物量は少ないが，遺存の良い須恵器坏１・２が南壁側の床面近くから出土している。１は横向き，２

は口縁部を上にやや斜めに傾いており，焼土に混じっての出土である。

SI037（第106図，図版24）

調査区中央部に位置する。重複はしていないが，南側でSI044が非常に近い位置にある。037の南壁と044の北壁間は50cm，037と044カマド煙道部とはわずかに10数cmの距離なので，同時存在は無理と考えられる。037の周囲は他の住居跡も多く，SI052，SI045，SB062等が存在する。

平面形は方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。壁溝は全周する。床面はほぼ全面が硬化している。西側中央部の床面には棒状の浅い凹みがあるが，根太の痕跡と思われる。非常に浅いため，他には認められなかったが，東側にも硬化面が棒状に欠ける部分があり，根太が存在したものと思われる。中央部から西側の床面には焼土範囲と山砂範囲が見られるが，カマドからの流出土と考えられる。覆土の様相から意図的なカマドの破壊に伴う可能性がある。覆土は上・中層は暗褐色土，黒褐色土であり，自然堆積かと思われるが，中・下層は山砂を多く含む層（4・6），焼土を多く含む層（5・6），極めて軟弱な層（8）があり，複雑である。調査時の所見では6層以下を廃棄時の埋め戻しとしている。4層の山砂については周囲にある竪穴のカマド構築材が廃棄されたものと推測されている。

カマドは北壁中央に位置する。竪穴が深く，後ろ側の遺存は良いが，前側と袖上部の構築材は竪穴内にかなり流出しており，遺存が良くない。構築材は山砂主体で，かなりしまっている。袖部内壁の赤色硬化が著しい。後天井下部も焼土化した山砂を多く含む。火床部下はかなり深く，丸底状に窪んでいる。

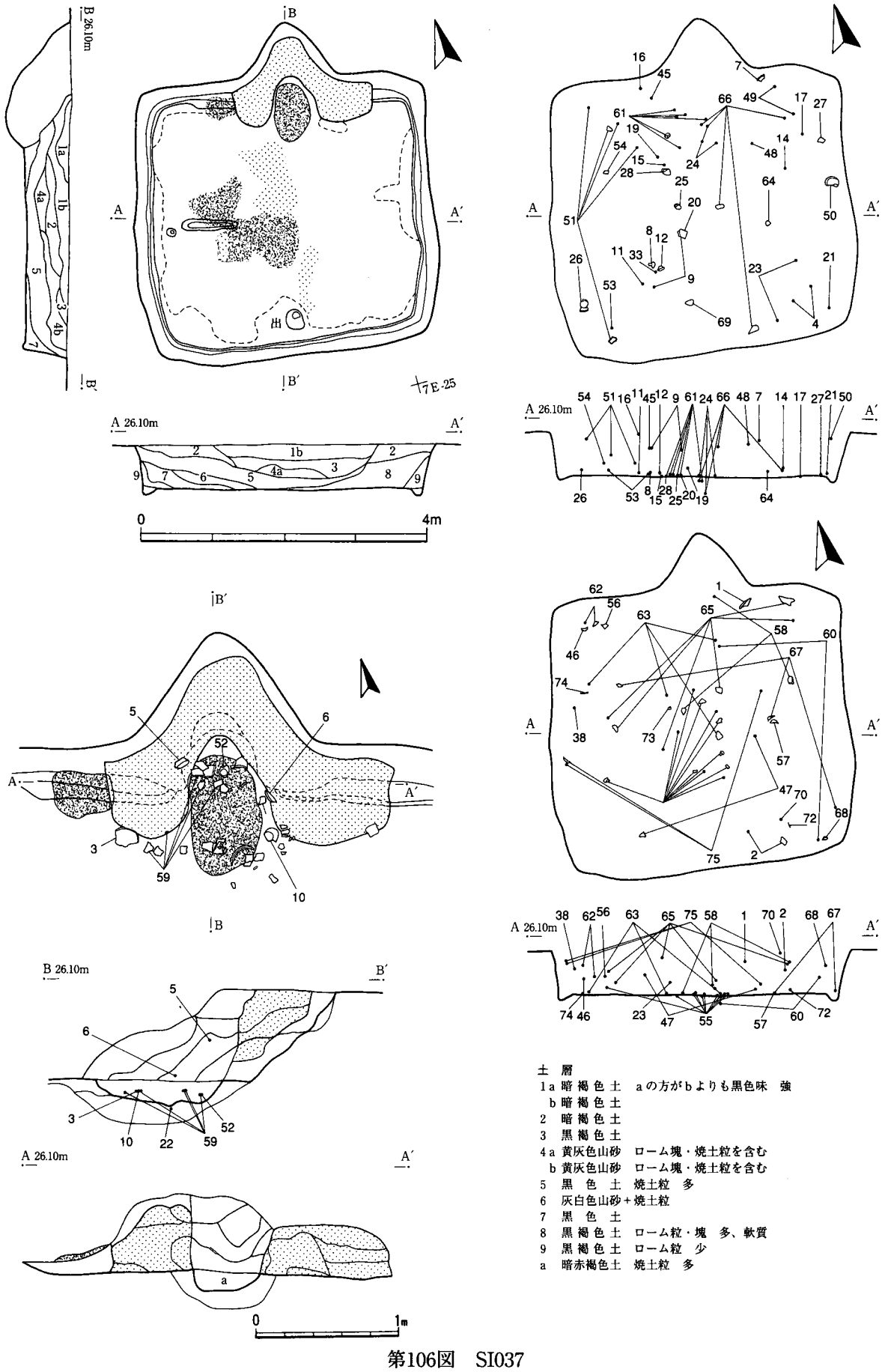
遺物量は多量で，竪穴全体から出土している。出土層位は床面から上層にわたるが，中層から出土する遺物が床面・下層や上層と比べ，やや少ないように思われる。

SI039（第107図，図版24・25）

調査区中央部に位置する。平面形は方形である。建て替えられた住居であり，建て替えに際して，拡張及びカマド設置位置の変更が行われている。カマドは西壁から北壁への設置壁変更であるが，北壁で右寄りから左寄りに再度位置を変えている。再度の建て替えかカマドの付け替えが行われたものである。出入り口ピットは2箇所であるが，同時に存在したものではない。北壁側のカマドに対面する南壁際中央のものが新，西カマドに対面する東壁際中央のものが旧である。東壁側には3箇所ピットがあるが，最も壁際のものが出入り口ピットと思われる。深さは18cmである。そのピットからやや中央寄りに位置するものは深さが16cm，それらより南側のピットは深さが21cmである。南壁際の新しい出入り口ピットは1箇所であるので，カマドが北壁右寄りから左寄りに変わっても，位置が変わらなかったと考えられる。4箇所の主柱穴は見られない。

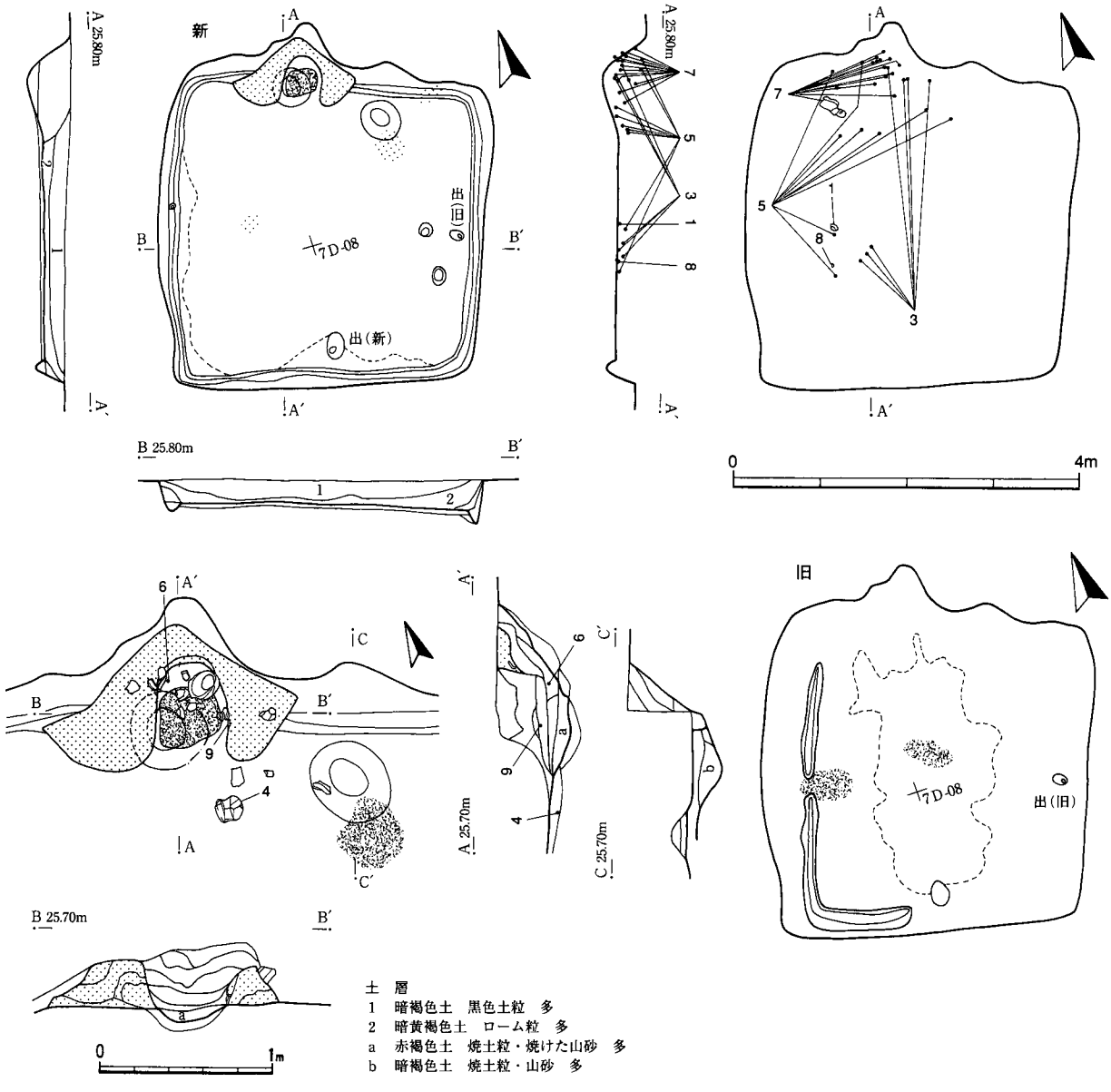
建て替え後の竪穴住居は壁溝が全周する。床面は古い床面の上にローム塊を若干含む暗褐色土を埋めて形成されたものであるが，5cm程度の厚さであり，大きな差はない。古い床面に若干上乗せして，整形されたものである。床面はほぼ全面的に硬化している。覆土は1層が黒色土粒を多く，2層がローム粒を多く含む。また，ともに若干の焼土粒を含む。

北壁左寄りのカマドは構築材がかなり流出しており，特に前側と右袖の遺存が良くない。構築材は山砂を主とするが，基底部はローム塊と暗褐色土を含む。袖部内壁は焼土粒・塊を多く含む。北壁右寄りのカ



土　層
1a 暗褐色土　aの方がbよりも黒色味　強
　b 暗褐色土
2　暗褐色土
3　黒褐色土
4a 黄灰色山砂　ローム塊・焼土粒を含む
　b 黄灰色山砂　ローム塊・焼土粒を含む
5　黒　色　土　焼土粒　多
6　灰白色山砂＋焼土粒
7　黒　色　土
8　黒褐色土　ローム粒・塊　多、軟質
9　黒褐色土　ローム粒　少
a　暗赤褐色土　焼土粒　多

第106図　SI037



第107図 SI039

マドは煙道部の壁が方形プランからやや突き出しているが，構築材はほとんど除去されている。火床部に相当する部分の床面は丸く窪んでおり，堆積土に焼土粒が見られる。北壁左寄りのカマド使用時には埋められて，その上に床面が形成されている。

上部の床面の除去作業により，建て替え前の床面と壁溝の一部が見つかった。壁溝は西壁に伴うものと南壁の一部に伴うものである。これにより，建て替え後の竪穴は，西側に床面の幅で20～30cm程度，南側に10～15cm程度拡張していることがわかった。北壁・東壁の拡張の有無はわからない。古い床面は硬化面が中央でやや縦に長く認められた。硬化面のほぼ中央には焼土範囲もみられた。

西側の古い壁溝は中央で途切れ，その部分は焼けていた。また，西壁中央上部も焼けている部分がみられ，各々旧カマドの火床部と煙道部の痕跡と考えられる。

遺物は北壁左寄りカマド付近及び中央やや西側から出土し，東側約半分と南壁側は空白域がある。出土

層位はカマド付近でやや高い位置のものもあるが，床面から下層にかけて出土する遺物が多い。

SI041（第108図，図版25）

調査区中央部に位置する。カマドが2基あるが遺存状況から同時存在ではなく，カマドの付け替えあるいは建て替えに伴う設置箇所の変更である。カマドの新旧については，遺存の良い北カマドが新，悪い東カマドが旧である。平面形は方形であるが，新カマドの向きで縦長，旧カマドの向きで横長の方形である。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。北カマドに対応するピットである。出入り口ピットにごく近い南壁際の床面で，高くなっている部分が見られる。他の床面より8㎝程度の高まりで，上面は固くしまっており，床の硬化面が続いている状況である。床面の上に盛った状況は明確でなかったが，覆土の土とは異なっており，出入り口に伴う施設の可能性が考えられる。出入り口ピットは西壁側には見られないが，出入り口側の変更が無かった場合と，浅いので見つからない場合の双方が考えられる。4箇所の主柱穴は見られない。壁溝は全周する。床面はほぼ全面が硬化している。覆土は自然堆積と思われる。掘形底面は床面からあまり深くないが，出入り口ピット付近の下部がやや深く，ローム粒をやや多く含む暗褐色土が充填されている。

北カマドは北壁中央やや右寄りに位置する。構築材は山砂に加えて，ローム塊も多く含む。袖部内壁は焼土粒を多く含む。火床部前方は深く掘られている。東カマドは東壁北寄りに位置する。方形プランから突出している部分の構築材が一部残っているが，袖部は北カマドの構築に伴いほぼ除去され，左袖の下部が若干残っているのみである。カマド除去に伴って床面を作り直しており，火床部が新しい床面の下から見つかった。層位的にはｃ・ｄ層の下の面である。突出部分の土層は山砂・焼土塊・炭化物・ローム塊を含み，埋めて壁を作り直しているか判然としない。

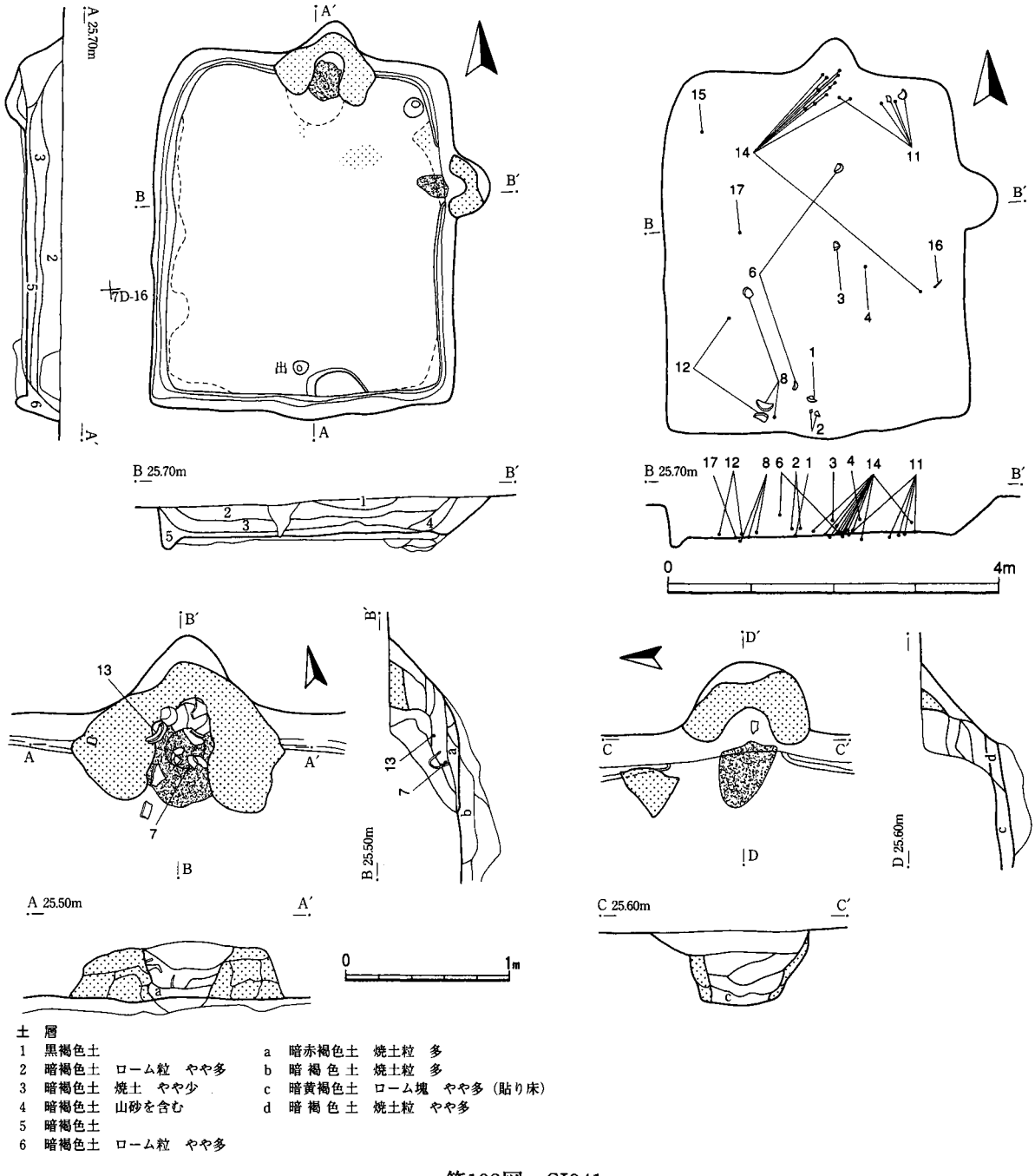
遺物は北カマド付近と南壁際中央付近にやや多い。南東隅と西壁際がやや希薄である。出土層位は床面から中層にわたり，上層の出土遺物は少ない。

SI042（第109図，図版25）

調査区中央部に位置する。平面形はやや横長の方形である。対角線上に位置する4箇所の主柱穴は見られないが，東西の壁際中央に各1箇所，計2箇所のピットがある。深さは東壁際のものが17㎝，西壁際のものが15㎝である。浅いがバランスの良い位置にあり，伴う可能性が考えられる。出入り口ピットは南壁際に位置する。壁溝は東・西・南の3壁では一部でわずかに途切れるが，ほぼ巡る。逆にカマドのある北壁はほぼ巡らない。床面は硬化面が西壁際や南壁際を除いて広く認められる。

カマドは北壁中央に位置し，ほとんど方形プランから突き出している。構築材は山砂を主として，暗褐色土を含む。袖の下部はかなり焼土化している。構築材は前方の床面にかなり流出しており，遺存はあまり良くない。火床部下及びその前方は深く掘られており，火床部下は焼土粒・山砂を，前方はやや多くローム塊を含む。

遺物量は少ない。散在的な出土であるが，土師器甕5は広く散っている。5と6が同一個体であれば，出土層位も床面から上層に及ぶことになる。須恵器坏1，土師器坏1・2は床面から下層での出土である。



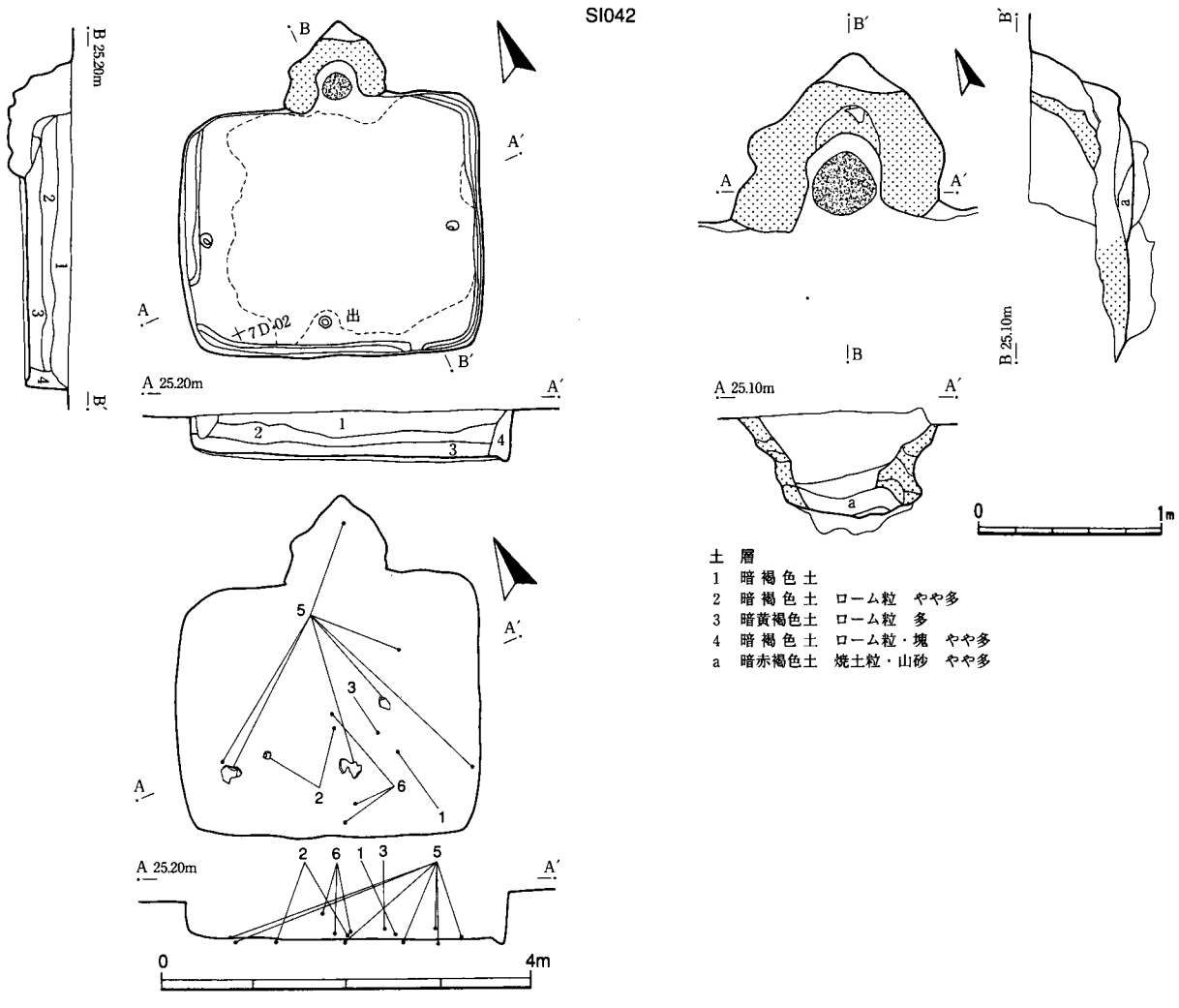
土 層

1 黒褐色土
2 暗褐色土 ローム粒 やや多
3 暗褐色土 焼土 やや少
4 暗褐色土 山砂を含む
5 暗褐色土
6 暗褐色土 ローム粒 やや多
a 暗赤褐色土 焼土粒 多
b 暗褐色土 焼土粒 多
c 暗黄褐色土 ローム塊 やや多（貼り床）
d 暗褐色土 焼土粒 やや多

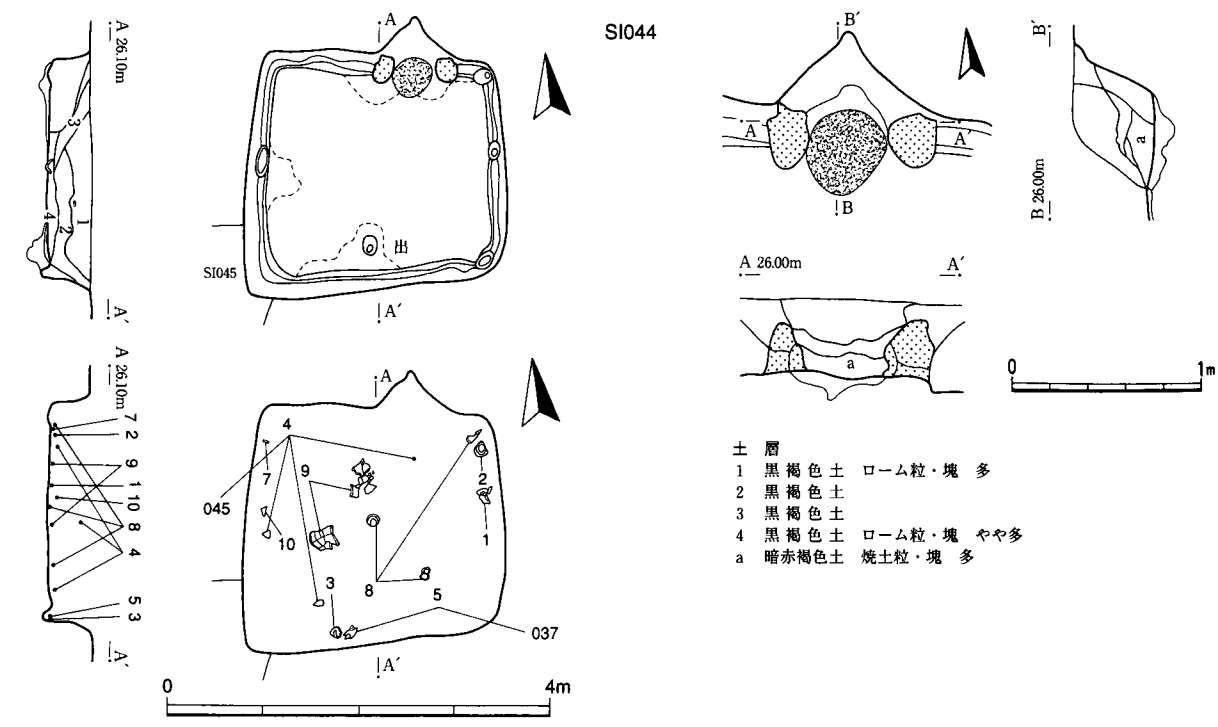
第108図 SI041

SI044（第109図，図版26）

調査区中央部に位置する。南西隅部でSI045と重複する。出土遺物の様相からSI044の方が古い。また，北側ではSI037が非常に接近した位置にある。先述したとおり，両者の同時存在は考えられない。平面形はやや不整の方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。壁溝は全周する。壁溝内に4箇所のピットがある。深さは，北東隅のものが19cm，東壁際中央のものが16cm，南東隅のものが17cmであるが，西壁際中央のものは不明である。床面は硬化面がほぼ全面に認められる。覆土は1層がローム粒・塊を多く含むしまりのある土層であり，埋め戻された可能性がある。2層以下は埋め戻されているか不明瞭である。



土 層
1 暗 褐 色 土
2 暗 褐 色 土 ローム粒 やや多
3 暗黄褐色土 ローム粒 多
4 暗 褐 色 土 ローム粒・塊 やや多
a 暗赤褐色土 焼土粒・山砂 やや多



土 層
1 黒 褐 色 土 ローム粒・塊 多
2 黒 褐 色 土
3 黒 褐 色 土
4 黒 褐 色 土 ローム粒・塊 やや多
a 暗赤褐色土 焼土粒・塊 多

第109図 SI042・044

カマドは北壁右寄りに位置し，右脇がすぐ北東隅である。構築材がかなり崩れており，遺存は良くない。構築材は山砂に加えて，ローム塊や暗褐色土を含む。袖部内壁はやや赤色化している。

遺物は量的にはあまり多くないが，遺存の良いものが目立つ。出土層位は土師器坏4を除いて，床面から下層である。平面的には，須恵器坏2は北東隅から口縁部を上にしての出土であり，須恵器坏1もその近くから出土した。土師器甕9は中央部から出土し，土師器甕8はやや散っているが，中央部の破片は伏せた状態での出土である。土師器坏3は南壁際左寄りから出土した。なお，土師器甕4はSI045出土土器片と接合し，須恵器坏5はSI037出土土器片と接合した。

SI045（第110図，図版26）

調査区中央部に位置し、北東隅部でSI044と重複する。SI045の方が新しい。平面形は方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁際中央からやや右寄りに位置する。壁溝はほぼ全周する。床面にはピットが2箇所ある。東壁際中央のものは深さが33cmである。出入り口ピットであっても良いような位置であるが，対面する西壁にカマドの痕跡は見受けられず，性格不明である。中央やや南西寄りにも深さ22cmのピットがある。本竪穴に伴うものか不明である。覆土は暗褐色土主体で，自然堆積と思われる。掘形底面は北側や中央部などで床面より深い部分が何箇所もみられ，複雑である。中央部には山砂を含む焼土範囲もあり，掘形の状況から拡張前の竪穴が存在したようにも思われるが，不明瞭である。充填土はローム塊を多く含む暗黄褐色土主体で，部分的に焼土を含む。

カマドは北壁中央に位置する。構築材は山砂を主体とする。両袖間に天井部や袖上部等の山砂が落ち込んでいる。その下部，火床部上には焼土粒を多く含む層が厚く堆積している。

遺物量は比較的多く，図示した個体も多い。しかし，遺存度の良いものは少なく，破片が多いといえる。分布は南東隅付近で少ない他は竪穴全体から出土している。出土層位も床面から上層まで見られる。

SI047（第111図，図版26）

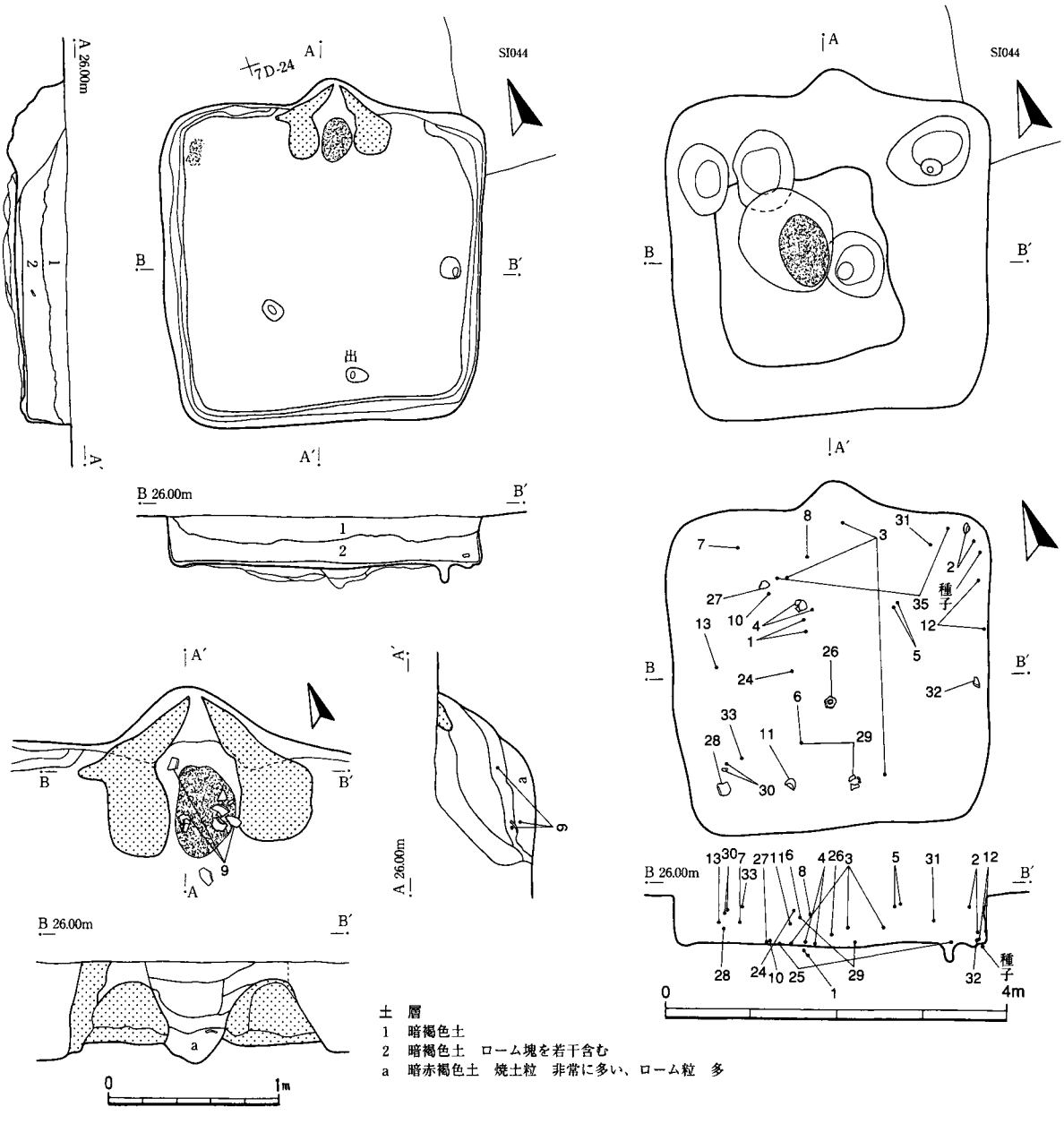
調査区中央部に位置する。平面形はやや台形的な方形である。カマドのある西壁が対面の東壁に比べ，やや長い。北壁側が近世以降の炭焼窯に切られて，かなり損なっている。ただし，炭焼窯の底面が床面に達していない部分が多いため，床面はほぼ残っている。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは東壁際中央に位置する。壁溝は北西隅から北壁西半分で見られないが，炭焼窯の影響かもしれない。それ以外は巡っている。床面は硬化面が壁際を除いて広く認められる。覆土は全体にローム粒・塊を多く含み，埋め戻されている可能性が考えられる。掘形底面は床面から一部で深い部分がある。ローム塊を多く含む暗黄褐色土が充填されている。

カマドは西壁中央に位置する。かなり崩れており，遺存は良くない。構築材は山砂主体である。火床部は赤色化している範囲が広い。

遺物量は多く，竪穴全体から出土している。北壁側で少ないのは炭焼窯による影響であり，本来は分布すると考えられる。出土層位も床面から上層にわたっている。

SI049（第111・112図，図版27）

調査区中央部に位置する。平面形は横長の方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピット

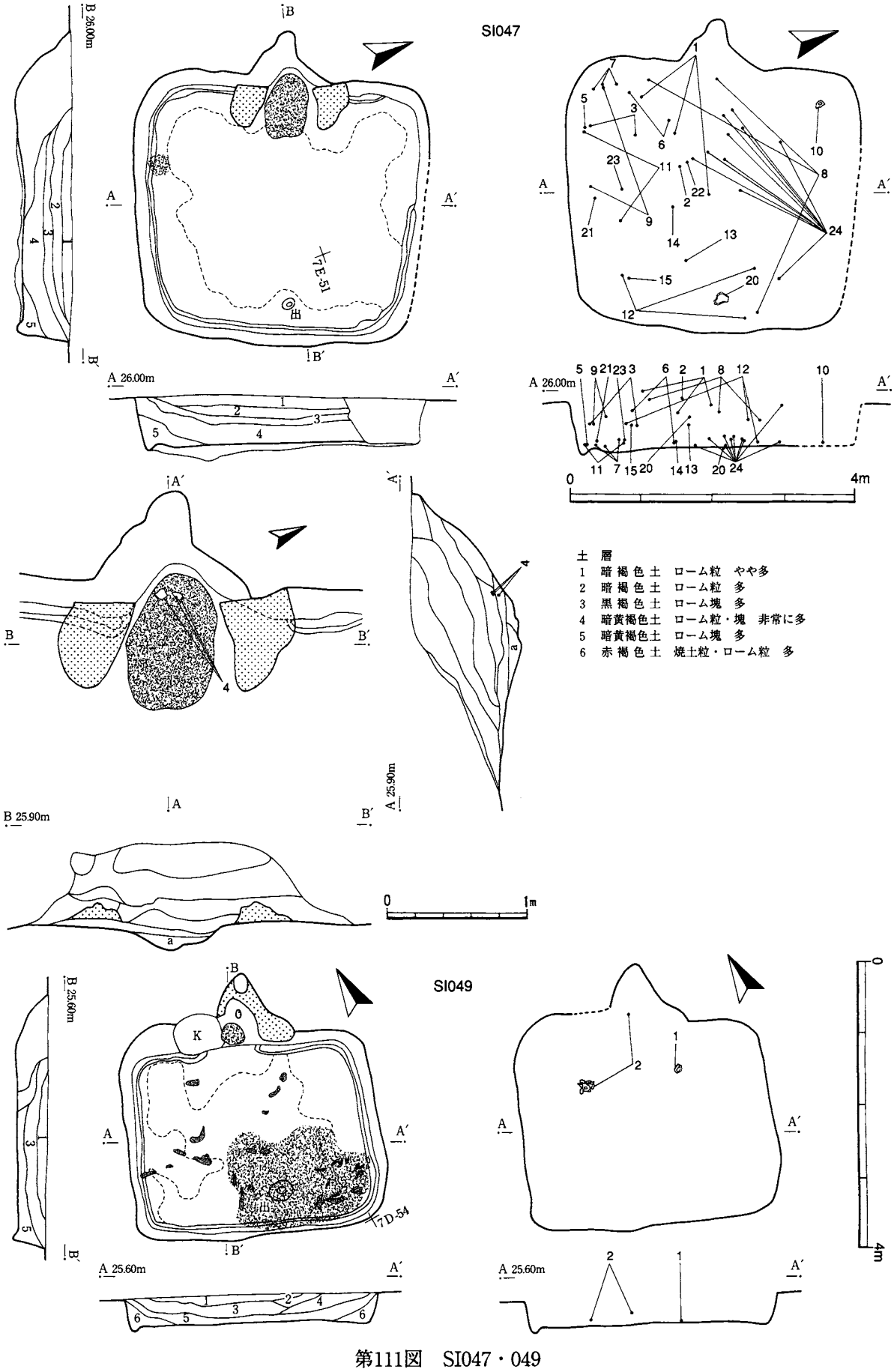


第110図 SI045

は南西壁際で中央から右寄りに位置する。壁溝は全周する。床面は硬化面が比較的広く認められるが，南東壁側，カマド前，北西壁側の一部は硬化していない。覆土は全体にローム粒・塊を多く含み，下層は加えて焼土と炭化材を含む。焼土の分布は主として出入り口ピットから南隅付近にかけて，竪穴全体では1/4程度の範囲に広がっている。炭化材は焼土の分布範囲に多いが，他にも見られる。

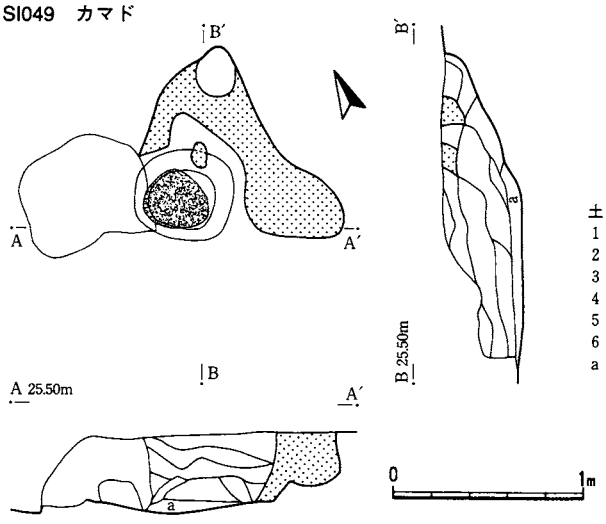
カマドは北東壁中央に位置する。左側が撹乱を受け，遺存があまり良くない。構築材は山砂主体である。袖部内壁は火を受けて赤色化及び硬化している。また，基底部は床面のローム層を掘り残している。火床部下はあまり深く窪んでいない。

遺物量は少なく，図示した遺物も2点である。土師器坏1はカマド右袖前方の下層から，土師器甕2はカマド内及び左側中央寄りで中・下層から出土した。図示していないが，上層から出土した破片もある。



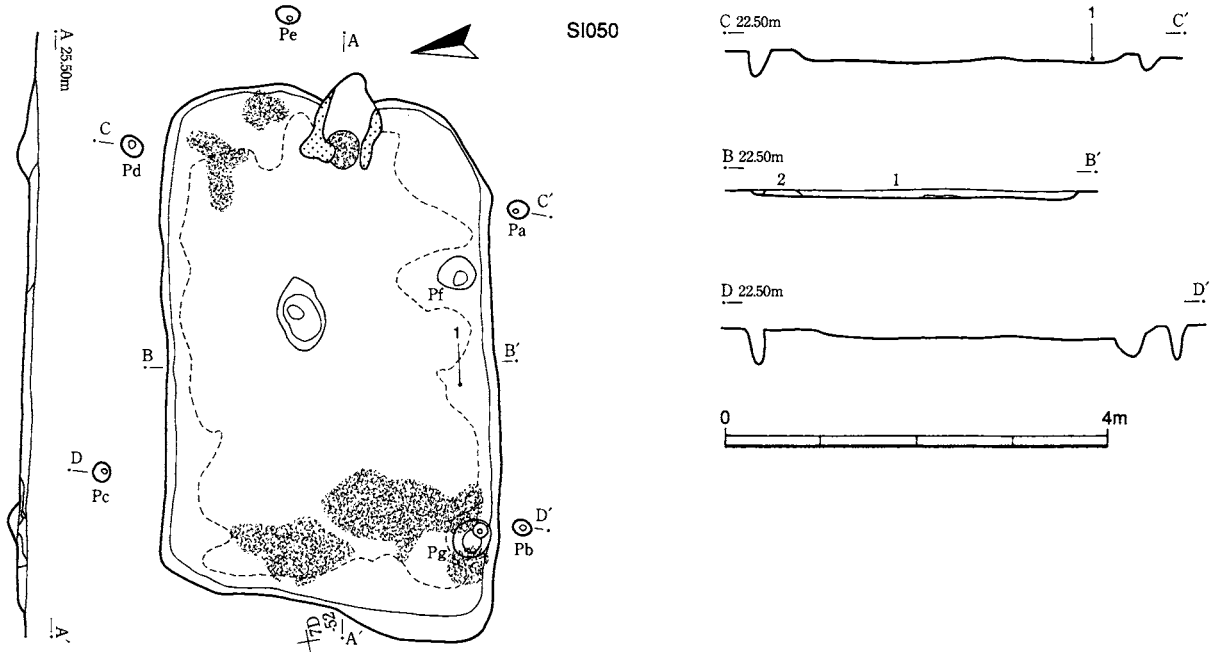
第111図 SI047・049

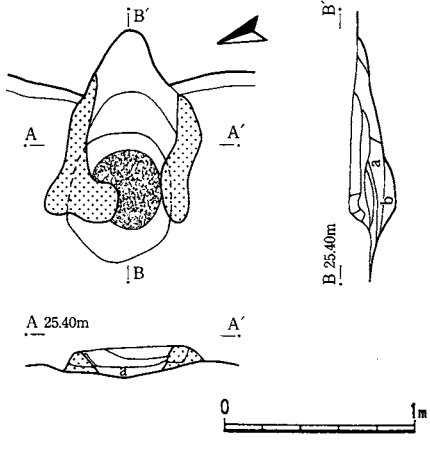
SI049　カマド



土　層
1　暗褐色土　ローム粒・塊　多
2　暗黄褐色土　ローム塊　非常に多
3　暗褐色土　ローム粒・塊　多
4　黒褐色土　ローム粒・塊　多
5　暗褐色土　ローム塊　多、焼土粒．炭化物を含む
6　暗黄褐色土　ローム塊　非常に多
a　赤褐色土　焼土主体、焼土化したローム塊を含む

SI050





土　層
1　暗褐色土　ローム粒　多
2　暗赤褐色土　焼土を含む
a　赤褐色土　焼土主体
b　赤褐色土　焼土主体、ローム粒を含む

第112図　SI049カマド・SI050

SI050（第112図，図版27）

調査区中央部に位置する。竪穴部分の平面形は縦長の長方形である。出土遺物に鉄滓が多く，竪穴のプランと合わせて鍛冶工房と断定できる。カマドのある東壁と対面の西壁が短辺で，北壁・南壁が長辺である。竪穴部分の外側に本建物の柱穴と思われるピットが5箇所ある（Pa～Pe）。ピットは北壁側に2箇所，南壁側に2箇所，東壁側に1箇所である。長辺側の4箇所のピット（Pa～Pd）は各々短辺寄りの，対称的な所に位置する。東壁側のピット（Pe）はやや北に寄っているが，カマドの煙道部を避けたのではないかと思われる。竪穴の平面形は不整であるが，確認面から床面まで非常に浅いためであり，本来はもっと整った形であったと思われる。

床面にもピットがあるが，中央部のものは鍛冶作業に伴うピットと思われる。南壁際に2箇所のピット（Pf・Pg）があるが，これらも鍛冶に伴うピットであろうか。通常，対角線上の対称的な位置に配される4箇所の柱穴は見られない。出入り口ピットはカマドに対面する西壁際には見られない。Pfが出入り口ピットであることも考えられるが，断定するのは難しい。西壁の外側に柱穴と思われるピットが無いことから，竪穴内にピットが無いものの，西壁側が出入り口であるようにも思われる。壁溝は巡らない。床面は硬化面が壁際を除いて広く認められる。焼土の堆積がカマド左脇と西壁側に見られる。

カマドは東壁中央やや右寄りに位置する。浅いので上部は失われているが，袖部下部は遺存している。構築材は山砂主体であるが，火熱を受けて全体に赤色化し，一部は硬化している。

遺物量は少ないが，鉄滓の出土が目立つ。また，道具である鉄床石（1）が南壁際中央から出土した。

SI051（第113図，図版27・28）

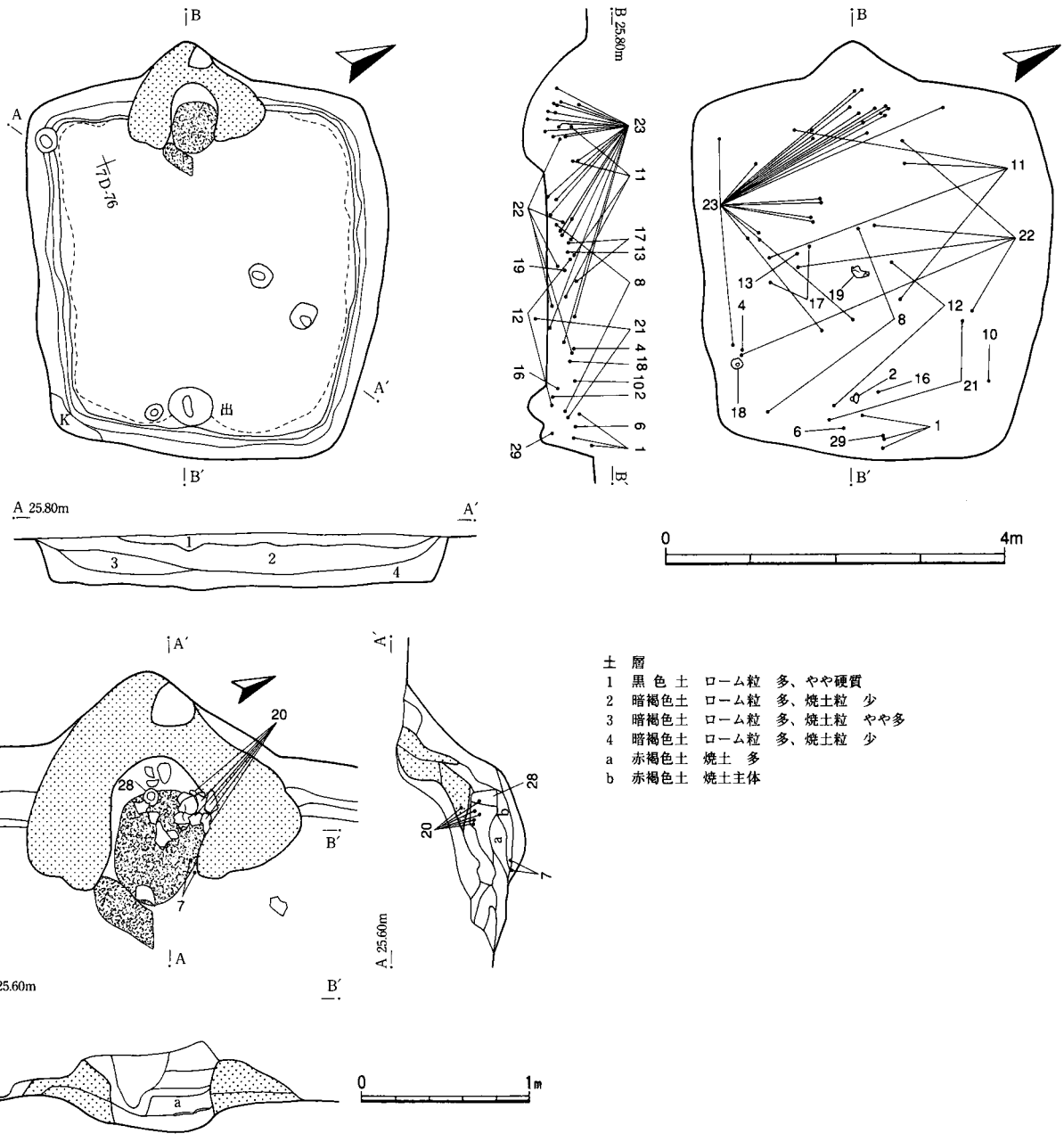
調査区中央部に位置する。平面形は横長の方形であるが，カマドのある西壁が対面の東壁に比べやや長く台形的でもある。また，北壁・西壁は若干丸みがある。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは東壁際中央に位置する。壁溝は全周する。床面はほぼ全面が硬化している。出入り口ピット以外にいくつかのピットがあるが，本竪穴に伴うものかわからない。深さのみ記すと，出入り口ピット左脇のものは17cm，カマド左側で南西隅の壁溝内に位置するものは28cm，北壁際東寄りのものは24cm，それよりやや中央寄りのものは26cmである。覆土は全体にローム粒を多く含み，ややしまりがある。

カマドは西壁中央に位置する。袖部前側上部は構築材がやや流出しているが，火床部後ろ側に土製支脚（28）が立ったまま残っているなど，全体的には比較的遺存が良い。袖基底部はローム塊を多く含む暗黄褐色土であるが，その上にあまり混じりけのない山砂を積んでいる。また，後天井部の一部も残っている。火床部上は焼土が厚く堆積し，火床部下はローム粒を多く含む暗褐色土が堆積している。

遺物量は多く，竪穴全体から出土している。カマド内では土製支脚28の他，近くで土師器甕20が支脚上部と同じ位の高さからまとまって出土した。また，土師器甕23も多くの破片が支脚の周囲から出土している。23の破片は一部が竪穴南側へ広く散っているが，20とともに本遺構に伴う可能性が考えられる。その他の遺物は中層から上層での出土が多く，下層は少ない。

SI052（第114図，図版28）

調査区中央部に位置する。平面形は方形で，4箇所の主柱穴がある。北西角のP1はやや東壁に寄っている。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。壁溝は全周する。床面はほぼ全面が硬化している。床面除

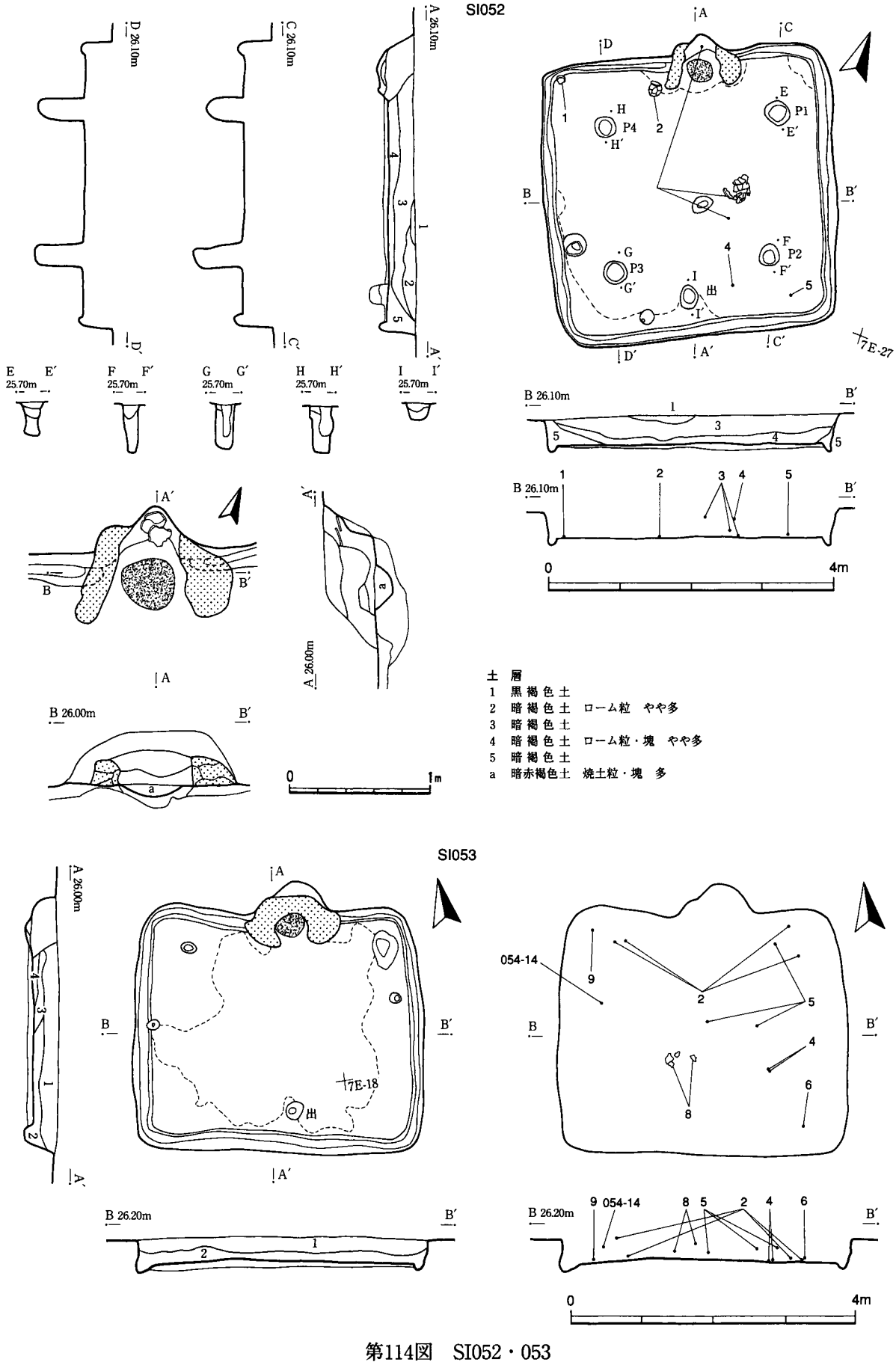


第113図　SI051

去の調査時に3箇所のピットが見つかったが，本竪穴に伴うものかわからない。深さのみ記すと，中央のピットは16cm，西壁際南寄りのものは29cm，出入り口ピットに近い南壁際のものは34cmである。覆土は暗褐色土主体で，ローム粒をやや多く含む土層もある。自然堆積と思われる。柱穴の土層は概してローム塊を多く含むが，P3・P4には柱痕と思われる縦長の暗褐色土が見られる。掘形底面は床面からそれほど深くない。ローム塊を含む暗褐色土によりならされて床面が形成されている。

カマドは北壁中央右寄りに位置する。袖基底部はローム塊を含む。袖内壁は火熱により赤色化している。火床部下は深く掘られており，焼土塊・ローム塊・山砂を含む暗褐色土が堆積する。

遺物は少なく，散在的に出土している。土師器甕2はほぼ完形で，カマド左脇の床面から出土した。また，須恵器坏1は北西隅のほぼ床面から底部を下にして出土した。土師器甕3は中央部床面近くからまと



第114図 SI052・053

まって出土した部分が多い。

SI053（第114・115図，図版28）

調査区中央部に位置する。平面形は横長の方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁際中央わずかに右寄りに位置する。壁溝は全周する。床面は硬化面が東壁際及び西壁際の多くを除いて，広く見られる。床面には出入り口ピット以外にいくつかのピットがあるが，本竪穴に伴うものかわからない。北東隅部のものは，掘形掘削時に隅部が深くなったものと思われる。覆土は自然堆積と思われる。掘形底面は床面から10cm前後の深さである。ローム塊を含む暗褐色土を充填して床面を形成している。

カマドは北壁中央やや右寄りに位置する。出入り口ピットも右に寄っており，対応している。構築材が前方に流出して，袖部前側の遺存は良くないが，後ろ側の遺存は良く，後天井部の一部が残っている。火床部下は深く掘られており，その上に焼土が厚く堆積している。

遺物は多量ではないが，竪穴全体に見られる。出土層位も床面から上層にわたる。カマド内で須恵器坏1と土師器坏3が上層から出土している。1は横向き，3は伏せた状態である。

SI055（第115図，図版29）

調査区中央部に位置する。平面形は横長の方形であるが，やや丸みがある。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁際中央右寄りに位置する。壁溝は全周する。床面は硬化面が壁際を除いて広く見られる。カマドから出入り口部付近にかけての床面上には，焼土が5cm程度の厚さで堆積していた。また，床面も焼けていた。焼土上の覆土は自然堆積と思われる。

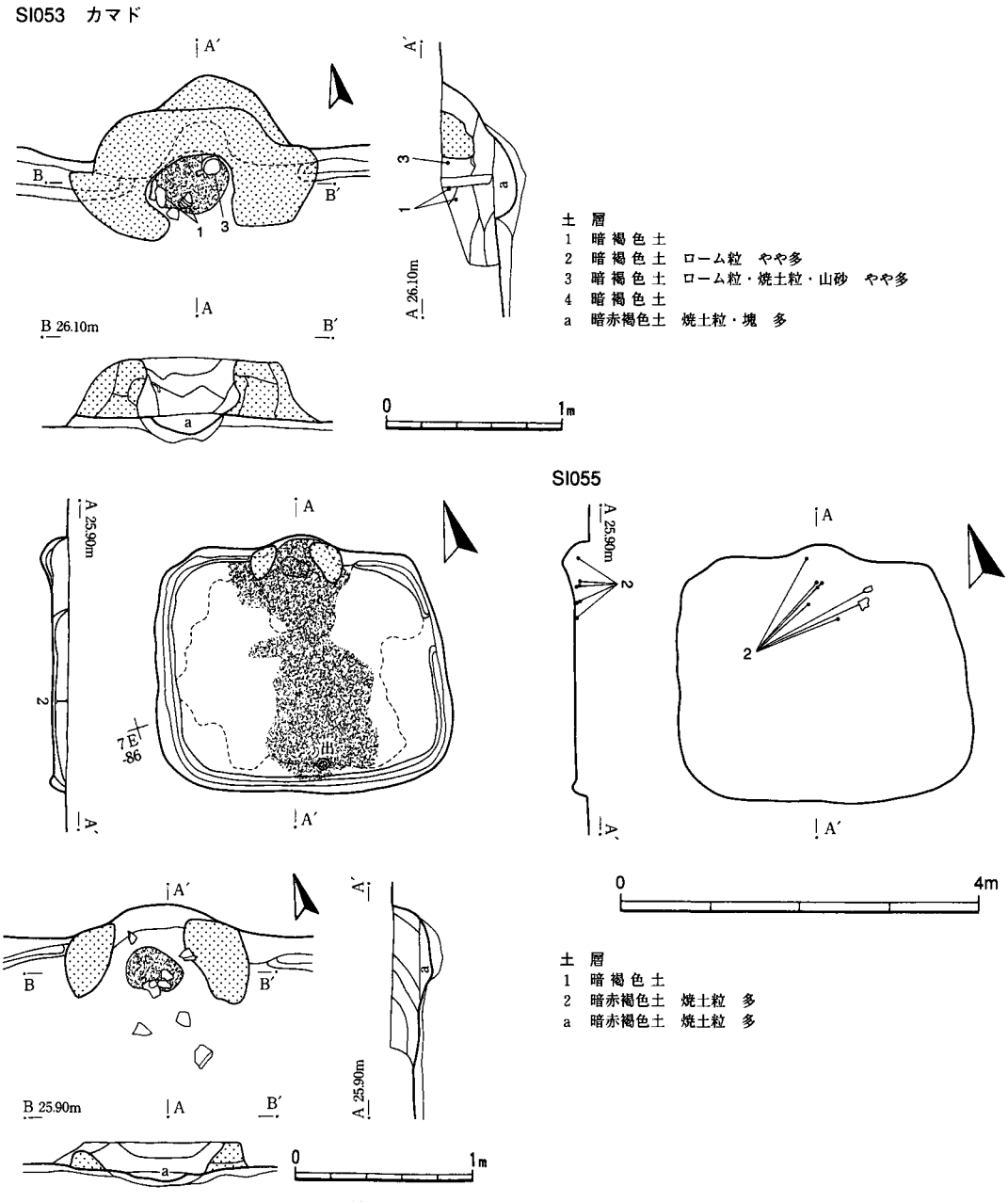
カマドは北壁中央に位置する。竪穴が浅いためか遺存が悪い。火床部下の掘り込みもあまり深くない。遺物は少ない。土師器甕2の破片がカマド内及び前方で出土しているが，それ以外は希薄である。

SI057（第116図，図版29）

調査区中央部に位置する。平面形は方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。規模が大きく，壁溝と接している。壁溝はほぼ全周する。床の硬化面は手違いにより記録されていないが，調査の所見によれば，中央から南側にかけては広がっていたということである。覆土は自然堆積と思われる。掘形底面は床面よりもかなり深い部分が多い。掘形下層はロームを多く含む暗褐色土，上層はロームの含有の少ない暗褐色土を充填して，床面を形成している。

カマドは北壁中央に位置し，方形プランから大きく突出する。竪穴の深さの割に遺存が悪い。火床部後ろ側に土製支脚があるが，倒れている。火床部前方の掘り込みが深い。火床部のかき出しによるところもあろうが，この部分の掘形がそれ以上に深いように思われる。

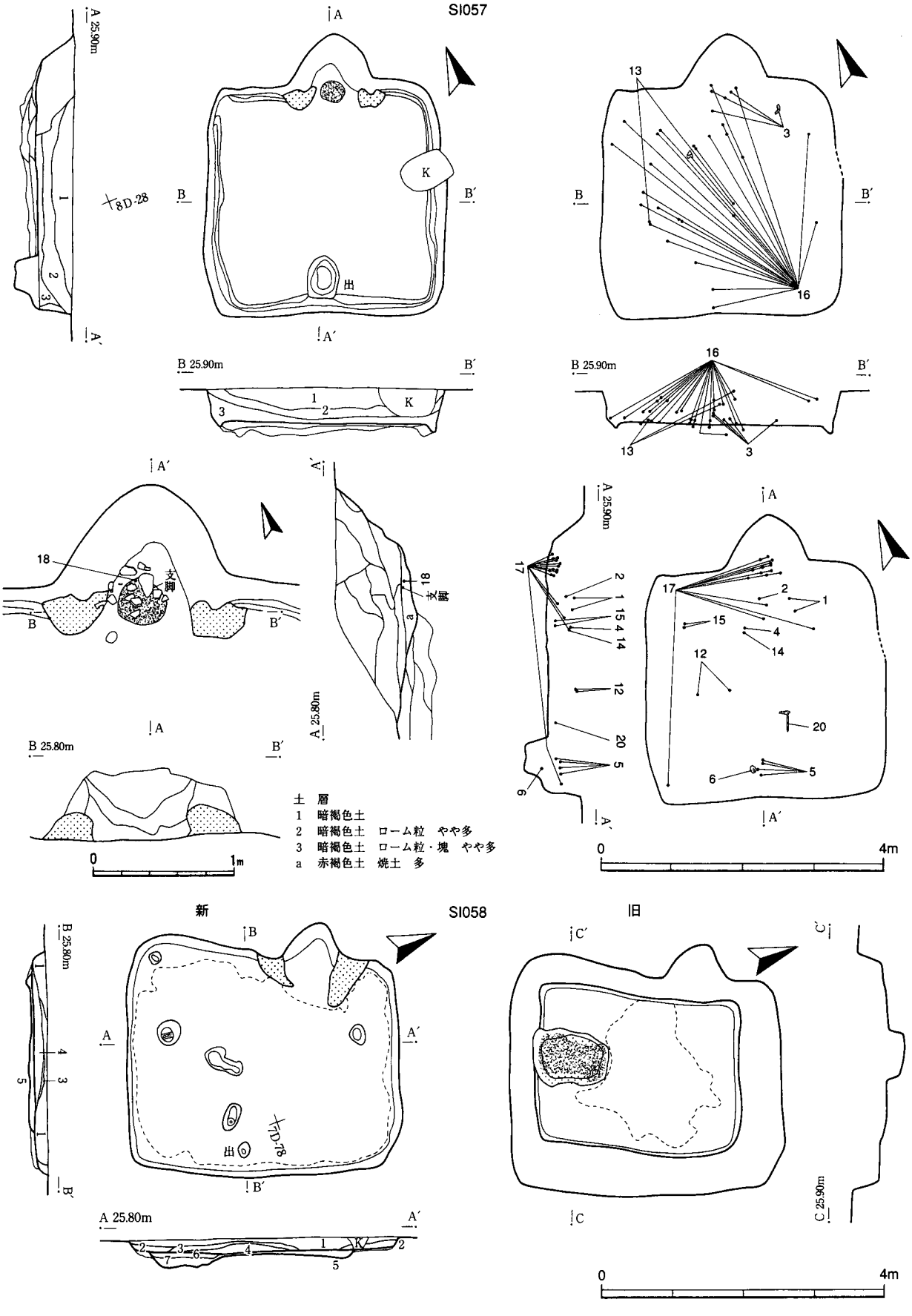
遺物量は比較的多い。カマド付近の密度がやや高いが，竪穴全体から出土している。カマド内の土製支脚はもろいため全体を実測できなかったが，近くで出土している18がこの支脚の一部である。支脚の周囲から土師器甕17の破片が多く出土した。その他の遺物の出土層位をみると，全体として中・上層での出土が多い。床面・下層から出土する破片もあるが，中・上層の破片と接合する場合が多い。



第115図 SI053カマド・SI055

SI058（第116・117図，図版30）

調査区中央部に位置する。平面形は横長の長方形である。東壁とカマドのある西壁が長辺，南北側の壁が短辺である。南西隅部がやや張り出している。竪穴の拡張が行われており，建て替えられた住居である。4箇所の主柱穴は見られないが，北壁側，南壁側の対称的な位置に2箇所のピットがあり，柱穴かもしれない。深さは北壁側が17cm，南壁側が18cmである。東壁際中央やや左（南）寄りに位置するピットは床面除去時に見つかったピットであるが，位置から建て替え後の出入り口ピットと思われる。また，その近くに位置するピットは建て替え前の出入り口ピットの可能性があるが，建て替え前のプラン中軸線から左側に寄るため，やや確実性に乏しい。その他，床面中央南寄りのところにやや規模の大きいピットがある。深さは8cmと浅い。また，南西隅のピットは深さが16cmである。いずれも本遺構に伴うものか不明である。壁溝は巡っていない。床面はほぼ全面が硬化している。



第116図 SI057・058

床面上には大量の炭化材と焼土が見られる。炭化物の分布は北壁側が薄いが，中央やや南寄りを中心に広範囲である。焼土は炭化材のある中央部から北壁側にかけて多い部分がある。炭化材は放射状に残っており，屋根材と考えられる。遺存の良い土器もかなり残っており，火災に遭った可能性も考えられる。炭化物・焼土を多く含む層の上層はローム粒を多く含み，埋め戻されているものと思われる。床面は旧床面の５～10cm程度上部に，ローム粒を多く含む暗黄褐色土を埋め戻して形成されている。

床面除去調査を行ったところ，拡張前の住居の床面が見つかった。四壁はすべて建て替え後のプランの内側に納まるものと思われる。床面中央に硬化面が見られる。南壁側中央は焼土範囲と浅い窪みがある。微量の山砂が見られることから，旧カマドが位置したとも思われるが，南壁側であることから疑問もある。この位置にカマドがあるとすると，先述した東壁側のピットは出入り口ピットとは考えにくくなる。

建て替え後のカマドは西壁右（北）寄りに位置する。中軸線から大きく寄っており，右脇がすぐ北西隅である。袖が若干残るのみで，遺存が悪い。袖の構築材は暗褐色土が混入する。また，基底部はローム粒を含む。

遺物は遺存の良い遺物が多く出土した。本遺構の炭化材・焼土を火災あるいは意図的な廃材焼却のどちらと考えるにしても，遺物は本遺構で使用していたものの多くを遺棄あるいは放棄しているものと考えられる。１棟の竪穴住居で使用していた遺物群のセットを考える上で，良好な資料である。

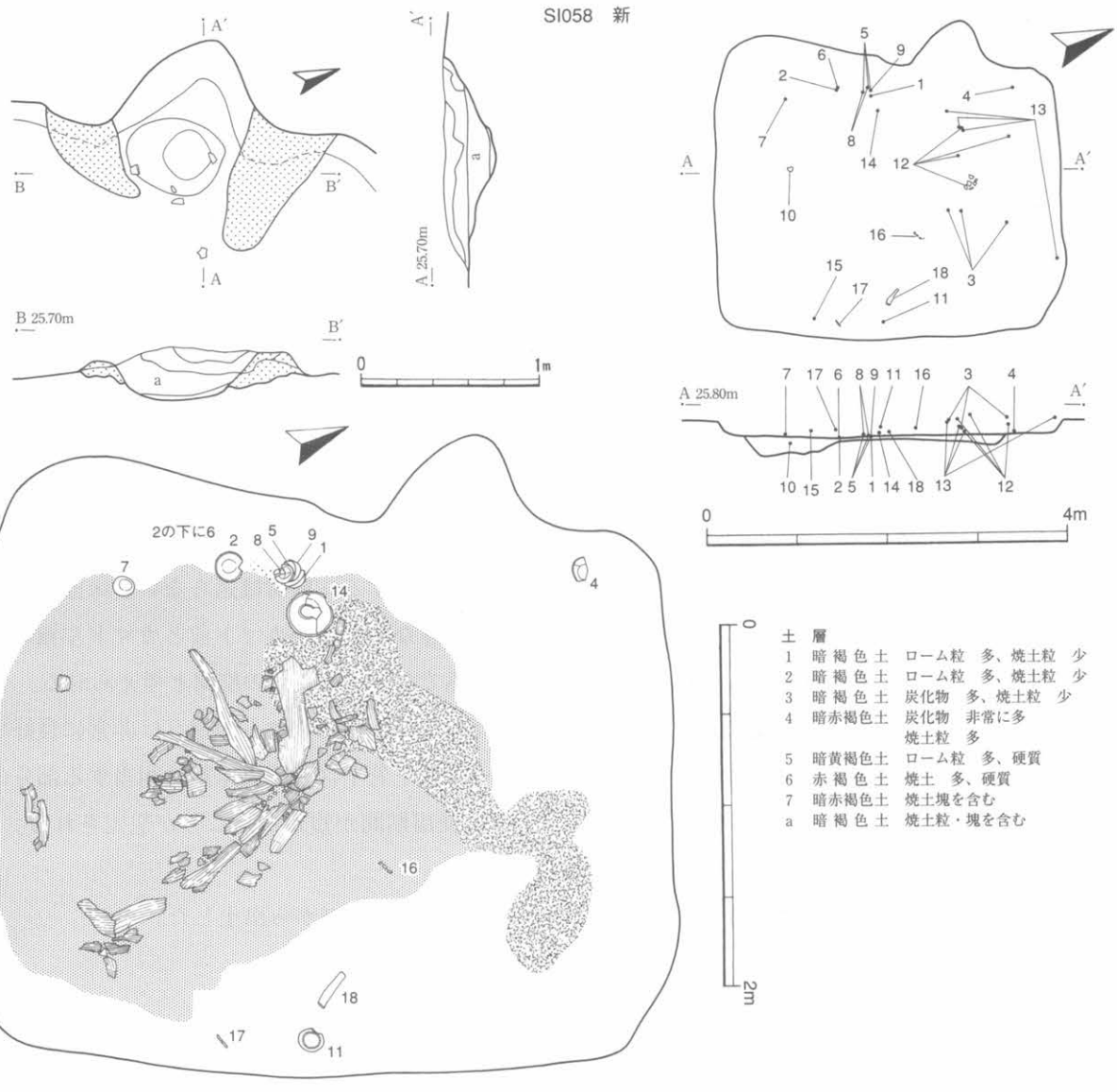
遺物の平面位置をみると，特にカマド左側から多く出土している。須恵器坏１・土師器坏５・８・９は４枚重ねであり，上から８・５・９・１の順に出土した。やや動かされて斜めになっているものもあるが，底部を下に床面上に置かれたものである。その近くで須恵器坏２と土師器坏６が，上から２・６の順で重なって底部を下にして出土した。また，土師器甑14も４枚重ねの土器群の近くから伏せた状態で出土している。これらの土器群の近く，南西隅寄りのところでは，土師器坏７が伏せた状態で出土した。カマド右脇では，残りはあまり良くないが須恵器坏４が出土している。以上のように食器類がカマド近くから多く出土しているが，一方でカマド内からは若干の土器片が出土したのみで，目立った遺物はない。これはカマドが日常的に使用されている状態のまま，放棄された状況を示していると考えられる。

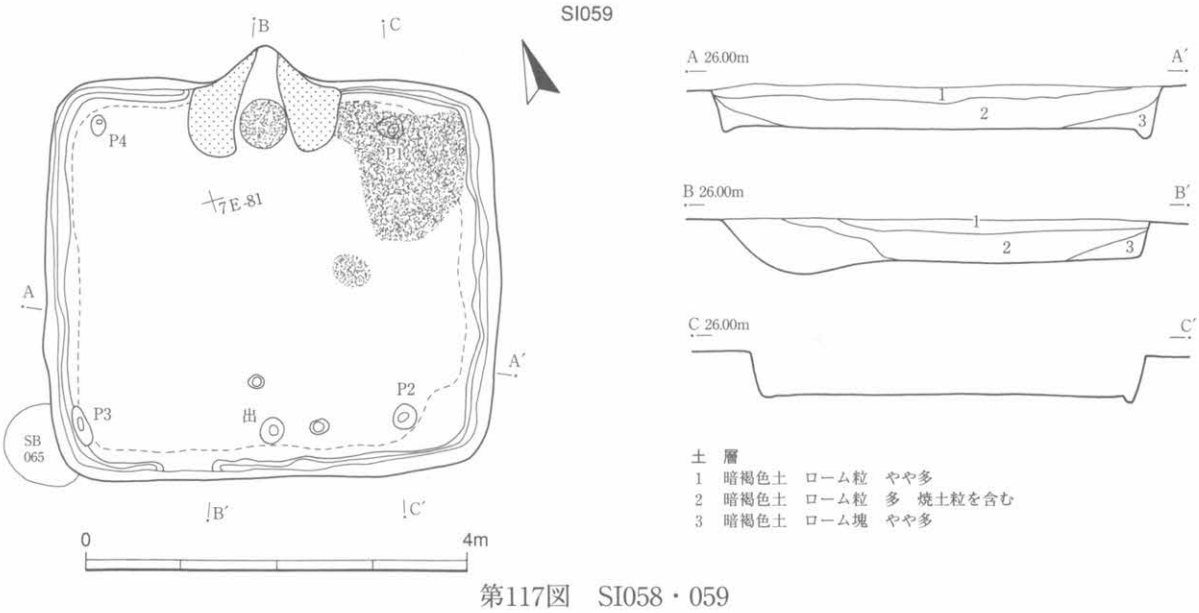
出入り口のある東壁側中央では鎌18・刀子16・棒状鉄製品17など鉄製品の出土が目立つ。鉄製品の近くには石帯15や転用硯11が出土しており，出入り口付近では道具類の出土が多いといえよう。11は須恵器高台付坏からの転用品で，伏せた状態で出土した。

竪穴全体の出土状況をみると，カマド左側部分で集中する以外は，東壁側中央部及び北壁側で分布するが，炭化物の範囲と北東隅は希薄である。遺存の良い個体は多いが，破片量はそれほど多量ではない。このことは他からの廃棄が少ないことを示すものといえよう。

SI059（第117・118図，図版31）

調査区中央部に位置する。南西隅がSB065と重複する。新旧関係は不明である。平面形はやや横長の方形である。対角線上の通常の位置に配される主柱穴は見られないが，各隅部（近く）にピットが存在する。やや変則的であるが，４箇所あり，深さからも主柱穴と思われる。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。調査時の記録が漏れており，深さが不明である。壁溝は南壁でわずかに途切れる他は巡っている。床面はほぼ全面が硬化している。出入り口ピット近くに２箇所のピットが見つかったが，本竪穴に伴うものかわからない。深さは，中央寄りのものが11cm，東側のものが13cmであり，浅い。床面除去後，カマド右





第117図 SI058・059

側，北東隅寄りの底面に焼土範囲がみられた。特に北壁際に焼土が厚い部分があり，また，中央部寄りも焼土がやや厚く堆積していた。床面形成にあたって，この部分に焼土を含む土を貼ったものと思われる。

カマドは北壁中央に位置する。天井部等上部の構築材が崩れて両袖内上部や前方に広がるが，袖の遺存は比較的良い。袖基底部はローム塊を多く含むが，その上部は混じりけの少ない山砂を厚く積んで構築している。煙道部は暗褐色土が堆積している。

遺物量は多いが，破片が多く，遺存の良い個体は少ない。平面分布は中央から北側・東側が多いが，西壁側は少なく，南壁側もやや少ない。遺存の非常に良い土師器坏15が東壁際隅部近くの床面から出土しているが，大多数の遺物は中・上層出土である。竪穴がかなり埋まった段階で，周囲の遺構，特に北東方向の竪穴住居群から多く廃棄されたものと思われる。

SI061（第118図，図版31）

調査区中央部に位置する。SB066と重複するが，切られており，SI061の方が古い。平面形は方形で，4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは西壁側中央に位置する。壁溝は巡らない。床面中央部には硬化面が広がるが，硬化の度合いはやや低い。床面上には大きな粘土塊がカマド前とカマド左側の北東隅付近に堆積している。本遺構のカマド構築材とは異なる質感であり，他からの廃棄と考えられる。

カマドは東壁中央やや左（北）寄りに位置する。竪穴が比較的浅い割にカマドの遺存は非常に良好である。構築材は山砂主体で混じりけが少ない。袖基底部はローム塊を若干含む。火床部に相当する部分の赤色化が無く，袖内壁もまったく赤色化していないことから，使用期間が短かったことが想定される。b層は前天井の崩落土，a層は掛け口の痕跡に流入した堆積土である。

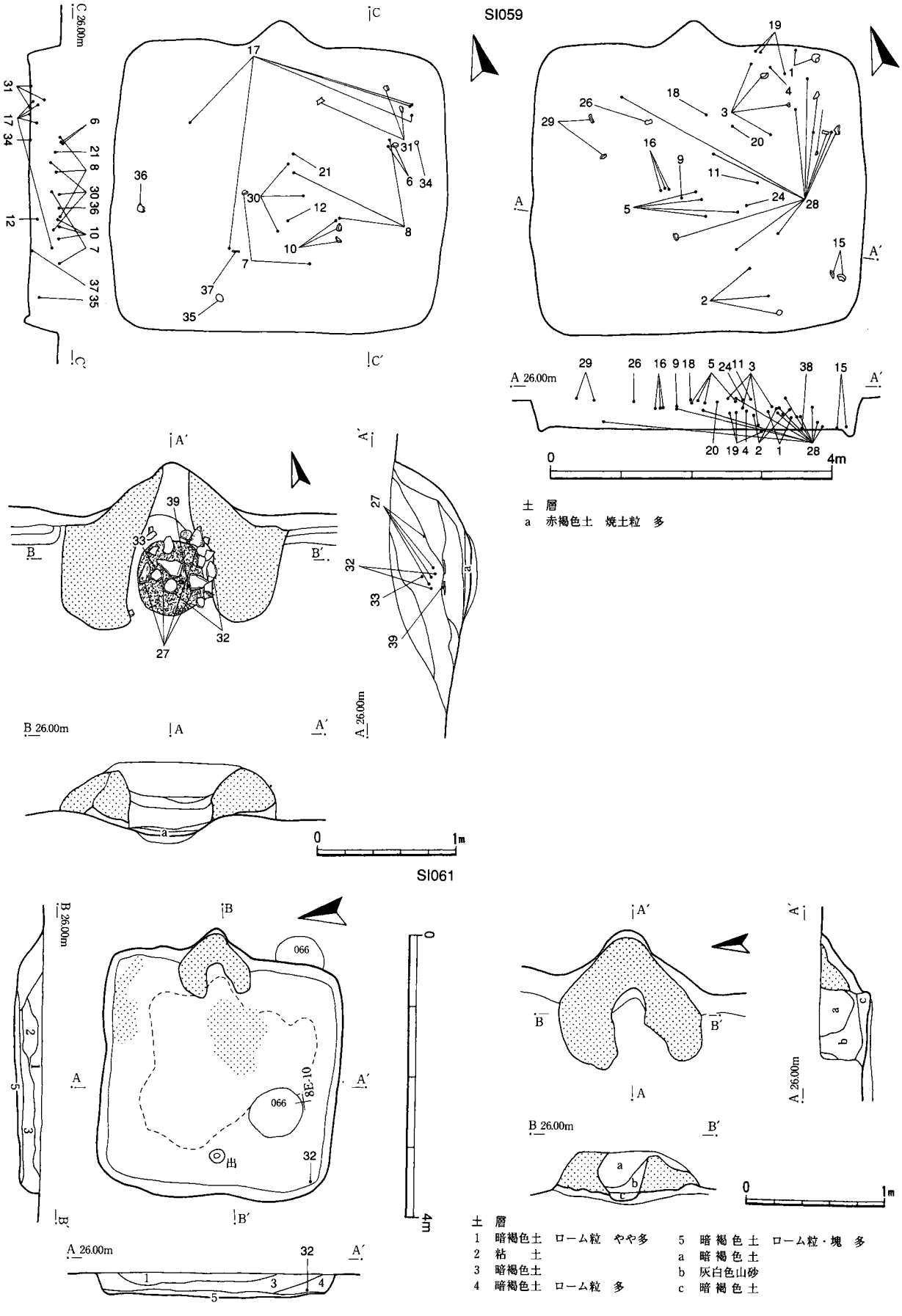
遺物量は少なく，図示した遺物も鉄滓1点のみである。南西隅部の下層から出土した。

SI069（第119図，図版31）

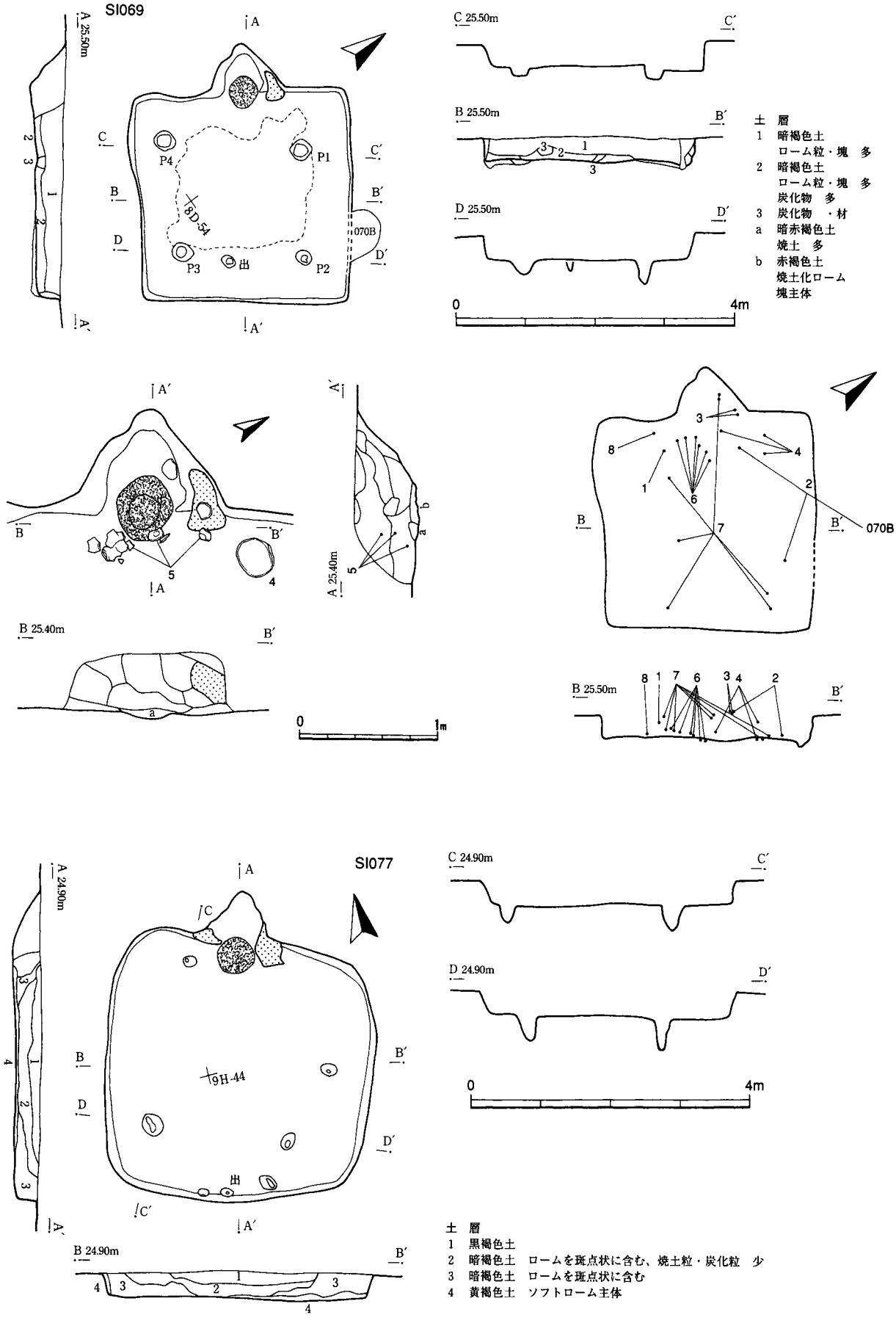
調査区中央部やや南寄りに位置する。SB070Bと重複するが，新旧関係は不明である。平面形は方形である。4箇所の主柱穴をもつ。カマド左側，西隅に近い柱穴が若干壁際に寄っている。出入り口ピットは南東壁側中央左寄りに位置する。南東壁からやや距離があり，P2・P3を結ぶ線に近い。壁溝は巡っていない。床面は硬化面が柱穴間を主体として見られる。硬化面は周辺よりやや高くなっている。床面はやや凹凸があり，一部はローム粒・塊を含む暗黄褐色土で貼り床が施されている。覆土は下層で炭化材を含む。炭化材はカマド前から中央部に集中するが，あまり濃密な状況ではない。

カマドは北西壁中央に位置し，方形プランから大きく突出している。崩れているため，右袖の一部しか残っていない。火床部は火熱によりローム塊が赤色化・硬化している。

遺物はカマド内及び周辺からの出土が目立ち，出入り口側は少ない。須恵器甕4はカマド右脇の床面に置かれた状況で出土した。土師器甕5は主な破片がほぼカマド火床部近くから出土し，土師器甕6もカマド前方の床面・下層から出土した。その他の遺物では，砥石8が下層から出土しているが，須恵器坏1・2，土師器坏3は中・上層から出土あるいは上層出土と下層出土の破片が接合したものである。なお，2はSB070B出土破片と接合する。



第118図 SI059・061



第119図 SI069・077

SI077（第119・120図，図版32）

調査区東部に位置する。平面形はやや隅が丸い方形である。南壁際に3箇所のピットがあるが，位置的には中央のピットが出入り口ピットと考えられる。なお，右（東）側のピットは深さ47cm，左（西）側のピットは深さ21cmである。南壁際のピットを除いて，4箇所のピットがあるが，4本柱に伴うピットとは思われない。南側のピットは多少の可能性もあり得るが，他の2つは通常の位置とは大きく異なり，北西側のものはカマドと重なると思われる。しかし，深さは東壁側中央のものは37cm，南東側のものは44cm，南西側のものは34cm，北西側のものは25cmであり，それなりの深さはある。

カマドは北壁中央やや左寄りに位置し，方形プランからかなり突出する。遺存は不良で，左側の袖は壁際にしか残っていない。構築材は山砂主体であるが，基底部はローム塊を，上部は暗褐色土を含む。火床部下の掘り込みは深くない。

遺物量はやや多く，図示した個体も少なくはないが，遺存の良い個体は少ない。平面分布はカマド周辺が多く，壁際と中央部がやや少ない。出土層位は床面から上層にわたるが，中・上層が多い。壁際にある程度堆積した後の窪地に多く廃棄されたものと思われる。

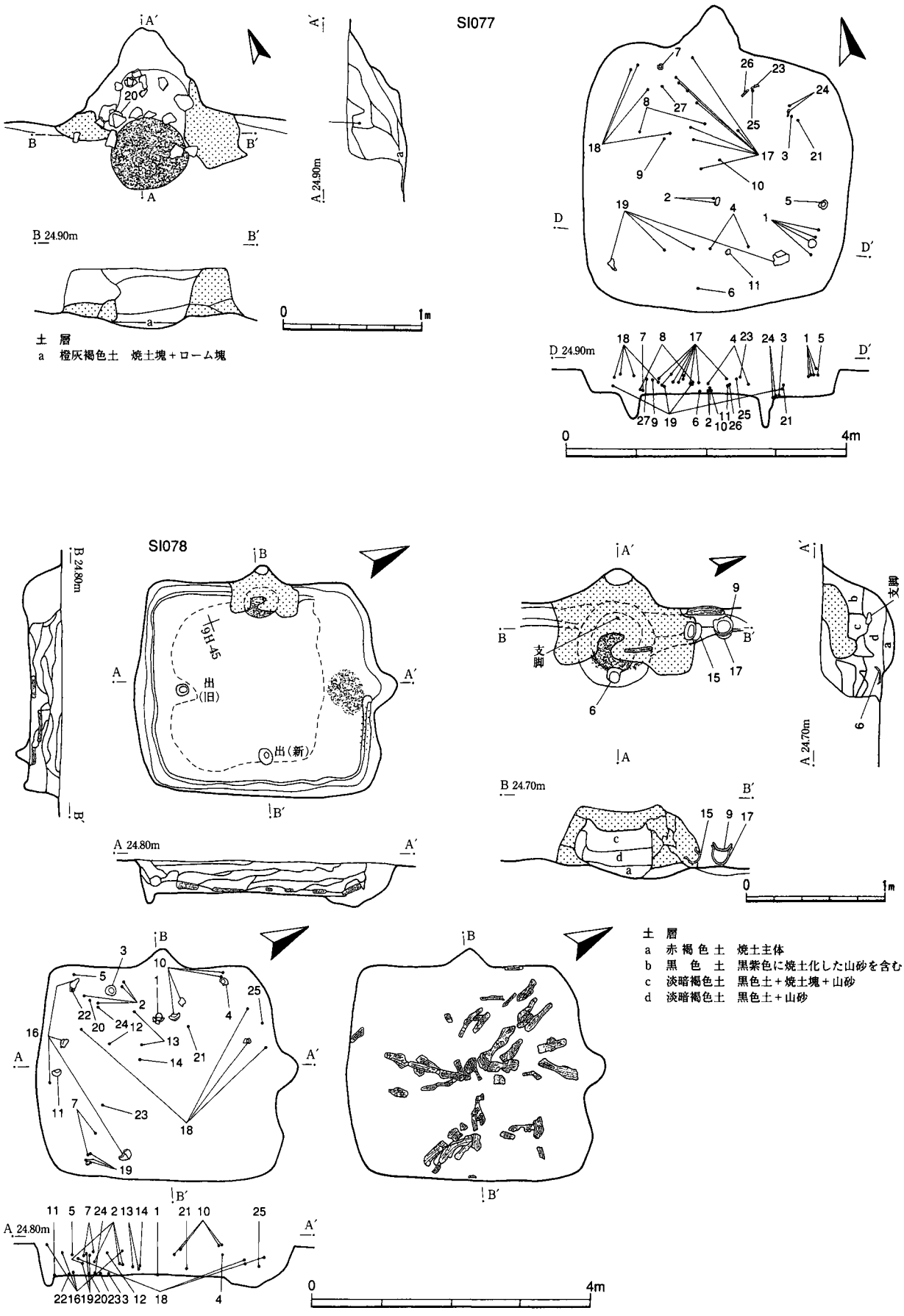
SI078（第120・121図，図版32）

調査区東部に位置する。SB086と重複するが，新旧関係は不明である。カマドが2基あるが，遺存状況から同時存在ではない。カマドに対応して出入り口ピットも2箇所あるので，建て替えられた住居と考えられる。平面形は方形であるが，新しいカマドの向きではやや横長，古いカマドの向きではやや縦長となる。カマドの新旧については，遺存の良い西カマドが新，悪い北カマドが旧と考えられる。出入り口ピットは西カマドに対面する東壁側のものが新，北カマドに対面する南壁側のものが旧である。4箇所の主柱穴は見られない。壁溝は北壁西側の西カマドと北カマドの間が不明であるが，他は巡っている。本来は全周したものと思われる。床面は硬化面が北壁側を除いて見られる。床面・下層には多量の炭化材が堆積している。炭化材はおおむね放射状に出土し，本住居の上屋が燃焼したものとみて支障ない。東壁側出入り口ピット上の炭化材は階段はしごなど出入り口施設の木材が残っているものと思われる。覆土は炭化物・炭化材，焼土，ロームの混入の度合いにより複雑に分かれる。焼土は南壁側上層や東壁側下層で多いが，その他は少ない。全体としては炭化材が多量の割には焼土が少ないといえよう。状況から少なくとも上層以外は埋め戻されたものと考えられる。

西カマドの遺存は良好で，落ち込んではいるが後天井や前天井の一部が残り，掛け口の痕跡もうかがえる。カマド下の壁溝は山砂を含む暗褐色土で埋められ，その上に混じりけの少ない黄灰白色山砂が盛られて構築されている。ただし，上屋が燃焼した影響を受け，外側及び上部は炭化物を含み，煤けて暗赤褐色化，黒褐色化している。また，袖内壁は赤色化しているが，これはカマド使用に伴うものであろう。b層は暗紫色の土を含み，煙道部特有の土層である。c・d層も山砂や焼土塊に加えて煙道部や焚き口に流入した暗褐色土を多く含む。

北カマドは床面上には袖の痕跡が見られない。火床部は楕円形状に窪んでおり，山砂主体の灰褐色土が堆積している（e層）。煙道側の土層断面では焼土化した山砂主体の層がある（f層）ことから，使用された痕跡はうかがえる。

遺物量は比較的多く，図示した個体も多い。また，遺存の良い個体もかなり多く見られる。平面的な分



第120図　SI077・078

布は西カマド周辺で多く，東側中央から北寄りは希薄である。西カマド周辺の遺物から個々にみていくと，土師器坏6はほぼ火床部上から正位で出土した。また，右脇では土師器甕15が右袖にもたれるような形でやや傾いて床面近くから出土した。その右隣では土師器坏9を口縁部にのせた土師器甕17が床面からともに正位で出土している。カマド前では須恵器坏1が床面から正位で出土し，左脇の床面では土師器坏3が出土した。3は正位か倒位か判然としないが，内面に被熱痕跡が強く，おそらく正位と思われる。3の近くでは鉄刀子20・22も床面から出土した。カマドに近いところ以外では土師器坏11が南壁際中央の床面から，鉄刀子23が11から中央寄りの床面から出土している。以上の遺物のうち，カマド内・カマド脇や前方の土器群などは遺存も良く，本遺構に伴う可能性が考えられる。火災あるいは意図的な焼却に伴って，遺棄したものであろう。一方，9が灯明器であり，墨書もされていることからカマドや住居廃絶に伴う祭祀的な意味合いも考えられる。以上に言及した以外の遺物は中・上層からの出土か中・上層と下層の破片が接合した遺物である。しかし，覆土の多くが埋め戻されているのならば，それらの中にも本遺構に伴う遺物があるかもしれない。

SI083A（第121図，図版33）

調査区東部に位置する。一部がSO083Bにより破壊されている。平面形は方形で，4箇所の主柱穴をもつ。出入り口ピットは東壁際中央に位置する。出入り口ピットとP3の近くに深さ42cmのピットがあるが，本遺構に伴うものかわからない。壁溝は全周する。覆土は自然堆積と思われる。上層の一部に焼土の堆積があり，中央部から南壁際を中心に分布する。

カマドは西壁中央に位置し，方形プランからの突出は少ない。構築材は山砂が主であるが，基底部はローム塊・暗褐色土を含む。火床部の後ろ側からは土製支脚の破片が出土した。火床部上は焼土の堆積が厚く，やや深く掘り込まれている。

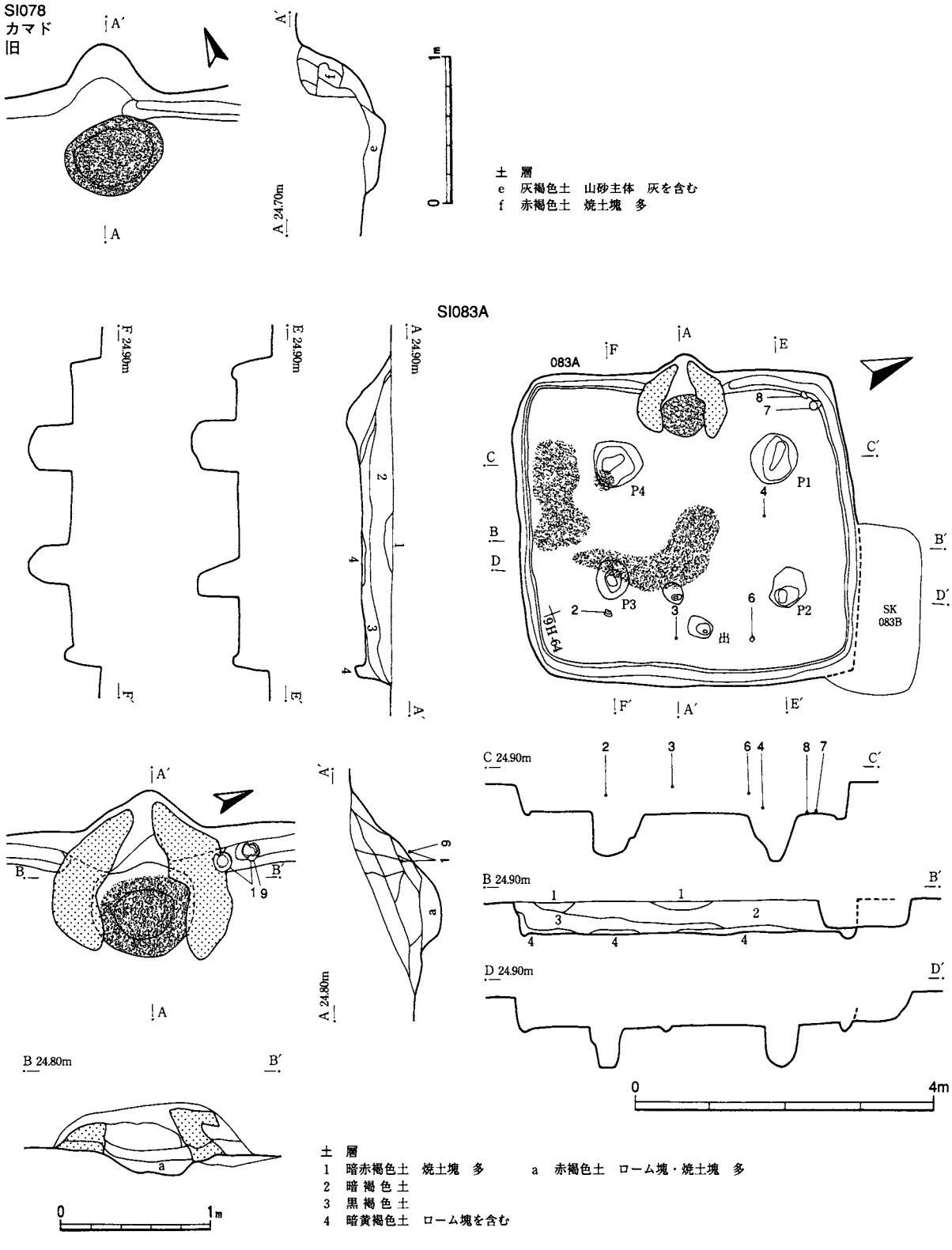
遺物はあまり多量ではない。カマド右脇の壁際で土師器坏1と土師器甕9が床面から若干高い位置で出土した。1は完形，9もほぼ完形で，口縁部を上にやや傾いて出土した。9は手捏ね土器的な土器である。その近くの北西隅からも手捏ね土器的な土師器鉢7・8が床面から出土した。7・8ともほぼ完形で，7は口縁部を上にかなり傾いて，8は横向きで出土した。それ以外の遺物は中央部から東壁側に散在的に分布し，出土層位も中・上層が多い。

SI087（第122図，図版33）

調査区東部やや中央寄りに位置する。平面形は若干隅の丸い方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南東壁際中央に位置する。壁溝は出入り口ピットから東隅付近にかけての部分と南西壁中央で巡らないが，その他は巡っている。床面は硬化面がカマドのある北西壁側から出入り口部にかけて見られる。出入り口部から南西壁際・北東壁際の一部にかけてはあまり硬化していない。覆土は自然堆積と思われる。

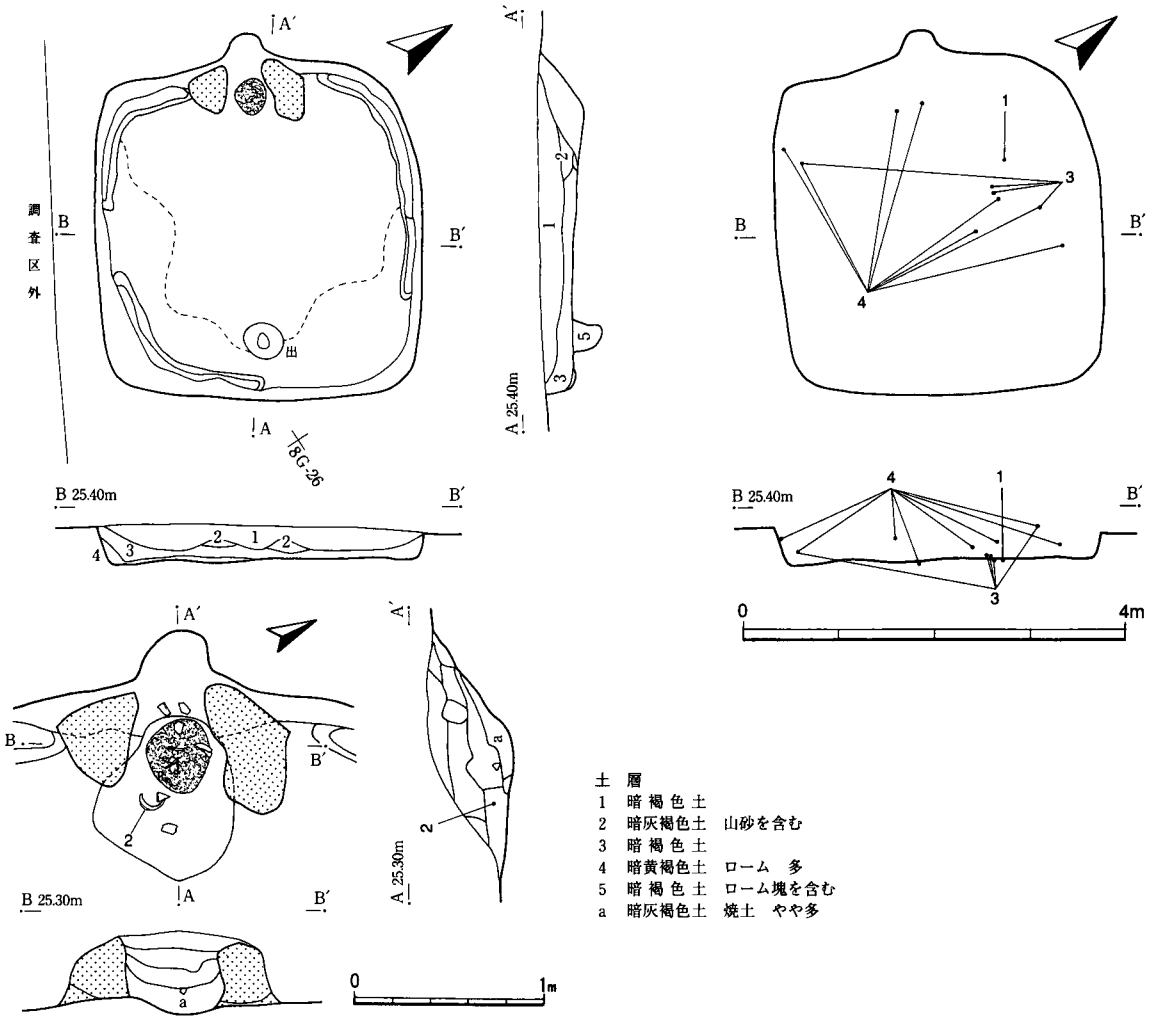
カマドは北西壁中央に位置し，方形プランからの突出は少ない。構築材は山砂が主であるが，基底部はローム塊・暗褐色土を含む。後天井の一部が若干落ち込んでいる状況が見られる。

遺物量はやや少なく，図示した個体も少ない。おおむね北西壁側半分から散在的に出土し，南東壁側は少ない。出土層位は土師器坏1が床面であるが，土師器甕3・須恵器甕4は床面から上層に及ぶ。小型の



第121図 SI078カマド・SI083A

土師器甕2はカマド内からの出土であるが破片である。



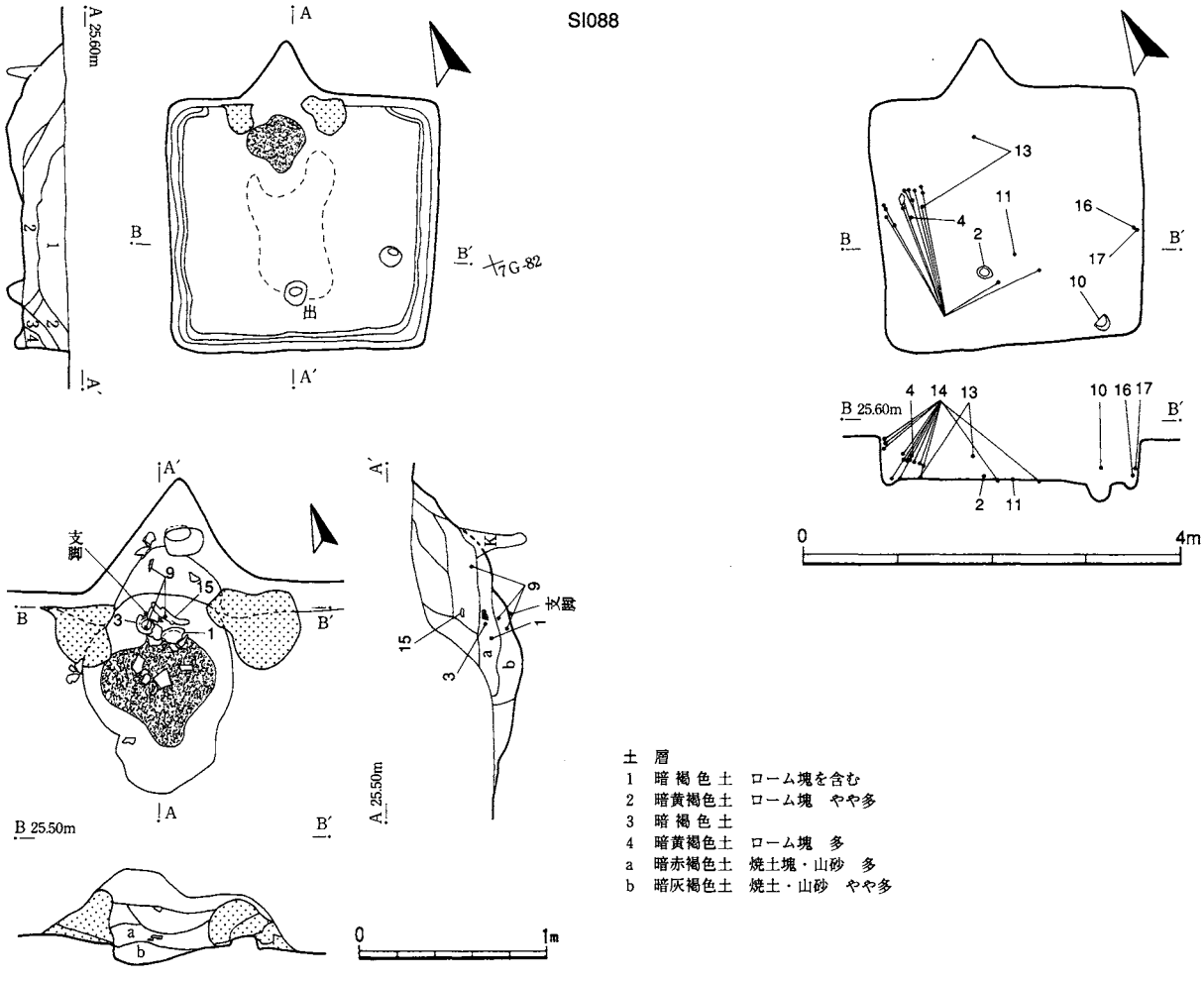
第122図 SI087

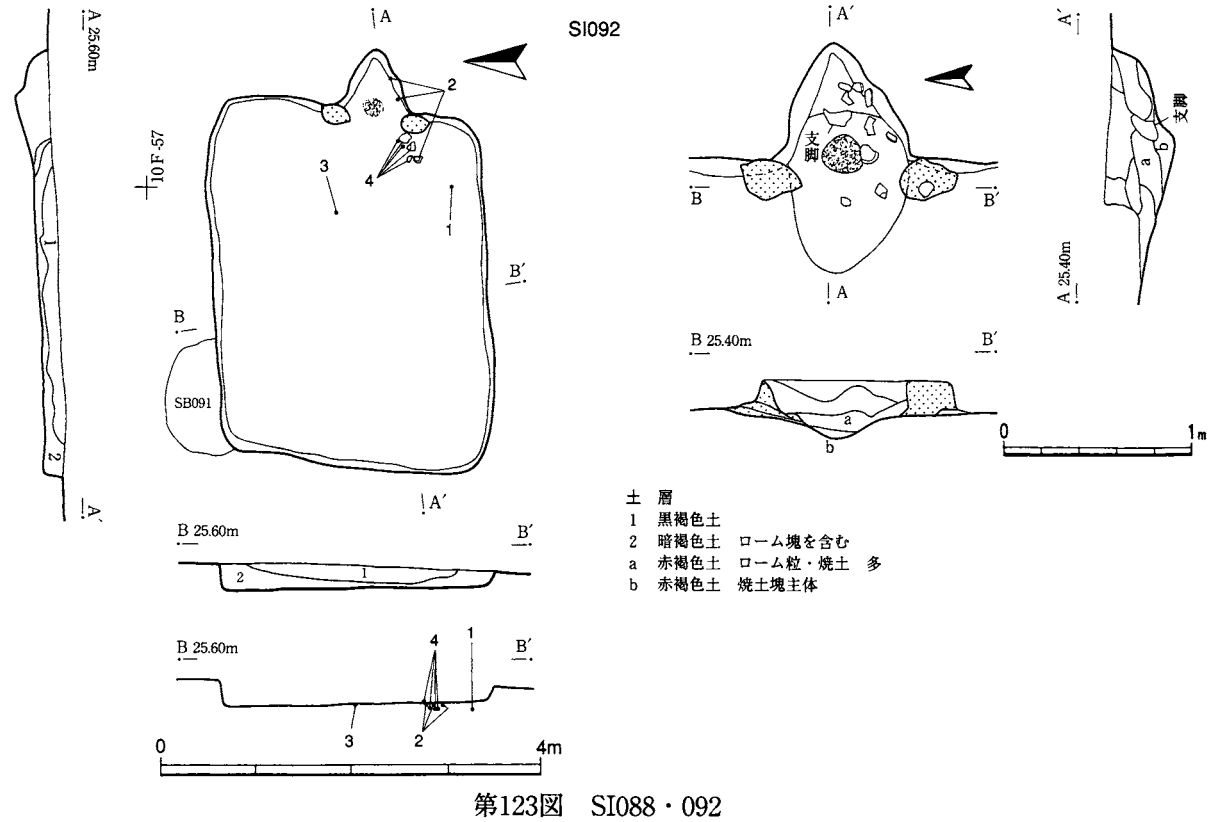
SI088（第123図，図版33）

調査区東部中央寄りに位置する。平面形は方形で，4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁側中央に位置する。壁溝は東・西・南の3壁で巡る。北壁はカマドがあり，小規模な竪穴住居なので，全周と同等とみなしても良いだろう。床面は硬化面が中央に見られる。東壁際南寄りに深さ20センチのピットがあるが，本遺構に伴うものかわからない。

カマドは北壁中央に位置し，方形プランからかなり突出している。遺存はあまり良くない。構築材は山砂が主であるが，基底部はローム塊・暗褐色土を含む。右袖の状況から，底面はロームをやや掘り残していると思われる。土製支脚の後方，縦断面で攪乱のある手前の比較的平坦な底面も良く焼けており，底面の焼けている範囲が広い。当初は奥側にあった火床部を前方に移した可能性も考えられる。火床部前側下部はやや深く掘られている。

遺物は中程度の量である。カマド内からの出土が多く，土師器坏1は正位，土師器坏3は伏せて出土した。鉄鎌15と高台付皿9もカマド内の出土である。15は上層出土であるが完形であり，9は遺存が中程度であるが下層の出土である。カマド以外では散在的な出土であり，出土分布の希薄なところも多い。出土層位は土師器坏2が床面近く，転用硯11が床面である以外は，下層でも床面からやや離れるものや中・上





第123図 SI088・092

層の破片が主体となるものである。2は中央南西寄りから正位で出土し，11は中央南寄りから出土した。

SI092（第123図，図版34）

調査区南部に位置する。北西隅でSB091と重複するが，新旧関係は不明である。平面形は長方形である。4箇所の主柱穴はみられず，出入り口ピットも検出しなかった。壁溝も巡らない。掘り込みが浅く，床面は軟弱である。覆土は自然堆積と思われる。

カマドは東壁右寄りに位置し，長方形プランから大きく突出している。遺存は不良で，両袖の一部が残るのみである。火床部後ろ側に土製支脚がある。火床部下はやや深く掘り込まれている。

遺物は少ない。カマド内及びカマド前方に集中し，図示した遺物はすべて床面出土である。長方形プランではあるが，鉄滓の出土は無く，遺物からは鍛冶工房の痕跡をうかがえない。

SI093A（第124図，図版34）

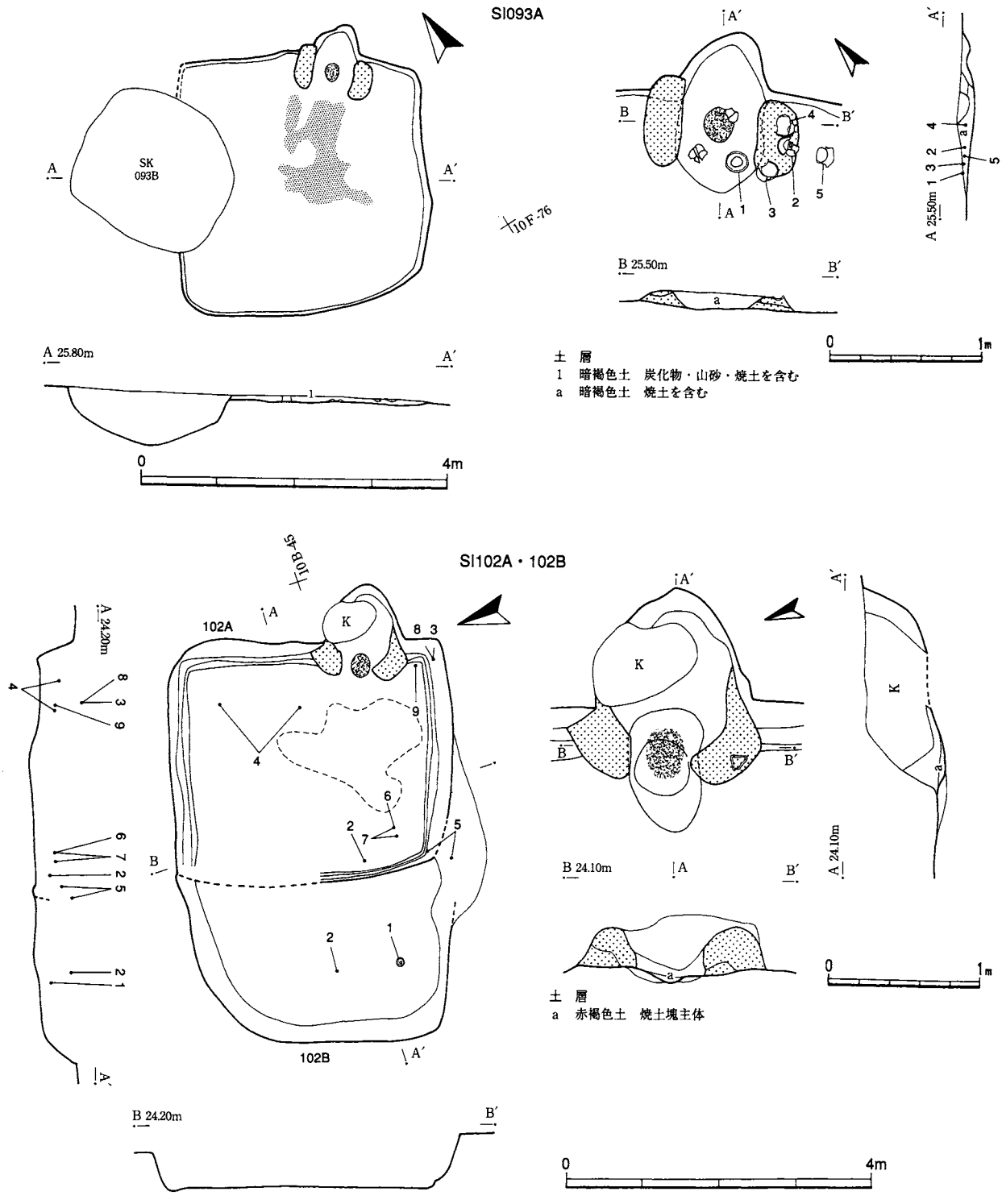
調査区南部に位置する。平面形は方形であるが，確認面から床面まで非常に浅いため，プランが不明瞭である。SO093Bによって北西壁側がかなり破壊されている。4箇所の主柱穴はみられず，出入り口ピットも検出しなかった。壁溝も巡っていないが，本来存在しないのか不明とすべきだろう。カマド前方には炭化物の分布範囲がある。床面は軟弱である。

カマドは北東壁右寄りに位置する。浅いために遺存は不良である。構築材は山砂が主で，基底部は暗褐色土を含む。火床部の焼けた範囲は狭い。

遺物はカマド内及び右袖周辺で遺存の良い土器が5個体出土した。いずれも正位での出土である。土師器高台付坏4・5は1/2程度の遺存であるが，浅いために本来は遺存していた部分が重機の掘削により失われた可能性が考えられる。カマドの図面では2・3は右袖の上であるが，写真を見ると，袖外側に接した状態であるようにも思われる。しかし，1は通常の保管場所とは考えられず，カマドを破壊して土器群を並べたようにも思われる。土器の状態をみると，1は強く熱を受けた様子が見受けられる。カマド以外は覆土が浅いため少量の出土である。

SI102A（第124図，図版34）

調査区南西部に位置する。SI102Bと西側で重複する。102Bの様相が不明瞭であるが，102Bをこわして作られたものと思われる。平面形は横長の方形で，4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは西壁際に存在したと思われるが，102Bとの重複のため，検出できなかった。壁溝は102Bと重複する西壁北半部が検出できなかったが，全周と思われる。床面は硬化面がカマド前方に見られる。北西側に見られないのは，重複による影響と思われる。床面は不明瞭であるが，102Bよりもやや高いと思われる。覆土は102A・102Bを通した土層断面の記録が調査時の手違いにより一部しかないため不明瞭であるが，中央部では3層に分かれる。上層はローム粒を含む黒褐色土，中層はローム粒を多く含む暗黄褐色土，下層は山砂を含む黄褐色土で，ローム主体である。写真を見ると中層以下はロームが多く，埋め戻された可能性も考えられる。カマドは東壁右（南）寄りに位置する。右脇がすぐ南東隅である。方形プランから大きく突出するが，攪乱により突出部分中央から左側が大きく破壊されている。構築材は暗褐色土を含む山砂であるが，基底部はローム主体である。



第124図　SI093A・102A・102B

遺物量はやや少なく，散在的に出土している。出土層位は中層・上層である。

SI102B（第124図，図版34）

調査区南西部に位置する。SI102Aによって東半部が破壊されている。平面形は方形と思われるが，不明瞭である。4箇所の主柱穴はみられず，出入り口ピットも検出できなかった。壁溝は巡っていない。床

面はやや凹凸があり，硬化面は見られない。覆土全体の様相は不明瞭であるが，一部は上層が橙褐色土，下層が暗黄褐色土である。カマドは失われた東壁に設置された可能性があるが，判然としない。

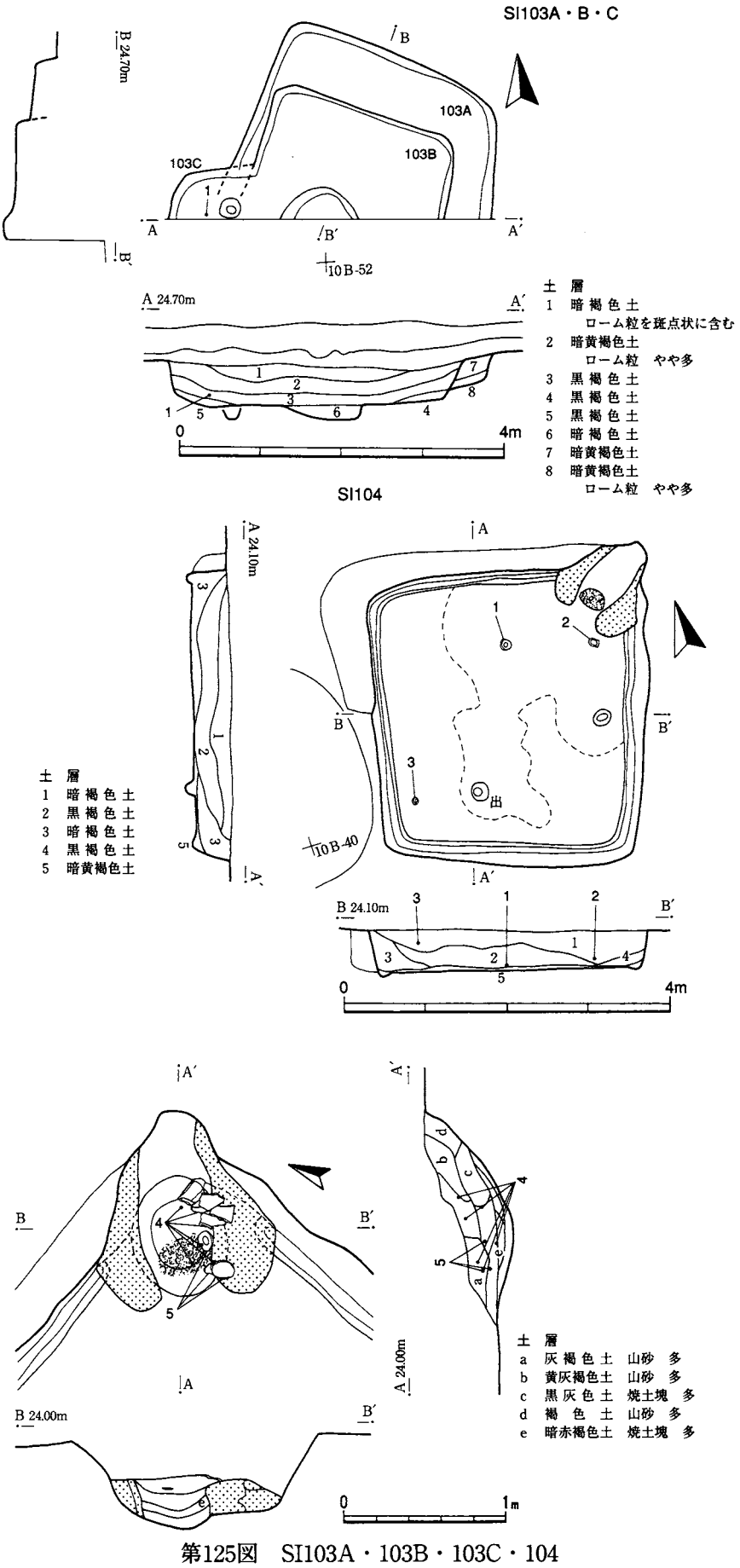
遺物は少量であるが，完形の土師器坏1がやや低いところから出土した。また，1/2強遺存している土師器坏2が上層から出土した。

以上のように若干の遺物が出土しているものの，本遺構が竪穴住居であるか断定し難い。

SI103A・SI103B・SI103C（第125図，図版35）

調査区南西部に位置する。重複あるいは建て替えによる3棟分の竪穴住居と思われるが，調査区の幅が狭いため不明瞭である。平安時代の土器が出土したため本項に入れたが，遺物は少量であり，遺構の性格・数を決める根拠は弱い。平面形は方形または長方形と思われるが，103Aは不整である。103Aの竪穴内部に103Bがすっぽりと入って大きな面積を占める。103Bが103Aよりも新しいように思われるが，断定し難い。また，103A・103Bの西壁側で103Cが重複する。103A・103Bとの新旧関係は不明である。

底面の深さは103Bが103Aよりも15～20cm程度低い。103Bと



第125図　SI103A・103B・103C・104

103Cはほぼ同じである。103Bの底面はおおむね平坦である。103Aの底面も南側と壁際がやや高いが，全体的には比較的平坦である。103Bの底面には最深18cmの大きなピットがあり，調査区外に続く。掘立柱建物の柱穴かもしれないが，断定はできない。また，103C側に深さ13cmの小ピットがあるが，性格は不明であり，103Cに伴うものかどうかもわからない。その他に主柱穴や出入り口ピットと思われるピットは見つかっていない。また，調査区内では壁溝は見られず，カマドの検出も無かった。覆土については，103Bと103Cの違いがわからなかった。103Aの覆土はA－A´の土層断面ではロームを多く含み，103Bに切られているように思われるが，B－B´側では判然としなかった。103Bから103Aに拡張した竪穴住居ならば，貼り床が施されるはずであるが，土層断面にその痕跡は見られない。少量の炭化物が103Bの中央部で2層から出土している。

遺物はごく少量である。土師器坏1が103C側の3層中から出土している。

SI104（第125図，図版35）

調査区南西部に位置する。平面形はわずかに縦長の方形である。北東隅にカマドがある竪穴住居である。4箇所の主柱穴は見られない。床面にはピットが2箇所あるが，出入り口ピットはSI022の例から南壁側左寄りのものと思われる。東壁際中央のものは深さが13cmであり，南壁側のものとそれほど差はない。西壁にカマドがあれば，出入り口ピットと考えられるが，北東隅のカマドには近すぎるようである。壁溝は全周する。床面には，硬化面がカマド前から南壁側のピットにかけて見られる。西壁側と南東隅付近はあまり硬化していない。

カマドは北東隅に位置する。構築材が崩れているが，比較的遺存が良い。構築材は山砂を主とし，縦断面では，前天井と後天井の痕跡もうかがえる（a・b）。袖部内壁は火熱により明瞭に硬化している。縦断面では煙道部の痕跡も良く残っている（c・d）。火床部下はやや深く掘られている。

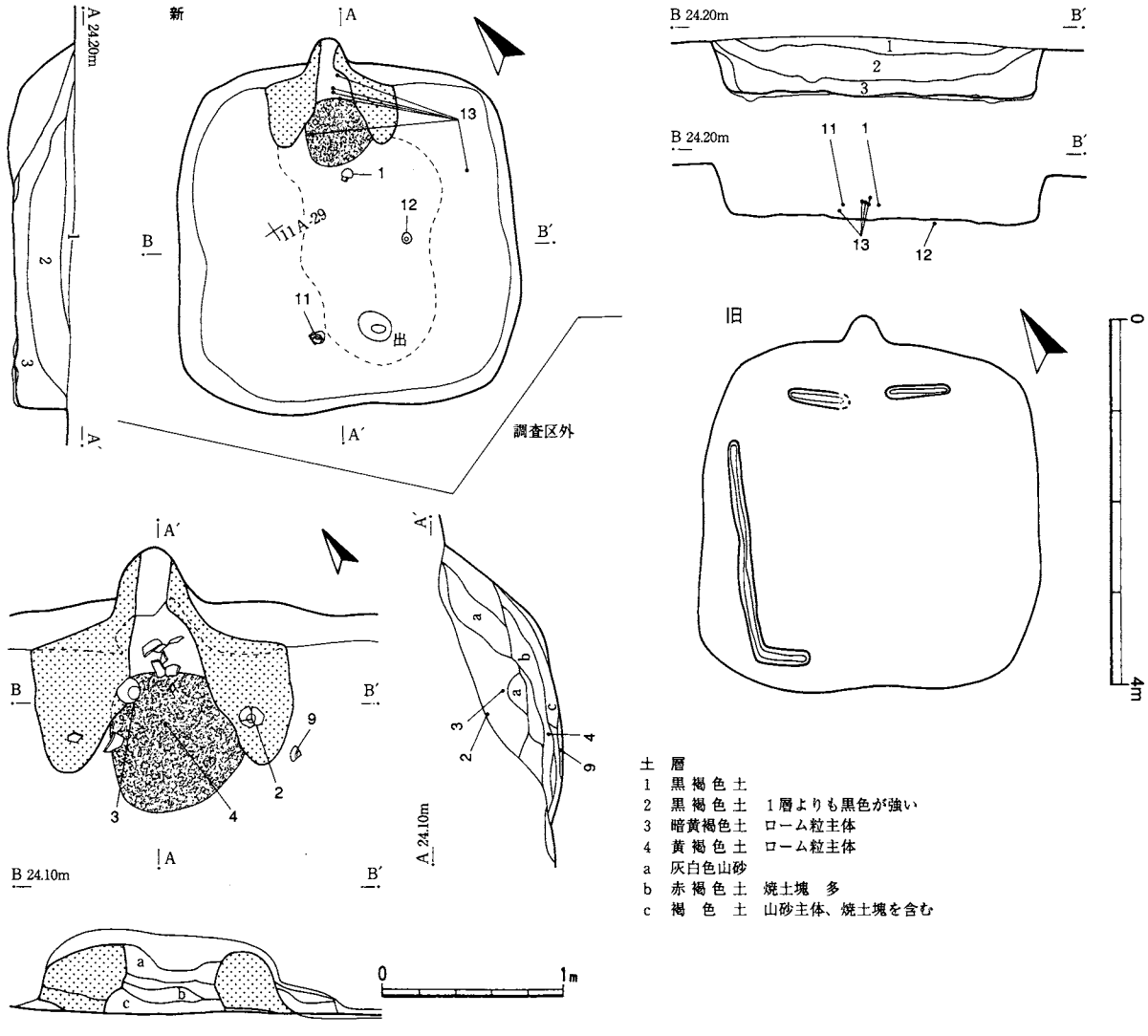
遺物量はやや少ないが，図示した土器の遺存はおおむね良好である。土師器甕4・5はカマド内からの出土で，5の胴部下部・底部破片は正位である。須恵器坏1は中央北壁寄りのほぼ床面から正位で出土した。土師器坏2・3も正位だが，2は床面からやや高い位置で，3は上層から出土した。破片は中央部から散在的に出土し，壁際は少ない。

SI108（第126図，図版35）

調査区南西部に位置する。床面下から壁溝の一部が見つかり，建て替えて拡張された竪穴住居である。建て替え後の竪穴住居について記述する。平面形はやや隅の丸い方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南西壁側右寄りに位置する。規模の割に壁からやや離れ，中央に寄っている。壁溝は巡っていない。床面は硬化面がカマド前から出入り口部にかけての中央部に見られ，北西壁側・南東壁側はあまり硬化していない。覆土は1・2層が黒褐色土であるのに対し，3層以下はローム粒を主体とする（暗）黄褐色土層であり，非常に対照的である。3層以下は埋め戻された土層で，1・2層は自然堆積土層であると思われる。

カマドは北東壁やや左寄りに位置し，方形プランからの突出は少ない。構築材は山砂が主であるが，基底部はローム塊を含む。右袖はロームが少なく，左袖は多い。火床部はあまり赤色化していない。

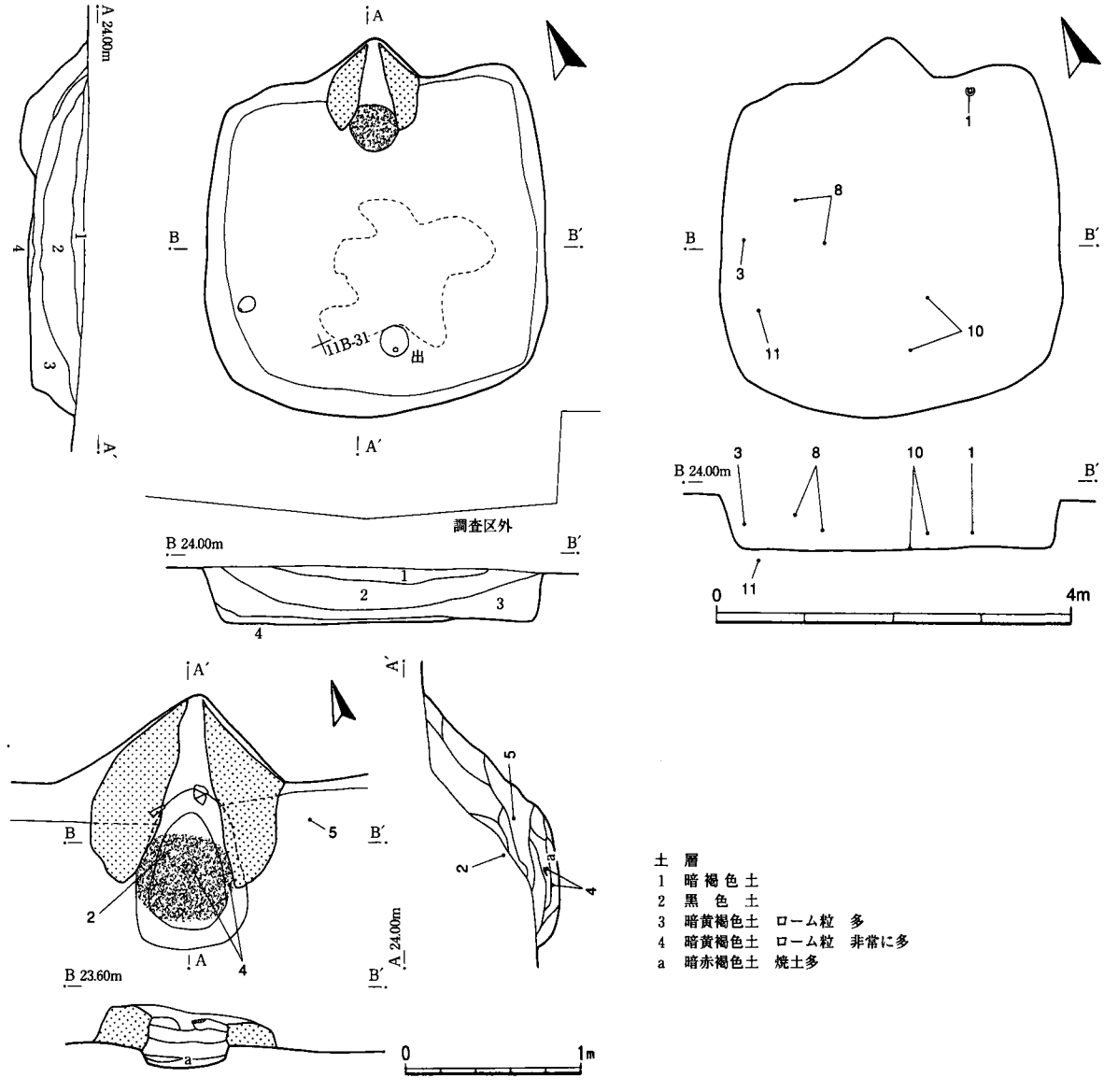
建て替え後の床面下に見つかった壁溝は半分程度で，北西壁・西隅及び北東壁の一部である。深さは数



第126図　SI108

cm程度で，本来は全周かもしれないが，南側は残っていない。建て替え以前の竪穴住居に伴う施設は他に見つかっていない。出入り口ピットは変わっていない可能性はあるが，やや右に寄りすぎるように思われる。床面はローム粒を主とする土で薄く埋め戻され，建て替え後の床面が形成されている。

遺物はカマド周辺を主として，遺存の良い個体の出土が目立つ。破片量はあまり多くない。土師器坏2・3はカマドの上層であるが，遺存が良く，倒位での出土である。また，土師器坏1はカマド前から正位で出土した。土師器坏4はカマド内下層から出土しているが，上層出土の平面位置不明の破片と接合している。土師器皿9は右袖脇の床面から倒位で出土しているが，これも上層出土の平面位置不明の破片と接合している。須恵器甑13はカマド内の火床部後方の位置を主体に出土した。その他では，土師器甕12が中央やや右寄りの床面から倒位で出土し，土師器高台付皿11が出入り口ピットの左側で，床面からやや高い位置から倒位で出土した。



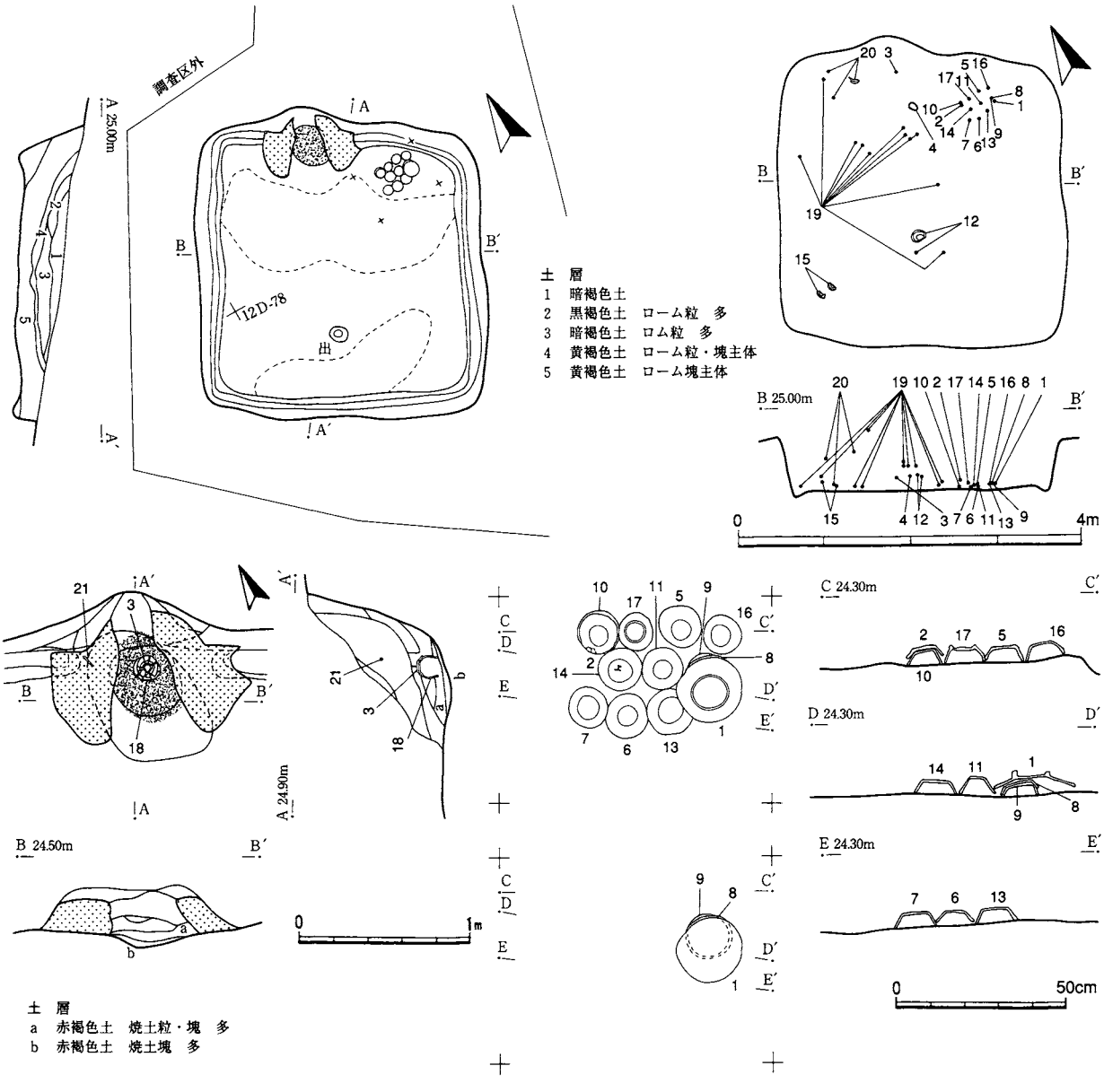
第127図 SI110

SI110（第127図，図版36）

調査区南西部に位置する。平面形は方形であるが，南西隅から南壁にかけて丸みがあるなど，やや不整である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁側中央やや右寄りに位置する。壁溝は巡っていない。床面は硬化面が出入り口ピットから中央部に見られるが，あまり広くない。西壁際南寄りの床面に深さ41cmのピットがあるが，性格不明である。内側に傾き，底部に向かって細くなるので，木根であるように思われる。覆土は1・2層が暗褐色土・黒色土で，3・4層はローム粒を主体とする（暗）黄褐色土層である。近くにある108同様，3層以下は埋め戻された土層で，1・2層は自然堆積土層であると思われる。

カマドは北壁中央に位置する。構築材は山砂が主体である。火床部下はかなり深く掘られている。

遺物量は多いとも少ないともいえない中程度の量である。平面的には四隅が少なく，それ以外は満遍なく分布する。遺存の良い遺物は少なく，土師器坏1と仏鉢形土器10のみである。1はカマド右脇から正位



第128図　SI113

で出土し，10は出入り口ピット付近で出土した。ともに床面からやや高い位置であるが，埋め戻された3層中からの出土と思われる。遺存はあまり良くないが土師器坏2・4・土師器皿5がカマド内から出土している。

SI113（第128図，巻頭図版，図版36）

調査区南部に位置する。平面形は方形で，4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南西壁側中央に位置する。出入り口ピットとしては壁からかなり離れ，中央寄りに位置する。壁溝は全周する。床面は硬化面がカマドのある北東壁側半分と出入り口ピットと南西壁の間に分かれて見られ，やや不整な形である。覆土は1～3層が暗褐色土・黒褐色土で，4・5層がローム粒・塊を主体とする黄褐色土層である。1～3層もロームを含むが，土層の色調は4・5層と極めて対照的である。108・110同様，4層以下は埋

め戻された土層と思われる。1～3層が自然堆積か人為的堆積かは，2・3層がローム粒を多く含むので，断定が難しい。

カマドは北東壁左寄りに位置する。火床部上に支脚に転用した土器が残っており，下部の遺存は良好である。転用の支脚は土器2個体を伏せて重ねたもので，下は小型の土師器甕（18），上は土師器坏（3）である。ともに熱を強く受けており，甕は赤褐色に，坏は灰褐色に変色している。坏は器面が荒れているが剥離は少ない。甕・坏とも少量の山砂が付着しており，山砂に覆われていたことが考えられる。甕の内部に山砂が充填されていたかどうかは判然としない。構築材は山砂が主体である。カマド上部は天井部及び袖上部が崩れた山砂が厚く堆積する。

遺物は，カマド右脇の床面上で，13点の完形の土器群がまとまって出土したことが注目される。13点の土器はすべて伏せた状態で出土し，一部は2枚重ね，3枚重ねとなっている。そのまとまりは長方形状であり，盆のようなものの上に置かれていたものと思われる。以下，盆が存在したものと仮定して記述する。盆の大きさは最小の場合，長辺50数cm，短辺40cm程度である。北東壁側床面のラインに対して平行ではなく，斜めに置かれている。いつもこのような置かれ方をするのかどうかは事例の集成を待たなければ断定できないが，本遺構の場合，右脇の床面が広くなっている。土器などを置く場所としてプランの設計段階から用意されていたと考えられる。土器群は盆の長辺に平行して3列，一部2列に置かれている。床面に接して出土しているのは10点で，出土状況から，盆の上には坏ならば11点くらいまで置けるものと思われる。なお，伏せた土器すべての内部に土がぎっしり詰まっていた。伏せた状態でそのまま埋め戻された竪穴住居であるにもかかわらず，なぜ土が入り込むのか疑問として残る。

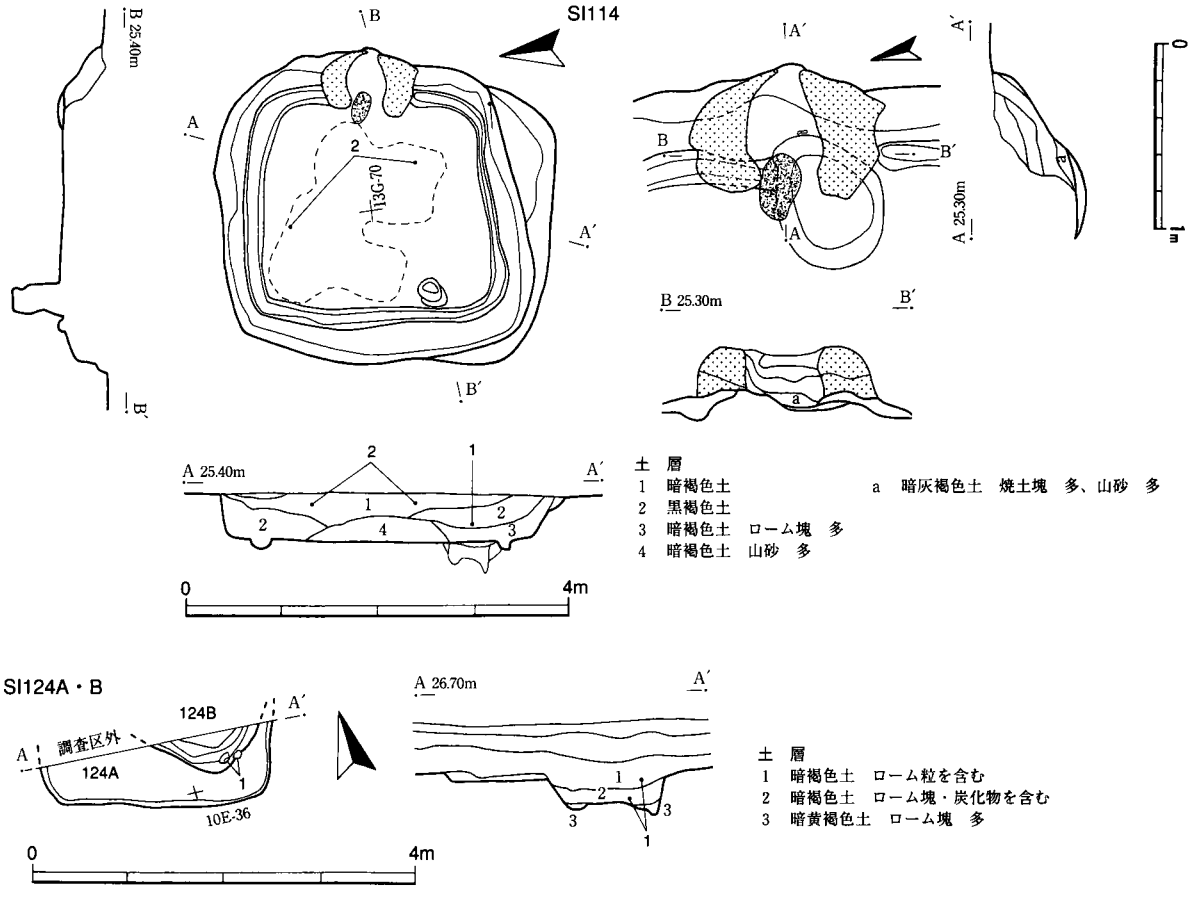
この土器群については，本竪穴住居居住者が使用していたものを遺棄したと考えることができる。土器は通常このような状態で保管されていた可能性があるが，この土器群の中には「上」他の墨書と口縁部の打ち欠きが施されたものがある。人が使用しない器であることを明示して遺棄していったものと考える。カマド火床部上の土器はカマド祭祀に伴う遺物の可能性があるが，支脚の方が妥当であると考える。

その他の遺物では，土師器坏4・12・15も完形ないしほぼ完形である。4はカマド前方からやや斜めであるが正位で出土した。12は中央部，15は西隅寄りで，ともに割れてやや傾いているが正位で出土した。以上の土器群は4・5層の出土である。須恵器甑19と土師器甑20はカマド付近を主体に出土しているが，上・中層の破片が多い。図示しない遺物の破片量は少なく，南東壁側と南西壁側は希薄である。

SI114（第129図，図版37）

調査区南部に位置する。竪穴住居としては最も南に位置する。建て替えられた遺構であり，建て替えに際して，規模の拡張及びカマドの作り替えを行っている。また，やや不明瞭であるが，南壁側で竪穴住居の一部と思われる遺構が重複している。建て替えが一度では無かったのかもしれない。あるいは拡張した竪穴住居に伴う付帯施設の可能性も考えられるが，やや不自然であるように思われる。

建て替え後の平面形は方形であるが，かなり不整であり，壁は全体に丸みがある。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは西壁側右寄りに位置する。他の竪穴住居と比べかなり隅に寄っており，やや疑問もあるが，出入り口ピットと理解しておきたい。形状から建て替えに伴って掘り直しているように思われる。建て替え前後で位置が変わらなかった可能性が考えられる。壁溝は全周するが，建て替え前の住居に伴うものである。プランはやや台形的な方形である。壁溝外の床面は壁際がやや高いが，壁溝が埋ま



第129図　SI114・124A・124B

っていれば壁溝内の床面にはなだらかに続く。建て替え後の住居には壁溝が巡らない。床面は硬化面が壁溝内で中央部中心に見られる。床面下は一部深く掘られ，ロームを主体とする土が充填されて床面が形成されている。

南壁に重複した遺構の底面（最初の竪穴住居の床面？）は確認面からの深さが23cm，床面からの高さは24cmで，比較的平坦である。

カマドは建て替えの前後とも東壁中央に位置する。ただし，新カマドは旧カマドよりもやや左に寄っている。新カマドは拡張後の竪穴プランからはほとんど突出していない。構築材は山砂を主体とするが，基底部はローム塊を多く含む。袖の前側は旧竪穴の壁溝と火床部を埋め戻して，その上に構築されている。新カマド右袖前側の底面にある窪みは，旧カマドの火床部と考えられる。ただし，火熱を受けた痕跡から火床部の中心はこの窪みの奥側にあったと思われる。

遺物量はやや少なく，特定の偏りはない。図示した須恵器坏１・２は遺存があまり良くなく，上・中層の出土である。

SI124A（第129図，図版37）

調査区南部に位置する。別の竪穴住居であるSI124Bと重複していると思われるが，一部分の調査であるため様相が不明瞭で，新旧関係も不明である。平面形は方形と思われるが，南壁と東西壁の一部を確認できたのみである。確認面から床面まで浅く，規模に不安がある。カマド・出入り口ピットの位置，主柱穴

の有無等は不明である。壁溝は巡っていないと思われる。遺物はごく少量の破片が出土していると思われるが，124Bとの区別は不明であり，図化したものもない。

SI124B（第129図，図版37）

調査区南部に位置する。SI124Aと重複するが，新旧関係は不明である。南隅の部分がわずかに調査できただけであるが，本遺構が竪穴住居であることは確実である。平面形は方形と思われる。壁の方向は北から約45度程度の傾きである。南隅部にはしっかりとした壁溝が巡り，調査区外の南東壁・南西壁に続いていく。カマド・出入り口ピットの位置，主柱穴の有無等は不明である。遺物は土師器坏１が出土した。半分に割れているが接合で完形となるものである。破片の１点は壁溝上から口縁を上にかなり傾いて出土し，もう１点はプラン上端で124Aの床面にかかって正位で出土した。

２．掘立柱建物（第36表）

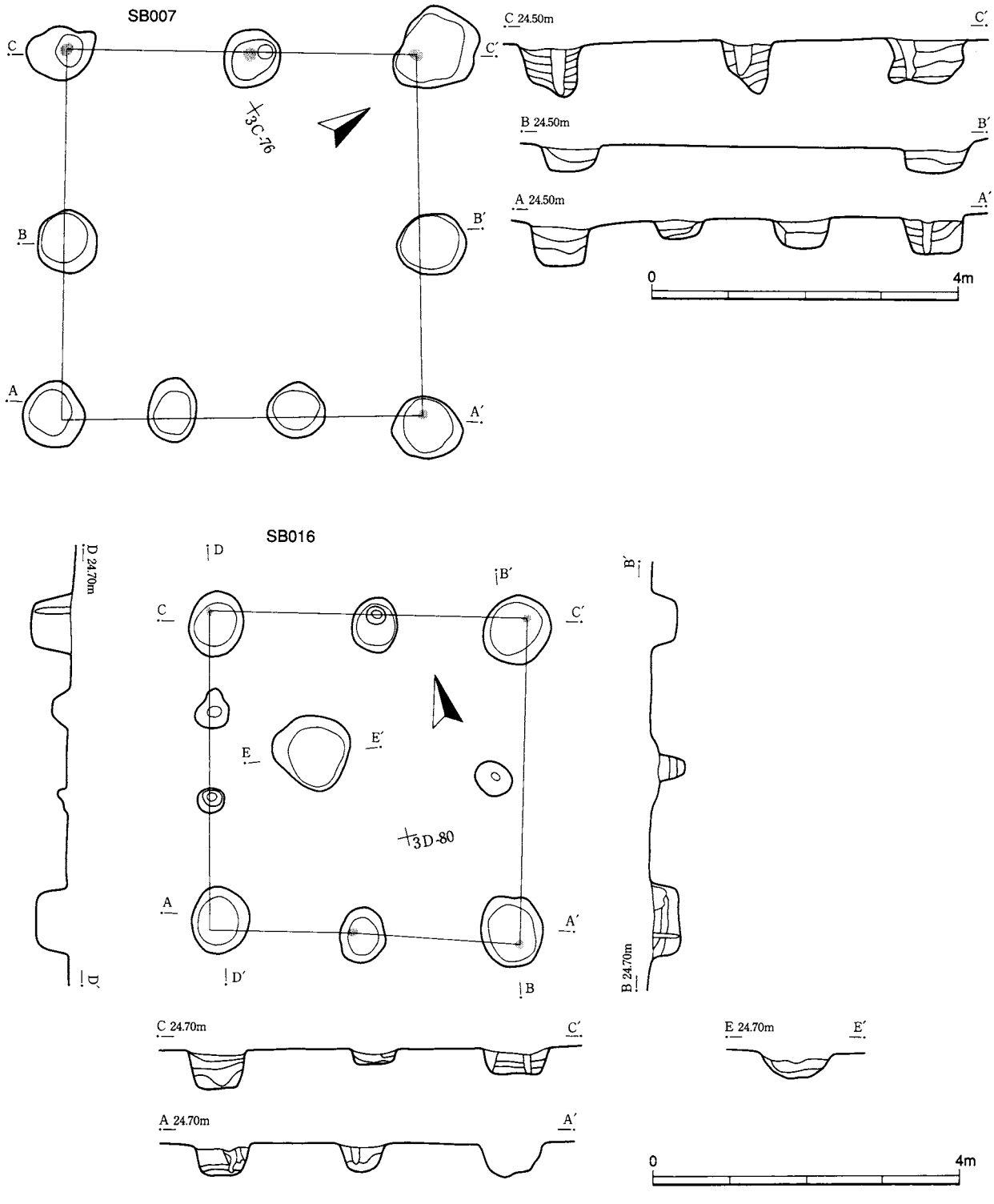
奈良・平安時代の掘立柱建物は調査区内では17棟見つかった。規模や主軸方位等の計測値については観察表に記載したので，以下の記述では省略する。

SB007（第130図，図版37）

調査区北部に位置する。基本的に２間×２間の側柱構造であるが，南東辺が３間である。四隅の柱穴は他よりも深さがあり，しっかりしている。また，柱痕も南隅の柱穴を除いて見つかった。梁行中央間の柱穴は四隅よりも浅いが柱筋が通っており，棟方向と考えられる。また，南東辺の間の柱穴も浅い。特に南隅に近い柱穴は最も浅く，出入り口施設に関わる柱穴の可能性が考えられる。柱痕部分の土層はロームをあまり多く含まない黒褐色土で，しまりがない。柱の周りの埋土は多少のローム粒・塊を含む土層で，ロームの含有量等の違いで色調が異なる。最下層を除いては，下層はロームがやや少なく，中・上層はロームが多い傾向がうかがえる。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。

SB016（第130図，図版37）

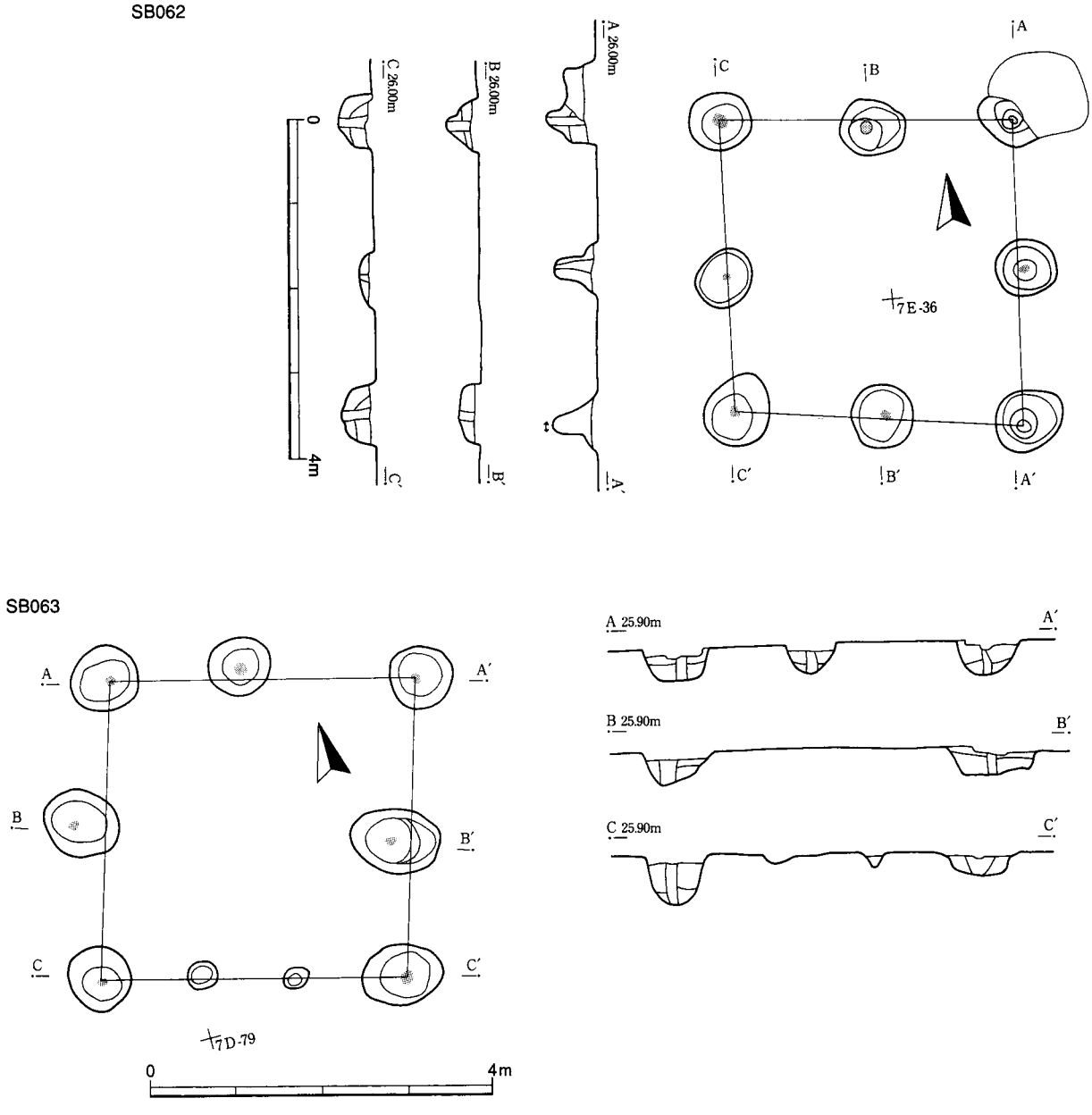
調査区北部に位置する。SI002からは数m西側に離れる程度で，非常に近い位置にある。プランの向きも似ている。SB007同様，基本的に２間×２間の側柱構造であるが，西辺が３間である。四隅の柱穴はしっかりしており，他よりも大きく，やや深いものである。また，柱痕も南西隅がやや不明瞭である以外は見つかった。梁行中央間の柱穴は四隅よりもやや浅いが柱筋が通っており，棟方向と考えられる。西辺の間の２穴は浅い。特に南西隅に近い柱穴は非常に浅く，出入り口施設に関わる可能性が考えられる。もう１穴は浅いものの，柱の当たりが見られる。東辺の中央の柱穴も柱の当たりが見られる。平面位置は中央に寄っており，柱筋が直線状にならない。プランの中にある大きな土坑は深さ31cmである。伴うものかも含め，性格不明である。柱痕部分の土層はローム粒を若干含む軟質の黒褐色土である。周りの埋土は最も遺存の良い柱穴を見ると，上層がローム粒・塊を多く含む暗褐色土，中層が黒色土，下層がローム粒を多く含む暗黄褐色土で，版築状である。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。



第130図　SB007・016

SB062（第131図，図版38）

調査区中央部に位置する。北側に接近してSI052があり，西側にも数mの位置にI044が位置するなど北西側に竪穴住居群が多い。2間×2間の側柱構造である。西辺中央と南辺中央の柱穴が，他と比べてかなり浅い。柱痕は南東隅の柱穴を除いて，確認面で平面的に見つかった。また，土層断面でも柱状に把握でき，柱穴の底面では柱の当たりも認められた。南東隅の柱穴も確認面・土層断面では明瞭でなかったが，



第131図　SB062・063

柱の当たりは明瞭であった。柱痕部分の土層はローム粒をほとんど含まない軟質の黒褐色土である。周りの埋土もロームの混入が少なく，柱痕と土層の差は少なかったが，柱の位置はほぼ間違いがない。遺物の出土量は少ない。体部外面に墨書のある土師器坏小片1点を図示した。南西隅の柱穴からの出土である。

SB063（第131図，図版38）

調査区中央部に位置する。周囲に竪穴住居や掘立柱住居が多い。基本的に2間×2間の側柱構造であるが，南辺が3間である。南辺隅間の2穴は極端に浅く，出入り口施設に関わる可能性が考えられる。他の柱穴は南東隅がやや浅いが，極端に浅くはない。逆に南西隅の柱穴はやや深い。柱痕も南辺隅間の2穴を除いて，把握することができた。西辺は中央の柱穴が外側に出ており，逆に東辺中央の柱穴はやや内側に入っている。柱痕部分の土層は黒褐色土で，周りの埋土はローム粒・塊を若干含む暗褐色土である。遺物

の出土量は少なく，図示したものもない。

SB064A（第132図，図版38）

調査区中央部に位置する。南側がSB064Bと重複する。南側にSI051，SI058，南東にSB063が所在する。基本的に2間×2間の側柱構造であるが，南辺中央で柱穴が見つからなかった。SB063同様，南辺隅間に2穴存在したが，浅いために削平されてしまったものと思われる。四隅の柱穴は規模がやや大きく深いのに対し，中央の柱穴は浅い。特に東辺中央の柱穴は確認面から9cmと極端に浅い。柱痕がいくつかの柱穴で見られる。柱痕部分の土層はローム粒をほとんど含まない軟質の黒褐色土である。周りの埋土は上層がローム粒をやや多く含む暗褐色土，下層がローム粒を若干含む暗褐色土である。遺物の出土量は少ない。底部外面に墨書のある土師器坏小片1点を図示した。どの柱穴から出土したか，不明である。

SB064B（第132図，図版38）

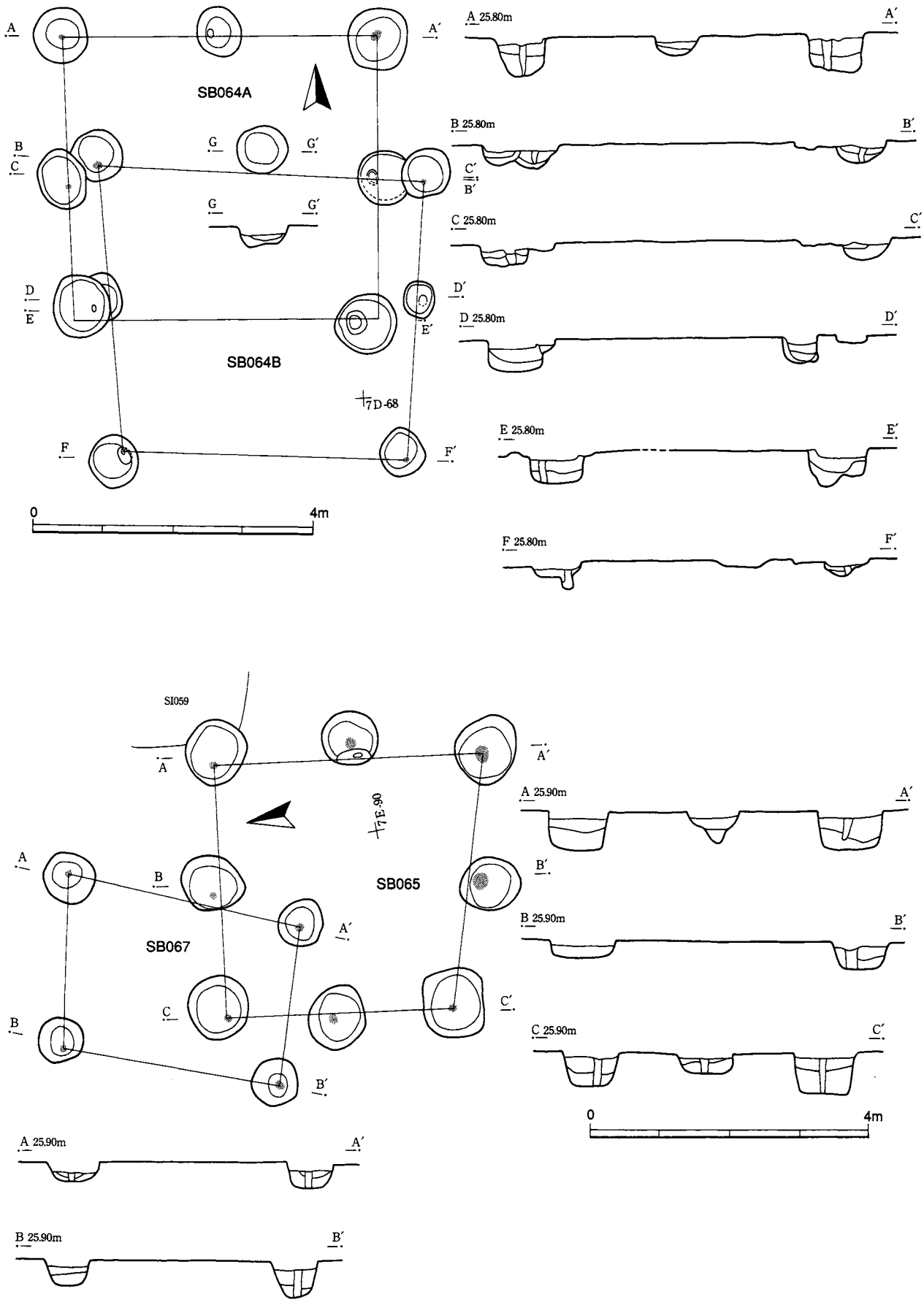
調査区中央部に位置する。北側がSB064Aと重複する。基本的に2間×2間の側柱構造であるが，SB064A同様，南辺中央で柱穴が見つからなかった。SB062，SB063同様，本来は南辺隅間に2穴存在したものと思われる。柱穴は四隅もそれほど深くはないが，東辺中央の柱穴が確認面から12cmと極端に浅く，この点でSB064Aと類似する。SB064AとSB064Bは似た構造，同一の機能であったと思われる。建て替えを考えても良いかもしれない。土層断面からは，SB064Aの方が新しいように思われる。北辺中央の柱穴はやや外側に出ている。柱痕が四隅の柱穴で見られる。柱痕を結ぶラインを北を上にして見ると，逆台形である。柱痕部分の土層はローム粒を少し含む軟質の黒褐色土である。周りの埋土は上層がローム粒を（やや）多く含む暗褐色土，下層がローム粒を若干含む暗褐色土である。遺物の出土量は少ない。体部外面に墨書のある土師器坏小片1点を図示した。どの柱穴から出土したか，不明である。

SB065（第132図，図版40）

調査区中央部に位置する。北西側でSB067と重複する。また，北東隅の柱穴がSI059と重複する。ともに新旧関係は不明である。2間×2間の側柱構造である。どちらが桁行で，どちらが梁行か判断が難しい。東辺が3.86mと最も長いので桁行方向としたが，逆に西辺は最も短い。近くにあるSB063等から，逆の可能性も十分に考えられる。プランは整った方形ではない。四隅の柱穴が規模が大きく，深いのに対して，中央の柱穴は浅く，特に北辺中央は16cmと極端に浅い。柱痕はすべての柱穴で見つかったが，土層断面では明瞭でなかった柱穴もある。柱痕部分の土層はローム粒を若干含む軟質の黒褐色土である。周りの埋土は，上層がローム粒・塊をやや多く含む暗褐色土，下層がローム粒を若干含む暗褐色土である。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。

SB066（第133図，図版40）

調査区中央部に位置する。南西側でSI061と重複する。調査時の所見ではSB066がSI061を切っている。ただし，SB066の存在に気付かないまま，SI061を先行して調査したため，重複した部分は失われている。2間×2間の側柱構造である。方形プランであるが，東辺がやや長いため桁行方向とした。四隅の柱穴は規模が大きく，45cm～60cmの深さであるのに対して，中央の柱穴は20cm前後と浅く，差が大きい。柱痕は



第132図　SB064A・064B・065・067

北東隅，南東隅の柱穴で見つかったが，他は不明瞭である。柱痕部分の土層はローム粒を若干含む軟質の黒褐色土である。周りの埋土は，上層がローム粒をやや多く含む暗褐色土，下層がローム粒・塊を若干含む暗褐色土である。遺物の出土量は少ない。体部外面に墨書のある土師器坏小片1点を図示した。北東隅の柱穴からの出土である。

SB067（第132図，図版40）

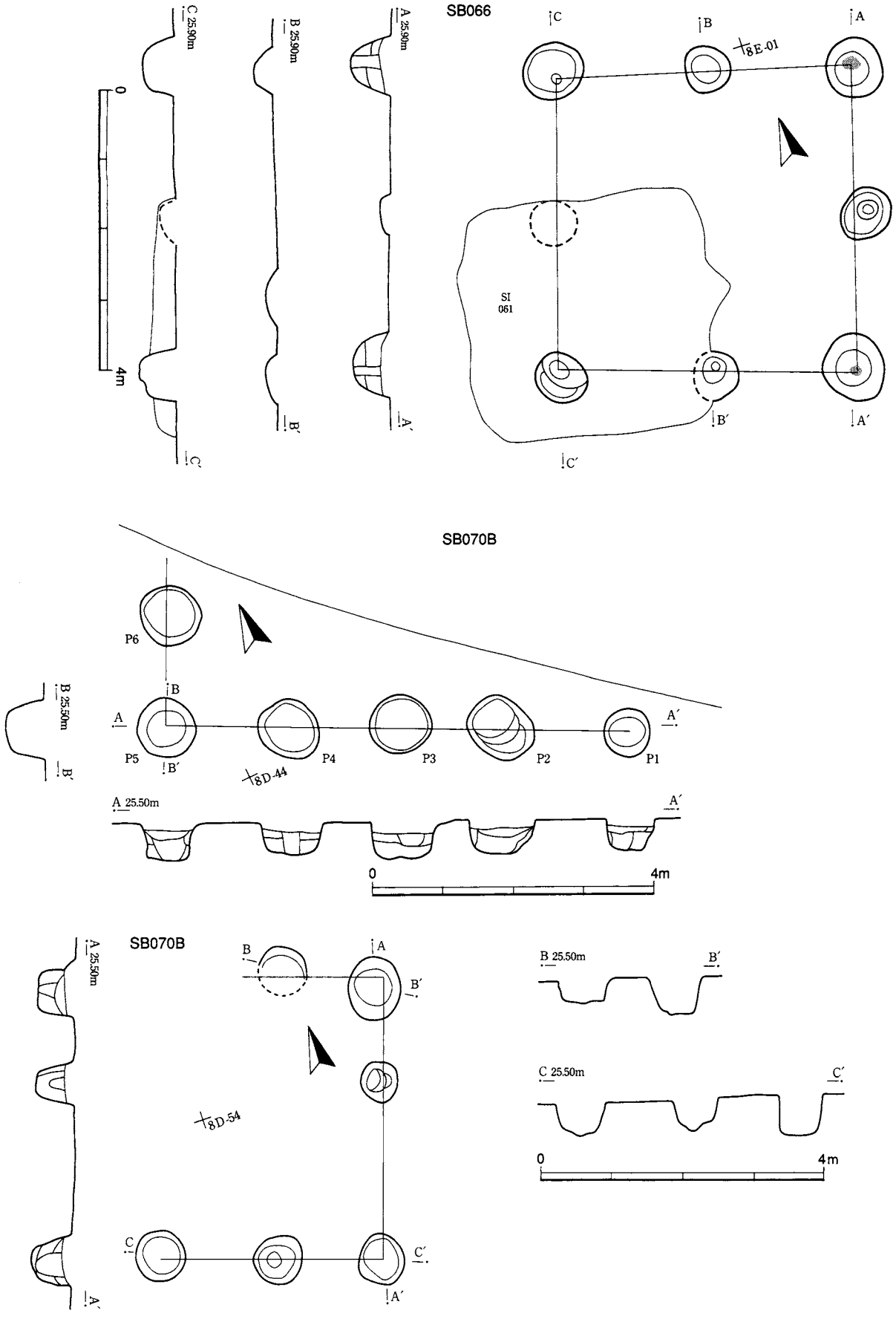
調査区中央部に位置する。南側でSB065と重複する。新旧関係は不明である。1間×1間の側柱構造である。プランは平行四辺形的な形態である。柱痕はすべての柱穴で見つかったが，北西隅の柱穴は土層断面では明瞭でなかった。柱痕部分の土層はローム粒を僅かに含む黒褐色土で，ややしまりがある。周りの埋土は，上層がローム粒を少し含む暗褐色土，下層がローム粒を多く含む暗褐色土で，ともにしまりがある。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。

SB070A（第133図，図版39）

調査区中央部に位置する。北側がすぐ調査区外となるので，見つかった柱穴は一部分である。南側にSI069，SB070B，南東にSB071が所在する。規格は4間×2間以上で，側柱構造と思われる。やや大型の掘立柱建物である。近くのSB071も庇付きの建物であり，以北の掘立柱建物群と比べ，高規格な建物が隣接している。隅の柱穴と中間の柱穴の深さに大きな差はない。柱痕は平面的には不明瞭であるが，土層断面では柱痕にあたる土層があると思われる。柱痕と思われる土層は，ローム粒・塊を含む暗褐色土である。周りの土層は概ね2層であるが，下層の方が上層よりもローム粒・塊の含有が多い場合と，黒色味が強い場合の双方がある。ローム粒・塊の混入が少なく，柱痕との土層の差は少なかったが，柱の位置はほぼ間違いのないところである。遺物の出土量は少ないが，紡錘車が1点，P2から出土した。また，体部に墨書のある土師器坏片が2点出土している。土師器坏1はP2から出土し，土師器坏2はP2・P3・P4から出土した破片の接合個体である。

SB070B（第133図，図版39）

調査区中央部に位置する。北西側でSI069と重複している影響のためか，西辺及び北辺西側の柱穴が見つからない。SI069との新旧関係は不明である。規格は桁行2間？（3間？）×梁行2間？の側柱構造と思われるが，若干不明瞭である。南北方向を桁行としておく。東辺の柱間寸法が南側で2.5m，北側で1.34mであり，2.5mの間にもう一つ柱穴が存在しても良いと思われるが，見つからなかった。浅い柱穴であるのかもしれない。南辺の柱間が1.52mと1.62mで，柱間間隔がやや不整である。隅の柱穴と中間の柱穴を比べると，北辺・南辺は深さの差がある。深さの差がない南辺西側（C側）の柱穴は隅の柱穴ではないのかもしれない。東辺は深さの差がないが，やや規模が小さい。柱痕は平面的には不明瞭であるが，土層断面では柱痕にあたる土層があると思われる。柱痕と思われる土層は，ローム粒を含むやや軟質の暗褐色土である。周りの土層はローム粒・塊を含む暗黄褐色土層である。上層はやや黒色味が強く，ローム粒が細かい。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。



第133図　SB066・070A・070B

SB071（第134図，図版39）

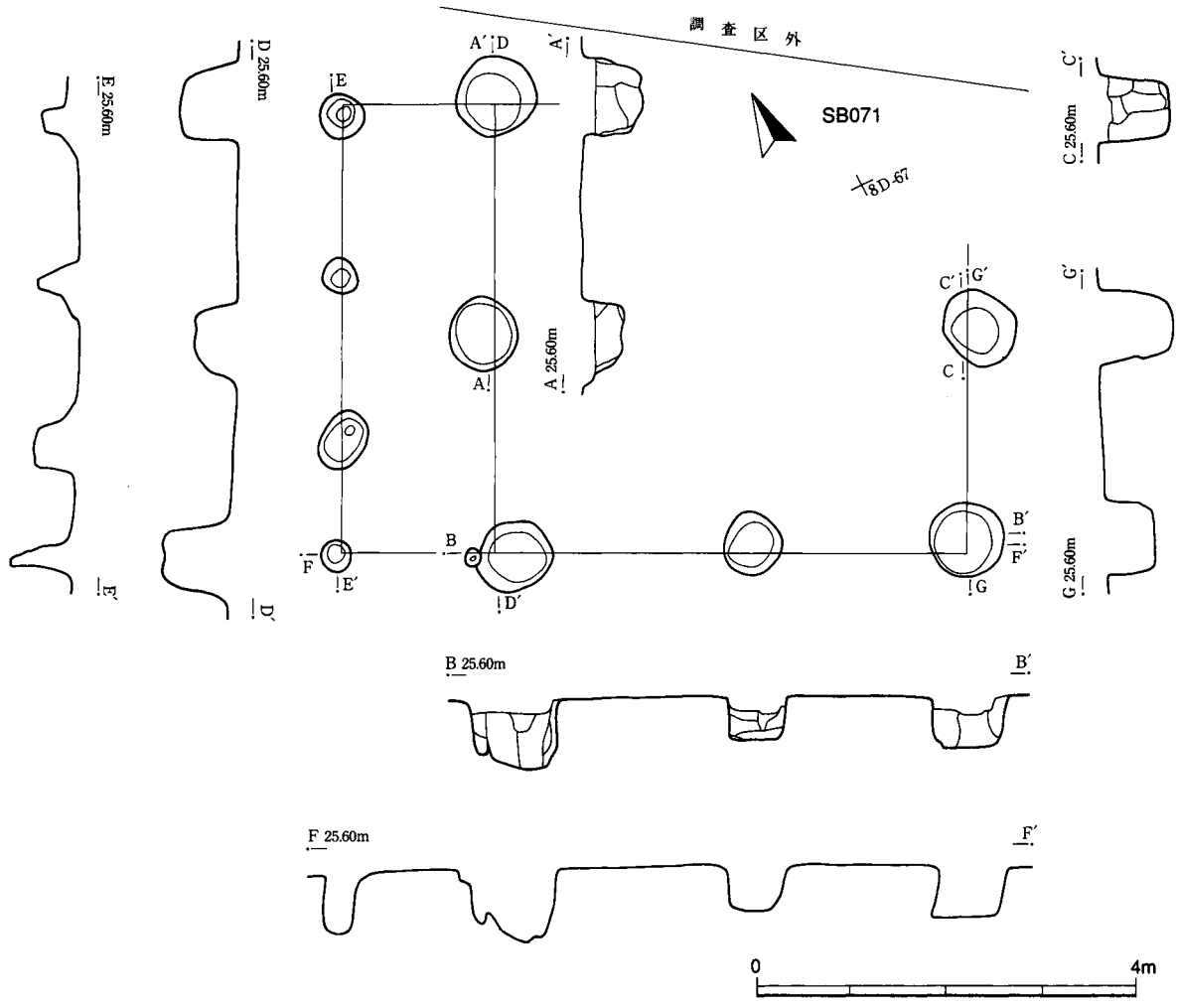
調査区中央部に位置する。西辺に庇の付く側柱構造の建物である。全体で桁行2間×梁行3間，身舎部分で2間×2間であるが，北東側の柱穴が攪乱の影響で，見つからなかった。庇部分は3間である。身舎部分隅の柱穴が概して深く，規模もやや大きいのに対し，身舎西辺中間・南辺中間の柱穴はやや浅い。しかし，東辺中間の柱穴はむしろ隅の柱穴よりも深さがある。庇部分の柱穴は規模が小さく，深さも南隅を除いて，身舎西辺中央・南辺中央の柱穴と同程度である。南隅の柱穴は身舎隅の柱穴と同等の深さである。柱痕は平面的には不明瞭であるが，土層断面では柱痕にあたる土層があると思われる。柱痕と思われる土層は，ローム粒を含む暗褐色土である。また，身舎部分南西隅の柱穴は山砂の堆積が見られる。柱痕の周り及び柱痕の見られない柱穴は，ロームの含まれ方によってやや細かく分かれる。全体的にはロームは斑点状に含まれる傾向がうかがえる。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。

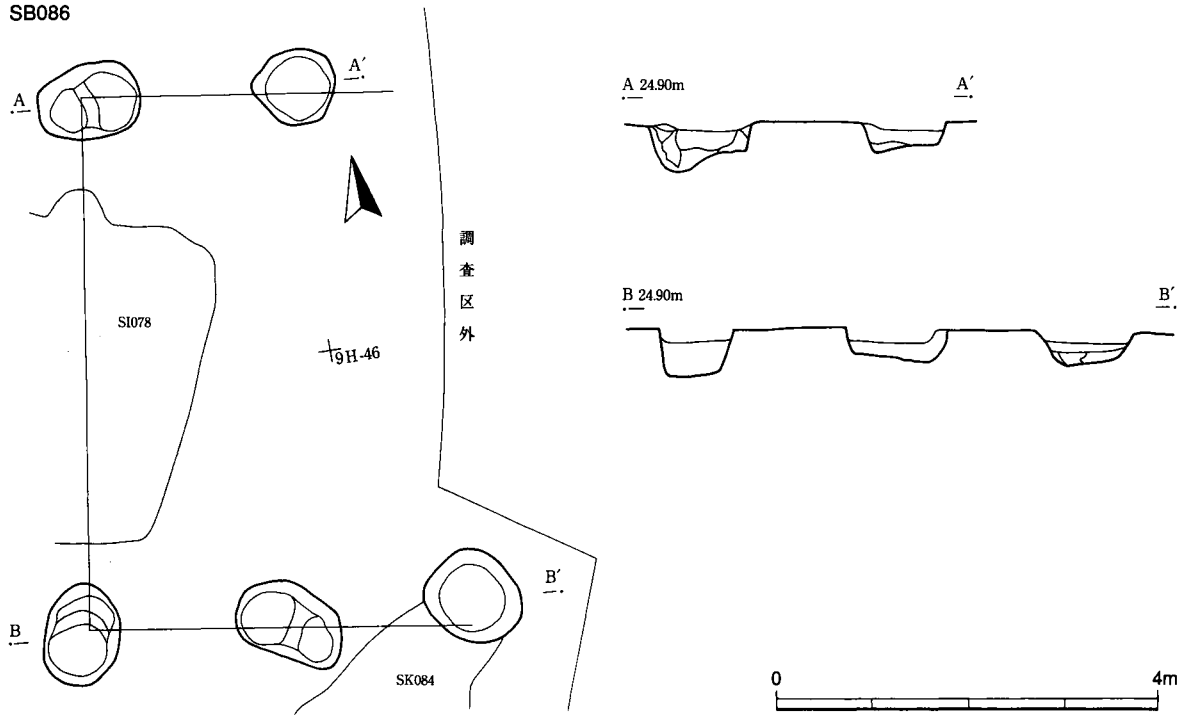
SB086（第134図，図版39）

調査区東部に位置する。桁行3間×梁行2間以上と思われる側柱構造の建物である。見つかった柱穴が少なく，桁行・梁行の区別がやや不明瞭である。東辺は調査区外に入り，柱穴は未検出である。また，西辺中間の柱穴はSI078と重複して，失われている。SI078との新旧関係は不明である。また，南辺東側が縄文時代の炉穴であるSK084と重複しており，その上に建てられている。西辺中間の柱穴が2箇所か1箇所か判断が難しい。SI078の様相を見ると，規模の大きい深い柱穴があるとは思われない。浅い柱穴であるならば，2箇所ではないかと思われる。また，この考えが妥当であれば，西辺側が桁行となる。隅の柱穴は中間の柱穴よりも深い。南辺東側の柱穴はやや浅いので，中間の柱穴かもしれない。断定はできないが，梁行も3間である可能性が考えられる。柱痕は平面的には不明で，土層断面でも不明瞭である。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土を主とするが，ロームの含有の違いで分層される柱穴もある。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。

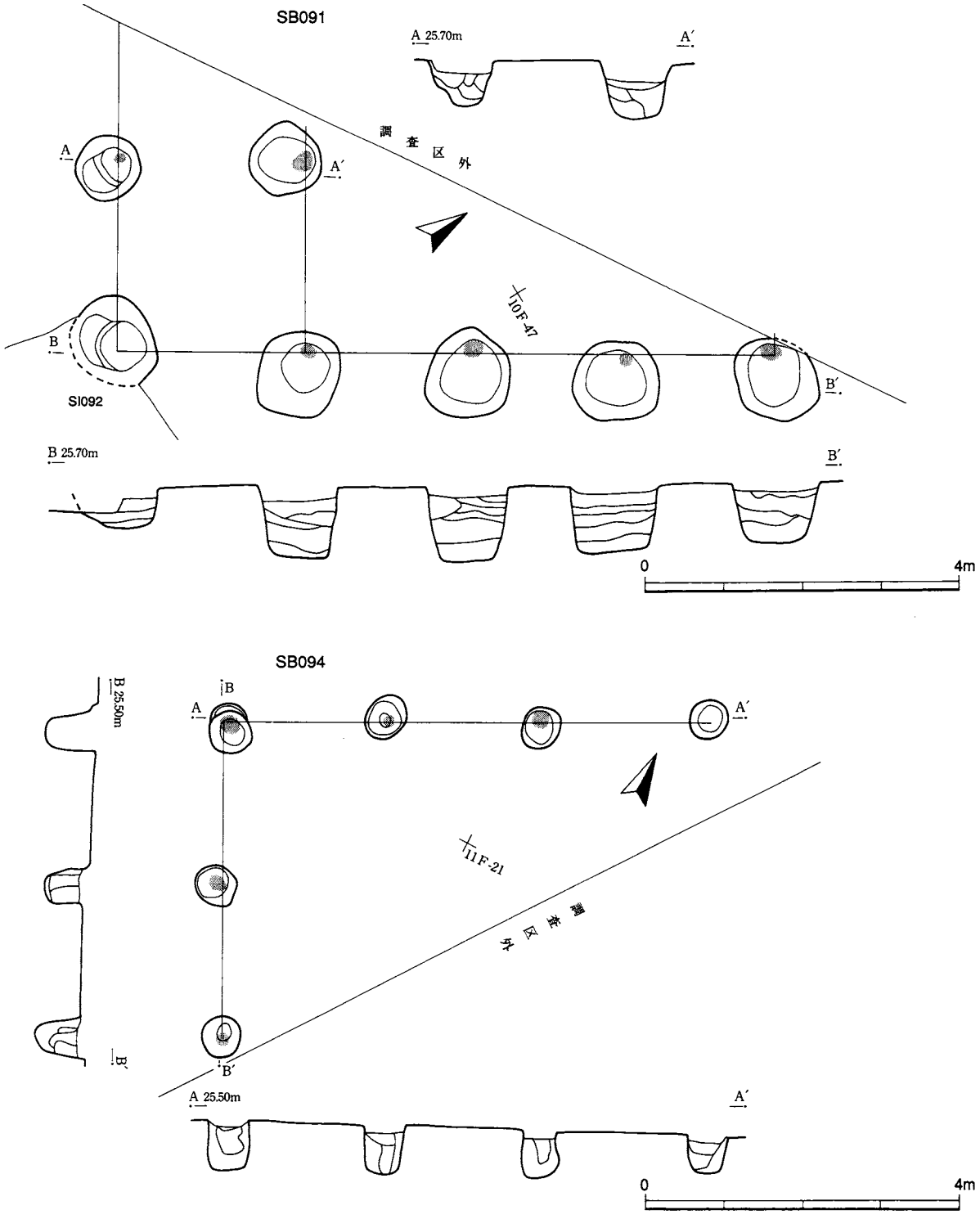
SB091（第135図，図版39）

調査区南部に位置する。柱穴の一つがSI092と重複するが，新旧関係は不明である。北西側が調査区外のため，見つかった柱穴は一部である。南辺に庇の付く側柱構造の建物である。全体で桁行は4間（以上？）である。柱穴がしっかりしているので，5間以上の可能性もあるかもしれないが，そうなるとかなり長大な建物である。梁行は見つかった柱穴は身舎部分南辺，庇部分南辺とも2箇所である。現状では1間であるが，1間ではバランスが悪く，少なくとも2間以上であろう。身舎部分東辺の柱穴は概して深く，規模が大きい。南辺中間の柱穴もかなり深いが，東辺の柱穴と比べるとやや浅く，平面規模もやや小さい。庇を支える柱穴はさらに浅いが，建物の規模が大きいので他の掘立柱建物と比べると深い方である。柱痕は1箇所を除いて見つかった。不明は庇部分南東隅の柱穴で，SI092と重複している影響であろうか。見つかった柱痕は全て内側に寄っている。柱痕の周りの埋土は柱穴によって若干の違いがあるが，傾向はうかがえる。おおよそ5層に分かれ，上から1層は暗褐色土，2層は黄褐色土，3層が暗褐色土，4層が暗黄褐色土，5層は黄褐色土である。いずれもローム粒・塊を含むが，2層はローム塊主体である。5層もローム塊が非常に多いが，若干暗褐色土も含まれる。4層もローム塊が多いが，色調はやや暗い。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。





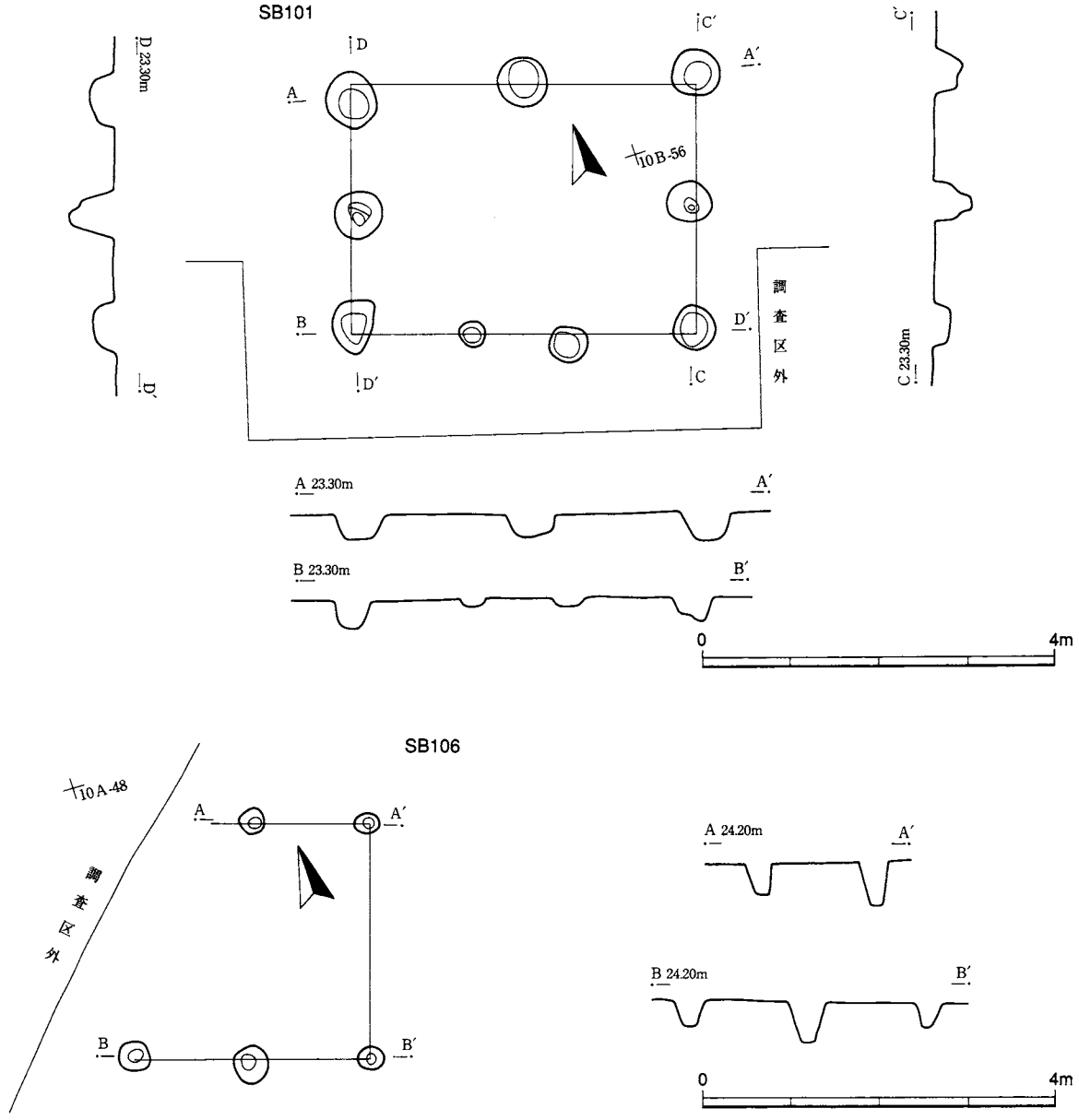
第134図　SB071・086



第135図　SB091・094

SB094（第135図，図版40）

調査区南部に位置する。南東側が調査区外のため，見つかった柱穴は一部である。桁行が3間以上，梁行が2間以上の側柱構造である。西隅の柱穴が最も深いが，他の柱穴との差は少ない。全体に深さの割りに平面規模が小さく，隅とそれ以外の柱穴の差もない。柱痕は1箇所を除いて見つかった。柱筋は直線的で，北西辺と南西辺もほぼ直角であるなど，整然とした建物である。柱痕部分の土層はローム粒・塊を僅



第136図　SB101・106

かに含む黒（灰）褐色土である。柱痕の周りの埋土はローム粒・塊を含む暗黄褐色土である。遺物の出土は無かった。

SB101（第136図，図版41）

調査区南西部に位置する。基本的に2間×2間の側柱構造であるが，南辺が3間である。南辺の中間の2穴は深さが10cm程度であり，他と比べて非常に浅い。また，平面規模も小さい。四隅の柱穴と東西北辺中間の柱穴との深さ・平面規模の差はない。柱痕は確認できなかった。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。

SB106（第136図，図版41）

調査区南西部に位置する。西側が調査区外のため，一部の柱穴が見つかっていない。桁行が2間以上，梁行が1間の側柱構造である。柱穴の深さは北東隅と南辺中央がやや深く，他はやや浅い。柱穴の平面規模は概して小さい。柱痕は確認できなかった。柱穴の覆土は全体的にしまりのある暗褐色土である。遺物の出土は無かった。

3．ピット群・土坑

SH060（第137図，図版41）

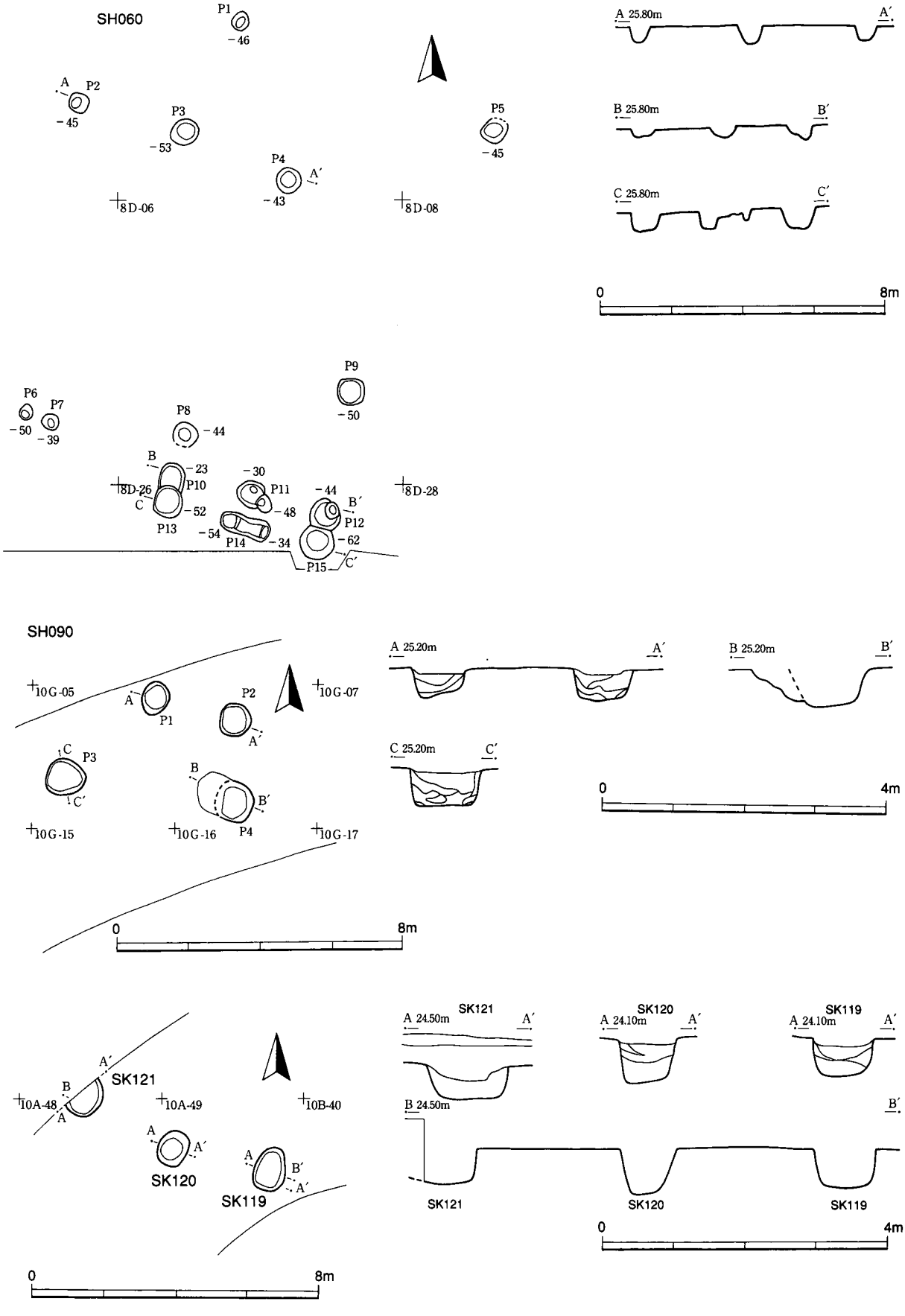
調査区中央部にある15基のピットについて，060として調査したものである。南側の6基のピット（P10～P15）は3基ずつ近接して直線状に並んでいる。すぐ南側が調査区外となるので，掘立柱建物の一部である可能性が考えられる。やや離れて北側にも3基のピット（P2・P3・P4）が直線状に並ぶ部分があるが，掘立柱建物を構成するための組になる柱穴が見あたらない。柱穴が見つからなかったか，無いとすれば柵列の可能性も考えられる。その他のピットはまとまりのある位置にはない。比較的規模の大きなものは単独の土坑であることも考えられよう。以上のように15基のピットは複数の遺構に分離するものと思われる。ピットの大きさは，小規模なものは径が40cm～60cm，やや大型のものは80cm～1mである。確認面からの深さは図のピット脇に記入した。最も浅いものは23cm，最も深いものは62cmで，50cm前後のものが多い。覆土は，P4が土層断面で柱痕と思われる土層がある。ローム粒を若干含む軟質の暗褐色土である。周りの土層はロームを多く含む暗褐色土で，上層の方がローム塊が多い。P2・P3もローム粒を含む暗褐色土で，上層の方がローム粒が多い。P15もP2～P4と似た傾向で，上層はローム塊を多く含み，下層もローム粒を多く含むが，やや暗い色調である。その他のピットは下層の方がロームを多く含む傾向がうかがえる。P11は少量の炭化物を含み，P14は少量の焼土粒を含む。遺物の出土量は少ないが，ロクロ土師器坏3点を図示した。坏1・3は比較的遺存が良い。1はP11から，2はP12・P15のどちらかから出土した。3はどのピットから出土したか不明である。

SH090（第137図，図版42）

調査区南東部にある4基のピットについて，090として調査したものである。位置関係が不整なため，個々に独立した土坑が近くにあるだけなのかもしれない。しかし，南北が調査区外となるため，掘立柱建物の一部である可能性も考えられる。ピットの径は76cm～109cmの間で，やや大きい。深さは41cm～55cmの間で，差は少ない。P2の覆土は4層に分かれ，上から1層は暗褐色土，2層が黄褐色土，3層が暗褐色土，4層が黄褐色土である。2層は大きなローム塊を多く含み，4層はローム塊主体である。3層もローム塊を多く含むが，色調はやや暗い。P1は3層に分かれ，P2の3層に相当する中層が黒褐色土で，色調の暗い層である。P3の下部はP2の3・4層が乱れたような状態で堆積している。P4は攪乱の影響で土層が均一となっている。いずれのピットも柱痕は見られない。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。

SK119（第137図，図版42）

調査区南西部にある土坑である。平面形は長楕円形である。遺構の規模は，長径1.23m，短径87cm，底面は長径1.01m，短径65cm，深さは55cmである。覆土は暗褐色土であるが，上層はローム粒をやや多く含



第137図　SH060・090，SK119・120・121

み，中・下層は上層よりも色調の暗い層である。中層はしまりがあり，下層はやや軟質である。遺物の出土量は少なく，図示したものもない。

SK120（第137図，図版42）

調査区南西部にある土坑である。平面形は楕円形である。遺構の規模は長径1.04m，短径84cm，底面は長径63cm，短径57cm，深さは62cmである。覆土は大きくは2層で，上層はローム塊を含む褐色土，下層はローム粒を含む暗褐色土である。上層の一部に暗褐色土がレンズ状に入ってくる。遺物の出土は無かった。厳密にいえば，奈良・平安時代の遺構である確証はないが，すぐ南側がSB106であり，調査区外の状況次第では掘立柱建物になる可能性も考えられるため，ここで取り上げた。

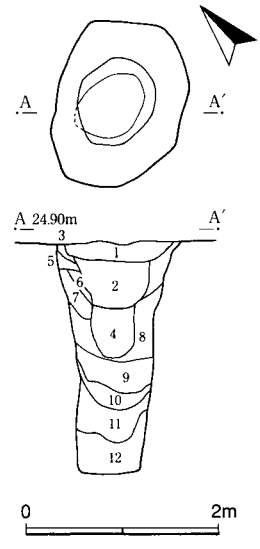
SK121（第137図，図版42）

調査区南西部にある土坑である。北西側が調査区外である。平面形は楕円形と思われる。推定される遺構の規模は，長径1.3m，短径1.15mである。深さは50cmである。確認面からの覆土はローム粒を含む暗褐色土である。遺物の出土は無かった。

4．井戸状遺構

SK001（第138図，図版42）

調査区北部に位置する。平面形は楕円形であるが，底面は円形に近い。まっすぐに掘り込まれている。遺構の規模は，長径1.78m，短径1.32m，底面は長径82cm，短径60cm，深さは2.45mである。覆土は1～4層が黒褐色土である。5～8層は暗黄褐色土で，黒色土とローム粒・塊の混合土層である。9層はローム塊を主体とする黄褐色土である。10・12層は若干のロームを含む暗褐色土で，11層はローム塊を多量に含む暗黄褐色土である。10～12層のロームは立川ローム層下部・武蔵野ローム層を主体とするものであろう。覆土の下部は粘性に富んでいる。堆積の状況から，少なくとも8層以上は自然堆積と思われる。遺物は出土していないが，周囲の竪穴住居と同時期の井戸状遺構と思われる。



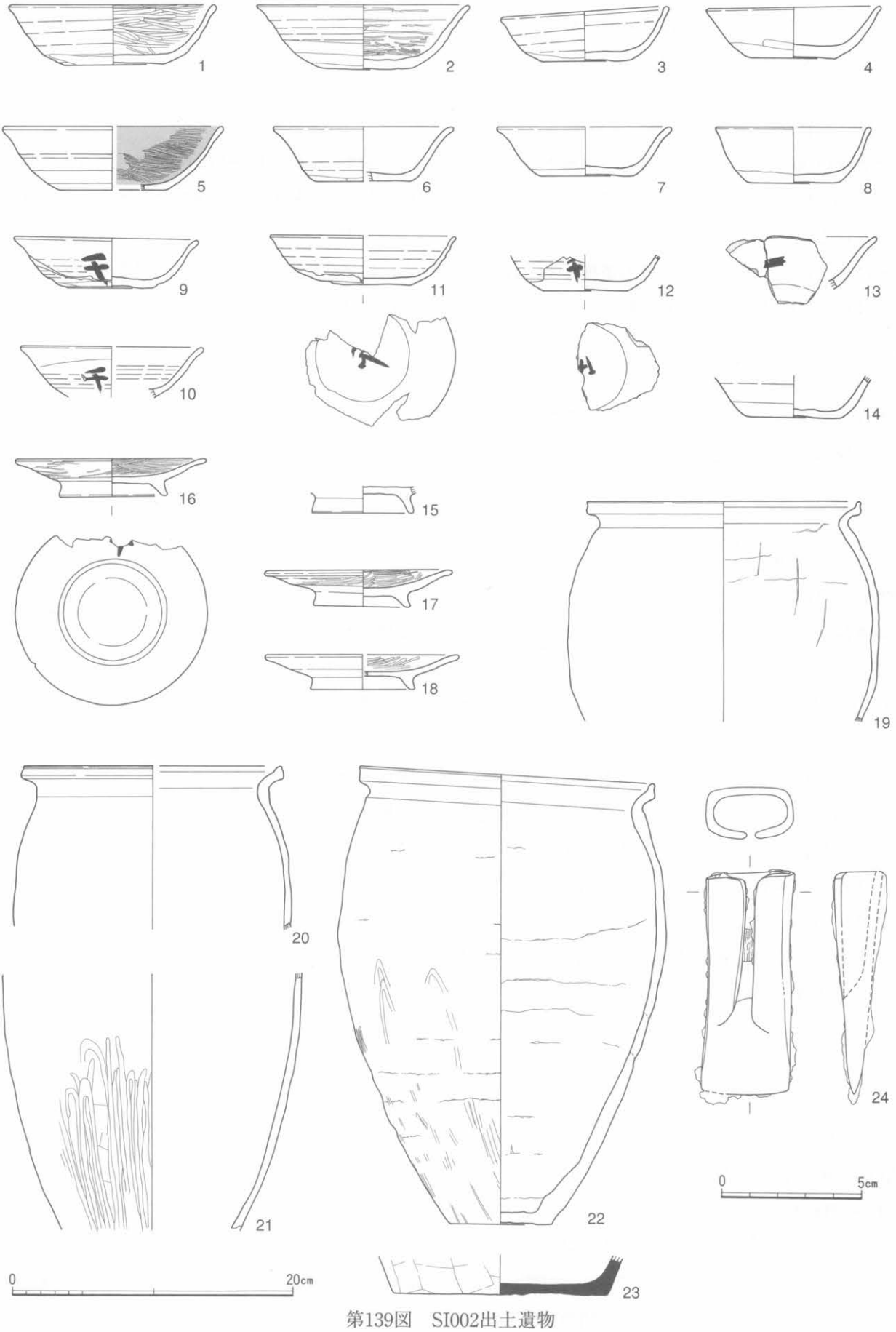
第138図　SK001

第2節　遺物

1．竪穴住居（第37表）

SI002（第139図，図版78・94・97）

1～14はロクロ土師器坏である。1は二次的に火を受けていると思われ，内面の荒れと剥離が目立つ。外面も斑点状に変色が見られる。4も全面が荒れ，僅かではあるが口縁端部が所々で欠けている。その欠け口の一つで僅かに煤が付着しており，灯明器としての使用が考えられる。5の内面は黒色処理が施されている。9～13は墨書が見られる。13の体部外面の墨書が判読できない以外は，いずれも「千」である。



第139図　SI002出土遺物

体部外面に正位で記されたものは，９・10・12で，12は底部外面にもある。11も底部外面に見られる。９は墨書部分を含む破片とそれ以外を図上で復元したもので，双方の割れ口の一部が擦られているように思われる。墨書のある破片が意図的に割り取られているのかもしれない。14は内外面の剥離が著しい。カマド内からの出土であり，支脚に転用されたものであろう。口縁部も意図的に打ち欠かれていると思われる。

15～18はロクロ土師器高台付皿である。16は「千」の墨書が体部外面に正位で見られる。墨書部分で打ち欠きされていると思われる。ただし，破片が１片接合している。墨書部分と離れた部分にも打ち欠きと思われる割れがある。こちらは接合している。17の欠損部２箇所も打ち欠きされたものと思われる。片方は小さく，もう一方は大きい。大きい方は３箇所の打ち欠きの複合であろう。

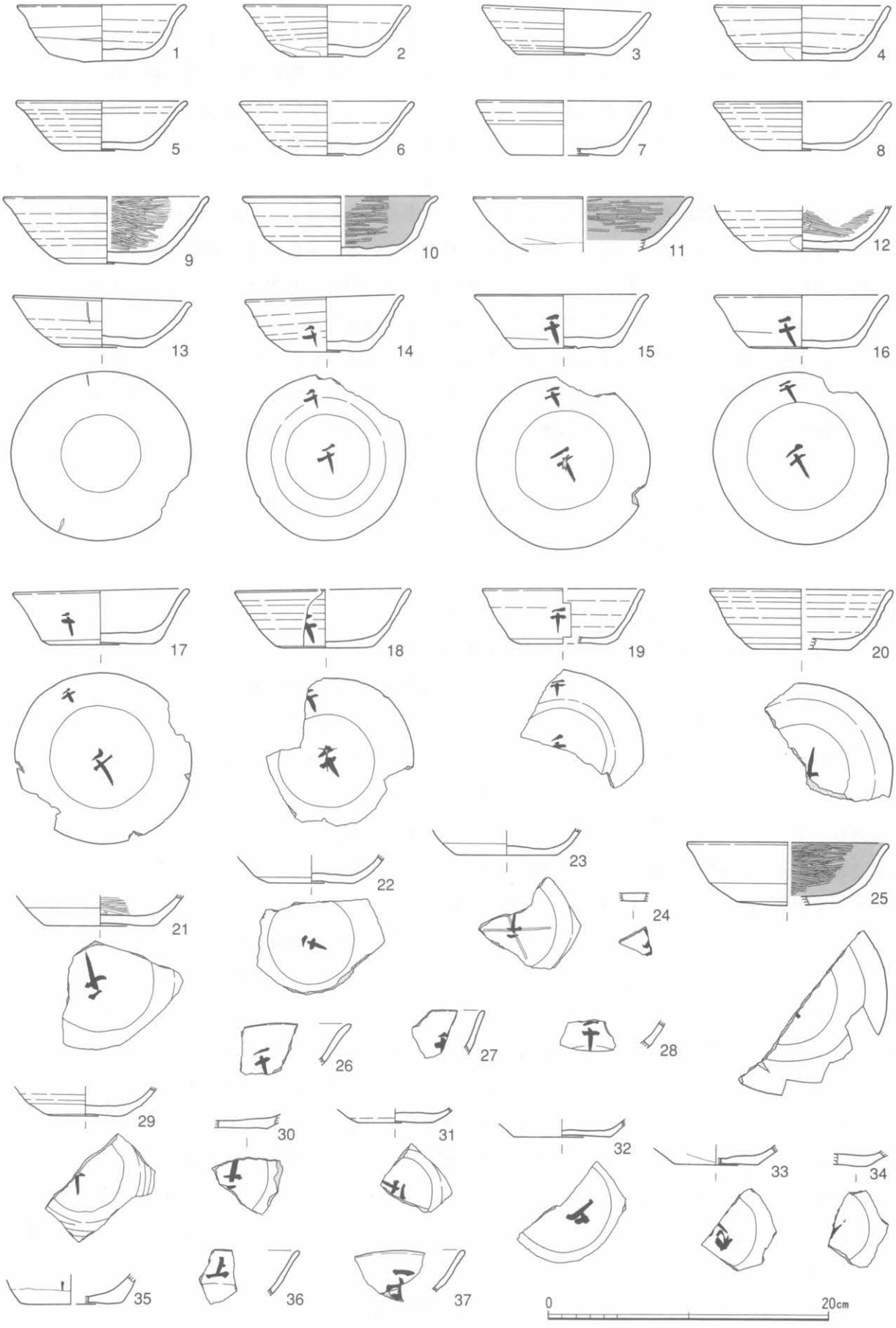
19～22は土師器甕で，いずれも常総型の甕である。20・21は破片からの復元なので図が整合していないが，質感から同一個体と思われる。22はほとんど完形に接合できた良好な土器である。外面下部に若干の焦げた山砂が付着している。23は須恵器甕で，底部外面には不鮮明であるが渦巻き状と思われる縄目圧痕が見られる。

24は折り返し式の袋状鉄斧である。袋状の部分には柄の木質の一部が遺存している。その他，図示していないが東海産と思われる須恵器大甕の破片が出土している。

SI003（第140・141図，図版78・79・93・95・97・100）

１～38はロクロ土師器坏である。24など小片のものは皿との区別がし難いが，明らかに皿と見受けられるものはなく，坏として扱うこととする。10・11・25は内面に黒色処理が施されている。14～37は墨書が見られる。14～19はいずれも「千」が体部外面（正位）と底部外面に２字ある土器である。また，20～23・30・31は底部外面に「千」があり，24・29も同様と思われる。26～28は体部外面に正位で「千」がある。26～28と20～23・30・31のどれかが同一個体であるかもしれないが，断定し難い。35の体部外面正位の墨書も「千」である可能性が高いと思われる。32は「上」が底部外面に，36も「上」が体部外面に正位で記されているが，同一個体となる可能性は低い。また，33は門の左側と似た「⺠」が底部外面に，37は「⿱丰土」が体部外面に正位で見られる。34の底部外面に書かれた墨書は不明とすべきであるが，「千」の可能性があるように思われる。図化していないが，15は底部内面から体部内面にかけて細かい擦痕が平行状に見られる。線刻と同様の意義を認められるかもしれない。また，４の内面にも一部で平行状の擦痕があるが，薄い引っかき傷のようなものであり，線刻と同様のものとできるかどうかはより微妙である。器面が荒れているものが多く，床面に被熱痕跡があることから，全体に二次的に火を受けた可能性が考えられる。特に２・５の内外面と13の内面は剥離が著しい。３・17も内面の一部が剥離し，荒れも著しい。17は灰褐色に変色しているところもある。９はヘラミガキにより器面の荒れは少ないが，内面の一部に剥離が見られる。口縁部・体部をＵ字状またはＶ字状に割り取ったと思われる土器が存在する。自然な破損との区別が難しいが，可能性のある土器を記すと，３・４・９・14・15である。また，16は接合しているが，接合した小破片のまとまりがＵ字状である。墨書を含み，意図的なものかもしれない。17の口縁・体部は全周打ち欠きされた可能性がある。

39はロクロ土師器高台付坏と思われる。坏部内面には黒色処理が施されている。40・41はロクロ土師器皿である。41は高台が付くが，40は高台の有無が不明である。41は底部外面と，体部外面に正位で「千」



第140図　SI003出土遺物

の墨書がある。

42は須恵器長頸壷である。胴部上面には暗緑色の自然釉が掛かっている。外面の色調は灰赤褐色，内面は黄灰色である。非常に高温で焼成されたため，内面の一部に気泡によるふくらみがある。胎土に黒色粒が見られる。猿投窯産の須恵器ではないかと思われる。43も須恵器壷である。底部内面に降灰による暗緑色の自然釉が掛かっている。色調は内外面灰色である。胎土は小石を多く含み，黒色粒も若干ある。非常に硬質な須恵器で，底部は気泡によるふくらみが見られる。東海産と思われる。44は須恵器甑である。底部の破片で，孔は五孔であろう。色調は暗褐灰色で，胎土に粒径の大きな小石を多量に含み，細かい白雲母も多く含まれている。常陸・新治窯産と思われる。

45～49は土師器甕である。45・49は常総型の甕である。46・47は小型の甕である。

50～54は円盤状土製品で，土器破片から転用されたものである。割れ口が擦られて円盤状に加工されているが，50・51・54は不整である。転用前の土器は50・51が新治窯産の須恵器甕または甑，52・53が土師器坏である。54は常総型の甕と思われる。

55は鉄製品である。鎌あるいは刀子の切先であろう。錆膨れが著しく，どちらが刃でどちらが背か不明瞭である。

SI008（第141・142図，図版79・91・95）

1は須恵器坏である。胎土は白色粒を多く含み，色調は暗灰色である。底部の切り離し痕跡は手持ちヘラケズリに消されて見えない。

2～8はロクロ土師器坏である。3は底部外面に孔がある。内面側から穿たれたもので，現状では孔から口縁・体部側にひびが入っているが，割れてはいない。2は内外面の一部に剥離が見られ，7は一部焦げていることから，火を受けたものと思われる。また，5も器面がかなり荒れ，3もややざらついて赤みを帯びていることから，これらも熱を受けた可能性が考えられる。4は底部外面に一条のヘラ書きと一条の線刻がある。8は体部外面に墨書があるが，判読できない。

9はロクロ土師器高台付皿である。底部外面に2条の筋状のヘラ書きがある。中央のものは細く，他方は幅が広い。内面にも一部に擦痕が見られる。口縁部を打ち欠いているかどうかは判然としない。

10は須恵器長頸壷である。色調はやや赤みを帯びた暗緑灰色で，焼成は硬質，胎土は緻密である。

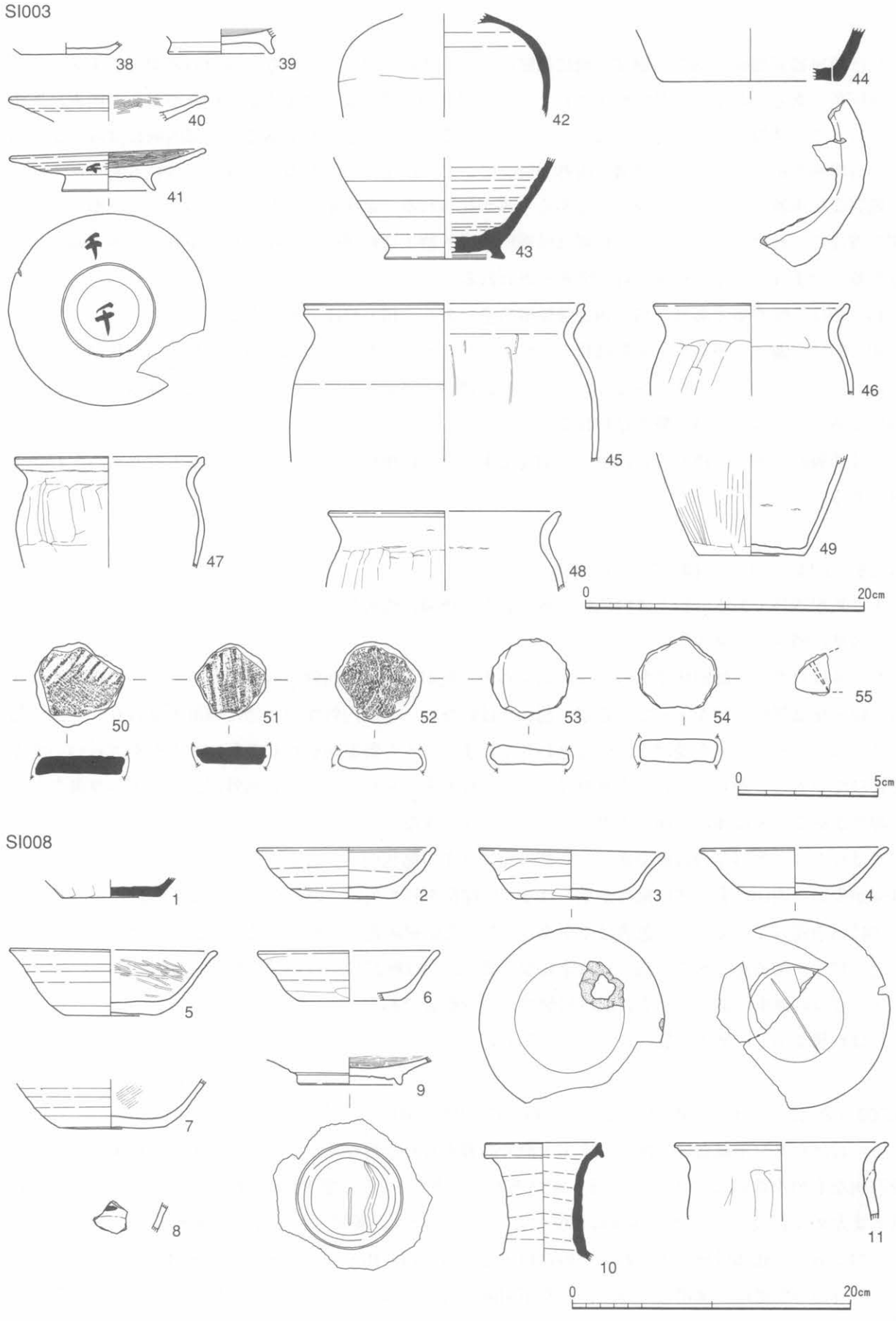
11～15は土師器甕である。13・14は常総型の甕で，14は胴部に山砂が付着している。

16・17は紡錘車である。ともに凝灰岩製で，やや軟質である。

18は鉄鎌である。柄の木質の一部が遺存している。

SI009（第142～144図，図版79・80・91～95・97・100・101）

1～47はロクロ土師器坏である。文字・記号の書かれた土器が非常に多いが，墨書は種類が少なく，判読不明なものを除けば「千」と「市」がほとんどである。「千」墨書はSI002・SI003同様，多く見られ，以下まとめて記述する。体部外面に正位で書かれたものは，推測されるものも含めて11・14・16・19・20・23である。底部外面に書かれたものは11・12・14・15・16・17・18・21・22・24である。ただし，11の底部外面の墨書は一部消えており，やや不明瞭である。14・16は確実に体部外面と底部外面の双方にあり，おそらくは11も同様と思われる。また，SI002やSI003の様相からも体部外面と底部外面にセットで書



第141図　SI003・008出土遺物

かれたものが基本と考えられる。土器の質感から見ると12と19は同一個体と思われる。他は断定し難い。13は体部外面に正位で2文字の墨書があり，上は不明であるが，下は「千」である。底部外面には墨書されていない。25～29の墨書は遺存部分が少なく，判読できない。21は11から推測すると「千」かと思われるが，断定はできない。「而」も「千」ほどの量ではないが，多く見られる。体部外面に正位で書かれたものは34・36，底部外面に書かれたものは30・34・35・37・38・47である。34の例からこれも体部外面と底部外面のセットが基本かもしれない。その他，2本線の交差する線刻が39と41に見られる。39は底部外面に「＋（×）」状にあり，41は体部外面に「X」状に刻まれている。40の内面も引っかき傷のような筋が8本程度あり，線刻の一種であろう。

土器の破損具合をみると，口縁・体部の1/3程度を打ち欠いていると疑われるものがいくつかある。意図しない破損との区別が難しいが，1・3・4・5にその可能性がある。特に4は割れ口が比較的丁寧に擦られており，その可能性が高い。また，4は底部が中央部で内面から穿孔されたものと思われる。孔からは三方に割れ目が延びているが，穿孔時に全体的に割れたのかどうかは判然としない。この穿孔については原稿執筆時に認めたもので，第142図を訂正することができなかったため，第169図に底部外面側から見た図を掲載した。1は対向する2箇所が破損している。また，11は接合により完形であるが，割れ目は整ったラインであり，大きな破片は2/3程度の遺存である。残った1/3はさらに2片に割れるが，墨書「千」に一部掛かっており，意図的なものかもしれない。一方，墨書があっても，13は全くの完形であり，割れも欠けも無い。

35・41～47は内面に黒色処理とヘラミガキが施された土器である。黒色処理が施されない坏に比べ大振りであるが，47は黒色処理の坏の中でも非常に大型の土器である。42は二次的な火を受け，内面の一部に剥離が見られ，黒色の色調も一部飛んでいる。

48はロクロ土師器高台付皿または坏である。高台部のみの遺存である。内面は黒色処理及びヘラミガキが施されている。底部外面に「千」墨書があり，字の上に未貫通の孔が穿たれている。49～51はロクロ土師器皿で，49は無台，50・51は有台である。49の内面中央には「千」の墨書，51の内面中央には「而」の墨書がある。また，50の底部外面には何条かの平行するものを主体とする不整な筋がある。焼成前であり，ヘラ書きと思われる。

52はロクロ土師器蓋である。口縁部端部の形態から皿ではなく，蓋と思われる。内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。

53・54は須恵器甕である。53は胴部外面及び口縁部外面に平行タタキが横方向に施されている。二次的な火を受け，内外面の剥離が著しい。常陸・新治窯産である。54は色調が褐色味を帯びるが，小石と白雲母を多く含み，新治窯産と思われる。他に図示していないが，須恵器甕の胴部上部の破片がある。外面は縦方向の平行タタキが施され，タタキ後にカキ目状の線が横方向に巡っている。色調は黄褐灰色で，焼成は堅緻である。

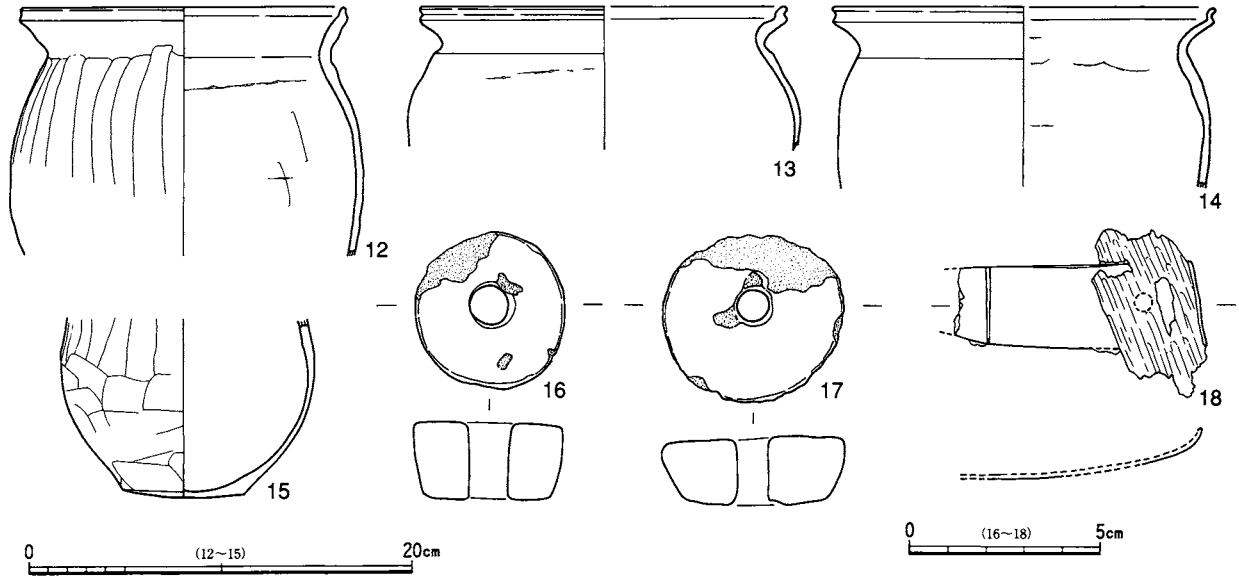
55・56・57は土師器甕である。56は常総型である。

58は土製支脚である。表面が面取りされて各面で平らな部分がある。火を受けてもろくなっている。

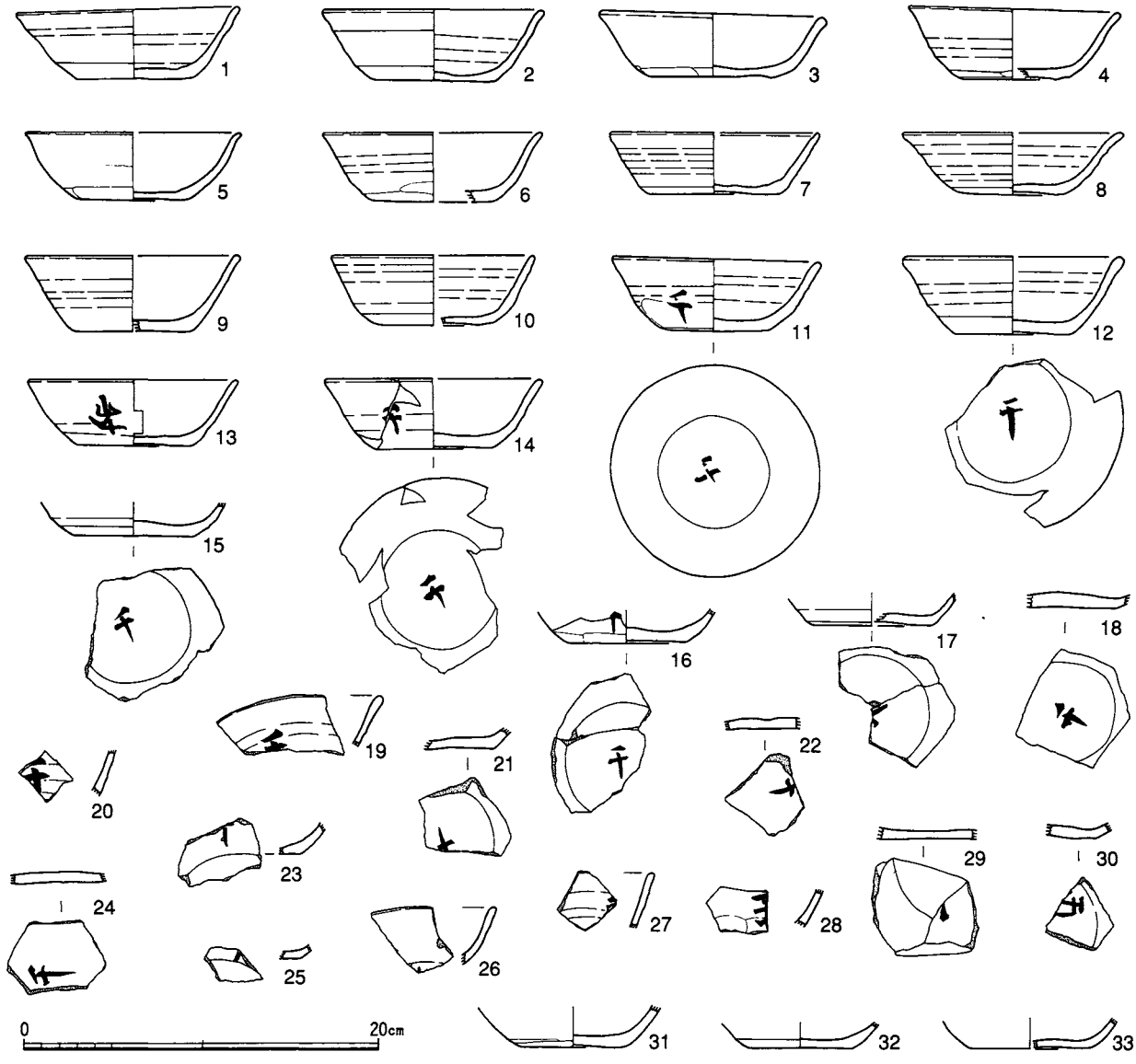
59は紡錘車である。安山岩製である。60・61は鉄製品で，60は釘と思われる。上部が直角的に曲がっている。また，幾度かねじられている。61は刀子で，刃部の根本と茎の一部が遺存している。62は軽石である。

63～68は円盤状土製品で，土器破片から転用されたものである。転用前の土器は63・64・65は須恵器甕

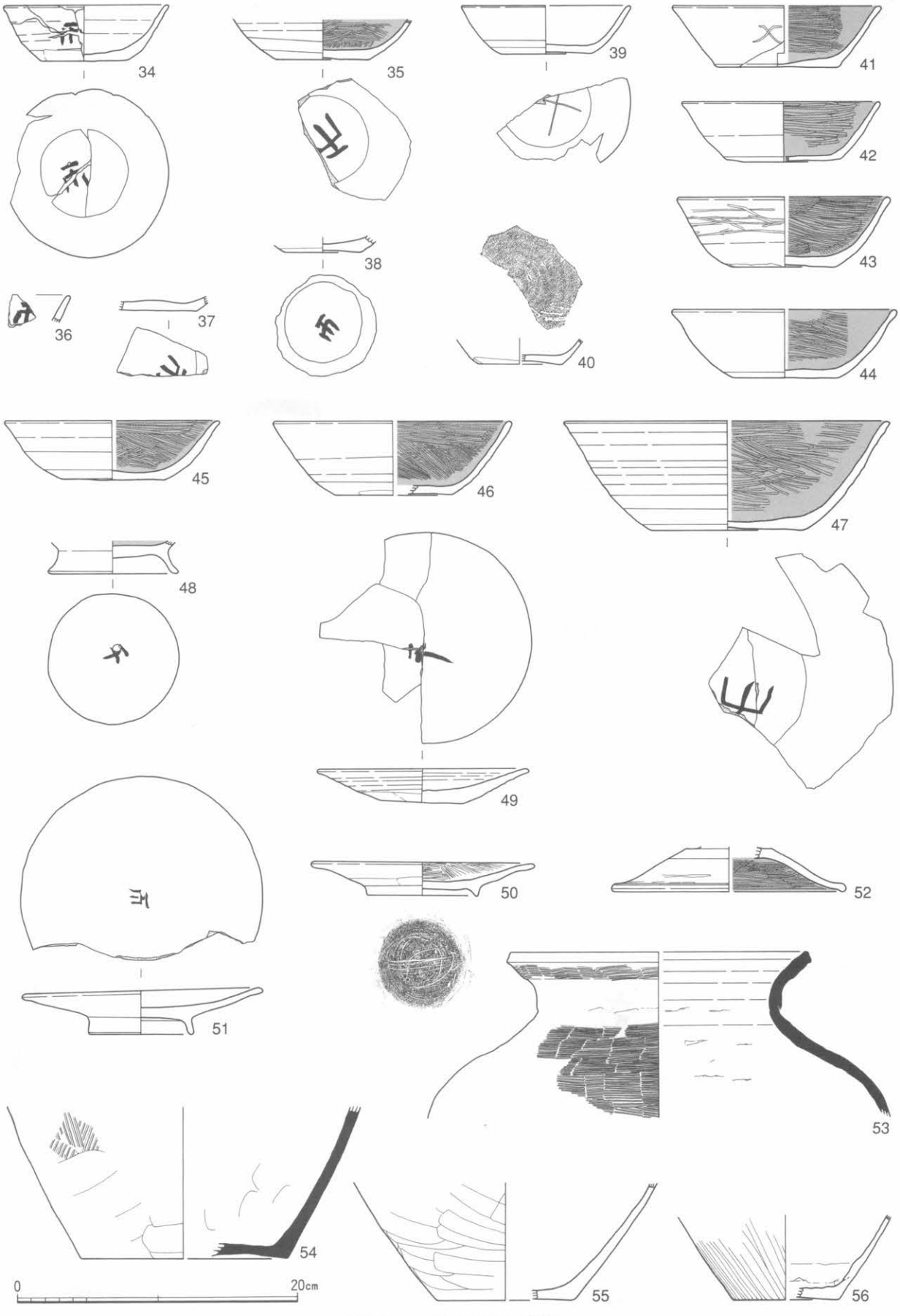
SI008



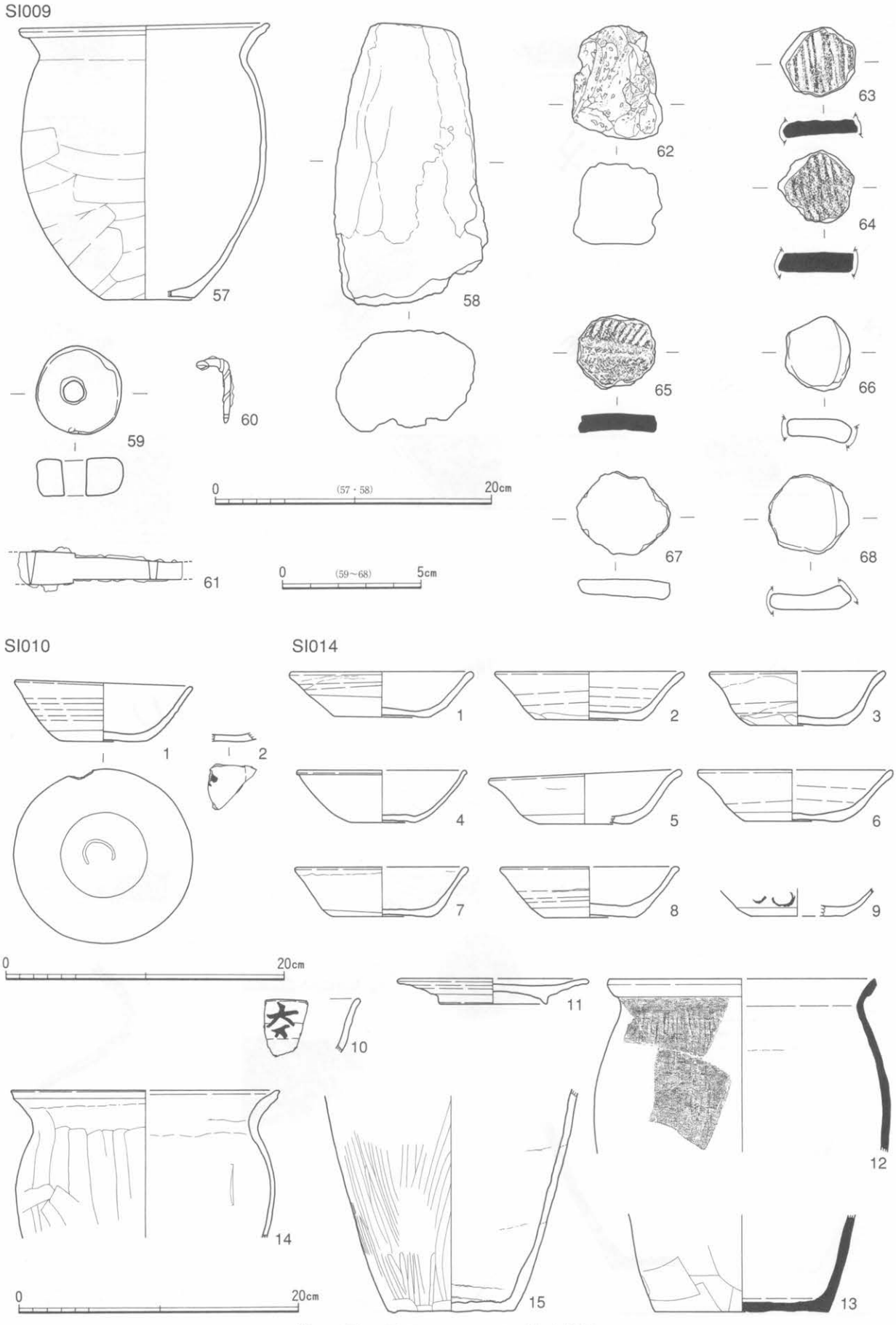
SI009



第142図　SI008・009出土遺物



第143図　SI009出土遺物



第144図　SI009・010・014出土遺物

または甑である。64・65は新治窯産である。63は色調が赤みを帯びるが白雲母を多く含み，これも新治窯産と思われる。66・68は土師器坏または皿，67は常総型の甕である。

SI010（第144図，図版80・97）

1・2はロクロ土師器坏である。1は底部外面に「U」字状のヘラ書きがある。内面に不整な擦痕があるが，明瞭な形にはならない。二次的な火を受けていると思われる。焼成がややあまいこともあって，器面がややざらついている。口縁部端部がわずかに欠けているが，意図的なものかそうでないかの判別が難しい。2は底部外面に墨書があるが，判読できない。

SI014（第144・145図，図版80・92・95）

1～10はロクロ土師器坏である。1は焼成があまく，器面がざらついている。2も低火度の焼成で断面内部が黒色である。4の底部は回転糸切り後無調整であり，底径も小さい。9は体部外面に正位で墨書があるが，判読できない。10は口縁・体部外面に正位で「大万」の墨書がある。墨痕が薄く，肉眼ではわからないが，赤外線撮影で判読した。

11はロクロ土師器高台付皿である。内面はヘラミガキが施されているが，ヘラミガキの筋状に暗灰色に黒ずむ部分がある。なお，1～11は不注意により遺物箱を落下させ，当初の状態より割れてしまったことを記しておく。

12・13は須恵器甕である。12の色調は橙褐色で，胎土は黒色・褐色・白色の細砂粒を含み，小石は少ない。13の色調は暗赤褐色で，胎土は同様に細砂粒を含むものである。12と13は別個体であるが，ともに千葉市周辺域産の須恵器と思われる。

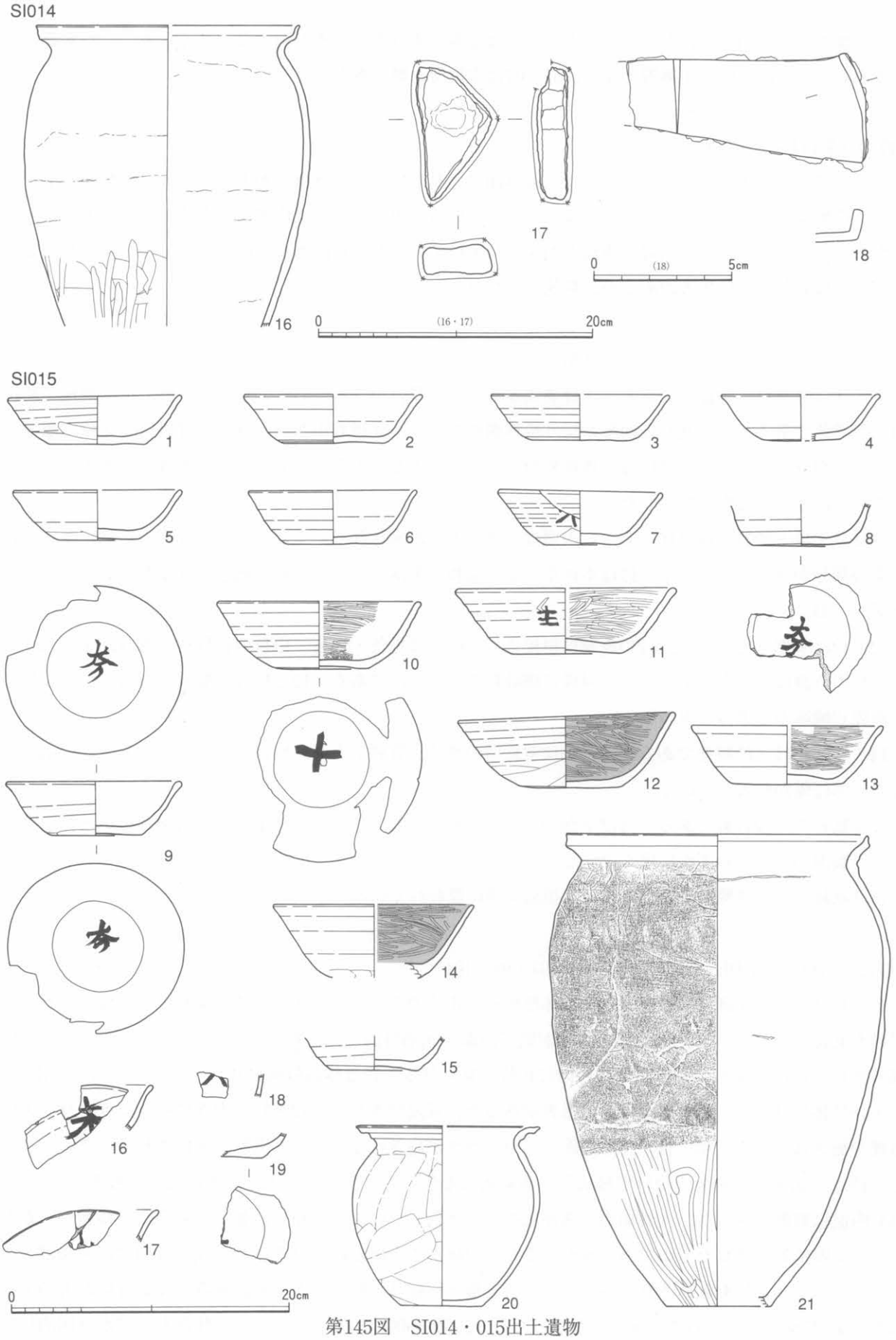
14・15・16は土師器甕である。15・16は常総型の甕で，質感から同一個体の可能性がある。16の胴部上部の一部に煤が付着している。

17は砥石で，砂岩製である。ほぼ全面的に使用されている。さらに，図示した平面図の中央と図示していない裏面の中央がわずかに窪んでいる。

18は鉄鎌で，基部側の破片である。欠損部は錆に覆われている。

SI015（第145・146図，図版80・92・94・97・98・101）

1～19はロクロ土師器坏である。7は体部外面に正位の墨書があるが，判読できない。8は「大万」の墨書が底部外面に，9も「大万」の墨書が底部内面と底部外面に見られる。10は「＋（×）」の墨書が底部外面に，11は「主」の墨書が体部外面に正位で見られる。16は体部外面に正位で「未」の墨書がある。17・18は体部外面に，19は底部外面に墨書があるが，判読できない。12・14は内面にヘラミガキ及び黒色処理が施されている。10・11・13も内面にヘラミガキが施されているが，黒色処理はされていない。ただし，13は二次的な火を強く受けて暗灰色，赤褐色に変色しており，黒色処理が飛んだことも考えられる。15も内面に剥離が見られ，内外面の一部が灰褐色に変色していることから，強く火を受けた様相がうかがえる。支脚に転用されたものであろうか。また，口縁部の全周が打ち欠きされ，底部外面には8条以上の筋があり，研ぎ具にも転用されている。この研ぎ痕と口縁部の打ち欠きは原稿執筆時に気付いたものであるが，第145図に追加することができなかったので，第169図で図示した。口縁・体部も全周が意図的に打



第145図　SI014・015出土遺物

ち欠かれているものと思われる。4も内外面に剥離痕があり，3も内面の一部に剥離痕が見られる。また，5は器面の荒れが著しい。

20～23は土師器甕である。20は小型の甕であるが，長期に火を受けたため強く赤みを帯びている。21は常総型の甕である。胴部外面上部にハケメ状の痕跡が横位に見られるが，木口の端でヘラナデが施されたものであろうか。内面の剥離・荒れが著しい。22と23は一部でやや違和感もあり，別々に図示したが，同一個体であるように思われる。

24は砥石で，凝灰岩製である。全面が使用されているが，薄くなった側の小口面は使用頻度が少ない。厚い側の小口面は細い筋状の研ぎ痕がいくつもみられる。筋状の研ぎ痕は図示した広い長側面と左側の狭い長側面にも若干見られる。

25・26・27は鉄製品である。いずれも用途の特定が難しい。

SI022（第146図，図版80）

1は非ロクロの土師器坏である。完形で，一部にひびがある程度である。体部外面はヘラケズリ後ヘラミガキ的なナデが施されている。色調は赤褐色，焼成は硬質で良好な土器である。2は非ロクロの土師器皿である。二次的な火を受けていると思われ，外面に剥離痕が目立つ。

3は土師器鉢または甑である。外面はヘラナデ後ミガキ的なヘラナデが施されている。色調は内外面黒色で，特に外面は光沢がある。黒色処理を意図したものではないと思われるが，結果的に同様なものになっている。焼成も堅緻である。

SI023（第146図，図版80・98・101）

1～4はロクロ土師器坏である。1・2は口縁・体部外面に正位で「里」の墨書がある。1の字は大きく，2は小さい。また，2は底部外面に「＋（×）」の線刻がある。4はやや大型の坏で，内面はヘラミガキが施されている。3の体部内面にもヘラミガキが見られる。5はロクロ土師器高台付椀の高台部で，いわゆる足高高台である。

6・7は土師器甕である。6は小型の甕である。7は底部・胴部下部の破片が支脚に転用されたもので，外面は山砂の付着が著しい。

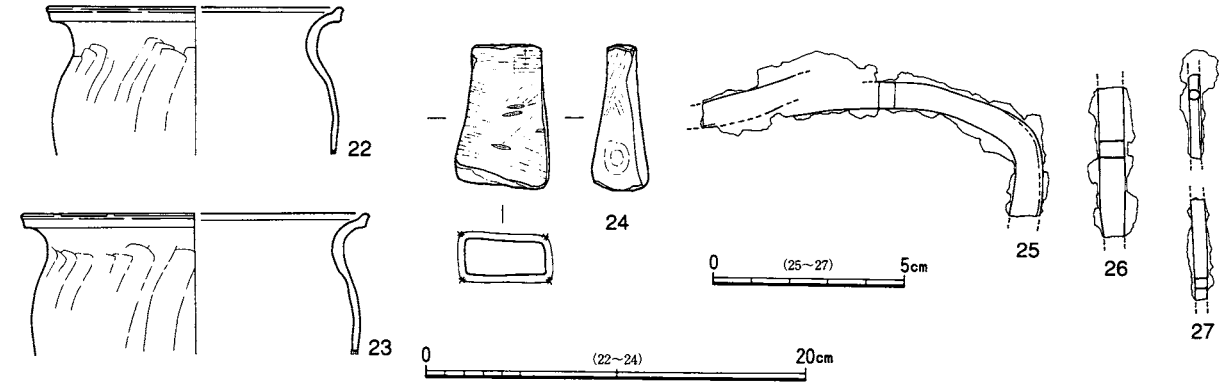
8は鉄床石で，砥石兼用であろうか。石材は安山岩である。非常に大型の製品で，図示した上面は良く使用されて平滑である。それ以外では右側の側面がわずかに使用されていると思われるが，他は使用された痕跡がうかがえない。中央で2片に割れているが，意図的なものであろうか。研磨面の接合部に段差が無いことから，意図的な分割があったとしても，その後はあまり使用されなかったと思われる。

SI024（第146・147図，図版80・81・98・101）

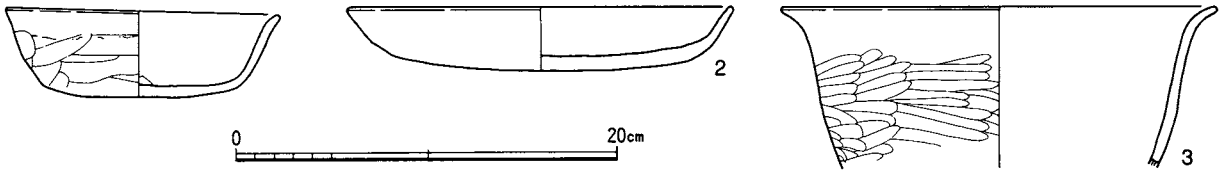
1～3は須恵器坏である。いずれも数片の接合によって，完形ないしほぼ完形に復元される。1・2は小石を多く含み，3は白雲母を多く含む。いずれも新治窯産の須恵器と思われる。

4・6・7はロクロ土師器坏である。4は底部外面に「＋（×）」の線刻が，7は体部外面に正位で「富」の墨書がある。4の内面はやや擦れている。また，口縁・体部の多くをぐるりと打ち欠いているものと思われる。6は口縁・体部のほぼ1/3のところで割れているが，接合により欠損のない完形の土器で

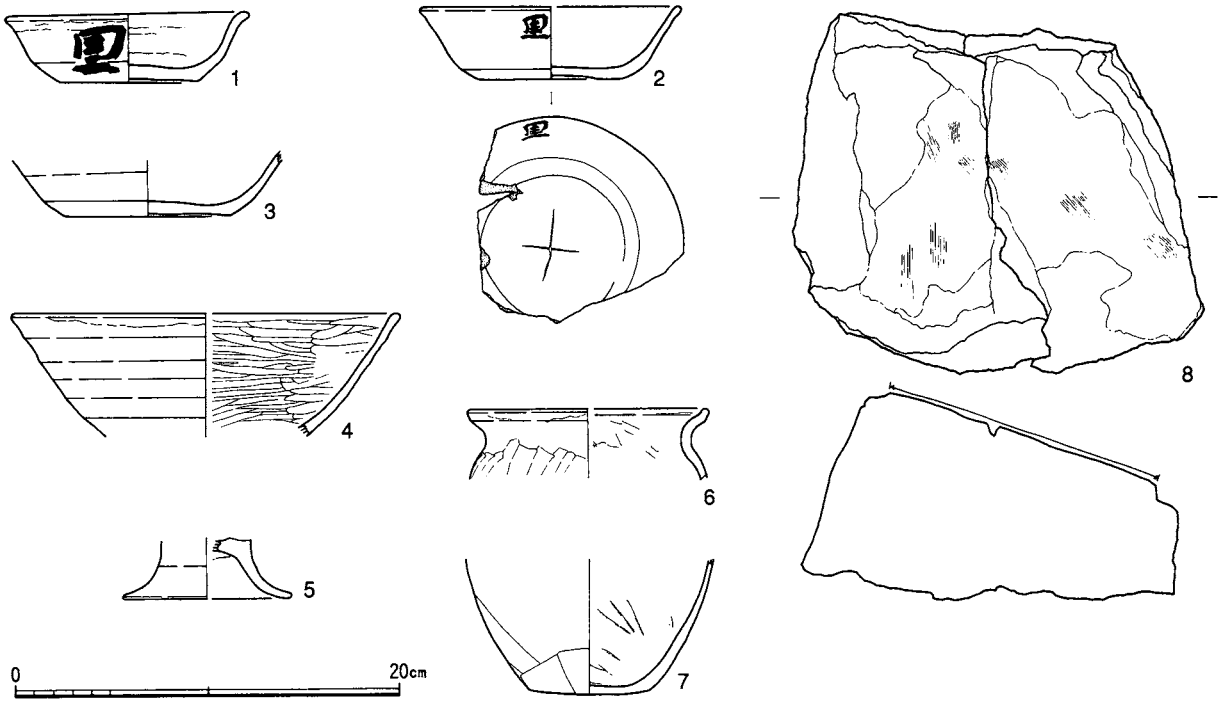
SI015



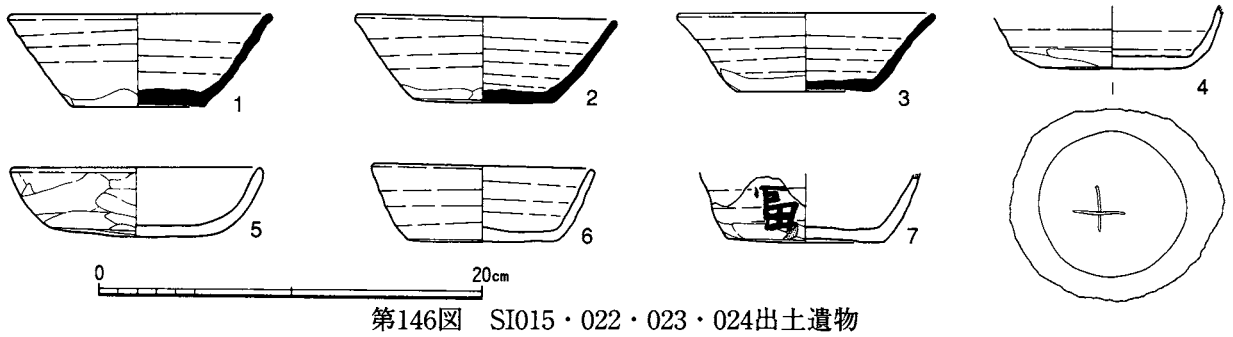
SI022



SI023



SI024



第146図　SI015・022・023・024出土遺物

ある。5は非ロクロの土師器である。これも全体の1/3程度のところで大きく2片に割れ，さらに小片があるが，接合により完形に近く復元された土器である。1～3や5・6も意図的に割っているように思われる。また，7は半分以上破壊され，墨書周辺は細かく割られた可能性がある。

8・9は土師器甕である。8は小型，9もやや小型である。

SI025（第147図，図版81）

1～10はロクロ土師器坏である。7は体部外面に正位で「富」の墨書がある。10の内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。8の内面もヘラミガキされているが，黒色処理は施されていない。また，底部外面に暗茶褐色の筋がある。須恵器に見られる植物質のものが燃えて付く火だすきに似ているが，断定し難い。1・2は長期に火を受け，一部が暗灰黄色・赤褐色に変色している。1は器面もかなり荒れている。4・5・7も器面が荒れて，一部剥落している。また，6も内面の一部が黒く焦げており，色調も赤褐色である。これらも火を受けたものと思われる。

11はロクロ土師器高台付皿である。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されているが，火を受けて黒色処理は一部飛んでいる。底部外面に多くの筋があるが，支脚として使用されたことに伴う傷であろうか。あるいは線刻かもしれない。

12は須恵器甕である。色調が黒褐色で，千葉市周辺域産と思われる。内面は火を受け，剥離が著しい。

13は土師器甕である。底部外面が淡灰黄色に変色している。

SI030（第147図，図版81）

1・2は須恵器坏蓋である。ともに鈍いかえりがあるが，1は口縁部端部よりも高く，2はかえりが接地する。1・2とも白雲母を多く含み，新治窯産である。1はかなり軟質で，2もやや軟質である。

3～6は非ロクロの土師器坏で，浅い皿状の器形である。4・5は内外面全面が赤彩されている。5の外面は剥離が目立ち，内外面に黒く焦げた部分もある。3の内面と4の外面にも剥離痕が見られ，これらは二次的な火を受けたものと思われる。

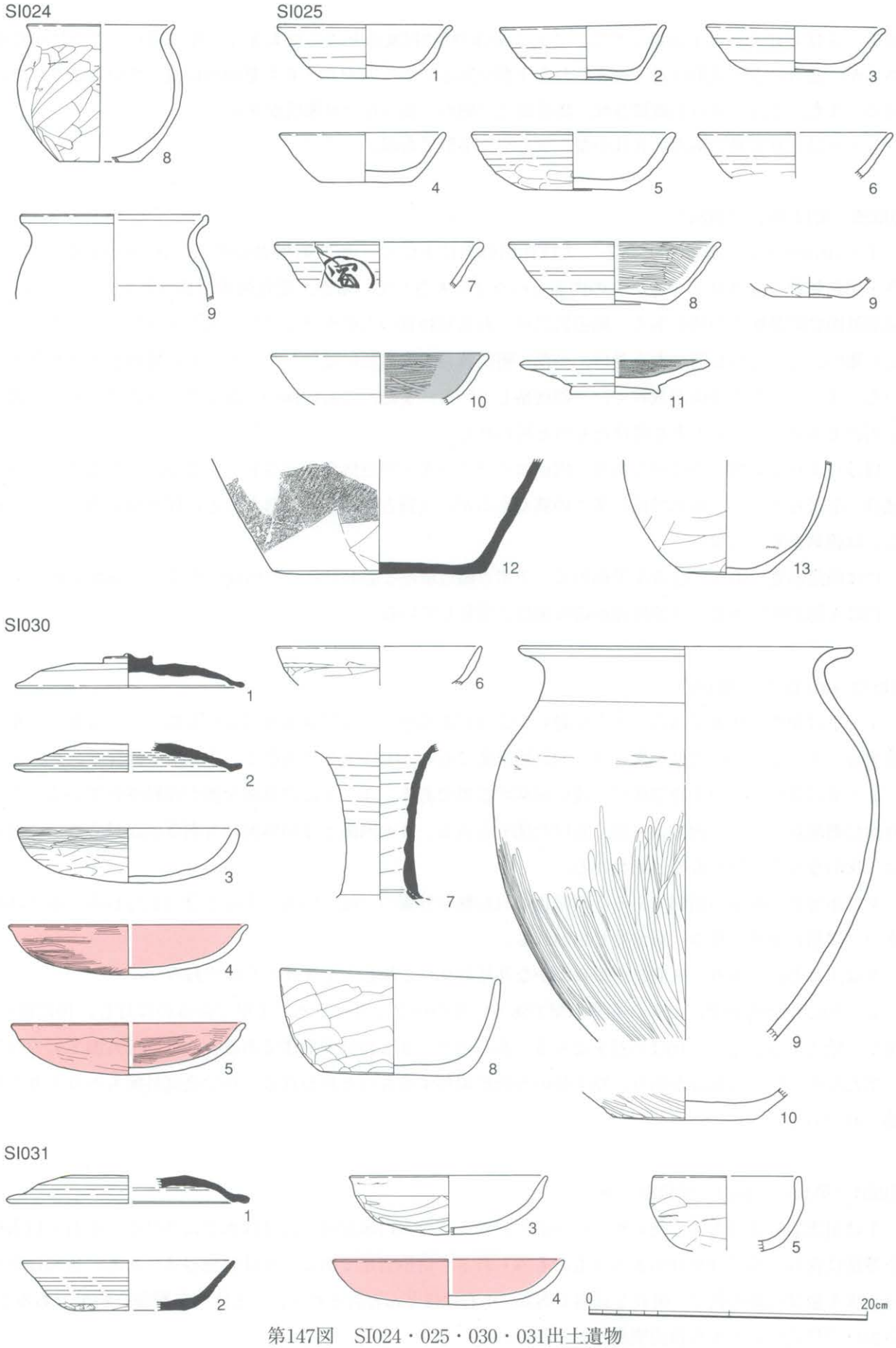
7は須恵器長頸壷の頸部である。暗緑色の自然釉が外面の一部と内面の上部主体に見られる。胎土は緻密で，黒色粒が見られる。東海産と思われる。

8は土師器鉢である。外面に剥離痕がかなり見られ，これも火を受けたものであろう。

9・10は土師器甕で，どちらも常総型である。9のヘラミガキが密で丁寧であるのに対し，10は粗い。また，胎土も9に比べ，10は小石をより多く含むので，9と10は別個体である。9は胴部外面上部でヘラの当たりが一周する部分があり，粘土帯の接合に関係するものと思われる。10は底部外面もヘラミガキが施されている。

SI031（第147・148図，図版81・98）

1は須恵器坏蓋である。鈍いかえりがあり，かえりから口縁部端部はほぼ水平に延びる。小石・白雲母を多量に含み，小石は粒径の大きなものもみられる。新治窯産である。2は須恵器坏である。色調はやや緑色味を帯びた暗灰色で，硬質な質感である。小石はほとんど含まれず，1と比べて緻密な胎土であるが，白雲母が目立つことから新治窯産と思われる。



第147図　SI024・025・030・031出土遺物

3は土師器坏である。須恵器蓋模倣的な器形であり，古墳時代後期土器の混入と思われる。4・6は非ロクロの土師器坏で，浅い皿状の器形である。特に4は皿的な器形で，内外面全面に赤彩が施されている。6は底部外面中央に小さく「大」と線刻がされている。刻み順が現在の書き順と同じである。5も非ロクロの土師器坏であるが，やや手づくね土器的な粗雑でずんぐりしたつくりである。体部外面に接合痕が残り，内面もナデの痕跡が明瞭で，器面は一部凹凸がある。

7・8は土師器甕である。7の外面は若干の山砂が付着している。内面下部は器面の剥離が著しい部分がある。

SI032（第148図，図版81）

1～6はロクロ土師器坏である。4は体部外面に正位で「富」の墨書がある。5・6も体部外面に墨書があるが，判読できない。3と4は同一個体の可能性がある。1は口縁端部が僅かに欠けるのみで，ほぼ完形である。他には割れも欠けもない。

7はロクロ土師器高台付皿である。口縁・体部の一部が欠けるのみで，他は割れていない。打ち欠きされた可能性がある。外面はかなりざらついている。

8は須恵器甕か甑である。胴部外面上部は平行タタキの後，カキ目状の線が横方向に巡っている。白雲母を多量に含む。新治窯産の須恵器である。

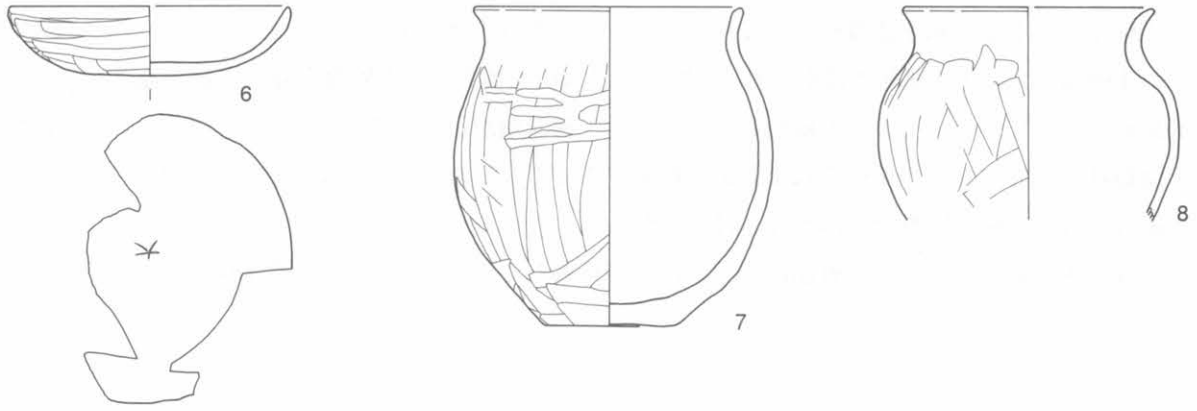
SI035（第148・149図，図版81・82・91・95・96・101）

1は非ロクロの土師器坏である。内面はヘラミガキが施されているが，二次的に火を受け，器面が荒れており，やや不明瞭である。底部内面には大きな剥離痕もある。2～17はロクロ土師器坏である。16は体部外面に「小」と思われる墨書がある。17も体部外面に墨書があるが，判読できない。15は底部内面に一条の沈線があるが，焼成前のものと思われ，ヘラ書きである。2は口縁・体部の一部が弧状に欠けているが，断面が擦られており，意図的な打ち欠き・加工である。欠損部以外は3片の接合から成るほぼ完形の土器である。弧状の最下部から大きく2片に割れる。器面が荒れて，内面の一部に剥離が見られる。14は内外面の一部が灰色に変色し，内面には剥離痕があり，外面は山砂も付着している。長期に火を受けたことがうかがえる。口縁・体部は打ち欠かれた可能性がある。14とセットであった4も器面が荒れているが，剥離痕は見えない。その他の土器では，3・7・8もかなり器面が荒れている。

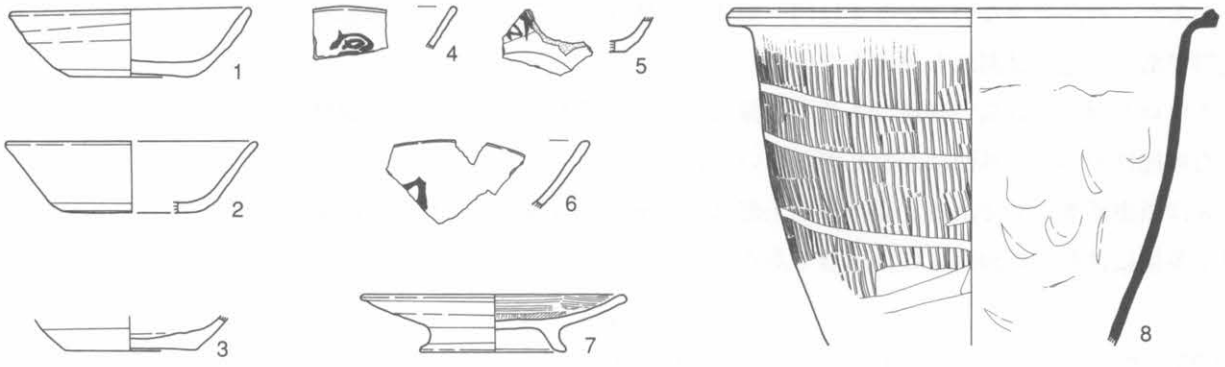
18はロクロ土師器高台付坏である。体部外面に正位で「万」の墨書がある。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。器面がかなり荒れて，ヘラミガキがかなり不明瞭である。焼成はあまく，軟質である。19・20・21はロクロ土師器皿で，22はロクロ土師器高台付皿である。19・20・21の底部も全体に突出して，高台状である。21は内面に「兄」の墨書がある。ほぼ完形であるが，墨書部分を含む1/2周弱の口縁部は5片以上に割れて破片が接合したものである。22は底部中央に径5㎜の穿孔がある。焼成後のものであり，状況から内面側から穿孔されたものと思われる。完形であるが，口縁・体部1/2周弱は数片に割れた破片が接合したものである。大きな破片は2片である。21・22が意図的な打ち欠きをしているか断定が難しいが，可能性はあると思われる。

23は須恵器甕である。色調は一部が灰黄色であるが，全体に非常に赤みの強い土器である。器面はかなり滑らかで，硬質な質感がある。胎土は細砂粒を含むが，小石は少ない。千葉市周辺域産の須恵器である。

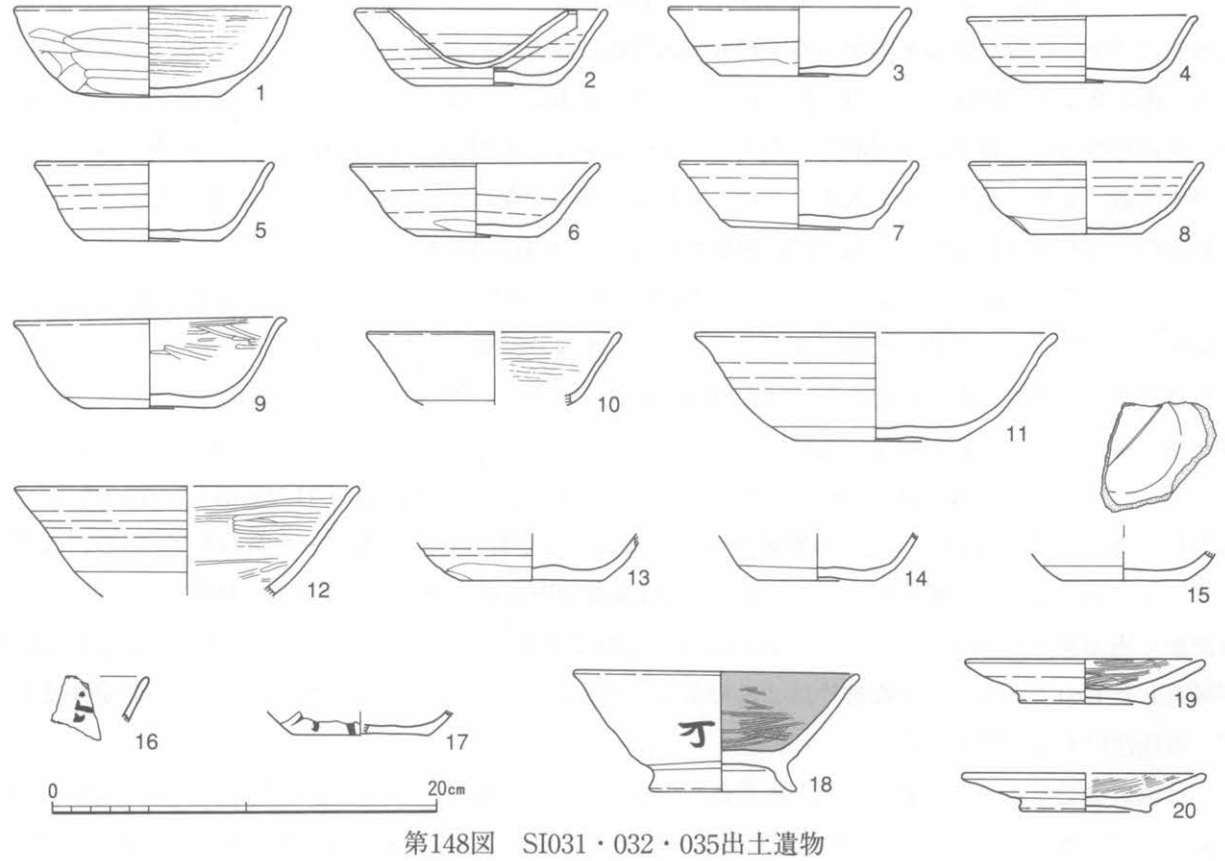
SI031



SI032



SI035



第148図　SI031・032・035出土遺物

24は土師器甕である。火を受け灰色味を帯びる。

25・26は帯金具で，銅製である。25は巡方，29は鉈尾である。25は一辺3.1cmの方形で，中に16mm×5mmのほぼ長方形となる透かしがある。鋲及びその痕跡が四隅と透かしの短辺両側，そして透かしと遠い隅の近くに対称的な位置で2箇所に見られる。裏側である左図中央左寄りに見られるものも鋲であろうか。29はベルト尻側に径3mmの孔がある。錆のため非常にもろく，かなり欠けている。

27～29は鉄製品である。27は鎌で，柄以外は完形品である。28・29は刀子である。

30は石製模造品で，有孔円板である。径1mmの孔が2箇所あり，双孔の円板である。粘板岩製である。

SI036（第149図，図版82・98）

1・2は須恵器坏である。1は完形で割れも無い。2は口縁端部が2箇所若干欠けるのみで，他は割れていない。胎土は1・2とも白雲母を多く含み，2は小石の含有も目立つ。ともに新治窯産である。

3・4はロクロ土師器坏である。3は口径と底径の差が少なく，いわゆる箱形の器形である。4は墨書のある小片で，体部外面に正位で「息」と書かれている。筆が細く，達筆な字体である。3は内外面の一部に剥離が見られ，黒ずみや赤みもあることから，二次的に火を受けたものと思われる。

SI037（第149～151図，図版82・83・91～94・96・98・101）

1・2は須恵器坏である。1は体部外面に正位で「小」の線刻がある。2は体部外面に正位で「巾」の線刻がある。また，1は口縁・体部の一部，端部で1/3周弱が弧状に割り取られていると思われる。他は割れも欠けも無い。割り取り部分と線刻はやや離れている。2も「巾」を含む2片は弧状の破片部分であるが，他にもいくつかの破片が接合している。1と同様な割り取りがあったと断定できるか微妙であるが，可能性はあると思う。ともに小石を多く含み，2は白雲母も目立つ。1・2とも新治窯産である。

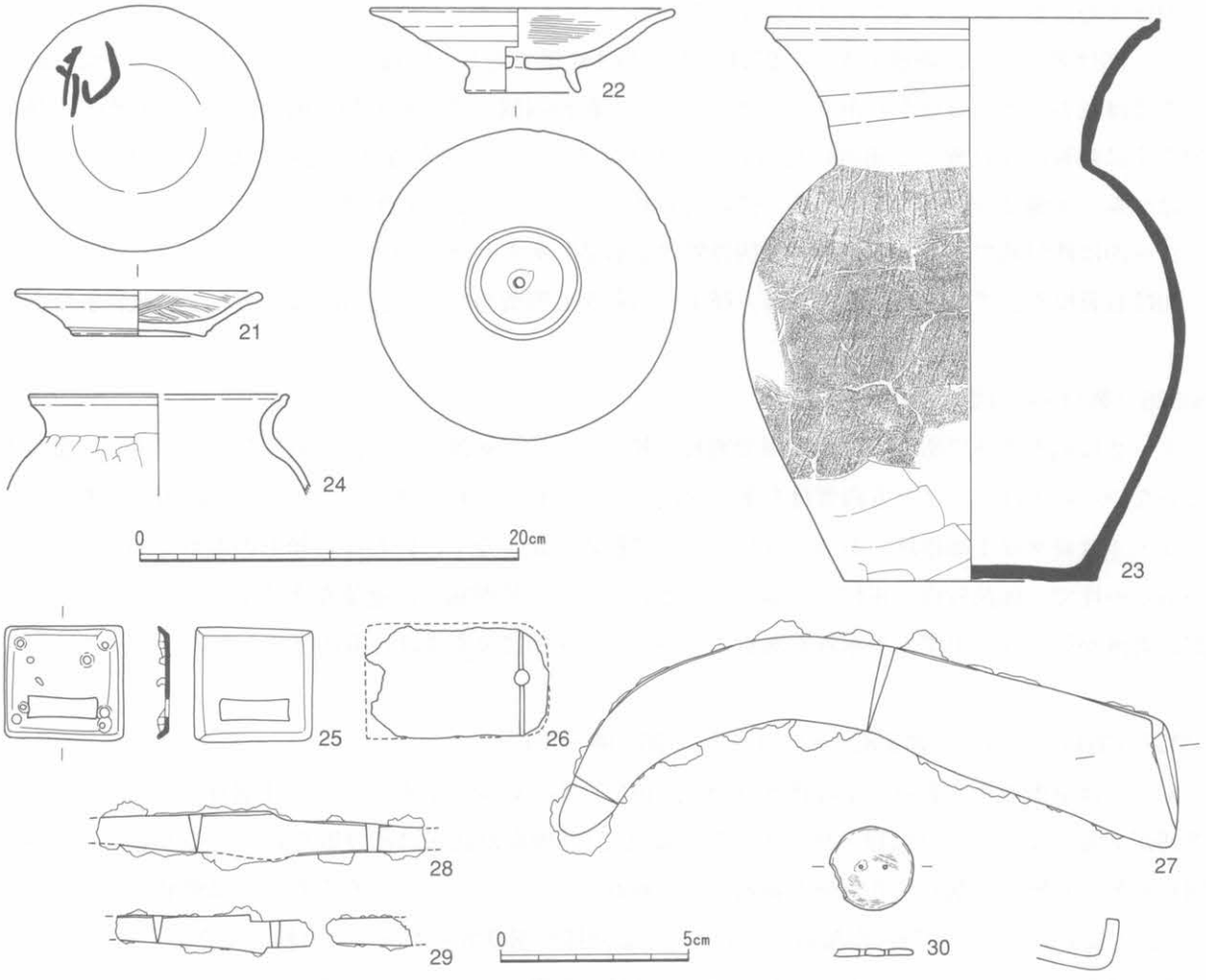
3はロクロ土師器蓋である。つまみは剥離して欠けている。二次的な火を受け，器面の荒れと赤みが著しい。内面は黒ずむ部分も多い。白色粒・褐色粒等の砂粒を多く含む。

4～32・34～52はロクロ土師器坏，33・53・54はロクロ土師器高台付坏である。点数が非常に多いが，29～44は墨書・線刻のある小片で，他の個体の一部であることも考えられる。「巾」の点数が多く，体部外面に正位で書かれた墨書は，23・24・25・29・30・31・34・53，同様の線刻は35の他，36・37も可能性が高い。底部外面に書かれた「巾」墨書は32・33である。なお，25は「巾」の反対側にも墨書があり，「巾」ではないかと思われるが，遺存が少なく，確実ではない。その他の資料では，25の底部外面に2字あるが，判読できない。26・38は底部外面に「十」の墨書がある。27は底部外面に「中」の墨書がある。39・40は体部外面に正位で書かれた「小」の墨書がある。また，43は底部外面に「帀」の墨書がある。41・42・44はいずれも体部外面に書かれた墨書であるが，判読できない。28は内面に筋状の擦痕が多く見られる。線刻の一種であろうか。あるいは研ぎ具に転用されたのかもしれない。被熱により軟質である。

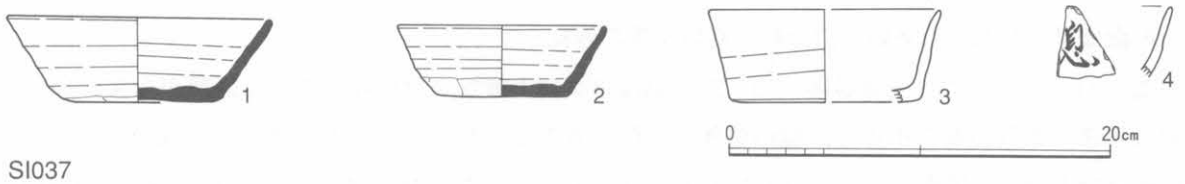
土師器坏の中にも，口縁部・体部を意図的に割り取ったと思われるものがある。特に28は断面が擦れており，可能性が高いと思われる。28は口縁部周の約1/2に及ぶ。5・7も可能性はあるが，断定し難い。26は口縁部に径4mmの穿孔がある。また，口縁・体部が全周打ち欠きされているかもしれない。

坏類で28以外に明らかに二次的な火を受けた土器としては，4・11・14・45・48・49・50がある。特に11は内外面の多くが灰色に変色しており，長期に火を受けた可能性が考えられる。また，4の器面はそれ

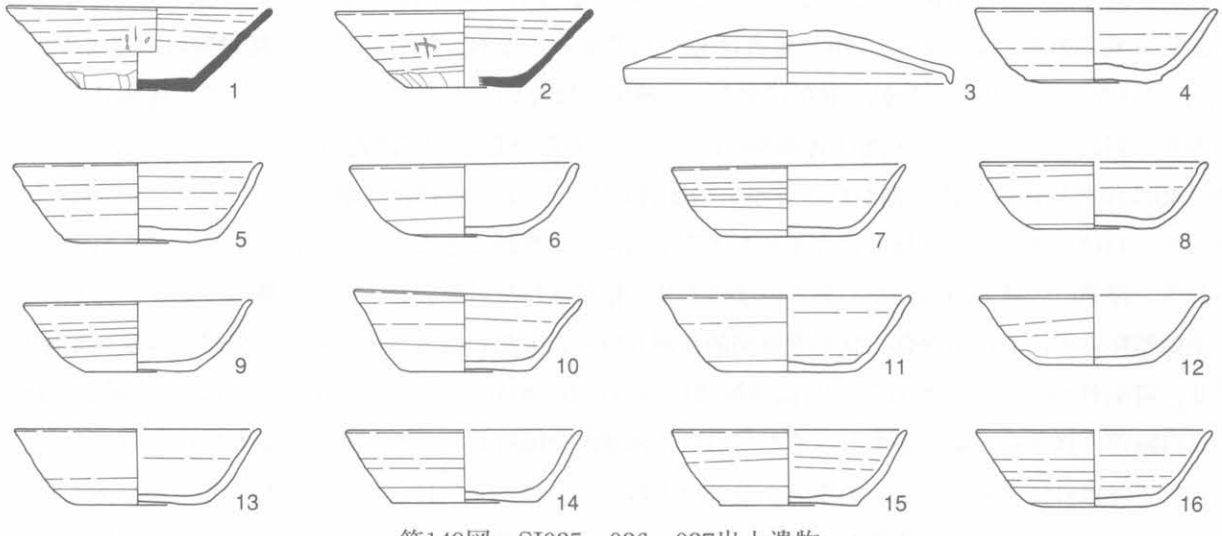
SI035



SI036



SI037



第149図　SI035・036・037出土遺物

ほど荒れてはいないが，内面体部下部から底部にかけてタールと思われる黒色物が斑点状に付着している一部暗赤褐色・黒褐色の部分がある。48・49も内外面とも黒ずむ部分があり，外面には剥離痕が著しい部分もある。48と49は質感が似ており，同一個体かと思われる点もあるが，器の厚みと器高が若干異なることから別個体とした。全体に器面の荒れている土器が多く，他の土器の多くも二次的な火を受けているのかもしれない。なお，25は器面の荒れのため，肉眼では墨書がほとんど見えない。

47～51は内面にヘラミガキが施された坏であり，他と比べ大振りな土器である。特に51は際だって大型であり，50もかなり大型である。47と51は内面に黒色処理も施されている。

52は小型の坏である。回転糸切り離しの後底部外面は無調整である。内外面にタールや煤が付着しており，灯明専用に作られた土器である。口縁部の一部が欠けているが，その部分を中心に内外面及び断面が黒ずんでおり，意図的な打ち欠きである。打ち欠き部分は整った形ではなく，断面もそのままである。33・53・54は内面にヘラミガキ・黒色処理が施されているが，33・53は器面が荒れているため，ヘラミガキが不明瞭である。

55は須恵器長頸壷である。いくつかの破片に分かれており，同一個体であるが接合しない。また，高台は一部分しか遺存していない。暗緑色の釉が胴上部と底部内面に見られる。色調は外面が灰色であるが，一部暗赤褐色・黒褐色の部分がある。内面はやや黄色味を帯びた灰色である。胎土は緻密であるが，黒色粒・白色粒を含む。東海産と思われる。

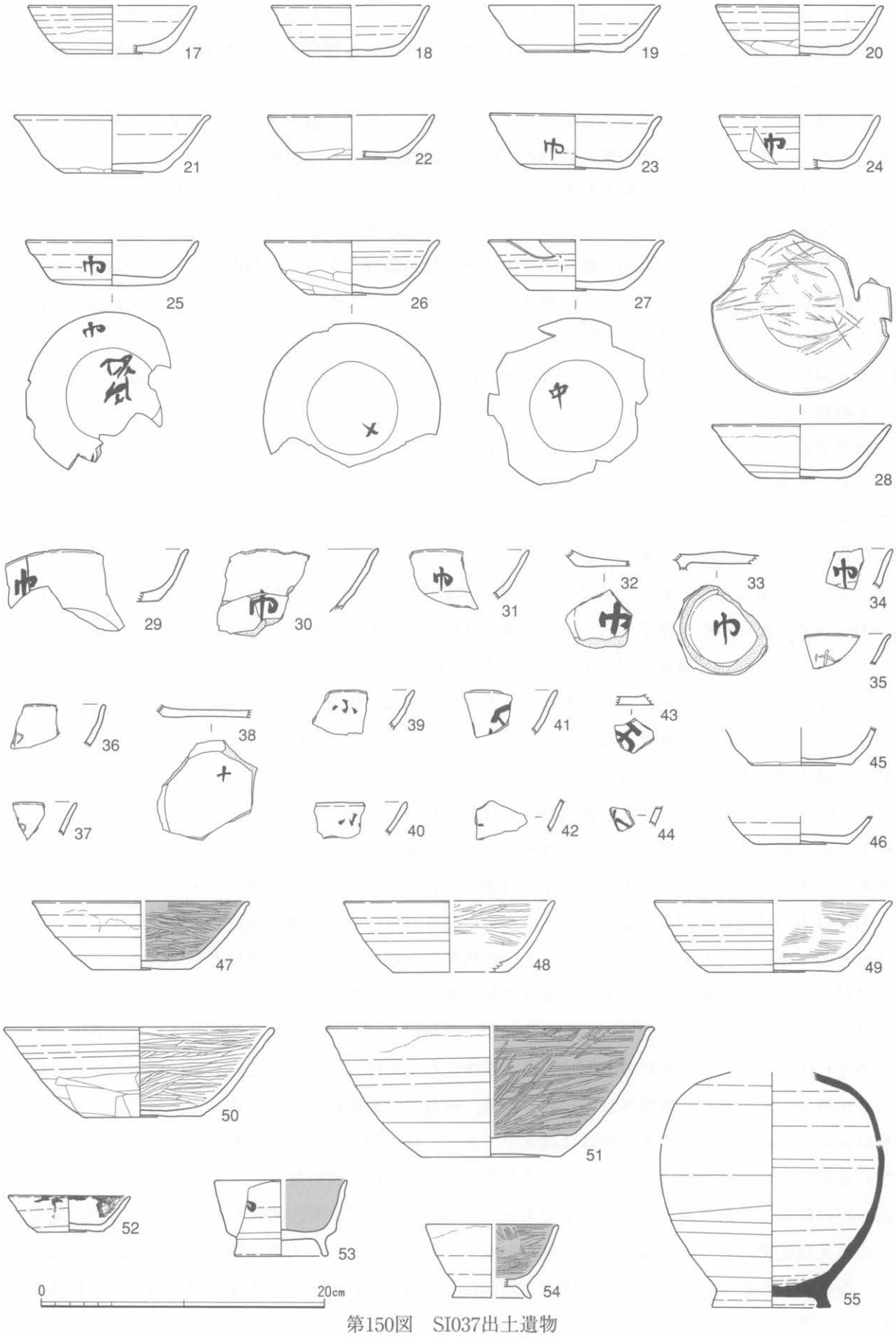
56・57・58は須恵器甑である。56は把手部分の破片である。把手は角状で，貼り付け時に四周を削ったさいのヘラの当たりがやや深く入っている。内面は指頭圧痕が見られる。色調は暗黄灰色であ，胎土は細砂粒を含む。千葉市周辺域産と思われる。57は胴部外面下部にヘラ書きが見られる。上部が欠けており，判読できない。孔は57・58とも五孔である。また，57・58は白雲母・小石を多量に含む。57はやや黄色味を帯びるが，ともに新治窯産である。

59～66は土師器甕である。59は小型の甕，62～66は常総型の甕である。64の底部外面には木葉痕があるが，65・66には見られない。62は胴部内面の荒れが著しい。

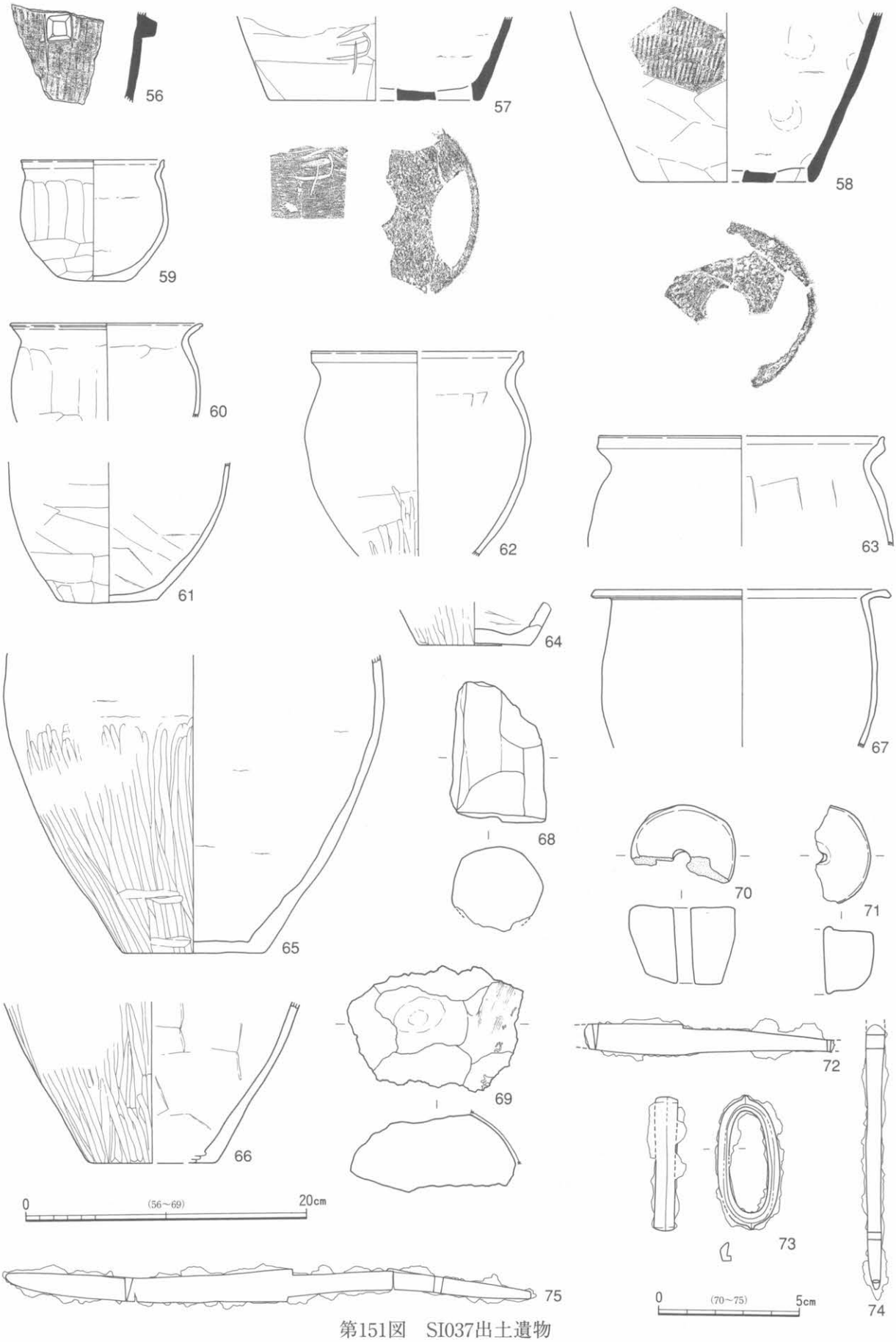
67も土師器甕であるが，在地のものとは異質であり，搬入品である。器形は口縁部が「く」の字状に鋭く屈曲して水平に外に延びるもので，端部が角張っている。胴部外面の調整はナデで，ハケメは見られない。内面は当て具痕状の凹みが見られ，ヘラナデが施されている。色調は灰白色を基調とするが，火を受けて部分的に赤みや黒みを帯びている。胎土は黒色粒等の細粒を含み，白雲母も多く含まれるが，大きなものは見られない。焼成も良好である。産地は東海西部から畿内東部にかけての地域と思われる。

68は土製支脚である。火を受けてややもろいが，長側面はいくつかの面に面取りされて，各々の面は平滑である。69は鉄床石と思われる。図示した上面中央がやや窪んでいる。その右側の傾斜している面にはかなり平滑な部分があり，研磨されている。黒色，褐色の付着物が見られ，鉄分であろうか。他の面に使用痕はみられないが，窪みのある面はほぼ水平であり，反対側の面は窪み面が水平になるように打ち欠かれているのであろう。石材は安山岩で，粒子が粗い。70・71は土製紡錘車である。

72～75は鉄製品である。72・75は刀子である。75は茎が折れており，刃部も曲がっているが，完形である。切っ先は使用によりすり減ってやや丸みをもつと思われる。72の刃関は錆のため不明瞭である。あまり深くないかもしれない。73は刀のはばきと思われる。74は棒状のもので用途不明であるが，紡錘車の柄や釘などが考えられる。



第150図　SI037出土遺物



第151図　SI037出土遺物

SI039（第152図，図版83・94～96）

1は須恵器坏である。色調はやや黄色味を帯びる灰色で，胎土は白色粒・暗灰色粒などの砂粒を含む。内外面に火だすきの痕跡が見られる。

2はロクロ土師器坏である。底部外面に「富」の墨書がある。内外面に剥離痕があるが，器面はそれほど荒れてはいない。

3～7は土師器甕である。3・4・5は小型の甕，6・7は常総型の甕である。3・4・5はいずれもかなり火を受けた痕跡がうかがえる。3は内面下部の剥離が著しく，4・5の内面や3の外面下部は赤みが著しい。4の外面は山砂が付着している。6は比較的小型の常総型甕である。このサイズの常総型甕は本遺跡では珍しい。胴部外面下部の調整技法もヘラミガキではなく，ヘラケズリが施されている。その他の質感は他の常総型甕と変わらない。胎土は多量の小石と白雲母を含んでいる。7は胴部外面下部にヘラミガキが施された甕である。胎土は小石の含有が非常に多い。

8・9は鉄製品である。8は外反りの鎌である。9は錐と思われる。両端とも尖っているのが元々と思われるため，釘ではない。

SI041（第152・153図，図版83・84・91・94・96・101）

1・2・10は須恵器坏である。1は色調が淡灰色で，白雲母・小石を含む。2は色調が暗灰色で，小石を多量に含む。色調に違いがあるが，ともに新治窯産である。2は内外面に火だすきの痕跡が見られる。1の内面に褐色状物質の付着が見られる。口縁部から底部中心までほぼ長楕円形状に薄く付着している。1は欠損部以外は割れていない。口縁部・体部の2箇所を意図的に打ち欠いた可能性も考えられる。10は底部の破片である。内面に2本線と1本線が交差する線刻がある。小石と白雲母を含み，新治窯産である。

3は非ロクロの土師器坏である。口縁部内面にヘラの当たりと思われる痕跡がある。

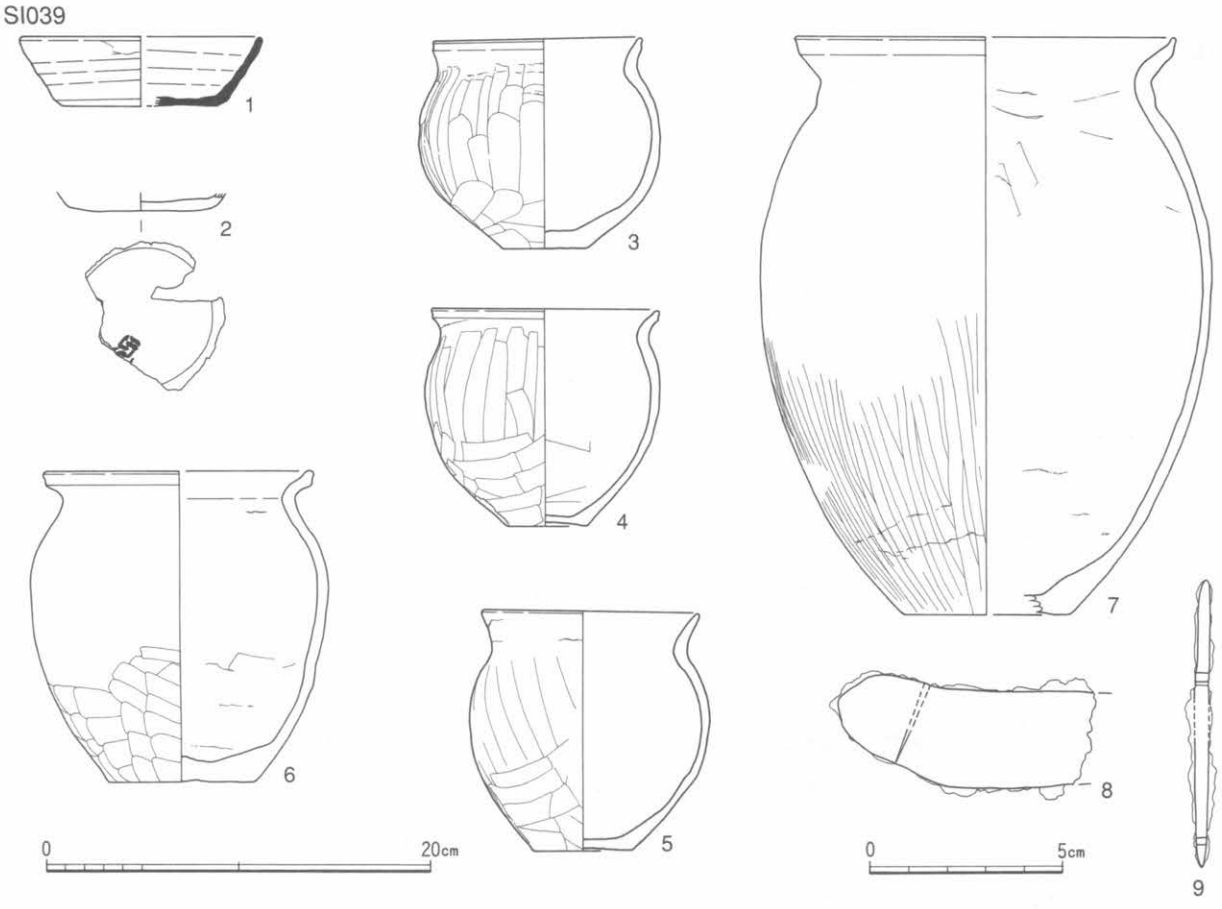
4～7・9はロクロ土師器坏である。4は内外面に油煙が付着し，灯明器として使用された坏である。底部外面は中央の器表面が剥がれている。口縁部端部は所々欠損しているが，打ち欠きと思われるものがある。5の内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。器面がやや荒れており，特に外面下部は剥離が著しい。7の内面は剥離が著しく，外面の一部にも剥離が見られる。器面もかなり荒れている。9は底部外面に墨書があるが，判読できない。内面は黒色処理が施されているが，5とは別個体と思われる。

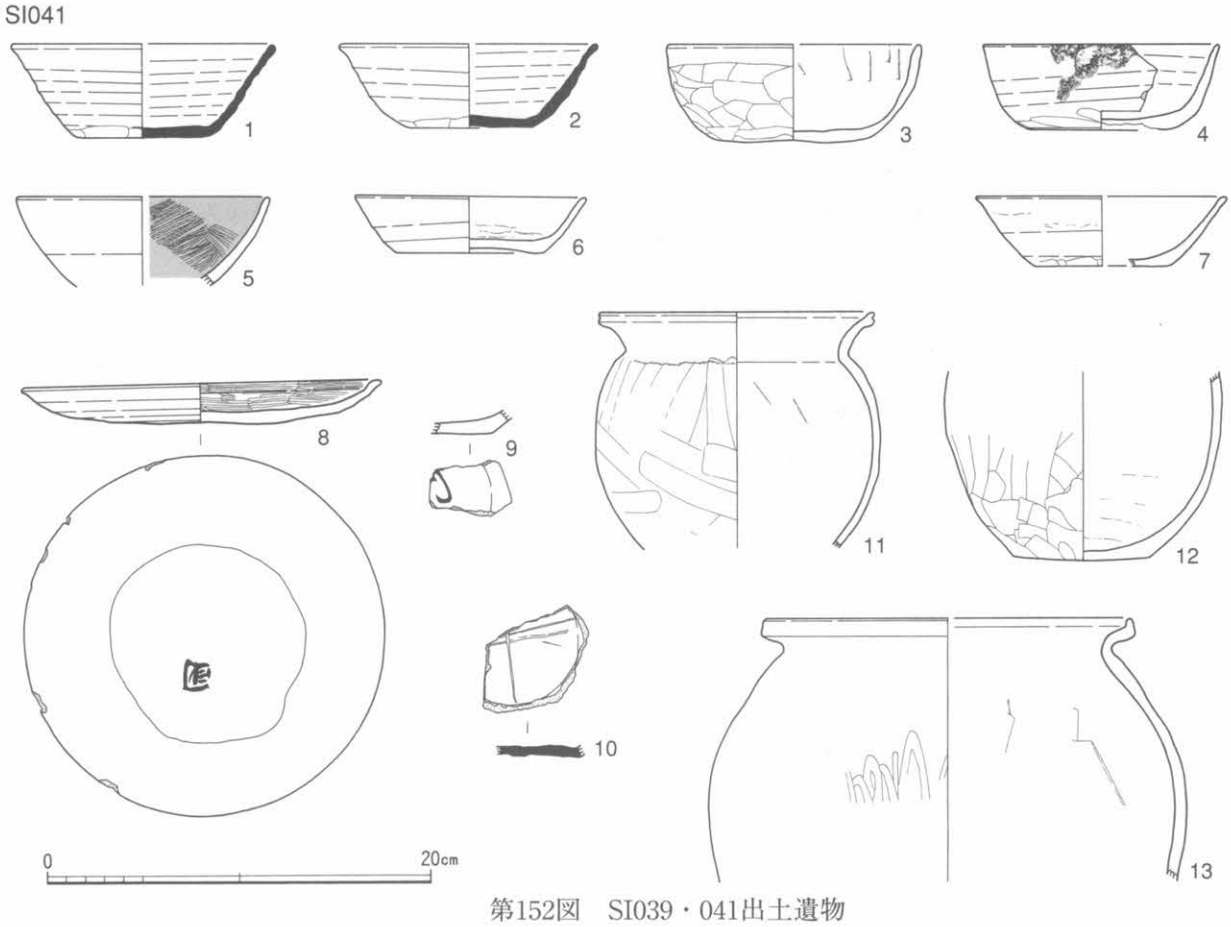
8はロクロ土師器皿である。底部外面に「国」の墨書がある。墨痕はかなり薄い。大きく2片に割れている土器であるが，接合により完形となった土器である。

11～14は土師器甕である。11・12はやや小型の甕である。13・14は常総型甕で，同一個体の可能性がある。14の底部は木葉痕が残る。胴部下部外面は剥離が著しく，所々に山砂が付着している。内面も下部と上部で一部剥離痕が見られる。13も胴部外面が荒れ，内面の一部に剥離が見られる。

15・16は鉄製品である。15は穂摘み具である。遺存が良く，片方の鉄釘の先端を欠損する程度である。釘の頭は方形である。木台部の痕跡も残っている。刃部は中央がやや凹んでいる。使用に伴い，擦り減ったのであろう。16は棒状の鉄製品で，錐であろうか。中央部と両端部がねじられている製品である。

17は紡錘車である。所々欠損する。石材は珪化岩（珪質凝灰岩）である。





第152図　SI039・041出土遺物

SI042（第153図，図版84・98）

1は須恵器坏である。底部内外面に線刻があるが，欠損があるため，全体の形はやや不明瞭である。外面の線刻は四本の線が交差し，内面の線刻は1本しか見られない。外面は火だすきの痕跡がある。胎土は白色の細砂粒を多く含む。

2・3・4はロクロ土師器坏である。2・3の底部外面には「＋（×）」の線刻がある。2の内外面は一部黒色・黒褐色の色調である。灯明器として使用されたのかもしれないが，器面は荒れていない。3は焼成があまく，器面が摩耗している。

5・6は常総型の土師器甕である。6の底部外面には木葉痕がある。ともに白雲母と小石を多量に含む。5と6は厚さの点でつながるかやや懸念があるが，胎土から同一個体であるように思われる。

SI044（第153・154図，図版84・92・96・101）

1・2・5は須恵器坏である。1は体部外面に正位で「麻」の墨書があり，5も体部外面に横位で「□知」の墨書がある。1・5とも墨痕が薄い。2は口縁・体部の一部が弧状に欠ける他は割れが無く，打ち欠かれているものと思われる。また，1も底部の一部が欠ける他は口縁端部がわずかに欠けるだけで遺存が良い。3片の破片の接合個体であるが，底部が非常に薄いため，故意の打ち欠きとは断定し難い。1・2の胎土は小石を多量に含み，5は黒色粒が目立つ。1・2は新治窯産である。

3～7はロクロ土師器坏である。3は「息」の墨書が底部外面と，体部外面に横位で見られる。接合でほぼ完形となる土器であるが，割れ方が意図的であるか断定できない。二次的な火を受け，器面の荒れが著しい。そのため，体部外面の墨書は残りが悪い。また，やや薄いが口縁・体部内面に暗褐色の筋が見られ，筋が端部に達する所の内外面がやや黒ずんでいることから，灯明器として使用されたことが考えられる。灯明器として長期に使用されたのであろう。あるいは，最終的に土器そのものが火を受けたのかもしれない。6・7は破片で，6は底部外面に「＋（×）」のヘラ書きが，7も底部外面に「＋（×）」の線刻がある。7の線刻は浅く，他にも筋状の痕跡が見られる。4は口縁・体部の1片が赤みを帯びて変色し，剥離痕も見られる。破片となった後，他の破片よりも強く火を受けたことがうかがえる。

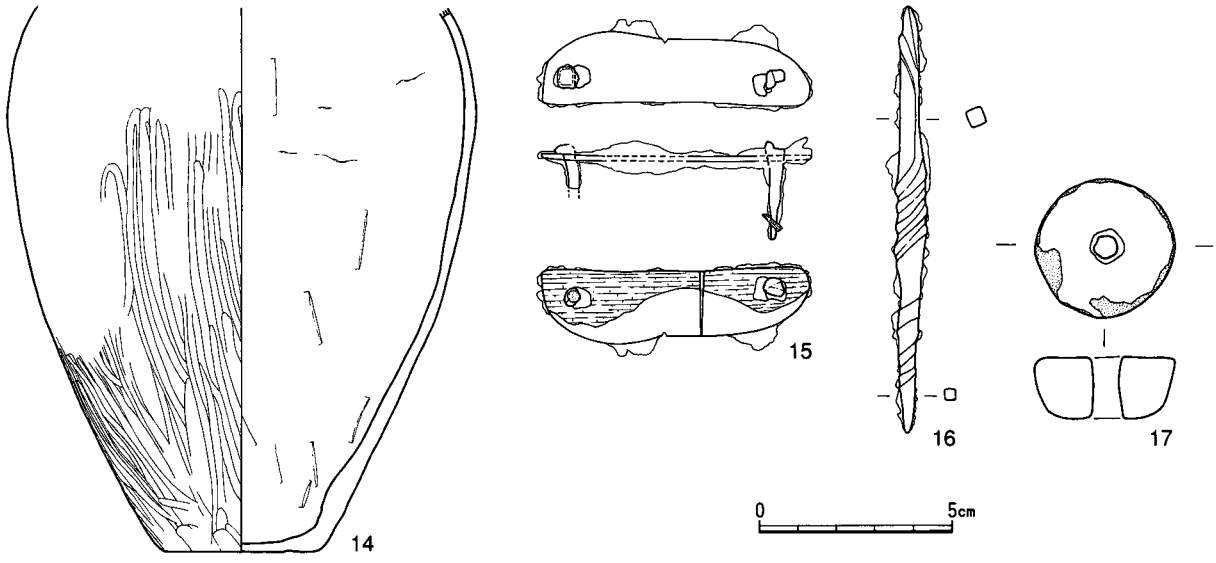
8・9は土師器甕である。8は小型の甕である。口縁部が薄く，焼成も良好で作りの良い土器である。胴部外面は煤が付着して黒ずんでいる。9の胴部外面もヘラケズリの後，ナデやヘラミガキが施され，比較的丁寧な作りである。常総型の甕ではない。

10は砥石である。凝灰岩製である。長側面の四面は使い込まれ，広い面は滑らかであり，狭い面は筋状の研ぎ痕が見られる。

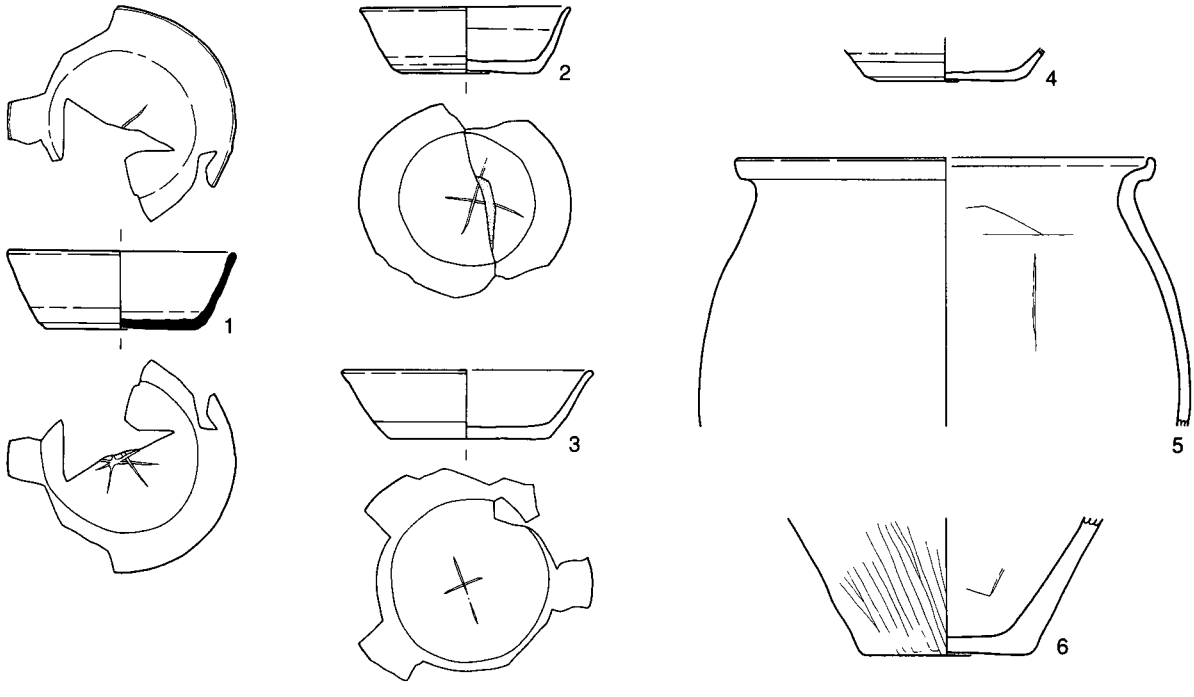
SI045（第154・155図，図版84・91・92・94・98・99）

1～23・25はロクロ土師器坏である。なお，墨書土器小片の中には皿も含まれるかもしれないが，判然としないため，坏として扱う。文字・記号資料から見ていく。13は体部外面に正位で「千」の墨書がある。14は体部外面に正位で「市」の墨書があり，21も同じく「市」の墨書が底部外面にある。22は体部外面に横位で「十万」の線刻がある。23は体部外面に横位で「千」の線刻がある。逆に見て「十万」の疑いもあるが，「万」の下部が無いため，「千」としておく。11は体部外面に横位で「千万」の線刻がある。「万」の上の線刻が欠損のため不明瞭であるが，「千」と思われる。12は体部外面に墨書があり，横位で「十万」

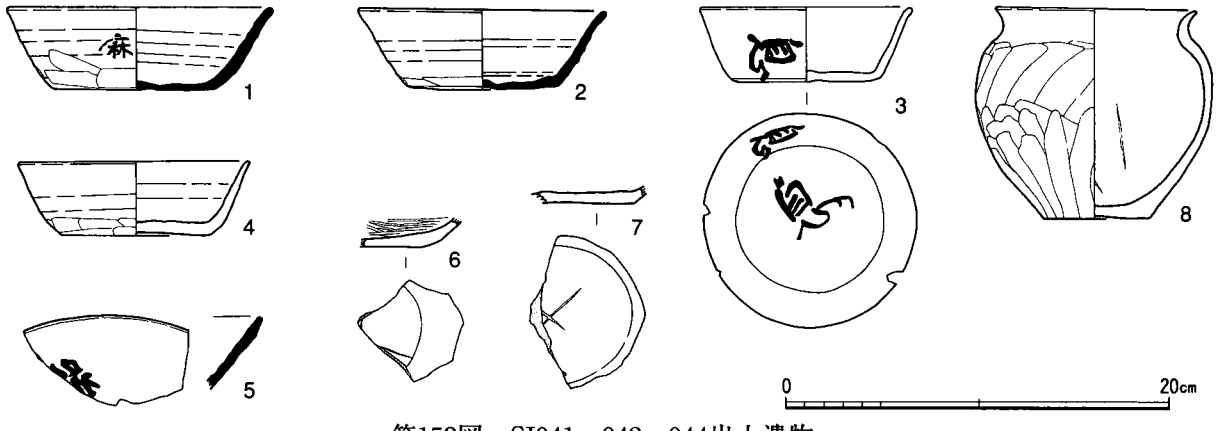
SI041



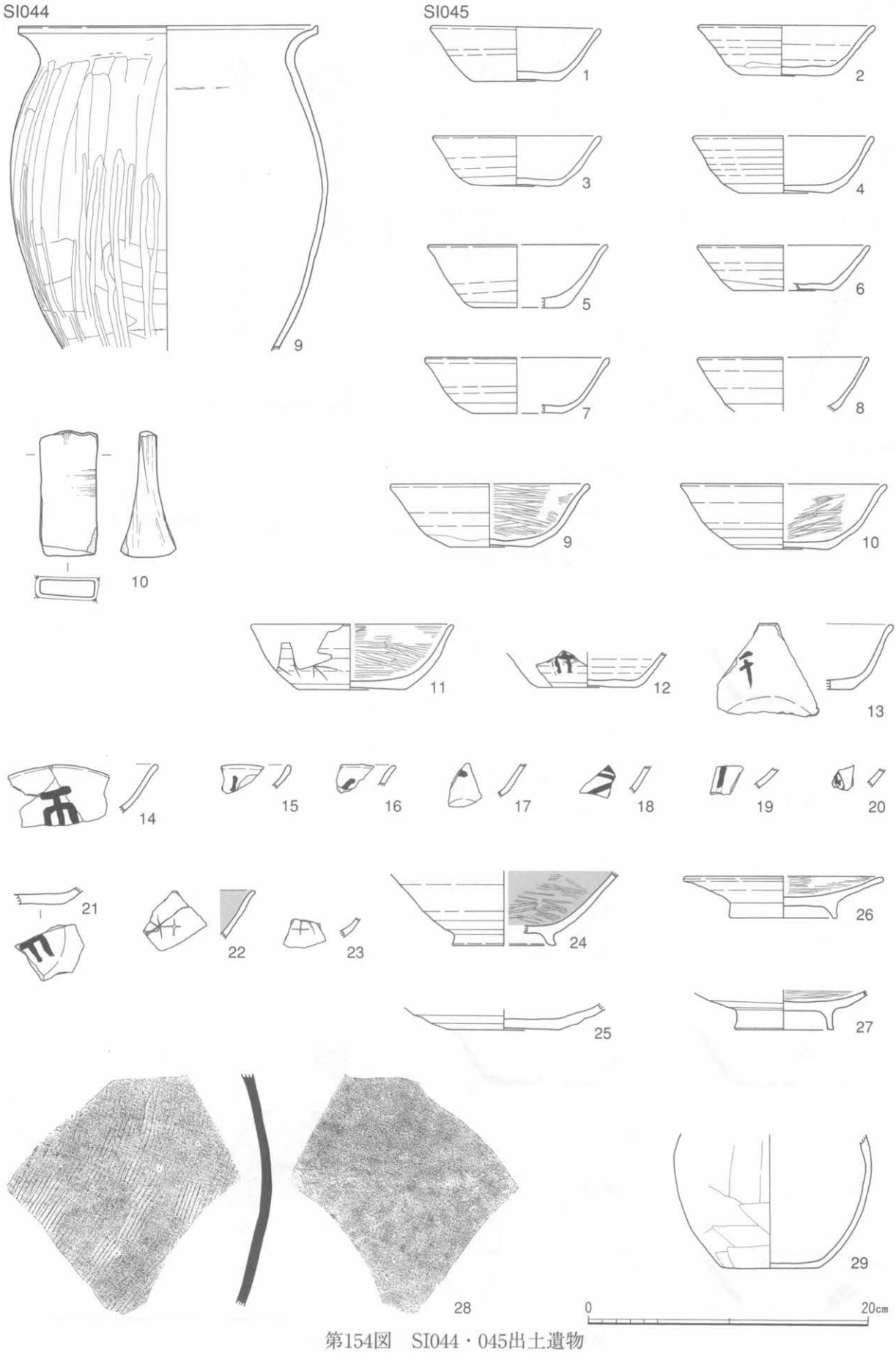
SI042



SI044



第153図　SI041・042・044出土遺物



第154図　SI044・045出土遺物

あるいは「千万」かとも思われるが，欠損部分が多く，不明とする。墨痕に散る部分があり，筆使いが稚拙である。15～20の墨書は判読できない。いずれも体部外面に記されたものである。19の内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。25は大型の坏で，口縁・体部も接合しているが，遺存部分が少なく，誤差の少ない実測図を作成できなかったため，体部下部・底部のみの実測図とした。6は底部中央が内面側から穿孔されたように思われる。全体的に器面が荒れた土器が多く，二次的な火を受けているように思われる。特に1・4は変色し，4の内面は剥離も著しい。

24はロクロ土師器高台付坏である。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

26・27はロクロ土師器高台付皿である。27の器面は荒れており，26は赤みが強い。

28は須恵器甕で，大甕の胴部破片である。内面中央が滑らかであり，研ぎ具に転用されたものと思われる。外面は暗緑色の釉が掛かっている。外面も暗灰色粒が多く見られる。東海産の須恵器であろう。

29は土師器甕である。底部内面に剥離が見られる。

30・31は鉄製品である。30は飛燕式の鉄族で，ほぼ完形である。茎は錆膨れの影響で，ややねじれているが，本来は直線的な形状であろう。31は釘と思われる。釘尻の部分のみの遺存である。表裏に木質が付着している。

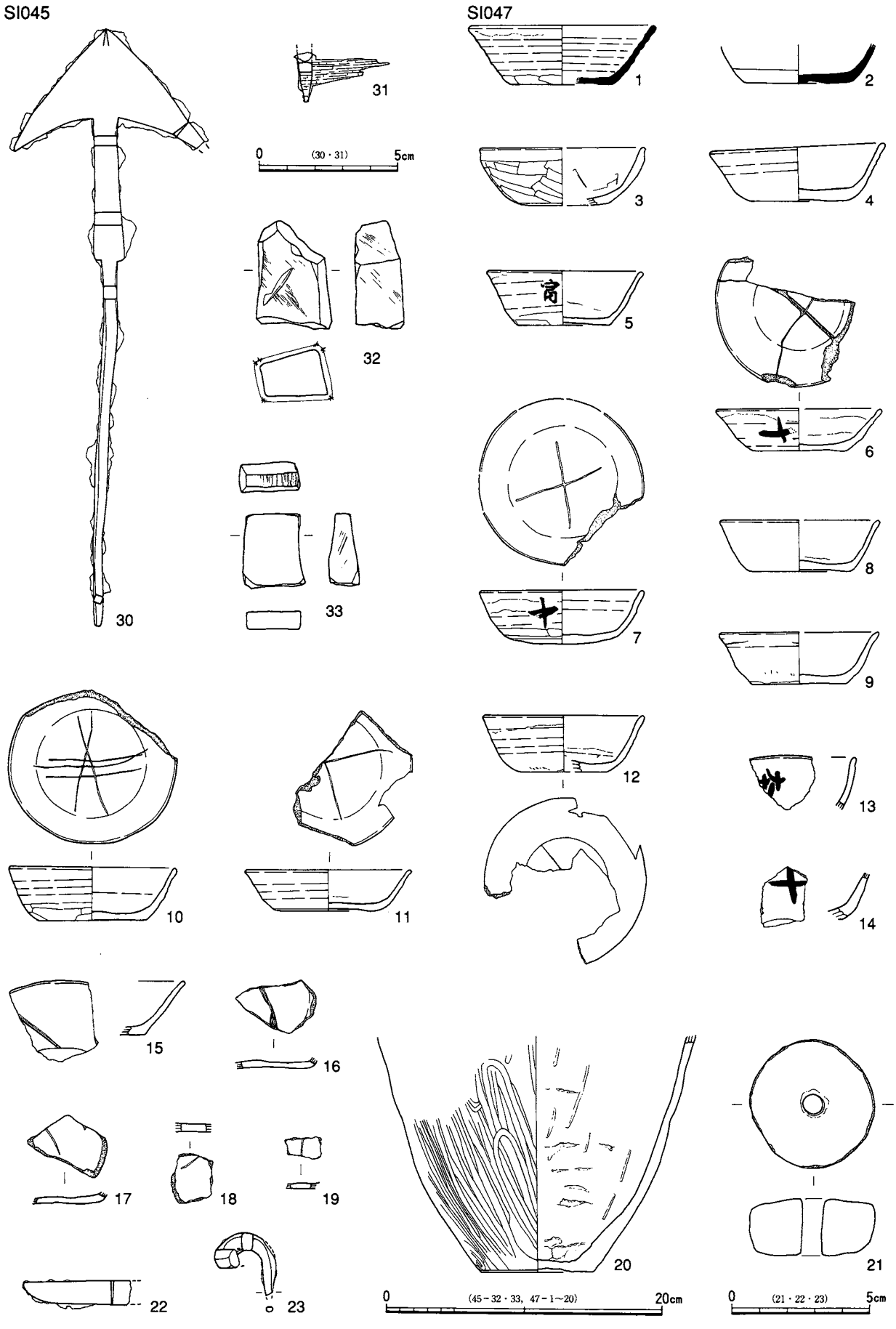
32・33は砥石である。ともに石材は凝灰岩で，全面が使用されている。32は広い長側面の片側と厚みのある方の小口面に筋状に研ぎ痕が見られる。また，33も薄い方の小口面に筋状の研ぎ痕が縦に多く見られる。　その他，炭化した種子がある。図示していないが，写真を掲載した。梅の実と思われる。

SI047（第155・156図，図版84・91・99・101）

1・2は須恵器坏である。1は新治窯産で，白雲母を多量に含む。2は底部切り離し技法がヘラ切りであることから須恵器としたが，色調がまったくの橙褐色，褐色であり，土師器の可能性もある。2は元々の色調も褐色味のあるものと思われるが，二次的な火を受けて，赤みを増しているようである。全体にひび割れ状となり，火を受けた土師器とはやや違和感もある。須恵器ならば，千葉市周辺域産であると思われる。

3は非ロクロの土師器坏である。褐色粒の含有が目立つ。4～19はロクロ土師器坏である。10は淡灰緑色粒・褐色粒の含有が目立つ。5は口縁・体部外面に正位で「富」の墨書がある。6は体部外面に横位で「十（または＋）」の墨書と，底部内面に「＋」の線刻がある。線刻部分で割れている。7も6と似た個体である。体部外面の墨書は「中」と読める可能性もあるが，「十（または＋）」の変形と考えたい。正位の墨書と思われる。14も体部外面に「十（または＋）」の墨書がある。横位か正位かよくわからない。13は体部外面に横位で「本」の墨書がある。10・11・16・17・19は底部内面に線刻があり，10は五本線が交差する星形のような形状，11は「＋」である。10・11以外は線刻部分の遺存が少なく，17・19は一本線，16は一本線の重なりであり，方向の異なる線は見られない。12・18は底部外面に一条の線刻が見られる。これらも交差する線の有無は不明である。15は体部外面に2条の平行する線刻がある。

5は口縁・体部の2/5程度を欠き，「富」の左上の口縁端部も僅かに欠けている。その他は割れていない。欠損部は意図的な打ち欠きかもしれない。7も墨書近くの口縁・体部の一部を弧状に欠く他は，欠損が少ない。ただし，残りの口縁・体部が全体に割れている。欠損部の形は比較的整っている。10も口縁・体部のおよそ2/5を欠く他はひびが入る程度で割れていない。ただし，割れ口はあまり整っていない。7・10



第155図　SI045・047出土遺物

は内面の線刻を施すために，意図的に口縁部・体部を打ち欠いているのかもしれない。しかし，5の内面には線刻が見られず，意図的なものであれば，打ち欠いて残りの形を整える行為そのものにも意味があるものと思われる。

4・8は二次的な火を受けたことが顕著な土器で，いずれも黒色・赤褐色に変色する部分があり，器面もかなり荒れている。4は外面に山砂も付着している。9も器面の荒れ，色調から同様の可能性が高い。その他，破片の16・17も器面の荒れ・剥離が著しく，土器全体が火を受けたことも考えられる。

20・24は土師器甕である。ともに常総型の甕である。20は24よりも厚みがあり，ヘラミガキが丁寧であるなど，質感も異なるので別個体である。20の底部外面には木葉痕が見られる。24はヘラミガキの前にヘラケズリが施されている。

21は紡錘車で，凝灰岩製である。

22・23は鉄製品である。22は刀子の先端部の破片である。25は性格を特定できないが，釘などの棒状の鉄製品が曲がったものかもしれない。

SI049（第156図，図版85）

1はロクロ土師器坏である。口縁部が全周欠損しているが，もっとも良く遺存しているところは端部に近いと思われる。意図的な打ち欠きかわからない。

2は土師器甕である。胴部外面はヘラケズリの後ヘラミガキ的なナデが粗く施されているが，器面が荒れており，不明瞭である。胴部内面は器面の剥離が著しい。

SI050（第156図，図版92・96）

1は鉄床石である。石材は安山岩である。図示した上面は縁辺を除いて，敲打により材質の凹凸が減り，滑らかとなっている。下面は凹凸が見られ，使用されたとしても少なかったであろう。側面は使用されていない。

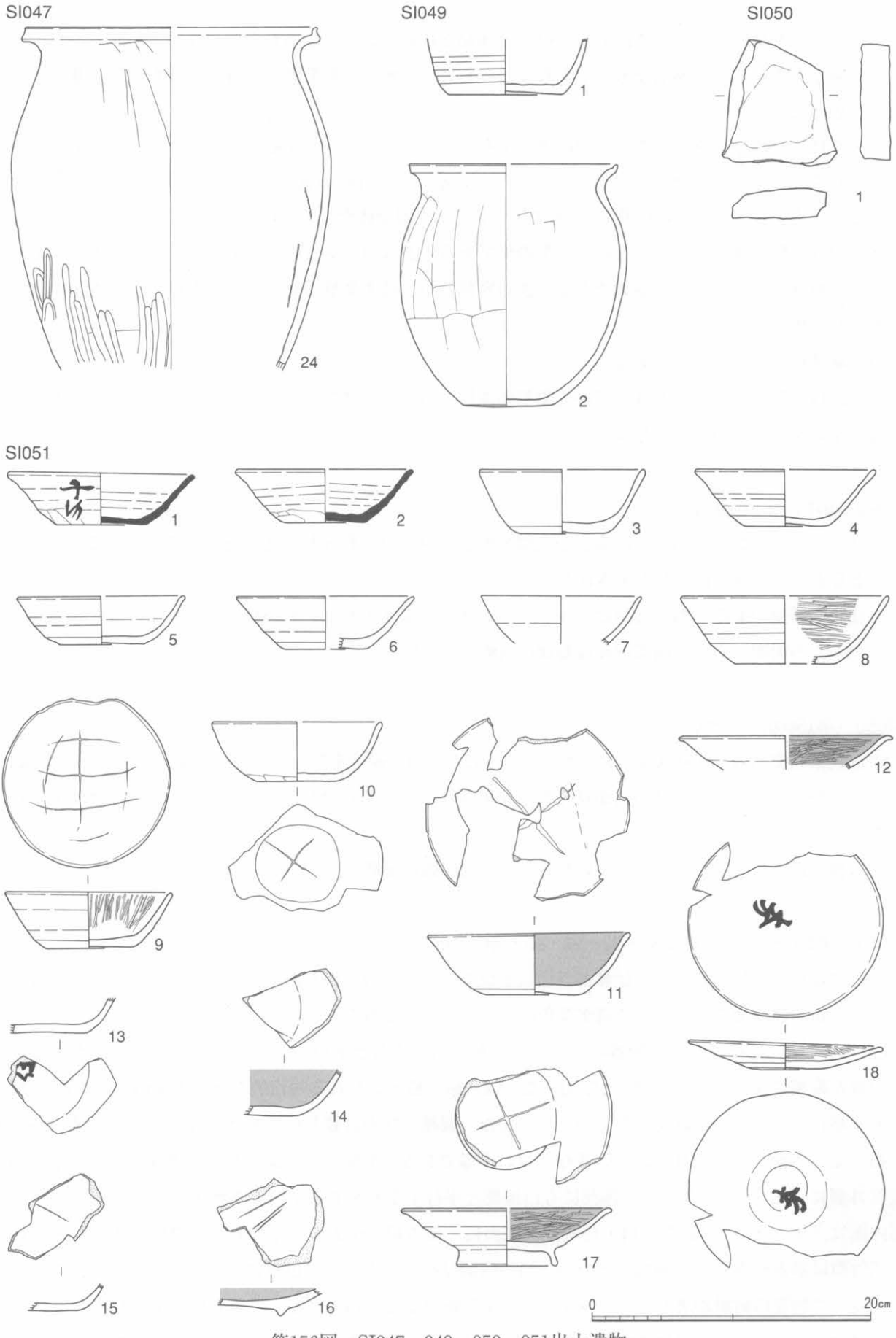
その他，鉄滓については図示していないが，写真図版に掲載した。

SI051（第156・157図，図版85・92・93・95・99・101）

1・2は須恵器坏である。1は体部外面に正位で「十□」の墨書がある。1・2とも白雲母・小石を多く含み，新治窯産である。1は色調が黄色味を帯びた灰色である。

3～11・13～15はロクロ土師器坏である。線刻のある土器が多い。9は底部内面に「井」がある。7本の線が縦横に交差するもので，九字切りまたは四縦五横といわれる呪術的な記号の簡略形である。なお，より正確にいえば，一本は交差していない。また，縦横の区別は難しい。9は口縁部端部の1箇所が若干欠損しているが，他は割れていない遺存の良い土器である。欠損部は意図的な打ち欠きと思われる。10は底部外面に「＋（×）」がある。体部にも口縁部と平行する筋があるが，線刻か傷か判別し難い。11は底部内面に「＋（×）」がある。14・15も底部内面に一条の線刻がある。小片のため線は不明である。13の底部外面に墨書があるが，判読できない。11の内面はヘラミガキ・黒色処理が施されているが，二次的な火を受けて器面の剥離が著しく，ヘラミガキが不明瞭である。14の内面も黒色処理が施されている。

17はロクロ土師器高台付坏であるが，坏部が浅く，皿的である。底部を欠く12は皿的な器形で図示した



第156図　SI047・049・050・051出土遺物

が，17と同一個体の可能性がある。16も有台の土器で，口縁部を欠くため不明瞭であるが，ロクロ土師器高台付皿としておく。18は無台のロクロ土師器皿である。「大万」の墨書が底部内面と底部外面にある。16・17の底部内面には線刻がある。17は「＋（×）」で，16は三条線が平行的に見られる。16はそれ以外にも線刻と思われる筋や，傷・擦痕がある。12・17・16の内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

坏皿類は二次的な火を受けたと思われる器面の荒れや剥離の見られる土器が非常に多い。3・6・7・9・11・15・17はその痕跡が明瞭であり，4・8・13もその可能性がある。9は器面の荒れのために，線刻の一部が痕跡的である。

19は須恵器甕である。色調は黒灰褐色，暗黄色で，千葉市周辺域産である。

20～23は土師器甕である。22・23は常総型の甕である。20は火を受け，胴部中位以下の赤みが強い。23は胴部内面の荒れが著しい。

24・25は円盤状土製品である。24は須恵器甕または甑の破片を転用したものである。須恵器は黒色・暗赤褐色で細砂粒を含み，千葉市周辺域産と思われる。25はロクロ土師器坏の体部破片を転用したものである。胎土は雲母・褐色粒等の細砂粒を含み，色調は淡褐色，暗淡褐色である。26・27は軽石である。28は土製支脚である。中央で大きく2片に割れてはいるが，遺存が良く完形で，重量感がある。29は鉄製品で，刀子の茎と思われる。

SI052（第157図，図版85・92・94）

1は須恵器坏である。胎土は小石と白雲母を多量に含むが，茶褐色粒も見られる。新治窯産である。

2・3は土師器甕である。2はやや小型の甕，3は常総型の甕である。2は胴部外面下部・底部外面に山砂が付着している。底部外面は一部に木葉痕が残る。胴部内面は剥離の著しいところがある。全体に赤みが強い。3は常総型甕の中でも大型で，胴部上部の径が大きい。

4は土玉である。表面は凹凸があるが，焼成は良好で，硬質である。5は鉄製の刀子で，完形である。背関はやや鋭角である。刃関は錆のため不明瞭であるが，やや鈍角になると思われる。

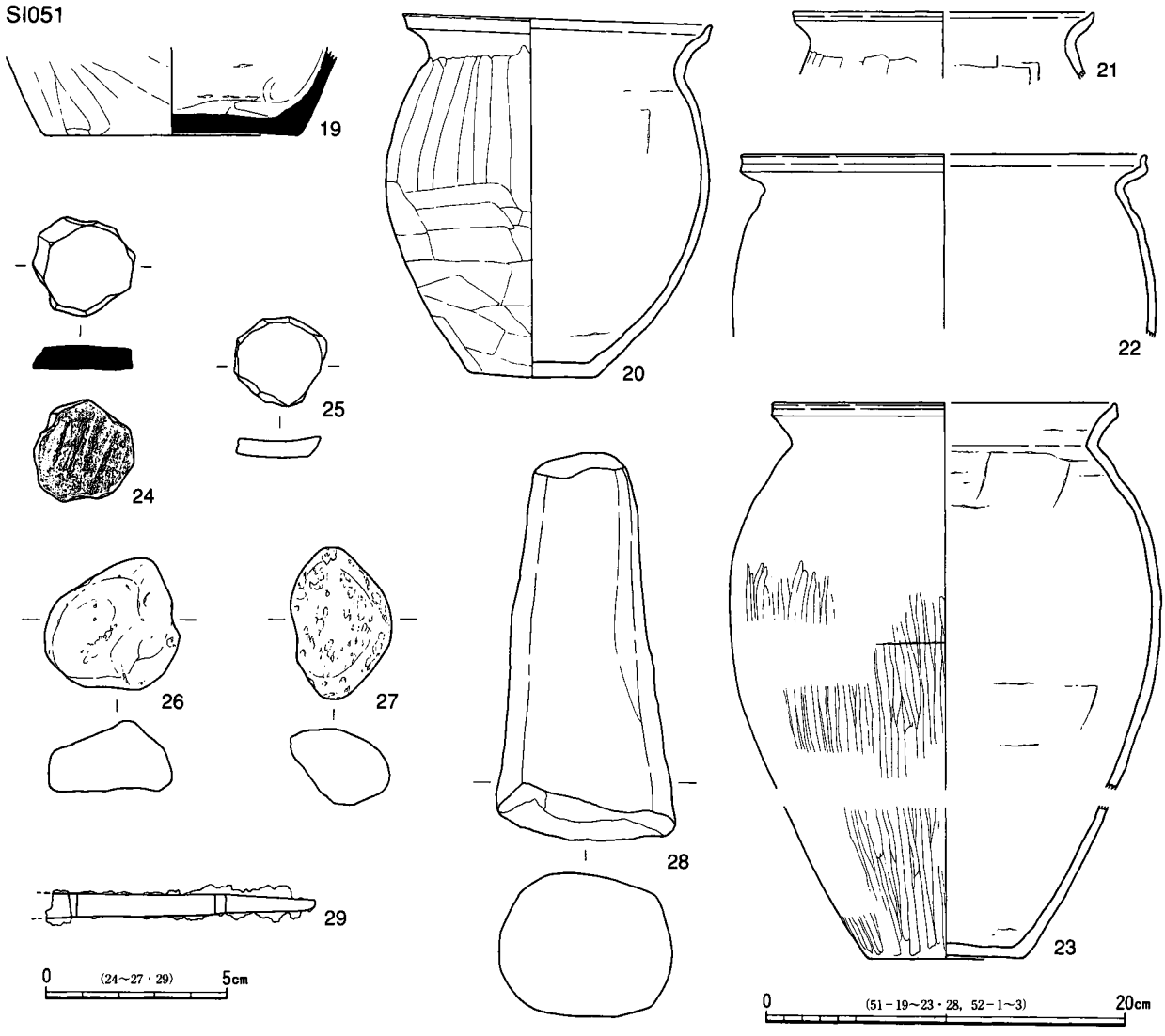
SI053（第158図，図版85・92・99）

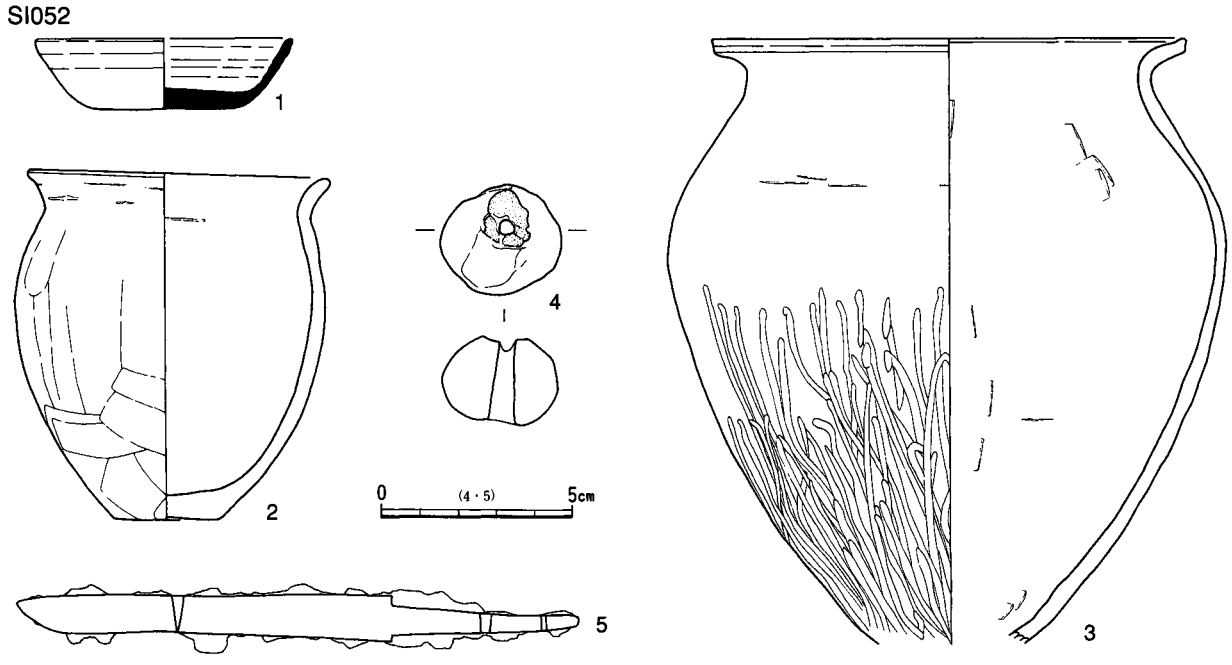
1・2は須恵器坏である。2は底部切り離し技法が明らかにヘラ切りであることから，須恵器としたが，質感は土師器的である。二次的な火を受けたものと思われ，橙褐色，暗褐色に変色し，器面は摩耗している。胎土は細砂粒を多く含み，小石や白雲母はあまり含まれない。1は硬質な須恵器である。色調が青灰色で，底部は僅かに褐色味がある。多量の小石を含み，粒径の大きなものもある。新治窯産である。

3～7はロクロ土師器坏である。6は体部外面に横位で「七」の墨書がある。7は体部外面に正位で「市」と思われる墨書がある。5は長期に火を受けており，口縁部外面が灰白色に変色している。その下部の体部外面には大きな剥離も見られる。4も底部内外面に剥離が見られ，二次的な火を受けたものと思われる。また，3も底部外面が荒れている。

8は土師器甕で，常総型である。底部は木葉痕が見られる。

9は砥石である。石材は珪化岩（珪質凝灰岩）である。破損しているが径5㎜の孔があり，提げ砥といわれる携帯用の砥石である。図示した上面と側面は擦られて，平滑である。下面は使用されていないが，使用面が剥がれてしまったのかもしれない。





第157図　SI051・052出土遺物

その他，図示していないが須恵器甕の胴部上部破片がある。外面に横位の平行タタキが施され，胎土は白色粒を多く含む。内面には高さ2cm前後の粘土紐を積み上げた接合痕が5条見られる。新治窯産である。

SI055（第158図，図版85）

1はロクロ土師器坏である。器面が荒れ，内面は剥離痕が多く見られる。二次的な火を受けたものと思われる。

2は土師器甕で，常総型である。小石・白雲母を多量に含む。

3は土製品である。ボタン大の大きさで，中央が窪んでいる。用途不明である。4は軽石である。

SI057（第158・159図，図版85・94・99・101・102）

1・4は須恵器坏である。ともに底部内面に「＋（×）」の線刻がある。1は「＋」の片方が近接する2条の線刻であり，「十」ともとれるが，「＋」の変形と考えて良いと思われる。胎土はともに白雲母を多く含み，色調も双方やや黄色味のある灰色である。ともに新治窯産の須恵器である。

2・3・5～11はロクロ土師器坏である。3は「大」の線刻が底部外面と体部外面に正位で見られる。5～11は体部外面に墨書がある。5～8は正位の墨書で，5は「立合」，6は「善」，7は「前」である。8は欠損部分も多いが「息」と思われる。9・11は横位に2文字あると思われるが，判読できない。10も墨書の残りが僅かであり，判読できない。3は接合により完形となった土器である。底部に割れは無く，口縁・体部が5片に均等に分割するような状態で割れているが，意図的なものか断定し難い。5は器面がかなり荒れており，特に口縁部内面の剥離が著しい。6は口縁部の一部を残して打ち欠きされている可能性がある。

12はロクロ土師器高台付坏である。坏部は丸みをもつ椀ともいえる形態である。内外面とも暗い色調であり，内面はヘラミガキも施されているが，黒色処理を意図したものではないと思われる。

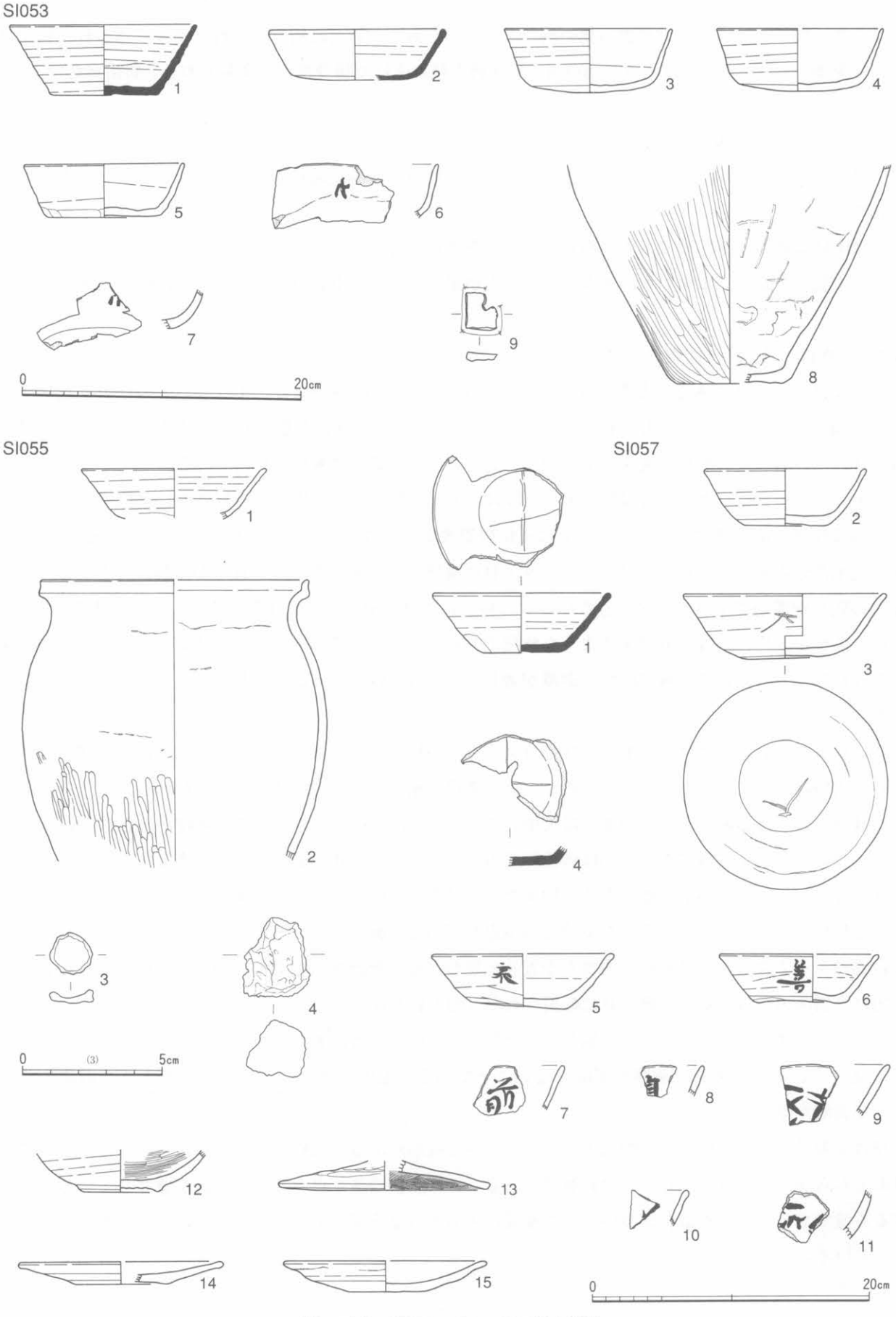
13はロクロ土師器蓋である。つまみは欠損している。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

14・15ロクロ土師器皿である。15は体部外面のヘラケズリにより段皿のような形態である。

16（a・b・c）は須恵器甑である。口縁部と底部を含む破片があるが，連続して接合しない。色調は灰色と褐色味のある部分がある。やや軟質の須恵器である。胴部外面は横位の平行タタキが施され，胎土は白雲母を多く含む。孔はやや不明瞭だが五孔と思われる。新治窯産である。胴部の破片である16bは割れ口に2箇所の窪みがある。研ぎ具に転用されたものと思われる。

17は土師器甕で，常総型である。胴部外面は焼けた山砂の付着が著しい。ヘラミガキは山砂の付着もあって見にくいが，本来的に痕跡が明瞭でないようである。器壁は薄く，丁寧な作りである。胴部内面は所々で剥離が見られる。

18は土製品である。胎土に植物繊維の混入している痕跡がある。支脚から剥がれたものか，住居の構築材のどちらかと思われる。19・20は鉄製品である。19は鉄族の茎と思われる。木質が遺存している。20はくるる鍵である。かなり遺存が良いが，先端部は屈曲する部分が欠損しているものと思われる。基部は遺存している。



第158図　SI053・055・057出土遺物

SI058（第159・160図，図版85・86・94・95・99）

1～4は須恵器坏である。1・4は底部内面に「＋（×）」の線刻がある。4は交差する線が各々1条であるが，1は数条の刻線どうしが交差している。1は引っかき傷のような浅い刻線である。2は口縁・体部の一部が「U」字状に欠けているが，その他は割れも欠けもない土器である（整理時に僅かに割ってしまったが）。土師器坏に同様なものが数点あることから，意図的な打ち欠きと思われる。外面側に破断面が見えることから，内面側から割ったものと考えられる。1も口縁端部に僅かな欠けがある他は，まったく割れていない土器である。僅かな欠けではあるが，意図的な打ち欠きの可能性が高いと考える。打ち欠きとすれば，2と同じく内面側から欠いている。3は器面が荒れており，内外面に黒ずみや赤みが見られ，二次的な火を受けた痕跡が明瞭である。しかし，遺構の状況から本竪穴住居の遺物は多くのものが二次的な火を受けているわけであるが，1・2・4と比べて異質である。その理由として，3は土器そのものが他より軟質であることに加えて他と違った状況で火を受けたことが考えられる。本竪穴住居でそのような状況であった場合と，他所からの廃棄・流入の双方が考えられる。胎土は1・2・4が小石を多量に含み，3は白雲母を多く含む。いずれも新治窯産である。

5～9はロクロ土師器坏である。5は底部外面に「富」の墨書がある。7・8は底部内面に「＋」を基本とする線刻がある。9も同様であるが，体部外面にも1条線と「＋」の線刻がある。9体部外面の「＋」状況から，本遺構出土土器の場合，底部内面の交差する線刻も「×」ではなく，「＋」とした方が良いと思われる。底部内面の線刻を見ると，7は一本線の交差であるが，8は片方が2本線となる。9も8に似ているが，2本線と交差する線は体部寄りで2本となっている。

8・9の口縁・体部の一部は「V」字状・弧状に欠損しており，意図的な打ち欠きと考えられる。また，6も口縁・体部の一部が弧状に欠けており，同様な状況と思われる。6の欠損部の状況から，須恵器同様，内面側から打ち欠いたものと思われる。なお，8はやや細かく割れているが接合している。6・9は他に1箇所割れているが，ほぼ接合している。5もやや不整であるが口縁・体部が打ち欠かれた可能性がある。それに対し，7は割れも欠けもないまったくの完形である。線刻のある土器が必ずしも打ち欠かれるとは限らず，逆に線刻も墨書もない6に打ち欠きが見られるなど，状況は単純ではない。

6は火を受けて内面がぼろぼろである。須恵器坏3同様異質な状況がうかがえる。ただし，6は須恵器2の下にあったことから，本遺構に伴う土器と考えられる。住居が火災または焼却する以前から，本遺構で長期に火を受けていたものと考える。

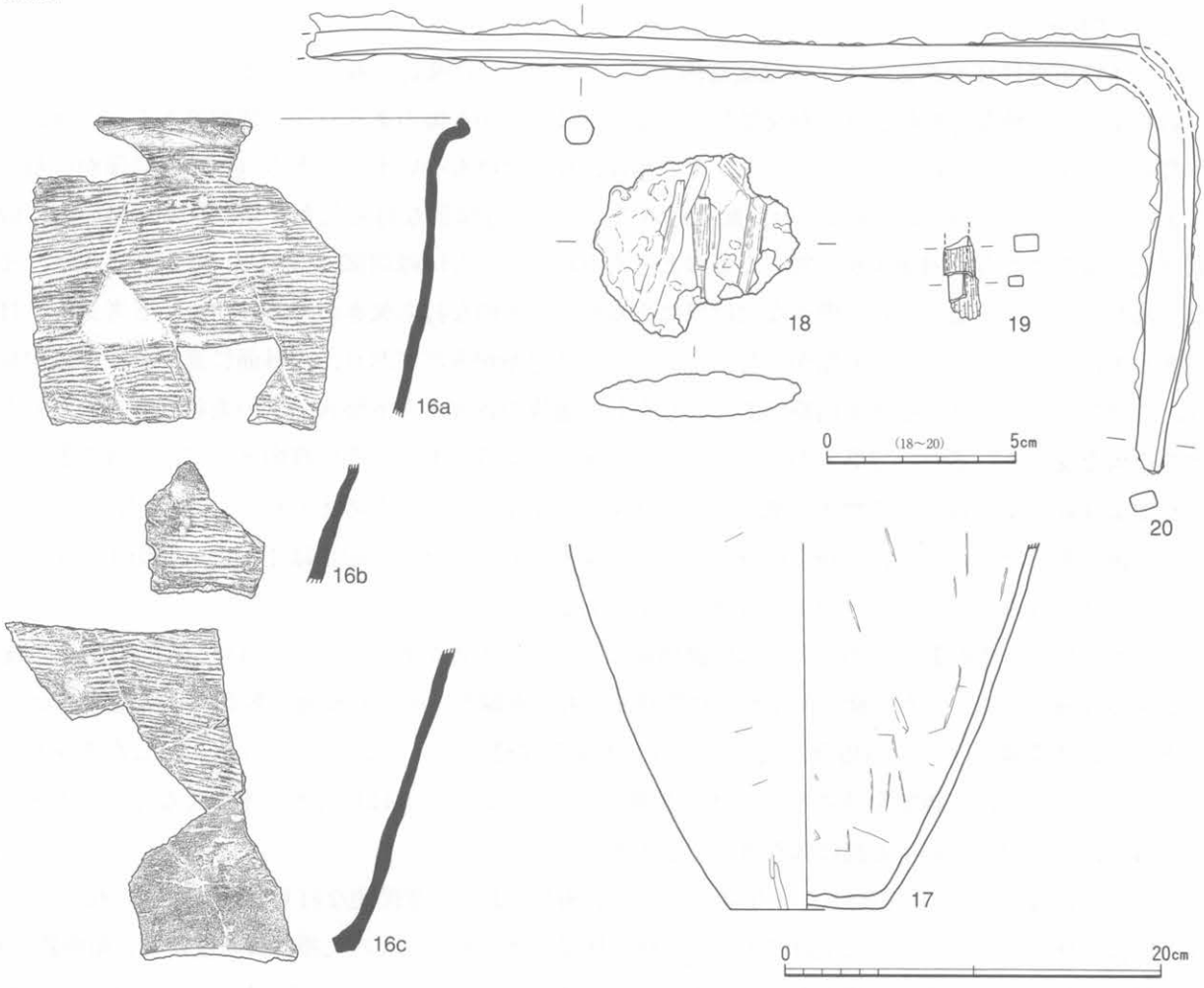
須恵器坏・土師器坏の様相を見ると，本遺構は不慮の火災に遭ったのではなく，竪穴住居廃棄に伴う焼却の可能性が高いと思われる。

10は土師器蓋である。天井部外面の一部に山砂が付着している。内外面とも器面が荒れている。

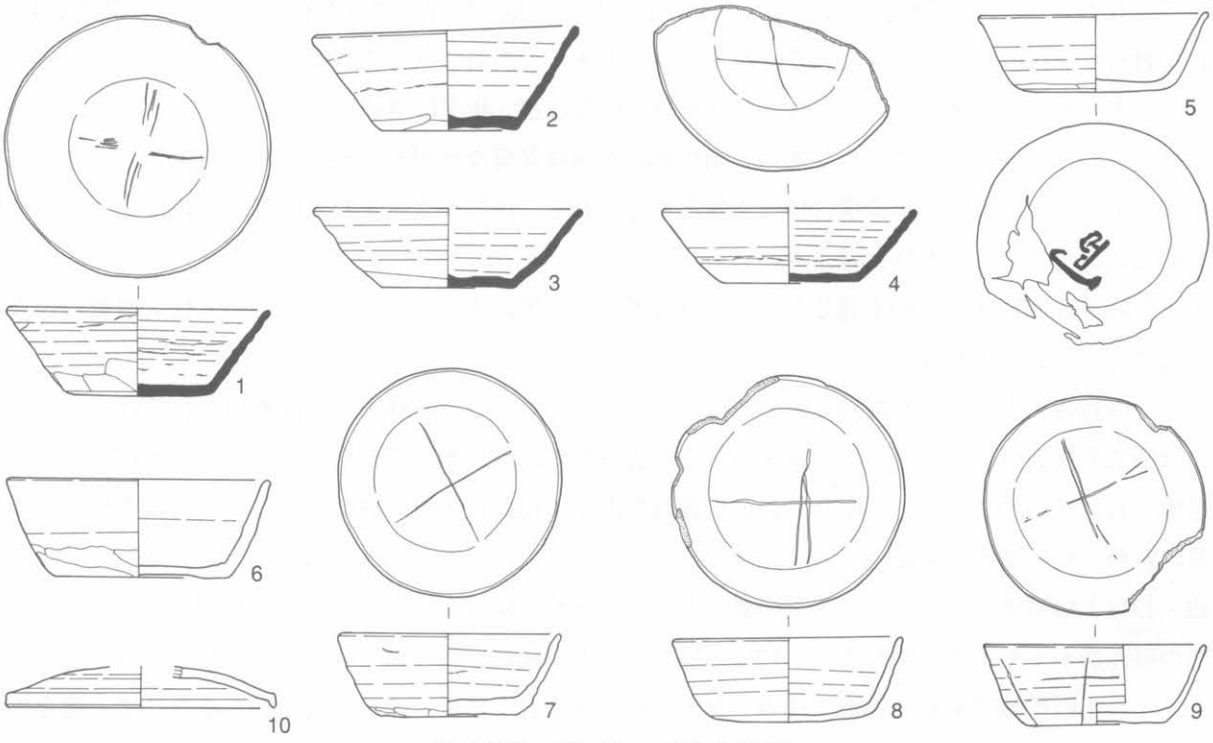
11は須恵器高台付坏であるが，口縁・体部が除去されて，硯に転用されたものである。断面はかなり丁寧に擦られ，凹凸が少ない。しかし，器面が荒れており，硯面に平滑な面は見られない。白雲母・小石を多量に含む。新治窯産である。

12・13は土師器甕である。13は小型の甕である。口縁部・胴部上部と胴部下部・底部が接合しない。口縁部の復元形がやや大きい感もある。12は口縁部が水平に延び，14と似ているので，甑の可能性も考えられる。14は土師器甑である。胴部下部の一部をやや大きく欠く他は，僅かな欠損があるだけで，遺存の良い土器である。色調は淡褐色であるが，胴部下部の一部に暗褐色部分がある。底部からおよそ6㎝くらい

SI057



SI058



第159図　SI057・058出土遺物

の高さのところまでで，外面は欠損部にかかるが現状で半周以上見られる。内面もやや希薄なところがあるが，半周近くに見られる。使用に関わるものであろうか。

15は石帯である。石材は蛇紋岩製である。表面と側面は良く研磨されて光沢がある。側面は革帯側に近い方で面取りされて，全周に稜をもつ。裏面は平坦であるが，研磨されてはいない。革帯に留めるための双孔が，丸みをもつ石帯尻側中央に1箇所，反対側の両角部に2箇所ある。孔は表面へは未貫通で，そのため双孔である。

16・17・18は鉄製品である。16は刀子で，はばきも残っている。茎部分の木質は一部を除いて痕跡的である。17は棒状のもので用途を特定できないが，鉄族あるいは紡錘車の柄などが考えられる。18は外反りの鎌で，先端から基部までである。基部の折り返しは錆膨れが著しく，厚みがやや不明瞭である。

SI059（第160・161図，図版86・91・95・96・99）

1～4・12・13は須恵器坏である。1・2・12・13は線刻がある。1は底部内面に「＋（×）」，12も体部外面に「＋（×）」がある。2は刻線が浅くやや不整である。6条程度の線が見られるが，平行する線もあるので，大きく見れば4条の交差線といえよう。13は底部内面に2条見られる。小片であり，本来は「＋（×）」を基本形とするものかもしれない。，なお，12・13は1～4とは別個体であり，また，各々も別個体である。1は口縁・体部の一部が欠けているが，95%遺存の土器である。細かく割れている部分は2片が接合し，他は大きく2片に割れて接合する。口縁・体部の割れは打ち欠きか断定し難いが，可能性はあると思う。3は軟質で，器面が荒れている。また，黒色味，褐色味を帯びる部分が多い。二次的な火を受けたものと思われる。須恵器坏は小石や白雲母を含み，いずれも新治窯産である。

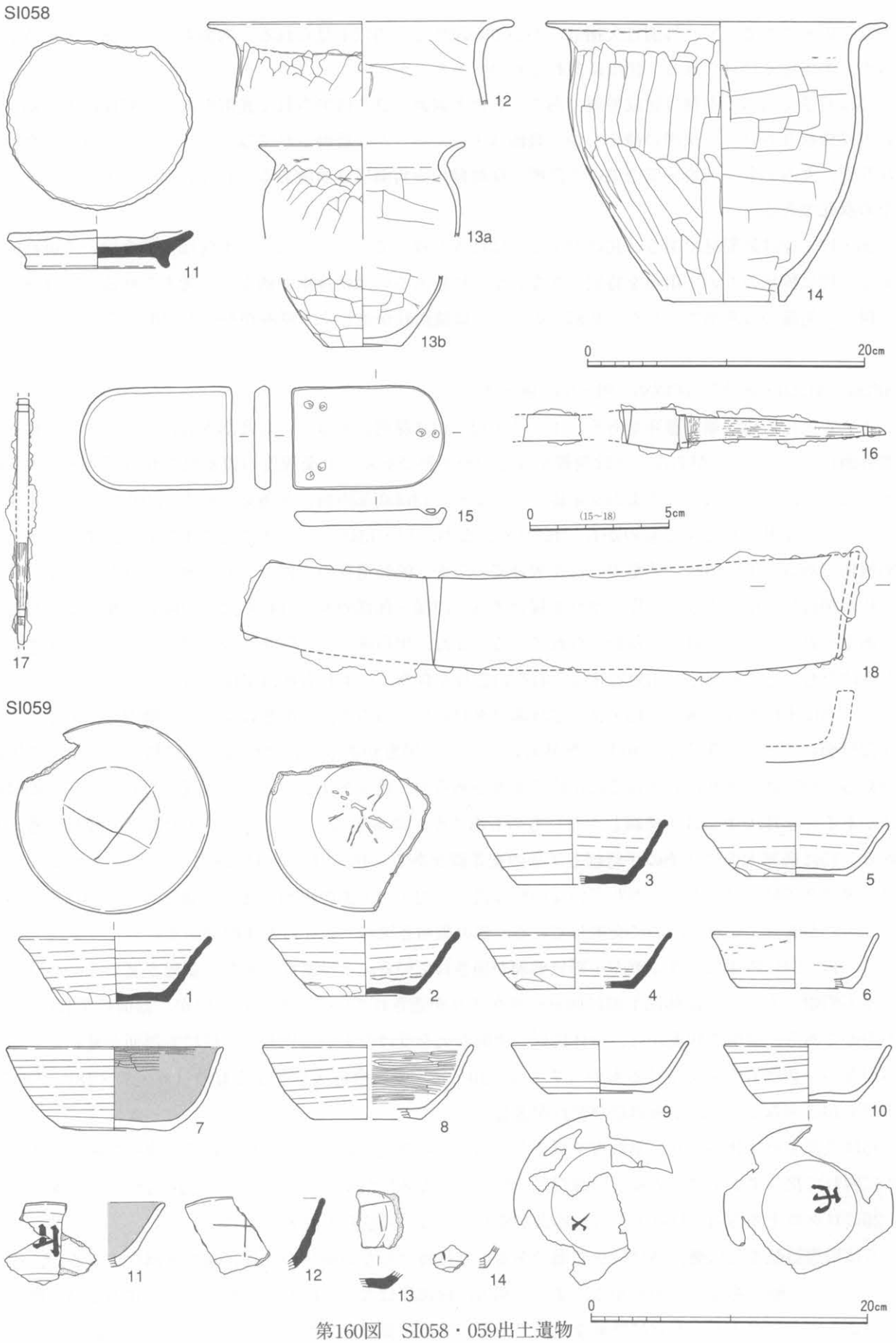
5～25は土師器坏である。15・16・23は非ロクロの坏であるが，その他はロクロ土師器坏である。9は底部外面に「十」の墨書が，10も底部外面に「市」の墨書がある。11は体部外面に横位で「上」の墨書がある。14は体部外面におそらくは正位で墨書があるが，残りが僅かであり，判読できない。15～25は線刻がある。小片の中には1条線しかないものもあるが，基本的に「＋（×）」かまたはその変形と考えられる。15は底部内面に2条の平行線と1条の交差線がある。16～21も底部内面に「＋（×）」がある。20は一部で2条見られるが，交差していない線は浅い。22・24・25の線刻も底部内面である。23は底部外面に「×」があり，かなり斜めに交差している。他の線刻と比べ，異なった傾向である。

7・11・24は内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。7は器面の荒れ・剥離が著しく，ヘラミガキが不明瞭である。8は体部下部に回転ヘラケズリが施されているかもしれないが，器面の荒れにより，不明瞭である。遺構の状況から，全体的に二次的な火を受けたものと思われ，他にも器面が荒れている土器が多い。色調も赤みを帯びるもの（7・8・10・16）や灰白色味を帯びるもの（6・7・18）がある。中でも16は赤みが強く，内面のひび割れが著しい。

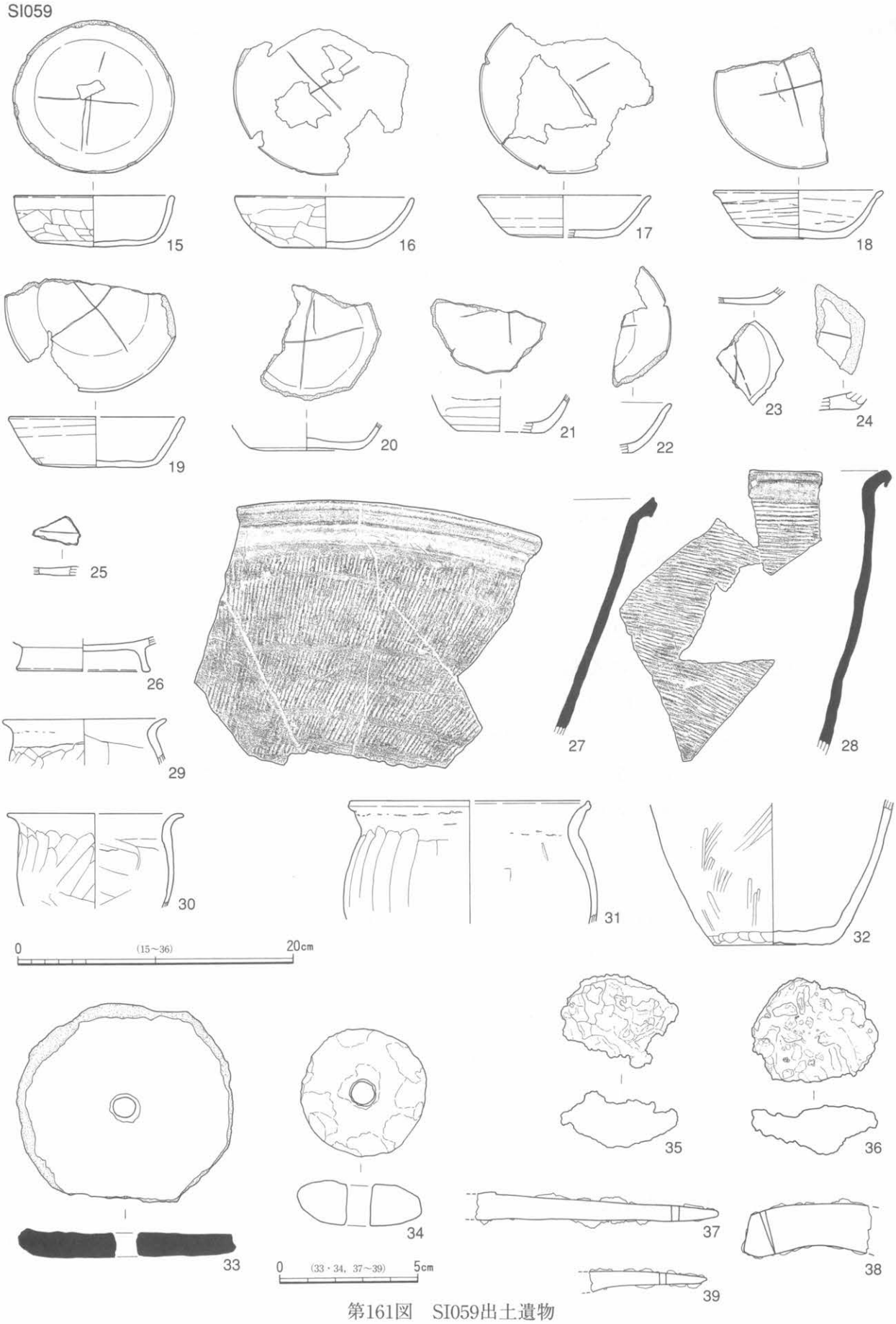
15は底部中央に孔があり，割れ方を見ると，内面から穿孔されたものと思われる。穿孔を境に大きく2片に割れて接合する土器である。口縁端部も欠けている部分が多いが，こちらは意図的か断定し難い。

26はロクロ土師器高台付坏である。器面が荒れている。褐色粒の混入が目立つ。

27は須恵器甑または甕，28は須恵器甑である。28は接合しない破片の一部に胴部下部片があるが，それにより五孔の甑であることがわかる。また，別の口縁部片は大きく曲がっており，かなりの高温で焼成されたことがうかがえる。非常に堅緻な土器である。27は白雲母を，28は小石を多量に含んでおり，ともに



第160図　SI058・059出土遺物



第161図　SI059出土遺物

新治窯産である。

29～32は土師器甕である。29・30は小型の甕である。32は常総型の甕で，底部外面に木葉痕が残っている。31は胴部外面の一部に山砂が付着している。

33・34は紡錘車である。33は須恵器坏の底部を転用したもので，中央が穿孔されている。周囲も円形に近く整えられ，断面が擦られている。小石を多量に含んでおり，新治窯産である。34は土製で，ややあまい焼成である。指頭により成形した痕跡が所々に見られる。

35・36は鉄滓で，椀形滓である。37・38・39は鉄製品である。37は刀子である。背関と思われるところを図示したが，あまり明瞭ではない。刃部及び刃関は遺存が少ないことと錆膨れにより不明瞭である。38は鎌の切っ先で，小型の鎌である。39は刀子の茎部分と思われる。

SI061（第162図，図版96）

1は鉄滓である。他に図示したものはない。土器破片を見ると，9世紀代と思われるものが多い。須恵器は坏及び甕（または甑）とも，新治窯産のものがあり，また，須恵器甕の中には千葉市周辺域産と思われるものも混じる。土師器坏はロクロ土師器坏がほとんどで，底部外面には回転糸切り後，外周が回転ヘラケズリされたものが見られる。また，内面にヘラミガキ・黒色処理が施されたものも数点ある。土師器甕は常総型のものがかなりある。

SI069（第162図，図版86・87・92）

1・2は須恵器坏である。2は底部内面に「＋（×）」の線刻がある。1は小石・白雲母を多く含み，新治窯産である。2は1よりも緻密な胎土である。

3は非ロクロの土師器坏である。内面及び体部外面にヘラミガキが施され，比較的丁寧な作りである。4は須恵器甕である。下半部が遺存し，上半部が欠損しているが，欠損部はある程度打ち欠かれたものと思われる。出土状況から祭祀的な状況ではなく，上部の欠損あるいは必要が生じたことなどにより，打ち欠いて二次利用したものと思われる。小石をやや多く含むが，焼成は良好である。新治窯産である。5・6は土師器甕である。5は小型の甕である。器面がざらつき，一部暗赤褐色，灰褐色に変色している。6は常総型の甕である。外面は黒く焦げた山砂や煤が多く付着しており，胴部下半部に施されたヘラミガキがやや不明瞭である。底部外面はヘラケズリが施されていると思われるが，山砂の付着と器面の荒れにより不明瞭である。内面もやや黒ずんでいる。

7は須恵器甕または甑の胴部上部破片である。肩部に径1㎝弱×8㎜強の穿孔がある。外面側から穿孔されており，内面はやや広がっている。器面が荒れており，外面上部は剥離が著しい。二次的な火を受けたものと思われる。内面は2～4㎝の厚さの粘土紐を積み上げた接合痕が5条見られる。胎土は小石・白雲母を多量に含む。新治窯産の須恵器である。接合しない同一個体の破片があり，肩部の内面が黒ずんでいる。なお，4とは別個体である。

8は砥石である。石材は凝灰岩である。全面が使用されており，長側面は平滑である。図の右側の狭い面には筋状の研ぎ痕も見られる。両小口面も擦られているが，長側面ほど平滑ではない。また，図の右下部分の角部が凹面状に抉れている部分もやや滑らかであり，使用された面といえる。

SI077（第162・163図，図版87・91・94・95・99・102）

1～9・12～16はロクロ土師器坏である。8は体部外面に正位で「埴」の墨書がある。12～16は体部外面に墨書が書かれた小片であるが，いずれも判読できない。7は底部内面に線刻がある。不整形で文字とは思われない。1は大型の坏で，内面にヘラミガキが施されているが，黒色処理は見られない。底部内面は剥離痕が目立つ。2も器面がかなり荒れており，内面の一部には剥離も見られる。また，4は赤みが強く，外面に若干の剥離が見られる。3は体部内外面の一部に褐色物質が付着している。鉄錆であろうか。

10・11はロクロ土師器皿である。ともに底部全体が突出して，高台状になっている。10は内面にヘラミガキが施されているが，器面がかなり荒れており，不明瞭である。

17は須恵器甕である。器面が荒れて，胴部外面は多くが剥離しているため，調整痕が良く見えない。平行タタキはやや斜めであるが横位である。胴部下部のヘラケズリは底部際にわずかに見られるが，範囲は不明瞭である。正位の状態で右から左への方向である。底部外面も中央部の器面が剥落している。二次的な火を長期に受けたものと思われる。小石・白雲母を多く含み，新治窯産である。18は須恵器甑である。中央に円形の孔，周囲に長楕円形の四孔がある五孔の甑である。孔をつなぐブリッジ状部分の内面は剥離が見られる。色調は褐色で，胎土は細砂粒を含む。千葉市周辺域産と思われる。

19・20は土師器甕である。19は全体に黒ずんでおり，胴部外面の一部に山砂の付着が見られる。20はやや小型の甕で，底部外面には3条の線が交差するヘラ書きがある。火を受けて外面は赤みがあり，内面はひび割れが見られる。

21は紡錘車である。石材は珪化岩（珪質凝灰岩）である。図は逆であるが，平坦な方が実際に糸がのる上面で，丸みのある方が下面である。平坦面には放射状，周回状の擦痕が見られる。

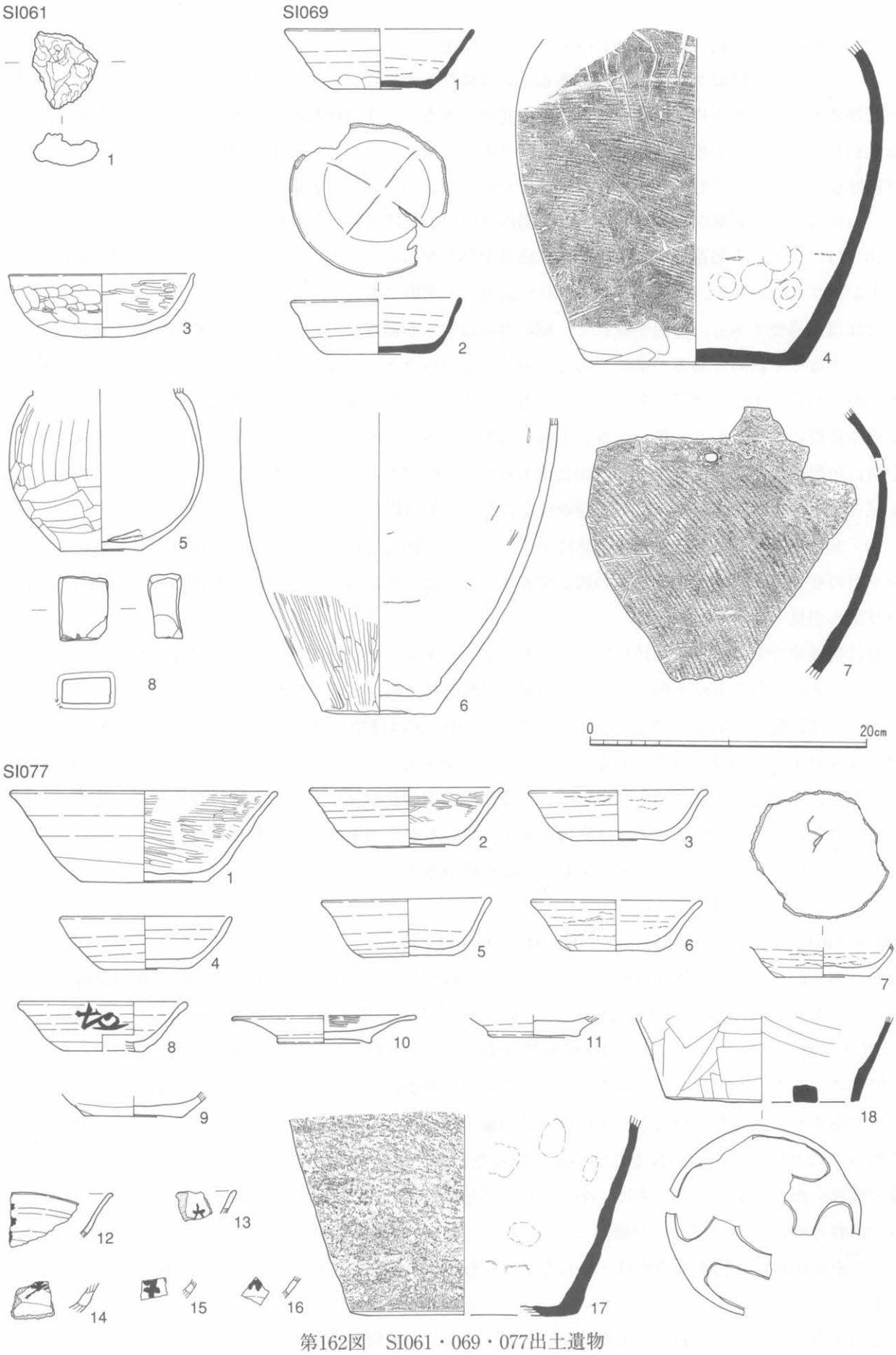
22～27は鉄製品である。22は刀のはばきであろうか。23は鎌で，切っ先を欠く。基部は折り返しが無い。24・26は刀子で，24は大型品である。ともに切っ先側を欠くが，他は茎尻まで遺存している。25は穂摘み具である。片側は釘穴部分で欠けている。27は用途不明の鉄製品である。2片に分かれているが，別個体かもしれない。1片は棒状，1片は直角に曲がっているが，本来のものであろうか。

その他，図示していないが，把手をもつ土師器甑がある。

SI078（第163・164図，図版87・88・91・94・99・100・102）

1は須恵器坏である。体部外面に正位で「小」の線刻が2箇所ある。線刻の存在は原稿執筆時に気付いたものであり，第163図では十分な訂正ができなかったため，第8章の第178図で図示した。両線刻はほぼ180度近く離れた反対側にある。口縁部端部の僅かな欠けがあるだけで，接合によりほぼ完形となった土器である。しかし，割れている線を見ると，意図的な破壊行為があったものと思われる。接合した破片は4片であるが，底部を含む大きな1片以外は口縁・体部の1/2周強が3片，ほぼ似た大きさに割れている。そのうちの2片に「小」が含まれている。割った行為を想定復元すると，まず「小」と「小」の間の口縁・体部を弧状に割り取る。次に「小」を含む部分を同じように弧状に割り取っていると考えられる。なお，割れの線は「小」に近いが掛かってはいない。「小」の部分を持って割り取ったものと考える。被熱により赤みが強い。胎土は白雲母・小石を多く含む他，暗茶褐色粒が見られ，非常に軽い質感である。新治窯産である。

2は須恵器高台付坏である。体部外面に正位で「小」の線刻がある。口縁・体部には若干の欠損がある



第162図　SI061・069・077出土遺物

ので，他に「小」があったかもしれないが，推測の域を出ない。また，やや細かく割れており，意図的な破壊があったかどうかもわからない。胎土は白色粒を多く含む。新治窯産である。

3～12はロクロ土師器坏，13はロクロ土師器高台付坏である。9は「十」の墨書が底部外面と体部外面に正位で見られる。また，9は口縁部内外面に油煙が付着する部分があり，灯明器として使用されたことがうかがえる。さらに口縁・体部の一部が弧状に欠損しており，割り取られたものと思われる。その欠損部以外では口縁部端部の僅かな欠けとひびが入る程度で，割れていない。10は体部外面に横位で「廣麿」の墨書がある。「廣麿」の近くの口縁・体部の1/3周弱が弧状に割れて接合している。他にも割れて欠損もあるが，11など他の土器の状況からその部分は意図的に破壊された可能性が高いと思われる。11は体部外面に正位で「善」の墨書がある。接合によりほぼ完形の土器であるが，「善」の近くの口縁・体部の1/3周が弧状に割れており，意図的な破壊と思われる。その部分以外には割れていない。12は体部外面に正位で「宜」の墨書がある。8は底部穿孔された土器である。その部分で割れて欠損がある。6も口縁部のほぼ1/3周が欠損している。欠損部に小片が1片接合するが，他は割れていない。意図的な打ち欠きの可能性が高いと考える。6は口縁・体部外面の一部に褐色物質が付着している。何らかの液体が口縁部から垂れたような状態である。

3・6・10・13は内面にヘラミガキ・黒色処理が施された土器であるが，10は火を受け，一部の破片の黒色処理が飛んでいる。6は黒色部分の方が少ないが，10と同様にかなり飛んだものと思われる。

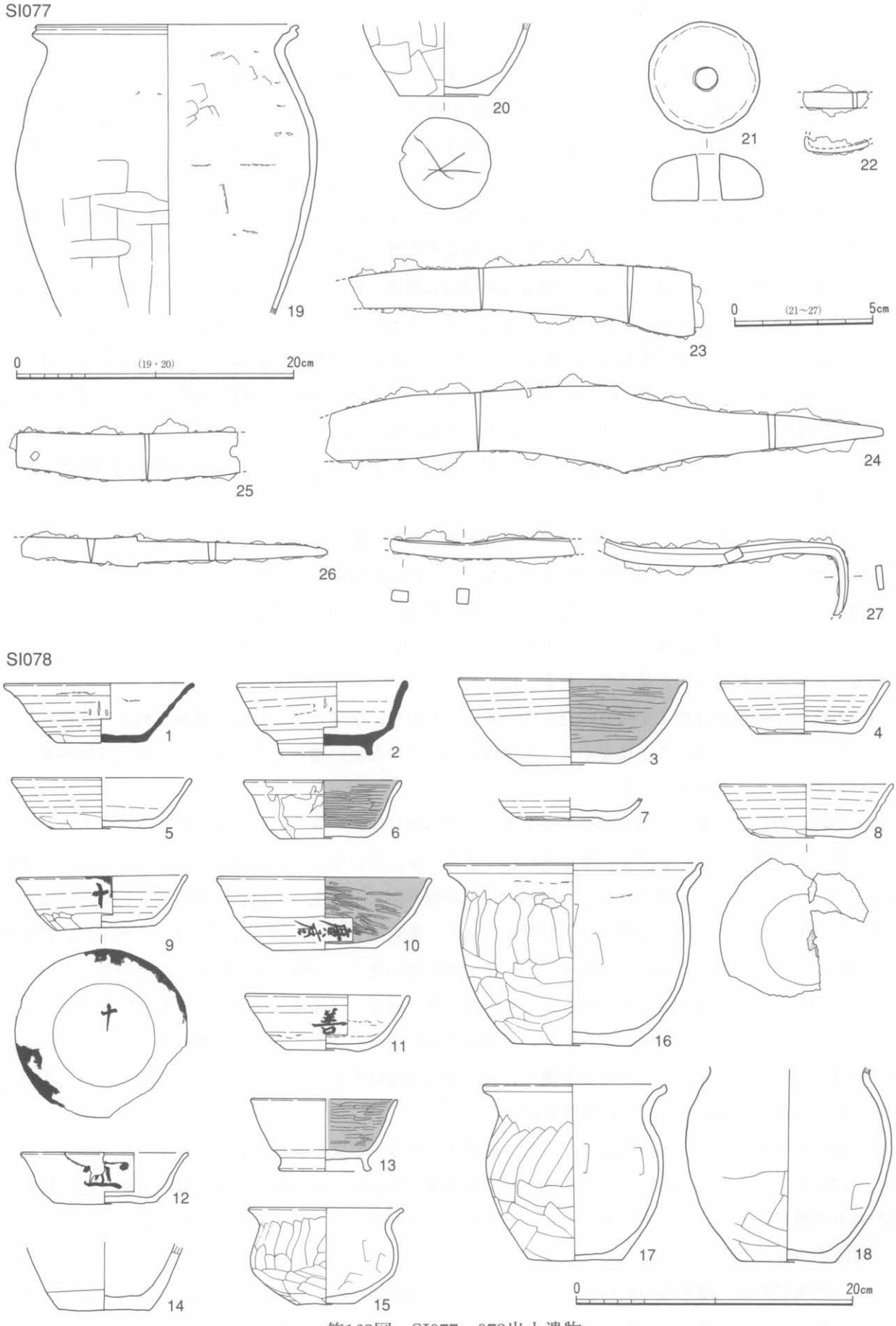
本遺構では出土土器のほとんどに，器面の荒れや剥離など二次的な火を受けた状況が見られるが，炭化材を多く出土した遺構の状況に合致するものである。しかし，3は内面の剥離が非常に著しく，やや異質である。以前から長期に火を受けていたように思われる。

須恵器坏・土師器坏は加工を施されたものが多いことから，全体として故意に遺棄された可能性が高いと思われる。そしてそのような状況から，本遺構については火災に遭ったのではなく，竪穴住居廃棄に伴って焼却されたことが考えられる。

14～18は土師器甕である。14は胴部外面下部・底部外面に回転ヘラケズリが施されており，ロクロを使用して作られた甕である。底部切り離し痕はあまり良く見えないが，回転糸切りと思われる。ロクロ回転は右方向である。内面は剥離が著しく，胴部下部・底部外面は暗灰色・灰白色に変色している。15は小型の甕で，小型とくくれる中でも最も小型の部類である。遺存は良いが，強く火を受けてもろく，口縁端部の欠けが目立つ。色調も赤褐色部分が多い。16はやや小型の甕で，口縁部径の割りに高さのない土器である。胴部内面の所々に剥離痕が見られる。17も小型の甕である。口縁部にひびが入る程度で，割れも欠損もない完形の土器である。内面の赤みが強いが剥離痕は少ない。18もやや小型の甕である。胴部外面下部の調整はヘラケズリであるが，小石を多量に含み，底部外面は木葉痕が残ることから常総型といえる甕である。底部内面及び胴部下部内面に剥離痕が見られる。

19～24は鉄製品である。19は鉄族で，刃部は飛燕式である。茎尻が折れて曲がったまま錆びついているが，ほぼ完形である。20～23は刀子である。22は刃部側の茎がもう少し細くなる可能性もあるが，錆膨れのため不明瞭である。24は用途不明である。刀子の茎の可能性があると思われ，横方向に図示したが，鉄族や紡錘車の柄なども考えられる。

25は紡錘車である。須恵器の転用品である。かなり厚みがあるので甕の転用と思われる。全面的に擦られて，砂粒の動いた筋は見えるが，元々の調整痕は消えている。回転を考えた場合，平面図で図示した側



第163図　SI077・078出土遺物

がやや凸面であり，下面と思われる。反対側の凹面が糸をのせた上面であろう。胎土は白雲母を多量に含み，新治窯産の須恵器である。

SI083A（第164図，図版88）

1は非ロクロの土師器坏である。口縁端部が全体に摩耗し，所々欠けるが，ほぼ完形の土器である。底部外面中央に木葉痕の一部が残っている。2・4・5はロクロ土師器坏である。5は器面が荒れて内面は若干の剥離痕も見られる。

3は須恵器坏である。胎土は小石を多く含む。新治窯産である。

6はロクロ土師器高台付坏である。口縁・体部をほとんど欠損し，皿の可能性もあるが，皿であってもやや深い器形になると思われる。

7は土師器鉢，8・9は土師器手捏ね土器である。7はやや丁寧な作りなので鉢としたが，厚みや内面の調整から8・9に近い手捏ね土器的な土器である。成形時，底部外面には木葉が敷かれていたと思われるが，痕跡はヘラケズリにより消されて見えない。体部外面も細かいヘラケズリが施されている。内面は接合痕や指頭痕を多分に残している。8は坏椀，9は甕的な器形である。体部や胴部外面はともに接合痕や指頭痕が顕著に見られる。また，底部外面は全面に木葉痕が残っており，ほとんど調整されていない。それに比べ，内面はやや丁寧な作りで，8はナデが施され，9もナデ・ヘラナデが施されている。

SI087（第164・165図，図版88）

1はロクロ土師器坏である。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。胎土は黄褐色・褐色粒を多く含む。2・3は土師器甕である。2は小型の甕，3は常総型の甕である。2の内面には部分的に黒色物質の付着が見られる。器面が荒れている。3は口縁部外面にヘラの当たりかと思われるへこみが7箇所ある。4は須恵器甕である。底部内面中央が平滑であり，破損後，硯に転用されたものと思われる。白雲母・小石を含むが，細粒である。器壁が薄く，比較的硬質である。新治窯産である。

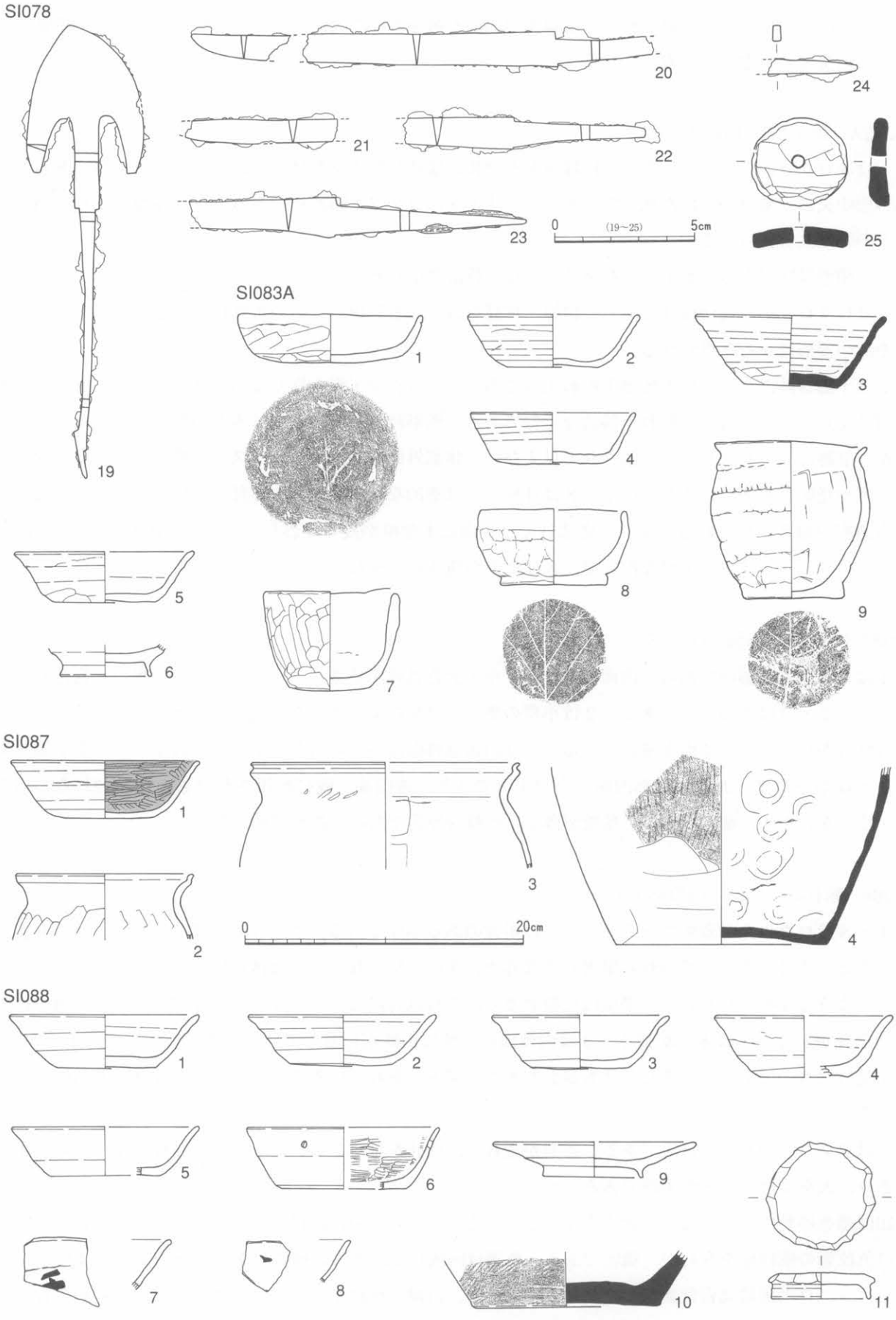
SI088（第164・165図，図版88・94・95）

1～8はロクロ土師器坏である。7・8は墨書のある小片である。1～6の一部ではなく，各々も別個体である。7は「千」と思われる墨書が体部外面に正位で見られる。8は体部外面にチェックの点を付けたかのような墨痕が見られる。墨痕は比較的濃く，これ以外には見られない。6は口縁・体部外面に径5㎜の穿孔がある。1は赤みが強く，3は内外面の一部に山砂が付着している。カマドからの出土であり，火を受けたものであろう。また，2も器面が所々黒ずみ，荒れていることから，火を受けた可能性が考えられる。

9はロクロ土師器高台付皿である。器面が荒れて，山砂が付着している。1・3同様カマドからの出土であり，火を受けた状況が明瞭である。

10は須恵器甕である。底部内面中央が平滑であることから，硯に転用された可能性が考えられる。胎土は白色粒等の細砂粒を含むが，緻密である。色調は暗灰色で，非常に硬質である。新治窯産ではない。

11はロクロ土師器高台付皿（または坏）であるが，口縁・体部が打ち欠かれており，硯に転用されたものと思われる。器面が荒れてかなり細かく割れていることから，上面（内面）に平滑な面は見られない。



第164図　SI078・083A・087・088出土遺物

12・13・14は土師器甕である。12は小型の甕で，赤みが強い。13・14は常総型の甕である。13は胴部外面の多くに煤や山砂が付着し，ヘラミガキ調整がやや不明瞭である。底部際はヘラケズリも施されている。14は胴部外面の一部にヘラケズリが施されている。正位で左から右への横方向である。また，胴部外面の一部に煤の付着が見られる。13・14とも底部外面には木葉痕が見られない。

15・16・17は鉄製品である。15は鎌で，完形である。先端部はX線写真と錆の状況よりやや角張って図示したが，もう少し丸みを帯びる可能性もある。16は刀子と思われるが，背側とした方も薄く，穂摘み具などまったく別の製品の可能性もある。17は鉄鏃である。篦被と茎の部分的な破片で，刃部と茎尻は欠損している。

SI092（第165図，図版88）

1・2はロクロ土師器坏である。器種は坏というよりは小皿とした方が良いかもしれない。カワラケに近い中世的な土器である。1・2とも底部は回転糸切り離し後無調整である。内面と口縁・体部外面は横ナデ・ナデ調整で，ともに器面はややざらついている。色調は1が淡褐色，2が暗褐色で，焼成は良好である。3はロクロ土師器高台付椀である。高台は低脚で，「ハ」字状に開く。外面は赤みがあり，内面は剥離痕が見られることから，二次的な火を受けたものであろう。

4は土師器甕である。胴部下部が直線的な器形である。胴部外面，底部外面ともヘラケズリが施されている。色調は全体的に暗褐色であるが，胴部外面の一部は淡褐色である。

その他，土製支脚があるが，細かく割れているため図示していない。繊維を含み，もろい。

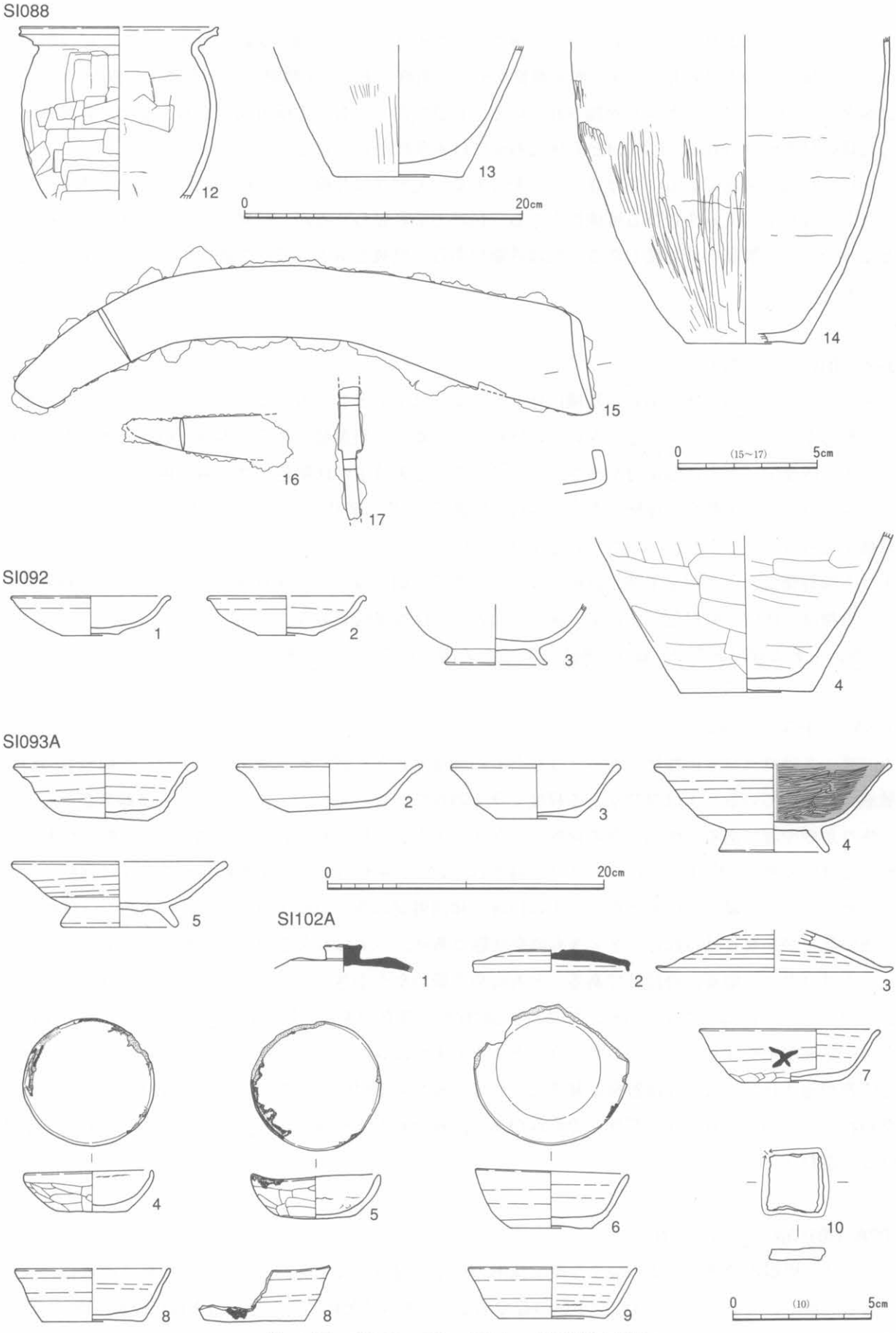
SI093A（第165図，図版88）

1・2・3はロクロ土師器坏である。3点とも口縁部が大きく開く形態である。また，器面のざらついた触感が共通している。1はひびが入る程度で全く割れていない完形の土器である。2は器形が歪んでおり，作りがやや雑である。体部下部の回転ヘラケズリも大胆に施されている。底部は3が回転糸切り後無調整，2は回転糸切り後手持ちヘラケズリが施されている。糸切り痕がわずかに見える。1は回転ヘラケズリが施され，切り離し痕は見えない。1は口縁・体部外面の多くが暗灰色・灰白色に変色し，内面も赤みが強い部分がかなり見られる。2・3も似た状態であり，いずれも火を受けた様相をうかがえる。

4・5はロクロ土師器高台付坏である。ともにやや低いやや小さめの高台をもつ。5は坏部に歪みがある器形である。高台部は遺存するが，坏部は1/3弱程度の遺存である。図は口縁部の低いところで反転したため，坏部がやや浅くなっているが，高いところであれば6～7㎜深くなる。4の坏部はヘラミガキ・黒色処理が施されている。5は器面が非常に荒れているため不明瞭であるが，黒色処理は施されていないと思われる。4の黒色処理は一部飛んで赤みがあり，外面も赤みが強い。1～3同様，4・5も火を受けていると思われる。

SI102A（第165図，図版89・102）

1・2は須恵器蓋である。1は扁平な擬宝珠形のつまみ周辺の破片である。胎土は多量の白色粒と白雲母を含む。新治窯産である。2はやや小型の蓋である。つまみは欠損している。胎土は白色粒を多く含む。粒径の大きなものもあるが，細粒が多い。色調は暗青灰色で，硬質な須恵器である。



第165図　SI088・092・093A・102A出土遺物

3はロクロ土師器蓋である。つまみは欠損している。形態より皿ではなく，蓋と思われる。

4・5は非ロクロの土師器坏である。ともに口縁部内外面の所々に油煙が付着しており，灯明専用器として作られた小型の坏である。器面はざらついている。5は口縁部の1/4周が欠けている。割れ口の断面にも油煙が付着していることから，意図的な打ち欠きであり，その状態で灯明器として使用されたことがわかる。内面側から打ち欠かれたと思われる。4の口縁部も僅かに欠けている所があるが，これも打ち欠かれたものと思われる。打ち欠きは油煙が付着している部分にされているが，割れ口に油煙の付着は無く，打ち欠き後に灯明器として使用されたかどうかはわからない。4の打ち欠きは5とは逆に外面側から行われたように思われる。4・5とも他には欠損が無いが，4は2片，5は3片の接合個体である。廃棄にあたり，4は口縁周で1/3強を折って割ったように思われる。また，5は小片が1片あるが，大きく見れば2片の接合であり，4と同様に口縁部周で1/2弱を折って割ったものと推測する。

6～9はロクロ土師器坏である。6・8は口縁部に油煙の付着があり，灯明器として使用されたことがわかる。8は割れ口に油煙が付着していることから，口縁・体部の一部を破壊した後に灯明器としたものである。油煙付着部分を境に大きく破損しているため，本来の形状が不明であるが，口縁・体部の一部が「U」字状に割り取られたのではないかと思われる。6は口縁・体部が1/2周弱欠損している。廃棄にあたって破壊されたものか，可能性はあるが断定し難い。8は器面がざらつき，色調も灰黄色の部分が多い。6も外面の一部が灰色味を帯びている。7は体部外面に「X」字のような墨書がある。口縁・体部に大小2箇所の欠損部がある。打ち欠きされた可能性が考えられる。

10は土師器甕の破片を砥石に転用したものである。断面が擦られており，特に図示した上部の断面は滑らかである。

SI102B（第166図，図版89）

1は非ロクロの土師器坏である。割れていない完形の土器である。赤みが強く，口縁・体部外面の一部に僅かな山砂の付着が見られるなど，二次的な火を受けた様相がうかがえる。しかし，器面は底部内面がややざらつく程度で，内面にヘラミガキが施されたこともあり，全体的にはあまり荒れていない。

2はロクロ土師器坏である。灯明器として使用された坏で，底部内面と口縁・体部内外面の一部に多量の油煙が付着している。また，体部に径12㎜×6㎜の穿孔がある。孔の一部は口縁・体部の欠損とつながっている。断面にも油煙が付着しているので，孔の脇の口縁・体部の一部が打ち欠かれていたものと思われる。しかし，僅かに欠損部とつながってはいるが，孔は油煙や孔の打ち欠きの状況から十分に機能したものと思われる。孔部分は内外面に若干の割れが広がっているので，貫通にあたっては両側から穿孔されたように思われる。土器が大きく破損しないように細心の注意が払われたのであろう。また，油煙は孔下部の内外面で横方向に延びて付着している。油煙の影響で土器は全体に黒ずんでおり，元の色調が残る部分が少ない。

SI103C（第166図）

1はロクロ土師器坏である。胎土は黄灰色土を含む。

SI104（第166図，図版89・100・102）

1は須恵器坏である。二次的な火を受けて，赤みを帯びる部分が多い。口縁・体部の一部が弧状に欠損している他は割れも欠けもない土器である。意図的な打ち欠きの可能性がある。胎土は細砂粒を多く含む。底部内面中央部がやや凹んでいる。千葉市周辺域産と思われる。

2・3はロクロ土師器坏である。2は体部外面に正位で「千」の墨書がある。口縁・体部の2/3程度が打ち欠きされている可能性がある。墨書のある破片は打ち欠き部と思われる部分であるが，接合している。3も体部外面に正位で「本」の墨書があり，また，底部外面にも「本□」の墨書がある。二次的な火を受けて器面が荒れており，墨書があまり良く見えない。口縁・体部の一部は赤みが強く，底部外面に煤が付着するところもある。

4・5は土師器甕である。4は常総型で，5は小型の甕である。4の外面は若干の山砂が付着している。胴部内面中上位は剥離痕が目立つ。5は胴部外面の一部と内面の所々に剥離痕が見られる。また，胴部外面の剥離痕のあるところは暗灰色に変色している。

SI108（第166図，図版89・90・100・102）

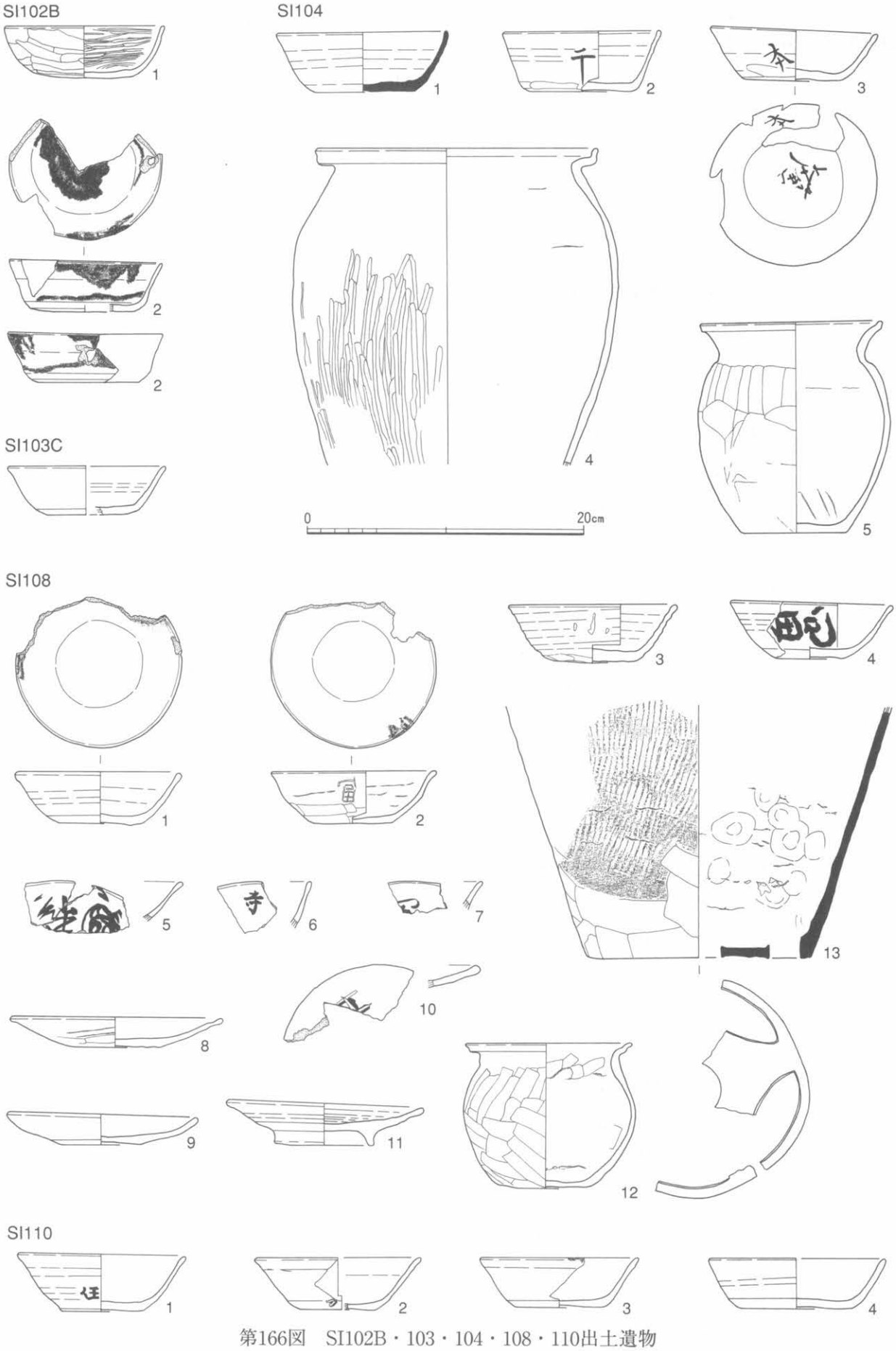
1～7はロクロ土師器坏である。2は体部外面に正位で「富」の線刻がある。4も「富」の墨書が体部外面に横位で見られる。「富」の中央で割れて接合するが，下の「田」の部分は器面の荒れのために見えにくい。破片となった後の摩耗度の違いであろう。3は体部外面に「小」の線刻がある。5～7は墨書のある小片である。破損している1・2・4のいずれとも別個体であり，また各々も別個体である。7も「富」の墨書で，体部外面に正位で見られる。5は体部外面に正位で2字ある。左側から「継国」と読んで人名であろうか。6は体部外面に正位で「寺」の墨書がある。

1・2は口縁部の一部に油煙が付着しており，灯明器として使用されたことがわかる。1は口縁・体部の1/2周弱，2は1/3周が欠損している。ともにやや割れ方が不整であるが，打ち欠きの可能性が考えられる。2は最終的に底部から割って器として使用できなくしているものと思われる。器面はともに荒れており，1は底部内面の剥離も目立つ。5の内面も黒色物質が付着している。煤または油煙と思われる。灯明器として使用されたことも考えられる。3は小石を多く含み，器面がざらついている。色調がやや灰色味を帯びており，須恵器かもしれない。ただし，底部外面には回転糸切り痕が一部に残っている。

8～11はロクロ土師器皿で，8・9は無台，11は高台付きである。10は底部を欠き，無台か有台かわからない。10は体部外面に墨書があるが，判読できない。墨書の上をなぞって線刻もあり，その部分の墨痕は消されている。9は器面がかなり荒れており，一部に赤褐色，黒褐色部分があることから，二次的な火を受けたものと思われる。8の器面も荒れている。

12は土師器甕である。口縁端部が僅かに欠ける部分があり，また他にひびが入るだけで，後はまったく割れていない土器である。胴部外面にヘラケズリが強く施されているところがあり，押されて器形が歪んでいる。全体的に暗赤褐色の色調で，胴部内面は所々剥離痕が見られる。

13は須恵器甑である。中央に1孔，周囲に4孔の5孔の甑である。内面は当て具痕が顕著である。また，接合痕も所々に見られる。胎土は白雲母・小石を多く含む。色調は暗黄灰色で，かなり硬質な須恵器である。新治窯産である。



第166図　SI102B・103・104・108・110出土遺物

SI110（第166・167図，図版90・94・100・102）

1～4・6～9はロクロ土師器坏である。1は体部外面に正位で「任」の墨書がある。欠損部は打ち欠きされたものと思われる。小破片が接合している。2も体部外面に正位で「寺」の墨書があるが，「寺」の上部に2文字程度あったものと思われる。寺の名前が書かれていた可能性が高い。7は小片で，体部外面に正位で「富」の墨書がある。他の坏とは別個体である。6・8も体部外面に墨書があるが，判読できない。6も他の坏とは別個体である。9は底部内面に1条の線刻がある。小片であり，交差する線は見られない。

3・6は口縁部内外面に油煙の付着があり，灯明器として使用された土器である。3は器面がかなり荒れ，6はそれほどではないが，内面に若干の剥離痕が見られる。4は内外面の荒れ・剥離が著しく，また，色調も赤みが強く，焦げによる黒色部分も目立つ。一部は断面内部まで黒色化している。二次的な火を受けた痕跡が明瞭である。

5はロクロ土師器皿である。底部を欠き，高台付きか無台かわからない。体部外面に正位で「善」の墨書がある。器面が非常に荒れており，二次的な火を受けているのかもしれない。

10は土師器仏鉢形土器である。非ロクロの土器と思われる。薄い作りで，軽い質感である。外面の手持ちヘラケズリが丁寧に施されて，薄く作られたものである。内面はヘラナデが施されており，ヘラの当たりもかなり多く見られる。胎土は褐色・白色・黒色の細砂粒を含む。土師器としては硬質な焼成である。

11は鉄製品である。片側がやや尖っており，釘と思われる。

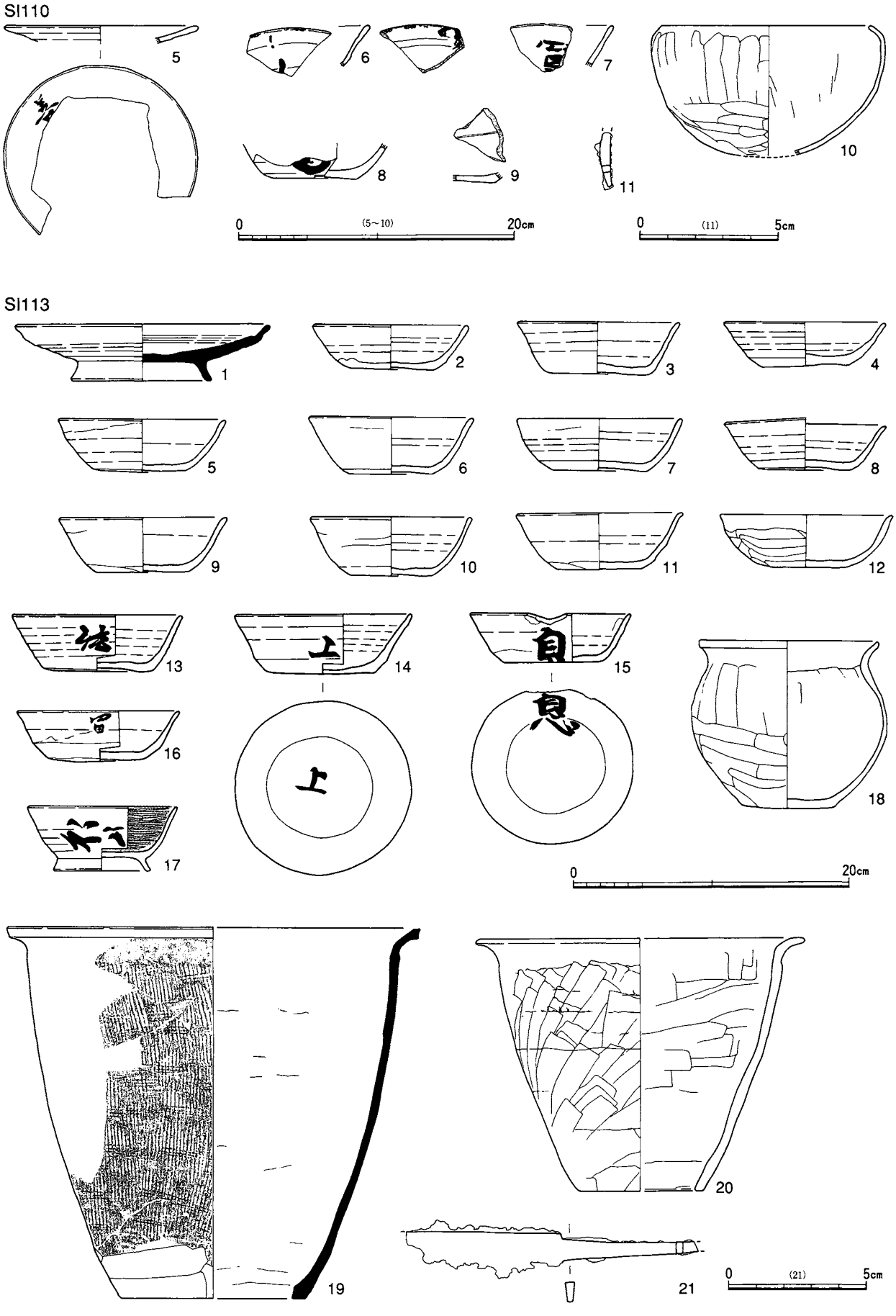
SI113（第167図，図版90・91・95・100・102）

1は須恵器高台付盤である。小石・白雲母を多量に含み，新治窯産である。やや軟質な須恵器である。

2～11・13～16はロクロ土師器坏，12は非ロクロの土師器坏，17はロクロ土師器高台付坏である。13は体部外面に正位で「法」の墨書がある。14は「上」の墨書が底部外面と体部外面に正位で見られる。15は「息」の墨書が体部外面から底部にかけて正位で見られる。16は体部外面に正位で「富」の墨書がある。17は体部外面に横位で2文字と思われる墨書があるが，墨痕が薄いため判読できない。17の内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

以上の盤坏類については，再度出土状況について簡単に触れる。まずカマド右脇の床面上で，盆と思われるものの上に置かれていた土器は，1・2・5～11・13・14・16・17の13点である。4は以上の13点に近いカマド上部で出土し，3はカマド火床部上から土師器甕18の上で出土した。12・15は盆上の土器群からは離れた位置での出土である。

次に盤坏類土器群の遺存状態を見ていく。ひびや欠けがある程度で全く割れていない完形の土器をあげると，1・4・5・6・7・8・9・10・11・13・14・16・17の13点である。このうち，4を除く12点が盆上の土器群である。盆上の土器群のうちただ一つ残る2も完形ではあるが，接合して完形となるものである。接合部分は口縁・体部の一部であり，小片2片が弧状に割れて接合している。他はひびが入ってはいるが，割れていない。この接合部分については，意図的に打ち欠かれた可能性が考えられる。打ち欠きであれば，内面側からなされたものである。15も僅かに欠損するのみで，接合によりほぼ完形となる土器である。しかし，欠損部は「息」の上の口縁部であり，欠損部を境に墨書の「息」を貫くような状況で2片に割れている。口縁部周で見ると，ほぼ1：2の割合である。欠損及び割れ方の双方とも意図的である



第167図　SI110・113出土遺物

と思われる。12も口縁・体部が弧状に割れる部分が見られるが，３箇所の打ち欠きの複合と思われる。３は細かく割れて，底部から体部の一部が欠損している。小型甕18との重なり具合は復元形でもちょうど良いので，本来は完形であったかもしれない。

次に，二次的な火を受けたと思われる土器について記述する。盆上の土器群の中で，確実なものは６・11である。ともに器面は非常に荒れて，赤褐色，暗赤褐色，暗灰褐色に変色している部分がある。７も６・11ほどではないが器面が荒れ，内面の剥離がやや目立つことから，可能性が高い。また，２・５も外面の一部に強い赤みがあり，13・14は外面に煤が付着したような黒色部分がある。13は一部で赤みも強い。これらも火を受けた可能性があるが，こうして見てくると他の土器も火を受けた可能性が考えられよう。全体に器面はざらついている。盆上の土器群以外では12は内面に剥離が目立ち，可能性が高いと思われる。15も器面が荒れ，やや赤みがあることから可能性はあると思われる。３は全体に赤褐色，暗灰黄色に変色し，器面の荒れ・剥離も顕著であり，火を受けた痕跡が明瞭である。

18は土師器甕で，小型の甕である。強く，長期に火を受け，多くの部分が赤褐色に，一部が暗灰黄色に変色している。器面の荒れはそれほどでもないが，胴部外面の一部で剥離が目立つ。また，山砂が所々に付着している。

19は須恵器甑である。胴部外面の平行タタキは横方向，縦方向の順に施されて，部分的に格子目となる。孔は中心に１孔，周囲に４孔の５孔であるが，遺存が悪い。小石・白雲母を多く含み，新治窯産である。かなり硬質な須恵器である。

20は土師器甑である。焼成は良好であるが，接合痕は目立つ。また，粘土帯の接合部分で割れている。

21は鉄製品で，刀子である。錆膨れのため，刃部の刃側が不明瞭である。

SI114（第168図，図版91）

１・２は須恵器坏である。１の色調は青灰色であるが，口縁部外面に暗灰色の筋があり，重ね焼きの痕跡と思われる。口縁部内面もやや黄色味を帯びている。胎土は小石を多く含む。焼成が良く，硬質である。２は小石・白雲母を多量に含む。色調は明灰色で，焼成はやや軟質である。ともに新治窯産である。

SI124B（第168図，図版91）

１はロクロ土師器坏である。口縁・体部外面の多くに油煙が付着しており，灯明器として使用された土器である，内面も黒ずむ部分が多い。また，内面は剥離痕が目立つ部分がある。底部外面もかなり荒れている。２片の接合個体で，ほぼ完形であるが，口縁部の一方の接合箇所が僅かに欠けている。また２片は口縁部周で見ると，およそ１：２の比率である。意図的に割っている可能性も考えられる。

２．掘立柱建物

SB062（第168図）

１はロクロ土師器坏である。体部外面に墨書がある小片である。墨書は墨痕が薄く，判読できない。

SB064A（第168図）

１はロクロ土師器坏である。底部外面に墨書がある。小片で残りが悪いため，判読できない。

SB064B（第168図）

1はロクロ土師器坏である。体部外面に墨書がある。小片で残りが悪いため，判読できないが，正位に書かれていると思われる。

SB066（第168図）

1はロクロ土師器坏である。体部外面に墨書がある。小片で残りが悪いため，判読できない。

SB070A（第168図，図版91・102）

1は非ロクロの土師器坏，2はロクロ土師器坏である。ともに体部外面に正位で墨書がある。1は「富」，2は「帀」か「巾」である。3は紡錘車で，凝灰岩製である。

3．ピット群

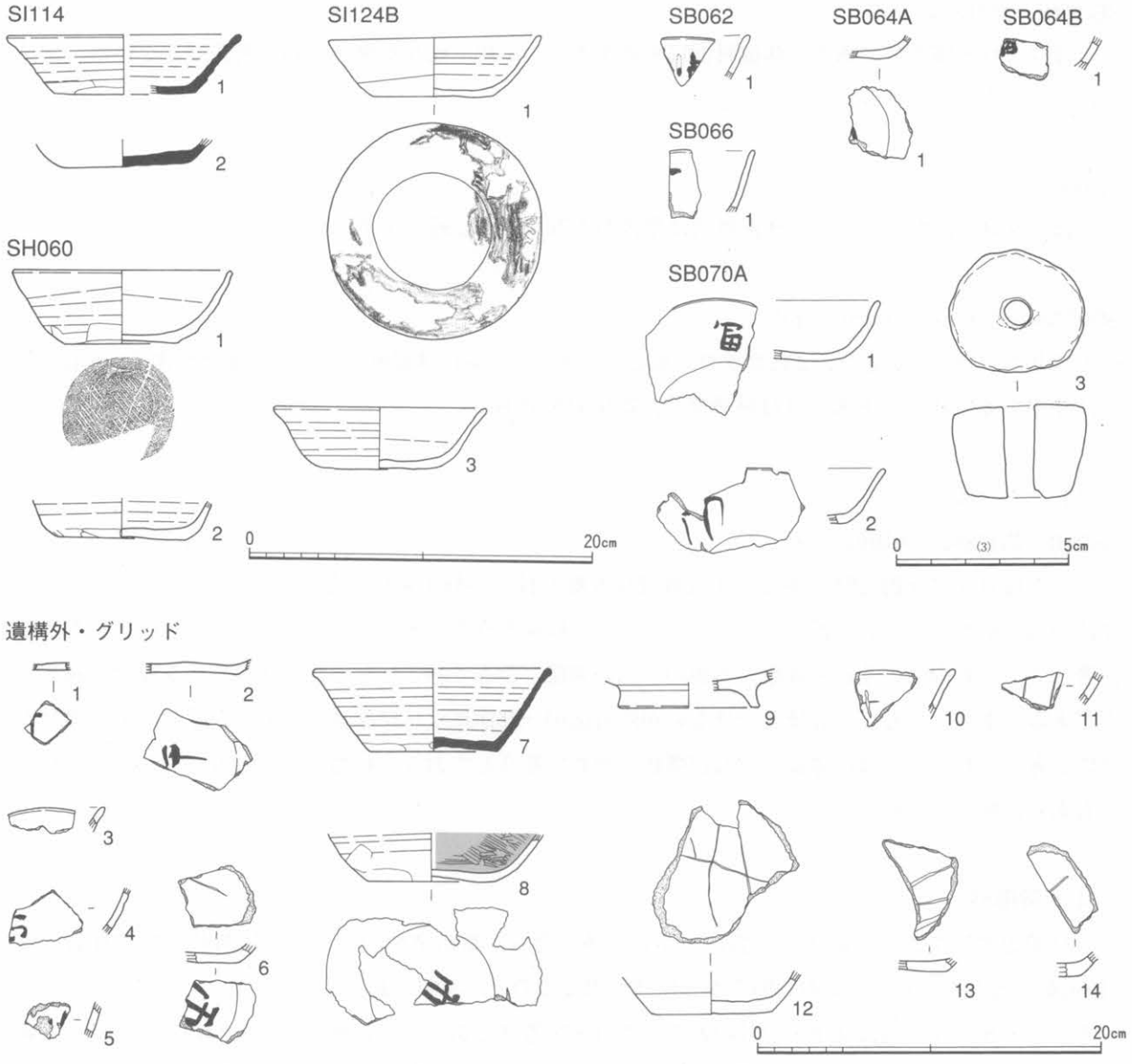
SH060（第168図，図版91）

1～3はロクロ土師器坏である。1は底部切り離し技法が静止糸切りと思われる。2は底径が大きく，体部の傾きがあまりない土器で，1・3よりも古い様相をうかがえる。2は内面全体と外面の一部の剥離が著しく，3も内面の荒れ・剥離，外面の一部の剥離が顕著である。ともに二次的な火を受けた様相をうかがえる。また，1も2・3ほどではないが内外面の一部が斑点状に摩耗しており，これも火を受けた可能性が考えられる。3は口縁部の一部が弧状に割れて接合しており，打ち欠きかとも思われるが，他に欠損もあり，断定はし難い。

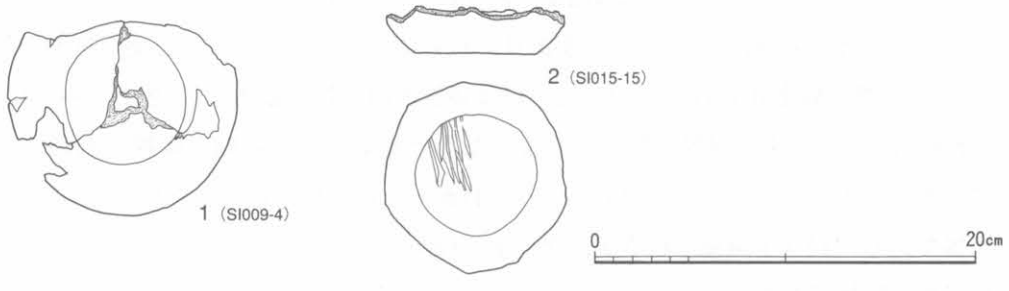
4．遺構外

7は須恵器坏である。胎土は白雲母・小石を多く含み，新治窯産である。古墳時代の竪穴住居であるSI056から出土したものである。明らかに時代が異なるので，本項で記述した。

1～6・8・10～14は文字・記号のあるロクロ土師器坏である。3は皿かとも思われるが，断定し難いため坏としておく。1～6・8は墨書，10～14は線刻のある土器である。2は底部外面に「千」があり，6・8も底部外面に「帀」がある。1・3～5は遺存が悪いことや器面の荒れなどにより，判読できない。記載部位は1が底部外面，3・4・5は体部外面で，向きは不明である。8は内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。10は体部外面に「＋（×）」があり，11も体部外面に平行する2条の線刻がある。10は縦の刻線が横に比べ，深く刻まれている。12・13・14は底部内面に線刻がある。12は「十」状（図は「十」と見た場合横方向）に，浅い刻線が加わったような形である。図の右側の縦線で割れている。底部外面にも不連続な刻み状のものがあるが，線刻かどうかわからない。13は幅広の線刻で，3条見られる。焼成のあまい土器である。14は1条見られるが，交差する線があったのではないかと思われる。9はロクロ土師器高台付皿または坏である。



第168図　SI114・124B，SB062・064A・064B・066・070A，SH060，遺構外出土遺物



第169図　竪穴住居出土遺物補遺

第35表　奈良・平安時代竪穴住居観察表

計測値（　）内の数値は推定値

遺構No.	規　模 （主軸×副軸m）	主軸方位	面　積 （上:床面積 ㎡） （下:柱穴内面積 ㎡）	壁　高 （cm）	柱穴深さ （cm）	出入口 （cm）	壁　溝	カマド位置	特記遺物・備考	時　代
SI002	4.05×3.70	N－11°－E	13.16	44		31	南壁一部欠	北壁中央		Ⅴ期
SI003	4.8×4.35	N－17°－E	17.36	28～35		42	全周	北壁中央		Ⅴ期
SI008	3.65×3.45	N－69°－W	9.93	32～41		14	西壁欠	西壁ほぼ中央		Ⅴ期
SI009	4.54×4.58	N－52°－W 旧 N-39°－E	16.86 新　7.50 旧　7.07	32～40	P1　36 P2　61 P3　66 P4旧　64 P4新　49	28 旧 11	南西壁・南東壁のほぼ半分を欠く	北西壁中央 旧　北東壁中央	P4脇にピット　古い柱穴か	Ⅳ期
SI010	3.1×2.86	N－16°－E	(7.5)	22～32		欠失か	全周	北壁中央		Ⅴ期
SI014	3.43×3.86	N－4°－E	11.05	18～26		21	北壁欠	北壁中央		Ⅴ期
SI015	3.68×3.56	N－2°－E 旧 N-88°－W	11.61 (4.6)	32～40	P1　19 P2　29 P3　13 P4　未検出	26 旧 38	全周	北壁中央 旧　西壁中央		Ⅳ期
SI022	2.9×3.26	N－43°－E	7.64	29～44		28　?	全周	新　東隅 旧　北隅	出入り口側不明瞭	Ⅰ期
SI023	2.54×2.64	N－12°－W	5.62 2.00	22～28	P1　33 P2　28 P3　17 P4　35	22	北壁欠	北壁中央		Ⅴ期
SI024	3.10×2.48	N－20°－E	6.70	31～43		未検出	全周	北壁中央		Ⅱ期
SI025	3.02×3.25	N－4°－E	8.2	23～32		未検出	全周	北壁中央		Ⅴ期
SI030	5.38×5.45	N－33°－W	27.03 10.00	33～51	P1　77 P2　54 P3　67 P4　66	40	全周	北西壁中央	ベッド状施設２か所あり，この部分の床面は他の床面から５cm～12cmの高さ	Ⅰ期
SI031	3.20×3.32	N－35°－W	8.80	43～50		25	全周	北西壁やや右寄り		Ⅰ期
SI032	3.20×3.00	N－3°－E	8.52 1.84	5～16	P1　22 P2　29 P3　30 P4　40	30	南壁と西壁の一部欠	北壁左寄り	東壁際にピット２か所	Ⅳ期
SI035	3.96×3.33	N－52°－W	10.80	33～42		14	北西壁・北東壁の一部欠	北西壁中央		Ⅴ期
SI036	3.68×4.26	N－21°－E	14.07	20～26		22	全周	北壁中央	焼土が広範囲に堆積	Ⅱ期
SI037	3.94×4.16	N－10°－E	13.12	55～70		22	全周	北壁中央	西壁側に一条の床溝　中央から西側に焼土堆積	Ⅳ期
SI039	3.88×3.76	N－19°－E 旧 N-69°－W	11.99	25～40		33 旧　18	全周	新（後）北壁左寄り 新（前）北壁右寄り 旧　西壁中央		Ⅱ期
SI041	4.36×3.62	N－2°－E 旧 N-93°－E	13.53	35～51		13 旧　不明	全周	北壁中央 旧　東壁左寄り		Ⅱ期
SI042	2.84×3.26	N－21°－E	8.16	39～51		8	北壁・西壁一部欠	北壁ほぼ中央		Ⅱ期
SI044	2.50×2.70	N－7°－E	5.50	40		15	全周	北壁右寄り		Ⅱ期
SI045	3.76×3.70	N－18°－E	12.15	48～56		31	ほぼ全周	北壁中央		Ⅴ期
SI047	3.76×4.04	N－68°－W	12.03	57～67		10	北壁一部欠	西壁中央		Ⅲ期
SI049	3.02×3.50	N－24°－E	8.50	32～42		20	全周	北東壁中央	中央から南隅にかけて焼土が堆積	Ⅱ期
SI050	5.26～ 5.57×3.40	N－97°－E	16.59	5～8	Pa　19 Pb　34 Pc　37 Pd　27 Pe　23	?	無？	東壁ほぼ中央	鍛冶工房　長方形プラン　Pa～Peは竪穴外の柱穴　竪穴内のピットPf・Pgの深さはPfが21cm，Pgが22cm　焼土が部分的に堆積	Ⅲ～Ⅴ期

遺構No.	規　模 (主軸×副軸m)	主軸方位	面　積 (上:床面積 ㎡) (下:柱穴内面積 ㎡)	壁　高 (cm)	柱穴深さ (cm)	出入口 (cm)	壁　溝	カマド位置	特記遺物・備考	時　代
SI051	4.46×4.04	N－66°－W	13.89 41	53		21	全周	西壁中央	内壁は火を受けて赤色化及び硬化している	Ⅴ期
SI052	3.93×4.13	N－23°－W	15.07 4.77		P1　53 P2　67 P3　66 P4　64	25	全周	北壁やや右寄り		Ⅱ期
SI053	3.30×4.06	N－11°－E	12.10	35～40		15	全周	北壁中央		Ⅱ期
SI055	2.67×3.21	N－16°－E	7.25	12～17		42	全周	北壁中央		Ⅴ期
SI057	3.24×3.37	N－20°－E	9.30	42～54		35	全周	北壁中央		Ⅴ期
SI058	3.10×3.82	N－69°－W 旧　不明	10.54 旧　5.73	16		29？ 旧　27？	無 旧　無か	西壁右寄り 旧　南壁中央？		Ⅱ期
SI059	4.11×4.76	N－19°－E	17.25	37～50	P1　30 P2　44 P3　32 P4　34	12	南壁一部欠	北壁中央		Ⅲ期
SI061	3.38×3.32	N－104°－E	9.54	11～28		21	無	東壁中央やや左寄り		Ⅲ～Ⅴ期
SI069	3.01×3.03	N－54°－W	8.53 2.89	29～42	P1　16 P2　31 P3　17 P4　14	19	無	北西壁中央		Ⅱ期
SI077	3.74×3.82	N－12°－E	11.90	28～33		18？	無	北壁中央		Ⅴ期
SI078	3.00×3.38	N－66°－W 旧 N－24°－E	8.75	43～48		18 旧　13	北壁半分欠元は全周か	西壁中央 旧　北壁中央		Ⅳ期
SI083A	4.12×4.50	N－69°－W	16.46 3.84	38～49	P1　62 P2　54 P3　54 P4　58	52	全周	西壁中央	柱抜き取り　焼土堆積	Ⅲ期
SI087	3.54×3.40	N－60°－W	9.38	28～37		32	各壁部分的に欠	北西壁中央		Ⅳ期
SI088	2.71×2.80	N－22°－E	6.62	38～48		14	ほぼ全周	北壁中央やや左寄り		Ⅳ期
SI092	3.74×2.86	N－89°－E	9.73	14～33		未検出	無	東壁右寄り		Ⅵ期
SI093A	3.36×3.13	N－34°－E	(10.50)	5		未検出	無？	北東壁右寄り		Ⅵ期
SI102A	3.65×3.08	N－107°－E	9.34	40～46		未検出	全周か	東壁右寄り		Ⅱ期
SI102B	3.21	？	(7.7)	36～43		未検出	無	不明		Ⅱ期
SI103A	3.15	？	？	30		？	無	？		A・B・Cのうちどれか1棟Ⅴ期，他2棟不明
SI103B	2.40	？	？	52		？	無	？		
SI103C	？	？	？	57		？	？	？		
SI104	3.50×3.33	N－15°－E	10.22	37～46		15	全周	北東隅		Ⅱ期
SI108	3.76×3.66 旧　3×？	N－37°－E	10.61 旧　？	54～60 旧 54～65		54 旧　？	無 旧　半周	北東壁中央	建て替え前の壁溝は全周か？	Ⅴ期
SI110	3.78×3.78	N－24°－E	10.83	47～62		30	無	北東壁中央		Ⅴ期
SI113	3.40×3.39	N－29°－E	9.39	24～71		16	全周	北東壁左寄り		Ⅳ期
SI114	3.22×3.16	N－98°－E	新？　7.68 旧？　5.86	45～61		有？　53	無か 旧　全周	東壁中央	3回建て替え？	Ⅱ期
SI124A	2.38	？	？	10		？	無	？		不明
SI124B	？	N－45°－EorW	？	34		？	有	？		Ⅲ期

第36表　掘立柱建物観察表

（　）は推定値

遺構No.	規格（桁×梁）	構造	桁行長（m）	梁行長（m）	柱間寸法（m）	面積（㎡）	柱穴径（cm）	柱穴深（cm）	柱穴深隅平均（cm）	柱穴深中間平均（cm）	桁行方位	備　考
SB007	2（3）間×2間	側柱	4.52～4.70	4.78	2.20～2.54	22.15	80～120	38～74	62	45	N―34°―E	計測値下段は隅間2穴　上段はそれ以外
（南東辺）	3間				1.56～1.66		62～82	24･40				
SB016	2（3）間×2間	側柱	4.12～4.24	4.04～4.12	1.80～2.20	17.18	32～92	22～60	46.5	29	N―18°―E	計測値下段は隅間2穴　上段はそれ以外
（西辺）	3間				1.18～1.54		32～52	14･24				
SB062	2間×2間	側柱	3.46～3.60	3.48	1.58～1.88	12.01	60～88	18～60	48.5	32	N―7°―E	
SB063	2（3）間×2間	側柱	3.58	3.50	1.60～2.02	12.41	68～104	28～58	42	28	N―75°―W	計測値下段は隅間2穴　上段はそれ以外
（南辺）	3間				1.06～1.30		24～36	10･18				
SB064A	2間×2間	側柱	4.36～4.50	4.14	1.74～2.28	18.33	64～90	9～60	54.5	24	N―89°―W	
SB064B	2間×2間	側柱	4.08～4.66	4.02～4.14	1.70～2.40	17.57	50～79	12～40	34.5	21	N―87°―W	
SB065	2間×2間	側柱	3.26～3.86	3.68	1.52～1.94	12.93	76～98	30～60	57	33	N―8°―E	桁梁逆の可能性あり
SB066	2間×2間	側柱	4.16～4.40	4.18～4.22	1.98～2.26	17.98	66～100	16～60	53	21	N―21°―E	
SB067	1間×1間	側柱	3.12～3.36	2.28～2.50	2.28～3.36	7.73	76～98	30～60	39	―	N―23°―E	
SB070A	4間か×2間以上	側柱	6.54	1.5以上	1.42～1.80	?	68～94	46～54	54	48.5	N―66°―W	
SB070B	2間?（3間?）×2間?	側柱	3.98	3.14以上?	1.30～1.62	?	52～90	38～58	58	43	N―18°―E	
SB071	身舎　2間×2間	側柱	4.80	5.00	2.28～2.58	身舎（24）	54～86	48～80	65	59	N―25°―E	西辺側に片庇
	全体　2間×3間		4.80	6.12	1.20～2.58	全体（32）	32～86	36～80				
（庇）	3間		4.80	1.12	1.20～1.84		32～62	36～64				
SB086	3間か×2間以上	側柱	5.62	4（+?）	1.96～2.2	22（+?）	76～118	34～50	51	36	N―10°―E	
SB091	身舎　3間以上?×2間以上	側柱	6.0（+?）	2.46+	1.88～2.46	身舎（36+?）	91～118	76～98	94	88	N―32°―E	南辺側に片庇　桁梁逆の可能性あり
	全体4間以上?×2間以上		8.4（+?）	2.46+	1.88～2.46	全体（70+?）	84～118	54～98				
（庇）	2間以上			2.46+	2.4～2.46		84～117	54～60				
SB094　3	間（以上?）×2間（以上?）	側柱	6.2か	4.05か	1.9～2.18	25（+?）	46～60	50～70	70	63	N―60°―E	
SB101	2（3）間×2間	側柱	3.94	2.88	1.34～1.98	11.39	47～66	26～50	31.5	26.5	N―75°―W	計測値下段は隅間2穴　上段はそれ以外
（南辺）	3間				1.1～1.44		28～46	10･12				
SB106	2間以上?×1間?	側柱	2.67（+?）	2.66	1.28～1.34	7（+?）	22～46	28～50	39	42	N―73°―W	桁梁逆の可能性あり

第37表　奈良・平安時代出土遺物観察表

（　）は推定値　［　］は現存値　口径・底径・器高の単位はcm

遺構・	挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
SI002	1	土師器坏	14.5	7.1	4.45	100%	内　明赤褐色 外　明赤褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　ヘラミガキ 回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	4
	2	土師器坏	15.2	6.8	4.75	25%	明褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	55.56
	3	土師器坏	11.75	6.3	3.7	100%	内　橙褐色 外　淡黄橙色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	6
	4	土師器坏	12.35	6.1	3.8	100%	内　明赤褐色 外　明赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　灯明器	35
	5	土師器坏	(15.6)	(7.6)	4.75	15%	内　黒色 外　灰褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　黒色処理　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ	14.1
	6	土師器坏	(12.7)	(6.9)	3.95	50%	内　明赤褐色 外　明赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	8.1
	7	土師器坏	(12.3)	6.75	3.6	65%	内　黒褐色・赤褐色 外　暗褐色・明赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	9.10.1
	8	土師器坏	(10.9)	6.6	4.1	35%	内　淡黄橙色 外　淡黄橙色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	13.1
	9	土師器坏	12.9	6.7	3.6	65%	赤味がかった褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ　体外墨書「千」正位	17.18.32.1
	10	土師器坏	(12.8)		[3.6]	20%	赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　体外墨書「千」正位	15.30．1
	11	土師器坏	(13.2)	6.8	3.55	25%	明褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外墨書「千」	3.13.29.1
	12	土師器坏		(6.1)	[2.6]	35%	内　灰黄褐色 外　淡赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　体外墨書「千」正位　底外墨書「千」	1
	13	土師器坏				10%	内　明赤褐色 外　褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　体外墨書「□」	1
	14	土師器坏		6.8	[3.0]	20%	内　赤褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　ヘラミガキ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ 支脚転用　口縁部打ち欠き	42.45.47
	15	土師器高台付皿		7.25	[1.9]	33%	淡褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　底　回転糸切り	12
	16	土師器高台付皿	13.3	7.6	2.8	90%	明赤褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　粗いヘラミガキ　体外墨書「千」正位	5.28
	17	土師器高台付皿	13.6	6.95	2.6	90%	内　暗褐色 外赤褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　ヘラミガキ 回転ヘラケズリ　底　回転糸切り	34
	18	土師器高台付皿	(14.0)	[7.3]	2.5	20%	内　暗褐色 外赤褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　ヘラミガキ	27.52
	19	土師器甕	(19.7)		[15.7]	16%	内　暗褐色 外　黒褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ヘラナデ　底　ヨコナデ 常総型	20.1
	20	土師器甕	(18.2)		[11.7]	16%	内　淡橙褐色 外　淡灰褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ヘラナデ　底　ヨコナデ 常総型	36.40.41.49
	21	土師器甕			[18.3]	16%	内　淡明褐色 外　淡褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ヘラケズリ　ヘラナデ ミガキ　常総型	1.26.39.46.56
	22	土師器甕	21.05	32.4	7.4	100%	内　淡褐色 外　暗褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ヘラケズリ　ヘラナデ　粗いヘラミガキ　底　ヨコナデ　木葉痕　常総型	37
	23	須恵器甕		15.4	[2.9]	10%	内　淡黄褐色 外　淡黄褐色	良好	内　ヘラナデ　外　手持ちヘラケズリ	11.003-138
	24	鉄製品 袋状鉄斧	長さ 8.0	幅 3.2	厚さ 1.9	100%			重さ83.9g　鉄板厚さ3㎜　袋状部内径2.7×1.3cm	22
SI003	1	土師器坏	11.7	7.3	4.1	100%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ	13
	2	土師器坏	11.65	5.3	3.75	100%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ	41
	3	土師器坏	11.08	6.55	3.4	85%	内　明赤褐色 外　明赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り回転ヘラケズリ	61.69.74．1
	4	土師器坏	12.3	7.1	4.0	80%	内　淡黄褐色 外　明褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ	116
	5	土師器坏	(11.9)	5.75	3.7	50%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ	95.138.1
	6	土師器坏	(12.9)	4.9	4.0	50%	内　淡褐色 外　淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	39.1
	7	土師器坏	(12.3)	7.5	4.0	25%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ	117.1
	8	土師器坏	(12.5)	(6.0)	3.55	35%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ	43.45
	9	土師器坏	14.4	5.85	4.8	35%	内　淡赤褐色 外　淡赤褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	25.58.1
	10	土師器坏	(13.8)	6.5	4.3	15%	内　黒色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　黒色処理　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	38
	11	土師器坏	(15.7)		[4.0]	20%	内　黒色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　黒色処理	1
	12	土師器坏		(7.2)	[3.25]	30%	内　褐灰色 外　淡褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	93.1
	13	土師器坏	12.35	5.6	3.4	100%	内　淡橙褐色 外　淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外線刻	70
	14	土師器坏	11.1	6.0	3.95	90%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り回転ヘラケズリ　体外墨書「千」正位　底外墨書「千」	111
	15	土師器坏	12.1	7.0	3.9	90%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り回転ヘラケズリ　体外墨書「千」正位　底外墨書「千」	9
	16	土師器坏	12.2	7.65	3.8	100%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り回転ヘラケズリ　体外墨書「千」正位　底外墨書「千」	2
	17	土師器坏	12.1	7.3	3.85	90%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り回転ヘラケズリ　体外墨書「千」正位　底外墨書「千」	6.1
	18	土師器坏	(12.3)	6.8	4.1	30%	内　橙褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外墨書「千」正位　底外墨書「千」	76
	19	土師器坏	(11.4)	(6.4)	3.9	25%	内　橙褐色 外　淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り回転ヘラケズリ　体外墨書「千」正位　底外墨書「千」	136.1
	20	土師器坏	(12.8)	(6.9)	4.25	30%	内　橙褐色 外　淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　底外墨書「千」	72.78
	21	土師器坏		(7.6)	[2.2]	20%	内　橙褐色 外　淡橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外墨書「千」	139

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
22	土師器坏		6.2	[2.0]	20%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	7
23	土師器坏		(7.1)	[1.9]	15%	内 淡黄橙褐色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」 底外ヘラ書き「+(×)」	15
24	土師器坏					内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 底外墨書「□」	138
25	土師器坏	(14.2)	(7.2)	[4.5]	40%	内 黒色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外墨書「□」	56.1
26	土師器坏					内 橙褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「千」正位	1
27	土師器坏					内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「千」正位	138
28	土師器坏					内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 体外墨書「千」正位	1
29	土師器坏		(5.6)	[2.1]	20%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	84.1
30	土師器坏					内 淡橙褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	1
31	土師器坏		(5.4)			内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	64
32	土師器坏		(7.0)		10%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「上」	4
33	土師器坏		(6.0)			内 橙褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「卩」	50
34	土師器坏					内 淡黄橙褐色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「□」	1
35	土師器坏		(7)			内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「□」	35
36	土師器坏					内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「上」正位	1
37	土師器坏					内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 体外墨書「生」正位	1
38	土師器坏		6.3	[0.85]		内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1
39	土師器高台付坏		7.2	[1.85]	10%	内 黒色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 底 回転ヘラケズリ	32
40	土師器皿	(14.3)		[1.9]	20%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ	138
41	土師器高台付皿	13.65	6.4	2.8	100%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「千」正位 底外墨書「千」	10.1
42	須恵器長頸瓶			[7.6]	25%	内 淡黄色 外 褐色	良好	底 回転ヘラ切り 体部上位自然釉付着	5.101.1
43	須恵器壺		(8.6)	[7.4]	35%	内 灰色 外 灰色	良好	外 回転ヘラケズリ 底部内面に自然釉付着	8.1
44	須恵器甕		(12.8)	[3.85]	10%	内 褐色 外 灰褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヘラケズリ 新治窯産	1 3D-0001
45	土師器甕	(20.2)		[11.3]	35%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラケズリ 常総型	71.98
46	土師器甕	(13.7)		[6.6]	15%	内 褐色 外 明赤褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラケズリ	66.1
47	土師器甕	13.3		[7.95]	40%	内 赤褐色 外 暗赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラケズリ	15.26.34. 1
48	土師器甕	(16.6)		[5.7]	15%	内 褐色 外 明赤褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラケズリ	17.1
49	土師器甕		7.55	[7.3]	25%	内 淡赤褐色 外 褐色	良好	内 ヘラナデ ナデ 外 手持ちヘラケズリ ヘラミガキ 底 ナデ 常総型	83.131.137
50	円盤状土製品	長径 3.15	短径 2.9	厚さ 0.65	100%	内 灰黄色 外 灰黄色	良好	重さ6.4g 須恵器甕(または甑)片転用 タタキ	138
51	円盤状土製品	長径 2.6	短径 2.5	厚さ 0.65	100%	内 灰黄色 外 灰黄色	良好	重さ3.96g 須恵器甕(または甑)胴部片転用 タタキ	1
52	円盤状土製品	長径 3.05	短径 2.85	厚さ 0.6	100%	内 淡褐色 外 淡褐色	良好	重さ6.24g 土師器坏底部片転用 回転糸切り痕	1
53	円盤状土製品	長径 2.8	短径 2.7	厚さ 0.7	100%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	重さ5.26g 土師器坏底部片転用	138
54	円盤状土製品	長径 2.8	短径 2.5	厚さ 0.85	100%	内 黒褐色 外 黒褐色	良好	重さ7.75g 土師器甕(常総型)胴部片転用	1
55	鉄製品 鎌または刀子	長さ [1.2]	短径 1.2	厚さ 0.15				重さ0.96g	137
SI008 1	須恵器坏		7.0	[1.35]	30%	暗灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	8
2	土師器坏	12.5	6.4	3.55	100%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	31
3	土師器坏	13.2	7.8	3.4	85%	暗赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 焼成後底部穿孔1箇所	32
4	土師器坏	13.15	6.8	3.3	70%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外ヘラ書き・線刻	38.44.45
5	土師器坏	14.45	6.55	5.8	65%	内 淡褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	7
6	土師器坏	(12.9)	(7.3)	3.6	30%	内 暗褐色 外 灰褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	70
7	土師器坏		7.4	[3.55]	35%	赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	57
8	土師器坏				破片	内 明赤褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「□」	59
9	土師器高台付皿		7.3	[1.95]	50%	赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 底 回転ヘラケズリ 底外ヘラ書き	51.69
10	須恵器長頸壺	8.2		[8.5]	20%	内 暗灰色 外 暗灰色	良好	内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 外面の一部に自然釉付着 東海産	33
11	土師器甕	(15.0)		[5.7]	10%	内 黒褐色 外 赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ ヨコナデ	1.2.4
12	土師器甕	16.85		[13.3]	50%	内 赤褐色 外 赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ ヨコナデ 外面の一部に山砂付着	1.4.17.24.25.62.66.68.75

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
13	土師器甕	(19.2)		[7.7]	10%	黄灰褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラナデ 常総型	
14	土師器甕	(20.0)		[9.5]	10%	明灰褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラナデ 常総型	30.56
15	土師器甕		6.4	9.3]	20%	内 明褐色 外 褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	4.22.63.64.75.76
16	石製紡錘車	上面径 3.9	下面径 3.4	厚さ 2.1	95%	灰白色		孔径1.0～1.2cm 重さ42.2g 石材:凝灰岩	26
17	石製紡錘車	上面径 4.7	下面径 3.7	厚さ 1.8	90%	灰白色		孔径1.0cm 重さ43.1g 石材:凝灰岩	29
18	鉄製品 鏃	長さ [6.2]	幅 2.2	厚さ 0.1				重さ16.3g 柄の木質付着	53
SI009 1	土師器坏	12.4	6.6	3.4	70%	灰褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	130
2	土師器坏	12.4	6.9	4.05	65%	暗褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	1.5.28.104
3	土師器坏	12.55	7.1	3.6	65%	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	1.5.8
4	土師器坏	11.9	6.3	3.9	65%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 焼成後底部穿孔1箇所	115
5	土師器坏	(12.0)	6.3	3.85	60%	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1.5.57
6	土師器坏	(12.3)	(7)	[4]	25%	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	3.5.26
7	土師器坏	(11.8)	(7.4)	3.55	15%	内 灰褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	190.163.197
8	土師器坏	(12.0)	5.85	4.65	30%	内 灰褐色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	184
9	土師器坏	(12)	(6.6)	4.35	20%	内 明褐色 外 明褐色	良好	ロクロ成形 底 回転ヘラケズリ	3.34.41.89
10	土師器坏	(11)	(6.8)	3.95	10%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1.4.91.197
11	土師器坏	11.5	6.3	4	100%	内 橙褐色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「千」正位 底外墨書「千」	91.108
12	土師器坏	(12)	(6.7)	4.4	30%	内 淡黄褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	1.5
13	土師器坏	11.5	6.6	3.8	100%	内 橙褐色 外 暗赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「□千」正位	99
14	土師器坏	(12.15)	6.7	4	40%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「千」正位 底外墨書「千」	1.3.5.21.139
15	土師器坏		6.7	[1.9]	20%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	1
16	土師器坏		(6.8)	[1.9]	10%	内 淡褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「千」正位 底外墨書「千」	2.25
17	土師器坏		(6.7)	[1.9]	10%	内 明褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	2.7
18	土師器坏				10%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	60
19	土師器坏				破片	内 淡褐色 外 淡赤褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「千」正位	2
20	土師器坏				破片	内 淡橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 体外墨書「千」正位	3
21	土師器坏				破片	内 淡黄橙褐色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 底外墨書「千」	180
22	土師器坏				破片	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	5
23	土師器坏			[1.8]	破片	内 淡橙褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「千」か	2
24	土師器坏				破片	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「千」	91
25	土師器坏			[1]	破片	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「□」	5
26	土師器坏				破片	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 体外墨書「□」	195
27	土師器坏				破片	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「□」	90
28	土師器坏				破片	内 橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 手持ちヘラケズリ 体外墨書「□」	5
29	土師器坏				破片	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転ヘラケズリ 底外墨書「□」	3.5
30	土師器坏				破片	内 淡黄橙褐色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「帀」	136
31	土師器坏		(5.9)	[2.3]	30%	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	97
32	土師器坏		5.9	[1.5]	10%	内 淡黄橙褐色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転糸切り 底 回転ヘラケズリ	36
33	土師器坏		(7.0)	[1.7]	10%	内 淡橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	2.160.197
34	土師器坏	11.8	6.3	4.1	95%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「帀」正位 底外墨書「帀」	90.102.109
35	土師器坏		(6.7)	[2.95]	20%	内 黒色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外墨書「帀」	1
36	土師器坏				破片	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「帀」正位	90
37	土師器坏				破片	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外墨書「帀」	57
38	土師器坏		5.55	[1.1]	10%	内 淡橙褐色 外 淡黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「帀」	17
39	土師器坏	(12.0)	6.6	3.5	30%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面線刻「+(×)」	31.3.148.173
40	土師器坏		(6)	[1.9]	15%	内 黒褐色 外 暗褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 内面線刻または研ぎ具に転用か	56

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
41	土師器坏	(14.8)	(8.4)	4.5	20%	内 黒色 外 灰褐色	良好	ロクロ成形 内 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外線刻「×」	2.5.120
42	土師器坏	13.9	8.2	4.55	50%	内 黒色 外 明褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 被熱・内面剥落	2.89.93
43	土師器坏	(14.9)	7.4	4.95	65%	内 黒色 外 暗赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 手持ちヘラケズリ ヘラミガキ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ ヘラミガキ	94
44	土師器坏	(15.8)	7.4	4.95	25%	内 黒色 外 灰褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	2.89.111
45	土師器坏	(15.2)	7.4	4.25	30%	内 黒色 外 暗赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	92
46	土師器坏	(16.4)	(8.4)	5.3	50%	内 黒色 外 暗褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	16.63.129
47	土師器坏	(22.9)	(10.9)	7.8	20%	内 黒色 外 淡赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外墨書「市」	87.90.216
48	土師器高台付坏		9.35	[2.4]	10%	内 黒色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 底外墨書「千」	98
49	土師器皿	14.7	6.0	2.5	75%	内 橙褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 糸切り 回転ヘラケズリ 底内墨書「千」	2.22.96.117
50	土師器高台付皿	16.1	7.95	2.4	80%	内 淡黄褐色 外 淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り ヨコナデ 底外ヘラ書き	95
51	土師器高台付皿	16.7	7.5	3.0	70%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り ヨコナデ 底内墨書「市」	103
52	土師器蓋	(18.3)		[3.2]	30%	内 黒色 外 明褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ	101
53	須恵器甕	(21.8)		[11.7]	10%	暗灰褐色	良好	内 ヨコナデ 外 タタキ 新治窯産か 被熱・胴部内面剥落顕著	5.44.45.55.16.20.170.186
54	須恵器甕		(14.8)	[10.9]	10%	内 褐色 外 灰褐色	良好	内 ヘラナデ 外 タタキ 手持ちヘラケズリ 新治窯産	40.144.161.165
55	土師器甕		(9.8)	[8.4]	10%	内 暗褐色 外 暗褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	79.80.181.187.199.200
56	土師器甕		(7.6)	[6.1]	10%	内 暗褐色 外 黒褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヘラミガキ 底 木葉痕 常総型	33.215.217
57	土師器甕	18	7.5	20	60%	内 暗赤褐色 外 赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	207.208.210.211.212.214
58	土製支脚	長さ 20.8	幅 11.0	厚さ 8.5	90%	褐色			213
59	石製紡錘車	上面径 3.0	下面径 2.5	厚さ 1.35	100%	淡褐色		口径0.75～0.9 石材:安山岩 被熱	152
60	鉄製品 釘	長さ 2.3	幅 0.3	厚さ 0.1	100%?			重さ6.2g ねじれあり	215
61	鉄製品 刀子	長さ [5.9]	幅 1.2	厚さ 0.3				重さ6.8g	52
62	軽石	長さ 4.1	幅 3.3	厚さ 3.1	100%	淡黄橙褐色		重さ12.6g	1
63	円盤状土製品	長径 2.7	短径 2.6	厚さ 0.6	100%	内 褐色 外 淡褐色	良好	重さ4.62g 須恵器甕(または甑)胴部片転用 タタキ目	5
64	円盤状土製品	長径 2.7	短径 2.7	厚さ 0.7	100%	内 黄灰色 外 暗黄灰色	良好	重さ5.5g 須恵器甕(または甑)胴部片転用 タタキ目 新治窯産	194
65	円盤状土製品	長径 2.8	短径 2.6	厚さ 0.6	100%	内 灰色 外 暗灰色	良好	重さ5.7g 須恵器甕(または甑)胴部片転用 タタキ目 新治窯産	83
66	円盤状土製品	長径 2.7	短径 2.3	厚さ 0.8	100%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	重さ5.0g 土師器坏(または皿)底片を転用	1
67	円盤状土製品	長径 3.3	短径 3.0	厚さ 0.7	100%	内 灰褐色 外 淡赤褐色	良好	重さ7.3g 土師器甕(常総型)胴部片を転用	3
68	円盤状土製品	長径 2.9	短径 2.8	厚さ 0.9	100%	内 明赤褐色 外 明赤褐色	良好	重さ6.3g 土師器坏(または皿)底片を転用	2
SI010 1	土師器坏	12.6	6.2	4.1	100%	灰色かがった明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外ヘラ書き	9
2	土師器坏					褐色		ロクロ成形 底 回転糸切り ヘラナデ 底外墨書「□ 」	2
SI014 1	土師器坏	13.05	6.9	3.35	100%	内 淡褐色 外 淡褐色		ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	62
2	土師器坏	13.4	7.5	3.5	100%	内 暗赤褐色 外 赤褐色"	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 被熱	4.64
3	土師器坏	(12.5)	(6.8)	3.85	25%	内 暗赤褐色 外 暗赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 被熱	68
4	土師器坏	(12.1)	(4.7)	3.8	35%	内 暗茶褐色 外 薄茶褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り無調整 被熱	1.11.70
5	土師器坏	13.65	6.7	3.95	75%	内 暗褐色 外 暗褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 被熱	4.47.50.1.14.42.45
6	土師器坏	(13.85)	(7.0)	3.7	40%	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	35.46.57.71.80
7	土師器坏	(12.1)	(6.9)	3.55	40%	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	4.65
8	土師器坏	(12.6)	(6.6)	3.65	60%	薄赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 被熱	62
9	土師器坏		(6.6)	[2.0]	20%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「□」	4.34
10	土師器坏					淡橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「大万」正位	15
11	土師器高台付皿	(13.4)	(7.8)	1.8	40%	薄茶褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 底 回転ヘラケズリ ヨコナデ	3.4.66
12	須恵器甕	(19.2)		[12.5]	10%	橙褐色	良好	内 ヘラナデ ヨコナデ 外 タタキ ヨコナデ	3.14.52
13	須恵器甕		12.6	[7.0]	10%	暗赤褐色	良好	内 ナデ 外 ヘラケズリ	3.4.21.37.39.51.63.80
14	土師器甕	(19.2)		[15.5]	20%	赤褐色	良好	内 ヘラナデ ヨコナデ 外 ヘラケズリ ヨコナデ 被熱	31.33.59.60.73.74.80
15	土師器甕		(9.2)	[15.6]	20%	暗褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヘラケズリ ヘラナデ 底 ヘラナデ 常総型	1.4.38.80.81
16	土師器甕	(18.9)		[22.1]	15%	暗赤褐色	良好	内 ヘラナデ ヨコナデ 外 ヨコナデ ヘラケズリ ヘラナデ 常総型 被熱	14.20.55.67

遺構・	挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
	17	砥石	長さ 9.9	幅 5.2	厚さ 2.3				重さ117.6g 石材:砂岩	29
	18	鉄製品 鎹	長さ [8.6]	幅 4.0	背圧 0.25				重さ40.9g	27
SI015	1	土師器坏	12.25	6.9	3.5	80%	内 明赤褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	189
	2	土師器坏	(12.7)	(7.0)	3.55	40%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	173
	3	土師器坏	(12.7)	(7.0)	3.35	30%	内 明褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	3.51.54.142
	4	土師器坏	(11.3)	(5.6)	3.35	35%	内 淡橙褐色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	55
	5	土師器坏	(11.9)	(5.9)	3.55	30%	内 明赤褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	200
	6	土師器坏	(12.0)	(6.6)	3.85	20%	内 淡黄橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	1.125.126
	7	土師器坏	11.8	5.45	4.0	65%	内 淡褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 体外墨書「□」	4.76.88.102.115.200
	8	土師器坏		7.1	[3.0]	25%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「大万」	30.48.93
	9	土師器坏	12.35	6.5	3.9	90%	内 淡褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底内墨書「大万」 底外墨書「大万」	1.79.175.176
	10	土師器坏	(14.6)	6.85	4.95	50%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「+(×)」	2.4.34.53.71.202
	11	土師器坏	(15.7)	(8.0)	4.8	40%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「主」正位	3.27.56.57.58.63
	12	土師器坏	15.5	7.4	5.1	90%	内 黒色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	128.129.177.188.200
	13	土師器坏	(15.0)	(8.4)	4.15	40%	内 明赤褐色 外 灰黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	176.203
	14	土師器坏	(14.5)		[5.25]	40%	内 黒色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 手持ちヘラケズリ 内面黒色処理	24.99
	15	土師器坏		6.2	[2.5]	30%	内 淡黄褐色 外 淡黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	174
	16	土師器坏			[3.3]		内 橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「未」正位	3.49
	17	土師器坏			[2.4]		内 明赤褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「□」	1.202
	18	土師器坏					内 明赤褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「□」	4
	19	土師器坏		(3.4)	[1.75]	10%	内 淡橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「□」	110
	20	土師器甕	(13.4)	5.9	13.05	80%	内 赤褐色 外 赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	4.186.187.196.200.202
	21	土師器甕	21.85	(7.5)	34.4	50%	内 淡褐色 外 淡褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 常総型	4.78.103.134.135.169.179.180.181.182.183.184.185.200
	22	土師器甕	(15.2)		[8.0]	20%	内 赤褐色 外 赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	4.81.163.164.200
	23	土師器甕	(17.8)		[7.55]	20%	内 明赤褐色 外 淡赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	166.172.197.102
	24	砥石	長さ 7.6	幅 5.0	厚さ 2.0	50%	灰白色		重さ129.3g 石材:凝灰岩	45
	25	鉄製品	長さ [9.0]	幅 0.8	厚さ 0.4				重さ18.5g	152.153
	26	鉄製品	長さ [3.9]	幅 0.6	厚さ 0.4				重さ5.4g	178
	27	鉄製品	長さ [5.5]	幅 0.5	厚さ 0.3				重さ2.5g	39
SI022	1	土師器坏	14.2	10.0	4.65	100%	内 赤褐色 外 赤褐色	良好	非ロクロ 内 ヨコナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 木葉痕	12
	2	土師器皿	(20.1)	(15.7)	3.3	40%	内 淡褐色 外 明褐色	良好	非ロクロ 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	3.7.8.11
	3	土師器甑	(22.8)		[8.4]	15%	内 黒褐色 外 黒色	良好	内 ヨコナデ 黒色処理 外 ヘラナデ 底 ヘラケズリ	13.14
SI023	1	土師器坏	12.2	7.2	3.65	90%	内 淡赤褐色 外 淡赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「里」正位	3.22.28
	2	土師器坏	(13.5)	(7.6)	3.7	50%	内 褐色 外 褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「里」正位 底外線刻「+(×)」	2.13.15.16
	3	土師器坏		(8.6)	[2.95]	30%	内 淡茶褐色 外 淡茶褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	26
	4	土師器坏	(20.2)		[6.4]	35%	内 茶褐色 外 暗褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 被熱	3.4.5.6.24
	5	土師器高台付椀		(8.5)	[3.1]	15%	内 赤褐色 外 赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラナデ	34
	6	土師器甕	(12.6)		[3.6]	10%	内 暗褐色 外 淡赤褐色	良好	内 ヨコナデ 外 ヘラナデ 底 手持ちヘラケズリ 被熱	23
	7	土師器甕		(6.4)	[7.0]	25%	内 赤褐色 外 灰黄褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 外面荒れ・山砂付着	35
	8	鉄床石・砥石	長さ 18.0	幅 20.0	厚さ 11.0				重さ5,230g 石材:安山岩	20.27
SI024	1	須恵器坏	13.6	7.0	4.8	100%	青灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 新治窯産	2.7.18
	2	須恵器坏	13.6	7.4	4.5	100%	青灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 新治窯産	2.8.15
	3	須恵器坏	13.3	7.2	4.1	100%	灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 回転ヘラ切り 手持ちヘラケズリ 新治窯産	17.2
	4	土師器坏		7.6	[3.3]	50%	暗褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 底外ヘラ書き「+(×)」	9
	5	土師器坏	12.8	8.8	3.7	100%	内 暗褐色 外 黒褐色	良好	非ロクロ 内 指ナデ ヨコナデ 外 指ナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	2.27
	6	土師器坏	11.4	7.8	3.95	100%	赤褐色	良好	ロクロ成形 底 静止糸切り 手持ちヘラケズリ	21.22

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
7	土師器坏		8.2	[3.6]	50%	褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り 手持ちヘラケズリ　体外墨書「富」正位	1.19.23
8	土師器甕	(10.6)	(5.7)	10.1	25%	内　明褐色 外　暗赤褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　ヘラケズリ 底　手持ちヘラケズリ	3.12.29
9	土師器甕	(13.2)		[6.25]	15%	明褐色	良好	ロクロ成形	26
SI025 1	土師器坏	12.35	6.95	3.95	100%	内　明褐色 外　淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ	55
2	土師器坏	11.85	6.85	3.9	85%	内　明赤褐色 外　明赤褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り 手持ちヘラケズリ	50.51.54
3	土師器坏	12.55	7.0	3.35	70%	内　淡褐色 外　淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ	1.6.13.17.18.19.46
4	土師器坏	11.75	6.55	3.6	65%	内　淡橙褐色 外　淡橙褐色	あまい	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ	34.37
5	土師器坏	(14.4)	(7.0)	4.2	60%	内　淡褐色 外　赤褐色	あまい	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　手持ちヘラケズリ 底　回転糸切り無調整	1.2.14.16.18
6	土師器坏	(13.9)		[3.35]	20%	内　淡橙褐色 外　明赤褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ	21.24.25
7	土師器坏	(14.8)		[3.3]	20%	内　褐色 外　褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ　体外墨書「㊞」正位	2.9.46
8	土師器坏	(15.0)	7.8	4.55	65%	内　淡褐色 外　淡褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ 底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	33
9	土師器坏		6.25	[1.5]	15%	内　淡橙褐色 外　淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り 手持ちヘラケズリ	57
10	土師器坏	(15.5)		[3.6]	20%	内　黒色 外　淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ 内面黒色処理	41
11	土師器高台付皿	(13.7)	(6.3)	2.4	40%	内　黒色 外　褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　底　回転糸切り　ナデ 内面黒色処理	53
12	須恵器甕		15.6	[8.35]	20%	内　淡灰褐色 外　黒褐色	良好	内　ナデ　外　タタキ　ヘラケズリ　底　ヘラナデ 被熱	1.2.3.22.38
13	土師器甕		6.3	[8.3]	40%	内　赤褐色 外　赤褐色	良好	内　ナデ　外　手持ちヘラケズリ 底　手持ちヘラケズリ	1.2.39
SI030 1	須恵器蓋	16.05		2.5	50%	灰白色	ややあまい	外　回転ヘラケズリ　新治窯産	3.72
2	須恵器蓋	(14.7)		2.0	25%	灰色	良好	外　回転ヘラケズリ　新治窯産	96
3	土師器坏	15.5		3.9	90%	淡褐色	良好	非ロクロ　内　ナデ　ヘラミガキ　外　手持ちヘラケズリ　ヘラミガキ	102.104
4	土師器坏	(16.9)		3.5	50%	赤褐色	良好	非ロクロ　内　ナデ　ヘラミガキ　外　手持ちヘラケズリ　ヘラミガキ　内外面赤彩　被熱か	1.2.4.49.60.95
5	土師器坏	(16.5)		3.7	25%	赤褐色	良好	非ロクロ　内　ナデ　ヘラミガキ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　ヘラミガキ　内外面赤彩　被熱	104
6	土師器坏	(14.6)		[2.8]	15%	赤褐色	良好	非ロクロ　内　ヨコナデ　外　手持ちヘラケズリ	1.8.92
7	須恵器長頸壺			[11.15]	20%	灰色	良好	口頸部内面及び外面の一部に自然釉付着　湖西窯産か	50
8	土師器鉢	15.75	10.5	7.3	90%	内　暗褐色 外　橙褐色	良好	内　ヘラナデ　ヨコナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　被熱	70.103
9	土師器甕	23.65		[28.2]	80%	内　褐色 外　暗褐色	良好	内　ヘラナデ　ヨコナデ　外　ヘラナデ　ヘラミガキ　ヨコナデ	1.2.3.4.7.8.10.11.12.14.15.16.17.18.19.20.21.25.26.28.32.33.39.43.44.45.46.57.60.61.67.72.76.77.78
10	土師器甕		10.2	[2.4]	破片	内　灰褐色 外　暗褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ヘラミガキ　底　ヘラミガキ 常総型	63
SI031 1	須恵器蓋	(16.8)		[1.95]	50%	灰色	良好	外　回転ヘラケズリ　新治窯産	1.10.11.21
2	須恵器坏	(15.0)	(8.0)	3.6	20%	内　暗灰色 外　暗灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　新治窯産	2.20.
3	土師器坏	14.1		4.2	65%	内　暗黄褐色 外　暗褐色	良好	非ロクロ　内　ヨコナデ　ヘラミガキ　外　手持ちヘラケズリ　ヨコナデ	4.6.22
4	土師器坏	(18.6)		3.25	30%	赤褐色	良好	非ロクロ　内　ヨコナデ　ヘラミガキ　外　ヨコナデ 手持ちヘラケズリ　内外面赤彩	4.9.13.030-2.69
5	土師器坏	(10.4)		[5.35]	40%	暗褐色	良好	非ロクロ　内　ナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ 作り雑	8
6	土師器坏	(14.5)		3.75	50%	淡褐色	良好	非ロクロ　内　ヘラナデ　ヨコナデ　ヘラミガキ　外 ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　ヘラミガキ　底外線刻「大」	7.23.24.25
7	土師器甕	14.0	7.0	17.1	80%	内　暗赤褐色 外　黒褐色	良好	内　ヘラナデ　ヨコナデ　外　手持ちヘラケズリ　ヨコナデ　底　手持ちヘラケズリ	1.26.27.28.29.30.32.33.38.39.40.42
8	土師器甕	(13.0)		[11.4]	30%	内　暗褐色 外　橙褐色	良好	内　ヘラナデ　ヨコナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ	1.4.14.16.17
SI032 1	土師器坏	12.4	6.4	3.5	100%	内　褐色 外　淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　ナデ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	12
2	土師器坏	(12.9)	(7.2)	3.7	20%	黒褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ	1.8.22
3	土師器坏		6.6	[1.8]	30%	内　淡褐色 外　褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ	2.3.7.8
4	土師器坏			[2.3]		内　淡褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　体外墨書「富」正位	3
5	土師器坏			[1.8]		淡赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ 体外墨書「□」	24
6	土師器坏			[3.5]		淡褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□」	2.11
7	土師器高台付皿	13.7	7.5	3.5	95%	内　橙褐色 外　淡褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　底　回転糸切り	10
8	須恵器甕（甑）	(25.3)		[17.5]	25%	灰色	良好	内　タタキ　ヘラナデ　ヨコナデ　外　タタキ　手持ちヘラケズリ　ヨコナデ　新治窯産	3.17.19
SI035 1	土師器坏	(14.0)	7.3	4.7	70%	内　赤褐色 外　暗褐色	良好	非ロクロ　内　ヨコナデ　ヘラミガキ　外　ナデ　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　被熱	2.3.13.15.43.48.127
2	土師器坏	12.9	6.9	3.9	100%	内　橙褐色 外　橙褐色	ややあまい	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ　口縁・体部打ち欠き　灯明器	122
3	土師器坏	12.5	7.5	3.6	100%	内　褐色 外　橙褐色	ややあまい	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ	3.4.71.133.146.153

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
4	土師器坏	11.85	6.6	3.5	60%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	137.140.151
5	土師器坏	12.1	7.0	4.2	75%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	1.2.3.4.8.20.26.35.53.161
6	土師器坏	12.8	6.2	3.8	60%	褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	1.2.4.21.60.61.65
7	土師器坏	(12.3)	7.4	3.6	40%	淡褐色	ややあまい	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	2.3.4.97.108
8	土師器坏	(12.2)	5.9	3.8	30%	褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ	1.129
9	土師器坏	13.9	6.7	4.6	75%	明褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	1.2.3.4.44.128
10	土師器坏	(13.2)		[3.8]	30%	明褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ	1.2.3.130
11	土師器坏	(16.8)	8.4	5.6	20%	黄褐色	良好	ロクロ成形　内　ナデ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	3.42.60.68.132.162
12	土師器坏	(17.5)		[5.8]	25%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ	17.51.79.80.81
13	土師器坏		7.0	[2.5]	35%	暗褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　回転糸切り　手持ちヘラ削り	2.3.32.103.113
14	土師器坏		6.2	[2.5]	35%	橙褐色	ややあまい	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱	1.141
15	土師器坏		(6.5)	[1.6]	10%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底内ヘラ書き	111
16	土師器坏			[2.35]		淡褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□」	2
17	土師器坏		7.1	[1.7]		明褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ　体外墨書「□」	3.109
18	土師器高台付坏	14.9	7.4	5.25	90%	内　黒色 外　灰褐色	ややあまい	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　黒色処理　底　回転糸切り　被熱　体外墨書「万」正位	1.2.3.106.123.125
19	土師器皿	(12.3)	6.7	2.25	60%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　底　回転糸切り	3.7.96.150.162
20	土師器皿	(12.4)	6.4	2.05	50%	明褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　底　回転糸切り	2.3.76.86
21	土師器皿	12.6	7.0	2.45	100%	淡褐色・褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　底　回転糸切り　体内墨書「兄」	3.25.120
22	土師器高台付皿	16.9	5.9	4.6	100%	内　褐色・赤褐色 外　明褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　粗いヘラミガキ　焼成後底部穿孔1箇所	121
23	須恵器甕	20.7	13.5	30.3	70%	灰褐色	良好	内　無文の当て具痕　ナデ　外　平行タタキ　手持ちヘラケズリ　底　外周ナデ　中央無調整　千葉市周辺城産	1.2.3.4.23.36.37.38.39.41.49.59.62.64.67.74.83.84.87.88.104.105.107.114.115.124.127.128.136.142.147.148.149.162.155.157.159.160
24	土師器甕	(13.4)		[5.4]		暗褐色	良好	内　ヘラナデ　ヨコナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ	100.117
25	鋼製品 帯金具　巡方	長さ 3.05	幅 3.0	厚さ 0.1	100%			重さ4.88g	98
26	鋼製品 帯金具　鉈尾	長さ 4.8	幅 3.0	厚さ 0.1	90%			重さ7.42g	99
27	鉄製品 鏃	長さ 16.4	幅 3.2	厚さ 0.3	100%			重さ72.05g	72
28	鉄製品 刀子	長さ [8.6]	幅 1.2	厚さ 0.35				重さ8.58g	131
29	鉄製品 刀子	長さ [7.9]	幅 1.0	厚さ 0.2				重さ5.21g	5
30	双孔円板	径 2.2		厚さ 0.2	98%			孔径0.1cm2か所　重さ1.7g　石材:粘板岩	16
SI036　1	須恵器坏	13.6	7.3	4.5	100%	淡黄灰色・暗淡灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　口縁部内面煤付着　新治窯産	19
2	須恵器坏	10.8	7.5	3.8	95%	灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　底面及び体部外面一部煤付着　新治窯産	18
3	土師器坏	(12.0)	(10.0)	4.8	40%	褐色・暗褐色	良好	ロクロ成形　底　回転ヘラケズリ	2.3.27.28.29
4	土師器坏					黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　体部外面墨書「息」正位	2
SI037　1	須恵器坏	13.6	6.0	4.4	80%	灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　ヘラケズリ　体外線刻「小」正位　新治窯産	134
2	須恵器坏	13.3	6.0	4.1	85%	灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　ヘラケズリ　体外線刻「巾」正位　新治窯産	2.29.143
3	土師器蓋	17.1		[2.9]	75%	内　暗赤褐色 外　赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　被熱・摩耗	4.190.
4	土師器坏	(12.5)	7.1	3.9	55%	黄褐色	良好	ロクロ成形　内　ナデ　外　ナデ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	27.46
5	土師器坏	12.8	8.0	4.2	80%	淡黄灰色	良好	ロクロ成形　内　ナデ　外　ナデ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	189
6	土師器坏	11.7	6.1	3.9	100%	褐色	良好	ロクロ成形　内　ナデ　外　ナデ　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　雲母多	174
7	土師器坏	12.1	7.2	3.8	80%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形　内　ナデ　外　ナデ　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　外部一部煤付着　一部破断面摩滅	1.135
8	土師器坏	(11.7)	6.0	3.5	60%	淡褐色	良好	ロクロ成形　内　ナデ　外　ナデ　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	1.129
9	土師器坏	11.8	5.8	3.7	80%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱・摩耗	4.12.106
10	土師器坏	11.8	6.8	5.0	85%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱・摩耗	1.4.175.234.235
11	土師器坏	(12.9)	(7.4)	4.0	40%	暗黄褐色	良好	ロクロ成形　内　ナデ　外　ナデ　回転ヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ	1.3.4.103
12	土師器坏	(11.7)	(6.1)	3.7	45%	黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	4.128
13	土師器坏	(12.6)	(7.4)	3.9	40%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	1

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
14	土師器坏	(12.2)	(7.6)	3.8	30%	内 褐色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1 170
15	土師器坏	(12.2)	(7.2)	3.9	45%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	4.152
16	土師器坏	(12.0)	7.0	4.0	30%	褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	4.75
17	土師器坏	(11.9)	(6.6)	3.5	30%	黄褐色	ややあまい	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	83
18	土師器坏	(11.2)	6.2	3.7	40%	暗黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1
19	土師器坏	(12.2)	7.0	3.4	45%	黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1.4.38
20	土師器坏	(11.8)	(6.2)	3.6	40%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	1.4.125
21	土師器坏	(13.8)	(6.6)	4.2	45%	黄褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	1.2.95.234
22	土師器坏	(11.7)	(6.8)	3.2	40%	内 淡橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	1.213
23	土師器坏	12.2	7.9	4.0	70%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「巾」正位	1.2.26.28
24	土師器坏	(11.4)	(6.0)	4.0	45%	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「巾」正位	176.207.227.235
25	土師器坏	12.9	8.2	3.3	50%	淡褐色	良好	ロクロ成形 底 糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「巾」正位 底外墨書「□□」	1.3.4.127
26	土師器坏	12.3	6.4	3.9	55%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 手持ちヘラケズリ 底 糸切り 手持ちヘラケズリ 底外墨書「+(×)」	1.3.147
27	土師器坏	(12.4)	6.6	3.6	60%	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「□」 底外墨書「中」	1.138
28	土師器坏	12.7	6.5	3.8	75%	黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 被熱・内面摩耗	1.158
29	土師器坏				破片	褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「巾」正位	4
30	土師器坏				破片	内 黒色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 黒色処理 ヘラミガキ 外 ナデ 体外墨書「巾」正位	4
31	土師器坏				破片	内 黄褐色 外 褐色	ややあまい	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 回転ヘラケズリ 体外墨書「巾」正位	4
32	土師器坏				破片	褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転ヘラケズリ 底外墨書「巾」	4
33	土師器高台付坏		(6.0)	[1.3]	破片	内 黒色 外 暗褐色	良好	内 ナデ 黒色処理 外 ナデ 底 糸切り ナデ 底外墨書「巾」	31
34	土師器坏				破片	内 暗橙褐色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ ヘラミガキ 外 ナデ ヘラケズリ 体外墨書「巾」正位	3
35	土師器坏				破片	黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 体外線刻「巾」正位	4
36	土師器坏				破片	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 体外線刻「巾」正位	4
37	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 体外線刻「巾」正位	1
38	土師器坏		(7.5)		破片	褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底外墨書「+(×)」	81
39	土師器坏				破片	褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 体外墨書「小」正位	4
40	土師器坏				破片	暗褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 体外墨書「小」正位	2
41	土師器坏				破片	淡黄褐色	ややあまい	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 体外墨書「□」	4
42	土師器坏				破片	明褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ロクロ成形 体外墨書「□」	4
43	土師器坏				破片	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 底 糸切り ヘラケズリ 底外墨書「巾」	4
44	土師器坏				破片	黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 体外墨書「□」	4
45	土師器坏		(7.0)	[2.7]	40%	内 黒色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り ナデ	1.76
46	土師器坏		6.8	[2.0]	30%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	4.150.168
47	土師器坏	(15.2)	(7.0)	4.9	40%	内 黒色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	72.144
48	土師器坏	(15.0)	(8.2)	5.1	25%	内 黒色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	1.2.4.6
49	土師器坏	(16.8)	9.2	5.1	65%	内 赤褐色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 被熱	1.4.21.25.201
50	土師器坏	19.0	8.3	6.4	70%	内 淡茶褐色 外 暗茶褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコヘラミガキ 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 内外面・部煤付着 被熱	140
51	土師器坏	(23.2)	(10.0)	9.3	35%	内 黒色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	3.4.41.49.62.78.146
52	土師器坏	8.4	4.7	2.6	95%	黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 底 回転糸切り 無調整 内外面 一部に煤付着 灯明器(専用) 雲母多 打ち欠き	186
53	土師器高台付坏	(9.2)	6.5	5.4	70%	内 黒色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ ヘラミガキ 黒色処理 外 ナデ 底 糸切り ナデ 体外墨書「巾」正位	3.104.145
54	土師器高台付坏	(9.4)	(5.5)	5.2	40%	内 黒色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 底 ナデ	4 160
55	須恵器壺		(8.3)	[16.8]	30%	灰色	良好	底 回転糸切り ナデ 底部に自然釉付着	2.3.110.111.112.113.114.115.116.117.171.203.212
56	須恵器甕					暗黄褐色	良好	内 ナデ 外 タテ方向の平行タタキ 方形角状の把手	165
57	須恵器甕		(15.0)	[6.2]	20%	灰褐色	良好	内 ナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 ヘラケズリ 胴部外面ヘラ書き「□」 新治窯産	2.139
58	須恵器甕		(12.2)	[12.5]	35%	灰色	良好	内 ナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 ヘラケズリ 新治窯産	2.3.118.121.182

遺構・	挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
	59	土師器甕	10.0	5.2	8.7	80%	赤褐色	良好	内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	4.178.180.181.188.195.201
	60	土師器甕	13.6		[7.1]	25%	暗赤褐色	良好	内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	2.58.220
	61	土師器甕		7.0	[10.1]	40%	暗赤褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	1.4.161.194.196.198.201.205.223.235
	62	土師器甕	(15.0)		[14.7]	20%	暗褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 常総型	4.61.169
	63	土師器甕	(20.2)		[7.9]	25%	内 暗黄褐色 外 黄褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ナデ 常総型	1.87.142.153.172
	64	土師器甕		8.0	[3.1]	10%	内 黄褐色 外 暗黄褐色	良好	内 ユビナデ 外 タテヘラミガキ 底 木葉痕	1.2.73
	65	土師器甕		(10.0)	[21.6]	25%	内 黒褐色 外 暗黄褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ナデ 底 手持ちヘラケズリ 常総型	2.11.23.80.99.136.149
	66	土師器甕		(9.1)	[11.6]	15%	暗褐色	良好	内 ヨコナデ 外 ナデ 底 手持ちヘラケズリ 常総型	1.47.71.141.222.227
	67	土師器甕	(21.0)		[11.3]	20%	灰白色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ナデ 外来土器、東海西部～畿内東部産か	1.2.4.48.96.139
	68	土製支脚	長さ [9.3]	幅 [6.9]	厚さ [6.1]		明褐色	良好	外 ヘラナデ	52
	69	鉄床石	長さ 12.6	幅 9.0	厚さ 5.1	100%			重さ684.71g 石材:安山岩	107
	70	土製紡錘車	上面径 3.5	下面径 2.6	厚さ 2.3	50%	褐色	良好	孔径(0.6cm) 重さ25.7g 表面ヘラケズリ	10
	71	土製紡錘車	上面径 (3.8)	下面径 [3.0]	厚さ 2.4	45%	褐色	良好	孔径(0.4cm) 重さ14.23g 表面ナデ	2
	72	鉄製品 刀子	長さ [8.8]	幅 1.0	厚さ 0.2				重さ7.75g	93
	73	鉄製品 刀 はばき?	長さ 4.8	幅 2.3	厚さ 0.3				重さ10.87g 内径3.7×1.3cm 側面幅0.8cm	77
	74	鉄製品	長さ [9.3]	幅 0.7	厚さ 0.5				重さ9.85g	86
	75	鉄製品 刀子	長さ 18.7	幅 1.2	厚さ 0.3	100%			重さ16.7g 刃部長10.1cm 茎長8.6cm	50.51.66
SI039	1	須恵器坏	(12.5)	(8.0)	3.7	40%	明灰色	良好	内 ナデ 外 ナデ 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 内外面に火だすき痕あり	19
	2	土師器坏		(7.4)	[1.0]	20%	褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底外墨書「富」	1.6.
	3	土師器甕	10.85	4.4	11.3	75%	内 黒褐色 外 赤褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 被熱スス付着	2.7.8.21.39.47.49.50.52.53
	4	土師器甕	11.85	4.2	11.4	95%	内 赤褐色 外 明茶褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	28.48
	5	土師器甕	11.2	5.2	12.6	75%	内 黒褐色・赤褐色 外 暗赤褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	1.3.4.10.14.18.22.24.25.30.31.41.48.49.53
	6	土師器甕	(13.75)	7.55	16.3	60%	茶褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヘラケズリ 底 木葉痕 被熱スス付着 常総型	43
	7	土師器甕	(19.7)	(8.9)	30.65	35%	暗褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ナデ 底 木葉痕 被熱スス付着 常総型	13.26.33.34.35.36.37.38.40.42.43.44.45.46.49
	8	鉄製品鏃	長さ [6.7]	幅 2.5	厚み 0.15				重さ13.87g	12
	9	鉄製品錐	長さ 7.5	幅 0.4	厚さ 0.25	100%			重さ2.93g	51
SI041	1	須恵器坏	(13.6)	7.0	4.95	55%	淡灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 新治窯産	32
	2	須恵器坏	(13.2)	(6.5)	4.4	35%	暗灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 新治窯産	2.3.14.16
	3	土師器坏	(13.0)	8.0	5.15	65%	暗赤褐色	良好	非ロクロ 内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ ナデ 底 手持ちヘラケズリ 被熱	23
	4	土師器坏	(12.2)	(6.8)	4.5	35%	暗褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 灯明器 油煙付着	2.9
	5	土師器坏	(13.0)		[4.6]	20%	内 黒褐色 外 赤褐色	あまい	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 内面黒色処理	1.8
	6	土師器坏	12.0	7.8	3.0	70%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1.2.3.17.26
	7	土師器坏	(13.0)	(7.0)	3.6	20%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 内面被熱・剥離顕著	38
	8	土師器皿	18.55	10.15	2.3	100%	内 黒みがかった赤褐色 外 赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ ヘラミガキ 外 手持ちヘラケズリ ヨコナデ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 被熱 底外墨書「国」	18.22.58
	9	土師器坏			[0.8]	破片	内 黒褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 手持ち?ヘラケズリ 底外墨書「□」	2
	10	須恵器坏			0.6	10%	灰色	良好	底 回転ヘラ切り 手持ちヘラケズリ 底内線刻「十」 新治窯産	2
	11	土師器甕	14.3		[12.35]	60%	内 褐色 外 赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラケズリ	1.27.28.29.30.37.60
	12	土師器甕		7.15	[9.9]	40%	内 明褐色 外 黒褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	3.21.33.60
	13	土師器甕	(19.0)		[13.8]	20%	内 淡褐色 外 淡赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラミガキ 常総型 小石多	1.2.3.44.60
	14	土師器甕		8.4	[28.9]	40%	淡褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ナデ ヘラミガキ 底 木葉痕 常総型 小石多	1.2.11.39.40.42.43.45.46.47.505.1.54.55.56.60
	15	鉄製品 穂摘み具	長さ 7.1	幅 1.9	厚さ 0.15	100%			重さ8.52g 目釘2か所遺存 木質付着	5
	16	鉄製品 錐か	長さ 11.2	幅 0.8	厚さ 0.45	100%			重さ9.66g ねじれが中央と両端にあり	6
	17	石製紡錘車	上面径 3.7	厚み 1.6	下面径 2.8	95%	茶褐色		孔径0.9 重さ32.08g 石材:珪化岩(珪質凝灰岩)	24
SI042	1	須恵器坏	11.7	7.8	4.0	55%	内 暗黄灰色 外 灰色 暗灰色	良好	外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底内線刻 底外線刻 外面に火だすき痕	2.3.9.12
	2	土師器坏	10.8	7.2	3.5	80%	内 橙褐色 外 黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 底外線刻「+(×)」 内面一部煤付着 灯明器?	3.7.21
	3	土師器坏	(13.0)	8.3	3.7	60%	内 明黄褐色 外 黄褐色	ややあまい	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 底外線刻「+(×)」 被熱? 器面摩耗	1.3.8.23

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
4	土師器坏		(7.3)	[1.8]	15%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ	2.3.23
5	土師器甕	(21.7)		[14.0]	25%	暗褐色	良好	内　ヨコナデ　ヨコヘラナデ　外　ヨコナデ　ナデ　常総型	1.3.4.5.10.14.18.19.20.22.23
6	土師器甕		(8.5)	[7.1]	10%	内　黒褐色 外　褐色	良好	内　ヨコヘラナデ　ナデ　外　タテヘラナデ　底　木葉痕　常総型	6.11.12
SI044 1	須恵器坏	13.7	8.5	4.3	95%	暗黄灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　ナデ　手持ちヘラケズリ　体外墨書「麻」正位　新治窯産	5
2	須恵器坏	12.8	7.9	4.2	95%	灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　ヘラナデ　新治窯産	4
3	土師器坏	10.7	7.8	3.9	98%	明赤褐色	良好	ロクロ成形　底　回転ヘラ切りか　体外墨書「息」横位　底外墨書「息」　被熱・摩耗	15
4	土師器坏	12.1	7.8	3.9	65%	明褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ	044-12.14.17.18.21.045-1
5	須恵器坏					灰色	良好	体外墨書「□知」横位	16　037-4
6	土師器坏					内　暗灰黄褐色 外　黄橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヨコヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　底外線刻　「+(×)」	1
7	土師器坏					黒褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外線刻　「+(×)」	7
8	土師器甕	10.5	5.5	11.1	90%	内　黄褐色 外　暗黄褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　ナデ　外　ヨコナデ　タテヘラケズリ　ナデ　底　ヘラケズリ　外面一部煤付着	3.6.10.17
9	土師器甕	21.4		[23.3]	70%	褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　ヘラナデ	9.11.19
10	砥石	長さ 8.96	幅 4.17	厚さ 3.5				重さ142.3g　石材:凝灰岩	8
SI045 1	土師器坏	12.1	6.2	4.1	70%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ　被熱　摩耗著しい	2.4.103.104.115
2	土師器坏	12.5	6.6	3.8	60%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	11.12
3	土師器坏	11.9	6.2	3.7	50%	内　明黄褐色 外　黄褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ　底　回転糸切り　ヘラケズリ　被熱・底部摩耗顕著	31.85.105
4	土師器坏	(12.8)	(6.6)	4.2	60%	明黄褐色・赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱・摩耗	53.69
5	土師器坏	(12.8)	(6.6)	4.5	40%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	2.5.37.63
6	土師器坏	(12.9)	(7.2)	3.2	15%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ	41
7	土師器坏	(13.2)	(6.4)	4.0	20%	暗褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　ヘラケズリ	5.60.
8	土師器坏	(12.1)		[3.9]	35%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ	2.5.74.100.116
9	土師器坏	(14.1)	(6.0)	4.5	40%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ	86.89.91
10	土師器坏	(14.6)	6.4	4.6	35%	橙褐色	良好	ロクロ成形　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	2.3.55.100
11	土師器坏	(14.3)	(7.6)	4.7	40%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外線刻「千万」横位	3.4.40
12	土師器坏		(7.0)	[2.5]	20%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外墨書「千万」または「十万」か	19.75
13	土師器坏				15%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　体外墨書「千」正位	47
14	土師器坏				破片	内　橙褐色 外　明黄褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「而」正位	4.115
15	土師器坏				破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　口縁部外面墨書「□」	3
16	土師器坏				破片	赤褐色	良好	ロクロ成形　口縁部外面墨書「□」	5
17	土師器坏				破片	明褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ　体外墨書「□」	4
18	土師器坏				破片	明褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□」	5
19	土師器坏				破片	内　黒色 外　明褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　黒色処理　外　ヘラケズリ　体外墨書「□」	2
20	土師器坏				破片	明褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□」	117
21	土師器坏					明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外墨書「而」	3
22	土師器坏				破片	内　黒褐色 外　明黄褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　黒色処理　体外線刻「十万」横位	4
23	土師器坏				破片	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ　体外線刻「千」横位	4
24	土師器高台付坏		(7.3)	[5.3]	20%	内　黒色 外　黄灰色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　黒色処理　外　回転ヘラケズリ　ヨコナデ　底　ヨコナデ	3.4.5.49
25	土師器坏		(8.0)	[2.0]	20%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　内　ヨコヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　ナデ　底　糸切り　回転ヘラケズリ　ナデ	13.106.115.116
26	土師器高台付皿	(14.1)	7.6	3.0	70%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヨコヘラミガキ　底　回転糸切り　ナデ	3.4.36.116
27	土師器高台付皿		(7.0)	[2.8]	40%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヨコヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　ヘラケズリ	5.68
28	転用硯か (須恵器甕)					黒灰色・灰色	良好	内　ナデ　磨り痕　外　タタキ　全面に灰緑色自然釉　東海産	43
29	土師器甕		7.0	[9.6]	35%	内　褐色 外　暗褐色	良好	内　ヨコナデ　外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ	3.34.41.116
30	鉄製品 鉄鏃	長さ 21.7	幅 [6.85]	厚さ 0.5	100%			重さ36.82g　刃部長4.5cm・幅6.85cm・厚0.2,篦被長5.3cm・幅0.9cm・厚0.35～0.5,茎長13.1cm・幅0.25～0.5cm・厚0.25～0.5cm	4.6.8
31	鉄製品 釘	長さ 1.8	幅 0.45	厚さ 0.35				重さ1.16g　木質付着	9
32	砥石	長さ 7.4	幅 4.4	厚さ 3.5				重さ170.7g　石材:凝灰岩	25
33	砥石	長さ 5.3	幅 4.3	厚さ 2.0				重さ68.4g　石材:凝灰岩	45

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
SI047 1	須恵器坏	(13.2)	(7.2)	4.3	15%	灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 新治窯産	3.15.28.62
2	須恵器坏		7.9	[2.85]	40%	橙褐色	良好	外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラ切り 回転ヘラケズリ	67
3	土師器坏	(11.7)	(6.6)	4.25	25%	内 淡灰褐色 外 淡赤褐色	良好	非ロクロ 内 ナデ ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	84.146
4	土師器坏	12.4	7.0	4.1	70%	暗赤褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 全面回転ヘラケズリ	2.204.219.224.229
5	土師器坏	11.0	6.6	3.9	75%	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 体外墨書「富」正位	182
6	土師器坏	(11.6)	(6.6)	3.05	40%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「十」 底内線刻「×」	3.72.185
7	土師器坏	11.75	7.4	3.95	75% 55%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 体外墨書「中」正位 底内線刻「+(×)」	3.150.179.180
8	土師器坏	(11.3)	(7.2)	3.65		淡橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	2.29.98.203.230
9	土師器坏	(11.4)	(6.7)	3.7	45%	橙褐色	ややあまい	ロクロ成形 底 切り離し不明 手持ちヘラケズリ 器面やや摩耗	3.74.91
10	土師器坏	11.75	7.8	3.9	75%	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底内線刻 五芒星か	162
11	土師器坏	(11.7)	(7.9)	2.95	35%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底内線刻「+(×)」	3.139.183
12	土師器坏	11.45	6.0	4.05	50%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底内線刻	2.50.95.114.230
13	土師器坏			[3.75]	破片	褐色 黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 体外墨書「 」横位	55
14	土師器坏			[3.2]	破片	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 ヘラケズリ 底 ヘラケズリ 体外墨書「+(×)」 本	165
15	土師器坏			[3.85]	10%	内 暗褐色 外 暗淡褐色	良好	ロクロ成形 底 回転ヘラケズリ 体外線刻	94
16	土師器坏			[0.8]	破片	橙褐色	良好	内 ロクロ成形 底 器面摩耗のため不明 底内線刻	3
17	須恵器坏			[0.9]	破片	淡橙褐色	良好	底 回転ヘラ切り 底内線刻	2
18	土師器坏			[0.6]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り ヘラケズリ 底外線刻	2
19	土師器坏			[0.6]	破片	内 暗褐色 外 暗淡褐色	良好	ロクロ成形 底 手持ちヘラケズリ 底内線刻	2
20	土師器甕		(8.4)	[17.0]	15%	内 茶褐色 外 暗褐色	良好	内 ヘラナデ ナデ 外 ヘラナデ後ヘラミガキ 底 木葉痕 常総型	163
21	石製紡錘車	上面径 4.4	下面径 4.0	厚さ 2.05	100%	灰色		重さ53.61g 石材:凝灰岩 孔径0.8cm	144
22	鉄製品 刀子	長さ [3.9]	幅 0.8	厚さ 0.1				重さ2.12g	8
23	鉄製品 釘か	長さ 2.3	幅 2.2	厚さ 0.4				重さ3.1g 棒状にした場合の幅0.65cm	156
24	土師器甕	(20.6)		[25.0]	30%	内 暗黄褐色 外 暗橙褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラケズリ ナデ ヘラミガキ 常総型甕	1.3.35.109.120.127.157.173.187.188.192.196
SI049 1	土師器坏		8.2	[4.1]	70%	黒褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ ナデ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	4
2	土師器甕	(14.9)	(6.6)	17.5	70%	褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	1.6.8
SI050 1	鉄床石	長さ 9.0	幅 8.3	厚さ 2.3				重さ251.12g 石材:安山岩	24
SI051 1	須恵器坏	13.1	6.5	3.8	95%	暗黄灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 回転ヘラ切り 手持ちヘラケズリ 体外墨書「十□」正位 新治窯産	3.18.19.21
2	須恵器坏	(12.4)	5.8	3.8	40%	灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 新治窯産	110
3	土師器坏	(11.8)	(6.0)	4.6	35%	黄橙褐色 黒褐色	良好	ロクロ成形 外 ヘラケズリ? 被熱・摩耗顕著	3.4
4	土師器坏	(12.7)	(6.0)	4.0	30%	内 橙褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	3.68
5	土師器坏	(11.8)	(6.0)	3.5	20%	内 暗褐色 外 暗黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 糸切り 回転ヘラケズリ	2.4
6	土師器坏	(12.6)	(5.8)	3.8	35%	内 明黄褐色 外 明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ ナデ? 底 回転ヘラケズリ	3.22.198
7	土師器坏	(11.5)		[3.5]	25%	明黄褐色	良好	ロクロ成形	181.184.194
8	土師器坏	(14.7)	(7.2)	4.9	20%	橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り ヘラケズリ	80.119
9	土師器坏	11.8	6.0	4.1	98%	淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底内線刻「韋」(九字切り) 被熱・摩耗	123
10	土師器坏	(12.0)	(6.0)	4.2	25%	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 底外線刻「+(×)」	2.3.16
11	土師器坏	(14.5)	(7.0)	4.5	50%	黒褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底内線刻「+(×)」 被熱・摩耗	1.2.4.25.43.50.59
12	土師器坏	(10.6)		[2.4]	20%	内 黒褐色 外 淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 ナデ 底 ナデ 内面黒色処理	4.73.87
13	土師器坏				破片	淡黄橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「□」摩耗著しく内外面調整不明	4.82
14	土師器坏				破片	内 黒褐色 外 暗橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底内線刻 内面黒色処理	1.158
15	土師器坏				破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 ヘラケズリ? 底 回転糸切り ヘラケズリ? 底内線刻 被熱・摩耗顕著	1
16	土師器高台付皿				破片	黒褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 ナデ 底 ナデ 底内線刻	3.86
17	土師器高台付坏	(14.7)	7.0	4.2	30%	内 黒褐色 外 暗橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 ヘラケズリ? ナデ 底 回転糸切り ナデ 底内線刻「+(×)」	60.69

遺構・	挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
	18	土師器皿	13.8	5.8	2.1	90%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヨコミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底内墨書「大万」　底外墨書「大万」	4.109
	19	須恵器甕		(4.0)	[5.0]	10%	黒灰褐色	良好	内　ヨコナデ　外　手持ちヘラケズリ　ナデ千葉市周辺域産	27
	20	土師器甕	17.3	7.0	20.6	95%	赤褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ	161.162.170.171.172.179
	21	土師器甕	(16.9)		[3.8]	10%	赤褐色・黒褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ	83.195
	22	土師器甕	(22.6)		[10.5]	10%	明黄褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　ナデ	1.2.4.40.81.90.111.152.200
	23	土師器甕	(19.0)	(9.4)	[3.1]	50%	明黄褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　ナデ　ヘラナデ　底　手持ちヘラケズリ　小石多　常総型	1.2.3.4.23.57.58.75.78.89.98.99.102.105.125.126.132.135.136.157.160.161.162.163.164.166.167.168.174.176
	24	円盤状土製品	径 2.8	厚さ 0.65		100%	黒褐色	良好	重さ7.72g　内　ナデ　外　タタキ　須恵器甕片転用	3
	25	円盤状土製品	径 2.5	厚さ 0.45		100%	内　黄褐色　外　灰黄褐色	良好	重さ3.37g　内　ナデ　外　ナデ　土師器坏片転用	4
	26	軽石	長さ 3.7	幅 3.7	厚さ 1.4				重さ8.9g	1
	27	軽石	長さ 4.3	幅 2.7	厚さ 2.1				重さ6.4g	194
	28	土製支脚	長さ 21.6	幅 9.8	厚さ 8.0	100%	黄褐色		上部幅6.4cm・厚さ5.3cm　重さ1,280g	192
	29	鉄製品 刀子か	長さ [7.5]	幅 0.6	厚さ 0.3				重さ5.17g	92
SI052	1	須恵器坏	(13.1)	(7.3)	3.7	60%	灰黄褐色	良好	底　ナデ　切り離し不明　手持ちヘラケズリ　新治窯産	4.23
	2	土師器甕	15.3	6.0	18.4	100%	内　赤褐色　外　明赤褐色・灰黄褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　底　木葉痕　ナデ　被熱・内面一部剥落	22
	3	土師器甕	24.65		[31.8]	45%	内　暗褐色　外　褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　ヘラナデ　ヘラミガキ　常総型	1.2.19.20.26
	4	土玉	長径 3.2	短径 2.9	厚さ 2.2	100%	淡褐色　赤褐色	良好	孔径0.4～0.8　重さ17.65g　外　ナデ	8
	5	鉄製品 刀子	長さ 14.65	幅 1.1	厚さ 0.3	100%			重さ17.21g　刃部長9.7cm,茎部長4.95cm	5
SI053	1	須恵器坏	13.3	7.8	5.3	60%	内　灰色　外　青灰色	良好	底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　新治窯産	1.2.75.81.87
	2	須恵器坏	12.45	9.1	3.8	70%	橙褐色	良好	底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　被熱	1.4.7.9.51.53
	3	土師器坏	12.0	8.6	4.8	80%	橙赤褐色	良好	ロクロ成形　底　手持ちヘラケズリ　底部外面荒れ	82
	4	土師器坏	(11.9)	(8.6)	[4.7]	70%	暗赤褐色	良好	ロクロ成形　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ　被熱・剥落	2.62.71
	5	土師器坏	11.35	8.1	4.1	40%	赤褐色・橙褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　静止糸切り　外周手持ちヘラケズリ　被熱・外面荒れ	1.3.42.47.50
	6	土師器坏			[4.05]	15%	淡褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「七」横位　外面接合痕あり	1.72
	7	土師器坏			[2.6]	破片	赤褐色	良好	ロクロ成形　内　ナデ　外　手持ちヘラケズリ　体外墨書「　」正位	3
	8	土師器甕		(7.6)	[15.9]	10%	暗赤褐色	良好	内　ナデ　ヘラナデ　外　ヘラケズリ　ヘラミガキ　常総型	3.67.68
	9	砥石	長さ 2.5	幅 2.2	厚さ 0.65	80%	内　白色　外　淡灰色		重さ4.9g　石材：珪化岩（珪質凝灰岩）中心より右上に穿孔あり　携帯用	63
SI055	1	土師器坏	(13.1)		[3.6]	25%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ	1.2
	2	土師器甕	(19.0)		[20.2]	20%	内　橙褐色　外　淡赤褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ナデ　ヘラナデ　ヘラミガキ　常総型甕　内外面接合痕あり	1.2.3.6.8.11.12.13.14
	3	土製品	上面径 1.55	下面径 1.4	厚さ 0.45		橙褐色	やや不良	重さ0.65g	7
	4	軽石	長さ 2.8	幅 2.4	厚さ 2.05				重さ4.12g	1
SI057	1	須恵器坏	(12.8)	(5.8)	4.3	30%	淡黄灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　新治窯産	21.100
	2	土師器坏	11.45	6.0	4.1	75%	褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	2.5.98
	3	土師器坏	14.45	6.8	4.7	100%	赤橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外線刻「大」正位　底外線刻「大」	104.108.115.119.135
	4	須恵器坏			[1.3]	10%	淡黄灰色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　新治窯産	5.24
	5	土師器坏	(12.9)	(7.2)	[3.5]	55%	褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外墨書「立合」正位	81.82.91.95
	6	土師器坏	(11.3)	(6.0)	3.5	50%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外墨書「善」正位　内外面接合痕あり	144
	7	土師器坏			[3.2]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「前」正位	5
	8	土師器坏			[2.2]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「息」正位	2
	9	土師器坏			[3.6]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□□」横位か	4
	10	土師器坏			[2.6]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□」	3
	11	土師器坏			[3.5]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ　体外墨書「□□」横位か	152
	12	土師器高台付坏		(5.4)	[3.0]	20%	黒褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　ロクロ成形　底　回転糸切り　ナデ	56.58
	13	土師器蓋		(14.8)	[2.1]	45%	内　黒色　外　褐色	良好	内　ヘラミガキ　外　ロクロ成形　手持ちヘラケズリ　内面黒色処理	59.93.107
	14	土師器皿	(14.3)	(6.8)	1.6	30%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	5.25

遺構	挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
	15	土師器皿	(14.2)	(5.4)	2.3	40%	赤橙褐色	良好	ロクロ整形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ　外面接合痕	3.11.86.47
	16	須恵器甕				10%	灰色・灰褐色	良好	内　無文のあて具痕　外　平行タタキ　下位ヘラケズリ 新治窯産	2.3.4.5.8.9.60.87.140.152 10.35.40.53.62.63.68.71. 83.84.89.92.93.99.105. 110.118.132.133.139. 143.151.153.155.156
	17	土師器甕		(8.1)	[19.5]	25%	茶褐色・赤褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ヘラケズリ　ヘラナデ　ヘラミガキ 常総型　外面山砂付着	2.5.23.36.67.103.109. 111.112.113.114.116. 121.122.123.124.126. 128.130
	18	土製品	長さ 5.5	幅 4.95	厚さ 1.2		褐色		重さ21.38g　土製支脚or建築材?　植物繊維を含む	125
	19	鉄製品 鉄鏃	長さ [2.3]	幅 0.8	厚さ 0.5				重さ2.09g　茎部分か　矢柄の木質付着	3
	20	鉄製品 くるる鍵	長さ [23.7]	幅 11.5	厚さ 0.4	95%			重さ104.99g　屈曲部から鍵側長23.7cm,柄側長11.5cm・幅1.0cm・厚0.45cm	6
SI058	1	須恵器坏	13.5	7.8	4.5	100%	暗灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　内外面接合痕　新治窯産	35
	2	須恵器坏	13.7	7.1	5.4	95%	暗灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　内外面接合痕　新治窯産	36
	3	須恵器坏	(13.9)	7.0	4.2	65%	暗灰色・黄灰色	良好	外　回転ヘラケズリ　回転ヘラ切り　回転ヘラケズリ　新治窯産	3.17.18.19
	4	須恵器坏	(13.2)	(7.2)	[3.9]	45%	暗灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　新治窯産	41
	5	土師器坏	11.8	7.9	4.2	75%	橙褐色	良好	ロクロ整形　外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　底外墨書「富」	32.33.34
	6	土師器坏	13.4	9.2	5.1	90%	橙赤褐色	良好	ロクロ整形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り 手持ちヘラケズリ　内面剥離著しい	37
	7	土師器坏	11.4	7.2	4.4	100%	橙褐色	良好	ロクロ整形　外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　体内外面接合痕	38
	8	土師器坏	11.85	8.5	4.5	95%	橙褐色	良好	ロクロ整形　底　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」	32.33
	9	土師器坏	11.4	7.5	4.4	90%	橙褐色	良好	ロクロ整形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　体外線刻「+(×)」　底内線刻「+(×)」	34
	10	土師器蓋	(13.8)		[2.1]	15%	橙褐色	良好	ロクロ整形　天井部　ナデ	51.62
	11	転用硯 (須恵器高台付皿)	13.4	10.4	2.55	100%	明灰色	良好	底部内面が主な使用面だが底部外面も使用　底　回転ヘラ切り　内面接合痕　新治窯産	39
	12	土師器甕	(14.8)		[6.9]	15%	内　黒褐色 外　橙赤褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　手持ちヘラケズリ　外面接合痕あり　被熱	12.43.57
	13	土師器甕	(22.0)	(5.8)	[11.3]	25%	内　褐色 外　茶褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　手持ちヘラケズリ　外面接合痕あり　被熱	13.14.15.20.58
	14	土師器甑	24.2	8.9	20.8	95%	内　明褐色 外　淡褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　手持ちヘラケズリ　内外面口唇部に接合痕あり　被熱	1.42
	15	石帯 銙尾	長さ 5.5	幅 3.7	厚さ 0.55	100%			孔は3箇所・2孔で一対・表側には未貫通・径0.2～0.3　重さ23.4g　蛇紋岩製	28
	16	鉄製品 刀子	長さ [11.8]	幅 1.4	厚さ 0.2				重さ13.16g　茎部長7.55cm　はばき遺存	31
	17	鉄製品 鉄鏃?	長さ [8.9]	幅 0.5	厚さ 0.3				重さ6.55g　木質付着	30
	18	鉄製品 鏃	長さ 22.4	幅 3.4	厚さ 0.6	95%			重さ200.3g　外反りの鏃	29
SI059	1	須恵器坏	13.6	7.6	4.9	95%	暗灰黄色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　内外面接合痕　新治窯産	1.11.12.200
	2	須恵器坏	(13.4)	(7.0)	4.5	50%	暗灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラ切り　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　内外面接合痕　新治窯産	90.95.152.200
	3	須恵器坏	(13.5)	(8.0)	4.6	65%	灰黄色	良好	外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　外面接合痕 新治窯産	1.8.18.129.137.199
	4	須恵器坏	(13.8)	(8.4)	4.05	25%	暗灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　内外面接合痕　新治窯産	1.13
	5	土師器坏	(13.2)	(7.2)	3.8	60%	黄褐色	良好	ロクロ整形　外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ	1.52.54.65.140
	6	土師器坏	(11.8)	(8.2)	4.0	30%	淡橙褐色	良好	ロクロ整形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ　内外面接合痕	1.29.31
	7	土師器坏	15.4	6.0	7.9	35%	内　黒色 外　淡橙褐色	良好	ロクロ整形　内　ヘラミガキ　黒色処理　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ	1.2.82.122.200
	8	土師器坏	(15.1)	(8.0)	5.3	30%	暗赤褐色	良好	ロクロ整形　内　ヘラミガキ　底　回転ヘラケズリ　被熱	1.30.42.63.200
	9	土師器坏	(12.6)	(7.5)	3.6	35%	明赤褐色	良好	ロクロ整形　外　回転ヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　底外墨書「十」	1.4.50.200
	10	土師器坏	11.9	6.8	4.15	55%	明赤褐色	良好	ロクロ整形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ　底外墨書「　」　被熱	1.2.62.64.66.200
	11	土師器坏			[4.5]	破片	内　黒色 外　淡橙褐色	良好	ロクロ整形　内　ヘラミガ斬　黒色処理　外　回転ヘラケズリ　体外墨書「上」横位	1.45
	12	須恵器坏			[5.05]	破片	暗灰色	良好	外　手持ちヘラケズリ　体内線刻「+(×)」新治窯産	148
	13	須恵器坏			[1.25]	破片	暗灰色	良好	底　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」新治窯産	4
	14	土師器坏			[1.6]	破片	橙褐色	良好	ロクロ整形　外　回転ヘラケズリ　底　ヘラケズリ 体外墨書「□」	4
	15	土師器坏	11.4	8.6	3.7	90%	内　褐色 外　赤褐色	良好	非ロクロ　内　ナデ　ヨコナデ　外　手持ちヘラケズリ ヨコナデ　底　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　外面接合痕	154.155
	16	土師器坏	(12.8)	6.6	3.9	65%	赤褐色	良好	非ロクロ　内　ヘラナデ　ヨコナデ　外　手持ちヘラケズリ　ヨコナデ　底　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　被熱　焼成後底穿孔1箇所	1.4.64.119.120.156.200
	17	土師器坏	12.35	7.8	3.2	60%	橙褐色	良好	ロクロ整形　底　ヘラケズリ　底内線刻「+(×)」	1.99.133.144.145.157. 200.201
	18	土師器坏	(12.1)	(6.8)	3.5	35%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り 回転ヘラケズリ　底内線刻　「+(×)」　内外面接合痕	21

遺構・	挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
	19	土師器坏	(12.4)	8.6	3.7	55%	橙褐色	ややあまい	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　ヘラケズリ　底内線刻「+(×)」	9.10.202
	20	土師器坏		(8.2)	[2.05]	20%	橙褐色	ややあまい	ロクロ成形　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　被熱・摩耗	22
	21	土師器坏		(6.4)	[2.8]	15%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底内線刻「+(×)」内外面接合痕あり	1.38
	22	土師器坏			[3.6]	15%	橙褐色	良好	ロクロ成形　底内線刻「+(×)」	1.2
	23	土師器坏			[1.35]	10%	内　暗赤褐色 外　黒褐色	良好	非ロクロか　内　ナデ　外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　内外面被熱	1
	24	土師器坏			[1.2]	破片	内　黒色 外　赤橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　黒色処理　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底内線刻「+(×)」	60
	25	土師器坏			[0.7]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ　底内線刻	1
	26	土師器高台付坏		(9.5)	[2.5]	15%	赤橙褐色	良好	ロクロ成形　底　回転ヘラケズリ　ナデ	109.2
	27	須恵器甕			[17.05]	10%	暗黄灰色	良好	内　ナデ　ヘラナデ　外　平行タタキ　ヨコナデ　新治窯産	173.175.177.182
	28	須恵器甕			[20.6]	10%	暗灰色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　タタキ　ヨコナデ　新治窯産	1.14.17.70.131
	29	土師器甕	(11.7)		[3.4]	15%	内　黒褐色 外　赤褐色	良好	外　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　外面接合痕あり　被熱	104.113
	30	土師器甕	(12.6)		[6.9]	20%	暗褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　内面接合痕あり　被熱	4.41.57.68
	31	土師器甕	(17.3)		[9.0]	10%	内　赤橙褐色 外　暗赤褐色	良好	内　ヘラナデ　ヨコナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　内外面接合痕あり　一部被熱	132.143.160.199
	32	土師器甕		8.55	[10.7]	10%	赤褐色	良好	内　ナデ　ヘラナデ　外　手持ちヘラケズリ　ヘラミガキ　底　木葉痕　常総型	174.192
	33	土製紡錘車	上面径 7.4	径 7.8	厚さ 1.1	100%	灰色	良好	孔径0.9～7.8　重さ62.26g　須恵器坏底部を転用　内面側が上面	169
	34	土製紡錘車	径 4.5		厚さ 1.6	100%	淡褐色・橙褐色	良好	口径0.9～1.05cm　重さ29.41g	33
	35	鉄滓	長さ 8.5	幅 6.7	厚さ 4.15		茶褐色		椀形滓　重さ175.94g	102
	36	鉄滓	長さ 9.3	幅 7.6	厚さ 3.7		茶褐色		椀形滓　重さ233.56g	127
	37	鉄製品 刀子	長さ [8.95]	幅 1.0	厚さ 0.3				重さ7.03g　茎長8.1cm	101
	38	鉄製品 鏃	長さ [4.6]	幅 1.55	厚さ 0.2				重さ5.96g	34
	39	鉄製品 刀子	長さ [4.3]	幅 0.75	厚さ 0.2				重さ2.37g	187
SI061	1	鉄滓	長さ 5.7	幅 4.7	厚さ 2.4		灰黒色・茶褐色		重さ66.8g	15
SI069	1	須恵器坏	(13.5)	(7.0)	4.45	25%	暗褐色	良好	外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　新治窯産	5.41
	2	須恵器坏	(12.3)	(7.5)	[3.8]	65%	淡灰色	良好	底　回転ヘラケズリ後一部手持ちヘラケズリ　底内線刻「+(×)」　千葉市周辺域産	14.22.38.070-6
	3	土師器坏	13.1	9.6	4.6	75%	暗褐色	良好	非ロクロ　内　ヨコナデ　ヘラミガキ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　ヘラミガキ　底　手持ちヘラケズリ　ヘラミガキ　被熱	10.26.42
	4	須恵器甕		15.7	[23.85]	70%	暗灰色	良好	内　ナデ　外　タタキ　手持ちヘラケズリ　底　ナデ　新治窯産	11.25.32.39.41.42
	5	土師器甕		6.0	[11.6]	40%	内　赤褐色 外　暗褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ヘラケズリ　底　ヘラケズリ	30.31.33.42
	6	土師器甕		(8.2)	[21.4]	25%	黒褐色	良好	内　ヘラナデ　ナデ　外ヘラミガキ　常総型　外面に煤多く付着	7.23.24.27.28.29.41.42
	7	須恵器甕			[19.5]	10%	暗黄灰色	良好	内　ナデ　ヘラナデ　外　タタキ　焼成後胴部穿孔1箇所あり　内外面接合痕あり　新治窯産	8.16.18.19.21.35.36.39.42
	8	砥石	長さ 4.75	幅 3.5	厚さ 1.8		赤みがった灰色		重さ54.54g　石材:凝灰岩	6
SI077	1	土師器坏	19.0	9.2	6.6	65%	内　褐色 外　橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　被熱・所々剥落特に内面	1.2.27.38.40.41
	2	土師器坏	13.8	7.5	4.3	65%	暗褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱	2.3.4.75.76
	3	土師器坏	(12.7)	(6.6)	3.7	25%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　体部の一部に褐色物質付着　内外面接合痕	1.57
	4	土師器坏	12.1	6.55	3.75	90%	赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱	2.3.35.43
	5	土師器坏	(12.05)	(6.4)	4.1	40%	赤橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	1.2.34
	6	土師器坏	(12.15)	(6.3)	3.6	25%	褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　内外面接合痕	3.63
	7	土師器坏		6.8	[2.4]	30%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底内線刻　内外面接合痕	62
	8	土師器坏	(11.9)	(5.8)	[3.6]	20%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　体外墨書「埴」正位	9.17
	9	土師器坏		(7.0)	[1.9]	15%	赤橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り	16
	10	土師器Ⅲ	(13.0)	(6.8)	2.0	30%	内　暗赤褐色 外　淡褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　底　回転糸切り　内面一部煤付着	3.74
	11	土師器Ⅲ		(6.7)	[1.5]	20%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　内　ヘラミガキ　底　回転糸切り	78
	12	土師器坏			[3.2]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ　体外墨書「□」	3
	13	土師器坏			[1.8]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□」	3
	14	土師器坏			[2.1]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　ヘラケズリ　体外墨書「□」	1
	15	土師器坏			[1.4]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□」	3
	16	土師器坏			[1.5]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□」	3

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
17	須恵器甕		(16.6)	[14.3]	15%	暗黄灰色	良好	内 ナデ 無文当て具痕 外 タタキ 底 ナデ 内外面接合痕あり 新治窯産	1.2.6.8.10.11.12.33.48.50.67.84
18	須恵器甑		14.0	[6.2]	15%	内 暗赤褐色 外 赤褐色	良好	内 ヘラナデ 手持ちヘラケズリ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 千葉市周辺域産	1.4.15.19.51.55
19	土師器甕	18.6		[21.45]	35%	黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヘラナデ 手持ちヘラケズリ ヨコナデ 内外面接合痕あり	1.2.3.4.36.42.45.56
20	土師器甕		6.6	[5.4]	30%	内 褐色 外 赤褐色"	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 ナデ 底外ヘラ書き	1.4.94
21	石製紡錘車	上面径 4.05		厚さ 1.7	100%			重さ39.8g 石材:珪化岩(珪質凝灰岩) 被熱孔径0.9cm	22
22	鉄製品 刀子はばき？	長さ [2.4]	幅 0.7	厚さ 0.15				重さ1.45g	4
23	鉄製品 鏃	長さ [12.7]	幅 2.4	厚さ 0.2				重さ21.82g	25
24	鉄製品 刀子	長さ [20.35]	幅 2.2	厚さ 0.2				重さ53.87g 最大幅3.2cm	58.65
25	鉄製品 穂摘み具	長さ [8.05]	幅 1.65	厚さ 0.15				重さ9.14g 目釘孔2か所あるが,片側端部欠損	32
26	鉄製品 刀子	長さ [11.1]	幅 1.0	厚さ 0.3				重さ8.6g 茎長6.85cm	46
27	鉄製品	長さ [16.7]	幅 2.6	厚さ 0.4				重さ19.27g 棒状品 伸ばすと18.5cm,幅0.6cm	14
SI078 1	須恵器坏	13.5	6.6	4.4	100%	暗黄灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 内外面接合痕 被熱? 体外線刻「小」2箇所正位 新治窯産	102
2	須恵器高台付坏	12.1	6.8	5.3	85%	黄灰色	良好	外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 内外面接合痕 体外線刻「小」正位 新治窯産	1.4.53.54.60.101.113
3	土師器坏	16.5	7.2	6.3	100%	内 黒色 外 褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラミガキ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	70
4	土師器坏	12.0	7.1	3.9	80%	褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 被熱	1.77
5	土師器坏	(12.8)	(7.2)	3.7	45%	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	1.4.62
6	土師器坏	11.1	6.3	4.4	85%	褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 内外に褐色物質付着 被熱	109.113
7	土師器坏		(6.9)	[1.7]	30%	内 淡橙褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	7.41
8	土師器坏	(12.3)	(6.6)	3.9	30%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 焼成後底穿孔あり	1.2.3
9	土師器坏	12.1	7.3	3.7	90%	内 赤褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 体外墨書「十」 底外墨書「十」 内外面一部油煙付着 灯明器	111
10	土師器坏	15.3	7.5	5.4	75%	黒褐色	良好	ロクロ成形 内 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「廣磨」横位 被熱	19.20.86.87
11	土師器坏	11.65	6.0	4.1	100%	内 淡橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「善」正位 内外面接合痕	4.55
12	土師器坏	(11.8)	(7.5)	3.8	30%	橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「宜」正位	3.12
13	土師器高台付坏	(10.4)	(6.7)	[5.2]	45%	内 黒色 外 褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	51.66
14	土師器甕		(6.6)	[4.8]	10%	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 内面剥離顕著	38
15	土師器甕	(11.0)	4.3	7.0	95%	赤褐色．黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 被熱	110
16	土師器甕	18.6	8.5	13.4	75%	黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 内外面接合痕 被熱	3.4.9.28.29.69
17	土師器甕	13.05	6.8	12.7	100%	赤褐色	良好	内 ヘラナデ ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 被熱	114
18	土師器甕		7.0	14.1	35%	赤橙褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ヘラナデ 手持ちヘラケズリ 底 木葉痕 被熱 常総型	1.2.32.36.68.74
19	鉄製品 鉄鏃	長さ [16.3]	幅 4.15	厚さ 0.3	100%			重さ27.87g 推定長17.0cm,刃部長5.4cm・幅4.15cm・厚0.2,篦被長3.35cm・幅0.85cm・厚0.3cm茎長[9.2cm]・推定長10.3cm・幅0.3cm・厚0.3cm	25.42.48
20	鉄製品 刀子	長さ [16.25]	幅 1.0	厚さ 0.3				重さ17.26g	79
21	鉄製品 刀子	長さ [5.5]	幅 0.8	厚さ 0.3				重さ3.75g	80
22	鉄製品 刀子	長さ [8.7]	幅 1.2	厚さ 0.3				重さ9.26g	78
23	鉄製品 刀子	長さ [12.2]	幅 1.5	厚さ 0.3				重さ14.21g 茎に木質付着	85
24	鉄製品 刀子？	長さ [3.2]	幅 0.5	厚さ 0.3				重さ1.6g	107
25	土製紡錘車	長径 6.8	短径 6.5	厚さ 1.2		灰色	良好	孔径0.9 重さ66.34g 手持ちヘラケズリ 須恵器甕(または甑)の転用か	83
SI083A 1	土師器坏	13.1	10.8	3.4	100%	明赤褐色	良好	非ロクロ 内 ナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 木葉痕 手持ちヘラケズリ	1.45.46
2	土師器坏	(12.0)	(6.5)	3.8	55%	明黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 接合痕、指頭圧痕 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	3.15
3	須恵器坏	13.5	6.7	5.2	75%	灰色	良好	外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 新治窯産	2.3
4	土師器坏	(11.8)	7.1	3.7	60%	明黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	41
5	土師器坏	(12.5)	(7.2)	3.6	45%	内 黒褐色 外 暗赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	1
6	土師器高台付坏		6.4	[2.3]	10%	内 明褐色 外 暗黄褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り ナデ ヨコナデ	9
7	土師器鉢	9.2	5.9	7.4	100%	内 暗褐色 外 褐色	良好	内 ナデ 接合痕 指頭圧痕 外 ナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ やや手捏ね土器的	42
8	手捏ね	10.2	7.4	5.5	100%	内 暗褐色 外 明褐色	良好	内 ナデ 外 ナデ 指頭圧痕 底 木葉痕	43
9	手捏ね	10.8	6.9	11.4	95%	内 暗褐色 外 暗赤褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ 接合痕、指頭圧痕 底 木葉痕	46

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
SI087 1	土師器坏	(13.2)	6.9	4.1	破片	内 黒色 外 黒褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 接合痕	40
2	土師器甕	12.4		[4.6]	15%	内 淡褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヘラナデ 手持ちヘラケズリ 内外面接合痕 内面頸部黒色付着物	50
3	土師器甕	(19.0)		[7.7]	10%	褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヘラナデ ヨコナデ 内外面接合痕 常総型	1.23.41.42.44.65
4	須恵器甕		15.2	[12.7]	破片	灰色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 タタキ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 内外面接合痕	5.7.8.10.22.23.35.60
SI088 1	土師器坏	13.3	7.0	3.8	95%	暗褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	55
2	土師器坏	13.3	7.3	3.7	95%	褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	17
3	土師器坏	(12.6)	7.0	3.8	75%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	3.64
4	土師器坏	(12.6)	(6.4)	4.4	40%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	2.33
5	土師器坏	(13.2)	(7.6)	3.4	30%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ ナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1.2
6	土師器坏	(13.6)	(8.8)	4.4	30%	内 明赤褐色 外 明褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り ナデ 体部焼成後穿孔1箇所	1.3.80
7	土師器坏					明黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 体外墨書「千」正位	2
8	土師器坏					明黄褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「□」墨痕か	1
9	土師器高台付皿	14.4	7.0	[2.5]	55%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 ナデ	70.74.78.81
10	須恵器甕		(13.0)	[3.9]	15%	内 灰色 外 暗灰色	良好	内 ナデ 外 タタキ目	14
11	転用硯 (土師器高台付坏)	7.8	7.0	1.9	25%	明褐色	良好	口縁・体部打ち欠いて硯に転用 上面径6.2～6.6cm ロクロ成形 底 回転糸切り ナデ	11
12	土師器甕	(14.0)		[12.5]	30%	明赤褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ 手持ちヘラケズリ	1.3.4
13	土師器甕		(9.2)	[9.7]	25%	内 明黄褐色 外 褐色	良好	内 ナデ 外 ヘラミガキ 底 ナデ 外面煤付着 常総型	2.3.36.50
14	土師器甕		(8.3)	[22.5]	60%	内 明黄褐色 外 灰黄褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラミガキ 常総型	4.13.25.28.29.30.31.32.34.44.45.47.48.49.50.52.80
15	鉄製品 鏃	長さ 20.8	幅 2.6	厚さ 0.2	100%			重さ85.37g	56
16	鉄製品 刀子？	長さ [5.9]	幅 1.5	厚さ 0.15				重さ7.08g	6
17	鉄製品 鉄鏃	長さ [4.8]	幅 0.9	厚さ 0.4				重さ3.48g	5
SI092 1	土師器坏	11.0	4.0	2.8	90%	橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り後無調整	1.29.31
2	土師器坏	(11.0)	(4.2)	2.8	30%	暗褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り後無調整	12.22.24
3	土師器高台付椀		(7.3)	[4.4]	20%	橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り ナデ	11.29.32
4	土師器甕		(9.5)	[11.25]	15%	内 暗褐色 外 暗褐色・淡褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 被熱	8.13.14.15.16.29
SI093A 1	土師器坏	12.55	6.4	4.0	100%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体部外面にタール状物質付着	6
2	土師器坏	13.1	6.9	3.2	90%	褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	4.5
3	土師器坏	11.9	5.7	3.9	85%	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り後無調整	5.10.
4	土師器高台付坏	(16.7)	(7.5)	6.4	45%	内 黒色 外 暗赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り ナデ 被熱	3.10.
5	土師器高台付坏	(15.0)	(8.0)	4.75～5.4	45%	内 淡褐色 外 褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り ナデ 歪みが著しい	2
SI102A 1	須恵器蓋			[2.0]	15%	青灰色	良好	外 回転ヘラケズリ 新治窯産	1.3
2	須恵器蓋	(11.0)		[1.55]	45%	青灰色	良好	外 回転ヘラケズリ 新治窯産	23
3	土師器蓋	(16.0)		[2.95]	30%	橙褐色	良好	ロクロ成形	1.2.3.4.18
4	土師器坏	9.1	5.0	3.0	100%	内 淡褐色 外 淡橙褐色	良好	非ロクロ 内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 灯明器 口縁部油煙付着 内外面接合痕	16.26
5	土師器坏	9.0	5.7	3.1	95%	橙褐色	良好	非ロクロ 内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 灯明器 口縁部油煙付着	10.11
6	土師器坏	10.9	5.9	4.3	75%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 静止糸切り 回転ヘラケズリ 灯明器 口唇部の一部に油煙付着	14
7	土師器坏	12.7	6.9	4.0	65%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 体外墨書「+(×)」	3.8.14
8	土師器坏	(11.0)	(7.2)	3.8	60%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 灯明器 底部近くに一部油煙付着	18
9	土師器坏	(12.0)	(7.6)	3.7	30%	内 黒褐色 外 暗橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 静止糸切り 回転ヘラケズリ 被熱	1.2.31
10	転用砥石	長さ 4.2	幅 3.6	厚さ 0.8		内 暗赤褐色 外 暗褐色	良好	重さ20.4g 土師器甕(または甑)片の転用	4
SI102B 1	土師器坏	11.4	7.2	3.9	100%	内 赤褐色 外 明赤褐色	良好	非ロクロ 内 ナデ ヘラミガキ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	5
2	土師器坏	10.9	7.5	3.8	50%	内 暗灰黄褐色 外 黒褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 静止糸切り 回転ヘラケズリ 体部焼成後穿孔1箇所 油煙付着 灯明器	2
SI103C 1	土師器坏	(10.8)	(5.6)	3.5	40%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ	4
SI104 1	須恵器坏	12.2	7.1	4.5	95%	内 明灰褐色 外 灰褐色	良好	外 ナデ 底 ナデ 千葉市周辺域産	35
2	土師器坏	(11.1)	7.0	4.5	70%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 静止糸切り 手持ちヘラケズリ 体外墨書「千」正位	4.34

遺構・	挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
	3	土師器坏	12.2	7.1	3.9	95%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り　ナデ　体外墨書「本」正位　底外墨書「本□」　底部外面一部煤付着	3.36
	4	土師器甕	(20.1)		[23.1]	65%	褐色	良好	内　ナデ　外　ナデ　ヘラミガキ　内面一部接合痕あり　常総型	4.38.42.43.44.45.47.51
	5	土師器甕	12.9	6.8	15.3	98%	明赤褐色	良好	内　ナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　底　ナデ　内面一部接合痕あり	46.47.48.51
SI108	1	土師器坏	11.6	6.0	3.9	75%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　灯明器　口唇部内面一部油煙付着	1.14
	2	土師器坏	11.7	5.7	3.8	80%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ　灯明器　口唇部内外面の一部油煙付着　体外線刻「富」正位　内外面接合痕	13
	3	土師器坏	11.8	5.8	3.95～4.55	100%	淡褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　底　回転糸切り　手持ちヘラケズリ　体外線刻「小」正位　外面の一部と内面に煤付着	26
	4	土師器坏	11.4	5.1	4.2	55%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外墨書「富」横位	1.4.25.41
	5	土師器坏			[2.9]	破片	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「雛国」か横位　内面黒色物質付着	1.4
	6	土師器坏			[3.4]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「寺」正位	4
	7	土師器坏			[2.2]	破片	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「富」正位　内外面接合痕	3.41
	8	土師器皿	15.0	6.2	2.3	75%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ　内外面接合痕　外部の一部と内面に煤付着	1.2.3.41
	9	土師器皿	13.5	5.6	2.4	75%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　口縁の一部に黒斑あり	7.27
	10	土師器皿			[1.6]	破片	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　外　手持ちヘラケズリ　体外墨書「□」　体外線刻　墨書の上に線刻	4
	11	土師器高台付皿	13.9	7.0	3.3	90%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　ナデ　ヨコナデ	16
	12	土師器甕	11.8	6.6	10.5	100%	内　暗赤褐色 外　赤褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　ヘラケズリ　底　ヘラケズリ　内外面接合痕あり	15
	13	須恵器甑		(16.0)	[18.2]	20%	内　暗灰色 外　黒灰色	良好	内　ナデ　ヘラナデ　外　タタキ　ヘラケズリ　内外面接合痕あり	1.2.10.20.32.34.35.36.39.40.
SI110	1	土師器坏	12.0	5.8	4.3	95%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外墨書「任」正位	46
	2	土師器坏	(11.8)	(5.5)	3.8	15%	明褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外墨書「□□寺」正位　口唇部に煤僅かに付着　灯明器か　体部外面接合痕	2.32
	3	土師器坏	(11.3)	6.2	3.6	40%	明褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　灯明器	2.52
	4	土師器坏	(12.6)	6.0	3.6	45%	明赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱	53.55
	5	土師器皿	13.8		[1.4]	30%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「善」正位	4.51
	6	土師器坏					明褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　体外墨書　口唇部内外面に油煙付着　灯明器	3
	7	土師器坏					明黄褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「富」正位	4
	8	土師器坏		6.0	[2.7]	15%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　体外墨書「□」	22.35
	9	土師器坏					明褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　底内線刻	4
	10	土師器仏鉢	15.1		[9.7]	90%	明褐色	良好	非ロクロ　内　ナデ　ヘラナデ　外　手持ちヘラケズリ　ナデ	1.3.39.41
	11	鉄製品 釘	長さ [2.1]	幅 0.4	厚さ 0.2				重さ0.57g	50
SI113	1	須恵器高台付盤	18.2	9.9	4.1	100%	内　暗灰色 外　灰白色	良好	底　回転ヘラ切り　ナデ　新治窯産	45
	2	土師器坏	11.2	6.3	3.2	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	38
	3	土師器坏	11.6	6.8	3.8	95%	明褐色	良好	ロクロ成形　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱を受けている	50.51
	4	土師器坏	11.6	6.2	3.4	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	37
	5	土師器坏	12.0	6.6	3.8	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体部外面接合痕	41
	6	土師器坏	11.8	6.0	4.2	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱　体部外面接合痕	49
	7	土師器坏	11.8	6.8	3.9	100%	明赤褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外接合痕	48
	8	土師器坏	11.6	6.7	3.8	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ	46
	9	土師器坏	12.0	6.8	3.9	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体部外面接合痕	47
	10	土師器坏	11.6	6.0	4.2	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体部外面接合痕	39
	11	土師器坏	11.9	6.0	4.0	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　被熱　体部外面接合痕	44
	12	土師器坏	12.4	5.8	3.9	95%	明褐色	良好	非ロクロ　内　ナデ　外　手持ちヘラケズリ　底　手持ちヘラケズリ	2.12.13
	13	土師器坏	12.2	8.0	4.2	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体部外面一部煤付着　体外墨書「法」正位	50
	14	土師器坏	12.7	7.8	4.4	100%	明褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外墨書「上」正位　底外墨書「上」　被熱　煤付着	43
	15	土師器坏	11.5	7.2	3.6	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外～底外面墨書「息」正位	34.35
	16	土師器坏	11.7	7.0	3.8	100%	明黄褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外接合痕　体外墨書「富」正位	42

遺構・挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
17	土師器高台付坏	10.7	6.8	4.7	100%	内 黒色 外 明黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ ナデ 底 回転糸切り ナデ 内面黒色処理 体外墨書「□□」横位	40
18	土師器甕	12.9	6.7	12.2	90%	暗赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 ナデ	52
19	須恵器甕	(30.0)	(13.2)	27.0	30%	暗灰色	良好	内 ヨコナデ ナデ 外 ヨコナデ タタキ 内面接合痕 新治窯産	1.2.5.6.7.8.22.24.25.27.28.29.31
20	土師器甕	(22.0)	(9.0)	18.2	40%	明褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 頸部内面煤付着 外面接合痕	30.32.36.54
21	鉄製品 刀子	長さ 10.5	幅 0.8	厚さ 0.3				重さ10.3g 錆膨れで刃部不明瞭	53
SI114 1	須恵器坏	(13.3)	(8.2)	3.55	30%	青灰色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底部内面接合痕あり 新治窯産	8
2	須恵器坏		(7.6)	[1.5]	30%	灰色	良好	ロクロ成形 底 手持ちヘラケズリ 新治窯産	2.5.27
SI124B 1	土師器坏	12.2	7.0	3.7	100%	黒褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 内面被熱・やや剥離 灯明器	1.2
SB062 1	土師器坏			[2.65]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「□」	4
SB064A 1	土師器坏			[1.45]	破片	内 淡褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外墨書「□」	5
SB064B 1	土師器坏			[1.9]	破片	暗褐色	良好	ロクロ成形 外 ヘラケズリ 体外墨書「□」 被熱	10
SB066 1	土師器坏			[3.65]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「□」	1
SB070A 1	土師器坏			3.6	10%	橙褐色	良好	非ロクロ 内 ヨコナデ ナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 体外墨書「富」正位	2
2	土師器坏			3.15	10%	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 体外墨書「巾」正位	2.3.4
3	石製紡錘車	上面径 3.8	重さ 2.7	下面径 3.0	100%	灰色		孔径0.85～0.95 重さ48.6g 石材:凝灰岩	2
SH060 1	土師器坏	12.5	6.45	4.3	60%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 静止糸切り 被熱	16
2	土師器坏		(7.4)	[2.25]	25%	褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 被熱 内外面煤付着	13
3	土師器坏	(12.2)	7.25	3.55	75%	内 橙褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 回転糸切り 回転ヘラケズリ 被熱	表採
遺構外 1	土師器坏				破片	黄褐色	良好	ロクロ成形 底外墨書「□」	011－1
2	土師器坏				破片	黄褐色	良好	ロクロ成形 底外墨書「千」	017－2
3	土師器坏			[1.4]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「□」	3D－1
4	土師器坏			[2.7]	破片	内 黒色 外 褐色	良好	ロクロ成形 内 黒色処理 外 ヘラミガキ 体外墨書「□」	076－4
5	土師器坏			[2.1]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「□」	076－2
6	土師器坏			[1.1]	破片	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底内線刻 底外墨書「巾」	2B－1
7	須恵器坏	(13.5)	(7.4)	[4.8]	40%	明灰色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転ヘラ切り後全面手持ちヘラケズリ 新治窯産	056－17
8	土師器坏		(7.3)	[2.8]	30%	内 黒褐色 外 褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 黒色処理 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 底外墨書「巾」	076－4.212.213.249
9	土師器高台付皿		(8.0)	[2.2]	25%	明褐色	良好	ロクロ成形 内 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り ナデ 外面高台部一部墨痕?	105－1
10	土師器坏			[2.9]	破片	黒褐色	良好	ロクロ成形 体外線刻	表採-2
11	土師器坏			[2.0]	破片	内 橙褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 体外線刻	表採－7
12	土師器坏		(7.0)	[2.9]	25%	暗褐色	良好	ロクロ成形 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ ナデ 底内線刻「十」	2B-1
13	土師器坏			[08]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底内線刻	2B-1
14	土師器坏			[1.0]	破片	内 淡橙褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底内線刻	2B-1

第７章　中・近世及びその他の遺構・遺物

第１節　遺構

１．土坑

SK083B（第170図，図版33）

調査区東部に位置する。SI083Bと重複し，一部を破壊している。平面形はやや隅の丸い長方形である。規模は長軸が2.24m，短軸が1.26m，確認面からの深さが40cmである。覆土は炭化物層，炭化物を多く含む層が見られる（1～3層）。その上下層は炭化物・焼土粒・ローム粒・塊を含む暗褐色土である。最上層・最下層はローム粒・塊が多い。遺物は奈良・平安時代の土器片が少量出土したが，SI083Aの覆土中にあった遺物であろう。

SK093B（第170図，図版43）

調査区南部に位置する。SI093Aと重複し，一部を破壊している。平面形は方形に近い長方形で，やや隅が丸く，不整である。規模は長軸が2.06m，短軸が1.88m，深さが70cmである。底面は中央部に向かって窪んでいる。覆土は下部に炭化物が多量かつ厚く堆積し（4～6層），4層は灰も見られる。中層はそれほど炭化物を多く含まない層であるが，上層中央部は炭化物や焼土を多く含む層が見られる。遺物は奈良・平安時代の土器片が少量出土したが，SI093Aの覆土中にあった遺物が混入したものと思われる。

SK097（第170図，図版43）

調査区南部に位置する。平面形は方形である。北壁がやや広がっているが，底面は比較的整った方形である。確認面での遺構規模は南北が1.95m，東西が1.81mで，深さは70cmである。底面の規模は1.4mで，東西と南北の差は少ない。底面はほぼ平坦である。覆土は最下層が炭化物を多く含む暗褐色土である。それ以外の層はそれほど多く炭化物は含まれず，上から暗褐色土，黒褐色土となる。全体にローム粒・塊を多く含む。特に上層はローム塊が多い。

SK004（第170図，図版43）

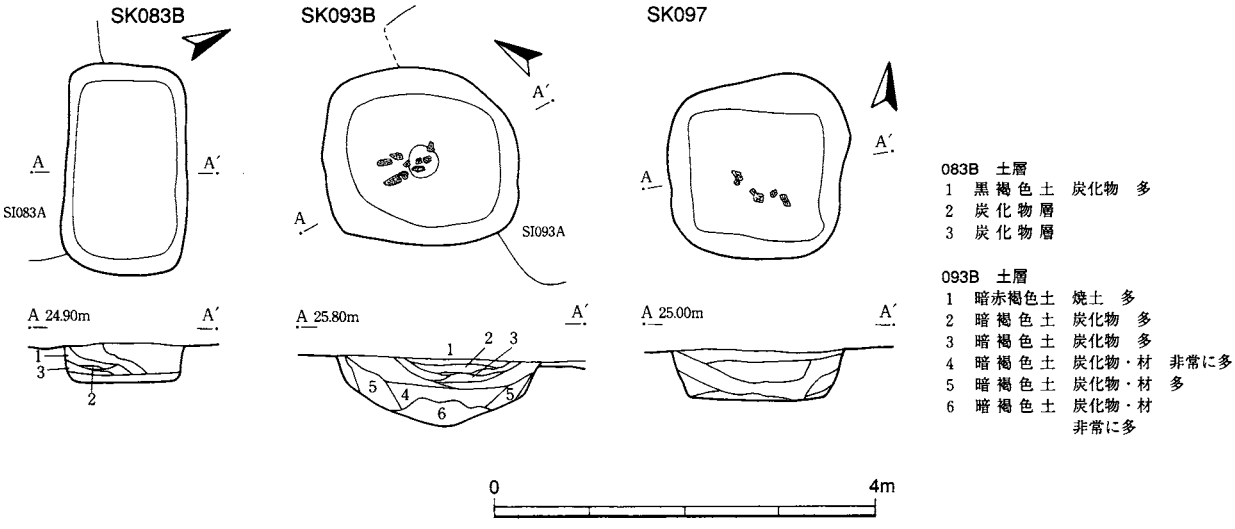
調査区北部に位置する。平面形は不整な楕円形である。確認面での遺構規模は長軸が1.51m，短軸が1.35m，深さは53cmである。遺構は西側に張り出すような状態で突出しており，その部分の底面は深さが18センチと浅く，深い部分とは33cm程度の差がある。深い部分の底面の規模は長軸が97cm，短軸が85cmである。覆土は上層と下層にローム塊を多く含む。調査時の所見では，西側を入り口とする地下式坑としているが，あまり深くないため可能性の指摘にとどめたい。覆土にローム塊が多く含まれるのは，地下式坑であれば天井部の崩落，地下式坑でなければ人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

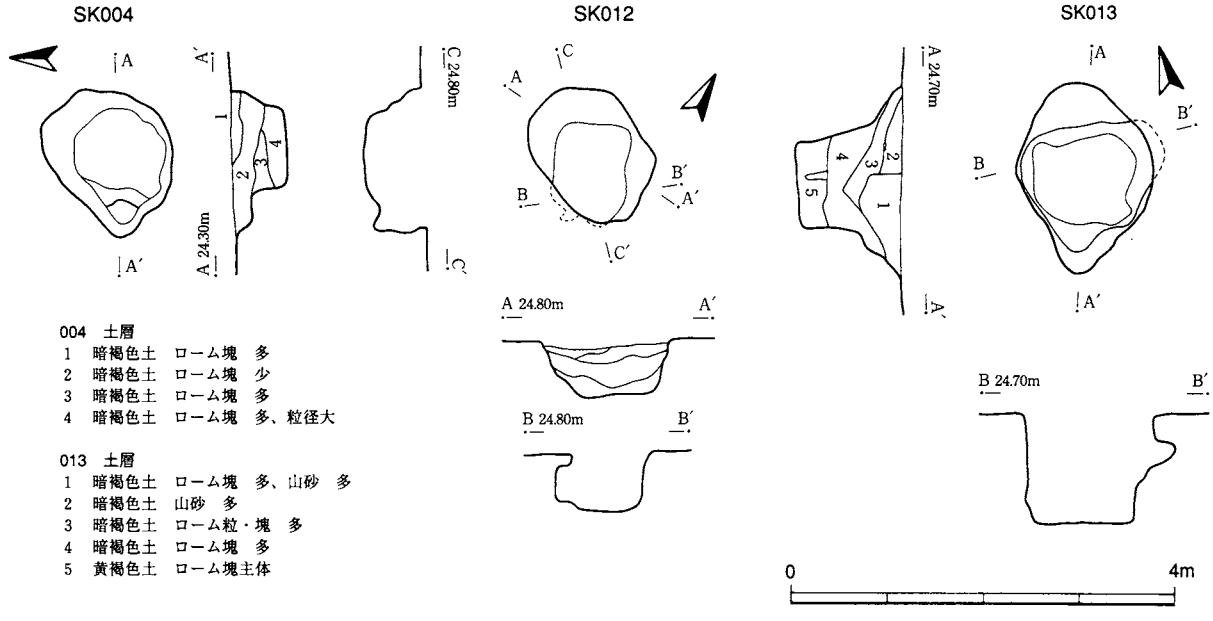
SK012（第170図）

調査区北部に位置する。平面形は確認面では不整な楕円形であるが，底面はほぼ長方形である。確認面での遺構規模は長軸が1.53m，短軸が1.06mで，深さは62cmである。底面の規模は長軸が１m，短軸が75cmである。覆土は暗褐色土で，上から２層目と最下層はローム粒・塊の含有が多い。調査時の所見では地下式坑としているが，判然としない。

SK013（第170図）

調査区北部に位置する。平面形は確認面では不整な楕円形であるが，底面は不整な方形である。確認面





第170図 土坑（1）

での遺構規模は長軸が1.99m，短軸が1.45mで，深さは1.1mである。底面の規模は長軸が1.1m，短軸が87cmである。壁上部が南北で広がっており，東側ではオーバーハングする部分も見られる。調査時の所見で地下式坑としているが，遺構の様相から考えられるかもしれない。オーバーハングしている部分から上が天井部とすると，天井部から底面までの深さは86cmである。また，地下式坑であれば，断面の様相から南側を入り口とするものと考えられる。覆土は一部を除いてローム塊を多く含む。特に最下層はローム主体の土層であり，地下式坑であれば天井部が崩落したものと考えられる。また，もし地下式坑でなければ，覆土は人為的な埋め戻しであるといえる。

SK005（第171図，図版43）

調査区北部に位置する。平面形は長楕円形である。規模は長軸が1.36m，短軸が54cm，深さが1.12mである。底面は片方の端部側がやや浅く，その反対側はやや奥に入り込んでいる。覆土は上層がローム塊を多く含む暗褐色土，下層が黒褐色土である。遺物は図示していないが，近世以降の瀬戸角皿の破片が出土

している。小規模な横穴を伴う典型的な貯蔵穴（イモ穴）で，年代は江戸末期以降と思われる。

SK011（第171図）

調査区北部に位置する。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸が1.38m，短軸が1.15m，深さが83cmである。覆土は全体的に若干のローム粒・塊を含む暗褐色土で，上層にやや多くロームを含む層がある。自然堆積と思われる。

SK017（第171図）

調査区北部に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.25m，短軸が95cm，深さが1.05mである。覆土は上層が暗褐色土，中層が黒褐色土，下層が暗褐色土である。全体にローム粒・塊の混入がやや多いが，上から2層と最下層が特に多い。

SK019（第171図）

調査区北部に位置する。平面形は楕円形である。東側が攪乱を受けて，やや大きく損なっている。規模は長軸が推定1.4m，短軸が75cm，深さが82cmである。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土で，最下層はローム塊が多い。中層も一部ロームを多く含む層がある。自然堆積と思われる。

SK020（第171図）

調査区北部に位置する。平面形はやや不整な楕円形である。規模は長軸が1.2m，短軸が86cm，深さが68cmである。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土で，上・中層はロームがやや多い。

SK021（第171図）

調査区北部に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.22m，短軸が1.02m，深さが52cmである。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土で，最下層はローム塊が多い。自然堆積と思われる。

SK026（第171図）

調査区中央部に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.26m，短軸が80cm，深さが46cmである。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土で，上から2層目がややロームが多い。自然堆積と思われる。

SK027（第171図）

調査区中央部に位置する。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸が1.32m，短軸が92cm，深さが42cmである。覆土は若干のローム粒・塊を含む暗褐色土である。自然堆積と思われる。

SK028（第171図）

調査区中央部に位置する。平面形はやや不整な楕円形である。規模は長軸が1.38m，短軸が1.02m，深さが34cmである。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土で，上層と下層はややローム塊が多い。自然堆積と思われる。

SK029（第171図）

調査区中央部に位置する。平面形は円形である。規模は長軸が74cm，短軸が68cmであまり差がない。深さは32cmである。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土で，上層と下層はややロームを多く含む。自然堆積と思われる。

SK099（第171図，図版43）

調査区南部に位置する。平面形は円形に近い。規模は長軸が2.17m，短軸が1.97mで，深さは12cmである。覆土は黒褐色土で，若干のローム粒・焼土粒・山砂を含む。周囲に弥生時代の竪穴住居が多く，本遺構も弥生時代竪穴住居の床が残存したものかもしれない。

SK116（第171図，図版43）

調査区南部やや西寄りに位置する。平面形はやや不整な楕円形である。規模は長軸が1.21m，短軸が1m，深さが28cmである。

SK117（第171図，図版43）

調査区南西部に位置する。平面形は円形である。規模は長軸が1m，短軸が96cmであまり差がない。深さは56cmである。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土，暗黄褐色土で，中層にローム粒の少ない層が見られるが，全体にローム塊の含有が多い。

SK118（第171図，図版43）

調査区南西部に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.26m，短軸が1.01m，深さが62cmである。覆土は暗褐色土，暗黄褐色土がやや複雑に堆積している。全体にローム塊を含むが，最下層と上・中層が多い。

SK122（第171図，図版44）

調査区南部に位置する。平面形は楕円形であるが，南側を旧石器時代確認の発掘区により損なってしまった。規模は長軸が推定1.35m，短軸が1.2m，深さも1.2mである。深い掘り込みであり，底面の規模は長軸が99cm，短軸が66cmである。覆土は全体にローム塊主体または多量に含む土層で，埋め戻された様相が顕著である。2・5・8・11層は黒色土＋ローム塊である。それ以外は黒色土の含有に若干の違いはあるが，ローム塊主体の土層である。特に1層はほとんど黒色土を含まない土層であり，ローム層上面の確認面で見つからなかったことはやむを得ないことと思われる。

SK123（第171図，図版44）

調査区南部に位置する。平面形は一部が角張った不整な楕円形である。SK122同様，東側を旧石器時代確認の発掘区により損なってしまった。規模は長軸が1.74m，短軸が推定1.3m，深さは1.44mである。深い掘り込みであり，底面の規模は長軸が1.09m，短軸が76cmである。北側の壁下部は緩やかな傾斜となる部分がある。覆土も122同様，全体にローム塊を多量に含む埋め戻された土層である。2・4・6層はローム塊を多く含む暗黄褐色土で，それ以外と比べ，若干色調の暗い層である。ただし，122の2層などに比べると，黒色味の弱い土層である。1・3・5・7層はローム粒・塊主体の土層で，1・3層はローム粒も多いが，5・7層は大粒径のローム塊が主体である。

SK125（第172図，図版44）

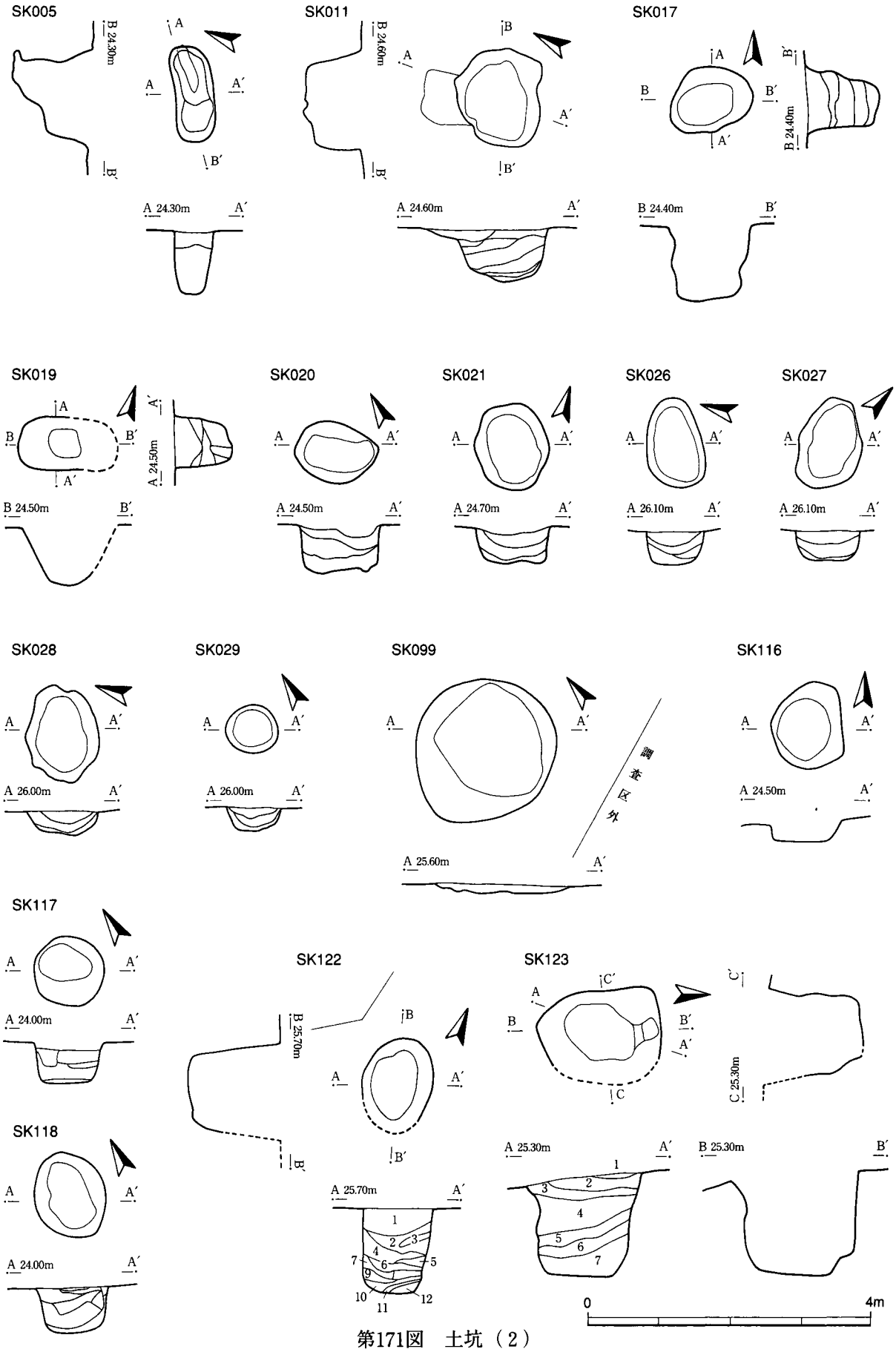
調査区南西部に位置する。平面形は円形である。規模は径1.04m，深さは52cmである。北側がすぐ調査区外であり，周囲に奈良・平安時代の遺構が多いことから，掘立柱建物の柱穴の一つになる可能性が考えられる。

SK126（第172図，図版44）

調査区南西部に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸が1m，短軸が74cm，深さが34cmである。北側が調査区外であり，周囲に奈良・平安時代の遺構が多いことから，これも掘立柱建物の柱穴の一つになる可能性が考えられる。

SK127（第172図）

調査区南部西寄りに位置する。平面形は円形または楕円形であるが，西側を旧石器時代確認の発掘区により損なってしまった。規模は現状で径1.4m，深さが44cmである。底面は中央がやや窪んでおり，鍋底


SK005
SK011
SK017
SK019
SK020
SK021
SK026
SK027
SK028
SK029
SK099
SK116
SK117
SK118
SK122
SK123
調査区外
0
4m

第171図　土坑（2）

状である。

SK128（第172図，図版44）

調査区南部に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸が1.02m，短軸が96cmであまり差がない。深さは40cmである。南側が調査区外であり，掘立柱建物の柱穴の一つになる可能性が考えられる。

SK129（第172図，図版44）

調査区中央部やや東寄りに位置する。平面形はやや不整な楕円形である。規模は長軸が1.2m，短軸が1.14m，深さが36cmである。覆土はソフトローム粒を含む暗褐色土で，中・下層はややロームの含有が多い。

SK130（第172図，図版44）

調査区中央部やや東寄りに位置する。平面形は長楕円形である。浅い遺構であり，南側端部が失われている。規模は長軸が推定1.6m，短軸が64cm，深さが6cmである。覆土はソフトローム粒を含む黒褐色土である。

SK131（第172図，図版44）

調査区北部に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸が推定1.15m，短軸が75cm，深さが24cmである。覆土は上・中層が黒褐色土，下層が暗褐色土で，ソフトローム粒を中層は若干量，下層はやや多く含む。

SK132（第172図）

調査区北部に位置する。平面形はやや不整な楕円形である。規模は長軸が1.54m，短軸が1.15m，深さが48cmである。覆土は上2層が黒褐色土，下2層が暗黄褐色土である。上から3層目はソフトローム粒を多量に含み，最下層はローム塊を多く含む。

SK134（第172図）

調査区北部に位置する。平面形はやや不整な楕円形である。規模は長軸が1.9m，短軸が1.74m，深さが22cmである。覆土は上層が少量のローム粒を含む暗褐色土，下層が多量のローム粒を含む暗黄褐色土である。遺構の上に新期テフラ層がのっていると思われ，古い時期の遺構の可能性がある。

SK137

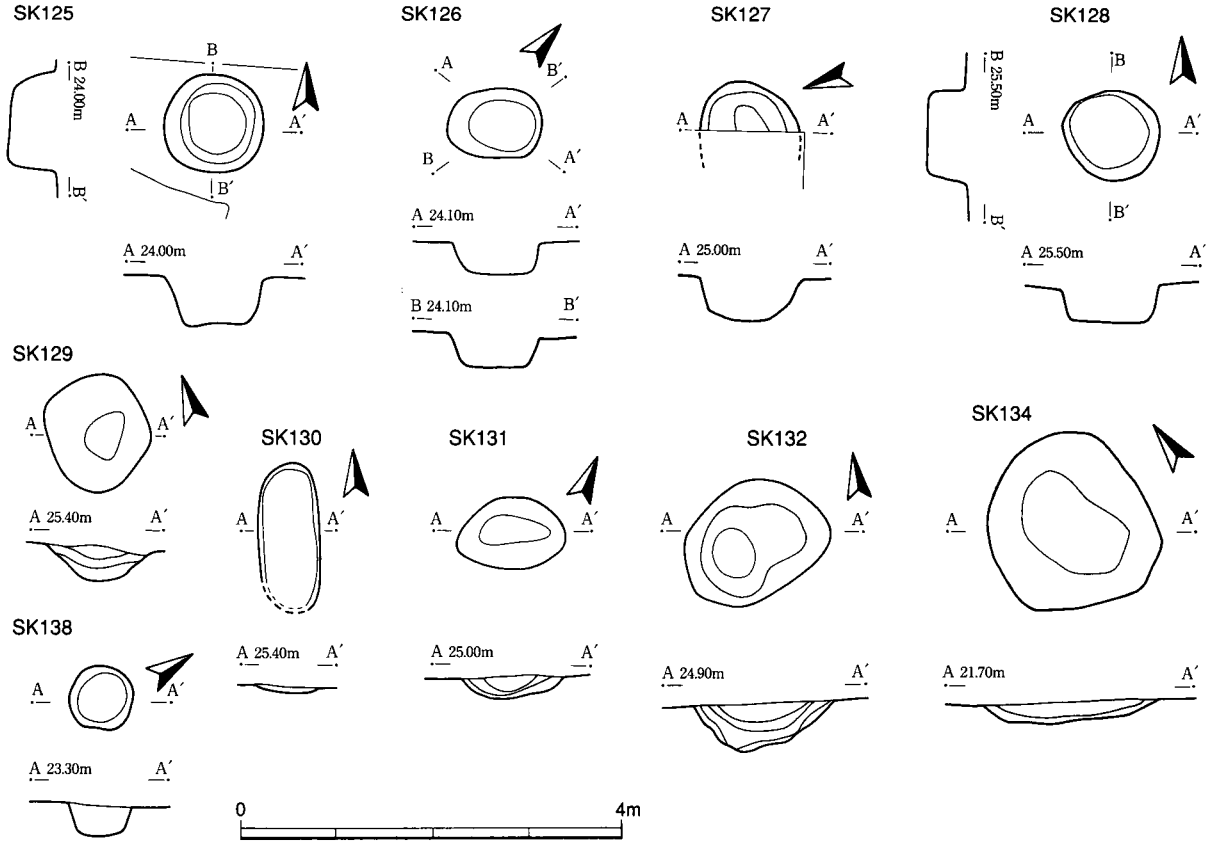
調査区北部に位置する。近世以降の土坑と思われ，確認面形の記録のみで調査を終了した。位置だけを第3図全体図に図示し，詳細図を省略した。平面形は楕円形で，長軸の長さは約90cm，短軸の長さは約80cmである。

SK138（第172図）

調査区南西部に位置する。平面形はほぼ円形である。確認面の径は65cm，底面径は50cm，深さは34cmである。覆土はローム混じりの暗褐色土である。南側約1mの位置にSB101がある。

P2～P25（第173図）

調査区北部に位置する24基のピット・土坑群であるが，これらのうち，小規模のものは掘立柱建物や柵列などの柱穴である可能性が考えられる。P7・P12は土層断面で柱痕らしい土層も見られる。やや規模の大きなものは個々に見ていく。P2は楕円形の形態で，長軸1.1m×短軸85cmの規模であるが，深さは不明である。P3は小規模なピットであるが，深さが不明である。P14は平面形がやや長い楕円形で，規模は長軸1.5m，短軸90cm，深さが27cmである。覆土は黒褐色土で，上層と下層はローム粒・塊を多く含む。P19



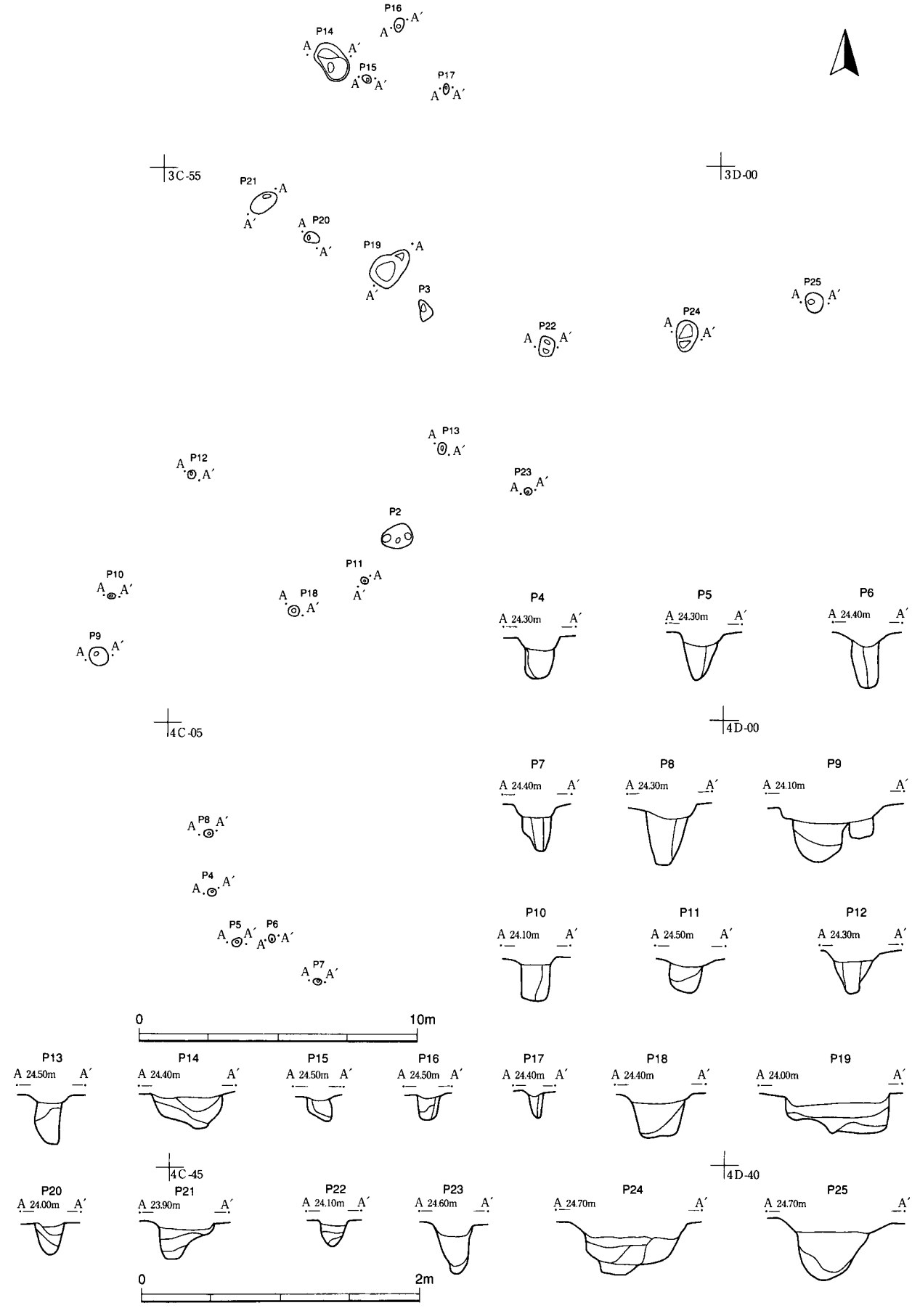
第172図　土坑（3）

は円形のピットが2基重複したものかもしれない。長軸は1.6m，短軸は1.1m，深さは浅い方で19cm，深い方で29cmである。覆土は上層が暗褐色土，中・下層が暗黄褐色土で，中・下層はローム粒を多く含む。P24は平面形が楕円形で，規模は長軸1.1m，短軸80cm，深さが39cmである。覆土は上層が暗黄褐色土，中・下層が黒褐色土である。上層はローム粒を多く，最下層はローム粒をやや多く含む。

2．溝状遺構

SD048，SD135，SD136

溝状遺構は3条見つかった。SD048は近世以降の可能性が高いと思われることから，確認調査区のみの調査に留めた。また，SD135・SD136は時期不明であることから，同様に確認調査のみ実施した。以上の溝状遺構については，遺構全体図に位置を図示したが，個別の図面は省略した。3条の溝はいずれも調査区北部に位置する。SD048は現在の地境の杉並木の下に所在しており，南北方向に走行する近世以降の地境溝と考えられる。また，覆土下層にしまりがあることから，道としても機能していたものと思われる。確認面での幅は1.1m前後，深さは40cm前後である。SD135も南北に走行し，確認面での幅は約70cmである。SD136は東西方向に走行し，確認面での幅は約50cmである。


P16
P14
P15
P17
3C-55
3D-00
P21
P20
P19
P3
P25
P24
P22
P13
P12
P23
P2
P11
P10
P18
P9
P4
P5
P6
4C-05
4D-00
P7
P8
P9
P4
P5
P6
P7
P10
P11
P12
0
10m
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
4C-45
4D-40
P20
P21
P22
P23
P24
P25
0
2m

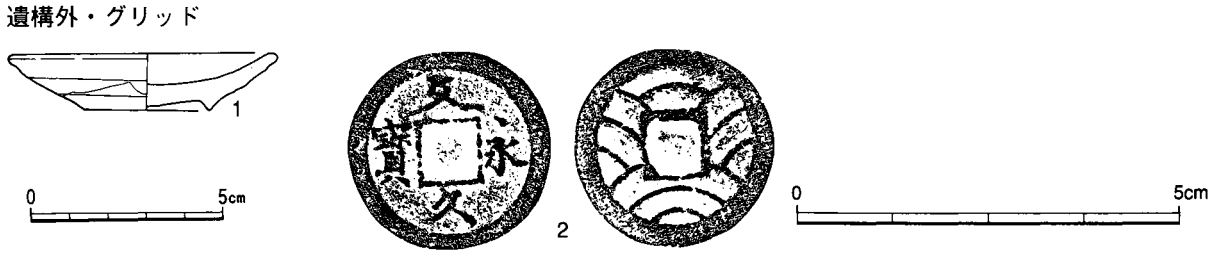
第173図　土坑（4）

第２節　遺物

（第174図，図版102）

１は小皿で，高台部は削り出し高台である。口径7.1cm，底径3.3cm，器高1.6cmである。内面と外面口縁に灰色・白色の釉がかかっているが，口縁端部が半周ほど磨滅し，釉が落ちている。外面には粗い回転ヘラケズリが施される。胎土は0.5㎜以下の砂粒を少々含むが，全体に均質で緻密である。陶器質というより土器質的で，やや焼成があまいものと思われる。色調は薄い黄褐色であるが，一部黒ずんでいる。遺存は口縁がわずかに欠ける程度でほぼ完形である。煤や油だれ等，灯明具としての痕跡はない。９Ｈグリッドから出土したものである。なお，本資料については，当センター　鳴田浩司より教示を得た。

２は銭貨で，文久永寶である。７Ｅグリッドからの出土である。



第174図　中・近世遺物

第8章　まとめ

第1節　全体の概要

1．旧石器時代

今回の船尾白幡遺跡の調査では，第1ブロック～第12ブロックの12地点に石器集中と第4ブロック・第5ブロック・第7ブロック・第8ブロック・第10ブロックの5地点に礫群が検出された。これらのブロックは調査区のほぼ全面に分布している。また，これらのブロックは，Ⅲ層からⅦ層にかけて出土し，石器形態，石器組成，石器に使用される石材の違いから計2枚の文化層に細分することができた。また，確認調査時にグリッドの遺物として一括出土したものには第2黒色帯下部（Ⅸａ層）のものがあり，本来は3枚の文化層があるものと思われる。

第1文化層は船尾白幡遺跡で検出した石器集中地点のうち，最も古い段階に属するブロックであり，出土層位は第2黒色帯上部（Ⅶ層）に属する。第1ブロックのみがこの文化層に属する。

ブロックを構成する石器の中には定型的な石器は含まれず，安山岩製及び頁岩製の剥離痕ある剥片（いわゆる調整痕ある剥片や使用痕ある剥片の総称）が2点出土している他は剥片である。群馬県産と思われる頁岩が出土している。また，縦長の石刃状の剥片を主体とし，稜上調整の施された剥片もみられる。

第2文化層に属するブロックは第2ブロック～第12ブロックの計11ブロックであり，そのうち第4ブロック・第5ブロック・第7ブロック・第8ブロック・第10ブロックの5地点に礫群が検出された。出土層位はⅣ層下部～Ⅲ層である。

ブロックを構成する石器はナイフ形石器，角錐状石器，掻器，削器，剥離痕ある剥片，剥片，砕片，剥片利用石核，石核，敲石，礫でいわゆる武蔵野台地のⅣ層下部に相当する石器群である。

他にブロック外の一括出土の遺物としてナイフ形石器，剥離痕ある剥片，剥片が発見されている。ナイフ形石器は第2文化層に属するものと思われる。剥離痕ある剥片，剥片は重機による確認調査時のものではあるが，Ⅸａ層の出土である。おそらくこれらの石器が本遺跡の最下層の石器群と思われる。

2．縄文時代

見つかった遺構は，炉穴3基，陥穴状土坑9基，竪穴住居・竪穴状遺構4棟である。なお，昭和49年の調査で炉穴が2基[1]調査されている。

炉穴のうち，SK084からは縄文土器が7個体分出土しており，かなり遺存良好なものも含まれている。遺物と遺構の形状から，縄文時代早期後半の炉穴と判断される。土器の型式は茅山下層式後半期に位置づけられ，茅山上層式との関係を解明するうえでも重要な資料である。他の2基（SK038・SK115）からは遺物の出土がなかったが，遺構の形状からSK084と同様に縄文時代早期の炉穴と思われる。遺構の分布はSK038が調査区北部，SK084が東部，SK115及び昭和49年調査の第7号・第8号炉穴が南部であり，広域に見られる。調査区北部はまとまった面積が調査されており，SK038より北側には分布していない。一方，南半部は台地全体から見れば，限定された調査範囲であり，調査区外に存在するものと思われる。SK038に近い部分でも南側の台地縁辺部には存在する可能性がある。

陥穴状土坑については遺物の出土がないかあっても少量であり，詳細時期が不明なものがほとんどであ

るが，遺構の形状や覆土の様相から9基の遺構が該当するものと判断した。そのうち，SK075Bは早期後半～前期初頭の土器片が9点出土している。出土層位は上・中層が大半であるが，1点下層からも出土しており，その時期の遺構である可能性が考えられる。縄文土器はSK074からも出土しているが，075B同様，早期後半～前期初頭の時期と思われる。また，SK033からは石鏃が1点出土している。その他の遺構は遺物の出土がなかった。遺構の分布は調査区北部南側，6D・6Eグリッドに多く見られる。この部分は東方の低地から西側に延びる支谷の谷頭部分及びその延長上であり，けもの道が存在したのであろう。同様の立地は調査区南部，9EグリッドにあるSK074にもうかがえ，こちらは西方の低地から東に向かって延びる支谷の谷頭部分である。

4棟の竪穴住居・竪穴状遺構はすべて時期が異なっている。SI095は前期前半・黒浜式期，SI111は前期後半・興津式期，SI105は中期・阿玉台式期，SI112は中期末～後期初頭の時期のものである。このうち，SI112からは遺存良好な土器が出土した。1点は炉内に使用された炉体土器であり，もう1点は出入り口部に置かれたと思われる小型の土器である。これらの遺構は時期が異なるものの，いずれも調査区南部に位置する。調査区外に同時期の遺構が存在し，小規模なまとまりとなる可能性も考えられる。しかし，これまでの調査所見からは大規模な集落となる様相はうかがえない。というのも，南半部の調査区は台地南半分の確認調査を行ったかのような状況であるが，遺構の分布は密ではなく，また，南部にある昭和49年の調査区も，縄文時代の竪穴遺構は見つかっていないからである。

遺構外出土土器は早期から後期までの土器が出土した。結果的にほぼ同数の土器片を図示したが，図示していない土器片を合わせると，量的に最も多いのは早期の土器片である。これは昭和49年の調査で得られた所見と同様である。なお，本遺跡から西方の低地に所在する西根遺跡では，後期の加曽利B式土器が多量に出土している[2)]。本遺跡でも加曽利B式の土器片が出土しているが，調査区内では特に分布の集中する地点は見られない。また，遺構も見つかっていない。本遺跡の調査所見からは，西根遺跡における加曽利B式土器の大量出土を予測することは難しかったといえよう。しかし，調査区外がかなり広いため，西根遺跡と関連する遺構群が存在する可能性はあると思う。

注1　古内　茂他　1976　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』（財）千葉県文化財センター
2　『千葉県文化財センター年報№26　—平成12年度—』　2001　現在整理作業中

3．弥生時代

見つかった遺構は後期の竪穴住居13棟で，昭和49年の3棟分[1)]と合わせて16棟である。分布範囲は調査区中央部以南の各所に見られるので，台地南半部の調査区外に広域に展開することが確実である。

時期区分

出土遺物・竪穴住居の時期について，高花宏行氏の土器編年[2)]を基に概観してみたい。高花氏は弥生時代後期の土器を4期区分，古墳時代前期の土器を5期区分しているが，弥生Ⅳ期と古墳Ⅰ期は一部重複している。

弥生Ⅰ期（後期前葉）に属する資料はSI076出土遺物群である。Ⅰ期は複合口縁で，頸部に櫛描による縦区画充填文が施文される土器があることで特徴づけられる時期である。SI076からは比較的遺存の良い

大型の壷形土器が出土しており，そのうち頸部を有するものに櫛描格子目文や縦走文・横走文が見られる。また，他の土器破片の中にも櫛描横走波状文や内部に刺突文が施された格子目文が見られる。その他，石鏃や敲石・砥石等の石器群もあり，印旛沼西部地域における好資料といえよう。

弥生Ⅱ期（後期中葉）の特徴としては輪積み痕口縁の土器が増え，また多段となるものが多いこと，S字状結節文が多用され，一部多条化すること，胴部の張り出しが強いことなどが指摘されている。本遺跡出土の土器群の中でⅡ期に属することが確実な資料としてはSI082出土遺物群で，比較的遺存の良い甕に多条のS字状結節文をもつものが見られる。また，SI080も比較的遺存の良い甕に輪積み痕が多段のものがあることからⅡ期と思われる。ただし，SI080は次のⅢ期的な特徴をもつものも見られるので，Ⅱ期の中でもやや降る時期とした方がよいかもしれない。SI075Aはやや不確実であるが，Ⅱ期的な特徴をもつ土器片が多いと思われるので，Ⅱ期としておきたい。

弥生Ⅲ期（後期後葉）の特徴としては，複合口縁の複合部が薄くなること，S字状結節文は多条のものが減り，1条や施されないものが増えてくること，輪積み痕口縁の土器も減り，あっても多段では無くなったり，磨り消されたりするものが増えることなどが指摘されている。本遺跡の中では，SI109出土土器群がⅢ期といえるように思われる。その他には確実にⅢ期と断定できる竪穴住居を指摘するのは難しい。破片資料が大半であることと，Ⅱ期とⅢ期の特徴の違いは相対的な比較によることがその要因である。そこで，SI046・081・098・107出土土器群についてはⅡ期～Ⅲ期と幅をとって考えておきたい。

弥生Ⅳ期（後期末葉）は下大津式[3]系統の口縁部下端にイボ状突起を有する土器を基準資料とする時期と指摘されている。また，以前からの系譜を引く縄文を多用する土器と小型器台や小型高坏などの土師器が共伴する時期でもある。本遺跡ではイボ状突起をもつ土器は出土していないが，SI072の1はⅣ期と思われる良好な土器である。在地系有文甕の系譜を引く土器で，ほぼ最後の姿と考えられる。類例としては，高花編年古墳Ⅰ期に属する佐倉市上座矢橋遺跡028A号竪穴住居出土土器があげられる。矢橋例は複合口縁ではなく，素縁であることから，本遺跡例よりもさらに後出的である。伴出遺物も，SI072は縄文を施文された土器が多いのに対し，矢橋遺跡028A号は南関東系弥生壷の系譜を引く土器や，東海系の土器が出土しており，矢橋例がより後出的である。さらに，本遺跡では古墳時代の土師器と思われる土器も出土している。SI079から出土した椀・台付甕・平底のハケメ甕であるが，覆土上層の出土であり，他の土器破片よりも明らかに下降する時期の遺物である。土器破片の中には下層・床面から出土するものもあり，SI079の時期は他の土器破片資料に近い時期と考えられる。SI079も幅をとってⅡ期～Ⅲ期とする。したがって，弥生Ⅳ期の遺構はSI072のみの1棟である。

その他，SI073は出土資料が少ないため，後期という以外は不明である。また，SI100は出土遺物が無く，時期を特定できない。弥生時代の竪穴住居であるかどうかも若干の疑問があるが，遺構の形態から後期の竪穴住居としておく。

なお，昭和49年に調査された分についてもここで取り上げておく。第1号址はⅡ期，第2号址はⅢ期，第3号址はⅡ期～Ⅲ期と思われる。

以上の時期区分について下記にまとめる。

弥生Ⅰ期　　SI076

弥生Ⅱ期　　SI075A・SI080・SI082，第1号址（S49）

弥生Ⅱ期～Ⅲ期　SI046・SI079・SI081・SI098・SI107，第3号址（S49）

弥生Ⅲ期　　SI109，第2号址（S49）
弥生Ⅳ期　　SI072
不明　　SI073・SI100

現状ではSI072が最も新しい竪穴住居であるが，SI079から出土したハケメ甕等の様相から，調査区外により下降する古墳時代前期の竪穴住居が存在する可能性が予測される。

竪穴住居の様相

竪穴住居は，規模の面からは大型のものと小型のもので際だった差が見られる。ここでは，便宜的にSI046の床面積である15㎡を境に，上回るものを中型・大型，以下のものを小型のものとして記述したい。

Ⅰ期のSI076の平面形は縦長の隅丸長方形である。今回調査されたものの中では最大規模の竪穴住居である。板材ないしは半截の丸太を使用した4本柱の主柱で，壁柱穴も見られる。炉はやや中央に寄った位置にある。SI076以外の竪穴住居は炉の位置がより片側に寄っているものが多い。面積的にはSI075Aが076に迫る規模であり，また，昭和49年に調査された第2号址が076と匹敵する規模であるので，大型竪穴住居の構築は，Ⅱ期以降も続くことがわかる。大型・中型の竪穴住居の平面形を見ると，SI079は縦横の差が少ない。逆にSI082は縦横の差が大きく，小判形の形態である。また，SI075Aは出入り口側が楕円形的であるなど，細かな差違がある。しかし，縦長の隅丸長方形を基調とする点で共通性があるといえよう。

一方，小型の竪穴住居は平面形の差が大きい。SI073は長方形的な形態であるが，SI080は楕円形に近い形態である。また，SI107は完全な楕円形であり，SI046はほぼ円形といえよう。

今回の調査では，覆土上層に焼土を多く含む竪穴住居が，SI076・079・081・082の4棟で見られた。この現象は079・081に近い位置にある昭和49年調査時の第1号・2号・3号住居址でも指摘されている。廃棄された竪穴住居の窪地でごみの焼却や焼土の廃棄が頻繁に行われたことや，後世の土地利用に関わることなどが考えられるが，特定するのは難しい。

印旛沼西部北岸地域の集落

弥生時代後期，船尾白幡遺跡ではまとまった集落が営まれていた。印旛沼西部周辺地域では，弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が多く存在する。船尾白幡遺跡はそれらの遺跡群の中で，弥生時代後期の拠点的な集落の一つと考えられる。

船尾白幡遺跡から谷部をはさんで南方の台地に所在する向ノ地遺跡では，竪穴住居群に加えて環壕が見つかったことで注目される[4]。整理作業の実施が困難であることが惜しまれる遺跡である。その向ノ地遺跡と地続きの船尾町田遺跡でも，弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居が26棟見つかっている。両者は一体の遺跡と考えられるが，千葉県埋蔵文化財分布地図[5]では，船尾町田遺跡の南東に向ノ地遺跡，向ノ地遺跡の西・船尾町田遺跡の南に向ノ地塚遺跡となっており，遺跡名称が整理されていない。また，記述にやや混乱も見られる。地形的にはこの3遺跡で一体の遺跡として良いと思われる。未調査の台地の広さを考えると，船尾白幡遺跡に匹敵する規模の集落遺跡と思われる。しかし，船尾町田・向ノ地遺跡では古墳時代前期の方が弥生時代後期よりも竪穴住居が多く見つかっているのに対し，船尾白幡遺跡は現状では古墳時代前期の竪穴住居が見つかっていない。あってもあまり多くはないように思われ，もしそのような状況であるならば，船尾町田・向ノ地遺跡とは様相がやや異なるといえよう。しかし，調査区外の面積

が広いことから，この点については今後の課題としたい。なお，向ノ地遺跡の様相から，船尾白幡遺跡においても環壕が巡るかどうかの注意が必要であろう。

船尾白幡遺跡から谷をはさんで西方の台地に所在する鳴神山遺跡でも，弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居が21棟調査され，弥生時代後期のものはほぼ半数と思われる。調査面積が広大である割りに，分布密度は濃くない。しかし，縦状区画の櫛描文が施された土器が出土しており，Ⅰ期に遡る竪穴住居があることが注目される。

戸神遺跡は鳴神山遺跡と同じく船尾白幡遺跡西方の台地に所在する遺跡である。鳴神山遺跡からは支谷を介して南方の台地に所在する。鉄塔建設に際して小規模な面積が調査され，3棟の竪穴住居が見つかっている[6]。遺存状況が悪かったが，出土遺物からは1棟が古墳時代前期，1棟が古墳時代後期と思われる。南東方の対岸台地が船尾町田遺跡であり，古墳時代前期のまとまった集落となる可能性も考えられる。

船尾白幡遺跡の西方には向新田遺跡，東方には松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡がある。ともに古墳時代前期の竪穴住居群が主体であり，弥生時代後期のものは少ない。

近年は，印旛沼西部南岸地域周辺でも発掘調査が相次いでおり[7]，双方を合わせた印旛沼西部地域の集落の動態を検討する条件が整いつつあるといえよう。

注1　古内　茂他　1976　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』（財）千葉県文化財センター

2　高花宏行　1999　「印旛沼周辺域における弥生時代後期の土器の変遷について」『奈和』第37号

高花宏行　2001　「印旛地域における古墳時代開始期の土器様相」『印旛郡市文化財センター研究紀要』2

高花宏行　2001　「下総地域における弥生時代後期から古墳時代前期の様相～印旛地域を中心に～」『弥生から古墳へ　―時代の終わりと始まり―』上高津貝塚ふるさと歴史の広場

3　鈴木正博　1999　「本邦先史考古学における「土器型式」と縦横の「推移的閉包」―古鬼怒湾南岸における弥生式後期「下大津式」の成立と展開―」『古代』106号　早稲田大学考古学会

4　『財団法人　印旛郡市文化財センター年報9　―平成4年度―』　1993

『財団法人　印旛郡市文化財センター年報10　―平成5年度―』　1994

5　『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)　―東葛飾・印旛地区（改訂版）―』　1997　千葉県教育委員会

6　渋谷　貢　1980　『東京電力送電塔建設事業に伴う発掘調査報告書』　八千代市遺跡調査会　船橋市遺跡調査会

7　田原窪遺跡，佐山台遺跡，道地遺跡，間見穴遺跡，島田込ノ内遺跡，栗谷遺跡，上谷遺跡等で，いずれも八千代市域内の遺跡である。このうち，田原窪遺跡は弥生時代中期を主体とする点で，他遺跡よりも古い。1条の環壕があり，その内側から中期の竪穴住居が36棟見つかった。時代・遺跡内容ともに注目される遺跡である。

八千代市教育委員会　1995　『平成6年度　八千代市埋蔵文化財年報』

蔀　淳一　1999　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1　八千代市島田込ノ内遺跡』（財）千葉県文化財センター

4．古墳時代

見つかった遺構は後期の竪穴住居3棟である。昭和49年調査時に1棟調査されている（第5号住居址）ので，計4棟である。SI054・SI056は調査区中央に，SI133及び第5号住居址は南部に位置する。054と056はやや近い位置にある。東側及び南側がすぐ調査区外であり，この部分にも竪穴住居が存在し，小さなまとまりとなることが予想される。SI133と第5号住居址はやや離れているが，南部地域にも散在的に

数棟の竪穴住居群が営まれた可能性が考えられる。

出土遺物から時期を推定すると，SI054は7世紀第2四半期頃と思われる。7世紀末～8世紀初頭の土器が数点見られるが，混入品と思われる。SI056は古墳時代後期の竪穴住居であるが，坏類の出土は無く，時期の絞り込みが難しい。SI133は遺構の遺存が悪く，土器の出土もごく少量であった。図示した遺物は土師器坏細片で，時期を特定する根拠としてはやや弱い。しかし，他に良好な遺物が無いため，これをもって7世紀代の竪穴住居と推定しておく。第5号住居址は7世紀前半の時期と思われる。

竪穴住居の様相について見てみると，SI054は整った方形プランで，4本柱と出入り口ピットがあり，出入り口と対向する壁中央にカマドが設置されるなど古墳時代後期に見られる竪穴住居の一般的な形態である。SI133も4本柱をもつプランで，規模はSI054よりも一回り大きいと思われる。SI056は小型の竪穴住居で4本柱を持たないプランである。カマドと出入り口ピットが片側に寄っているが，逆側に寄るため，対面しない。やや変則的なプランである。SI054とSI056は主軸方向が似ており，西やや北向きであるが，SI133はほぼ北向きと思われる。第5号住居址は菱形に近い歪んだ方形プランで，4本柱の主柱はないものと理解される。規模はSI054よりも一回り小さい。主軸方位は北から東に振れる点でSI133と共通するが，振れ幅は大きい。

印旛沼西部北岸地域においては，古墳時代中期の集落はこれまでのところほとんど見つかっていない。古墳時代後期の集落も，従来大規模なものは知られていなかった。しかし，近年，印西市松崎に所在する前戸遺跡及び東海道遺跡で比較的大規模な集落跡が調査された[1)]。船尾白幡遺跡でも，今回の調査区の北西に位置する船尾白幡遺跡Ⅱの調査区において，6棟の竪穴住居が調査されており[2)]，ややまとまった棟数の存在が明らかになった。また，戸神遺跡でも古墳時代後期と思われる竪穴住居が1棟発見されている。前項で述べた船尾町田遺跡では，全長30mの前方後円墳を含む3基の後期古墳が調査されている[3)]。古墳時代後期の小規模首長と関連する可能性のある集落も，徐々に存在がうかがえるようになってきたといえよう。

注1　『千葉県文化財センター年報№23　—平成9年度—』　1999
『千葉県文化財センター年報№24　—平成10年度—』　1999　前戸遺跡・東海道遺跡は現在整理作業中である。

2　『千葉県文化財センター年報№23　—平成9年度—』　1999　現在整理作業中である。

3　田坂　浩他　1984　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ　船尾町田遺跡　谷田木曽地遺跡　谷田神楽場遺跡』　（財）千葉県文化財センター

5．奈良・平安時代

見つかった遺構は，竪穴住居53棟，掘立柱建物17棟，ピット群2基，土坑3基，井戸状遺構1基である。船尾白幡遺跡Ⅱの調査で，竪穴住居が20棟，掘立柱建物が19棟見つかっており（他遺構は省略），また，昭和49年調査時に1棟調査されている（第4号住居址）ので，合わせて竪穴住居74棟，掘立柱建物36棟である。集落は南半部の調査区外に展開することが確実なので，棟数の大幅な増加が見込まれる。

6．中・近世その他

中・近世及び時期不明の遺構は，土坑57基，溝状遺構3条である。遺物は少量で，図示した遺物は小皿

と文久永寶１点である。なお，南部に所在した塚１基が，昭和49年に船尾中峠遺跡という遺跡名称で調査されている。

第２節　奈良・平安時代集落の様相

１．竪穴住居・出土遺物の時期区分

船尾白幡遺跡の奈良・平安時代の集落構成については，調査区外の面積も広大であることから，全容の把握はできないが，調査区内の範囲内でうかがえる様相について見ていく。

土器を検討した結果，出土遺物と竪穴住居群について以下の６期に区分した（第38表）。

第38表　竪穴住居の時期区分

時期	遺構番号
Ⅰ期	SI030　SI031 SI022
Ⅱ期	SI024　SI036　SI039　SI041　SI044　SI049　SI052　SI053　SI058　SI069　SI102B　SI114　4号住(S49) SI042　SI102A　SI104
Ⅲ期	SI047　SI059　SI083A　SI124B
Ⅳ期	SI009　SI015　SI032　SI037　SI078　SI087　SI088　SI113
Ⅴ期	SI002　SI003　SI010　SI025　SI045　SI051　SI055　SI077　SI103A·B·Cのうち1棟　SI108　SI110 SI008　SI014　SI023　SI035　SI057
Ⅵ期	SI093A SI092
不明	SI124A　SI103A·B·Cのうち2棟

SI050
SI061

土器の時期区分

Ⅰ期の土器群の特徴を見てみる。土師器坏類はロクロで成形されていないⅢに近い形態のもので，赤彩の施されたものと施されないものの双方が見られる。須恵器蓋はSI030・031でかえりのあるタイプのものが出土している。また，031の須恵器坏は口径・底径ともに大きな浅みのものである。以上の須恵器蓋坏はいずれも新治窯産である。SI022から出土した非ロクロの土師器坏１は口径がやや小さくなり，底部が平底に近くなる。赤彩は施されていないが，色調がやや濃い橙褐色であり，赤彩土師器の色調または畿内産土師器の橙色を意識しているように思われる。SI030・031出土土器に比べ，やや下降するものと思われる。

Ⅱ期の土器群は，いわゆる箱形のロクロ土師器坏と須恵器坏の様相を目安に区分した。全体に出土遺物はあまり多くない。ロクロ土師器坏で切り離し技法の残るものの中には，回転糸切りとともに静止糸切り技法もかなり見られる。Ⅱ期の中では，SI039・SI052・SI114出土須恵器坏が浅めでやや古い様相であるかもしれない。ただし，資料点数が少なく，遺存度も良好でないため，可能性の指摘にとどめておきたい。SI041の８はⅠ期以来のⅢ的な形態のものである。器種は９世紀以降のロクロ土師器Ⅲと区別して盤とした方が適切であろうか。SI042・102A・SI104はロクロ土師器坏にやや開く形態のものが混じり，新しい様相がうかがえる。Ⅰ期からⅡ期にかけては蓋坏類に須恵器を含む割合が比較的高い。

Ⅲ期からⅤ期にかけては，主としてロクロ土師器坏の法量と形態に着目して区分した。着目点は底径の小形化，口縁端部の外反度の増加であるが，変化の度合いは緩慢である。Ⅲ期とⅣ期，Ⅳ期とⅤ期の比較ではどちらに入れるべきか迷うものもあった。Ⅲ期については，ロクロ土師器坏の底径がおおむね口径の

1/2以上であること，口縁・体部が比較的直線的であることを目安とした。それに加えて皿形土器が器種構成に参入すること，内面に黒色処理が施された土器の状況，非ロクロ土師器坏の様相，須恵器坏が出土しているものは前期のものとの比較，などの事項を検討した。

Ⅳ期については，ロクロ土師器坏の底径が口径の1/2前後であることを最大の着目点として，口縁端部の外反や肥厚などの形態も加味して区分した。内面黒色処理の土器はⅢ期よりも増加している。なお，土師器甕に，他地域からの搬入品が1点見られる。SI037から出土した土師器甕67で，産地は胎土や形態等から東海西部または畿内東部と推定される[1)]。鳴神山遺跡においても，畿内産と考えられる土師器甕がいくつかの竪穴住居で出土しており，出土の背景に同様の事由が考えられる。また，本遺跡と鳴神山遺跡との関わりが，このことからもうかがえる。

Ⅴ期はⅣ期と比べ，ロクロ土師器坏の底径が口径の1/2を下回るものが増えてくること，口縁端部の外反度が強まることに着目して区分した。なお，ロクロ土師器高台付椀坏類など新たに参入してくる土器の様相や，回転糸切り離し後無調整のものなど調整技法も加味した。SI023の5は足高高台椀の高台部で，新しい時期の混入品の可能性があるが，相対的にSI023の新しさを示しているように思われる。

Ⅵ期の土器は2棟の竪穴住居から出土した土器群である。SI093Aから出土したロクロ土師器坏は口縁端部が大きく外反している。また，口縁・体部の屈曲点が外面側で明瞭である。底部はヘラケズリがされたものと回転糸切り離し後無調整のものが混在する。また，ロクロ土師器高台付椀が伴って出土している。SI092から出土したロクロ土師器坏は小皿に近い新出の形態であり，それまでのロクロ土師器坏の系譜を引くものではない。底部は回転糸切りのままで，無調整である。ロクロ土師器坏高台付椀も出土している。体部はSI093Aに比べ，丸みのある形態である。

以上，時期区分の観点からみた土器様相について概略を述べてきた。想定される実年代は下記の通りである。本遺跡では紀年銘墨書土器等，編年上で定点となる資料の出土はない。提示した実年代は，近年の奈良・平安時代土器編年を基に，筆者が想定するものである。

Ⅰ期　8世紀前葉
Ⅱ期　8世紀後葉～9世紀初頭
Ⅲ期　9世紀第1四半期頃
Ⅳ期　9世紀第2四半期頃
Ⅴ期　9世紀第3四半期頃
Ⅵ期　9世紀末～10世紀前半頃

Ⅰ期とⅡ期の間の8世紀中葉頃に若干の空白期があるが，調査区外にこの間を埋める竪穴住居等が存在すると考える。区分の中でⅢ期の時間幅は他と比べ，短いように思われる。Ⅱ期でも新しい様相である3棟の土器群については，Ⅲ期に組み替えることも一案であるが，土器様相の連続性から上記のような区分とした。9世紀代の土器様相については，Ⅲ期とⅣ期，Ⅳ期とⅤ期ではどちらに入れるべきか迷うものがあり，土器点数の少ないものや，新旧の土器様相が混在する竪穴住居も区分に難しいところがあった。なお，坏の底部調整で，回転糸切り離し後無調整の土器が非常に少ないことから，9世紀でも末に近い時期の土器は少ないと考える。Ⅴ期については9世紀後葉とするよりも第3四半期頃と記述する方がより適切であろう。これによりⅣ期・Ⅲ期も四半期区分で記述した。Ⅵ期の土器様相には時期差があるが，竪穴住居の棟数が少ないことから，9世紀末以降の様相ということで一括りにした。

注1　当センター上席研究員　小林信一・研究員　立和名明美の教示による。

2．集落の変遷

Ⅰ期の竪穴住居は3棟である。SI030とSI031は調査区中央部北東寄りのところに近接して位置する。4～5m離れているので，同時存在も可能であろう。主軸方向も北西方向にほぼ同じ向きである。030は床面積が27㎡で，奈良・平安時代の竪穴住居の中では最大の面積である。古墳時代後期のSI133が36㎡と推定されるので，小型化が進んでいるが，Ⅰ期にはまだ比較的大型の竪穴住居が残る。030は4本柱の主柱をもち，2箇所のベッド状遺構のあることが注目される。031は床面積が8.8㎡と小型で，4箇所の主柱穴は見られない。もう1棟のSI022は調査区北部と中央部の中間的な位置にあり，周囲に他の竪穴住居が存在しない。030・031よりもやや時期が降ると思われる住居である。カマドは隅カマドで，北隅から東隅に付け替えられている。小型の住居で，4箇所の主柱穴は見られない。

先述したようにⅠ期とⅡ期の間には若干の空白時期があり，この間の竪穴住居群は調査区外に存在するものと想定する。その所在が確実となったならば，Ⅱ期以降は1期ずつ繰り下がることとなる。

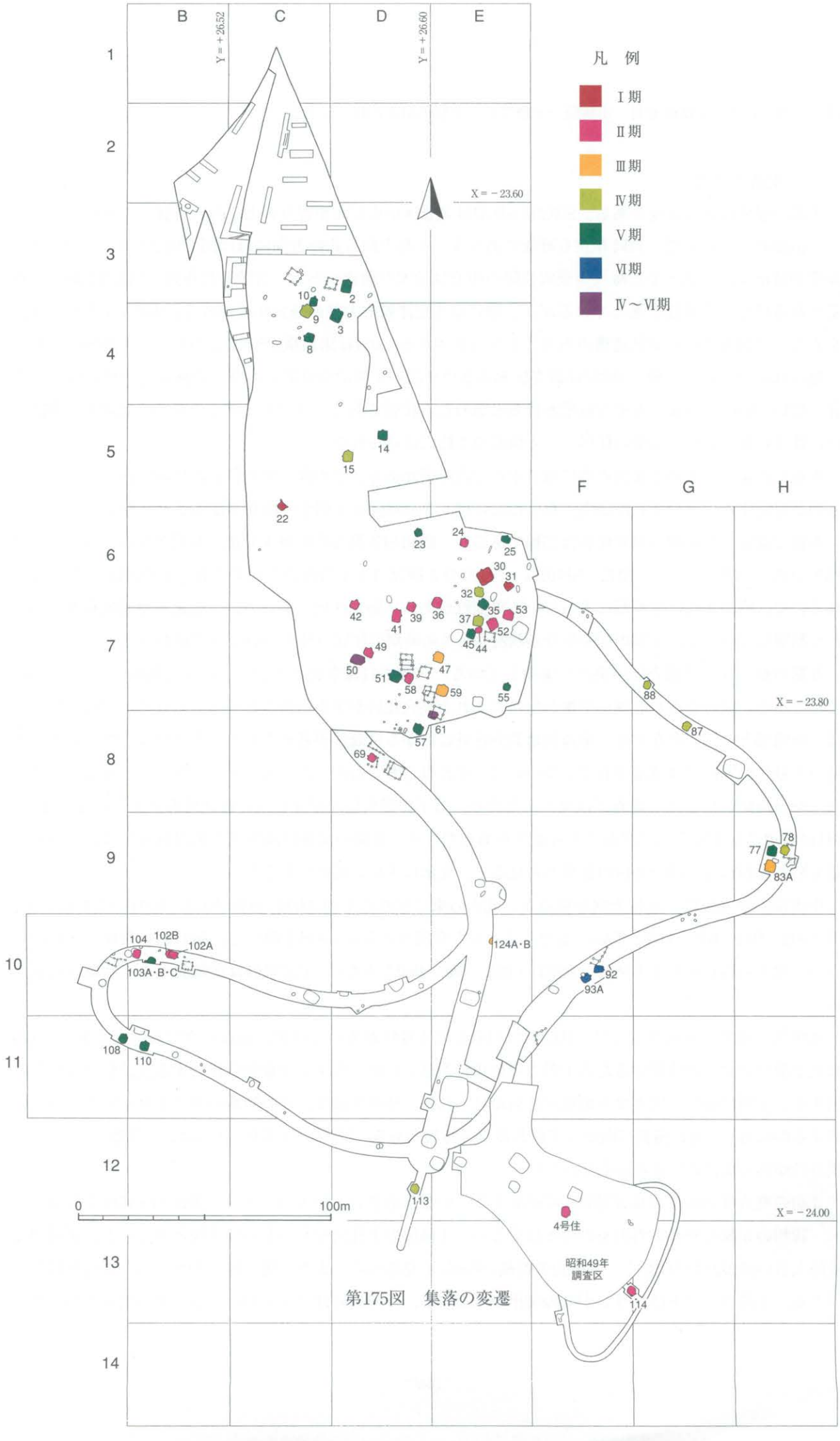
本書で設定したⅡ期の竪穴住居は15棟であるが，昭和49年調査時の第4号住がⅡ期と思われるので，計16棟である。そのうち，SI042・SI102A・SI104の3棟は出土土器群の中に若干新しい様相の土器も見られるので，廃絶年代は9世紀に入っている可能性がある。竪穴住居が多いのは，設定した時間幅が長いことも影響しているが，土器の様相や分布状況からこの時期の住居自体も多いように思われる。

Ⅱ期の竪穴住居は調査区中央部に集中している。16棟中11棟を数えるが，そのうち新相のものはSI042だけである。同時存在やⅡ期中で継起的に営まれた竪穴住居が多かったことが考えられる。中央部以外では，南西部と南部に所在する。南西部は調査区外に広がる可能性が考えられる。南部では，昭和49年調査時の4号住の周囲には確認されていないので，それほど多くなかったことが考えられる。しかし，当時は表土を全面的に除去する調査では無かったため，若干の竪穴住居が存在する可能性も考えられる。また，SI114周辺にも竪穴住居が存在する可能性があるだろう。Ⅱ期の集落は調査区中央部以南には広く展開するものと思われる。調査区内の様相から見ると，北部は少ない傾向にあるといえようか。

中央部の竪穴住居の主軸方向を見ると，北から東に振れるものは024・036・037・039新・041新・041旧・042・044・049・053と多い。また，ほとんど東向きとなる041旧を除いて，振れ幅の角度も比較的小さい。北から西に振れるものは，039旧・052・058・069と少ない。052以外は比較的大きく西側に振れている。

南西部・南部の竪穴住居では，102Aと114そして4号住が東から南側に振れる点で共通性がある。104は北東隅にカマドが位置するため主軸方向の比較が難しいが，カマドが東側を指向する点は他の3棟と共通する。Ⅰ期に続いて隅カマドの竪穴住居が見られる。他の3棟は，この時期のカマドが通常北半部に位置するのに対し，逆に南側に向かって振れる点で特異である。102Aと4号住・114はかなり離れているが，親近性がある集団といえるかもしれない。

Ⅱ期の竪穴住居の平均床面積は9.97㎡であり，かなり小さい。最大のものでも052の15.07㎡である。なお，新相の3棟とそれ以外のものの差は少ない。4箇所の主柱穴をもつものは2棟と少ないが，面積の比較的大きい052だけではなく，一桁台の面積の069にも見られる。また，建て替えが行われた竪穴住居が4棟ある。Ⅰ期のカマドはプランからの突出が少ないが，Ⅱ期以降はプランから大きく突出するものが増え


B
C
D
E
F
G
H
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
Y = +26.52
Y = +26.60
X = −23.60
X = −23.80
X = −24.00
凡　例
Ⅰ期
Ⅱ期
Ⅲ期
Ⅳ期
Ⅴ期
Ⅵ期
Ⅳ～Ⅵ期
0
100m
4号住
昭和49年
調査区

第175図　集落の変遷

てくる。SI058とSI102Aは隅カマドではないが，かなり隅に近い。隅カマド・隅際のカマドは，Ⅰ～Ⅱ期の竪穴住居に見られる様相の一つかもしれない。

Ⅲ期の竪穴住居は4棟である。調査区中央部に2棟，東部に1棟，南部やや中央寄りに1棟所在する。棟数が少ないのは，先述したようにⅢ期の時間幅が短いことにもよる。時間幅としてはⅡ期新相の竪穴住居をⅢ期に組み入れた方が差が少なくなる。その場合は7棟となり，Ⅳ期との差が少なくなる。したがって，9世紀第1四半期頃に著しく減少したとは思われない。ただし，Ⅱ期新相とⅢ期の竪穴住居を一緒に考えたとしても調査区中央部では3棟であり，中央部だけは前期よりも減少したといえよう。

中央部の2棟の主軸方向はSI047が西を向くのに対し，SI059は北からやや東に振れる。Ⅱ期に見られる両者を引き継いでいる。また，059が4箇所の主柱穴を持つのに対して，047は見られない。ただし，059の主柱穴は隅に近く，変則的な位置である。東部のSI083Aも4箇所の主柱穴をもつ竪穴住居である。

Ⅳ期の竪穴住居は8棟である。調査区北部から南部まで分布する。南西部に見られないが，調査区外に存在するのであろう。高い密度ではないが，台地全体に広く展開しているといえよう。台地南側の中央部はやや薄い可能性があるが，調査区外の面積が広いため，断定し難い。平均床面積は10.53㎡で，Ⅱ期と差が少ない。4箇所の主柱穴をもつと思われるものは3棟である。建て替えがされたものが4棟で，半数に及ぶ。中央部のSI032とSI037は近い位置にある。ともに主軸方向は北向きで，差が少ない。

Ⅴ期の竪穴住居は16棟である。調査区南部で見られない他は分布している。南部も調査区外に存在するものと思われる。調査区北部に集中し，中央部も全体に広く分布している。また，南西部でもまとまって存在するものと思われる。分布の傾向はⅣ期と同様である。

平均床面積は10.64㎡で，Ⅳ期とほぼ同じである。しかし，4箇所の主柱穴をもつものは1棟と減少する。また，建て替えが認められるものも1棟で，減少している。時期的な傾向があるのであろうか。主軸方向は北部に位置する4棟のうち，3棟は近似する。また，南西部に位置するSI108・SI110も比較的近い方向である。それに対して，中央部の7棟は方向の振れ幅が大きい。しかし，大きく見れば，Ⅱ期以来の北からやや東に振れるものと，大きく西に振れるものの傾向を引き継いでいるようにも思われる。

Ⅵ期の竪穴住居は2棟で，調査区南東部に近接して位置する。主軸方向は角度の差があるが，東を指向する点で共通性がある。4箇所の主柱穴は見られず，床面積は前期までと差が無い。

SI050とSI061は良好な土器の出土が無く，時期を特定することができない。土器片の観察からはともにⅢ期からⅤ期の間の竪穴住居と思われる。050は縦長長方形プランで，竪穴外に柱穴をもつなど，他と比べ特異な遺構である。出土遺物に鉄滓と鉄床石があり，鍛冶工房と考えられる。

その他，SI124Aは大部分が調査区外となるため，時期が不明である。また，SI103A・SI103B・SI103Cとした遺構も調査区外にかかるため，何棟の竪穴住居が重複するかも不明である。土器様相からはそのうちの1棟がⅤ期と思われるが，他は不明である。

掘立柱建物は17棟見つかった。北部に位置するSB007・SB016は少量の土器片のみの出土で，遺物から時期を決定することができない。しかし，周囲の竪穴住居がⅣ期・Ⅴ期の時期で，重複もしていないことから，Ⅳ期～Ⅴ期の間の掘立柱建物であると思われる。その他の掘立柱建物については，墨書土器等が出土しているものもあるが小片であり，時期を決定するのは難しい。

17棟の掘立柱建物はすべて側柱構造と思われる。2間×2間のものが最も多い。1辺のみ3間のものもやや多く見られるが，基本的に2間×2間のものと同等と考えられる。中央部に位置するSB070Aは桁行

が4間と思われ，やや規模の大きい建物である。しかし，掘形の規模は070Aよりも南東部に位置するSB091の方が大きい。庇をもつ建物で，身舎の桁行が3間ないしそれ以上であるので，全体的にも規模の大きい建物である。070Aに近接するSB071も庇をもつ建物であるが，身舎の掘形は2間×2間の建物と同様である。

船尾白幡遺跡の奈良・平安時代集落を通観してみる。Ⅰ期以前の7世紀代からみていくと，7世紀代の集落の分布は調査区中央部から南部に及ぶ。7世紀代からⅠ期までは竪穴住居の棟数が少ないが，連続して続く可能性もあると思われる。Ⅰ期の分布は調査区中央部のみであるが，7世紀代やⅡ期の様相から，調査区外にも分布する可能性が考えられる。Ⅰ期に続く8世紀中葉頃の時期は，現状では空白であるが，先述したように存在するものと考える。ただし，竪穴住居の棟数は少ないのであろう。Ⅱ期は棟数が多く，それまでよりも人口が大幅に増加した。竪穴住居の分布は台地中央部に多く，北部に少ない傾向がうかがえる。Ⅲ期は中央部以南には分布すると考えられるが，中央部では分布が少なくなる。Ⅳ期は台地全体に拡散し，その傾向はⅤ期にも引き継がれる。実年代で述べるならば，船尾白幡遺跡の集落は8世紀後葉頃に規模が大きくなるが，9世紀第2四半期から第3四半期頃にかけて台地全体に展開し，最も隆盛する。その後，9世紀末にはかなり衰退し，10世紀代のうちに台地上から集落が消滅する。

3．文字・記号資料について

文字・記号資料の総点数は292点で，土器は257個[1]を数える。器種は須恵器甑1点，土師器甕1点を除いて，坏皿類である。土器の方が少ないのは1個体に2箇所記入されたものがあるためである。内訳は墨書が205点，線刻が78点，ヘラ書きが9点である。奈良・平安時代の竪穴住居の棟数を50棟分とみなして[2]1棟当たりの点数を見ていくと，文字・記号資料は5.8点，土器個体数は5.1個となる。土器量は鳴神山遺跡Ⅰ・Ⅱの様相と近似している[3]。

記入された部位・種別・数量を見ると，体部外面資料が151点で，内訳は墨書が131点，線刻が20点である。体部外面で向きがわかるものを記すと，正位の墨書が70点，正位の線刻が11点，横位の墨書が12点，横位の線刻が3点である。体部内面資料は2点で，墨書が1点，線刻が1点である。墨書は正位の墨書である。底部外面資料は88点で，墨書が69点，線刻が12点，ヘラ書きが7点である。底部内面資料は50点で，内訳は墨書が4点，線刻が45点，ヘラ書きが1点である。その他，須恵器甑の胴部外面にヘラ書きが1点見られる。

記入部位については，体部外面が最も多く，底部外面，底部内面と続く。体部内面はわずかに2点であり，本遺跡では極めて珍しい。体部外面・底部外面資料は墨書が非常に多く，線刻が少ない。逆に底部内面資料は線刻が圧倒的に多く，墨書が少ない。体部外面で向きがわかるものは正位が多く，横位の5倍強である。遺存が悪いものを考慮すると，その格差はさらに開くであろう。

次に，個々の文字・記号資料を見ていく。時期毎の資料を通観すると，第39表の通りである。なお，主要な資料については，第176・177図におよそ1/2の図面を掲載した。資料下の左側の数字は竪穴住居の番号で，SIと数字の0は省略した。右側の数字は報告書遺物番号である。

文字・記号の釈文については1文字が主体である。欠損部分を考慮すると，3字の墨書があると思われるが，多文字の資料は見られない。個々の文字・記号種で，長く使われるものを主体に見ていくと，まず「富」がⅡ期に現れ，Ⅴ期まで継続する。また，「息」・「千」もⅡ期・Ⅳ期・Ⅴ期に見られる継続的な文

字である。「上」と則天文字の天（而）に似た「帀」はⅢ期～Ⅴ期に見られる文字である。「大」1字のものはⅠ期だけであるが，「万」と組み合わせとなる「大万」はⅣ期・Ⅴ期に見られる。また，「大万」と似た「千万」・「十万」はⅤ期に多く見られる。線刻で2条の刻線が交差する「＋（×）」とその類似のものはⅡ期からⅤ期まで見られる継続的な記号である。

多く見られる文字・記号種は，Ⅳ・Ⅴ期の「千」，Ⅳ期の「巾」，「帀」である。Ⅳ期の「小」も比較的多く見られる。また，線刻の「＋（×）」は非常に多い。縦横の交差線はかなり乱れた資料や，2条と1条が交差するような類似資料もある。なお，墨書の「十」は数字であるのか，縦横の交差線であるのか区別が難しい場合がある。

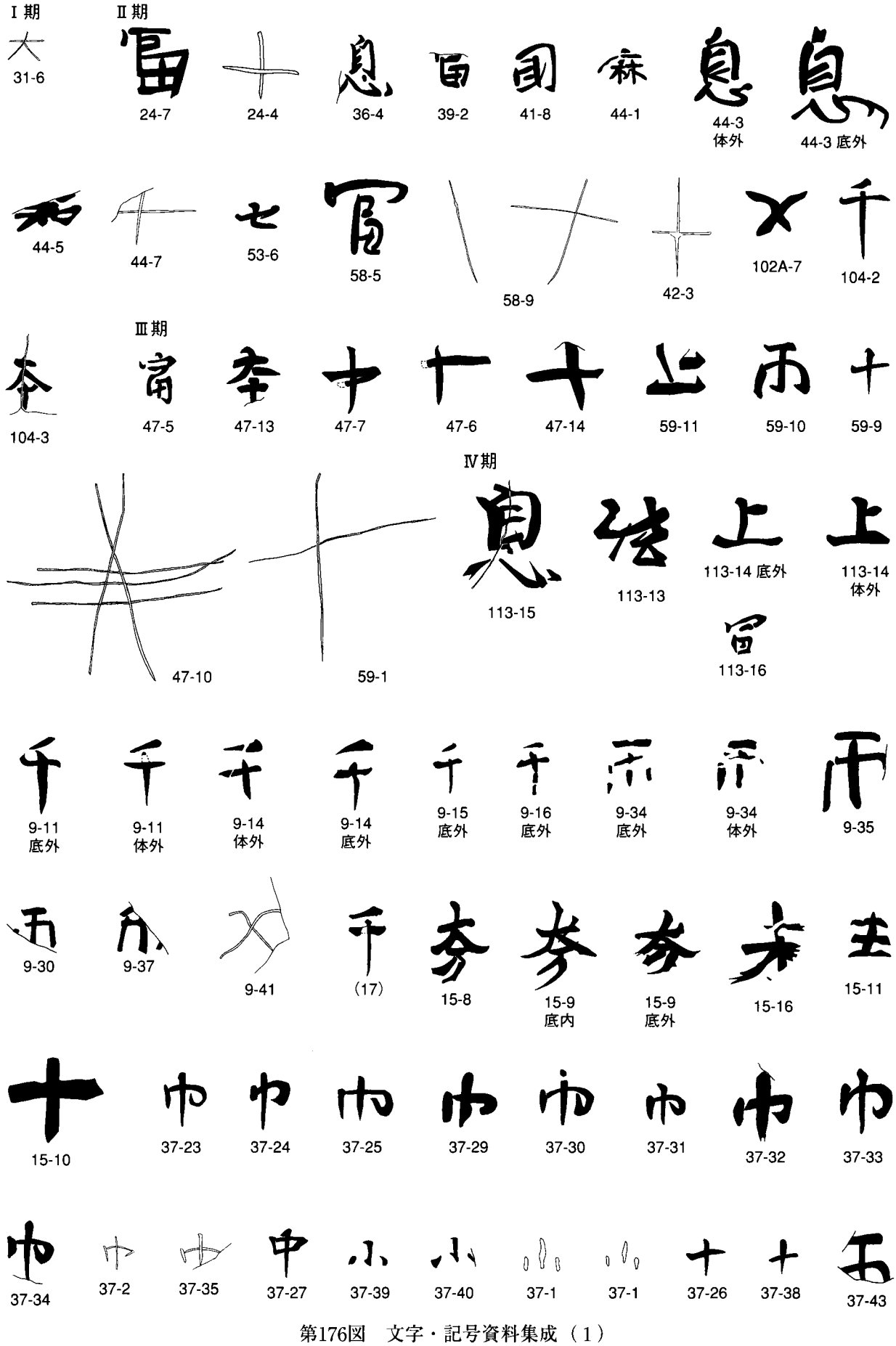
次に各時期毎に特徴的な事項を記述する。Ⅰ期の資料は，線刻の「大」1点のみである。調査区中央部のSI031から出土したもので，非ロクロの皿的な土師器坏底部外面に小さく刻まれている。

第39表　文字・記号主要資料一覧

時期	墨書	線刻	ヘラ書き
Ⅰ期		大	
Ⅱ期	「富」(3),「国」,「麻」,「息」(3),「□知」,「七」,「＋」,「千」,「本」,「本□」	「＋」(10以上),「十」カ	
Ⅲ期	「富」,「＋」(3),「中」,「上」,「本」,「帀」	「＋」(12以上),五芒星(セーマン)?	
Ⅳ期	「千」(18),「□千」,「大万」(3),「＋」(5),「主」,「未」,「富」(2),「巾」(10),「小」(2),「中」,「廣麿」,「善」,「宜」,「法」,「上」(2),「息」,「帀」(9)	「＋」,「×」,多条線,「巾」(4),「小」(4)	多条線,記号?
Ⅴ期	「千」(30),「上」(2),「里」(2),「小」,「小」カ,「万」,「兄」,「千万」または「十万」,「十□」,「大万」(3),「立合」,「善」(2),「前」,「息」,「埴」,「富」(4),「継国」カ,「寺」,「任」,「□□寺」,「帀」(3),「圧」,「㊐」	「＋」(8以上),一条線,「千万」,「十万」,「千」,九字切り,三条線,「大」(2),記号	一条線,2条線 U字状線, 一条線

Ⅱ期では，文字・記号資料が出土した竪穴住居の棟数は11棟である。Ⅱ期の竪穴住居の棟数は15棟であるので，多くの竪穴住居に見られる。出土していない竪穴住居は土器の出土量自体が少ないので，ほとんどの竪穴住居で，墨書・線刻土器を保有していた可能性が高い。個々の文字・記号種を見ると，SI058で，底部内面に「＋（×）」線刻のある坏が多く出土している。墨書は，全体として「富」と「息」がやや目立つが，特定文字種の集中はない。SI041の土師器皿底部外面の「国」は，小さく記入されており，土器と合わせて古い様相がうかがえる。また，SI044の「麻」・SI053の「七」も字形が小さい。一方，SI024の「富」・SI044の「息」など字形の大きな資料もある。

Ⅲ期の資料では，坏底部内面に「＋（×）」線刻のあるものがSI059に比較的多く，SI047にも若干量見られる。この2棟はⅡ期のSI058と近い位置にある。また，Ⅴ期のSI051とSI057も「＋（×）」線刻資料をもつが，この2棟もSI058と近い位置にある。調査区中央部に，8世紀後葉から9世紀第3四半期頃まで継続的に「＋（×）」線刻を使用するグループがあると考える。また，SI047では星形に似た線刻もあり，五芒星やセーマンと呼ばれる魔除けの記号と思われる。



第176図　文字・記号資料集成（1）

Ⅳ期

37-57

78-10

78-11

78-12

78-9
体外

78-9
底外

Ⅴ期

2-9

2-10

2-11

2-12

3-14
体外

3-14
底外

3-15
体外

3-15
底外

3-16
体外

3-15
底外

3-17
体外

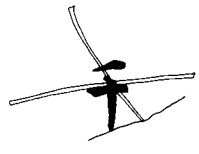
3-17
底外

3-18
底外

3-19
体外

3-21
底外

3-22
底外


3-23

3-26
体外

3-28

3-30

3-31

3-41
体外

3-41
底外

3-32

3-36

3-37

23-1

23-2
体外

23-2
底外

25-7

35-21

35-18

35-16

45-13

45-23

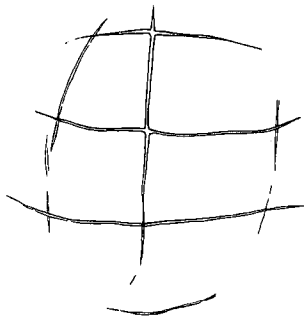
45-22

45-14

51-1

51-18
底外

51-18
底外

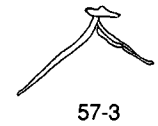

51-9

51-10

57-6

57-7

57-3
体外

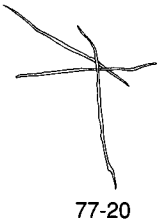

57-3
底外

108-3

57-5

57-8

77-8


77-20

108-6

108-2

108-4

108-5

108-10

110-1

110-5

110-7

14-10

第177図　文字・記号資料集成（２）

Ⅳ期は，調査区北部のSI009に「千」と「帀」の墨書が多く見られる。「千」墨書はSI009に近いⅤ期のSI002・003にも多く，これらの竪穴住居群は「千」のグループといえる。調査区北部の「千」墨書は坏の体部外面と底部外面の２箇所に記入されることが通常のあり方である。「千」は調査区中央部に位置するⅤ期のSI045にもあり，船尾白幡遺跡においては９世紀的な墨書である。調査区南西部に位置するⅡ期のSI104にも「千」が見られるが，この竪穴住居はⅡ期の中では降る遺構である。調査区中央部に位置するSI037は文字種が多いが，中でも「巾」の出土量が多い。しかし，「巾」は周囲に位置するⅤ期の竪穴住居からは見られない。「小」がSI037とⅤ期のSI035に共通するが，グループを形成するといえる出土量ではない。SI037では，須恵器甑の胴部外面にヘラ書きも見られる。新治窯産の須恵器である。調査区北部と中央部の中間に位置するSI015からは「大万」・「十万」など，「万」を含む文字が比較的多く見られる。その他，調査区東部に位置するSI078の「廣麿」は人名である。また，調査区南部に位置するSI113の「上」・「法」・「富」・「□□」墨書のある土器群はセットであり，良好な一括資料といえる。このセットに「息」墨書土器も加わる可能性がある。

Ⅴ期は竪穴住居の棟数が多く，文字・記号も最も種類が多い。調査区北部で「千」が集中する。また，調査区中央部では，「万」・「大万」・「千万」・「十万」がSI035・045・051の３棟で見られる。「万」を含む文字が中央部周辺で多い可能性はあるが，多量に集中するあり方ではないため，調査区外の竪穴住居からも出土する可能性が高いと考える。調査区南西部に位置するSI110では，「□□寺」の墨書が出土している。「寺」の上部に寺名が記入されていたものと理解できる。SI110に近いSI108でも「寺」墨書がある。周囲に仏堂が存在するものと思われる。SI108からは「継国」と読める可能性のある人名墨書が出土している他，墨書の上に線刻でなぞった資料もある。SI057では「立合」が見られる。２字の合わせ文字で，東金市久我台遺跡から出土した資料の１タイプと近似する文字である[4)]。中央部に位置するSI051では３条と４条の刻線が縦横に交差する線刻がある。九字切りやドーマンと呼ばれる魔除けの記号の簡略形である。北部のSI003では「⿱生丨」墨書が見られる。則天文字の人の意味である。その他，３条の線が交差するヘラ書きが，調査区東部に位置するSI077の土師器甕底部外面に見られる。

Ⅵ期の竪穴住居２棟からは，文字・記号資料が出土しなかった。

最後に，竪穴住居１棟当たりの資料点数・土器個体数を再度取り上げる。本項の当初に土器個体数で５点程度の数量を示したが，それはⅠ期からⅥ期までのすべての竪穴住居をならした数字である。Ⅰ・Ⅱ期の竪穴住居は土器の出土量が少ないため，以下でⅠ・Ⅱ期とⅢ～Ⅴ期に二大別して考えてみる。なお，Ⅵ期と詳細時期不明の竪穴住居は除外する。大別時期はおおむね奈良時代と平安時代前期に相当する。

Ⅰ・Ⅱ期の資料点数は32点，土器個体数は23個である。竪穴住居の棟数は18棟であるので，１棟当たりの資料点数は1.8点，土器個体数は1.3個となる。Ⅲ～Ⅴ期の資料点数は260点，土器個体数は234個である。竪穴住居の棟数は30棟であるので，１棟当たりの資料点数は8.7点，土器個体数は7.8個となる。９世紀前葉から後葉における本遺跡の文字・記号資料点数・土器個体数の多さを，より実感できる。平安時代前期の様相については，先に示した数値よりもこの数値の方が実態に近い。

注１　破片も１個体と数えるが，１個体に２箇所記入されたものが相当量あるので，資料292点に対応する土器個体数は257点を若干下回ると思う。ただし，どれだけ下回るか明確な提示ができないため，算出の基礎は257点とする。

2　報告している竪穴住居の数量は53棟であるが，SI103A·B·Cは様相が不明瞭であり，調査区外に続いている。同様にSI124A·Bも多くが調査区外となる。これらについては便宜的に2棟分とみなす。また，昭和49年調査時の第4号住については，検討対象から除外する。

3　萩原恭一　2000　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ　—印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡—』　（財）千葉県文化財センター

4　萩原恭一　1988　『東金市久我台遺跡　—房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—』　（財）千葉県文化財センター

4　土器の打ち欠き・穿孔及び破壊について

奈良・平安時代の土器の中には穿孔や打ち欠きの施された土器が存在する。それらの土器については，第6章で個々に記述したが，ここでまとめて取り上げ，総合的に検討する。

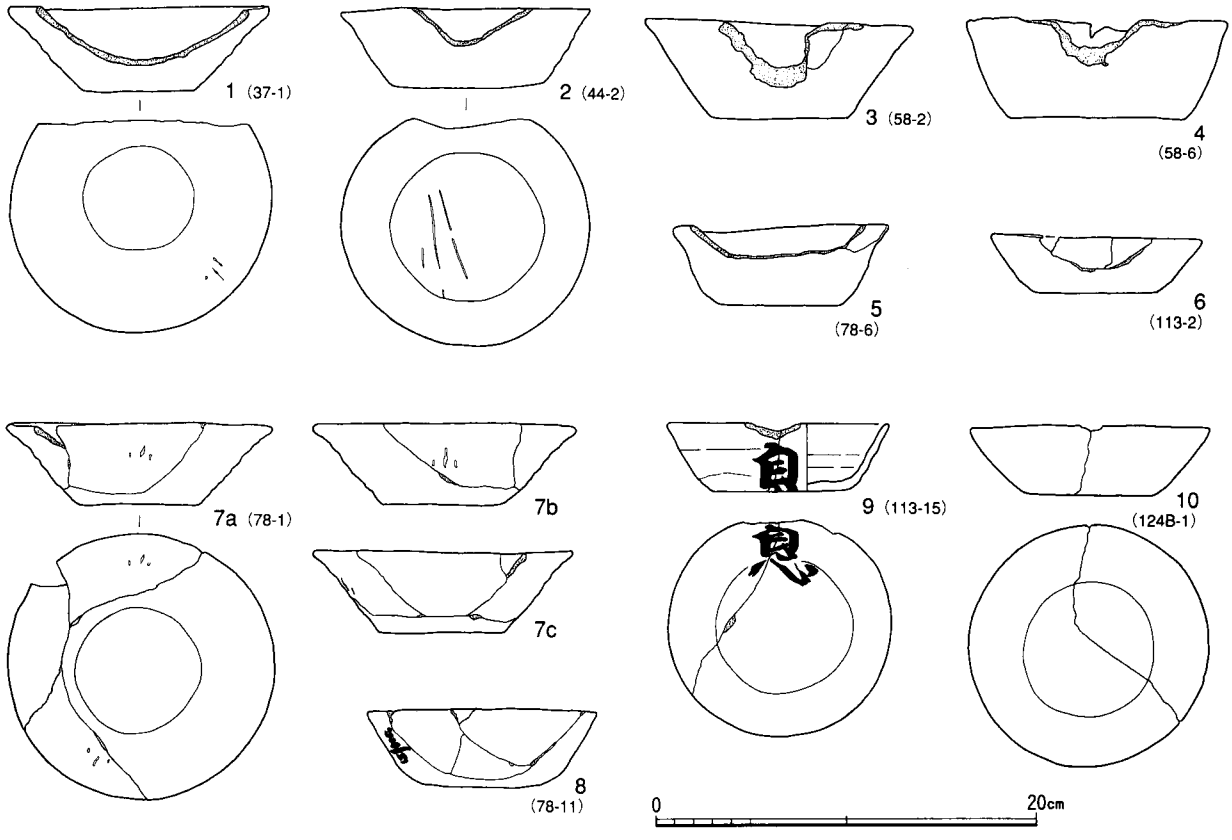
本項で取り扱う穿孔・打ち欠き及び破壊された土器については，祭祀に使われた土器であると考えている。つまり，穿孔や打ち欠きが行われた時点で，その土器は人が実用に使う器ではなくなり，神仏に属する器に転化するということである。したがって，転用硯や土器底部片転用の紡錘車等，実用的なものは対象としない。もちろん，それらの製品が祭祀に関わる場合もあり得るが，第一目的が実用であるものは含めていない。ただし，灯明器の打ち欠きは，芯固定のための実用的なものか，祭祀的なものか，あるいはその双方であるのか，微妙な場合がある。また，支脚に転用された土器の打ち欠きも同様である。それらについては個々に則して考えていく。

船尾白幡遺跡における打ち欠き土器の標準的様相

本遺跡における打ち欠き土器の典型例としては，SI035の土師器坏2（第148図　以下35－2のように記述する）をあげることができる。この坏は口縁・体部の一部が口縁部周で約1/4欠損している土器である。欠損部の欠け口は整然とした弧状で，断面が磨滅しており，明らかに意図的な打ち欠き・加工と見受けられた。

並行して整理作業を実施している船尾白幡遺跡Ⅱにおいても良好な打ち欠き土器が見られたので，本報告書所収土器の中にも，より多く存在することが予想された。そこで，これまで明瞭に把握していなかった遺物についても，原稿執筆時に打ち欠きされているか観察したところ，35－2と類似した土器群を見出すことができた。第178図は，その一部の土器の打ち欠き状態についての図である[1)]。同様に一部の土器については，図版103に打ち欠き部の正面等から撮影した写真を掲載した。

第178図1～5は欠損部の大きさや形に若干の違いがあるが，35－2同様意図的に打ち欠きされたと考えられる土器である。3・4は欠け口がやや雑であるが，意図的な打ち欠きと認めて良いと考える。3は欠損部破片の1片が接合している。6は打ち欠きされた部分の破片が残りの本体と接合していると考える例である。7も打ち欠きされた破片が接合している例であるが，3回の打ち欠きが複合しており，結果として打ち欠き部が口縁部周の1/2以上となった土器である。第6章で述べたように，打ち欠きに際して，2箇所の線刻が意識されており，文字・記号と打ち欠きが密接に関連する事例である。7と同じ竪穴住居から出土した8も同様の事例である。墨書「善」を本体に残し，ぎりぎりのところで，打ち欠きが行われている。6・7・8は打ち欠きされた部分の破片が遠方に廃棄されていないために接合した事例である[2)]。9も墨書があるが，墨書の部分で割れている。墨書「息」の上部に打ち欠き部があるが，打ち欠いた後，



第178図　奈良・平安時代土器の打ち欠き状況

墨書を貫くように割ったものと考える。10も9と似た土器の可能性がある。この坏は灯明器で，口縁部にある僅かな欠損は芯固定のための打ち欠きであろうか。灯明器として使用後，打ち欠き部を境に2片に割ったものと考える。

本遺跡における打ち欠き土器でもっとも多く見られるものは，35－2や第178図1～6のような口縁・体部の一部が打ち欠きされたものであり，それらは標準的なあり方と理解できる。7は一部の打ち欠きが複合したものであるが，これがさらに進んで，24－4（第146図）のように口縁部の全周に及ぶものがある[3)]。9の墨書を貫く割れと10の割れは底部に達している。他の打ち欠き土器の多くが，制限はあるものの器としての使用が不可能ではないのに対し，9・10は器としての使用が困難か不可能である。割るさいには器機能を求めず，破壊することに意味があったものと考える。

以上，打ち欠き土器や破壊された土器について図を通して見てきた。本項の記述にさいしては，それら標準的土器を目安に，本書に掲載した坏皿類のすべてを再度実見し，打ち欠きがされていないか再検討した。第40表は，その作業の結果抽出した土器を，穿孔された土器とともに掲載したものである。

打ち欠き・穿孔・被破壊土器の概観

第40表に掲載した土器は64点である。これらの土器のうち，穿孔土器については比較的明瞭に把握できるが，打ち欠きされた土器については，意図した打ち欠きと意図されない破損の区別が難しい場合があった。そのため，数量の把握はかなり不安定である。そもそも目安と考える整然とした打ち欠きが，打ち欠きの全てとは思われない。しかし，口縁・体部の欠損しているものの全てが打ち欠き土器であるはずもな

第40表　奈良・平安時代打ち欠き・穿孔・被破壊土器一覧

番号	遺構・遺物番号	器種	打ち欠き/穿孔/破壊	打ち欠き・穿孔状況	土器の状態	文字・記号種別	内容	部位・方向	出土状況	時期	備考
1	SI002 9	土師器坏	打ち欠き＋破壊？	1箇所？	接合無，他欠損有	墨書	「千」	体部外面・正位	左奥中層	Ⅴ期	打ち欠き部あり　主要部断面擦れて未接合
2	SI002 14	土師器坏	打ち欠き	口縁部全周	接合無，他欠損無				カマド内下層	〃	被熱。支脚転用か
3	SI002 16	土師器高台付皿	打ち欠き	2箇所	接合有，他欠損無	墨書	「千」	体部外面・正位	中央下層	〃	墨書部分で打ち欠き
4	SI002 17	土師器高台付皿	打ち欠き	2箇所	接合無，他欠損無				カマド内火床部上　正位	〃	
5	SI003 4	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無				左奥隅中層	Ⅴ期	
6	SI003 14	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無	墨書 墨書	「千」 「千」	体部外面・正位 底部外面	右前中層	〃	
7	SI003 15	土師器坏	打ち欠き	2箇所	接合無，他欠損無	墨書 墨書	「千」 「千」	体部外面・正位 底部外面	中央前下層	〃	
8	SI003 16	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損無	墨書 墨書	「千」 「千」	体部外面・正位 底部外面	左奥中層	〃	体部外面の墨書部分で打ち欠き
9	SI008 3	土師器坏	底部穿孔・打ち欠き	2箇所	接合有，他欠損無				カマド右側前床面　正位	Ⅴ期	
10	SI009 1	土師器坏	打ち欠き	2箇所	接合無，他欠損無				左前中層	Ⅳ期	口縁部打ち欠き部の方が多
11	SI009 4	土師器坏	底部穿孔＋破壊？	2箇所	多数破片の接合				位置不明	〃	破損は意図的？　口縁・体部打ち欠きか
12	SI009 48	土師器高台付皿（または坏）	穿孔(未遂)	1箇所	接合無，他欠損有				右前中層下層	〃	高台部のみ　外面に穿孔未遂。口縁・体部除去?
13	SI015 15	土師器坏	打ち欠き	口縁部全周	接合無，他欠損無				右中央床面　倒位	Ⅳ期	底部外面に研ぎ痕　被熱　支脚転用か
14	SI024 1	須恵器坏	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損無				中央床面・右中央下層　正位	Ⅱ期	ほぼ完形
15	SI024 2	須恵器坏	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損ほぼ無				右中央下層　正斜位	〃	ほぼ完形
16	SI024 3	須恵器坏	打ち欠き＋破壊	1箇所	接合有，他欠損無				中央下層・前中央下層　正斜位	〃	打ち欠きというよりほぼ2片に分割　ほぼ完形
17	SI024 4	土師器坏	打ち欠き	口縁部全周	接合無，他欠損無	線刻	「十」	底部外面	カマド左前下層　倒位	〃	
18	SI024 5	土師器坏（非ロクロ）	打ち欠き＋破壊	1箇所	接合有，他欠損有				カマド右前床面（貝ブロック下）正位	〃	打ち欠き箇所でさらに7:3に分割か　ほぼ完形
19	SI024 6	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損無				右前下層　正位	〃	ほぼ完形
20	SI024 7	土師器坏	破壊		接合有，他欠損有	墨書	「富」	体部外面・正位	中央下層・右前下層　正位	〃	打ち欠きというより破壊か
21	SI032 7	土師器高台付皿	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無				右中央中層　倒位	Ⅳ期	
22	SI035 2	土師器坏	打ち欠き＋破壊	1箇所	接合有，他欠損無				左奥下層　倒位	Ⅴ期	
23	SI035 22	土師器高台付皿	底部穿孔・打ち欠き	3箇所か	接合有，他欠損無				左中央中層　横位	〃	口縁・体部打ち欠き　高台部も打ち欠きか　接合でほぼ完形
24	SI037 1	須恵器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無	線刻	「小」	体部外面・正位	カマド右前上層	Ⅳ期	
25	SI037 26	土師器坏	体部穿孔・打ち欠き＋破壊？	口縁部全周？	接合有，他欠損有	墨書	「十」	底部外面	左中央下層	〃	口縁・体部全周打ち欠きか
26	SI037 28	土師器坏	打ち欠き＋破壊？	数箇所複合	接合有，他欠損有	線刻か	多条線	底部内面	中央床面	〃	被熱
27	SI037 52	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無				カマド内・周辺下層	〃	灯明専用器
28	SI041 1	須恵器坏	打ち欠き	2箇所複合	接合無，他欠損無				前中央床面	Ⅱ期	口縁部打ち欠き部の方が多
29	SI041 4	土師器坏	打ち欠き＋破壊？	1箇所？	接合有，他欠損有				中央中層	〃	灯明器　芯固定のための打ち欠きか　その後破壊?
30	SI044 2	須恵器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無				右奥床面　正位	Ⅱ期	
31	SI045 6	土師器坏	底部穿孔＋打ち欠き？＋破壊？	1箇所？	接合無，他欠損有				中央前寄り上層	Ⅴ期	穿孔部で割れて小片　口縁・体部も打ち欠きか
32	SI049 1	土師器坏	打ち欠き	口縁部全周	接合無，他欠損無				奥中央床面　正斜位	Ⅱ期	
33	SI051 9	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無	線刻	九字切り	底部内面	出土位置不明	Ⅴ期	被熱

番号	遺構・遺物番号	器種	打ち欠き/穿孔/破壊	打ち欠き・穿孔状況	土器の状態	文字・記号種別	内容	部位・方向	出土状況	時期	備考
34	SI057 6	土師器坏	打ち欠き	多数複合	接合無，他欠損無	墨書	「善」	体部外面・正位	出入り口ピット内	Ⅴ期	口縁部遺存1/5以下
35	SI058 1	須恵器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無	線刻	「十」	底部内面	カマド左側(奥中央)床面 正位	Ⅱ期	58－5·8·9と4枚重ね
36	SI058 2	須恵器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無				奥中央床面 正位	〃	58－6の上に2枚重ね
37	SI058 5	土師器坏	打ち欠き	1箇所？	接合有，他欠損無か	墨書	「富」	底部外面	カマド左側(奥中央)床面 正位	〃	口縁·体部2/3周強打ち欠きか 58-1·8·9と4枚重ね
38	SI058 6	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無				奥中央床面 正位	〃	被熱 58－2の下に2枚重ね
39	SI058 8	土師器坏	打ち欠き＋破壊		接合有	線刻	「十」類似	底部内面	カマド左側(奥中央)床面 正位	〃	半分を細かく破壊 58－1·5·9と4枚重ね
40	SI058 9	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損無	線刻 線刻	「十」 「十」·1条線	底部内面 体部外面	カマド左側(奥中央)床面 正位	〃	整然とした打ち欠きでない 58-1·5·8と4枚重ね
41	SI058 14	土師器甑	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損有				カマド左側(奥中央)床面 倒位	〃	元々は打ち欠き部以外には，欠損無？
42	SI059 15	土師器坏(非ロクロ)	底部穿孔＋打ち欠き？＋破壊？	1箇所	接合有，他欠損有				右前床面	Ⅲ期	穿孔部で2片に割れ 口縁端部も打ち欠き？
43	SI069 7	須恵器甕	胴上部穿孔	1箇所	多数破片	線刻	数条交差線	底部内面	中央部各所に散在 下層主体	Ⅱ期	全体に破壊？
44	SI078 1	須恵器坏	打ち欠き	1箇所か	接合有，他欠損ほぼ無	線刻 線刻	「小」 「小」	体部外面·正位 体部外面·正位	カマド前床面 正位	Ⅳ期	口縁部1/2周強打ち欠き
45	SI078 6	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損無				カマド前床面 正位	〃	口縁・体部の一部に茶褐色物質付着
46	SI078 8	土師器坏	底部穿孔＋破壊？	1箇所	複数破片接合				出土位置不明	〃	穿孔部で底部破損は意図的？
47	SI078 9	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無	墨書	「十」	底部外面	カマド右側横床面 正位	〃	灯明器 正位の甕17上
48	SI078 10	土師器坏	打ち欠き＋破壊？	1箇所？	接合有，他欠損有	墨書	「廣麿」	体部外面·横位	カマド右袖・カマド前・右奥上層	〃	打ち欠き部と墨書が接する 打ち欠き部は接合後に破壊?
49	SI078 11	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損無	墨書	「善」	体部外面·正位	左中央床面	〃	打ち欠き部は墨書に隣接
50	SI083A 1	土師器坏(非ロクロ)	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損無				カマド右袖上 正位	Ⅲ期	口縁部の摩滅・小欠損も意図的？
51	SI088 6	土師器坏	体部穿孔＋破壊？	1箇所	破片				出土位置不明	Ⅳ期	口縁·体部上部に丁寧な穿孔 打ち欠きは不明
52	SI102A 4	土師器坏(非ロクロ)	打ち欠き＋破壊	1箇所	接合有，他欠損無				左奥・中央奥上層	Ⅱ期	灯明専用器 1箇所は芯の固定か 覆土埋め戻し
53	SI102A 5	土師器坏(非ロクロ)	打ち欠き＋破壊	1箇所？	接合有，他欠損無				右前隅・竪穴外？上層	〃	灯明専用器 打ち欠いて使用後折り割り 覆土埋め戻し
54	SI102A 8	土師器坏	打ち欠き＋破壊？		接合有，他欠損有				右奥隅上層	〃	灯明器 打ち欠いて使用後破壊 覆土埋め戻し
55	SI102B 2	土師器坏	打ち欠き・体部穿孔＋破壊？		接合有，他欠損有				中央？上層	Ⅱ期	灯明器 穿孔して使用後破壊 覆土埋め戻し
56	SI104 1	須恵器坏	打ち欠き	1箇所	接合無，他欠損無				中央奥床面 正位	Ⅱ期	
57	SI108 1	土師器坏	打ち欠き	複数の複合	接合有，他欠損有				カマド前下層 正位	Ⅴ期	灯明器 打ち欠いて使用後折り割りか
58	SI108 2	土師器坏	打ち欠き＋破壊	1箇所	接合有，他欠損無	線刻	「富」	体部外面·正位	カマド右袖上上層 倒位	〃	灯明器
59	SI108 4	土師器坏	破壊		接合有，欠損有	墨書	「富」	体部外面·横位	カマド火床部	〃	墨書部分も破壊
60	SI110 1	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損無	墨書	「任」	体部外面·正位	右奥(カマド右横)下層 正位	Ⅴ期	
61	SI113 2	土師器坏	打ち欠き	1箇所	接合有，他欠損無				右奥床面 倒位	Ⅳ期	
62	SI113 12	土師器坏(非ロクロ)	打ち欠き	3箇所複合か	接合有，他欠損無				中央下層 正やや斜位	〃	
63	SI113 15	土師器坏	打ち欠き＋破壊	1箇所	接合有，他欠損無	墨書	「息」	体部外面·正位	左前下層 正やや斜位	〃	墨書部分で折り割り 墨書は底部にかかる
64	SI124B 1	土師器坏	破壊	1箇所	接合有，他欠損無				右前隅？下層・上層	Ⅲ期	灯明器 6:4程度で2片に分割

い。意図した打ち欠きと意図しない破損が似ている場合は，その区別は極めて難しいものとなる。したがって，曖昧さを少しでも排除するため，なるべく整然とした割れ方のものを打ち欠き土器とした。ただし，若干乱れた割れ方のものであっても，１棟の竪穴住居に複数見られる場合や出土状況の検討のうえで，打ち欠き土器と認めた場合がある。このような見方で抽出した数量が64点である。この中にはあるいは意図しない破損のものが含まれているかもしれない。しかし，あったとしても少ないと考える。逆に第40表に掲載することを見送った土器の中に，打ち欠き土器が含まれる可能性が高いと考える。区分に若干の曖昧さが残ることが否めないので，それらの土器についても遺構番号と報告書遺物番号のみを記述し，今後の検討課題としておく[4]。

第40表に掲載した土器の器種は，坏と皿がほとんどであるが，胴部穿孔された須恵器甕の破片が１点（69－７）と，土師器甑が１点（58－14）ある。甕類の穿孔は，鳴神山遺跡Ⅲ222竪穴住居から出土した土師器常総型甕にも見られる[5]。甕・甑口縁部の打ち欠きについては，他には見つけることができなかった。甕や甑は破損しているものが多く，施されていたとしても見つけることが難しい。今後の検討課題である。なお，鳴神山遺跡ではⅡ040の井戸状遺構等で貯蔵形態・煮沸形態の土器が破壊されており[6]，甕や甑については完全に破壊される場合もあった。69－７も廃棄にあたり，全体的に破壊されたのかもしれない。

坏皿類は土師器坏が47点，須恵器坏が10点，土師器高台付皿が４点，土師器高台付坏または皿が１点である。土師器坏が3/4を占める。

墨書・線刻を有する土器は24点，見られないものは39点で，およそ40%の土器に文字・記号がある。しかし，墨書・線刻土器の中には小破片のものも多いことから，見られない土器の欠損部に文字・記号があった可能性も考えられ，その比率はもっと高まるであろう。

穿孔及び穿孔未遂の土器は11点である。これらの土器は穿孔部以外にすべて欠損部がある。35－22の土師器高台付皿は接合の結果，底部穿孔以外は完形の土器であるが，口縁部周で1/2弱が打ち欠きされていると思われ，また，高台部も除去された可能性が高い。供膳形態の土器は10点で，土師器坏が８点，土師器高台付皿が１点，高台付皿または坏が１点である。土師器坏には，１点非ロクロのものがある。

穿孔部位は底部が７点であるが，９－48（高台付皿または坏）は貫通していない。この土器は未貫通の孔部分に「千」墨書があり，穿孔よりも墨書の一部を欠くことに意味があったのかもしれない。35－22は径５㎜の非常に丁寧な穿孔であり，穿孔によって土器を破損しないように注意が払われたことがわかる。８－３も穿孔部からひびが入っているが，打ち欠き以外には欠損部が無く，器としての使用もある程度可能な土器である。他の土師器坏４点（９－４，45－６，59－15，78－８）は穿孔部から割れている。このうち，59－15は穿孔部を境にほぼ半分に割れているので，後に割られたものと思われる。

土師器坏３点（37－26，88－６，102B－２）は体部に穿孔されている。このうち，102B－２は灯明器である。穿孔部から油煙が流れた状況を観察でき，穿孔した後でも灯明器として使われたことがわかる。穿孔は内外面両側からであり，底部を破損しないように注意された状況がうかがえる。なお，廃棄にあたって割られた可能性も考えられる。88－６は35－22と似た径５㎜の丁寧な穿孔が施されている。ただし，穿孔部に欠損がある。穿孔以外に口縁部端部に僅かな欠けがあり，打ち欠きかと思われるが断定しがたい。口縁部周で1/4程度の破片であり，土器自体の様相は不明瞭である。穿孔は口縁・体部の上部であり，欠損が少なければ，液体を注ぐことも可能である。37－26も88－６同様，穿孔が口縁・体部の上部にある。ただし，穿孔部で割れている他，口縁・体部は全体に細かく割れている。

次に打ち欠き及び破壊された土器について述べる。なお，穿孔された土器のほとんどが打ち欠きまたは破壊された可能性があるので，完全に別物として区分するのは適切でない。したがって，穿孔土器の打ち欠き・破壊の様相についてもあわせて見ていきたい。

打ち欠きは1箇所に施されるものが最も多い。ただし，1箇所といっても，割れ口の線が，弧状・「V」字状・「U」字状等である比較的小さなものと，それらが複合して大きくなったものの違いがある。両者の明確な区分は難しいが，数量的には小さな打ち欠きの方が多いといえる。複合しているものの中には，遺存する口縁部の方が少ない場合もあり，そのような土器は口縁部全周打ち欠きに近いといえよう。

全周を打ち欠きされたことが明瞭なものは，土師器坏4点（2－14，15－15，24－4，49－1）である。なお，破片の一部が接合している場合は，打ち欠き土器の把握が難しくなるので，実数は増える可能性が高い。土師器坏4点のうち，2－14と15－15は被熱痕跡が著しく，それが断面にも見られるので，支脚に転用されたものであろう。その意味では実用品であり，第40表から除外すべきであるかもしれない。ただし，支脚に転用された土器が，カマド廃棄の祭祀に関わる場合もあるので，注意が必要である[7]。

打ち欠きが離れた位置に2箇所見られるものも4点（2－16・17，3－15，9－1）ある。SI002のものは土師器高台付皿，他は土師器坏である。2箇所の打ち欠きは，いずれの土器も片方が小さく，もう一方が大きい。これが何らかの意味をもつのかどうかは，数量が少なく判然としない。

なお，1箇所，2箇所の打ち欠きから全周に至るまでのあり方の違いが何らかの意味をもつのか，もたないのか，それ自体が判然としない。今後の検討課題である。

土器の割れが底部中心や近くに見られるものもある。その割れが意図的なものであるならば，もはや供物や酒等を盛ることが不可能な土器であり，破壊と表現した方が適切である。

第40表に掲載した土器のうち，灯明器が10点あるが，そのうち4点（102A－4・5，108－2，124B－1）は2片ないし3片に割られた土器と考える。一方，打ち欠きのみで他に割れのない土器は37－52と78－9の2点である。他の4点は割れがあり，破壊された可能性も考えられる。

穿孔された土器も割れているものが多い。先述したように59－15はほぼ2片に割れ，底部内面に線刻もあるので，意図的な破壊である可能性が高い。他の土器も，8－3・35－22を除いて，破壊された可能性があるが，穿孔の影響による破損や意図されない破損との区別が難しく，意図的かどうか断定し難い。事例の集積を待ちたい。

以上の他に第40表に破壊と記載した土器を見ると，58－8はほぼ半分が細かく割れている。2－9もやや似ており，打ち欠き部以外の主要部のほぼ半分が細かく割れている。24－7と108－3は割れ方があまり整っていないが，同じ竪穴住居の他の土器様相と出土状況から第40表に掲載した。墨書「富」を含む3/5程度が細かく割れている。他の5点（24－3・5，35－2，37－28，113－15）は，打ち欠き部を除いてほぼ2片に割れている土器である。このうち，24－5・35－22・37－28は打ち欠き部の最下部から割れている。24－5は他の24出土遺物との関係から，意図的な可能性が高いと考えるが，35－2・37－28はやや軟質であり，自然な破損の可能性も考えられる。24－3は口縁端部の僅かな欠損が打ち欠きかもしれないが，判然としない。接合によりほぼ完形の土器である。113－15は図示した土器であり，前段で記述した。

時期別の様相

各期毎の竪穴住居は以下の通りである。

Ⅰ期　なし

Ⅱ期　SI024，SI041，SI049，SI058，SI069，SI102B，SI102A，SI104

Ⅲ期　SI059，SI083A，SI124B

Ⅳ期　SI009，SI015，SI032，SI037，SI078，SI088，SI113

Ⅴ期　SI002，SI003，SI045，SI051，SI108，SI110，SI008，SI035，SI057

Ⅵ期　なし

Ⅰ期とⅥ期には見られないが，竪穴住居の棟数が少ないので，存在の有無は不明とする。資料点数は，Ⅱ期が24点，Ⅲ期が3点，Ⅳ期が19点，Ⅴ期が18点である。Ⅲ期が少ないのは，竪穴住居の棟数が少ないためであり，Ⅱ期からⅤ期まで継続的に見られるとして良い。また，1棟の竪穴住居単位では珍しい存在ではなく，どの竪穴住居から出土しても不思議ではない。穿孔された土器は，全体量が少ないが，Ⅱ期からⅤ期まで見られる。

Ⅱ期全体の出土遺物量はそれほど多くないにもかかわらず，打ち欠きされた土器等は半数以上の竪穴住居で見られる。8世紀末くらいの時期には，土器を打ち欠く行為が集落に広まっていたことがわかる。また，Ⅱ期では，口縁・体部の一部を小さく打ち欠くタイプの他，全周が打ち欠きされるもの（24－4，49－1），破壊による器機能喪失のもの（24－3等），穿孔されたもの（69－7，102B－2），灯明器で打ち欠き・破壊されたもの（102A－4・5等）があり，当初から全てのタイプのものが見られる。このことと，資料点数の多さから，Ⅱ期に先行する時期に，打ち欠き土器が存在することが予想される。

墨書・線刻のある土器を見ていく。Ⅱ期では，24－7の墨書周辺がやや大きく破壊され，58－5・8も同様である。また，24－4は口縁部全周打ち欠きの土器である。小さな打ち欠きもある（58－1等）ので，一概には言えないが，打ち欠きにあたって，墨書・線刻が意識された土器があるものと考える。

墨書・線刻と打ち欠きの関係はⅣ期・Ⅴ期に，より明瞭な資料がある。先述したⅣ期の78－11は墨書の際まで打ち欠かれ，墨書「善」は主要部に残るものである。78－10の「廣麿」も同様である。逆に，これも先に述べたが，78－1は打ち欠き部の際に線刻の一つが残っている。SI078の資料は上記2者の違いがあるが，墨書・線刻部分は割れていない点で共通性がある。それに対し，Ⅴ期の2－9・16，3－16は墨書部分に打ち欠きがかかっている土器である。以上の3タイプに，何らかの違いがあるのか，特段の意味はないのか，今後の検討課題である。

Ⅱ期は須恵器が9点あり，他期と比べて割合が極めて高い。しかし，これは土器全体の中でⅡ期における須恵器の割合の高さを反映したものである。土器全体の傾向を別にすれば，Ⅱ期からⅤ期まで特に大きな差異は見られない。しかし，一遺跡内の様相であり，資料点数も格別多いわけではないので，各時期の差異は今後も追求されるべき問題であろう。

出土状況

遺物の出土状況については第6章でも若干の記述をしているが，ここでは打ち欠きされた土器を含む土器群のうち，良好な出土状況が見られる竪穴住居を中心として，より掘り下げて考えてみたい。

①SI024（第101図）

Ⅱ期の竪穴住居である。第6章で図示した須恵器坏・土師器坏7点は，土師器坏4を除いて遺存の良好な個体である。4も口縁・体部の全周が打ち欠きされた土器であるので，祭祀用の土器に転化した一つの製品とみることができる。4を含め，すべての坏が打ち欠きまたは破壊された土器である。破片資料をみると，土師器坏小片が5点のみで，ごく少量である。坏以外では，あまり遺存の良くない土師器甕2点と，少量の甕破片が出土した程度である。

7点の坏の出土状況を見てみよう。4と非ロクロの土師器坏5はカマド前から対称的な位置で出土した。4はカマド左袖前の下層から倒位，5はカマド右袖前の床面から正位での出土である。また，5の上部から北東隅にかけては，貝ブロックが出土していることが注目される。他の5点（1・2・3・6・7）は，出入り口側の南壁中央から東壁中央にかけて出土した。土師器坏7が不明瞭であるが，他は正位の出土である。ただし，須恵器坏2・3は傾いている。層位は7がほぼ床面であるが，他は床面からやや高い位置にある。3はほぼ6：4程度に分割されている。7も同じような割合であるが，4割の方が細かく破壊されている。こちらに「富」の墨書がある。須恵器坏1・2・土師器坏6は打ち欠き部の割合が少ない。以上の土器群は小破片も，近くから出土している。

SI024の覆土は，埋め戻されているかどうか断定し難い。しかし，下層はややロームの含有が多く，その可能性があるかもしれない。

以上の状況から，7点の坏は層位にやや難点があるものの，一括性が高く，何らかの祭祀行為に伴うセットの土器群と考える。ここでその祭祀行為について，想像を交えて復元的に考えてみる。

まず，カマド右袖前に正位の土師器坏が置かれた。この坏の中には，カマド神に捧げる供物が盛られた可能性がある[8)]。この土器と対称的な位置となるカマド左袖前には，口縁部全周を打ち欠いた土師器坏が倒位で置かれた。この坏はカマド神を封じ込めるための土器と考える。出入り口部の南壁側中央から東壁側中央にかけて，須恵器坏3点・土師器坏2点が打ち欠きまたは破壊・分割して置かれた。土師器坏1点は「富」墨書があるが，その部分周辺は細かく破壊された。5点の土器群についても，神仏に供物を捧げたり，あるいは祭祀に伴う飲食行為に使われたことなどが考えられる。カマド右側の貝ブロックも飲食行為に伴う可能性が考えられる。伴うとすれば，右袖前の坏の上に，意図して廃棄されたのであろう。以上の祭祀行為は，住居解体に伴い，ある程度の埋め戻しがなされた後に行われたものと思われる。

②SI058（第117図）

Ⅱ期の竪穴住居である。カマド左側の床面で4枚重ね及び2枚重ねの良好な坏群が出土したが，すべて打ち欠きまたは破壊された土器である。カマドは右に寄っているので，4枚重ねの土器群が，ほぼ奥側の中央の位置にある。下から須恵器坏1，土師器坏9・5・8の順である。4枚重ね・2枚重ねの土器ともに，すべて正位の坏である。ただし，4枚重ねの方は傾いて斜めになっている。最上部の8のほぼ半分が割れ，その下の5もやや割れが多いのは，上部に位置したためかもしれない。ただし，坏群全体の状況から，打ち欠きは施されていたものと考える。2枚重ねの土器は，下が土師器坏6，上が須恵器坏2である。打ち欠き部をそろえて重ねられている[9)]。6は被熱痕が著しく，特に内面は焼けただれている。支脚に転用されていた可能性と，火に関わる祭具として長く使用された可能性の双方が考えられる。支脚転用の場合であっても，打ち欠きは祭祀に伴うものである。

これら6点の坏のうち，4枚重ねの方はいずれも文字・記号が見られる。1・9・8は底部内面に「＋（×）」を意図した線刻があり，8は体部外面にも「＋」と1条の線刻が見られる。5は底部外面に「富」墨書がある。

4枚重ねの坏群に隣接して出土した土師器甑14も，口縁部に小さな弧状の割れ口をもつ部分がある。その部分は1片が接合しているが，形状から打ち欠きされたものと考えられる。胴部下部に欠損があるが，確認面に近いため破損したものと思われ，本来は完形に近い土器であろう。床面上，倒位での出土である。

土師器坏7は割れもない全くの完形であるが，底部内面に「＋（×）」の線刻をもつ点で，1・8・9と共通する。出土位置も2・6の左側，左奥隅に近い位置の床面から倒位で出土している。打ち欠き土器ではないが，打ち欠き土器とセットを構成する土器と理解する。

須恵器坏4はカマド右脇，右奥隅の床面から正位で出土した土器である。遺存度が1/2弱である点が弱いが，底部内面に「＋（×）」の線刻がある点で，他の4点の坏と共通する。セットを構成する可能性のある土器としておきたい。

須恵器高台付盤11は口縁・体部が打ち欠きされているが，割れ口は丁寧に擦られており，上から見た平面形もほぼ円形であることから転用硯とした土器である。しかし，出入り口ピットの右脇，ほぼ前中央際の床面から倒位で出土した状況が気にかかる土器である。一部，円形を損なう欠損があるので，この部分が打ち欠きかもしれないが，断定し難い。転用硯であるが，最終的には祭祀的な意図をもって廃棄された可能性も考えられる。

以上の土器群のうち，打ち欠き土器はカマドを意識しているように思われる。また，7の位置は左奥隅が意識されている可能性がある。根拠がやや弱いが，4と11がセットの土器群であるならば，各々カマド・右奥隅と出入り口部が意識されているものと考えられる。

4枚重ね・2枚重ねの坏群及び土師器甑は通常このような状態で保管されていたのかもしれないが，墨書「富」や線刻，打ち欠きのあり方から，祭祀行為が実施された後にまとめられた可能性を考える。

③SI078（第120図）

Ⅳ期の竪穴住居である。打ち欠き土器はカマド周辺から多く出土した。土師器坏6はカマド火床部前側から正位で出土し，その前方の床面から須恵器1が正位で出土した。「小」線刻が2箇所ある土器である。土師器坏9はカマド右脇の床面上にある破損の無い完形の土師器甕17の上に重なって正位で出土した。灯明器で，底部外面に「十」墨書がある。土師器坏10はカマド前や右脇（右奥近く）の覆土上層から出土した。正位か倒位か不明である。人名墨書「廣麿」が体部外面にある。上層からの出土であるが，覆土は建物焼却に伴い，かなり埋め戻されていることから，床面出土のものとセットになる可能性が考えられる。

カマド周辺以外では，土師器坏11が左中央の壁際（南壁）床面から出土した。正位か倒位か不明である。「善」墨書が体部外面にある。出土位置は旧出入り口部でもある。底部穿孔された土師器坏8の位置は不明である。

以上の土器のうち，1・6はカマド廃棄に伴う祭祀に関わる土器と思われる。また，10は埋め戻しの後でカマド周辺に置かれた可能性が考えられる。一方，9の解釈は難しく，甕17とのセットは通常の土器保管状況とも言えそうである。しかし，灯明器で墨書や打ち欠きのある状況を重視すると，何らかの内容物を納めた17の蓋をした土器の可能性があるかもしれない。11の位置は，左辺中央か旧出入り口のどちらか

が意識されている可能性があるが，どちらとも決し難い。

④SI113（第128図）

Ⅳ期の竪穴住居である。土師器坏３点に打ち欠きがある。２はカマド右脇の床面からまとまって出土した13点の土器の１点である。12は中央部やや出入り口ピット寄りの下層から正位で出土した。15は左前隅寄りの下層から，正位であるがやや傾いて出土した。12・15は床面出土ではないが，覆土は中上層の４層以下が埋め戻されているので，床面と同等とみなすことができる。

13点の土器群は長方形の盆の上に置かれたような状況であり，すべて倒位で出土した。一部が２枚重ね・３枚重ねで，２以外は全く割れていない完形の土器である。２は２枚重ねの１点で，10の上から出土した。他の土器に対して小振りであり，祭器として専用に作られた可能性も考えられる。そうであれば，打ち欠きされる必然性があったといえよう。13点の土器の中には墨書が記入された土器が４点ある。内容は「上」２箇所，「富」，「法」の他，判読不明の２文字の墨書である。また，６・11に強い被熱痕跡があるが，他にも火を受けた可能性のある土器が見られる。

カマドは左側に寄っており，右側の床面にはスペースがある。土器群はこのスペースに，13点の土器群の出土状況と似たあり方で日常的に保管されていた可能性がある。しかし，完形の土器が竪穴住居から出土することはしばしばあるが，これだけまとまって整った状況で出土することは珍しい。使える土器がほとんどであるにもかかわらず，なぜ廃棄されたのだろうか。それは，この土器群が，人が使用することができない神仏に属する器に転化したためと考えられる。打ち欠きは神仏用の器であることの明示であり，墨書の「上」は神仏に進上する意味の「上」と考えられる。なお，火を受けた土器が見られることから，カマド右脇の盆上に並べられる以前に，火を使用する祭祀が行われた可能性がある。

15は先述したが，「息」墨書が体部・底部外面にある土器である。その上部に打ち欠きがあり，また「息」部分で２片に破壊されている。２片は近くから出土しているが，割れ口がともに竪穴中央部を向いている。出土状況からも破壊が意図的である可能性が高いといえる。

他の土器群を見ると，カマド上から正位で出土した土師器坏４は，ひびが入る程度で割れのない完形の土器である。この４と13点の土器群，そして12・15は竪穴住居やカマド廃棄等の祭祀行為に使用されたセットの土器群の可能性がある。なお，支脚に転用された土師器坏３・土師器甕18など他の土器が祭祀に関わっているかどうかは不明である。４はその位置と土器の状態からカマド神への供物が盛られた土器の可能性がある。13点の土器群も位置からカマドに関わることが考えられるが，その内容から，カマドだけではなく，竪穴全体や招福除災等の祭祀にも関わっていると考える。12・15はある程度埋め戻しがなされた後に置かれたものである。12は出入り口ピット，15は左前隅が意識されたのであろう。15の墨書から，祭祀に延命祈願の要素があることもうかがえる。

⑤SI108（第126図）

Ⅴ期の竪穴住居である。土師器坏１・２・４の３点が打ち欠き・破壊された土器である。１・２は灯明器で，１はカマド前の下層から正位で出土した。割れは底部の端であるが，破壊された土器に近いものがある。２はカマド右袖の上部から倒位で出土した。打ち欠きに加えて，底部から３片に割られたものと思われる。体部外面に「富」の線刻がある。４はカマド火床部中央から出土した。完全に破壊された土器で

あり，出土が倒位か正位か不明である。体部外面に横位の「富」墨書があるが，墨書部分も割れている。なお，1は下層出土であるが，最下層の3層が埋め戻されているので，埋め戻される過程でカマド前に置かれたものと考える。

打ち欠き・破壊された土器ではないが，遺存の良い土器が3点見られる。そのうち，土師器坏3は全く割れのない完形の土器で，体部外面に「小」の線刻がある。カマド右袖上部から倒位で出土した。また，土師器高台付皿11が出入り口ピット左側の下層から倒位で出土した。90%程度の遺存で，底部を境にほぼ1/2が割れている。破壊されたかどうか判然としない。中央部の床面からは，土師器小型甕12が倒位で出土した。ほぼ破損のない完形の土器である。

以上の土器のうち，土師器坏4点については，カマド廃棄等の祭祀に関わるものと考える。2・3は倒位であり，カマド神を封じ込める意図が考えられる。正位の坏については，カマド神に対する供物が盛られたり，あるいはその意思表示の土器と先述したが，1の場合は灯明器であり，難点がある。1及び2については，祭祀にあたって灯明が灯されていたことを考えた方が妥当である。

11・12については土師器坏4点のセットに加わることも考えられるが，断定し難い。また，SI108では，人名の「継国」と思われる墨書や「寺」墨書などがあり，墨書内容が豊富であるが，小片であるので出土位置が不明である。祭祀に加わる可能性も考えられるが，これも断定し難い。

⑥その他の竪穴住居

その他の竪穴住居は以上の5例ほど良好な出土状況がないが，幾つかの竪穴住居で意図的に置かれたと思われる例があるので，まとめて取り上げる。

Ⅱ期のSI044（第109図）では，カマド右脇の北東隅床面から打ち欠きされた須恵器坏2が正位で出土した。この土器の近くの床面から，打ち欠き土器ではないが，「麻」墨書のある須恵器坏1が正位で出土している。なお，1は底部穿孔された可能性があるが，断定し難い。また，出入り口ピットの左側床面から，「息」墨書のある土師器坏3が出土している。正位か倒位か不明である。

Ⅲ期のSI083A（第121図）では，非ロクロの土師器坏1が，カマド右袖上から正位で出土した。この土器の近くには手捏ね土器9があり，1の打ち欠きされた破片が接している。さらにその右側の右奥隅（北西隅）の床面からは，手捏ね土器7・8が出土している。

Ⅴ期では，SI002（第94図）で，打ち欠きされた土師器高台付皿17が，カマド火床部前側上方から正位で出土した。また，SI008（第96図）では，底部穿孔及び打ち欠きされた土師器坏3が，カマド右袖前？の床面から正位で出土した。SI057（第116図）では，打ち欠きされた土師器坏6が，出入り口ピット内から出土した。正位か倒位かは不明である。また，この竪穴住居から出土した土師器坏3は完形であるが，口縁・体部は5片の破片が接合したものである。接合状況が不自然であり，打ち欠きの可能性が高いと考えるが，類例の集積を待ちたい。カマド前側から出土したもので，「大」線刻が体部外面と底部外面の2箇所にある。

まとめ

これまで述べてきたことを，下記に箇条書きにまとめてみる。

○打ち欠き・穿孔及び破壊された土器は，Ⅱ期からⅤ期にかけてみられるが，Ⅱ期の内容がバラエティに

富むことから，先行する時期から存在した可能性が高い。下限は不明である。

○出土点数は64点であるが，実際はより多いと考える。

○出土する竪穴住居の棟数が多く，１棟単位では珍しい存在ではない。

○器種は，土師器坏・高台付皿，須恵器坏などの供膳形態を主体とするが，須恵器甕，土師器甑等の貯蔵・煮沸形態のものがわずかに見られる。

○穿孔された土器は少量であるが，Ⅱ期からⅤ期まで存在する。また，ほとんどの土器が，穿孔だけでなく，打ち欠きや破壊が行われている。

○打ち欠きは，口縁・体部の一部になされるものが最も多い。割れ口は整った弧状・「V」字状・「U」字状等の他，不整なものもある。整ったものの中には断面が擦られているものもある。

○打ち欠きが複合して大きくなったものや，２箇所に施されているものもある。複合しているものは，口縁部の遺存が少ないものもある。

○口縁部の全周を打ち欠くタイプのものもある。

○打ち欠きが底部に及ばないもの，及んでもわずかであるものが多い。多くの土器が，制限はあるものの器として使用することが可能である。

○体部・胴部に穿孔されたものも，上記と同様である。底部に穿孔されたものも，破壊がされていなければ，使用することが可能である。酒等の液体も孔をふさげば注ぐことも可能である。

○打ち欠きが底部中心近くまで及ぶものは，器機能の破壊を意図したものである。

○打ち欠き・穿孔・被破壊土器の４割に，墨書・線刻が見られる。この割合はより高まる可能性が強い。

○明らかに灯明に使われた土器が10点ある。約15%の比率を占める。

○打ち欠きの部位が，墨書・線刻の影響を受けるものがある。タイプとしては，主要部分に文字・記号が残るもの，文字・記号が打ち欠き部分にあるもの，文字・記号部分にかけて打ち欠きされるものがある。

○良好な出土状況例から，他の土器とセットとして使われる場合があることがわかる。セットの内容は打ち欠き土器以外では，墨書・線刻土器，何も手を加えられていない土器，灯明器の他，手捏ね土器や土師器甑まで加わる場合がある。

○セット中の各々の土器は，祭祀行為に際して，カマド内やその周辺，出入り口部周辺，隅部等，竪穴内の各所に意図して置かれる場合がある。

○祭祀において，火を使用する行為が実施されたものがある。

竪穴住居内への土器の配置について，若干付け加えておく。阿久津久氏は，カマド祭祀にあたって，墨書土器がカマド内の火床部中央やカマドの上に伏せて置かれることが作法として存在することを指摘している[10]。そして，そのような倒位の土器については，諸氏により，カマド神を封じ込める意味があると解釈されており[11]，筆者も若干言及したことがある[12]。船尾白幡遺跡の調査事例では，SI108の土師器坏２・３が，墨書土器ではないが，上記の作法に該当するものとして良い。また，カマドの前方となるが，SI024の土師器坏４も同様の理解ができるであろう。

カマド内及び周辺では，倒位の坏だけでなく，正位の坏も見られる。この正位の坏の中に，カマド神に対する供物を盛った土器またはその意思表示のための土器が存在すると思われる。ただし，カマド周辺から出土した土器の中には，単なる保管場所として置かれたものも含まれると思うので，出土状況や土器の状態への注意が必要である。しかし，土器に打ち欠きや墨書・線刻があり，出土位置がカマド上やカマド

内，またはカマド前方の床面等の場合は，供え物を入れた器となる可能性が高いと考える。このような供献と封じ込めはセットと考えられるのではないだろうか。カマド神が家族の功罪を天帝に報告するのを防ぐために，カマド神を饗応して引き留め，後に封じ込めるのである。本遺跡の例では，SI024の出土状況が，供献と封じ込めの双方を表している代表的な事例と理解する。

阿久津氏はまた，カマド祭祀に灯明器が使われる場合があることを指摘している。本遺跡でも，カマド内や周辺から灯明器が出土する例がある。なかでも，SI108の１・２は良好な出土状況を示している。カマド神が家族の功罪を天帝に報告するのは，晦日の夜である。カマド祭祀が実際に夜を徹して実施されたかどうかはさておき，カマド祭祀における灯明器はこのような信仰によって使用されたものであると考える。

注１　打ち欠きの状況について，図示していない土器がかなりあるが，今後はその状況を図示していかなければならないと考える。ただし，意図されない破損との区別が微妙な場合もあるので，確信をもてないときは，むやみに図にするべきではない。そのような場合は，写真の提示だけの方が望ましいと考える。また，補強剤の充填を行わない方が良い場合があるので，接合・復元段階から注意する必要がある。

２　船尾白幡遺跡から谷をはさんで西方に位置する鳴神山遺跡では，打ち欠きされた小破片がカマド内や周辺に，主要部分が隅部等に置かれた事例が見られる（Ⅱ110他）。小破片は単に廃棄されるだけでなく，祭祀行為に使用される場合がある。

３　口縁部の全周を打ち欠くタイプについては，十分な認識が無かったが，荒木志伸氏の論考に接し，山形県酒田市生石２遺跡等で存在することを知った。そこで，本遺跡においても再検討した結果，幾つかの土器を見出すことができた。

荒木志伸　1999　「墨書土器に見える諸痕跡について」『お茶の水史学』第43号

４　打ち欠きされた可能性のある土器は以下の通りである（第40表未掲載）。

SI003－17，SI009－11･31，SI010－１，SI023－１，SI032－１，SI035－21，SI037－２，SI047－５･７･10，SI051－18，SI053－４，SI057－３，SI059－１，SI102A－６･７，SI104－２

なお，第６章では第40表掲載及び上記土器群の他に，打ち欠きの可能性のある土器について言及している。区別は微妙であるが，以上の土器群よりさらに根拠が弱いものである。

５　萩原恭一　2000　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ　―印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡―』　（財）千葉県文化財センター

６　鳴田浩司・田形孝一　1999　『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡―』（財）千葉県文化財センター

７　鳴神山遺跡では，支脚に転用されていた土器が，カマド廃棄にあたり，打ち欠きされて再度据え置かれたと思われるものがある（Ⅱ110）。

８　高島英之氏は，実際には供物等が盛られる必要がないとしているが，ここでは供物の有無の存否を問わない。この点については今後の検討課題としたい。

高島英之　2000　「古代東国の村落と文字」『古代出土文字資料の研究』　東京堂出版

９　鳴神山遺跡Ⅱ157竪穴住居に同様の例がある。

10　阿久津久　1994　「カマドにみる祭祀の一形態」『日立史苑』７　日立市史編さん委員会

11　栗田則久他　1988　「馬場遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ（佐原地区１）』（財）千葉県文化財センター

田形孝一　1996　「集落から村落へ（１）―古代東国村落復元へのアプローチ―」『研究連絡誌』第47号（財）千葉県文化財センター

平川　南　2003　「屋代遺跡群木簡のひろがり―古代中国・朝鮮資料との関連」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館　初出は『信濃』第51巻第３号　1999　等

12　糸川道行　2003　「「佛」墨書土器の出土状況」『研究連絡誌』第64号　（財）千葉県文化財センター

第３節　SI024出土貝類の分析

（１）概要（第179図）

奈良・平安時代の竪穴住居SI024の東側隅から，小規模な貝層が検出された。セクション図を見る限り，貝層は東隅の直上付近から，SI024の凹地に向かって投棄されたと考えられる。１次堆積土（４層）の堆積後に，竪穴内に投棄されブロックを形成している。第１次堆積土はいわゆる三角堆積であり，SI024廃絶後にまもなく形成されたものと考えられる。さらに，貝層投棄直前もしくは開始と同時に，焼土も投棄しており，一部の貝層が焼土と共に堆積している（第179図No.４）。なお，投棄された貝殻を見る限り，風化は全体的に激しいものの，表面に焼いた痕跡は見られない。従って，この焼土は焼き貝作りに伴うものではなく，貝とは別個に投棄されたともとと考えられる。

（２）貝層サンプルの採集方法

貝層については，現地で肉眼による分層結果に基づき，断面図作成と併行し，層ごとに全量を採集した。いわゆる「層別全量サンプリング方式」を採用したことになる。なお，原則として人工遺物等についても，一括してサンプルに含めて採集した。

（３）分析方法及び結果

採集したサンプルに対しては，室内において充分に乾燥させた後，質量及び堆積を計量した。そして，9.52mm・4mm・2mm・1mm・0.5mmの金属フルイを用いて水洗選別を行った。再び充分に乾燥させ，フルイごとに採集物の分別作業を行い，動物遺体等の検出作業に勤めた。検出した動物遺体等については，貝片に至るまで可能な限り同定作業を実施した。採集物を分別し同定を行い，計量等を行った結果を第41表に示した。また，貝類の二枚貝綱については殻高・殻長・殻幅の，腹足綱については殻高・殻径の計測作業をそれぞれ行い，その結果を第181図及び第42表に示した。

なお，水洗選別の結果，貝類以外の動物遺体や植物遺体をはじめとして，陸産微小貝類すらも全く検出されなかった。つまり，2mm・1mm・0.5mmの各フルイ内の残存物は少量の同定不明貝片と土塊のみであった。従って今回はフルイサイズ別の選別結果は示さず，第41表のとおり全体を集計した形で結果を表すこととした。また，貝類については，各サンプルの最大個体数による組成比率グラフを作成した（第180図）。さらに，同定した貝類について計測可能なものについては全て計測を行った。このうち，二枚貝綱のシオフキ（*Mactra veneriformis*）とハマグリ（*Meretrix lusoria*）について，殻高の計測結果をとりまとめたものを第180図及び第42表に，殻高と殻長の相関関係を第181図にそれぞれ示した。なお，腹足綱については，計測可能個体数が極めて少ないことから，参考データとして以下に層ごとの，殻径の平均サイズ及び計測点数を記すことにする〔（　）内の数値は計測点数を示す〕。

No.１	オオタニシ〔*Cipangopaludina japonica*〕	24.8mm（１）
No.２	オオタニシ〔*Cipangopaludina japonica*〕	21.0mm（10）
	マルタニシ〔*Cipangopaludina chinensis laeta*〕	26.6mm（10）
No.３	オオタニシ〔*Cipangopaludina japonica*〕	19.2mm（４）
	マルタニシ〔*Cipangopaludina chinensis laeta*〕	18.5mm（３）
No.４	マルタニシ〔*Cipangopaludina chinensis laeta*〕	11.8mm（１）

（4）まとめ

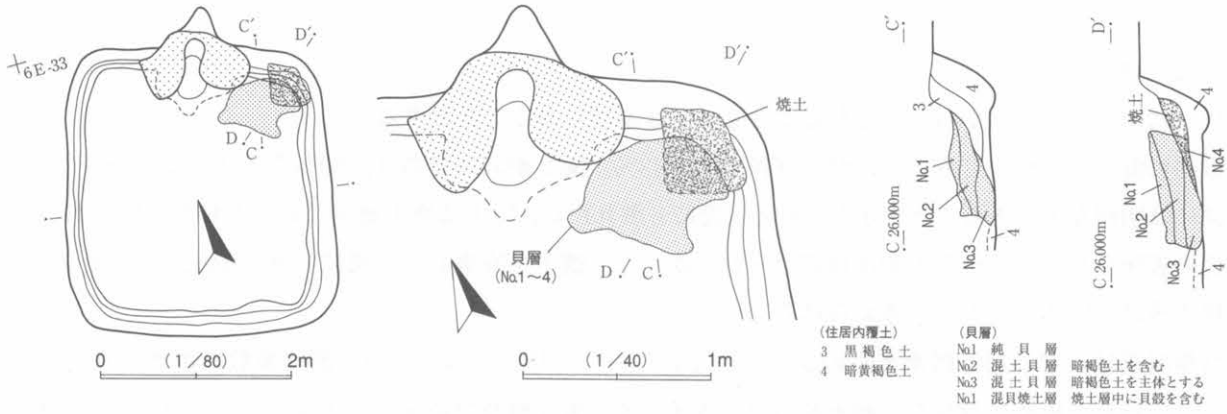
以上に示したデータから読みとれることを2，3挙げておくこととする。

最初に混土率についてみると，サンプルNo.1が43%，No.2が57%であり，80%を超えるNo.3及びNo.4との間には明確な差があることを示している。先にも触れたが，No.4は焼土層中に形成された貝層であるが，貝殻の表面を見る限り両者の相関は認められなかった。焼土を廃棄した直後に貝層が形成され，その一部が焼土層に食い込んだものと考えられる。

貝種組成は，どの層も鹹水産貝のシオフキないしハマグリで95%以上の圧倒的多数が占められている。そして，残りの極めて少量を，鹹水産のマテガイ・イシガイ科及び淡水産貝のタニシ科で埋めている格好である。なお，No.1・No.2・No.3はシオフキが60%～70%と卓越しているのに対し，No.4ではハマグリが84%となるなど，全く逆転した組成を示している。また，No.2・No.3では，タニシ科が4%前後見られるなど，No.1・No.4とは違った特徴を示すものとして注目される。また，極めて少数ではあるが，マテガイは各サンプル中に見られ，イシガイ科はNo.1に集中して検出されている。これ以外の貝種は，陸産貝を含めて全く確認できず，縄文時代のごく一般的な貝層と比較すると極めて限定的な貝種しかない貝層であると指摘できよう。

限定性については，貝のサイズを見ても同様である。まず，シオフキの大きさは，殻高の平均値が37㎜前後で，標準偏差が4.0㎜以下とばらつきも小さく，35㎜～39㎜の範囲内に集中して分布している（第180・181図）。一方，ハマグリの大きさは殻高平均値が30.2㎜～35.1㎜であり，シオフキよりも小さな値であるが，標準偏差が7.2㎜～9.4㎜とばらつきが非常に大きい。シオフキよりもかなり大きな50㎜以上のものも多く存在している（第181図）。しかし，殻高が20㎜以下のものはほとんど見られないなど，下限については限定性が強い傾向が認められる。対して上限は，大半が40㎜以内に収まるが，少数ながらもかなり大きなものまで連綿とした分布が見られる（第180図）。

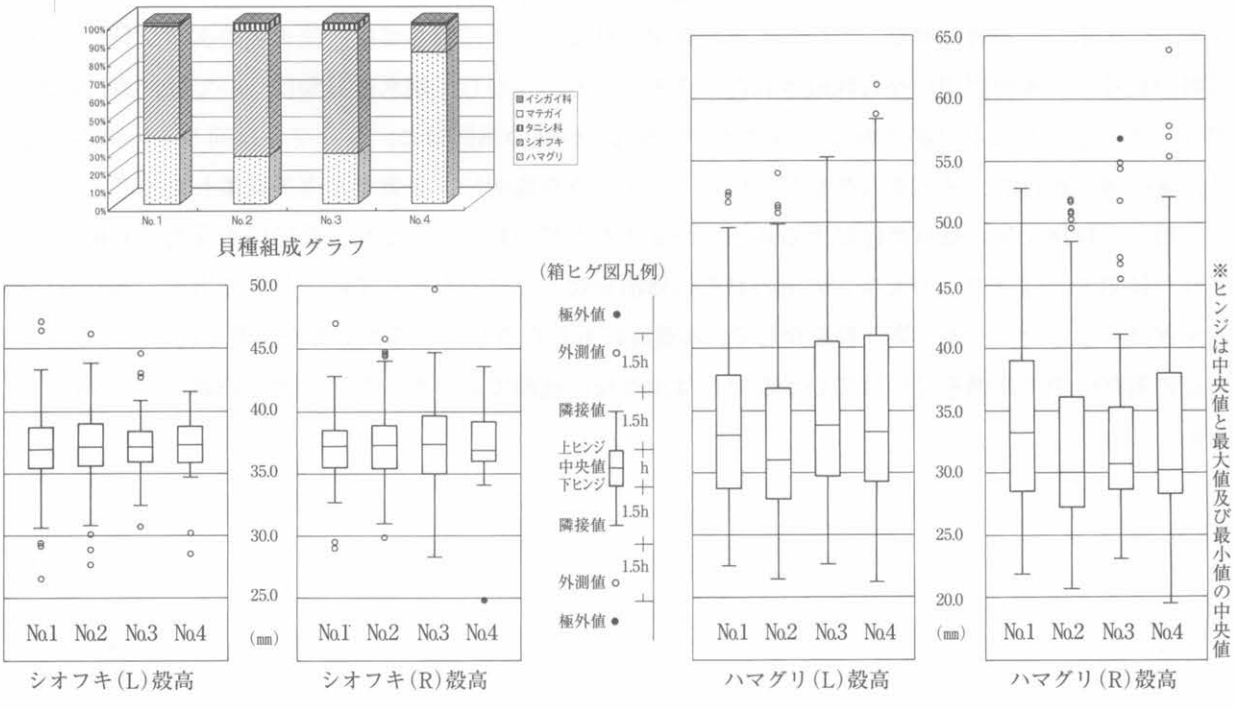
このような貝種及び貝の大きさに関する限定性から，少なくとも特定の大きさないしそれ以上のものを選択して入手し，調理後廃棄していることが想定される。入手に関しては，淡水産のタニシ科については近隣の低地部（水田周辺）から採取されたと考えられる。しかし，鹹水産貝類については，海に行かない限り入手することは不可能である。ハマグリは内湾で砂底の潮間帯に，シオフキは同じく内湾であるが，砂泥底の満潮線付近にそれぞれ生息している。このような場所に，廃棄者が直接採集したと考えると印旛沼を超え，陸路を使い東京湾岸に至るルートが妥当だと思われる。しかし，量的にも質的にも極めて限定された種類で，ほぼ均一の大きさの海の貝を印旛沼を超えて求めたにしては，今回の出土のあり方は限定的すぎはしないだろうか。第三者を介して，本遺跡にもたらされたと考える方が無難であろう。もちろん，周辺の遺跡の中で類例を見つけていかなければ出せない結論であるが，今後の検討課題として挙げておきたい。



第179図　SI024内貝層サンプル

第41表　SI024内貝層サンプル集計

サンプル名称	No.1			No.2			No.3			No.4		
水洗前体積	12300ml			24000ml			12600ml			15400ml		
水洗前質量	6000g			14260g			7600g			9900g		
混土率	43.0%			57.2%			82.9%			80.8%		
二枚貝綱	個体(L)	個体(R)	片	個体(L)	個体(R)	片	個体(L)	個体(R)	片	個体(L)	個体(R)	片
ハマグリ	124個	131個		166個	164個		55個	53個		164個	168個	
Meretrix lusoria	462.3g	550.8g	229.3g	664.4g	605.9g	139.8g	232.9g	230.3g	83.8g	770.4g	769.7g	99.8g
シオフキ	218個	195個		429個	429個		132個	60個		19個	29個	
Mactra veneriformis	890.3g	872.7g	360.9g	2158.2g	2131.4g	284.7g	375.4g	292.4g	40.8g	92.8g	120.5g	11.4g
マテガイ	1個	0個		1個	1個		1個	1個		1個	1個	
Solen strictus	0.2g	0.0g	1.3g	0.4g	0.2g	0.3g	1.0g	0.7g	0.5g	1.0g	0.7g	2.2g
イシガイ科種不明	4個	5個		1個	0個		0個	0個		0個	0個	
Unionidae gen.& sp.indet.	3.3g	4.9g	12.0g	0.24g	0.0g	2.7g	0.0g	0.0g	0.1g	0.0g	0.0g	0.0g
腹足綱	個体		片	個体		片	個体		片	個体		片
オオタニシ	1個			1個			4個			0個		
Cipangopaludina japonica (Martens)	2.6g		0.2g	14.9g		0.0g	4.0g		0.0g	0.0g		0.0g
マルタニシ	0個			11個			3個			2個		
Cipangopaludina chinensis laeta (Martens)	0.0g		0.0g	18.0g		0.0g	1.9g		0.0g	0.4g		0.0g
タニシ科種不明	0個			4個			0個			0個		
Viviparidae gen.& sp.indet	0.0g		0.0g	3.3g		7.5g	0.0g		8.2g	0.0g		0.0g
その他	合計			合計			合計			合計		
種不明貝片	30.3g			62.1g			27.9g			29.8g		
土器片	0.0g			10.1g			0.0g			0.0g		



第180図　SI024内貝層サンプル貝種組成及び計測結果

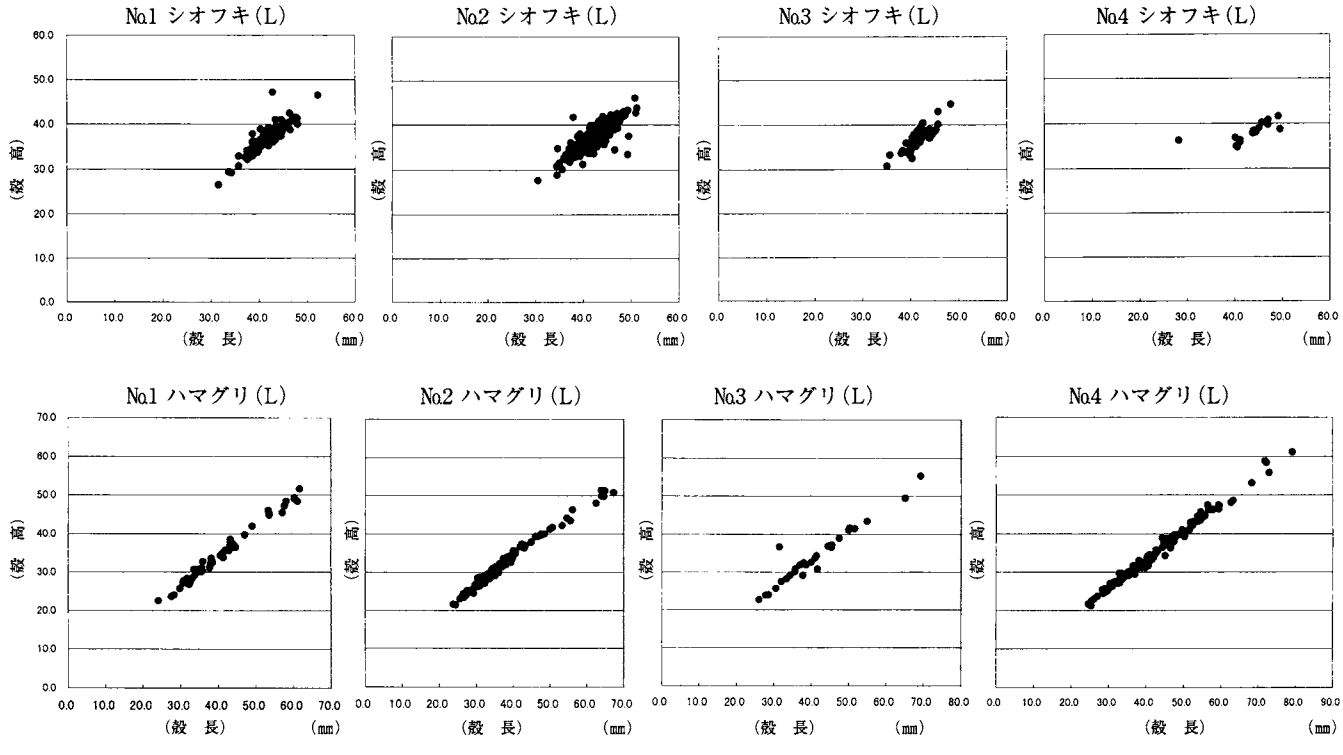
第42表　竪穴住居跡024貝層サンプル　貝類計測結果

No.1	シオフキ (*Mactra veneriformis*)						ハマグリ (*Meretrix lusoria*)					
	左殻(L)			右殻(R)			左殻(L)			右殻(R)		
	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅
標本数	130	102	129	118	93	118	74	64	72	76	59	73
平均値(mm)	36.9	41.6	14.6	37.0	41.9	14.4	34.7	40.8	10.4	34.9	41.6	10.7
中央値(mm)	36.9	41.6	14.6	37.2	41.9	14.3	33.0	38.9	10.0	33.2	38.5	10.1
標準偏差	2.9	3.2	1.5	2.5	2.7	1.3	7.8	9.7	2.7	8.0	10.4	2.7

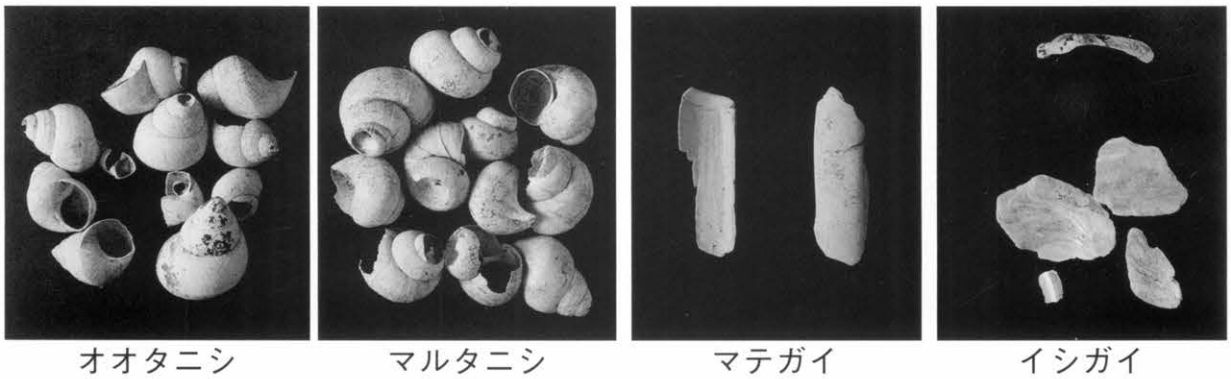
No.2	シオフキ (*Mactra veneriformis*)						ハマグリ (*Meretrix lusoria*)					
	左殻(L)			右殻(R)			左殻(L)			右殻(R)		
	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅
標本数	353	350	349	352	334	347	133	126	133	135	115	135
平均値(mm)	37.1	42.3	14.4	37.3	42.1	14.5	32.9	37.9	9.9	32.2	37.6	9.9
中央値(mm)	37.1	42.3	14.4	37.3	42.1	14.5	31.0	35.2	9.2	30.0	35.4	9.1
標準偏差	2.6	3.0	1.3	2.5	2.9	1.1	7.2	9.5	2.5	7.2	9.2	2.6

No.3	シオフキ (*Mactra veneriformis*)						ハマグリ (*Meretrix lusoria*)					
	左殻(L)			右殻(R)			左殻(L)			右殻(R)		
	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅
標本数	60	55	58	50	48	49	37	30	38	37	34	38
平均値(mm)	37.1	41.9	14.4	37.4	42.4	14.3	35.1	40.7	10.9	34.1	38.8	10.1
中央値(mm)	37.1	42.0	14.7	37.4	42.8	14.3	33.8	38.4	10.2	30.7	36.2	9.1
標準偏差	2.5	2.4	1.2	3.6	3.9	1.6	7.7	10.5	2.8	9.4	9.6	3.0

No.4	シオフキ (*Mactra veneriformis*)						ハマグリ (*Meretrix lusoria*)					
	左殻(L)			右殻(R)			左殻(L)			右殻(R)		
	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅	殻高	殻長	殻幅
標本数	18	16	18	21	21	20	129	114	126	75	114	126
平均値(mm)	36.9	68.6	14.1	37.2	42.3	14.3	35.5	42.9	11.4	30.1	43.2	11.5
中央値(mm)	37.3	43.9	14.6	36.9	41.5	14.5	33.3	40.5	10.5	30.2	40.4	10.6
標準偏差	3.4	5.0	2.1	3.8	4.7	2.0	8.6	11.2	3.1	3.7	11.4	3.4



第181図　シオフキ及びハマグリの左殻における殻高と殻長の相関



オオタニシ　マルタニシ　マテガイ　イシガイ

第182図　SI024出土の貝類

写　真　図　版

遺跡周辺航空写真（約1／7,000　昭和48年撮影）

図版2

1　調査区北部航空写真（北から）

2　調査区北部航空写真（東から）

1　調査区中央部
近景（南から）

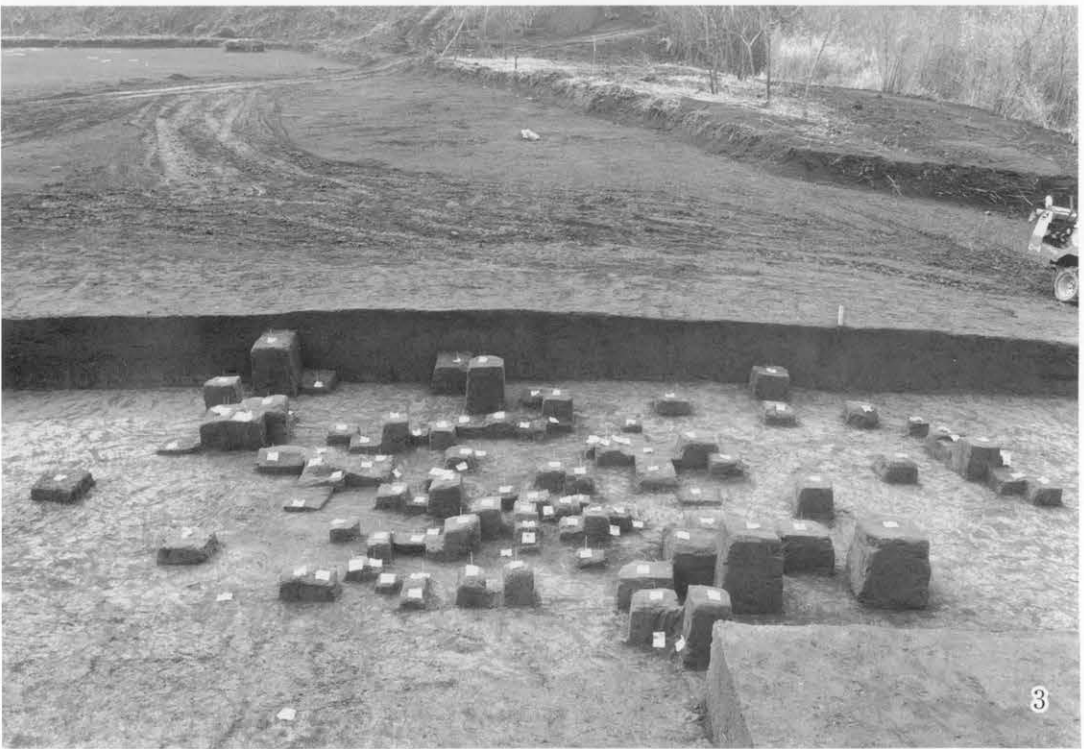
2　調査区南部
航空写真（南東から）

3　調査区南部
航空写真（北西から）

図版4

1　第1ブロック
（南から）

2　第3ブロック
（南から）



3　第4ブロック
（北から）

1　第5ブロック
（北から）

2　第6～第10ブロック
（西から）

2　第11・第12ブロック
（東から）

図版6

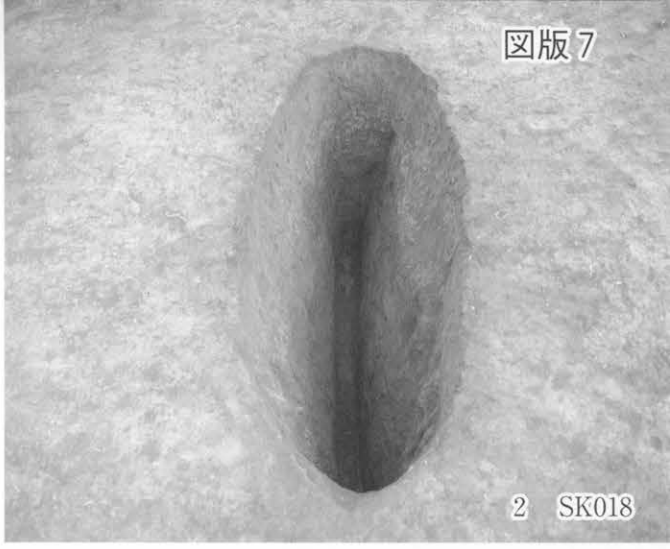
1　SK038

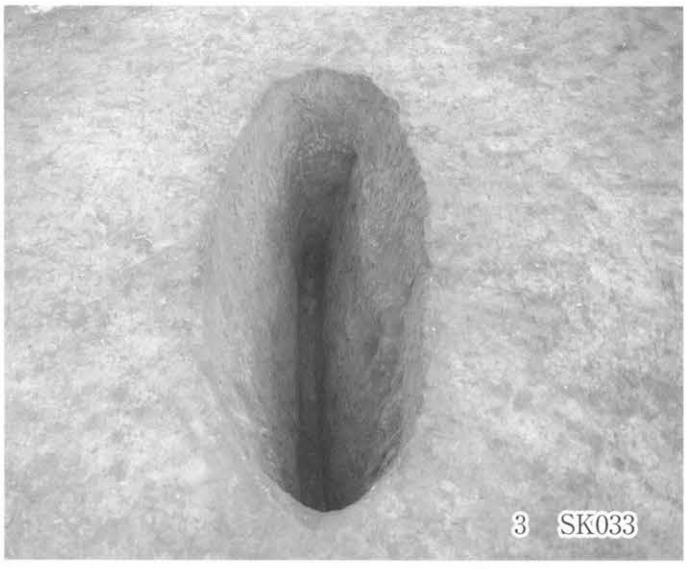
2　SK115

3　SK084

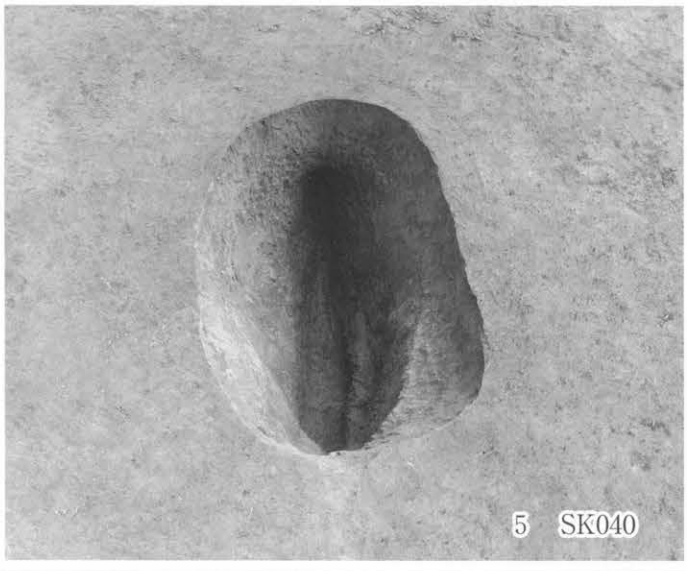
4・5　SK084遺物出土状況

1 SK006


2 SK018

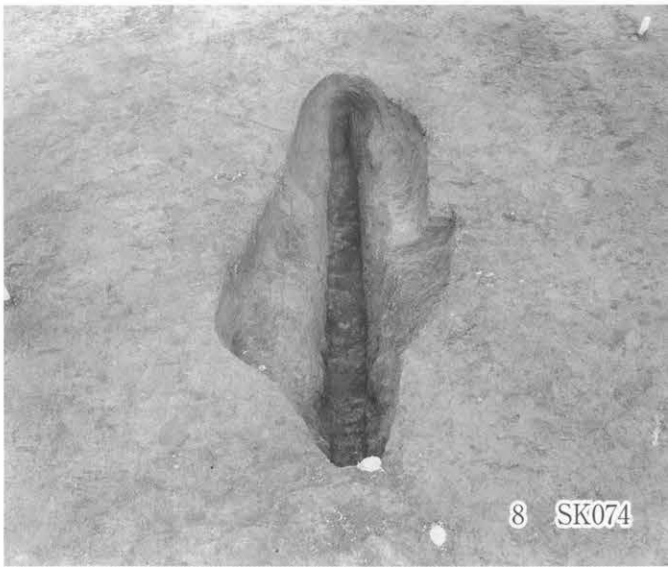

3 SK033

4 SK034

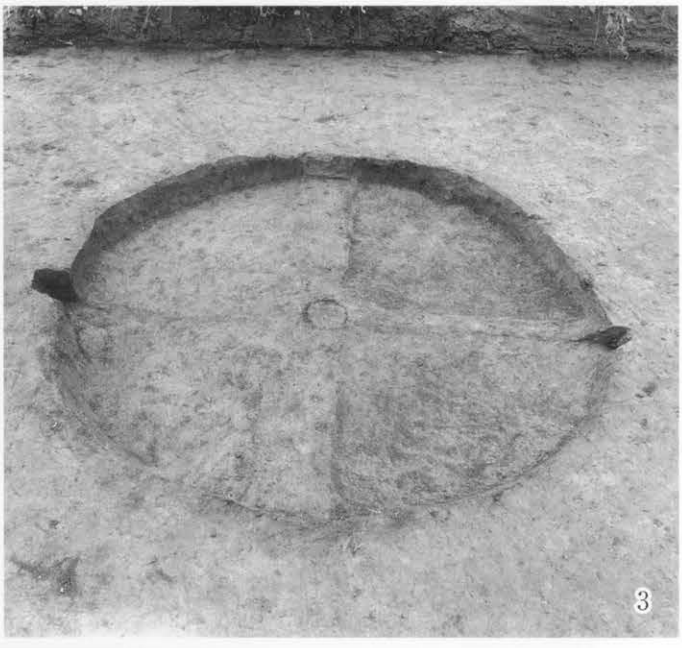

5 SK040

6 SK043

7 SK068


8 SK074

1　SI095



2　SI105

3　SI111

4　SI112

1　SI046

2・3
SI046遺物出土状況

4　SI072

図版10

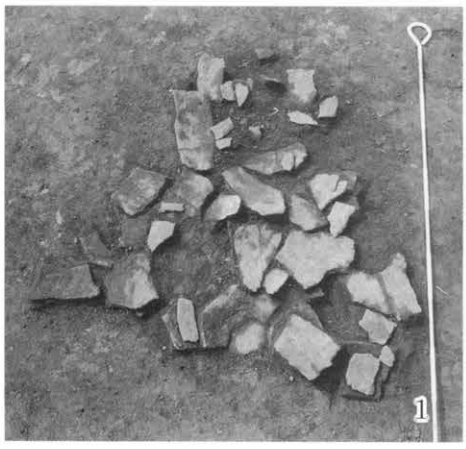
1　SI073

2　SI073遺物出土状況

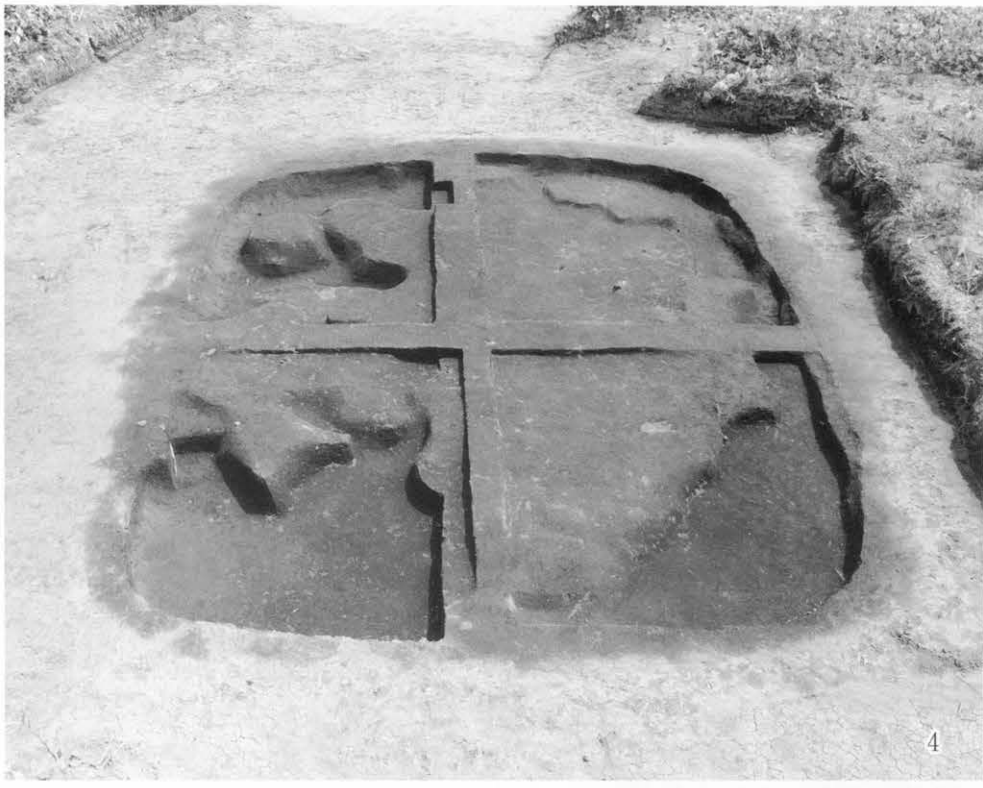
3　SI075

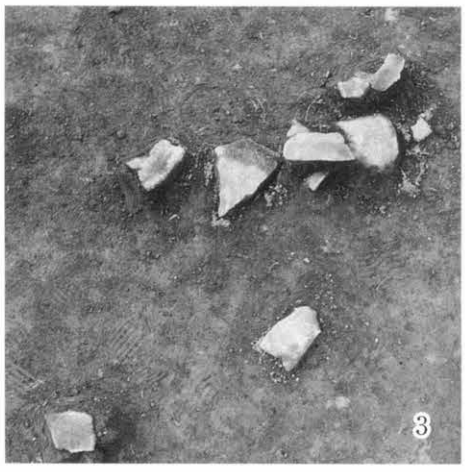
3　SI076

1・2・3・5
SI076遺物出土状況



4　SI076焼土堆積状況

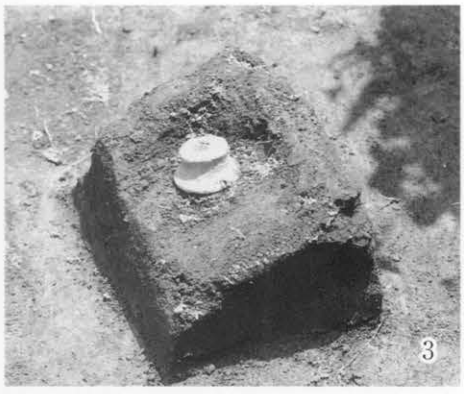


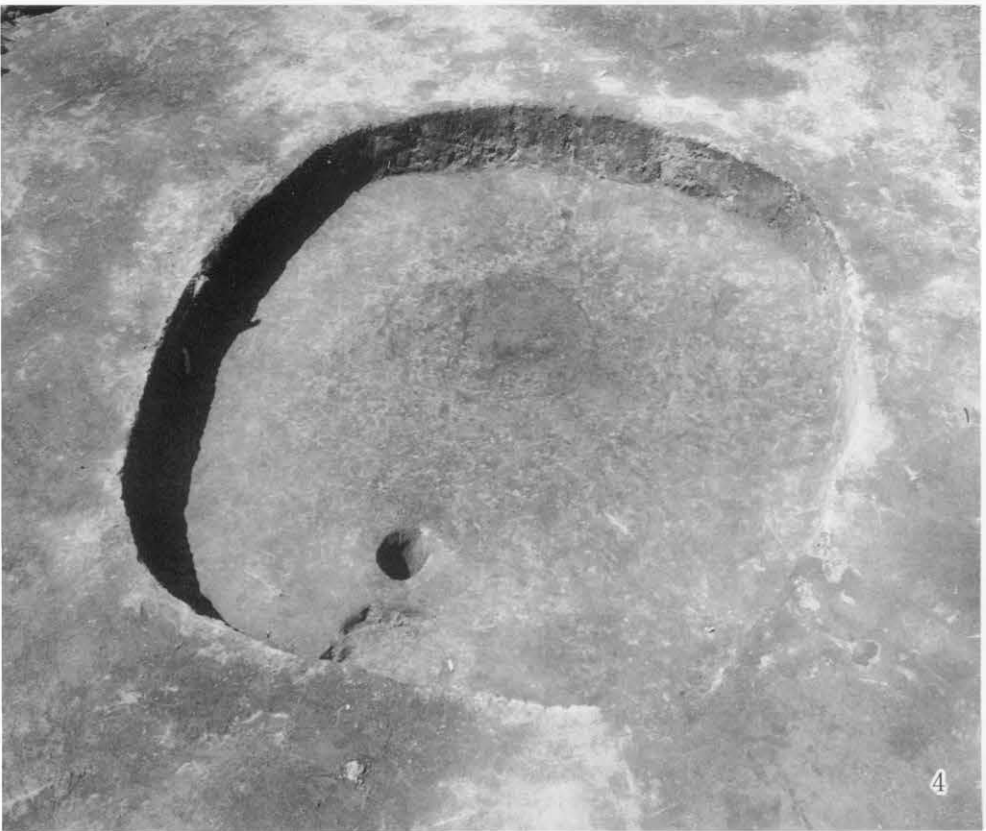


6　SI076土層断面

1　SI079

2・3
SI079遺物出土状況

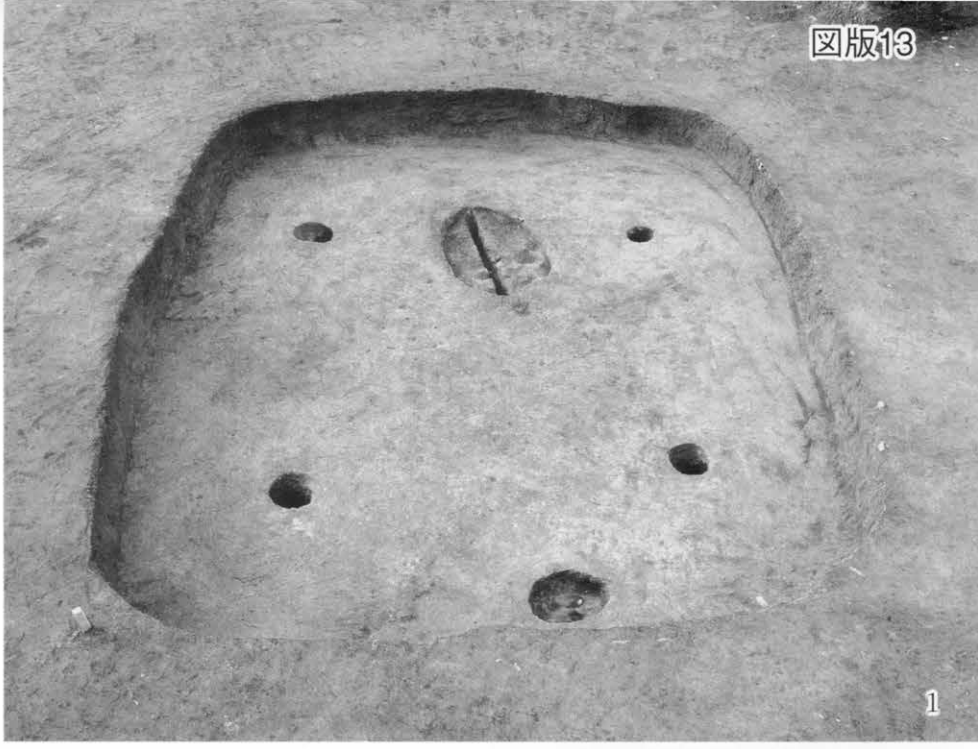




4　SI080

5　SI080遺物出土状況

1　SI081



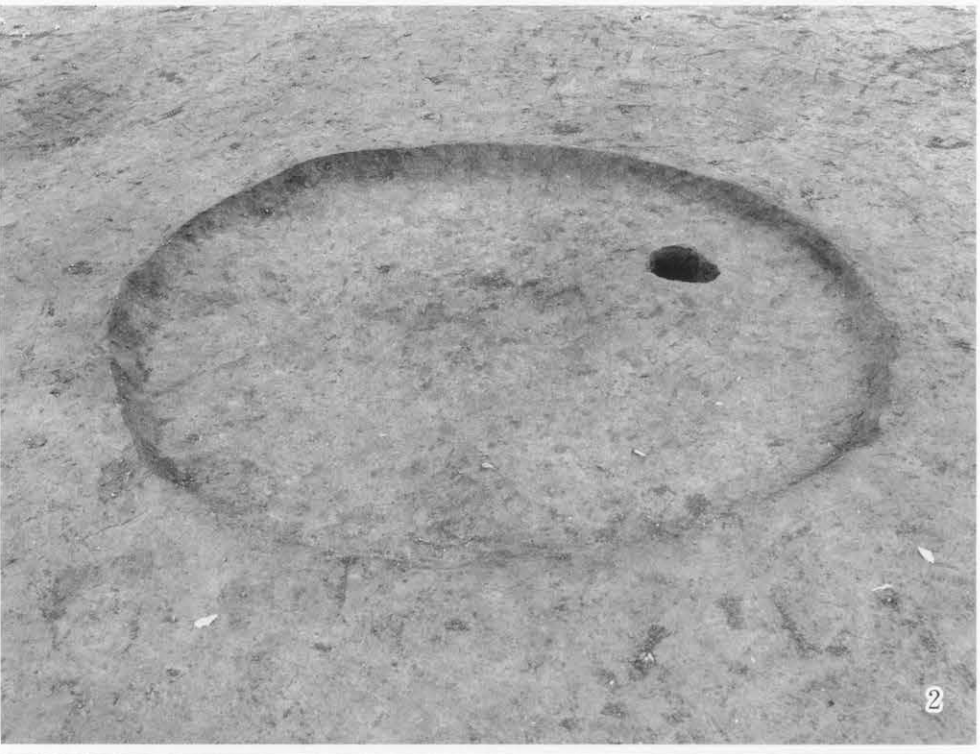
2　SI082遺物出土状況

3　SI082

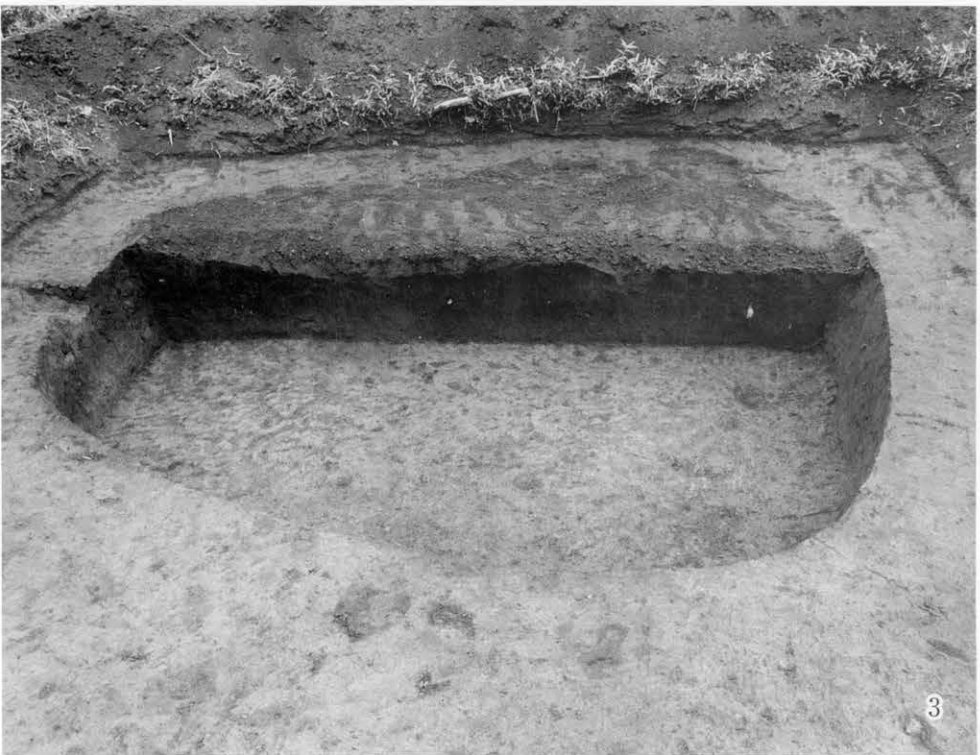
4　SI098遺物出土状況

5　SI098

1　SI100



2　SI107



3　SI109

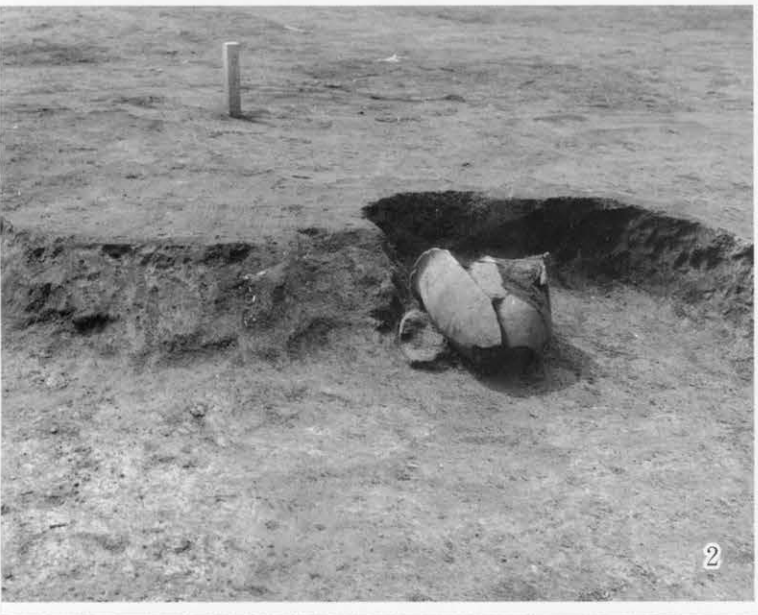
1　SI054　カマド

2　SI054

3・4　SI054出土遺物

5・6
SI054遺物出土状況

1　SI056

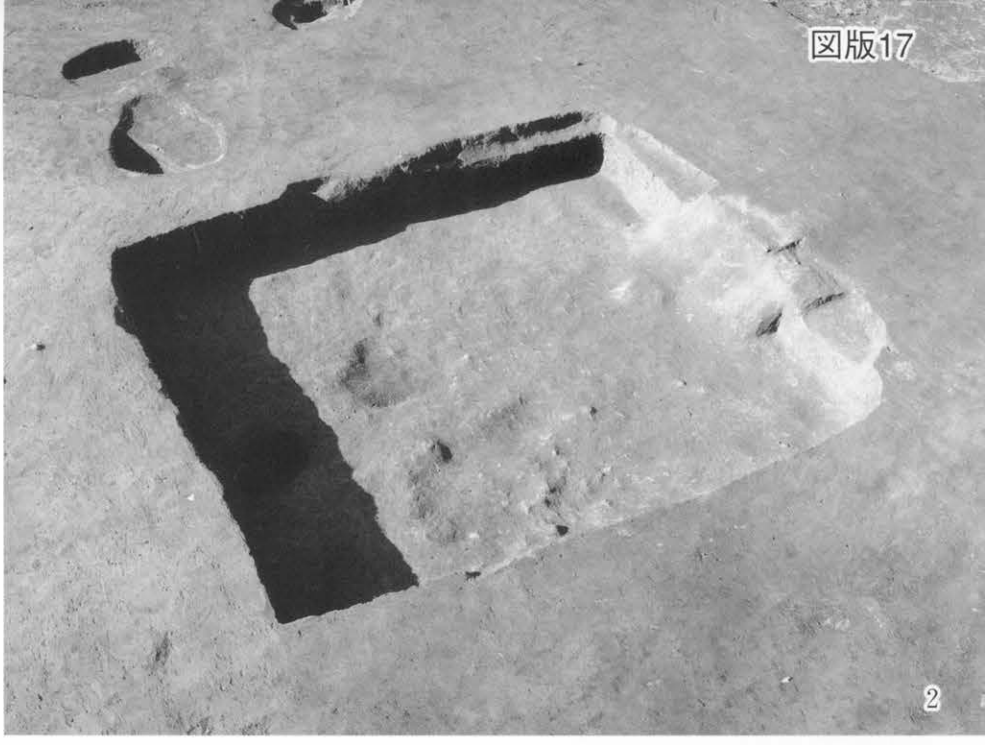


2・3
SI056遺物出土状況

4　SI133

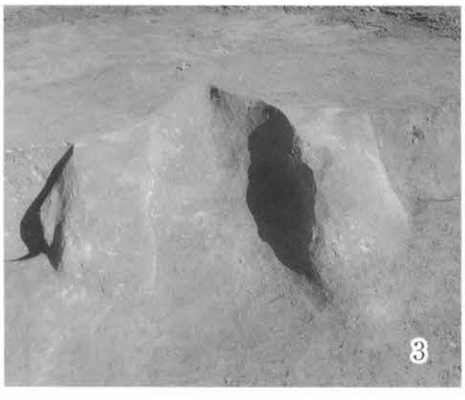
1　SI002カマド

2　SI002



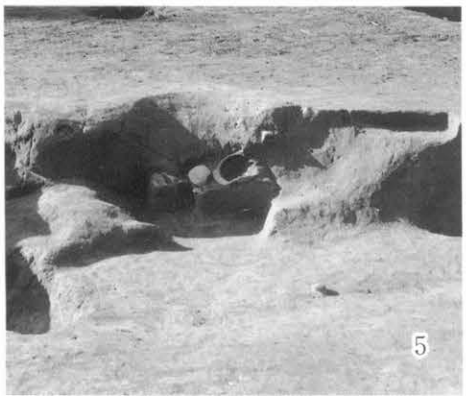
3　SI003カマド

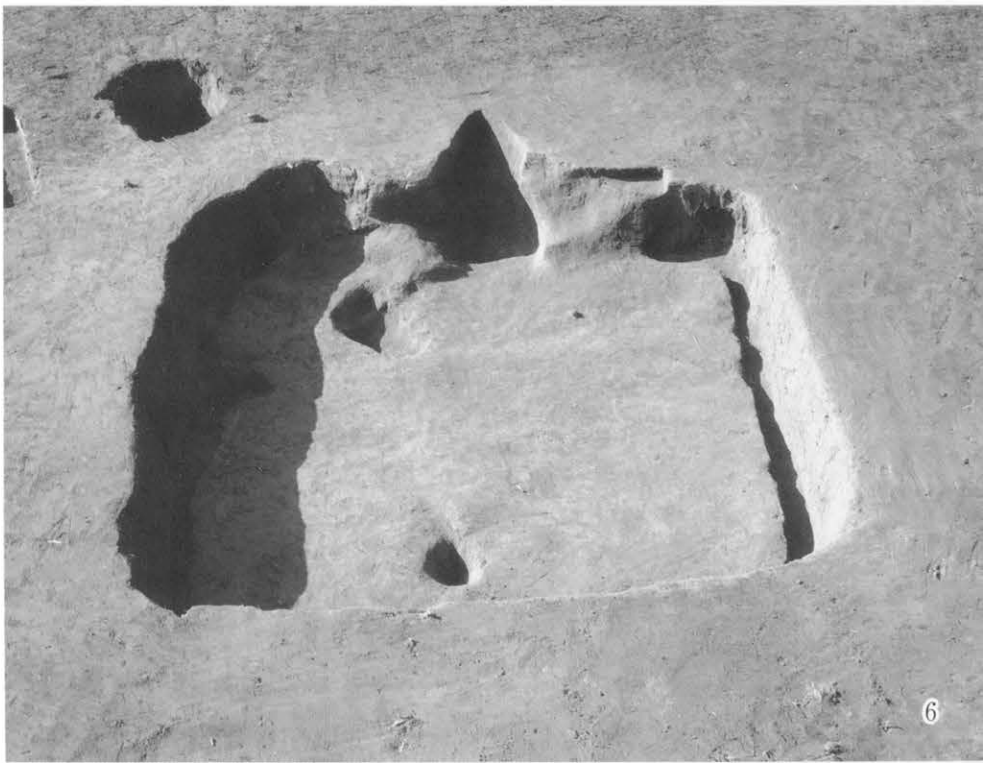
4　SI003



5　SI008カマド

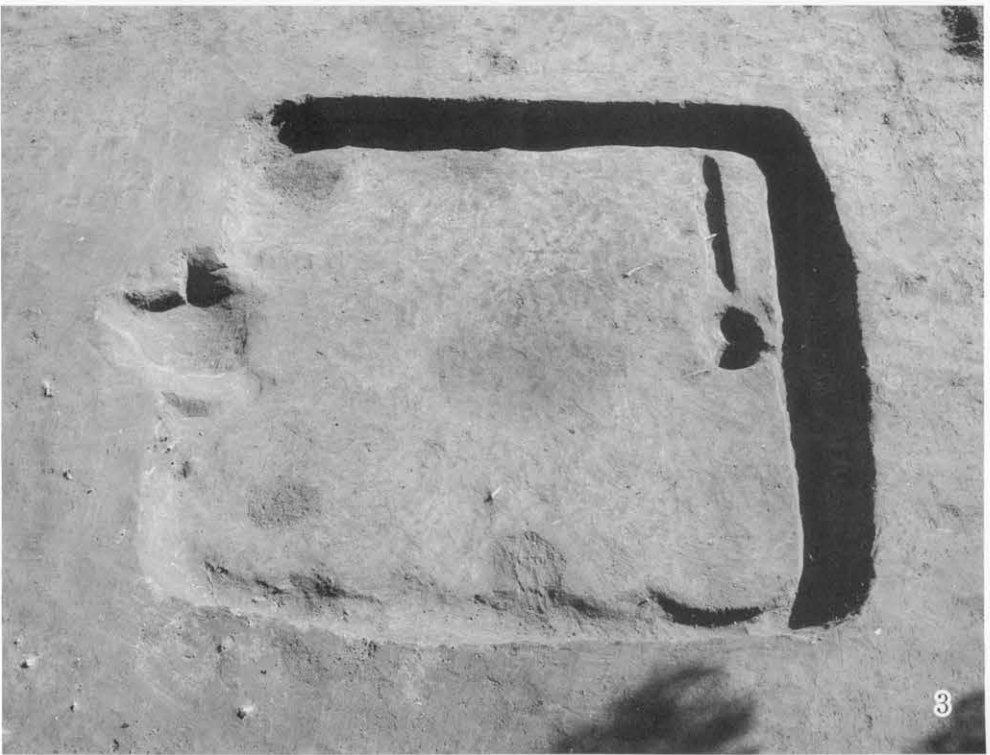
6　SI008





1　SI009

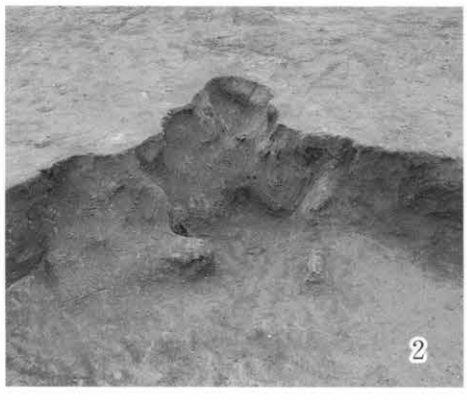
2　SI010



3　SI014

1　SI015

2　SI022カマド



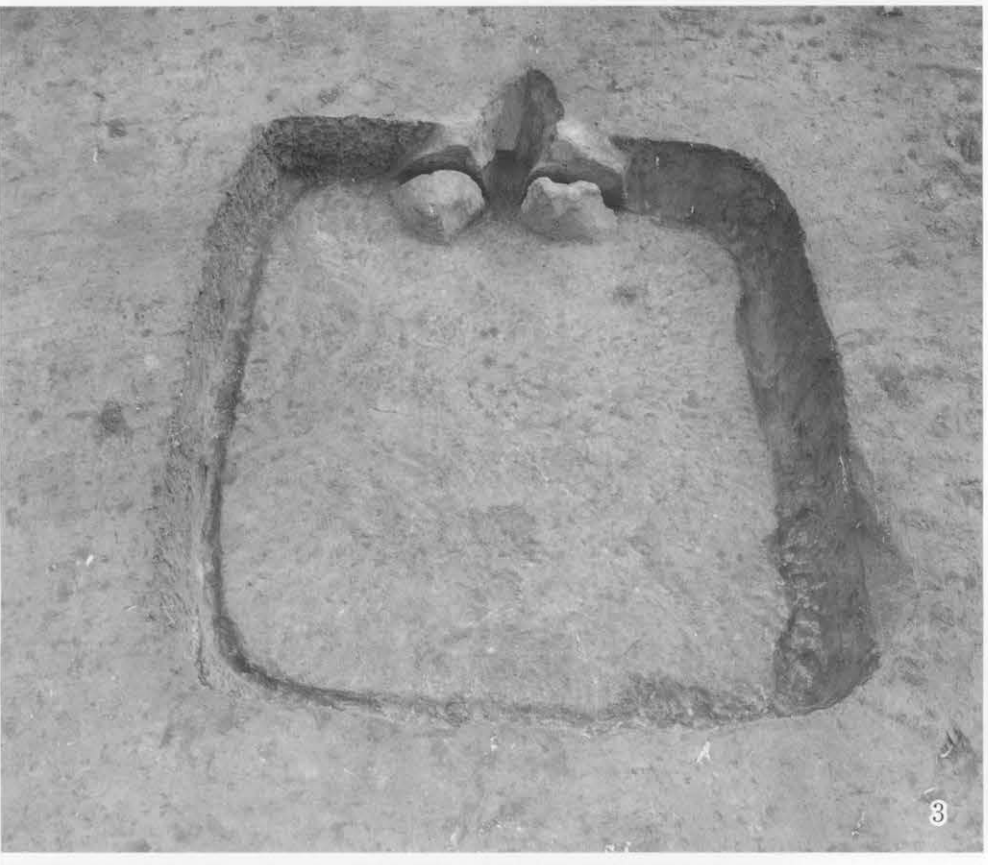
3　SI022

4　SI023

図版20

1

2


3

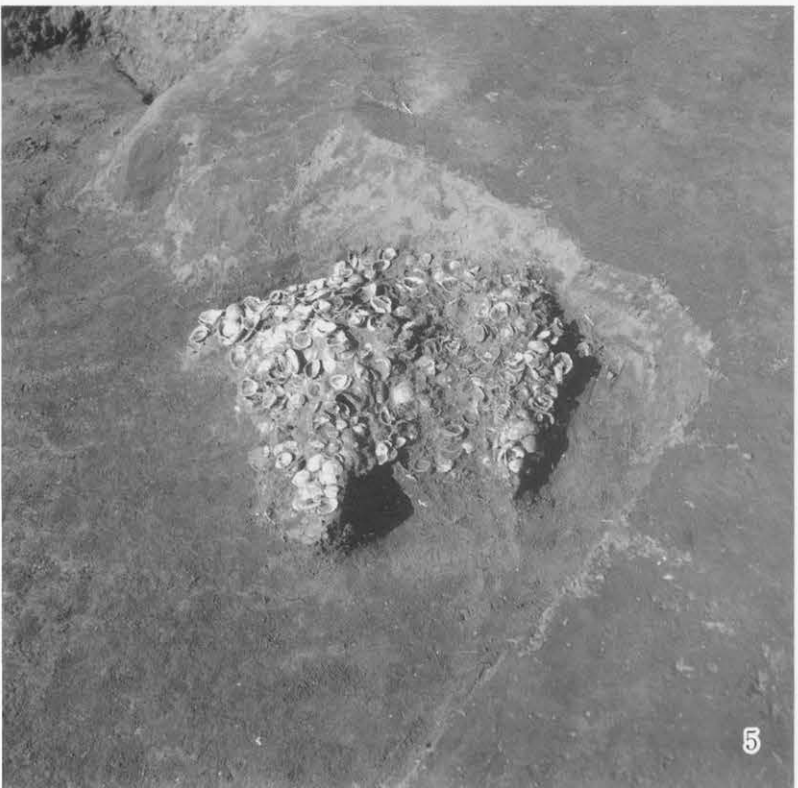
1　SI023カマド

2　SI023カマド遺物出土状況

3　SI024

4　SI024遺物出土状況

4


5

5　SI024貝出土状況

6　SI024貝・土器出土状況

6

1　SI025カマド

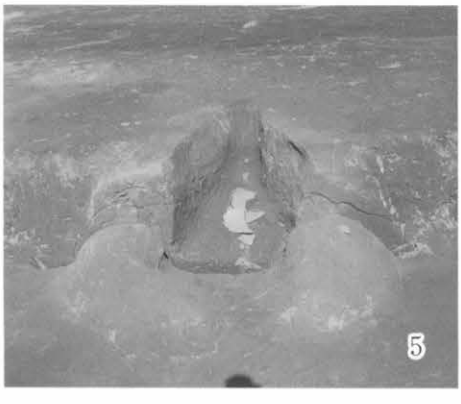
2　SI025

3　SI025カマド遺物出土状況

4　SI025カマド断面

5　SI030カマド

6　SI030



1　SI030ベッド状遺構

2　SI030壁柱穴

3　SI031

4　SI032

1　SI035カマド

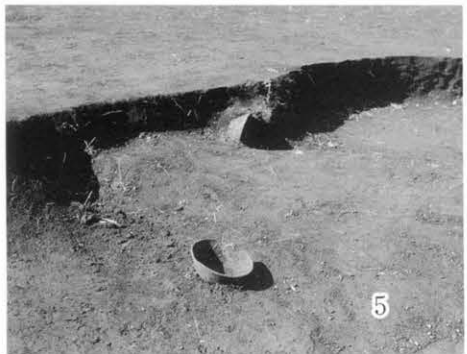
2　SI035

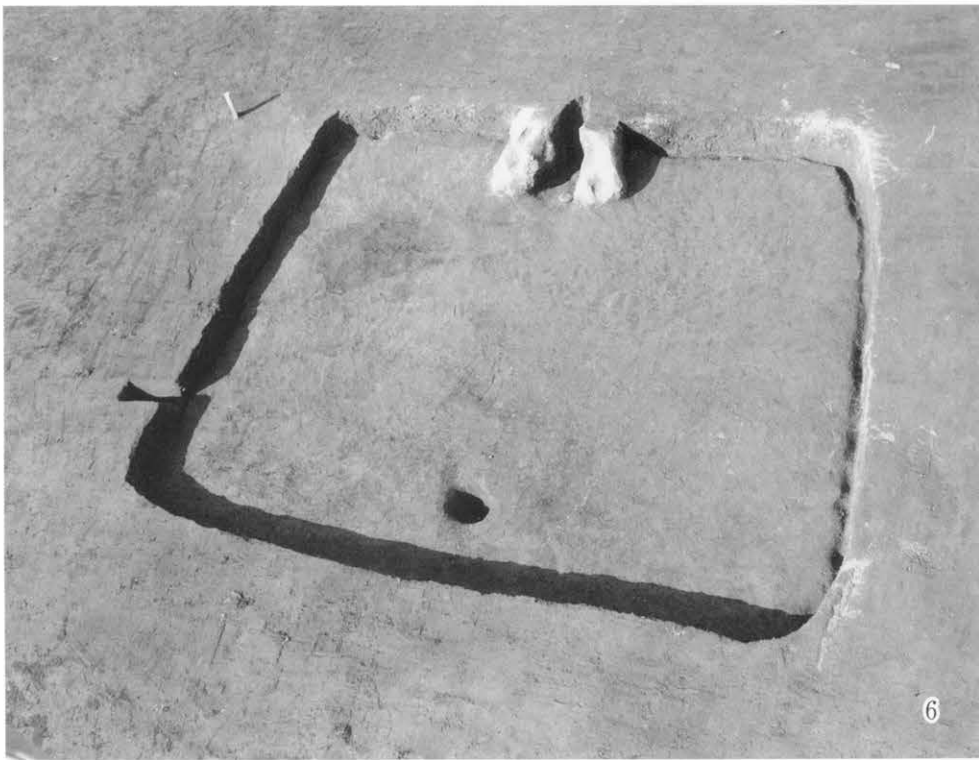
3　SI035カマド遺物出土状況

4　SI035遺物出土状況

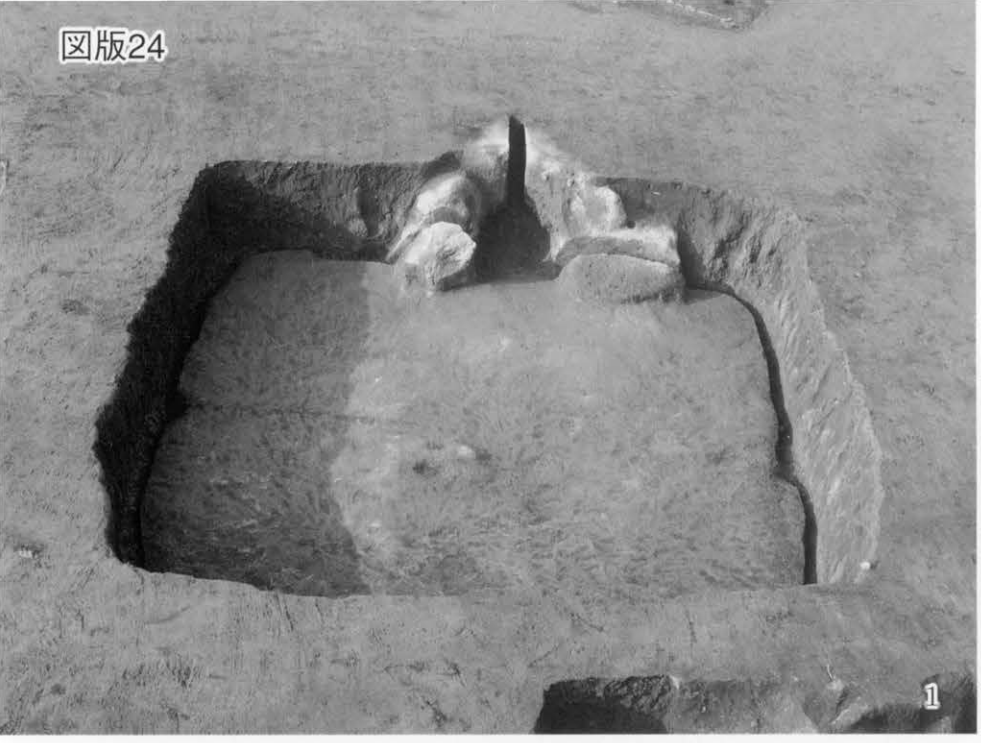
5　SI036遺物出土状況

6　SI036





図版24



1　SI037

2　SI037カマド

3　SI037遺物出土状況

4　SI039建て替え後

5　SI039カマド

1　SI039カマド遺物出土状況

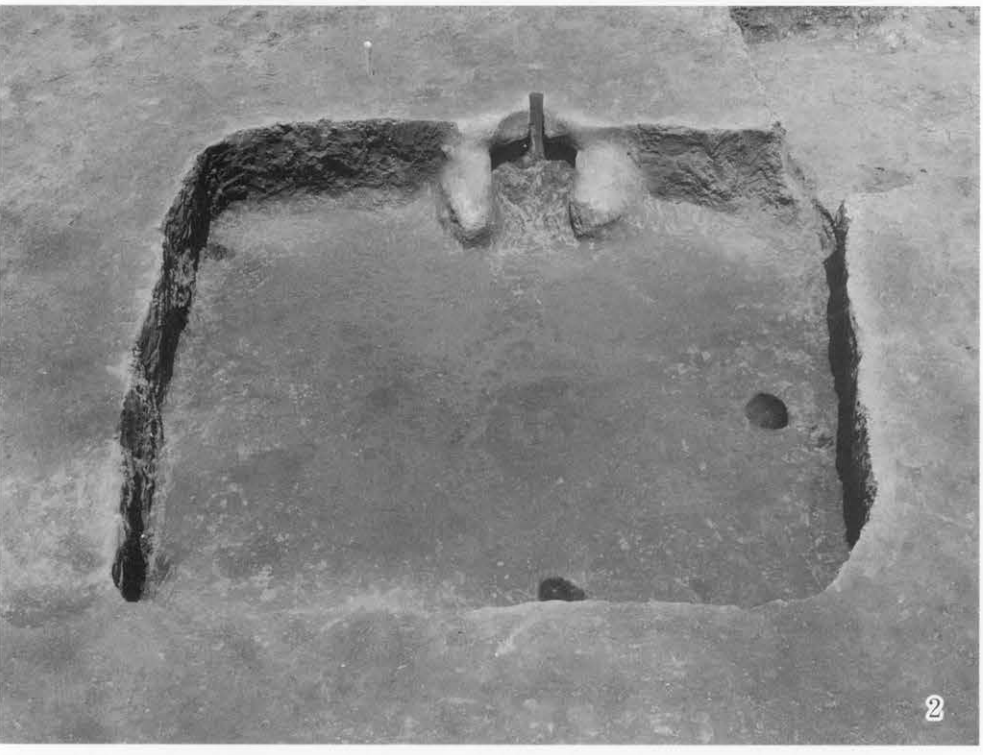
2　SI039建て替え前

3　SI041カマド

4　SI041

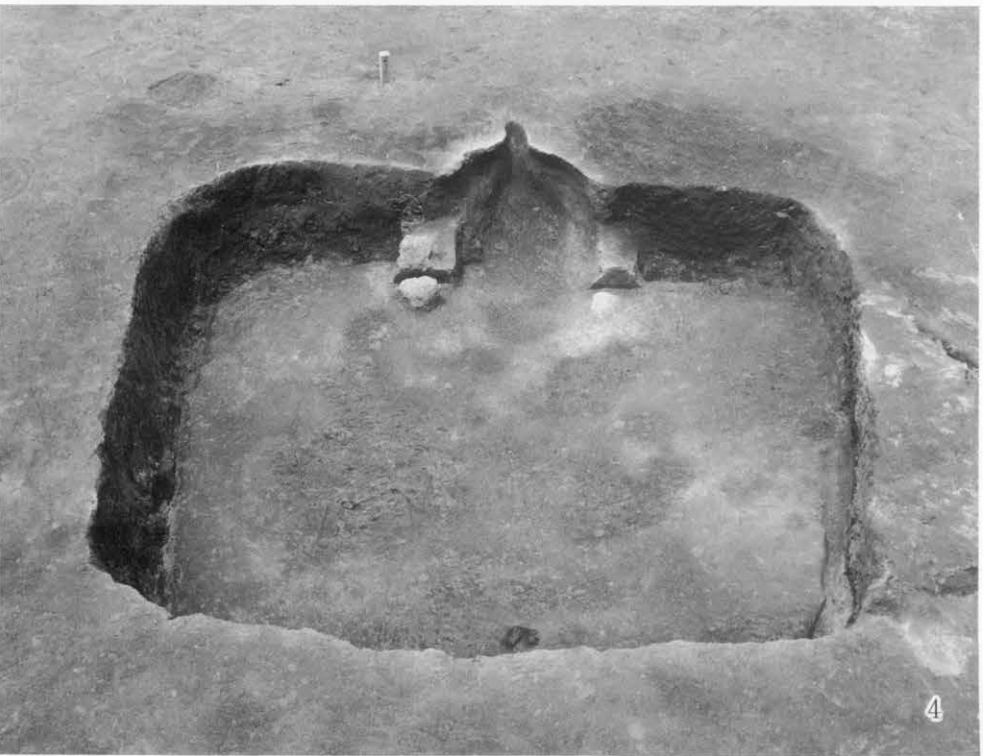
5　SI042

1　SI044



2　SI045

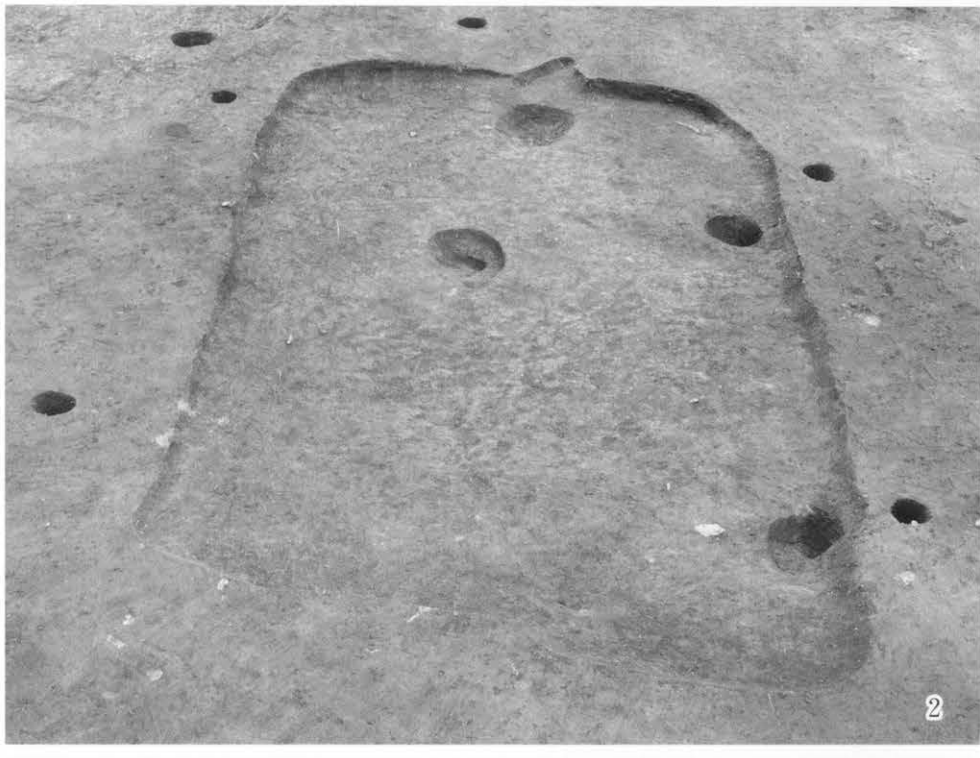
3　SI045遺物出土状況



4　SI047

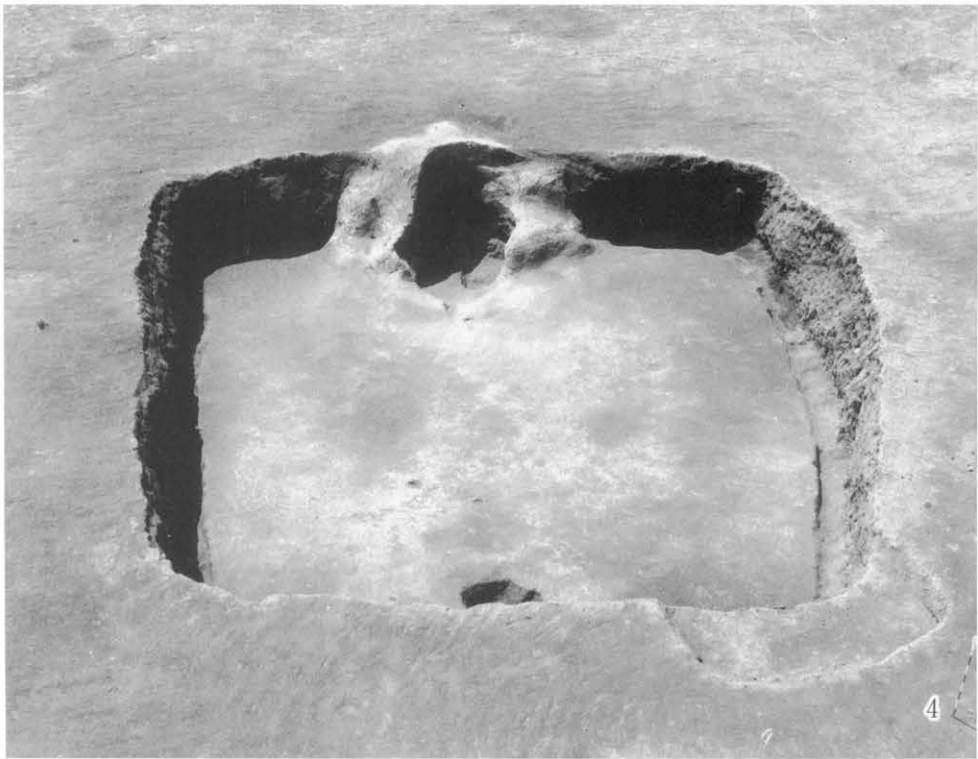
1　SI049

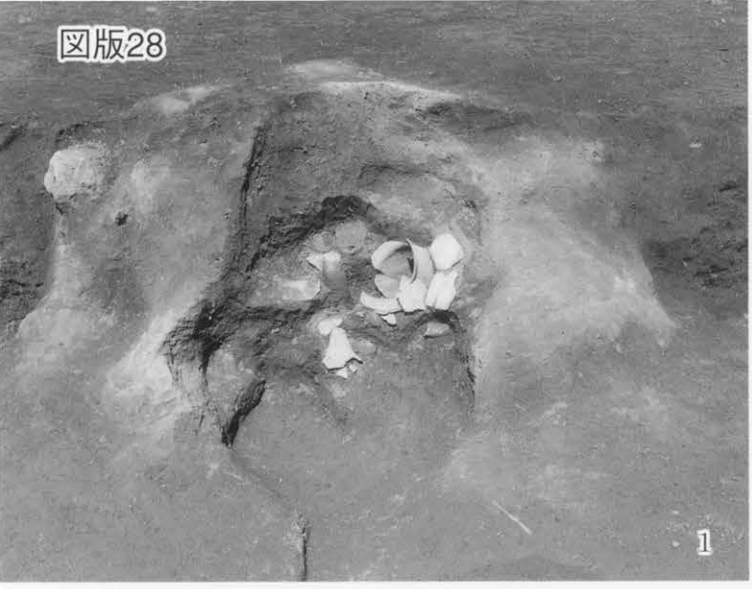
2　SI050

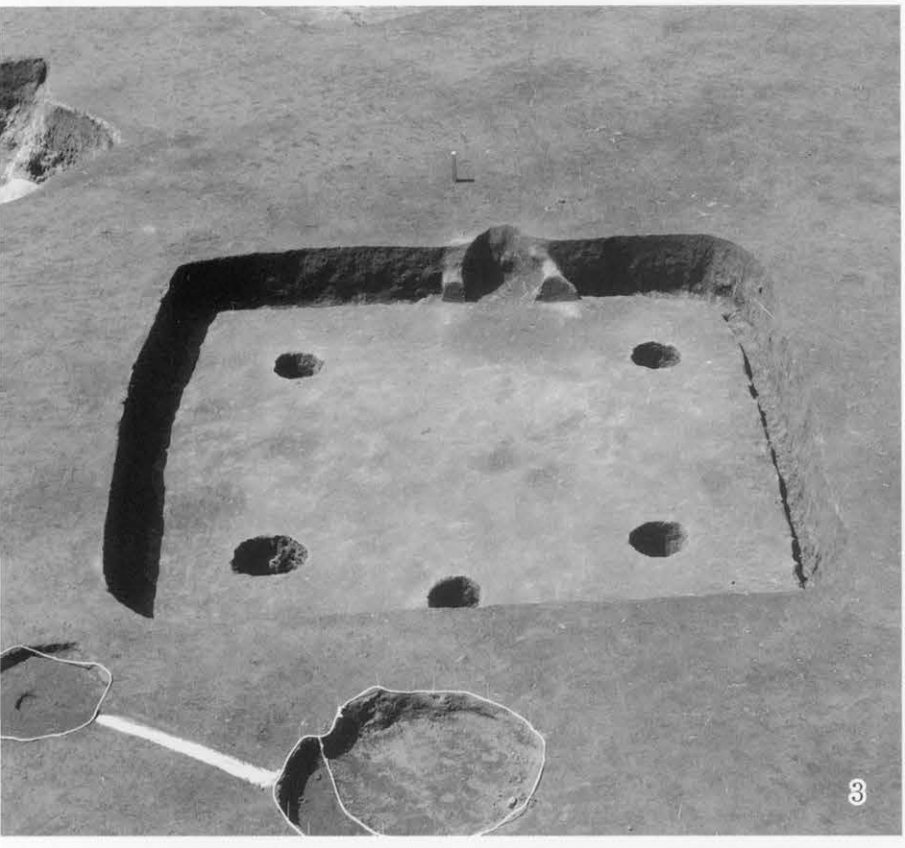


3　SI051カマド

4　SI051





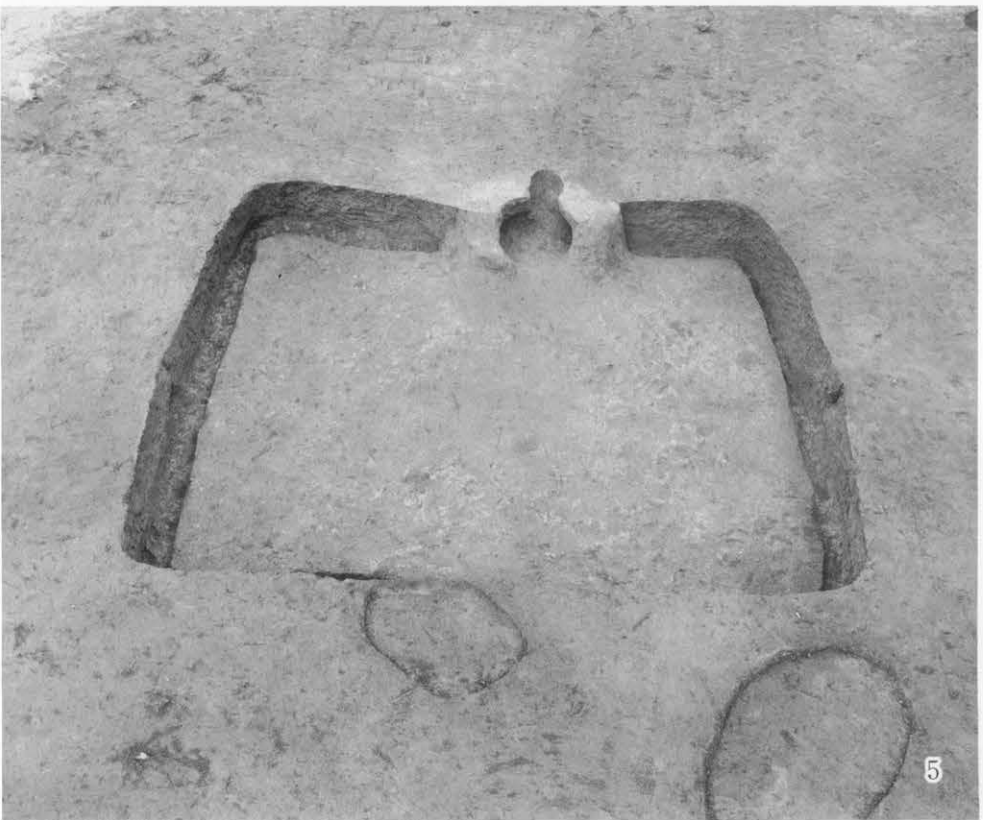


1　SI051カマド遺物出土状況

2　SI051カマド

3　SI052

4　SI052遺物出土状況



5　SI053

6　SI053カマド

1　SI055

2　SI057カマド

3　SI057

4　SI057カマド遺物出土状況

5　SI057遺物出土状況

図版30

1　SI058建て替え後

2　SI058建て替え前

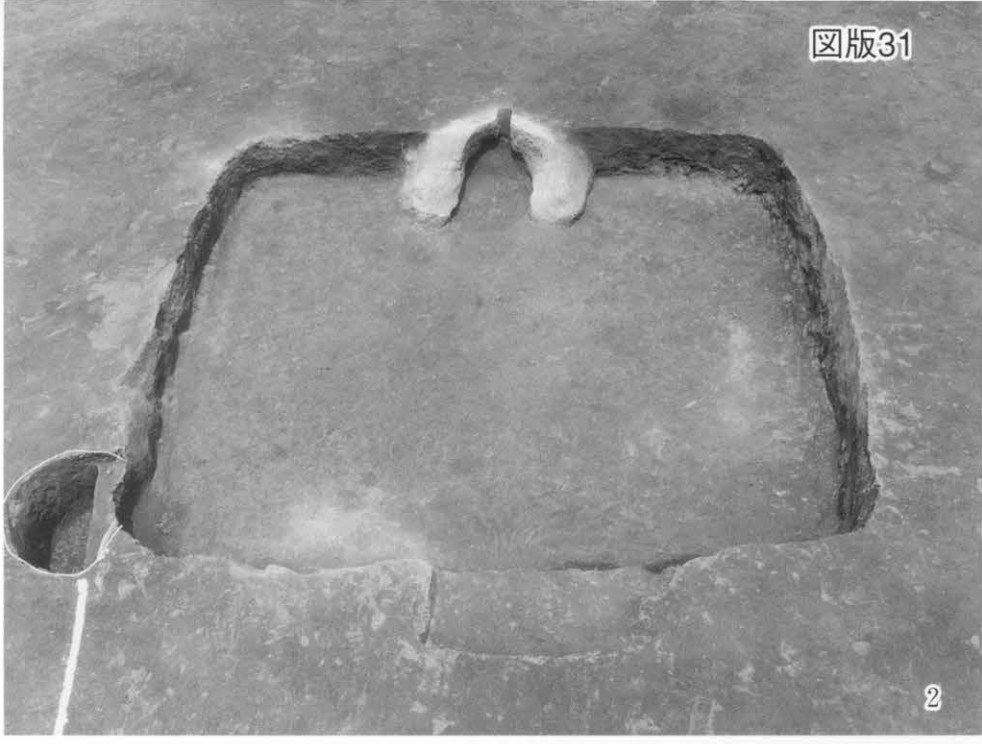
3　SI058遺物出土状況

4　SI058炭化材・遺物出土状況

5　SI058炭化材主要部分

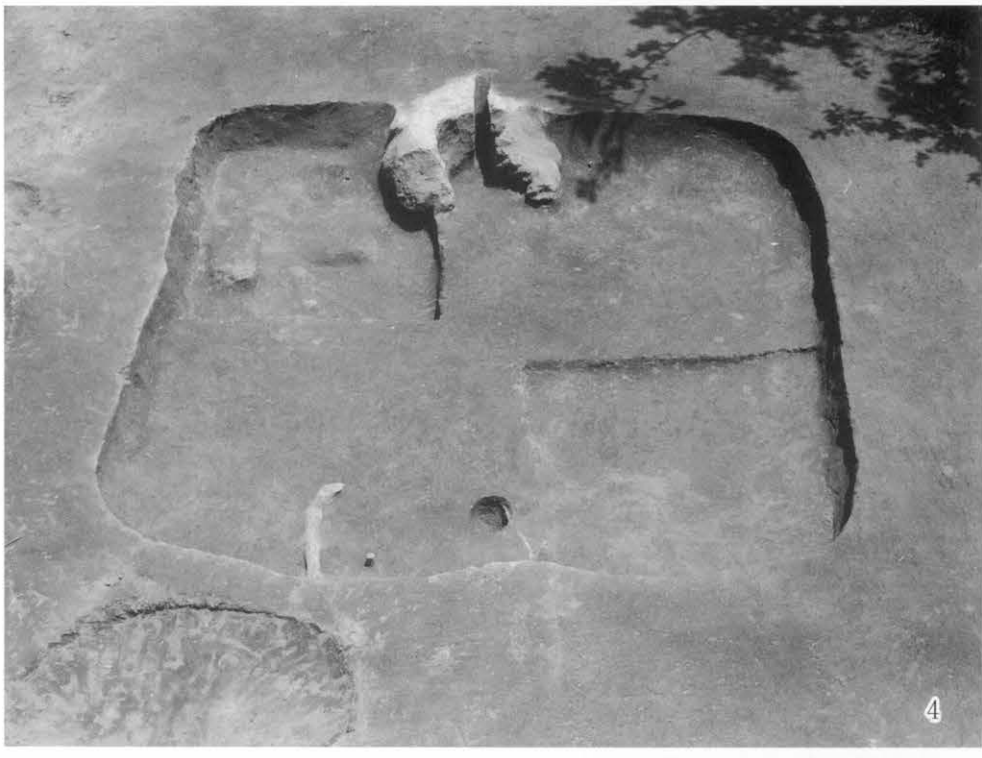
1　SI059カマド

2　SI059



3　SI061カマド

4　SI061



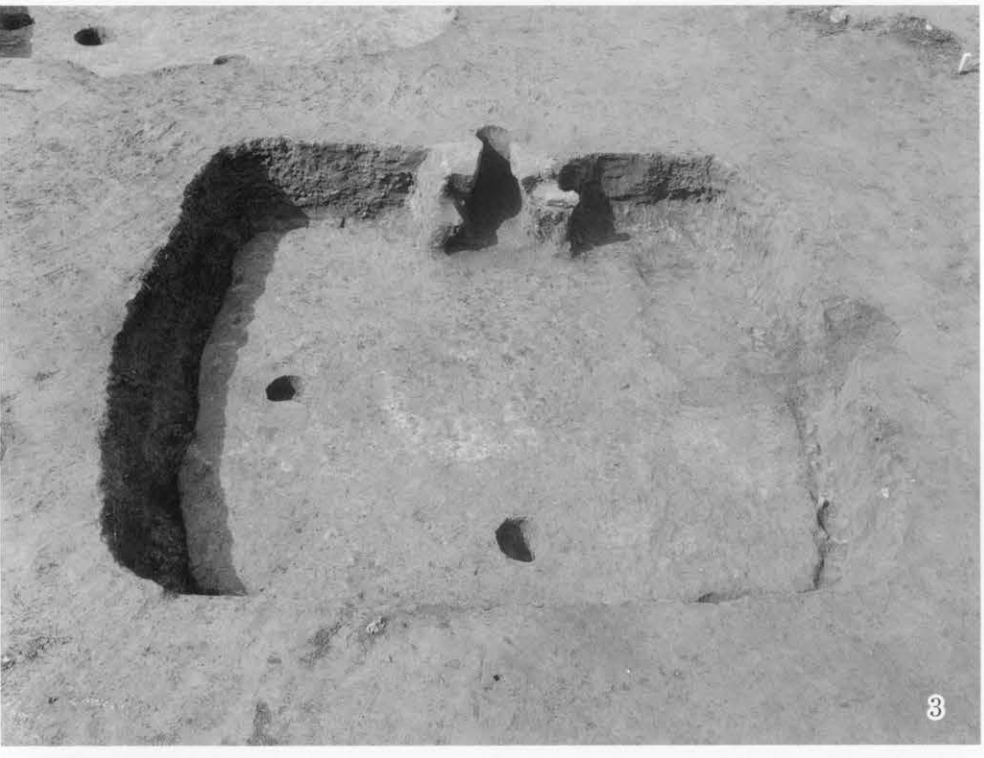
5　SI069遺物出土状況

6　SI069

図版32

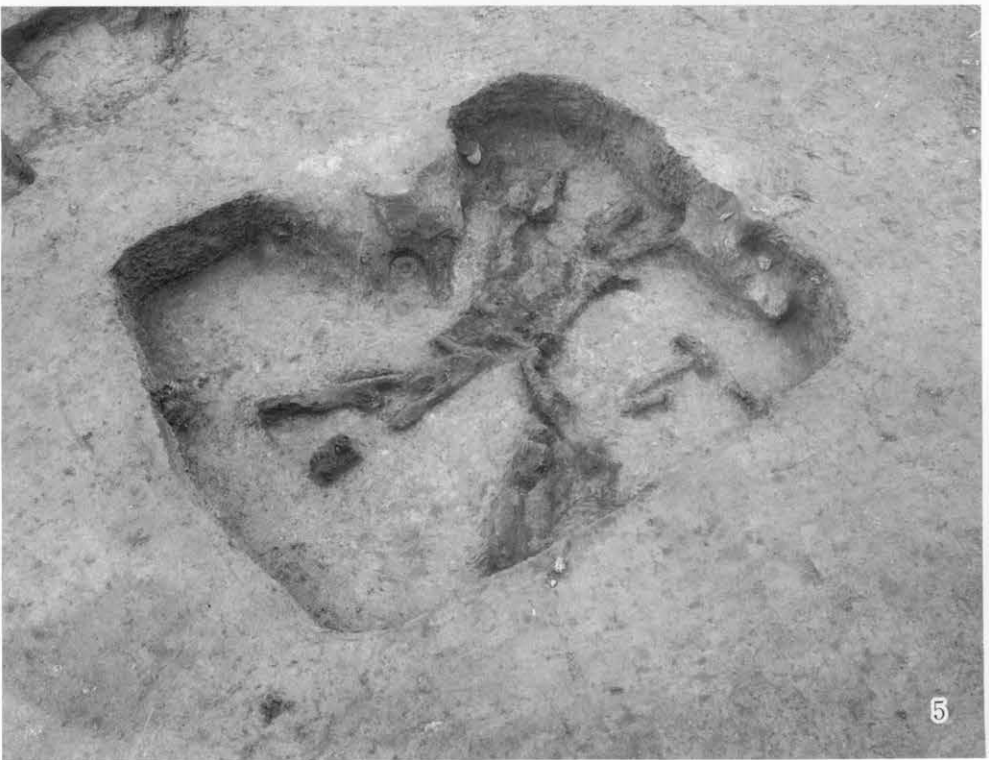
1　SI077

2　SI077カマド



3　SI078

4　SI078カマド

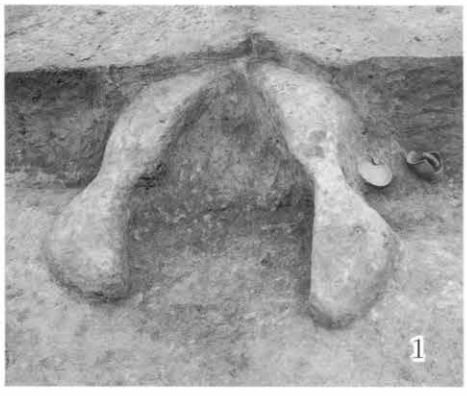


5　SI078炭化材出土状況

6　SI078炭化材（部分）

1　SI083Aカマド

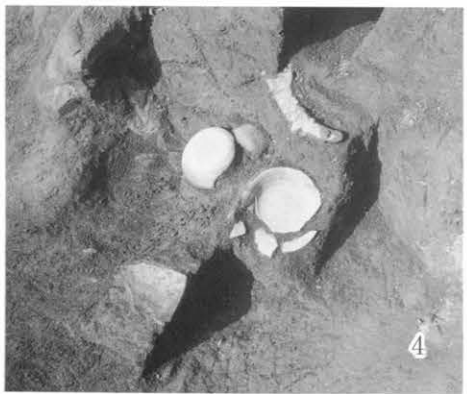
2　SI083A・083B



3　SI087

4　SI088　カマド遺物出土状況

5　SI088



1　SI092

2　SI093A

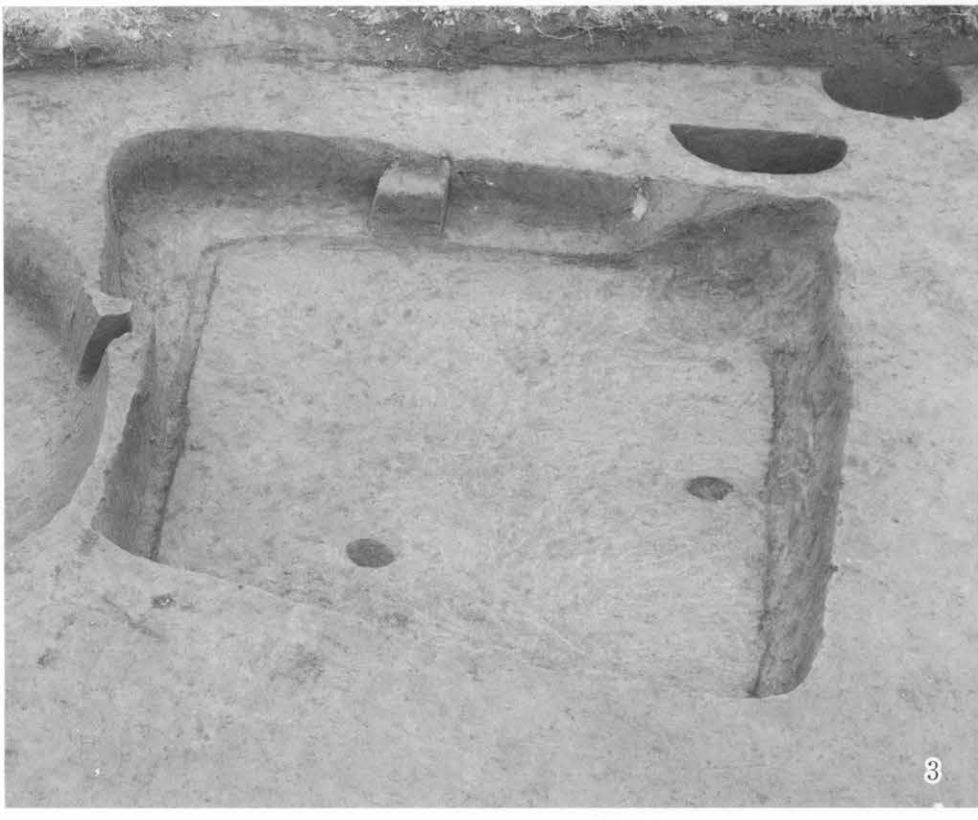
3　SI093A遺物出土状況

4　SI102A・102B

1　SI103A・103B・103C

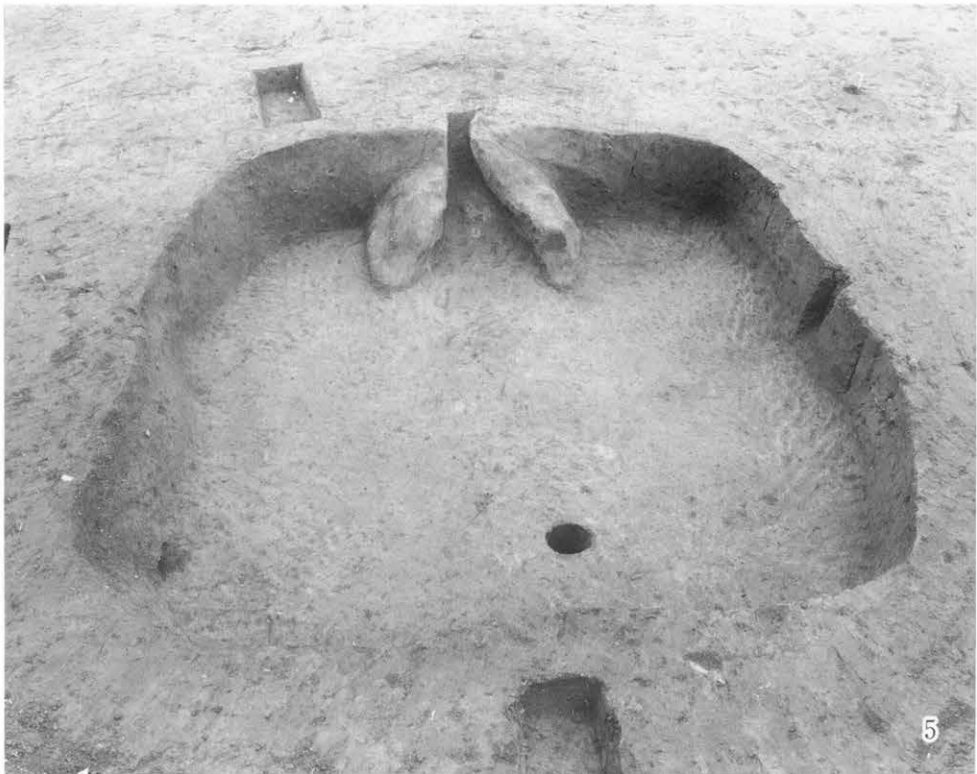
2　SI104カマド遺物出土状況

3　SI104

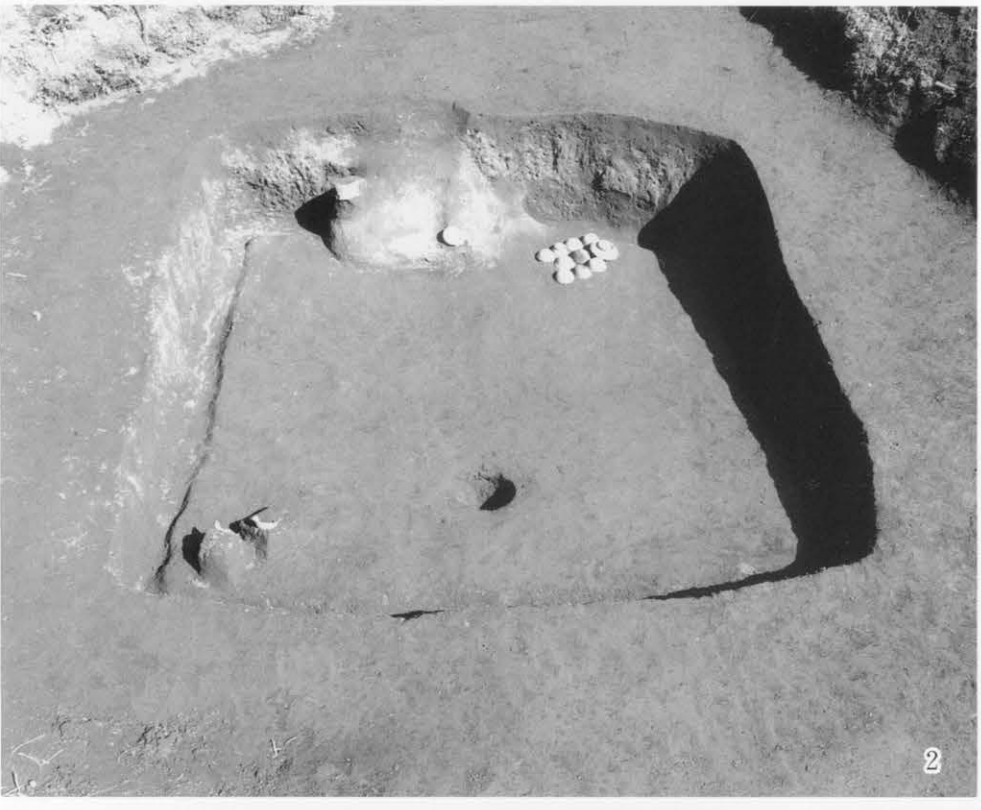


4　SI108遺物出土状況

5　SI108



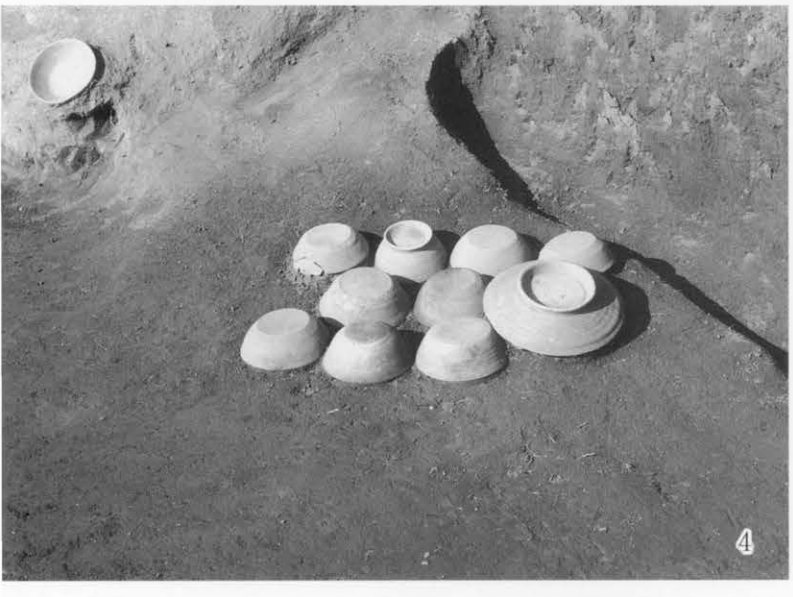
1　SI110

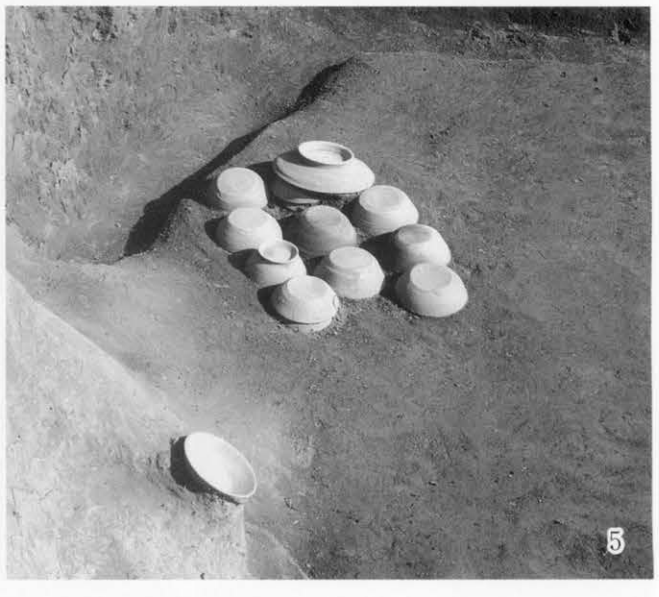


2　SI113

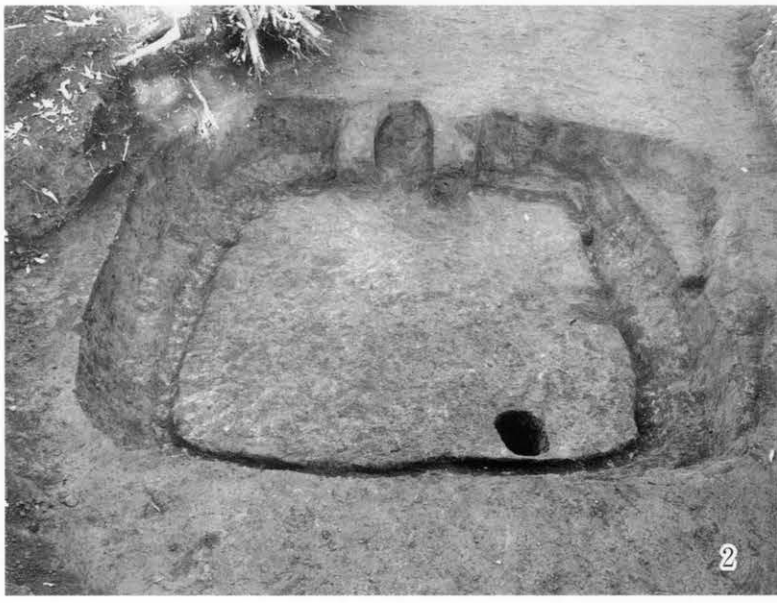
3　SI113カマド

4・5　SI113遺物出土状況





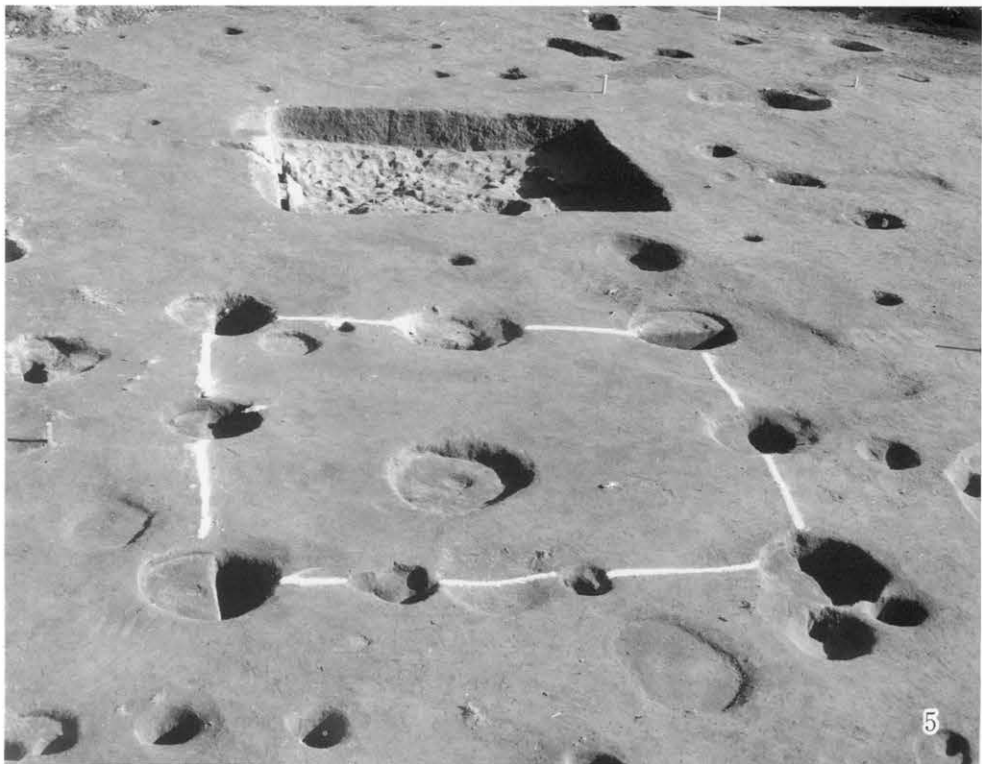
1　SI124A・124B



2　SI114

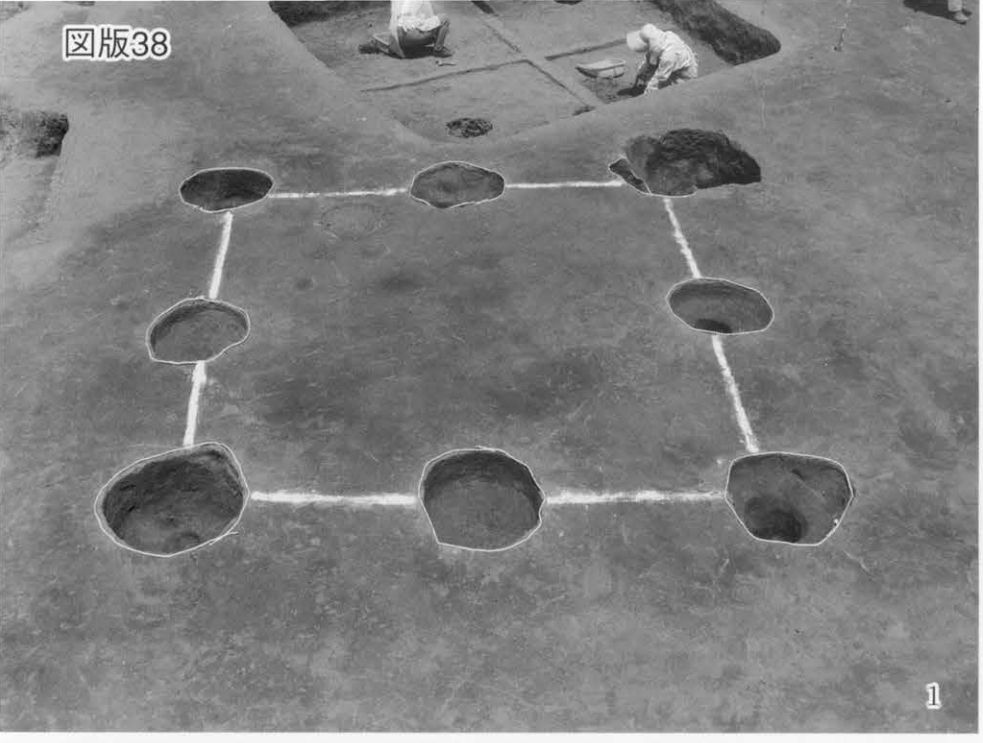
3　SB007土層断面

4　SB007



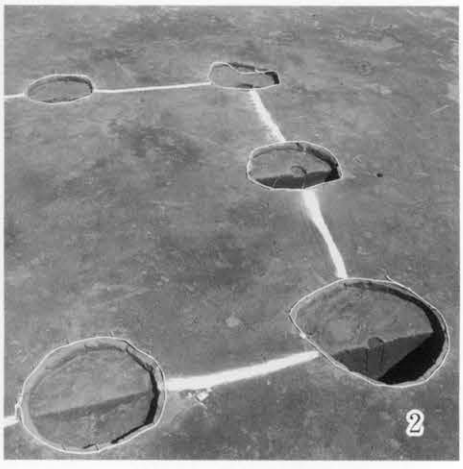
5　SB016

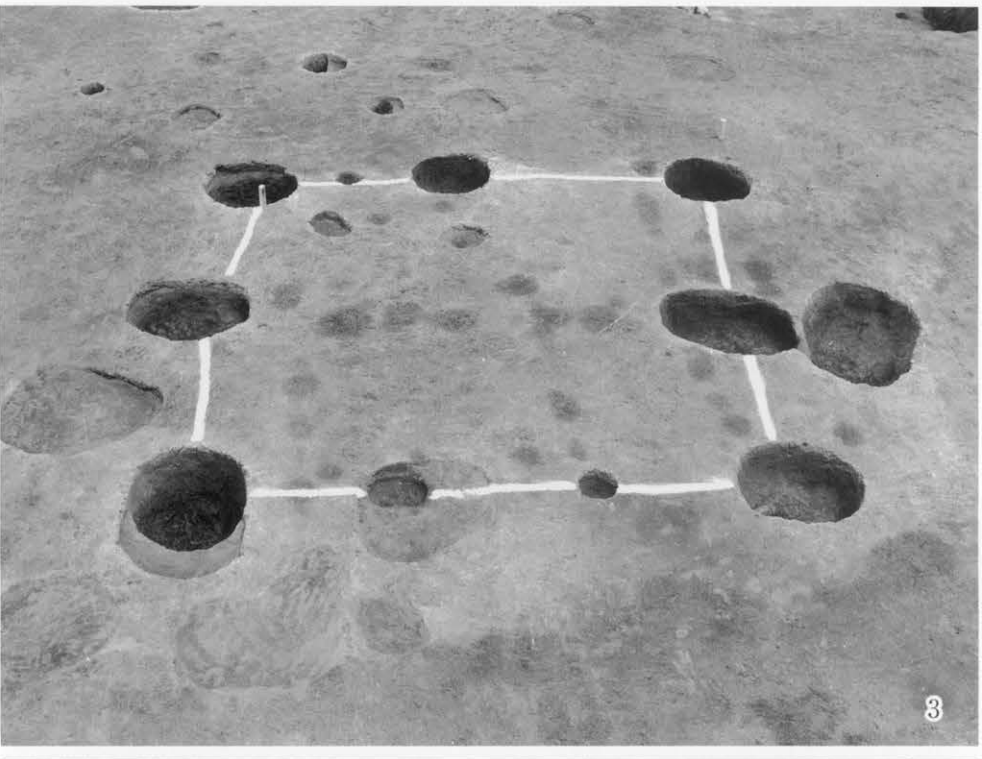
図版38



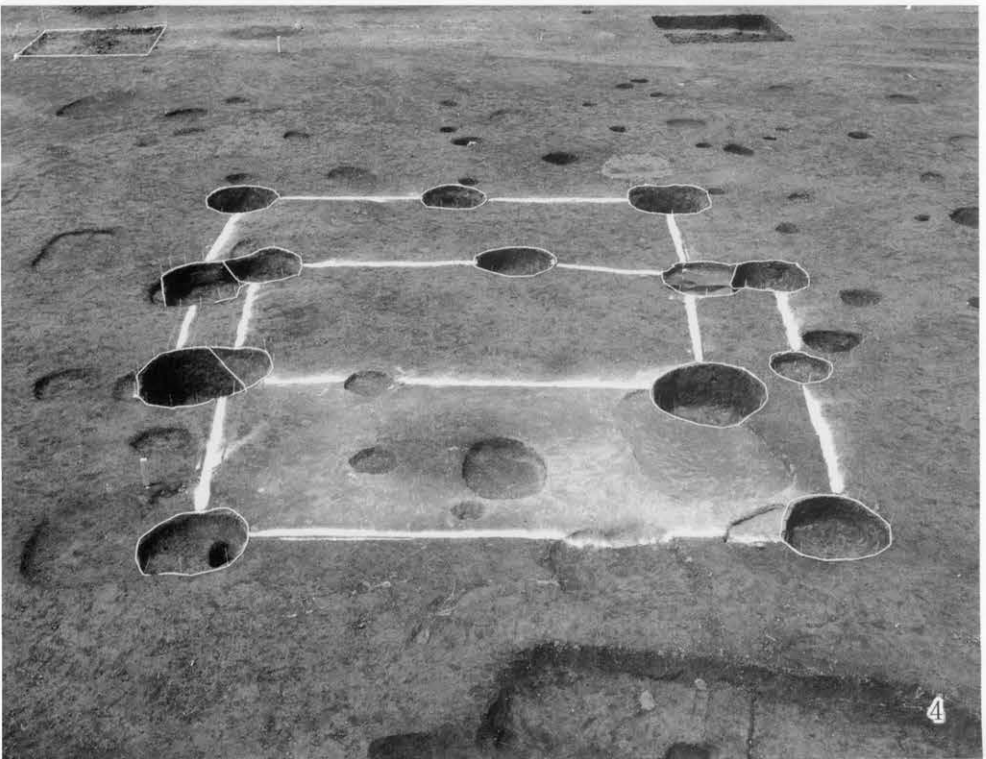
1　SB062

2　SB062土層断面

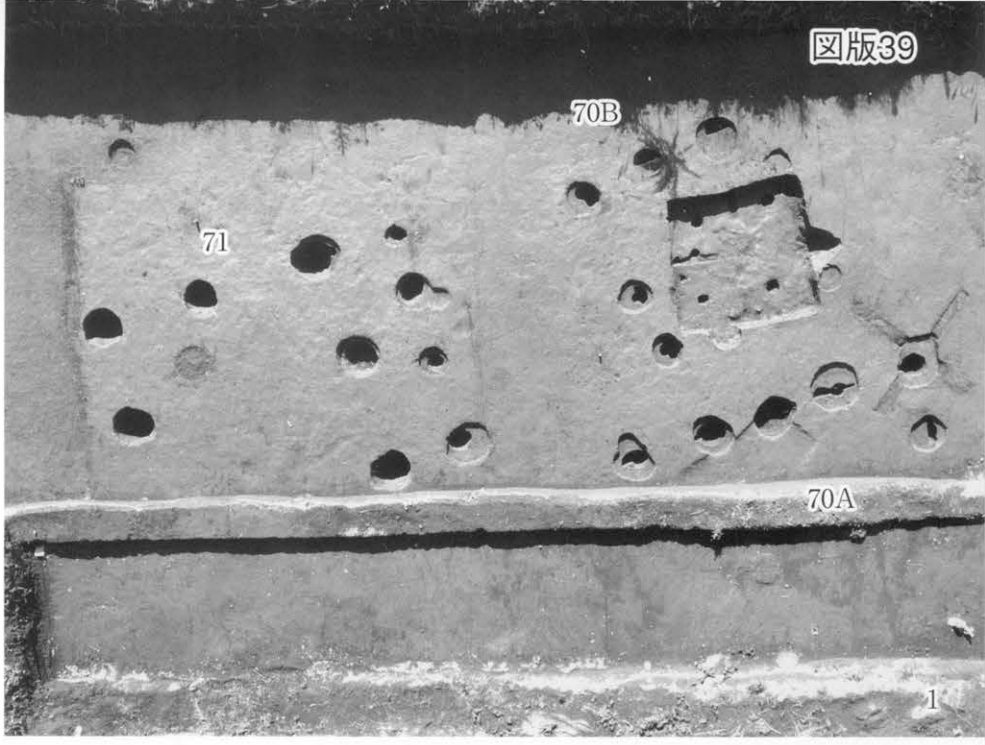




3　SB063



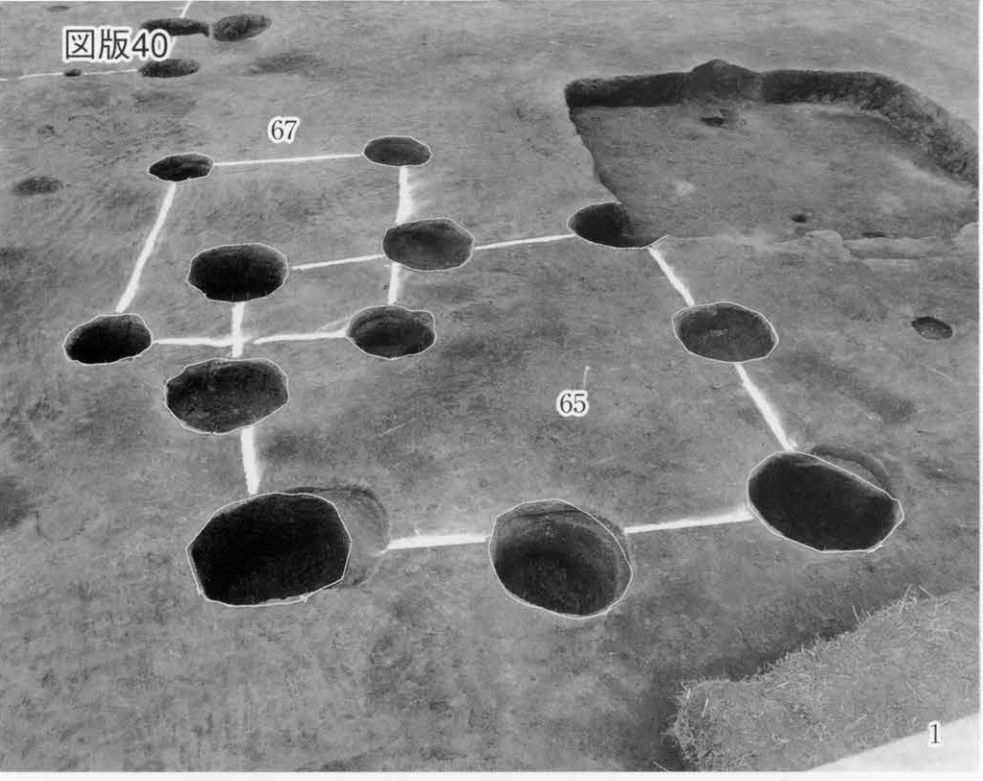
4　SB064A・064B



1　SB070A・070B・071

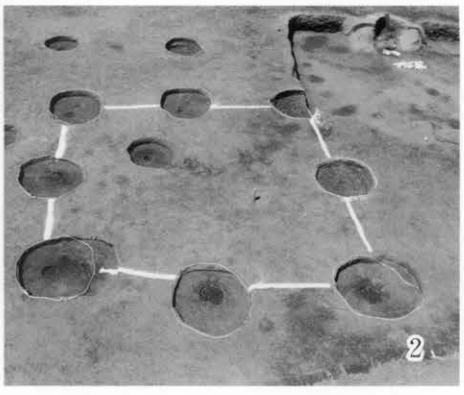
2　SB086

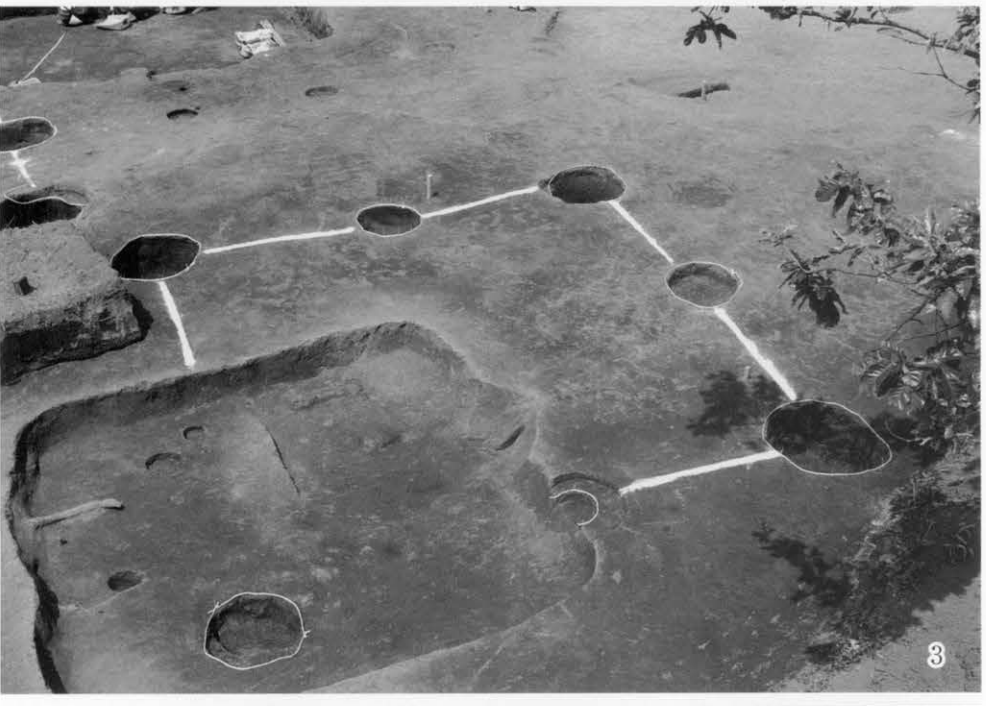
3　SB091



1　SB065・067

2　SB065柱痕





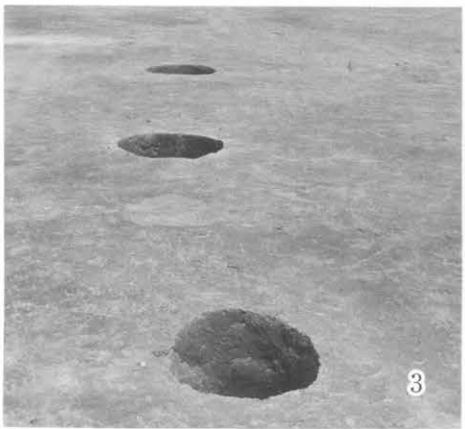
3　SB066

4　SB094

1　SB101

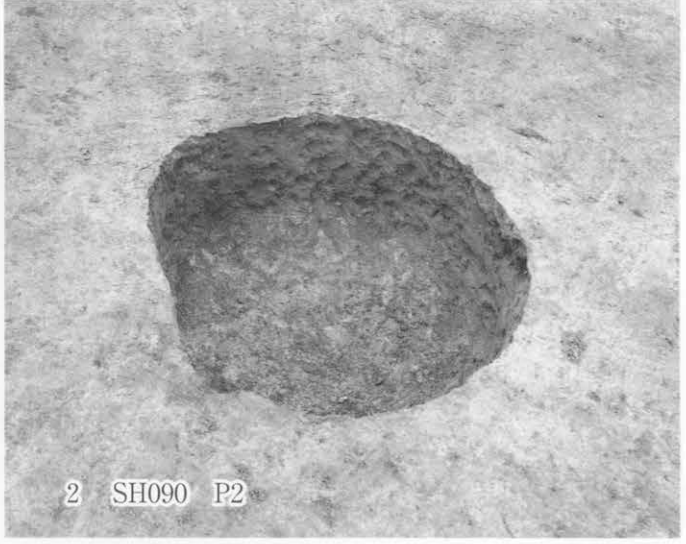
2　SB106

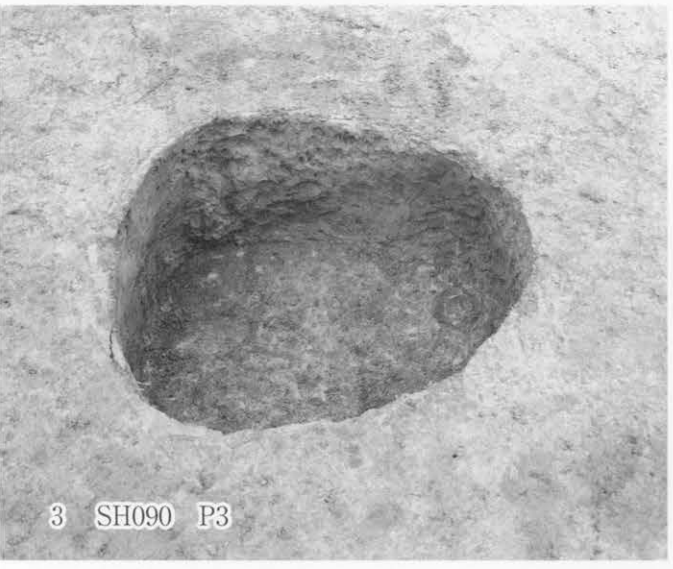
3・4　SH060

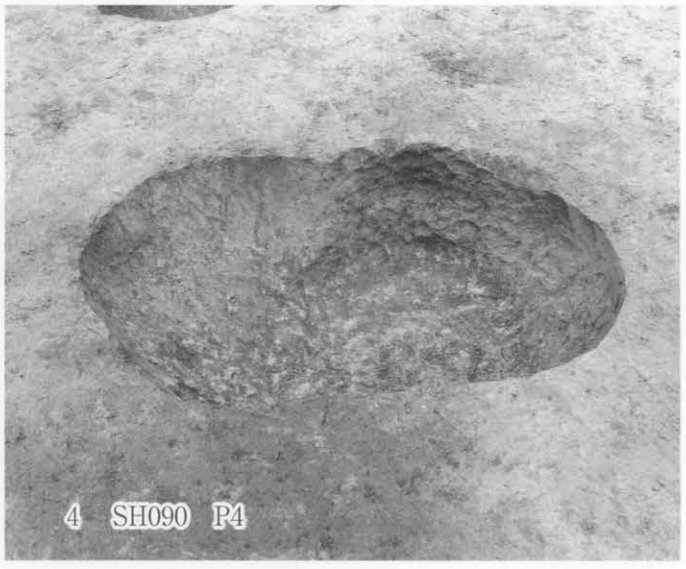


図版42

1 SH090 P1

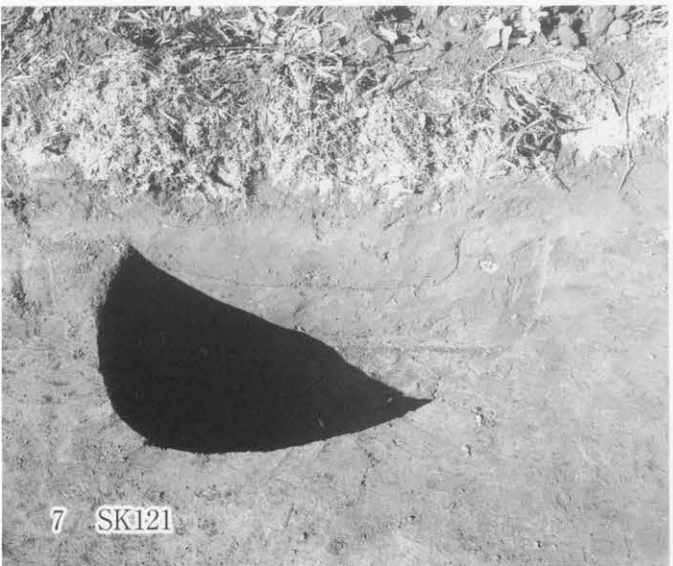

2 SH090 P2

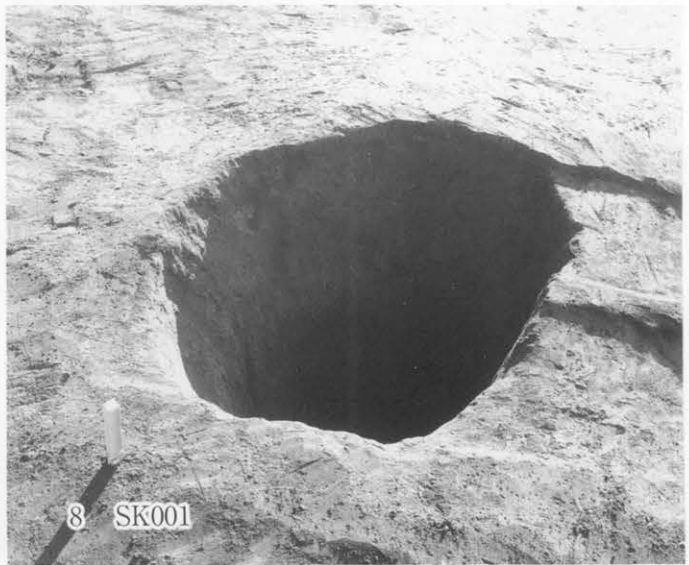

3 SH090 P3


4 SH090 P4

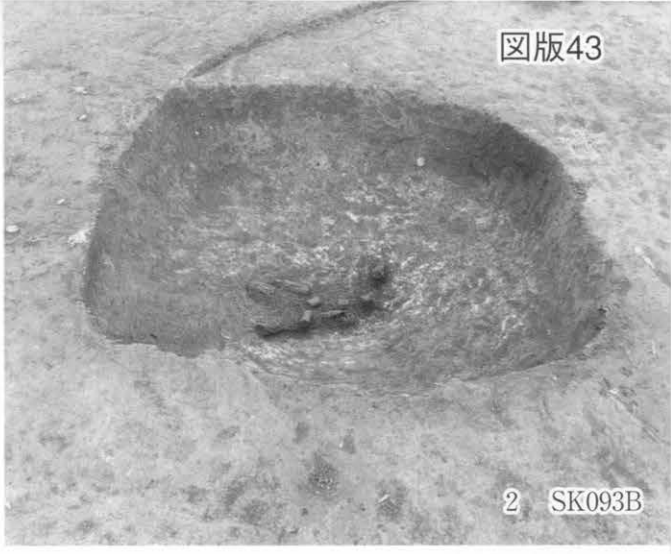
5 SK119

6 SK120


7 SK121

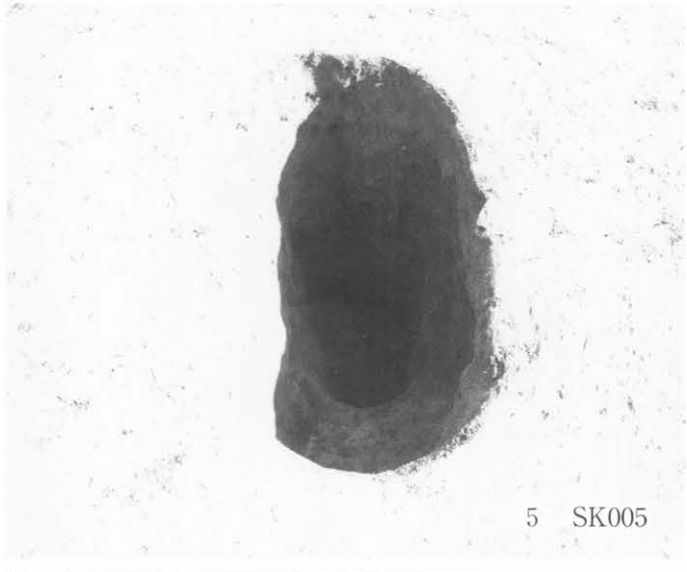

8 SK001

1　SD048

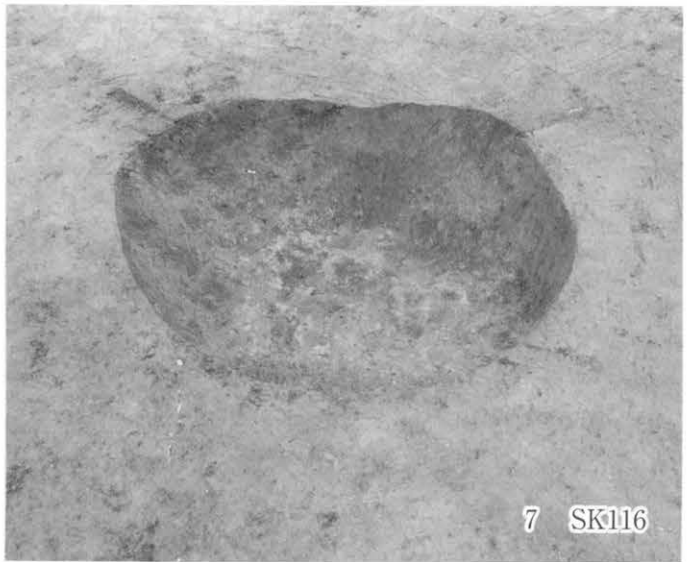

2　SK093B

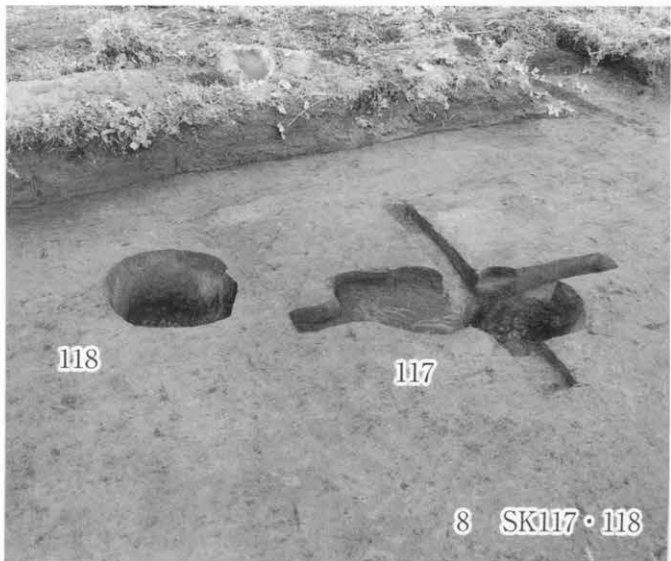
3　SK097

4　SK004


5　SK005

6　SK099


7　SK116



8　SK117・118

図版44

1 SK122

2 SK126

3 SK125

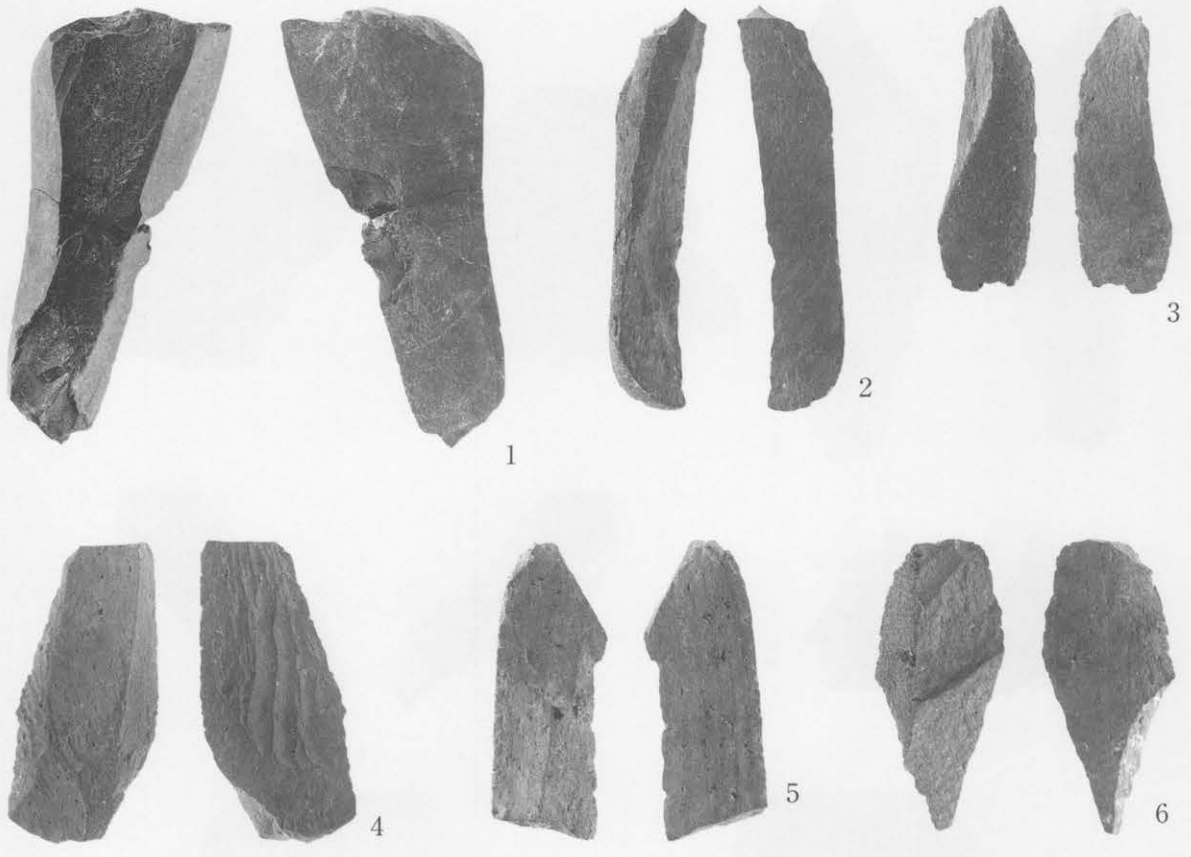
4 SK123

5 SK128

6 SK129

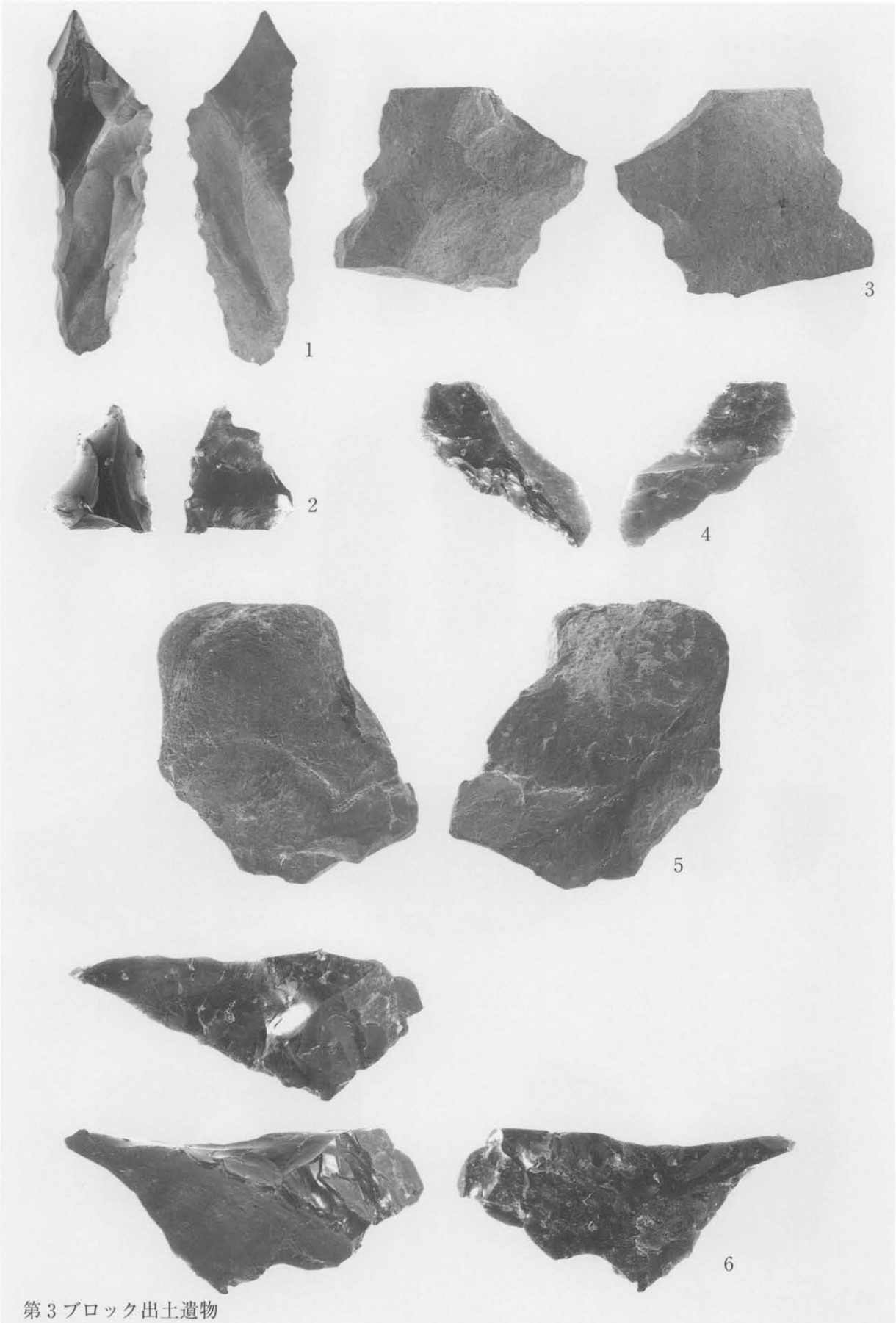
7 SK130

8 SK131

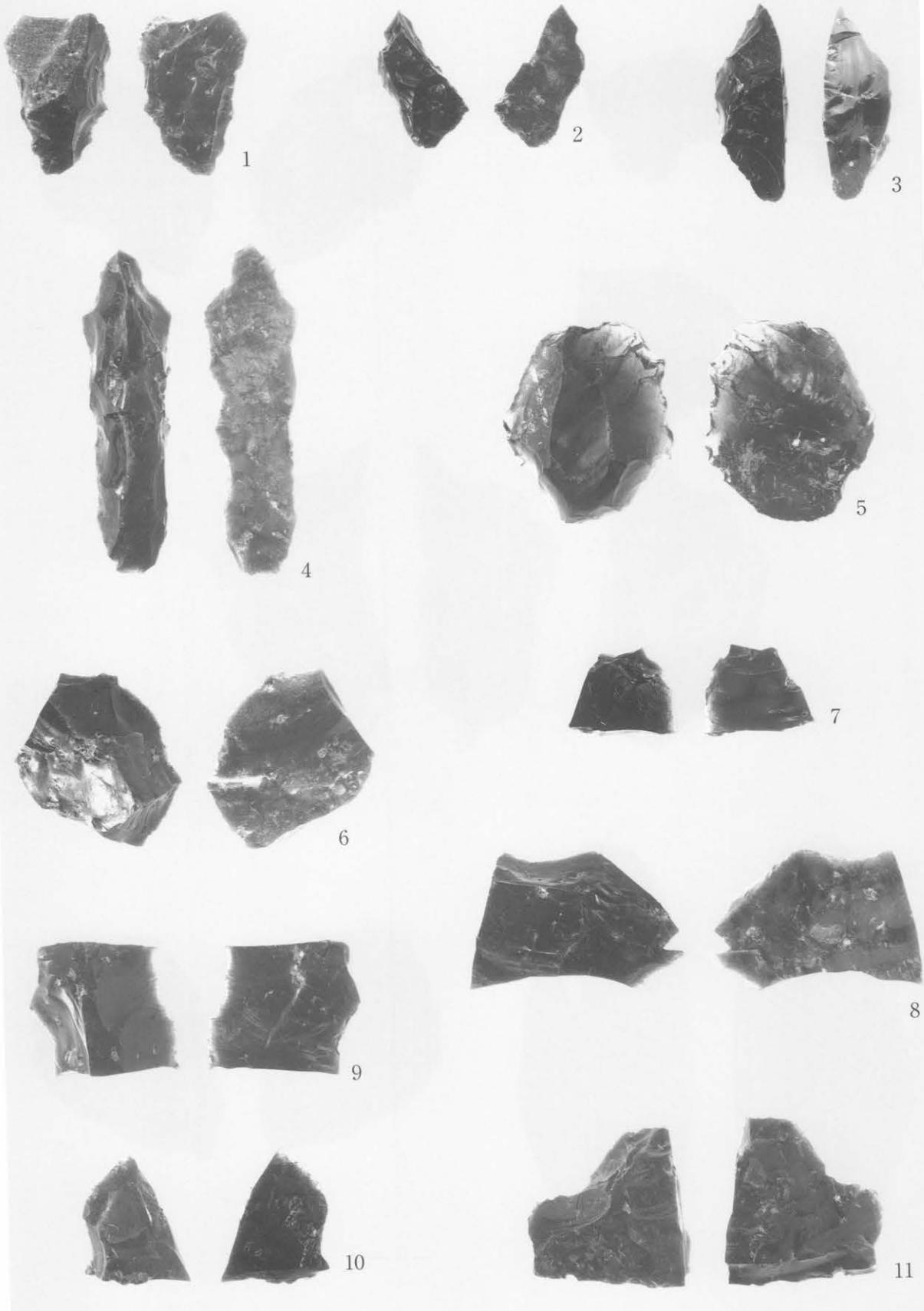


第1ブロック出土遺物

第2ブロック出土遺物

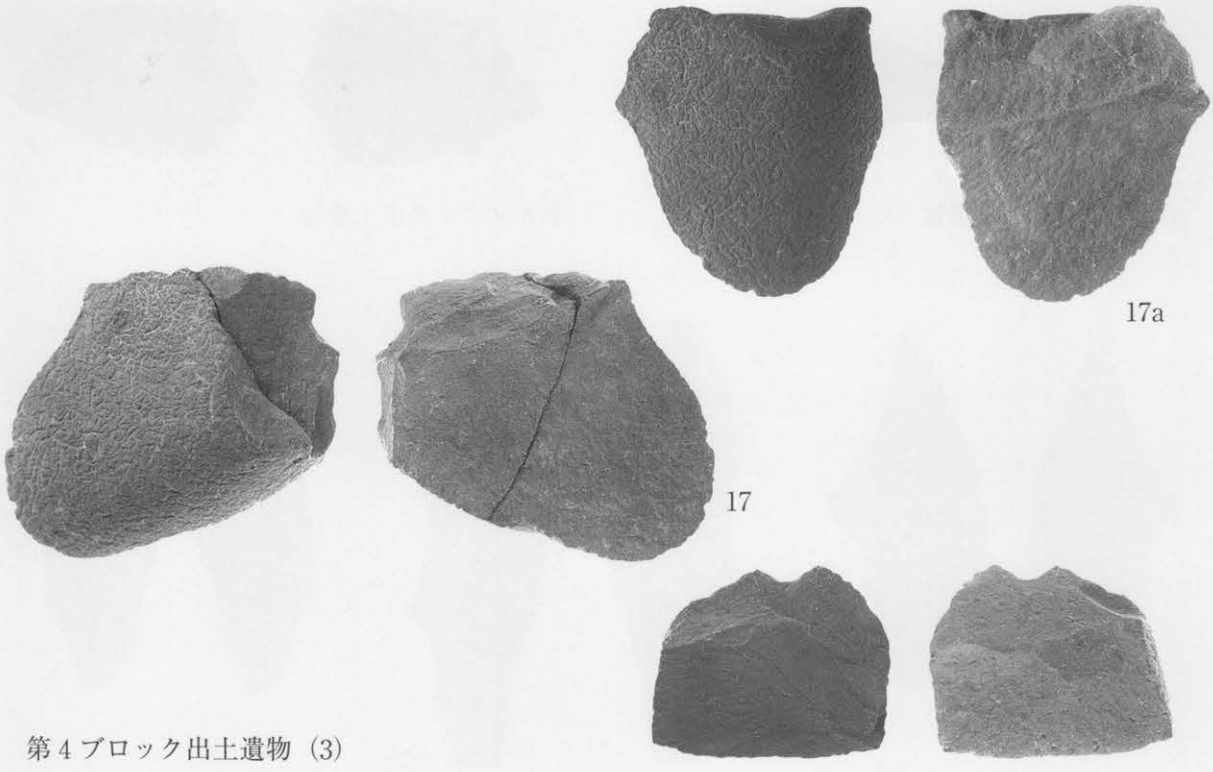


第3ブロック出土遺物



第4ブロック出土遺物（1）

第4ブロック出土遺物（2）

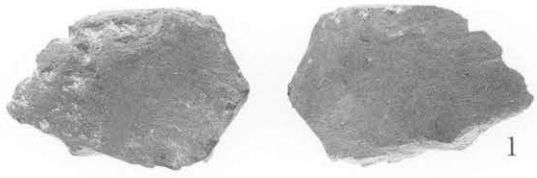


第4ブロック出土遺物（3）

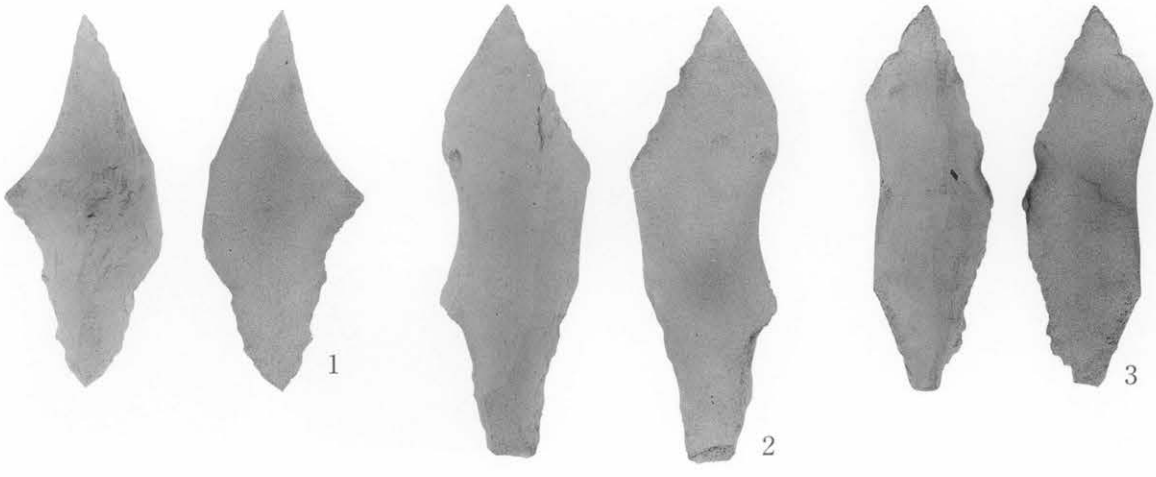
第5ブロック出土遺物

第6ブロック出土遺物

第7ブロック出土遺物



第8ブロック出土遺物



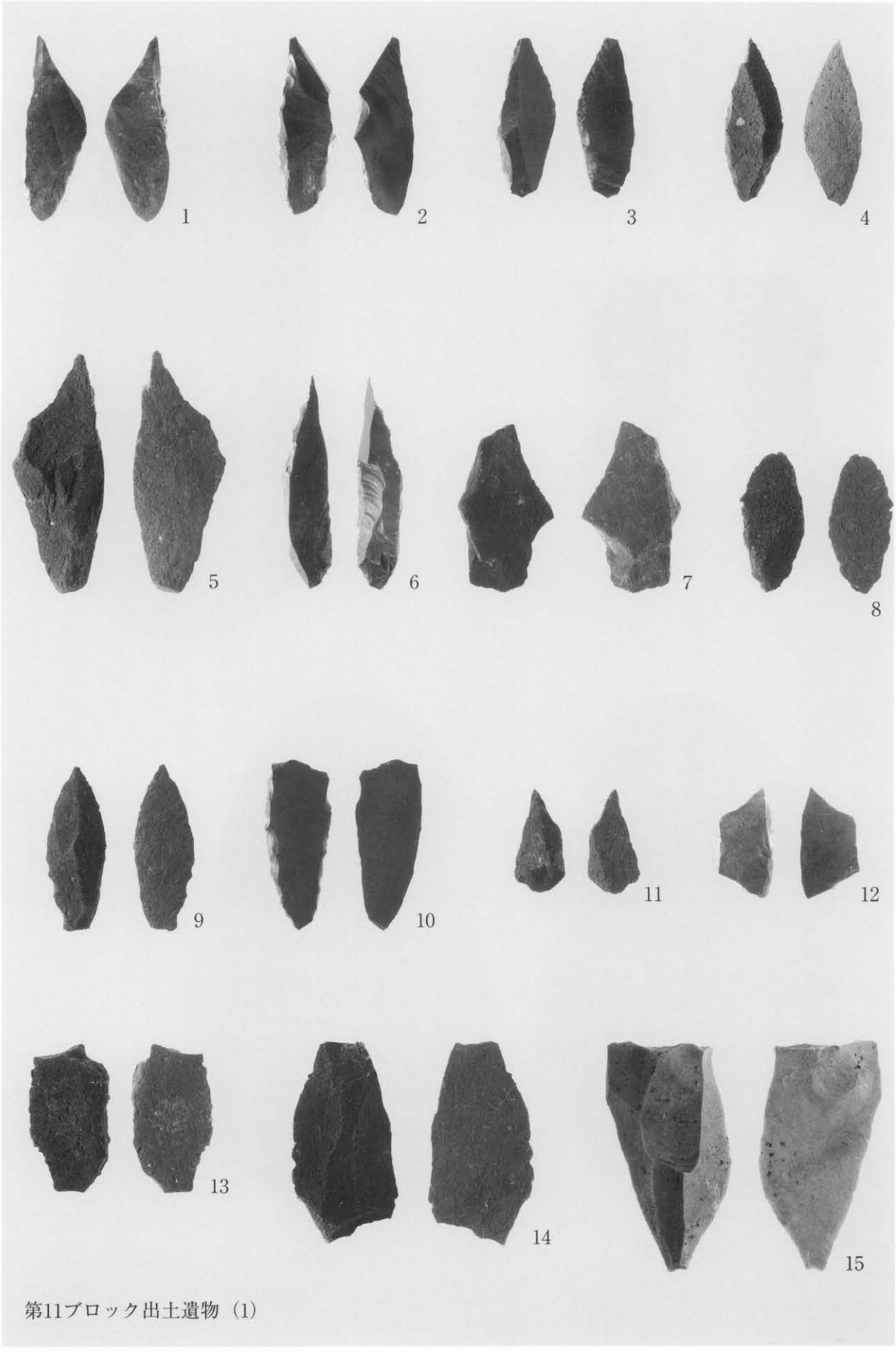
第9ブロック出土遺物

1

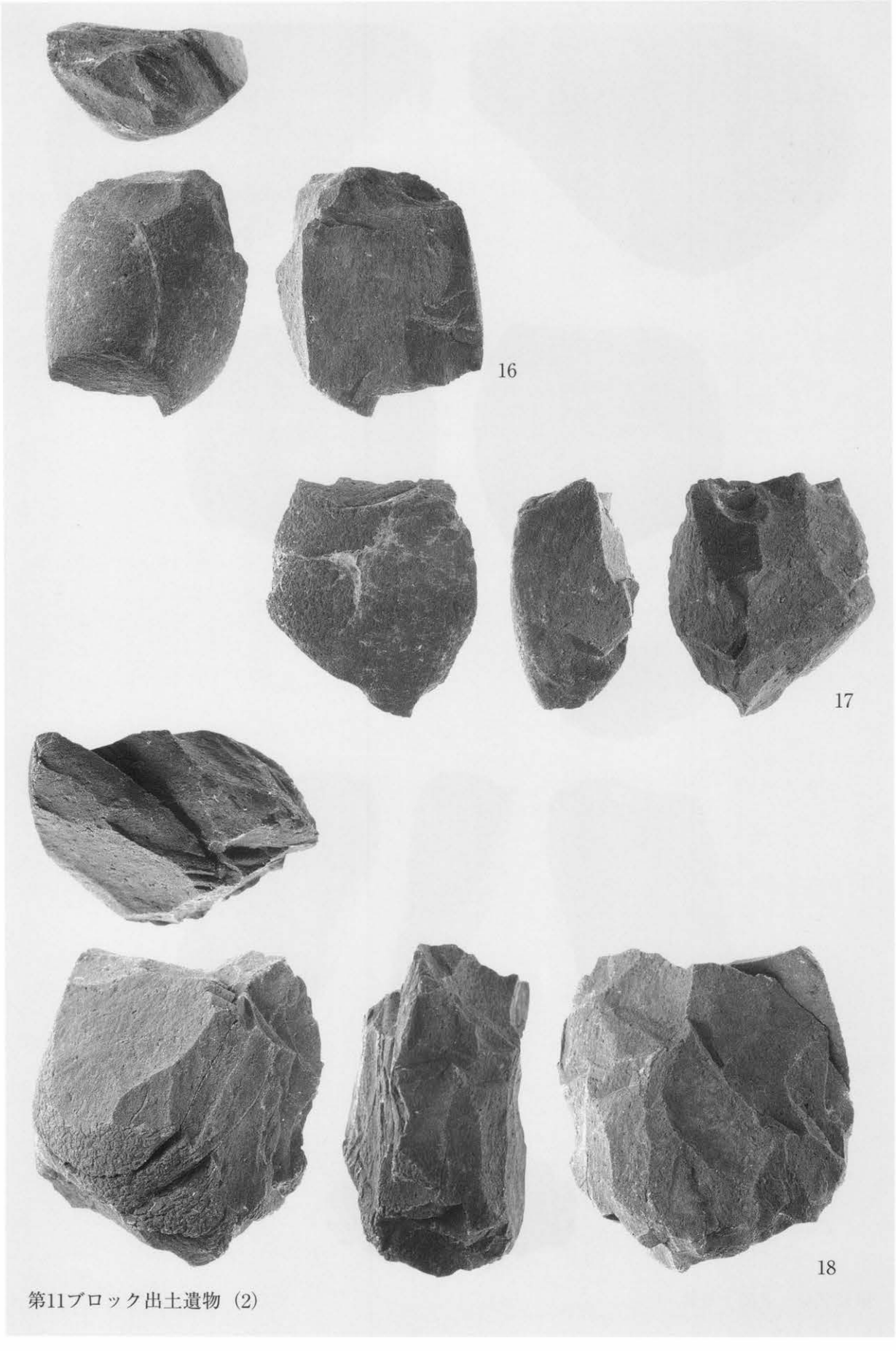
3

2

第10ブロック出土遺物

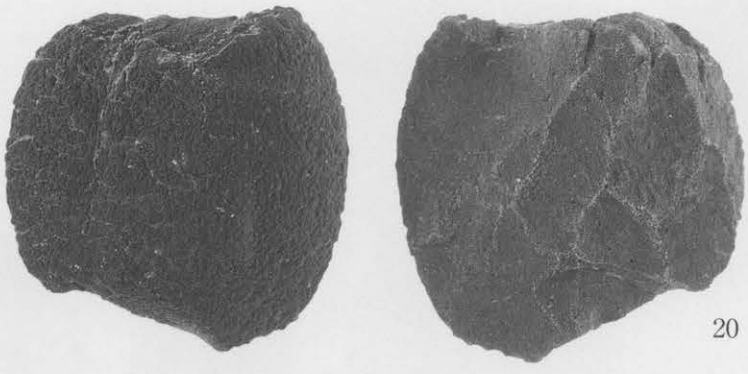


第11ブロック出土遺物（1）



第11ブロック出土遺物（2）

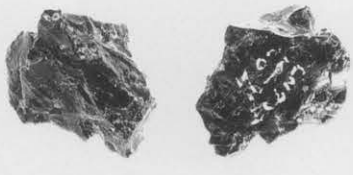
19



20

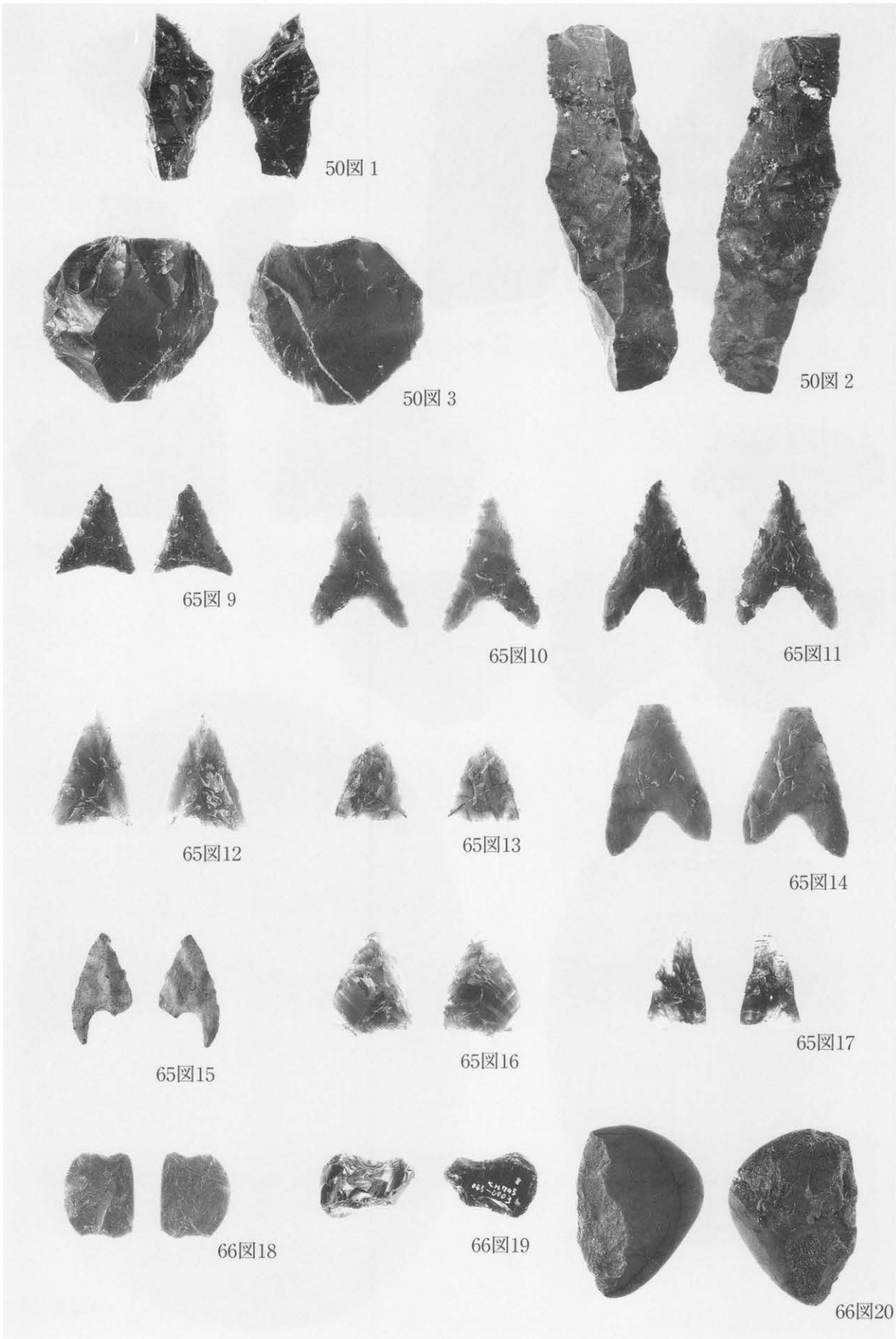
21

第11ブロック出土遺物(3)

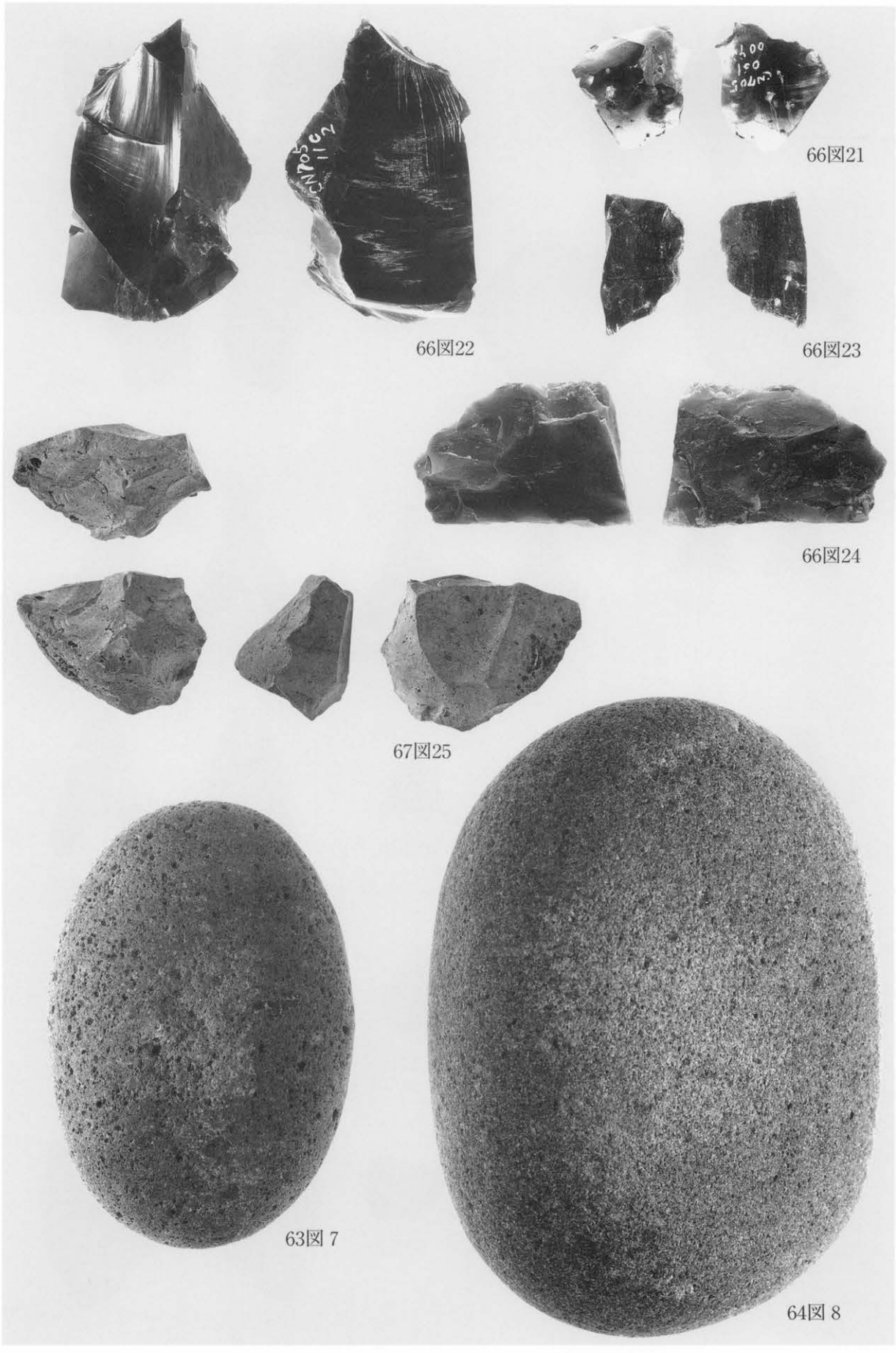


1

第12ブロック出土遺物



旧石器時代ブロック外出土石器・縄文時代石器・時期不明の石器



66図21

66図22

66図23

66図24

67図25

63図 7

64図 8

縄文時代石器・時期不明の石器

84－1

84－2

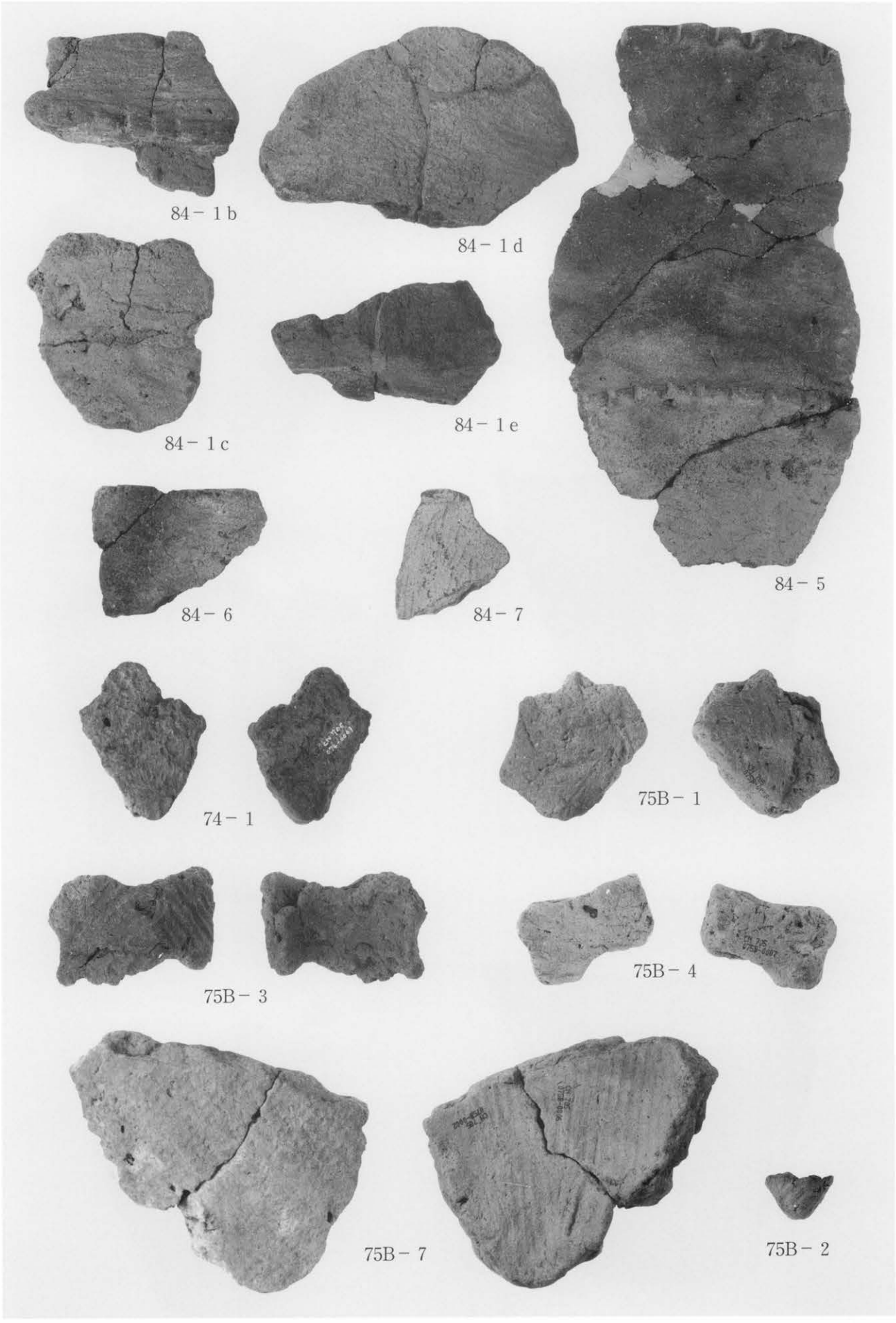
84－3

84－4

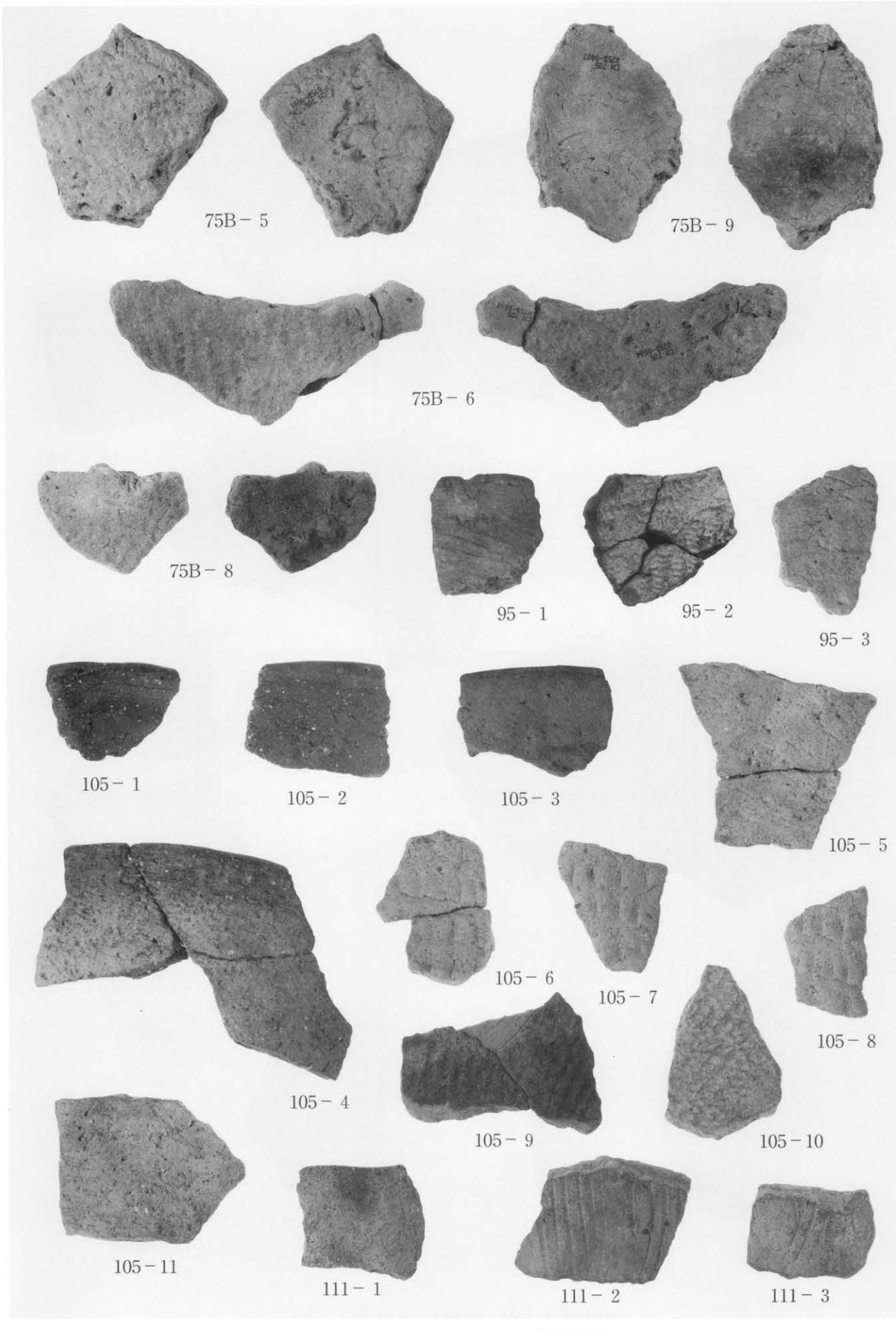
112－1

112－3

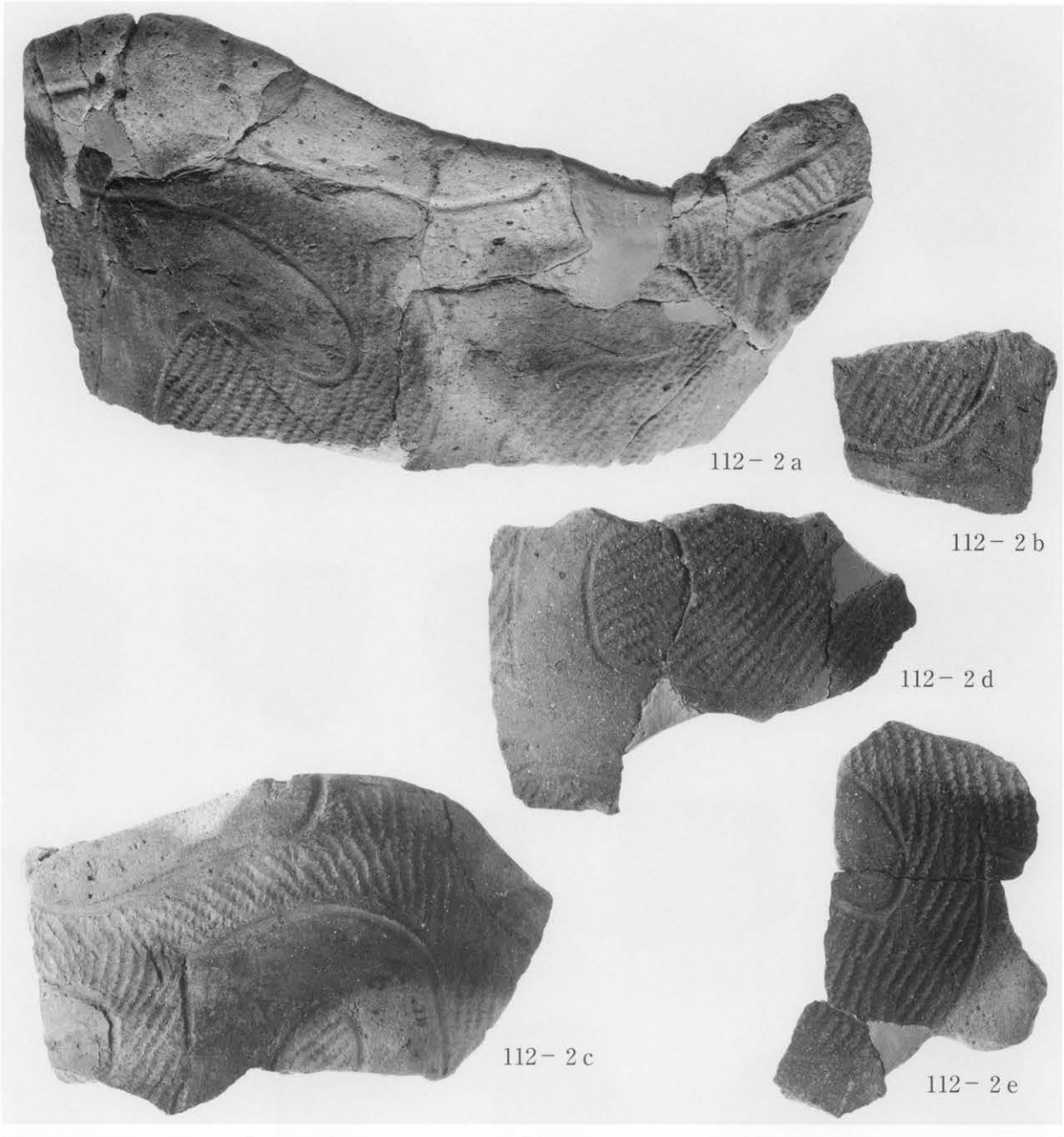
SK084・SI112出土土器



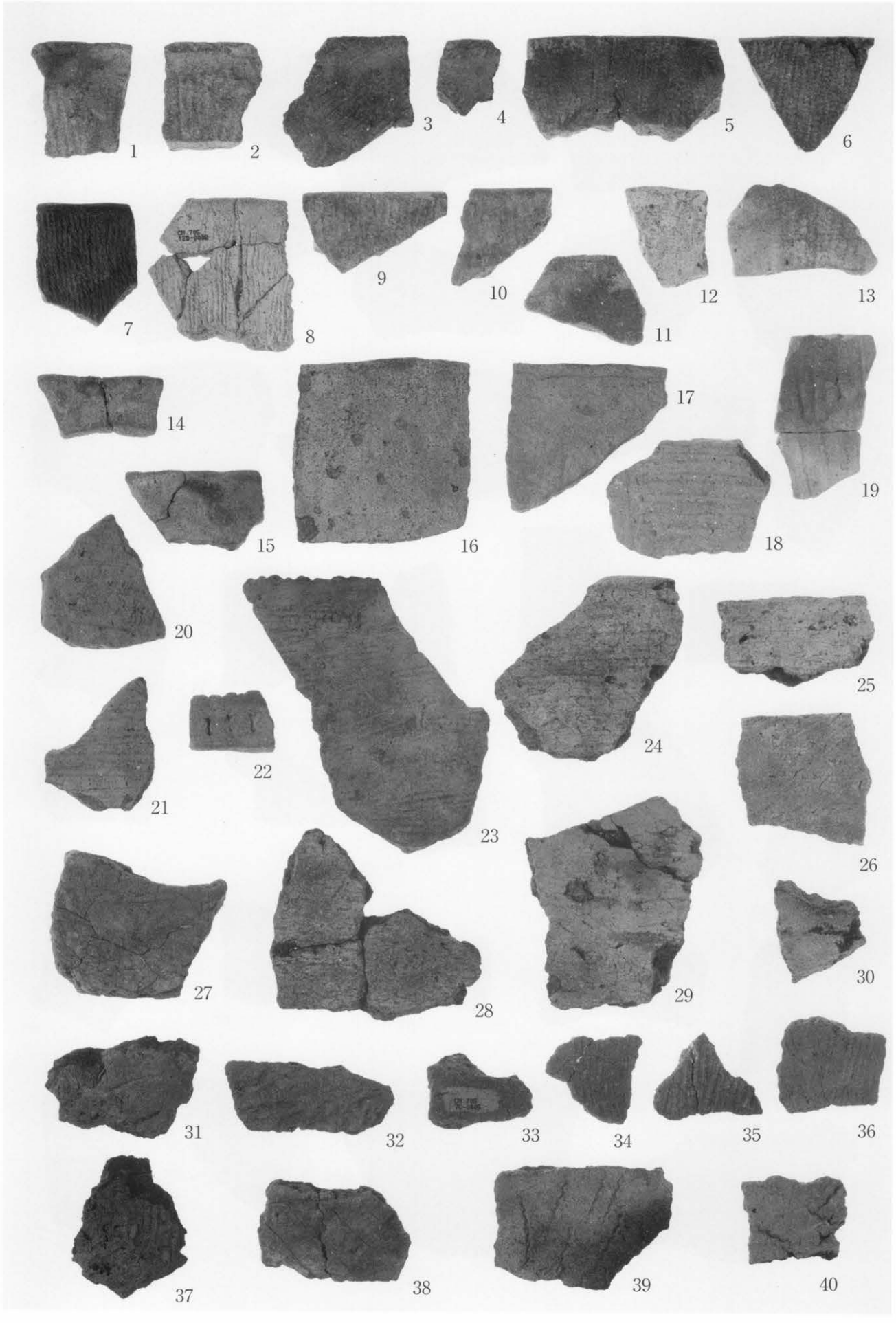
SK084・074・075B出土土器



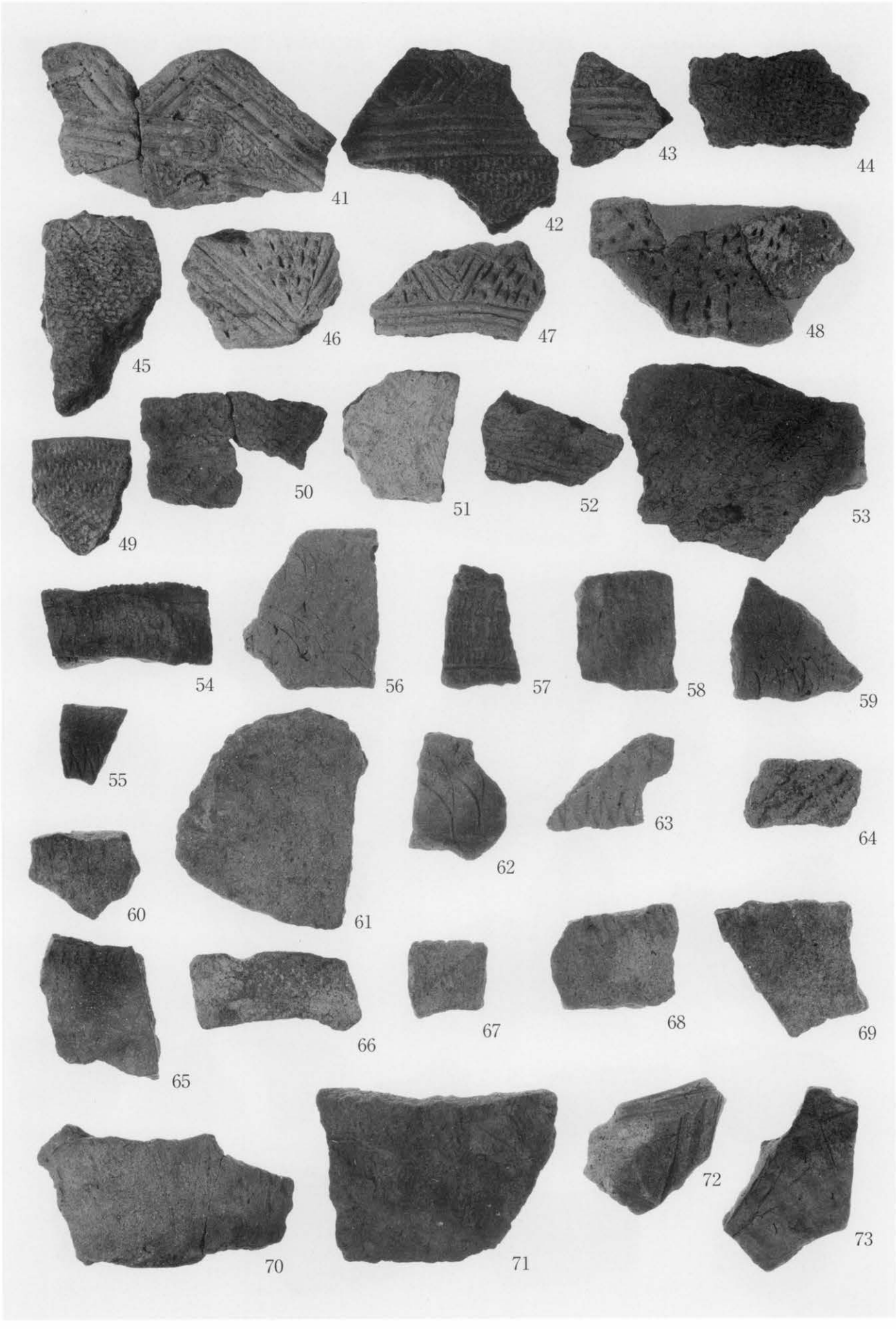
SK075B・SI095・105・111出土土器



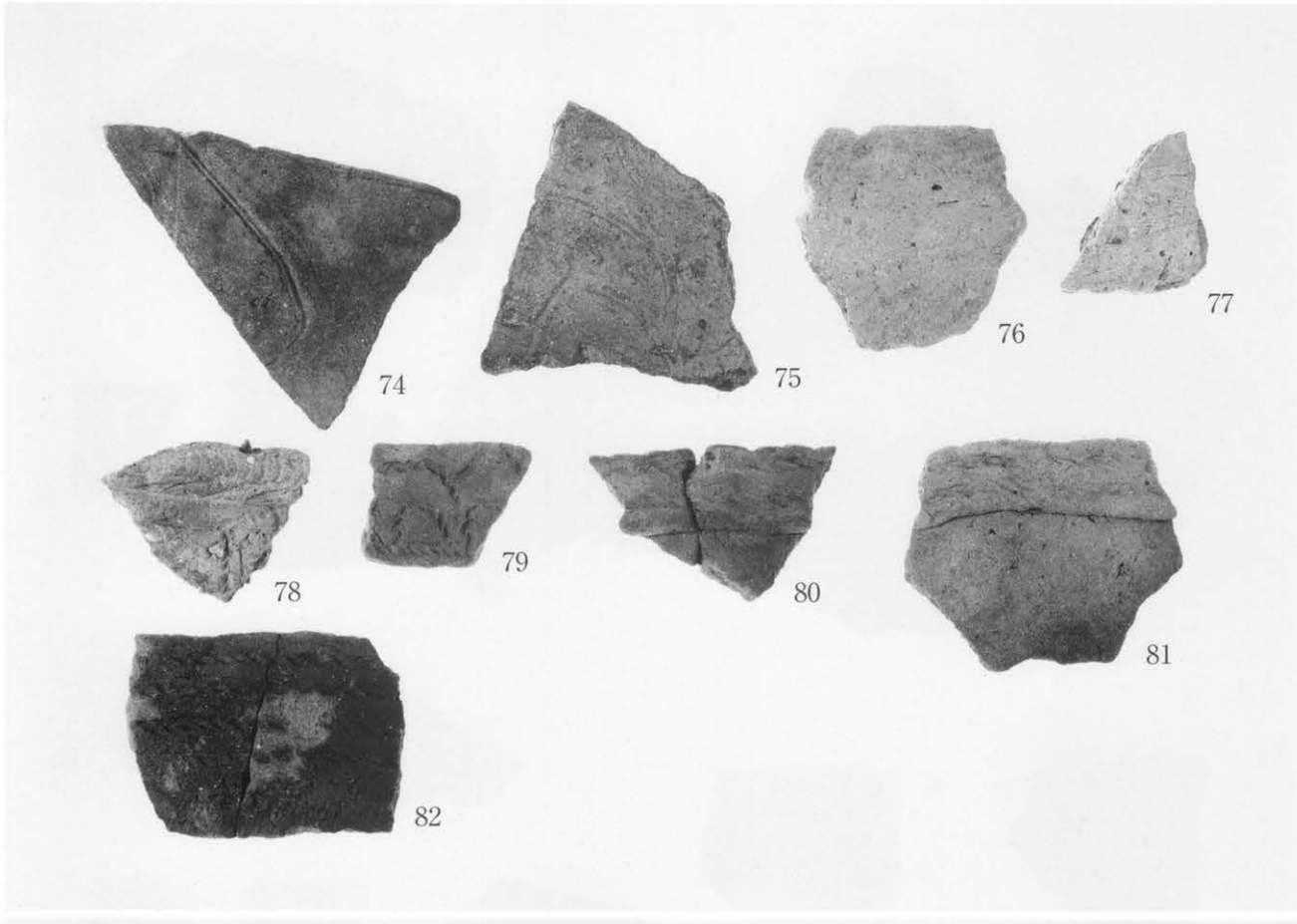
SI112出土土器，SK084・SI105出土石器

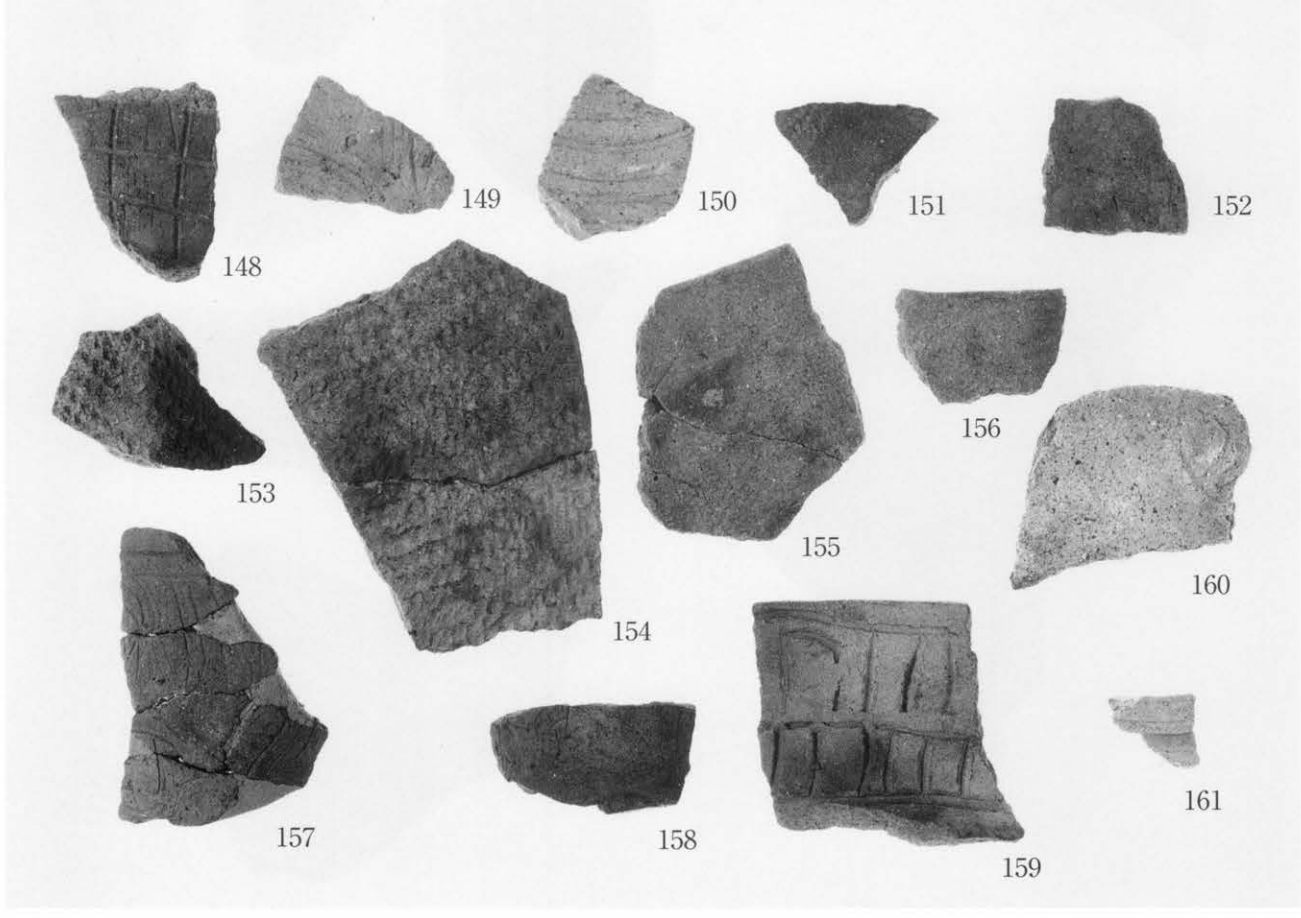

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40

遺構外出土縄文土器（1）


41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
56
57
58
59
55
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

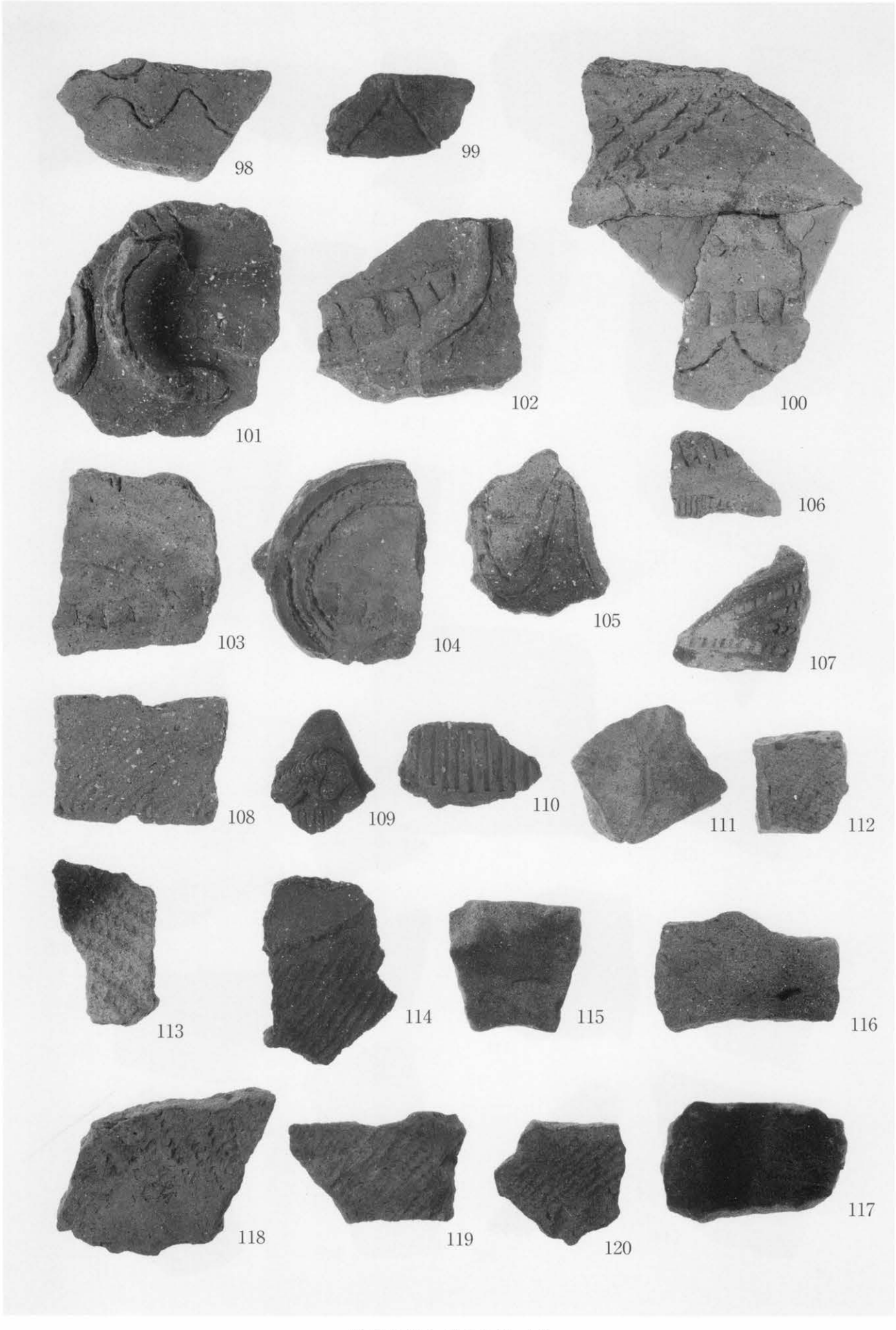
遺構外出土縄文土器（2）


74
75
76
77
78
79
80
81
82

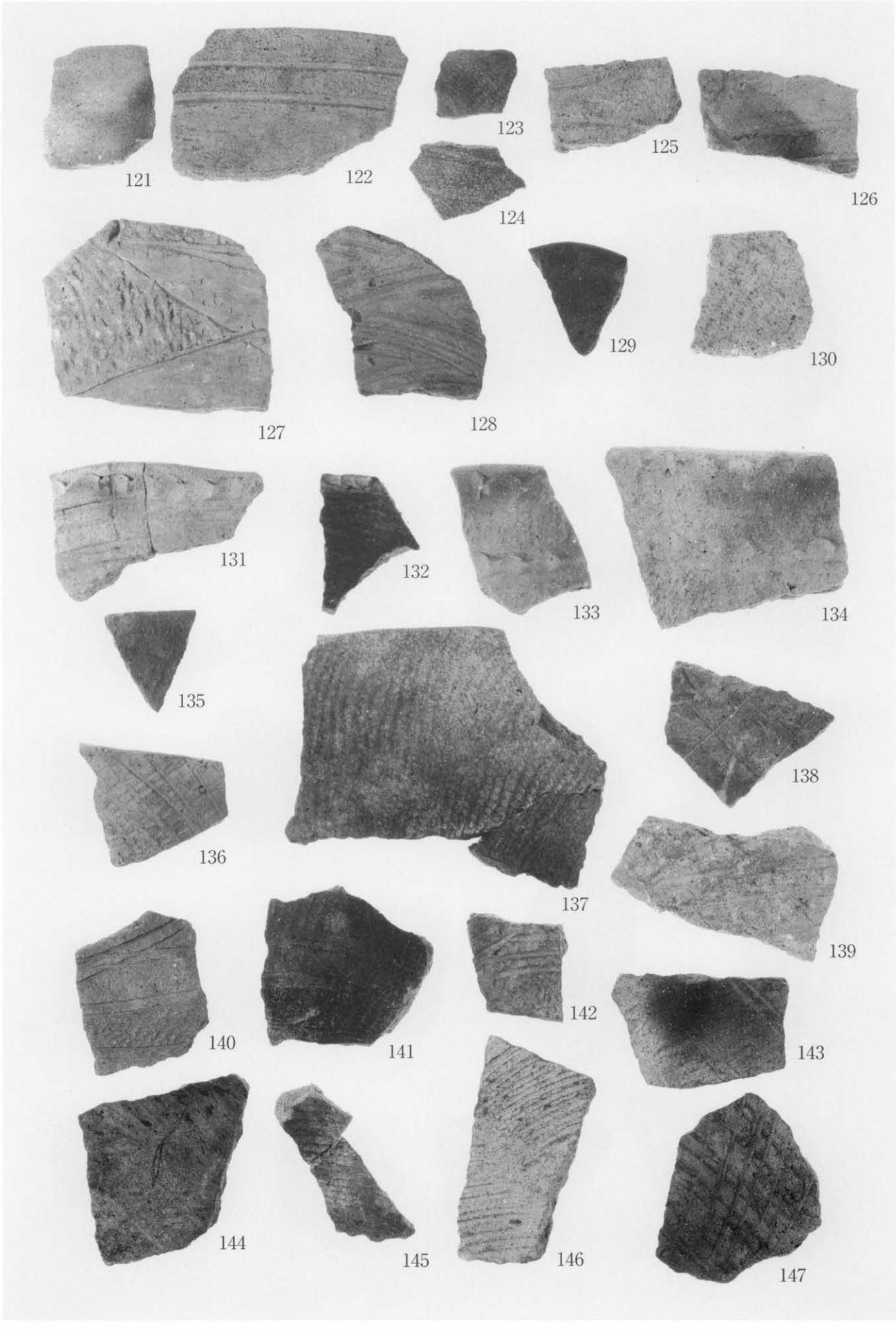

148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161

遺構外出土縄文土器（3）

遺構外出土縄文土器（4）


98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120

遺構外出土縄文土器（5）


121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147

遺構外出土縄文土器（6）

76－1

76－3

76－4

76－2

76－5

SI076出土土器

72－1

79－1

79－2

72－14

79－3

80－1

80－2

81－1

SI072・079・080・081出土土器

82－2

82－1

98－1

72－15

75A－32

75A－34

76－14

76－15

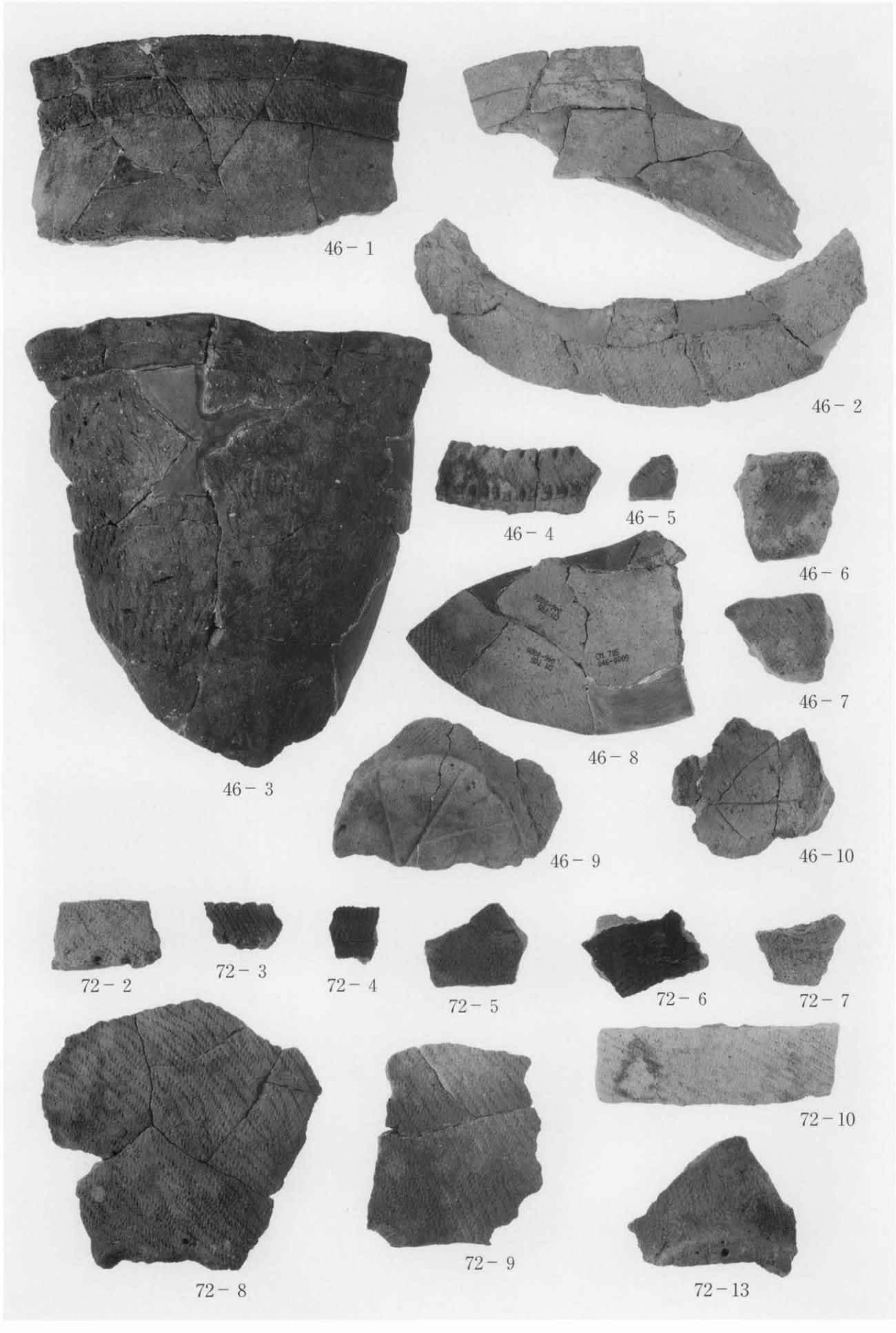
75A－33

76－16

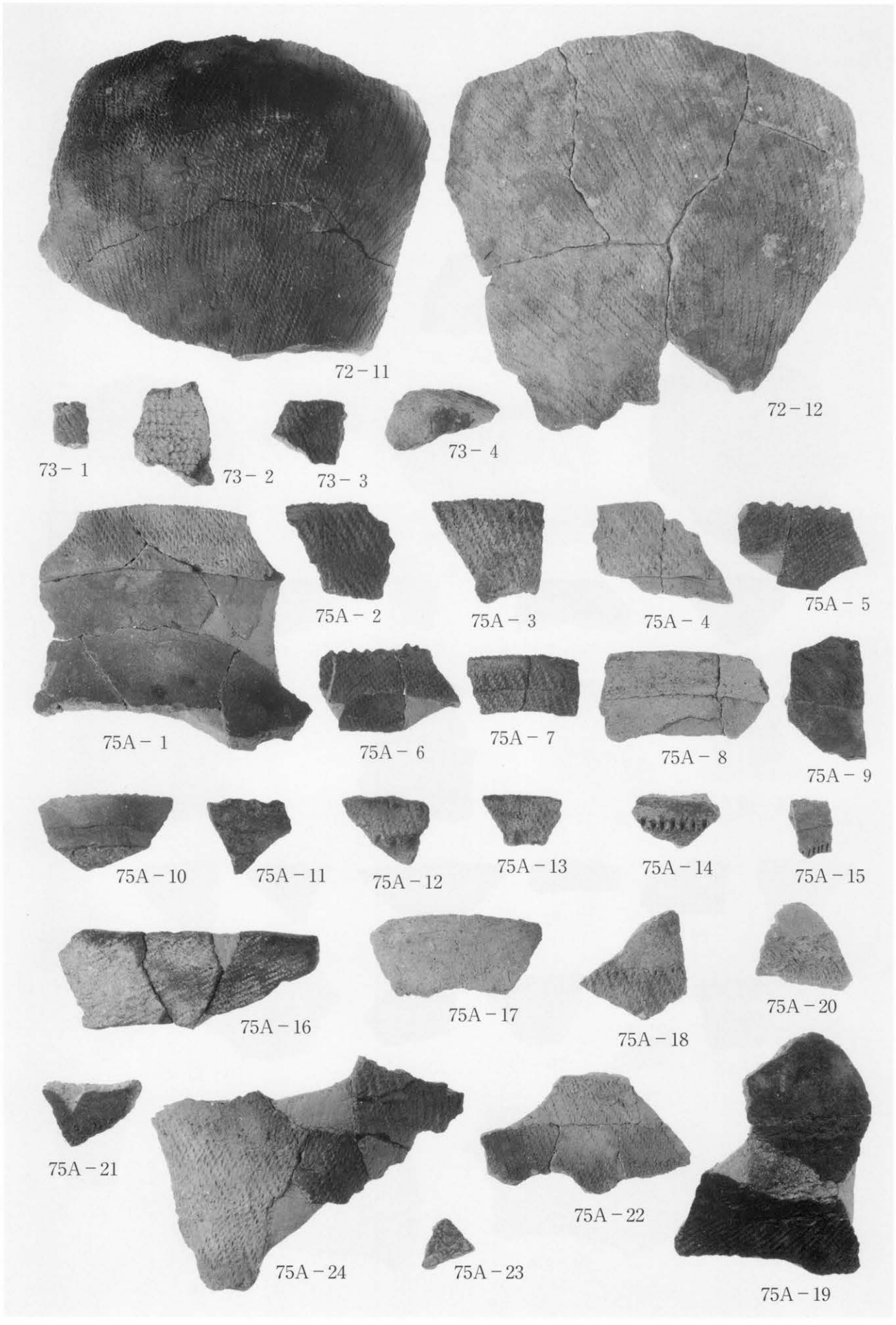
80－24

98－14

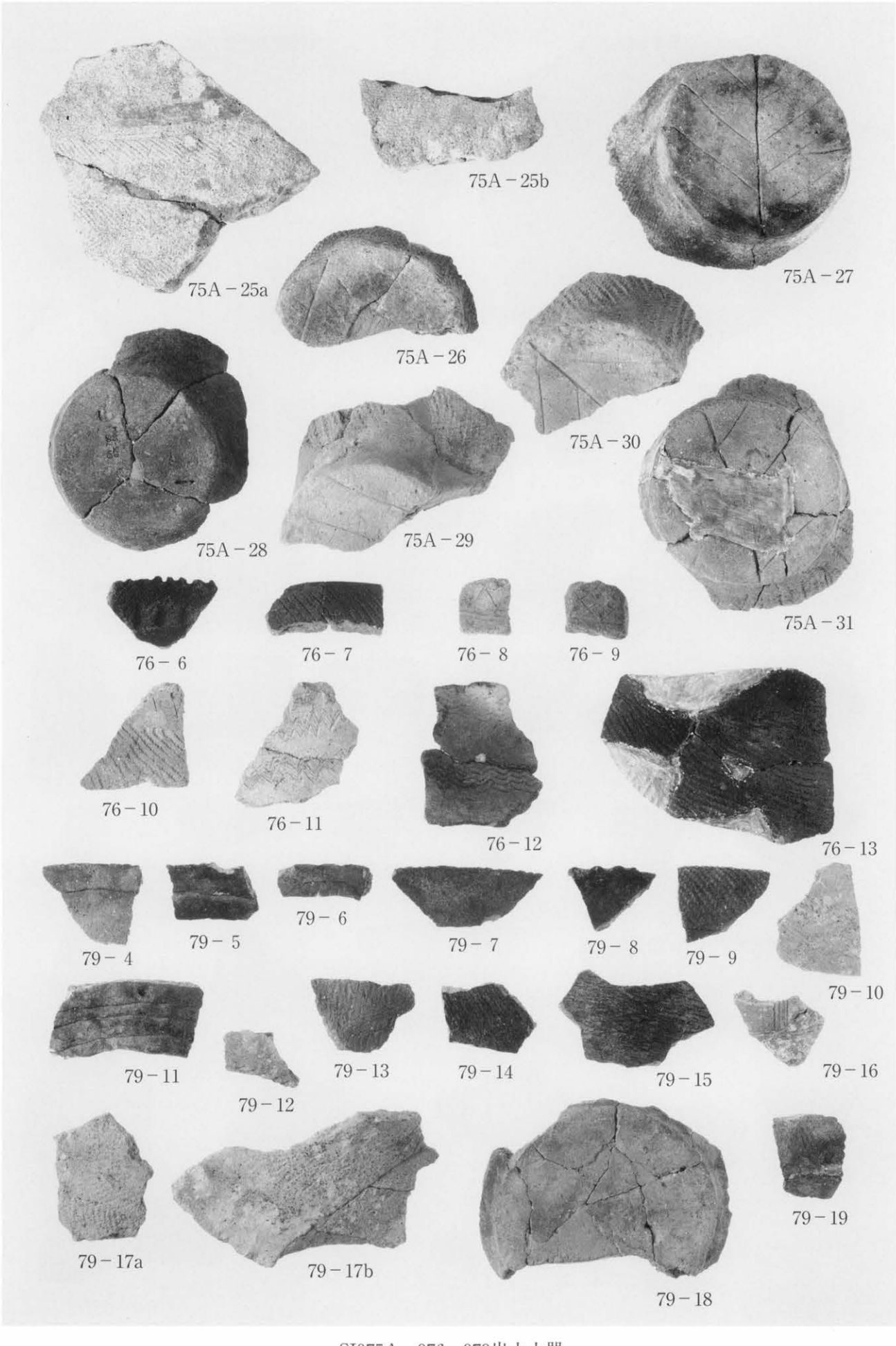
SI082・098出土土器，SI072・073・076・080・098出土石器



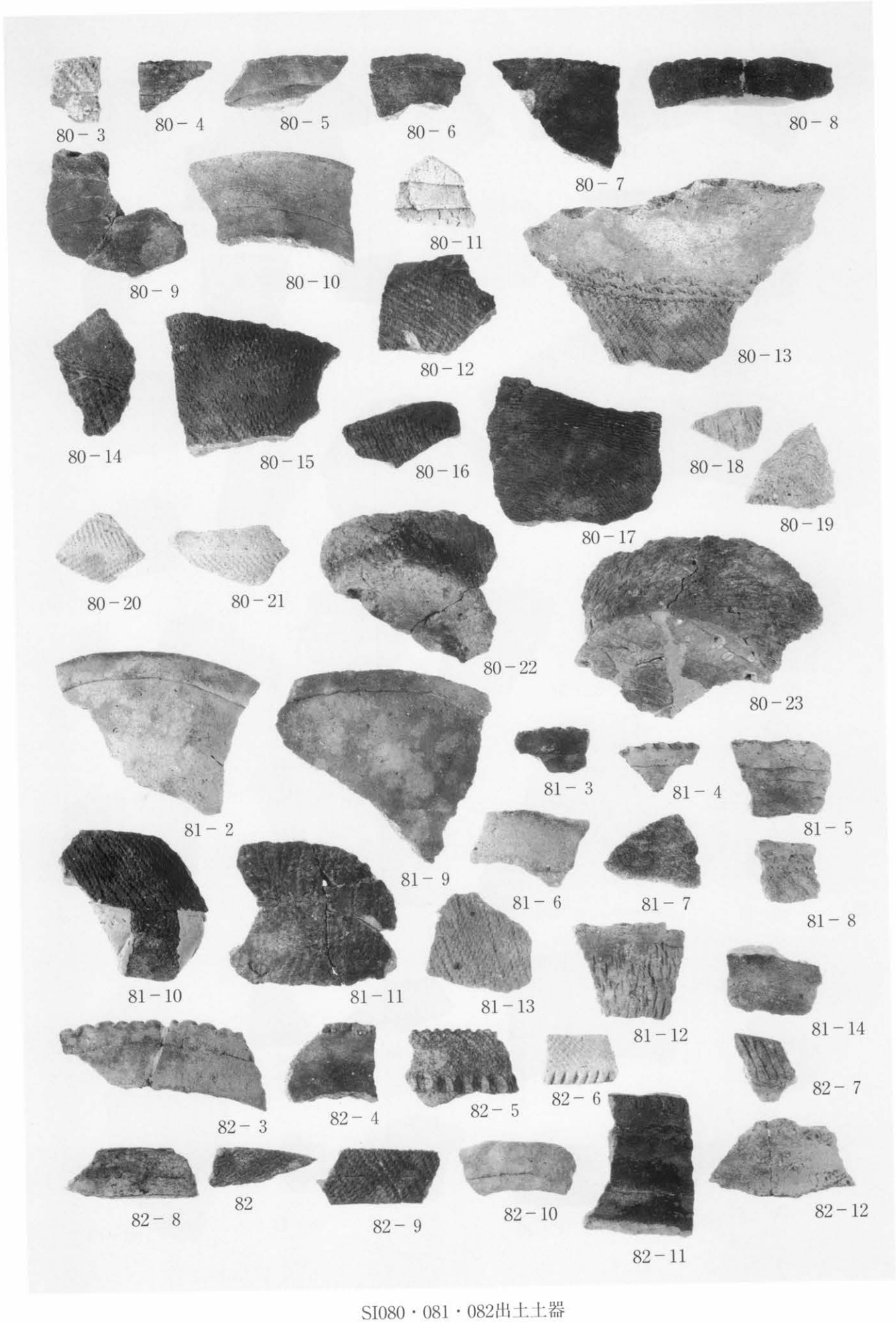
SI046・072出土土器



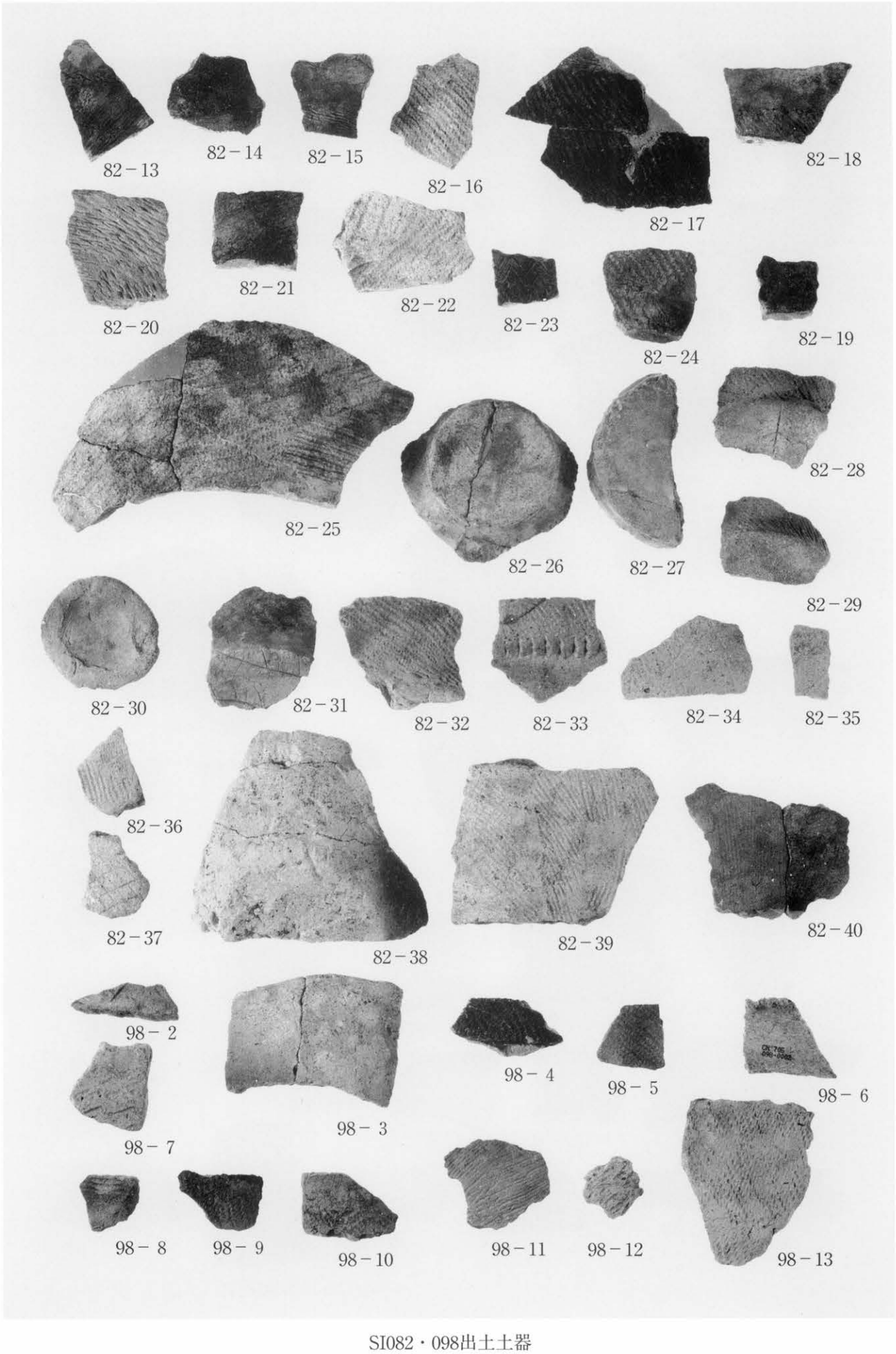
SI072・073・075A出土土器



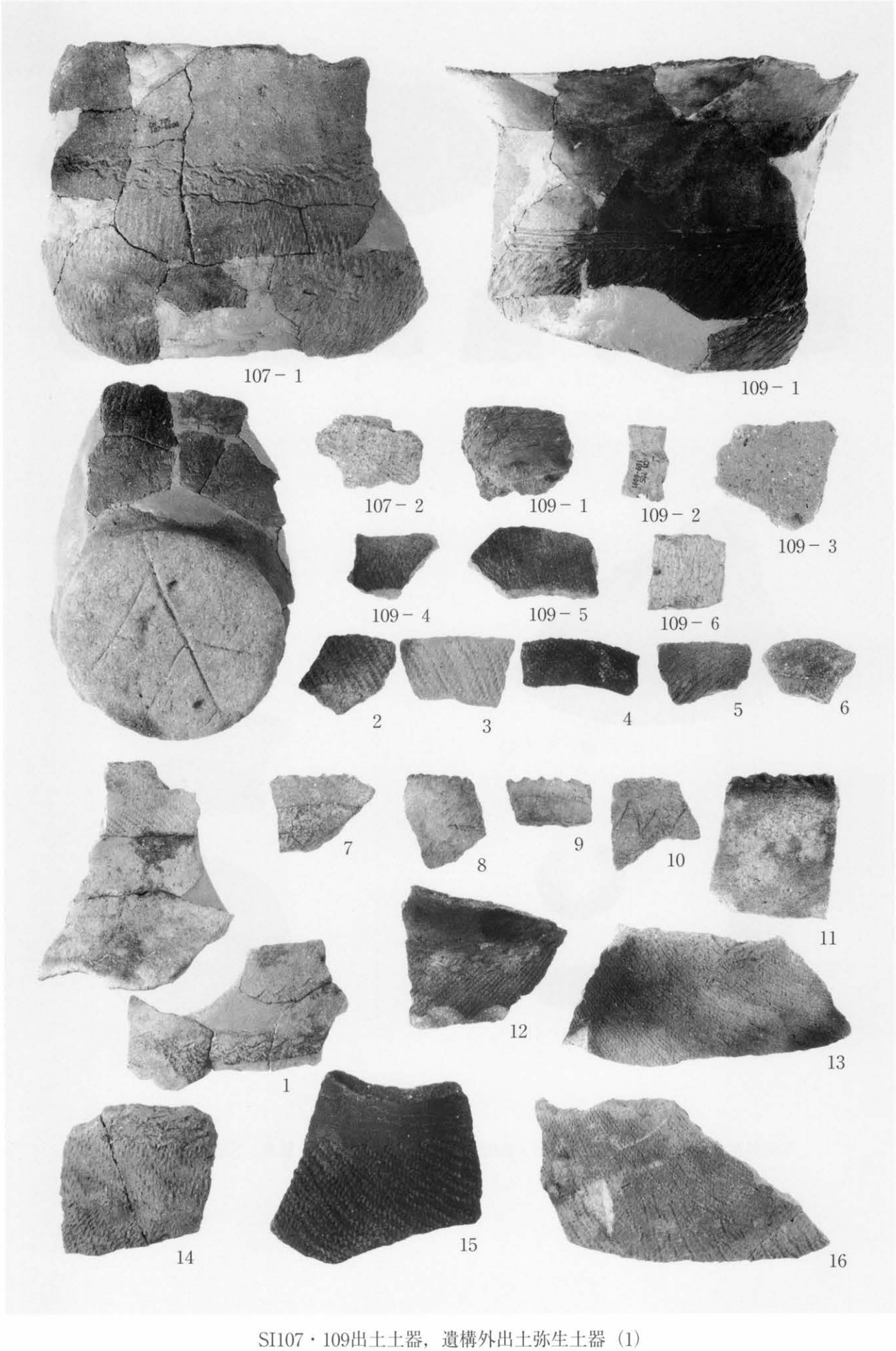
SI075A・076・079出土土器



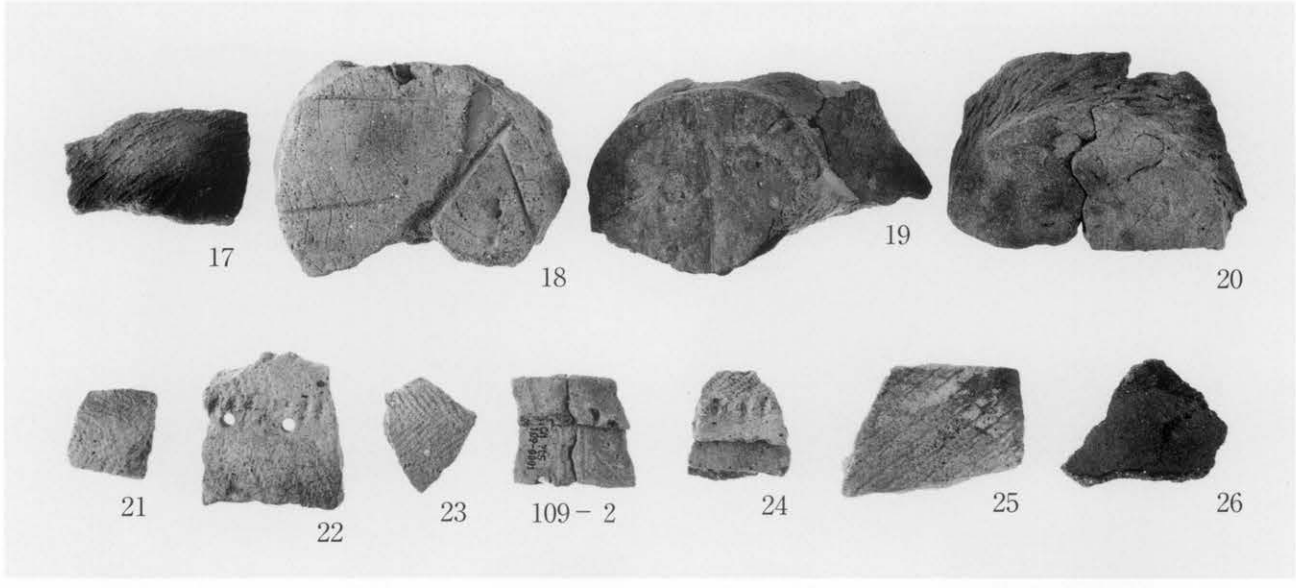
SI080・081・082出土土器

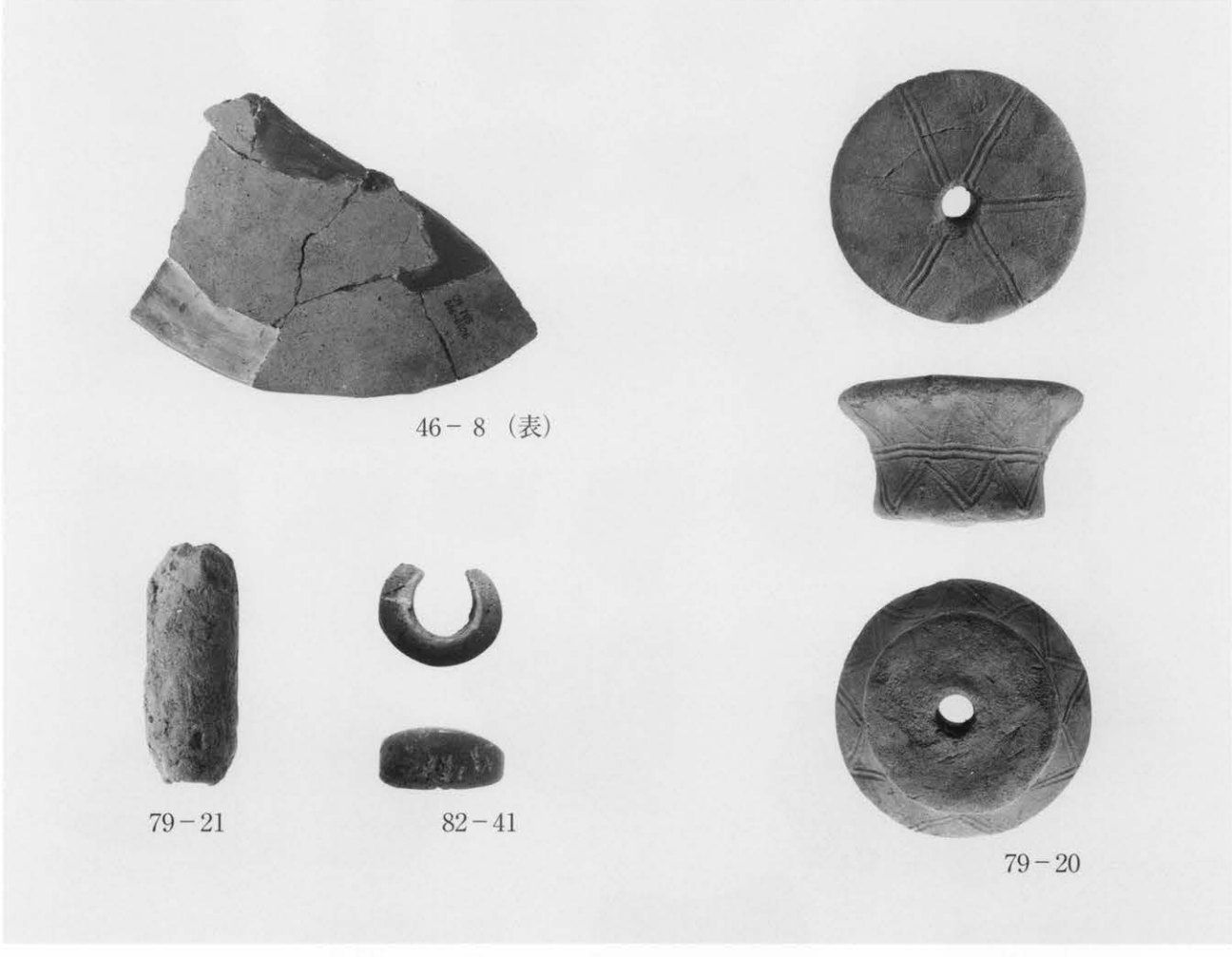


SI082・098出土土器

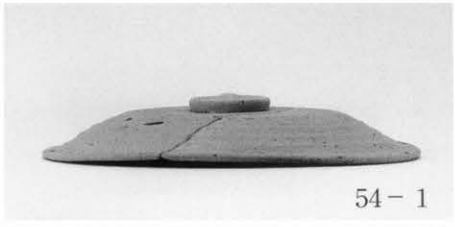


SI107・109出土土器，遺構外出土弥生土器（1）





遺構外出土弥生土器（2），SI046・109出土土器，SI079出土土製品，SI082出土石製玉


54－1

54－2

54－3

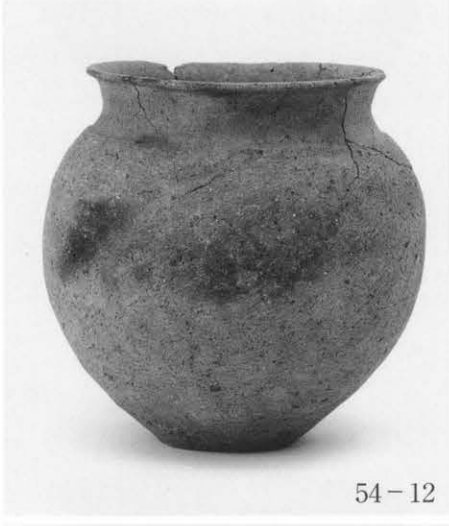
54－4

54－5

54－6

54－8

54－10


54－12

54－13

54－15

56－1

遺構外－1

遺構外－2

SI054・056出土土器，遺構外出土古墳時代土器

2－7

2－6

2－4

2－3

2－1

2－9

2－2

2－14

2－22

2－17

2－16

3－1

3－2

3－3

3－4

3－5

3－14

3－15

3－16

3－14

3－15

3－16

SI002・003出土土器

3 －13

3 －17

3 －41

8 － 3

8 － 4

8 － 2

8 － 5

9 － 1

9 － 2

9 － 4

9 －46

9 －13

9 －42

9 －11

9 －34

9 －51

9 －11

9 －34

9 －48

9 －49

9 －50

SI003・008・009出土土器

9 －57

10－ 1

14－ 1

14－ 2

14－ 5

14－ 6

14－ 7

14－ 8

15－ 1

15－12

15－20

15－ 7

15－ 9

15－21

22－ 1

23－ 1

23－ 8

24－ 1

24－ 2

SI009・010・014・015・022・023・024出土土器
SI023出土石製品

24－3

24－6

24－5

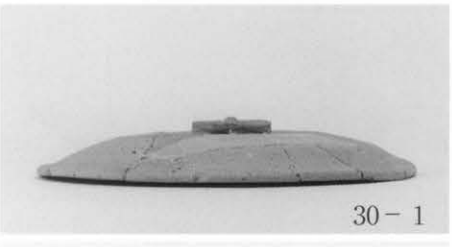
24－7

25－1

25－2

25－3

25－5

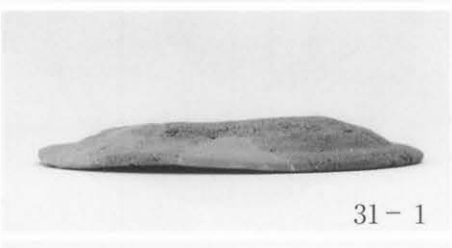

30－1

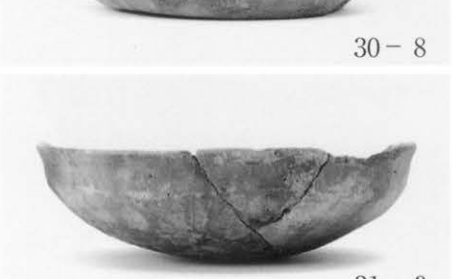
30－3

30－4

30－8

30－10


31－1


31－3

31－5

31－6

31－7

32－1

32－7

35－2

35－3

SI024・025・030・031・032・035出土土器

35－9

35－5

35－1

35－6

35－18

35－21

35－19

35－22

35－23

36－1

36－2

37－3

37－1

37－2

37－5

37－6

37－9

37－7

37－23

37－10

SI035・036・037出土土器

37－24

37－25

37－26

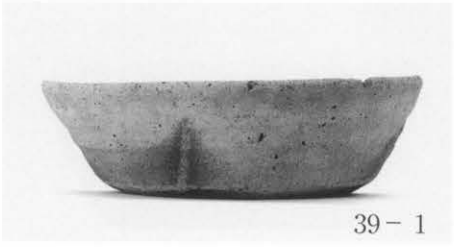
37－27

37－28

37－50

37－59

37－52


39－ 1

39－ 3

39－ 4

39－ 5

39－ 6

39－ 7

41－ 1

41－ 3

41－ 4

SI037・039・041出土土器

41－6

41－8

41－11

42－1

42－2

42－3

44－1

44－2

44－3

44－4

44－8

44－9

45－1

45－2

45－3

45－5

47－5

47－7

47－10

47－12

SI041・042・044・045・047出土土器

49－1

49－2

51－1

51－9

51－18

51－20

52－1

52－2

53－2

53－3

53－5

55－1

57－3

57－5

57－13

57－14

58－1

58－2

58－3

58－4

58－5

SI049・051・052・053・055・057・058出土土器

58－6

58－7

58－8

58－9

58－14

59－1

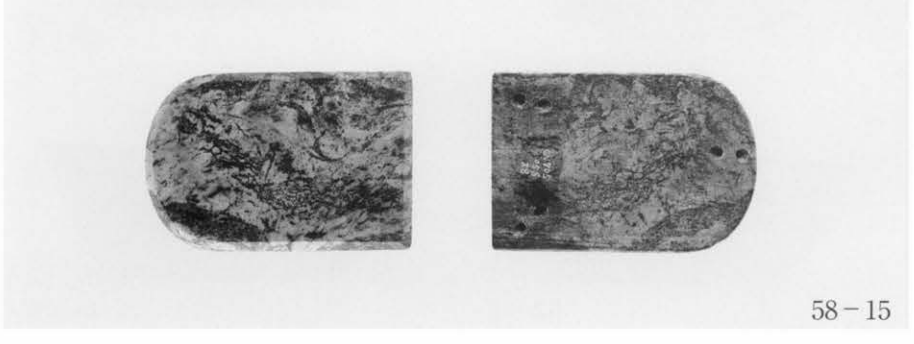
59－3

59－7

59－8

59－9

59－10


58－15

59－15

59－16

59－17

59－19

69－2

69－3

69－4

SI058・059・069出土土器，SI058出土石製品

69－7

77－18

78－8

77－1

78－1

78－9

77－2

78－2

78－10

77－4

78－3

78－11

77－5

78－4

78－15

77－6

78－6

78－16

SI069・077・078出土土器

78－17

83A－9

88－14

83A－1

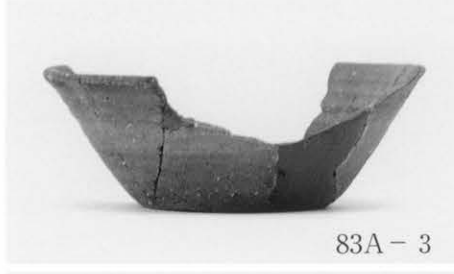
87－1

92－1

83A－2

88－1

93A－1


83A－3

88－2

93A－2

83A－7

88－3

93A－3

88－4

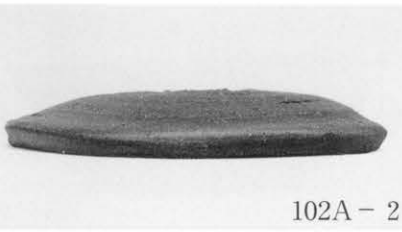
93A－4

83A－8

88－6

93A－5

SI078・083A・087・088・092・093A出土土器


102A－2

102A－3

102A－4

102A－5

102A－6

102A－7

102A－8

102B－1

102B－2

104－1

104－2

104－3

104－4

104－5

108－1

108－2

108－3

108－4

108－8

108－9

SI102A・102B・104・108出土土器

108－11

108－12

110－1

110－3

110－4

110－5

110－10

113－1

113－2

113－3

113－4

113－5

113－6

113－7

113－8

113－9

113－10

113－11

113－12

113－13

113－14

113－15

113－16

SI1108・110・113出土土器

113－17

114－1

60－1

113－18

SI113・114・124B・SH060
出土土器

124B－1

60－3

45

35－30

54－18

種子・石製品

54－21

77－21

41－17

8－16

8－17

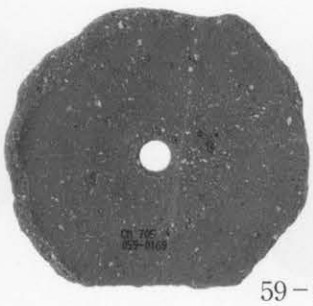
9－59

47－21

70A－3

59－34

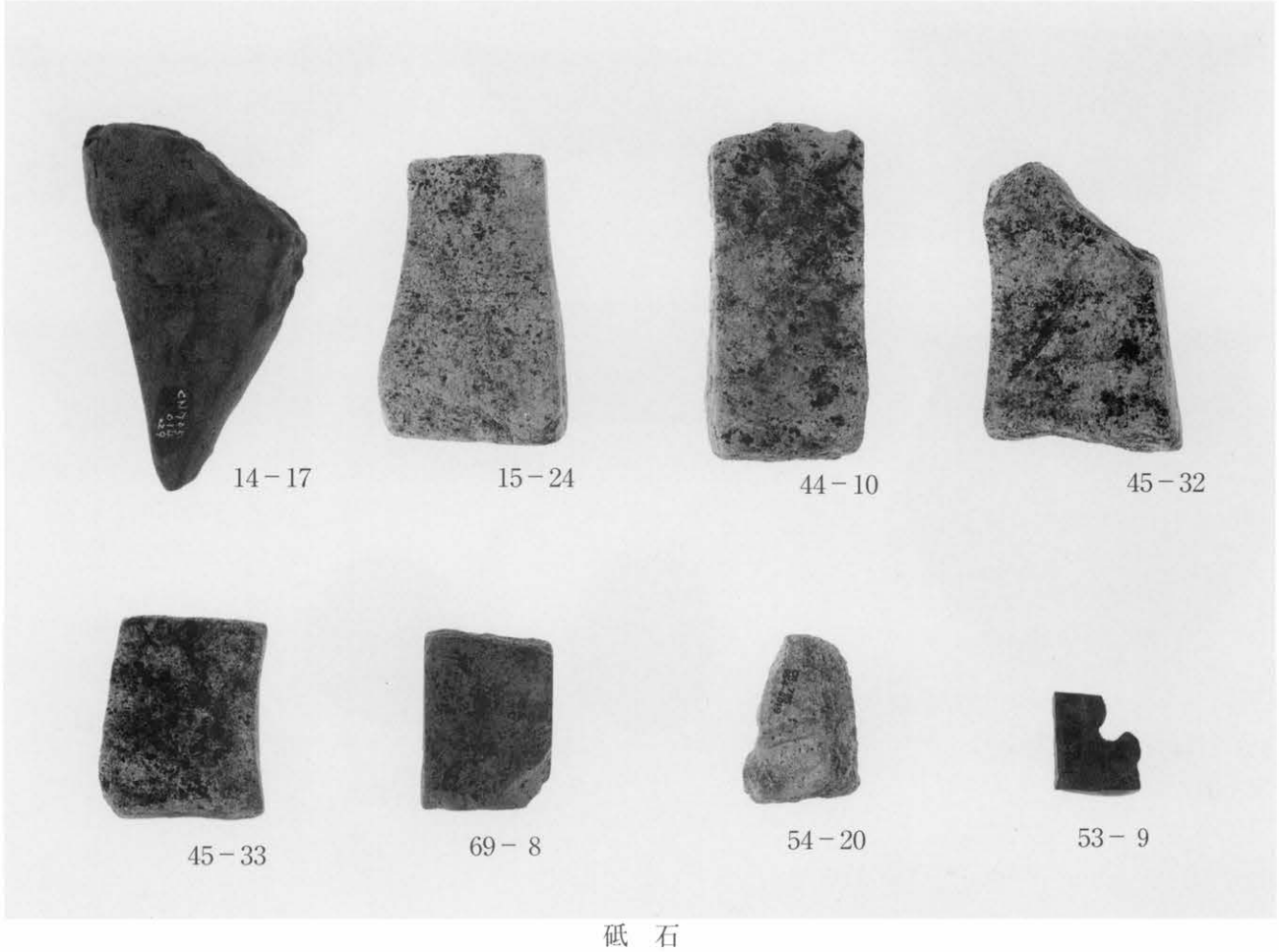
37－70



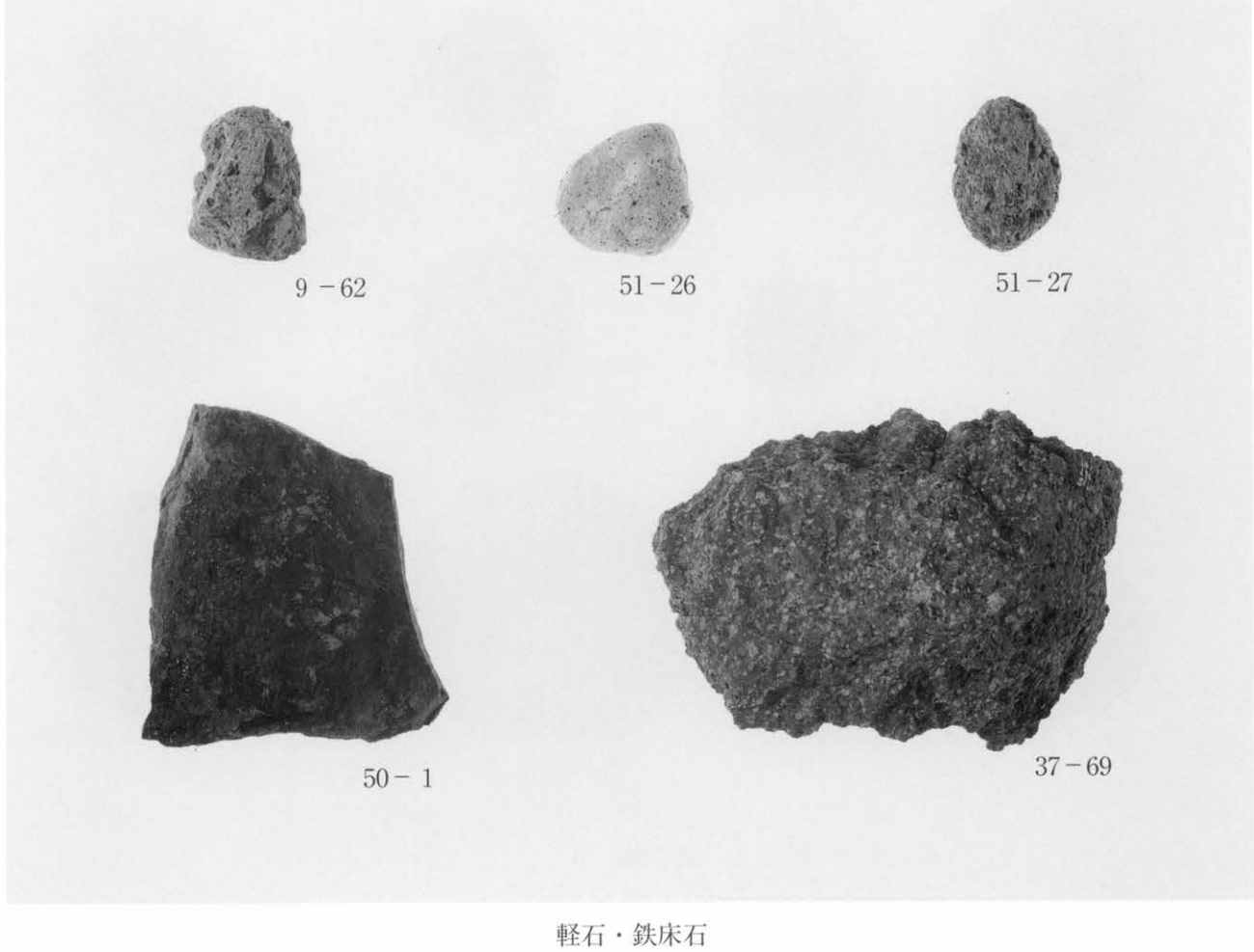
59－33

78－25

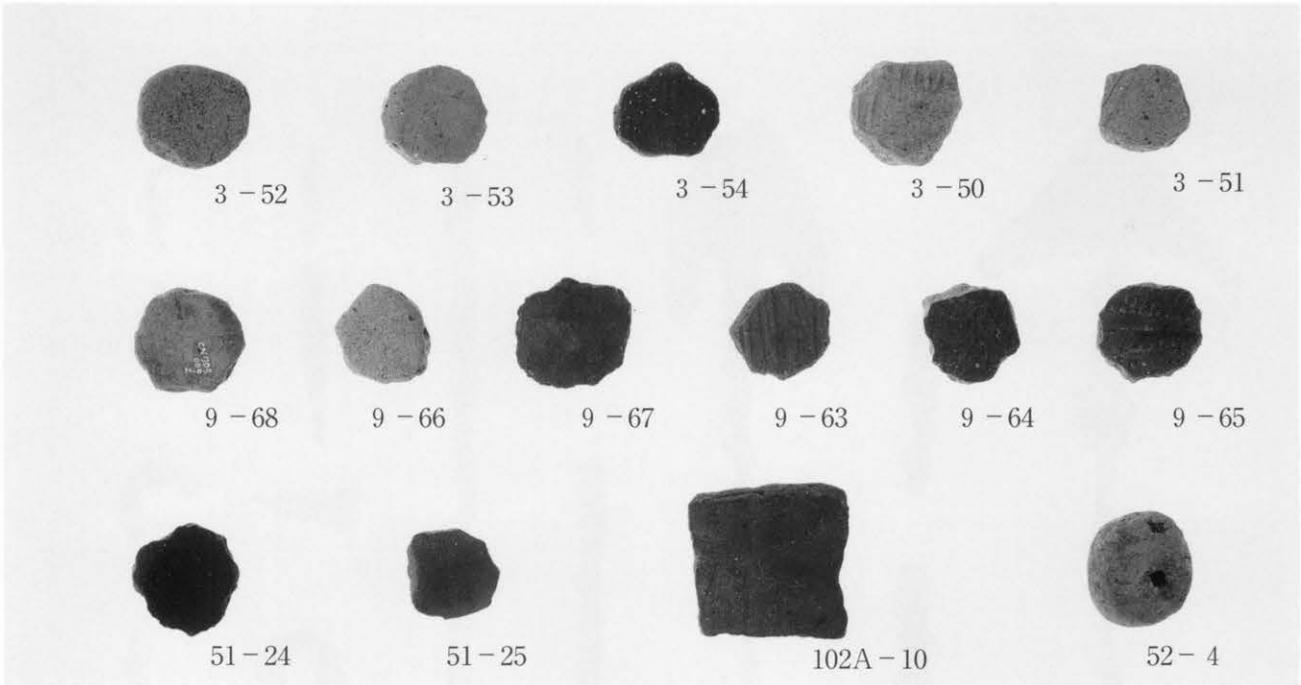
紡　錘　車



砥　石



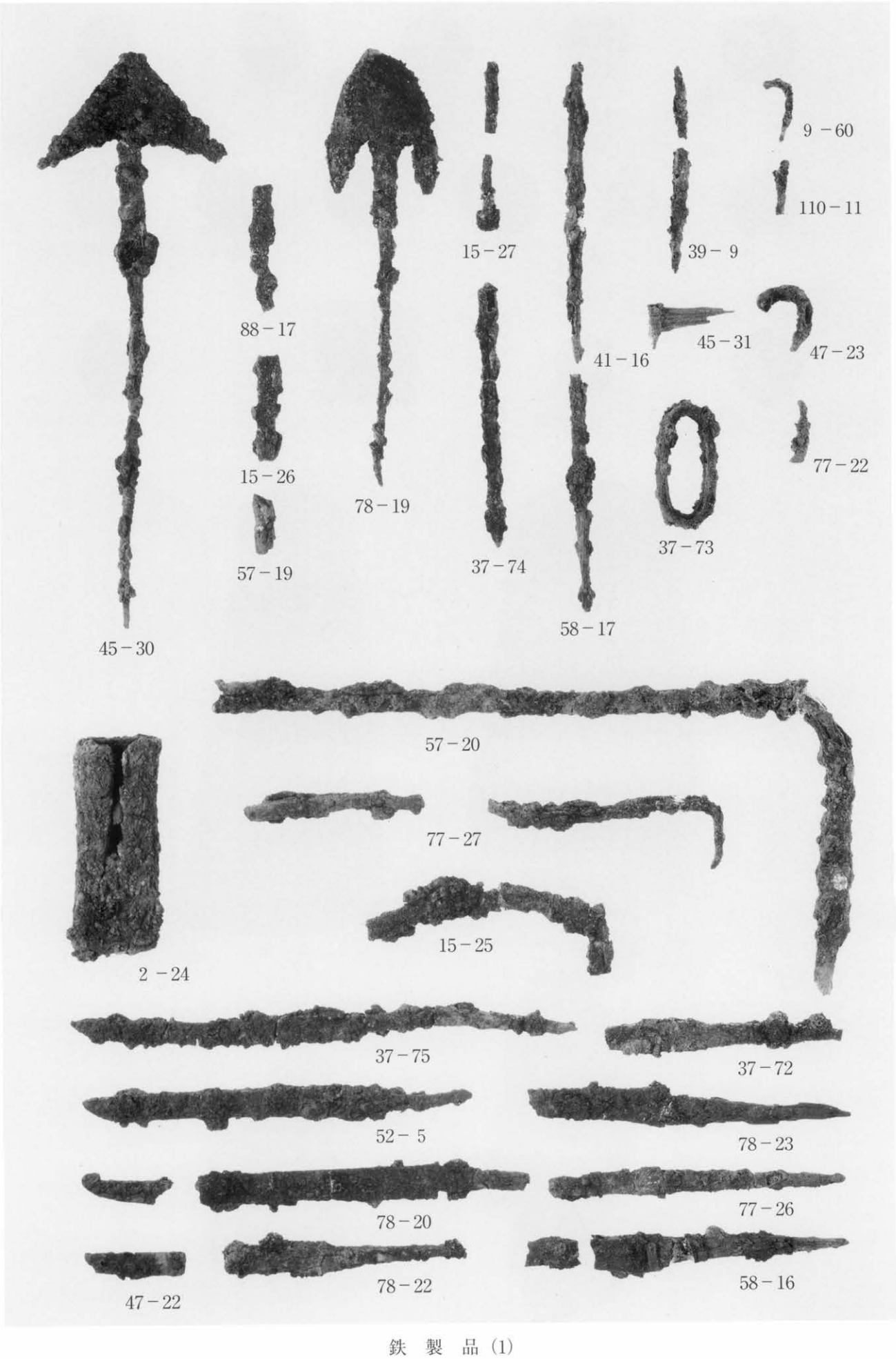
軽石・鉄床石


3－52
3－53
3－54
3－50
3－51
9－68
9－66
9－67
9－63
9－64
9－65
51－24
51－25
102A－10
52－ 4

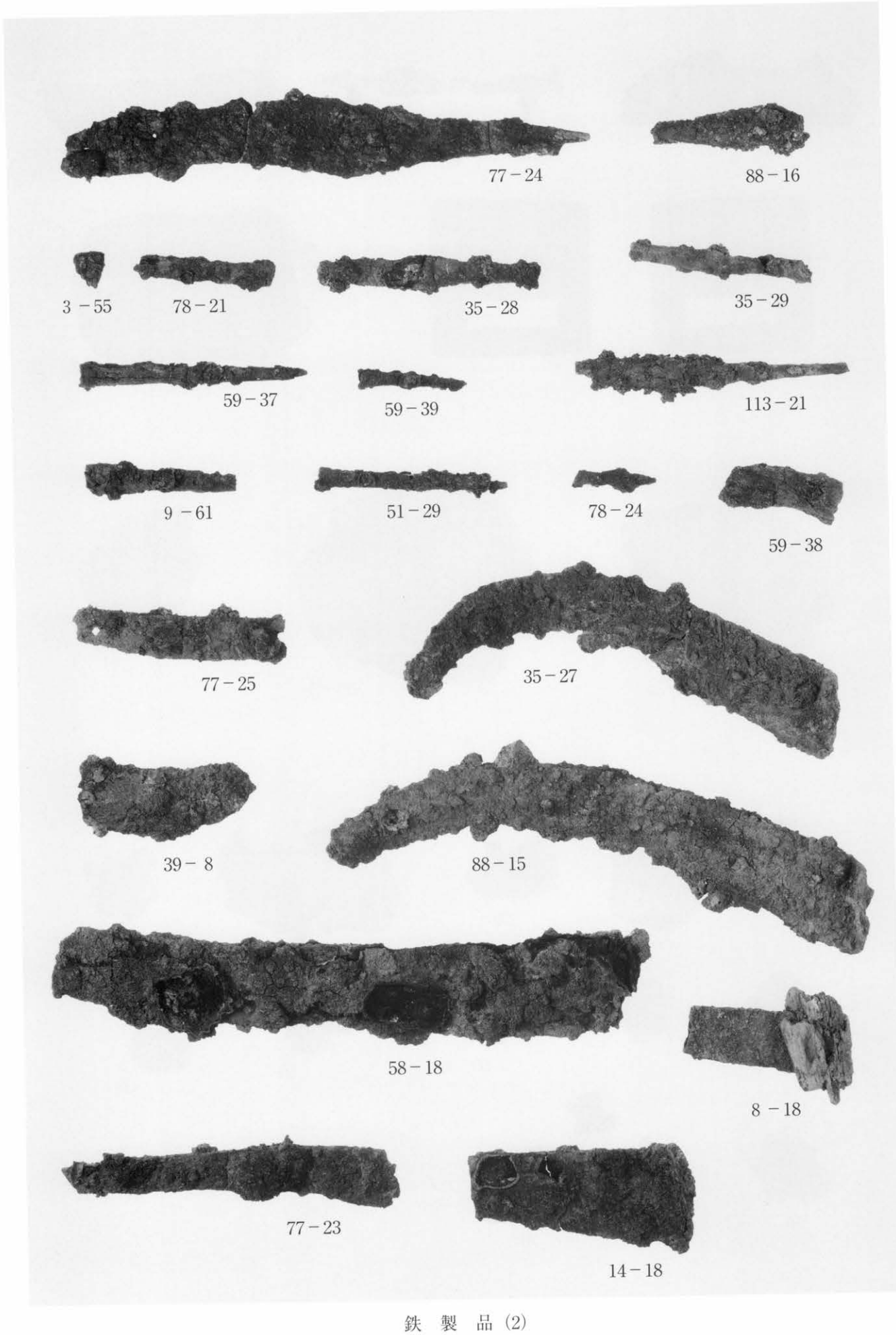
土　製　品

9－58
51－28
56－ 3
37－68

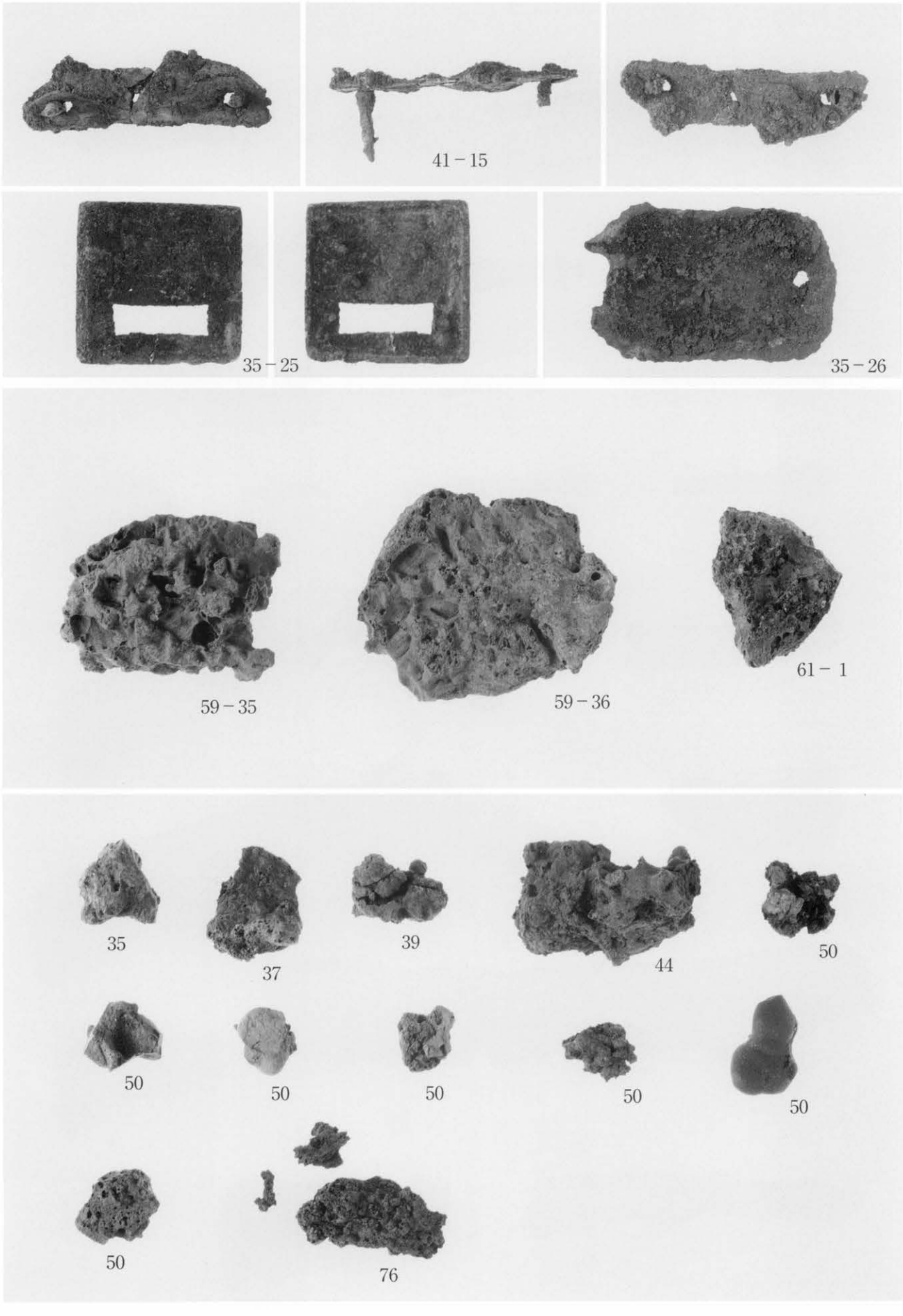
土製支脚


45－30
88－17
15－26
57－19
78－19
15－27
37－74
41－16
58－17
39－ 9
45－31
37－73
9 －60
110－11
47－23
77－22
57－20
77－27
15－25
2 －24
37－75
37－72
52－ 5
78－23
78－20
77－26
47－22
78－22
58－16

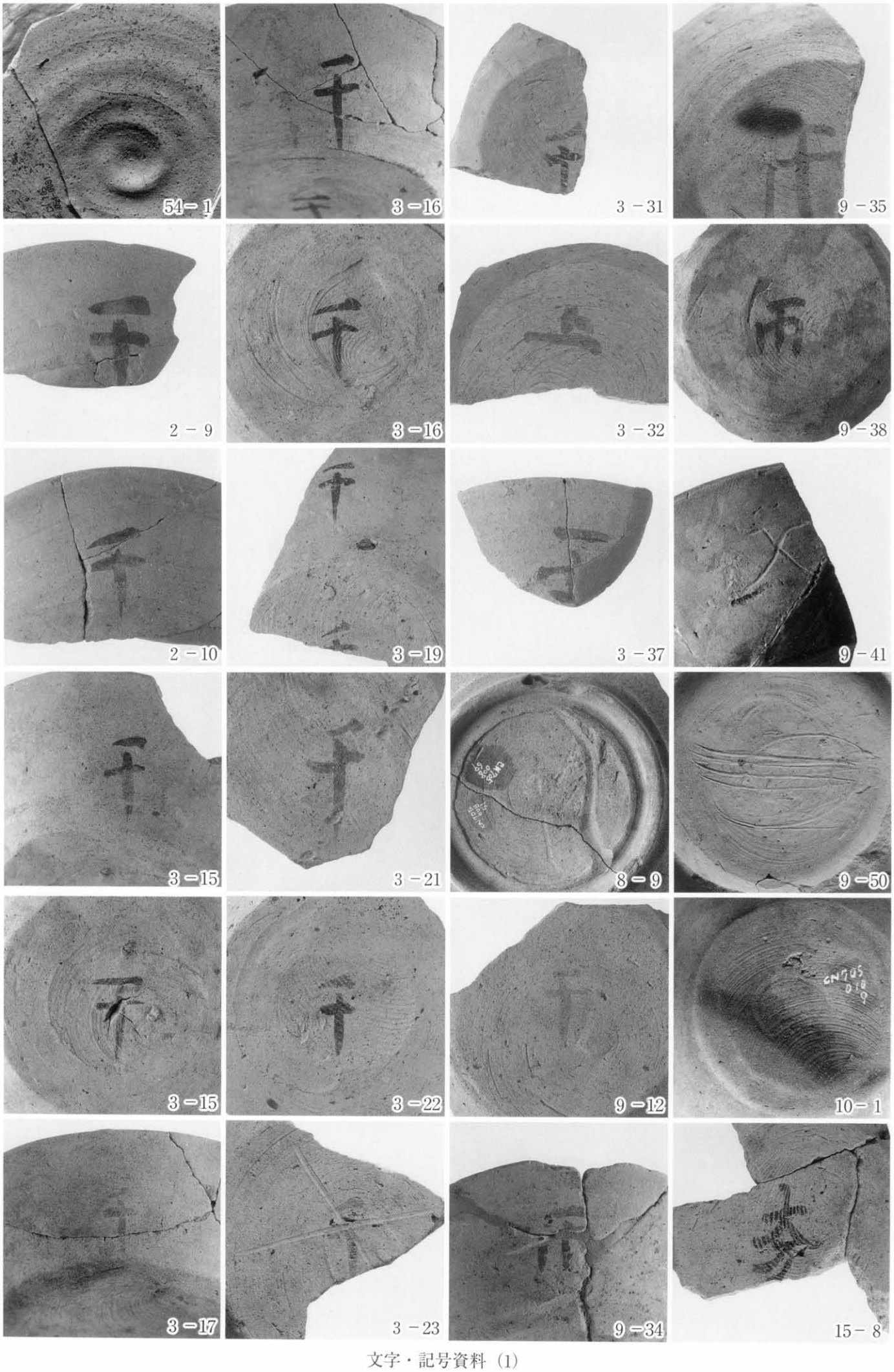
鉄　製　品（1）


77－24
88－16
3 －55
78－21
35－28
35－29
59－37
59－39
113－21
9 －61
51－29
78－24
59－38
77－25
35－27
39－ 8
88－15
58－18
8 －18
77－23
14－18

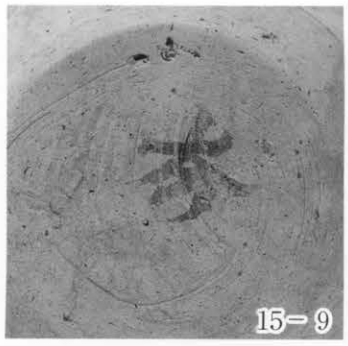
鉄　製　品（2）



鉄製品（3）・銅製品・鉄滓

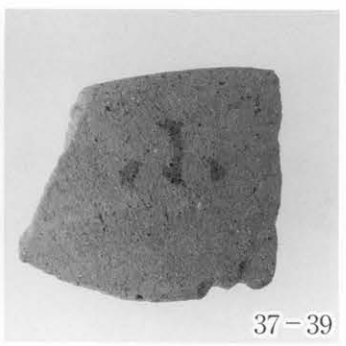

54－1
3－16
3－31
9－35
2－9
3－16
3－32
9－38
2－10
3－19
3－37
9－41
3－15
3－21
8－9
9－50
3－15
3－22
9－12
10－1
3－17
3－23
9－34
15－8

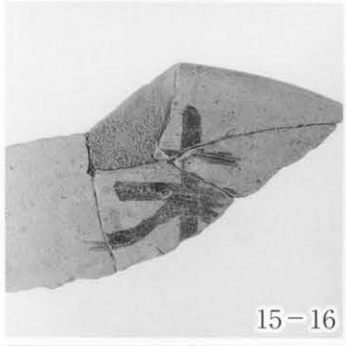
文字・記号資料（1）

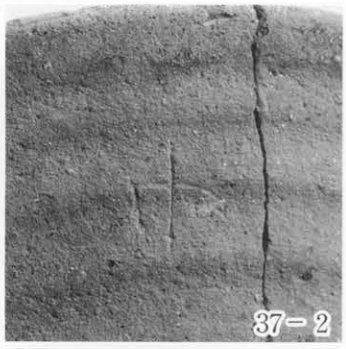

15－9

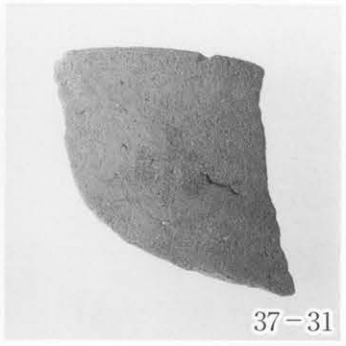
36－4

37－30

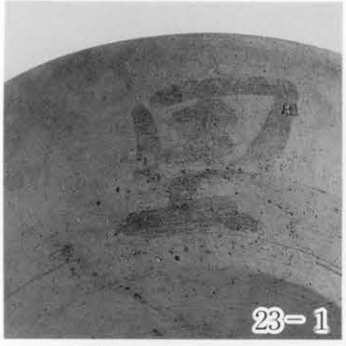

37－39


15－16


37－2


37－31

37－40

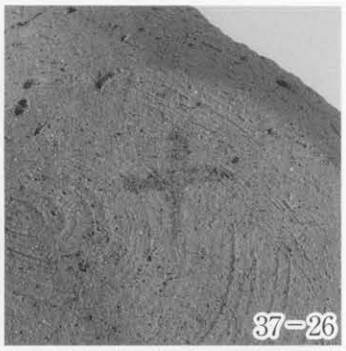

23－1

37－23

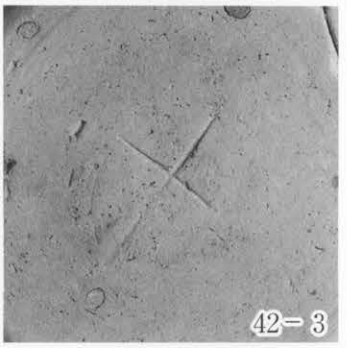
37－32

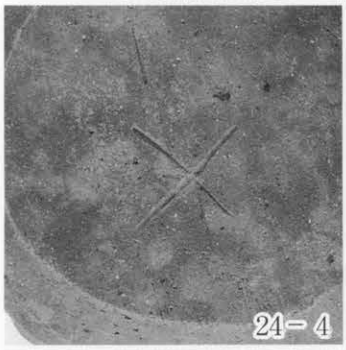
42－2

23－2


37－26

37－34

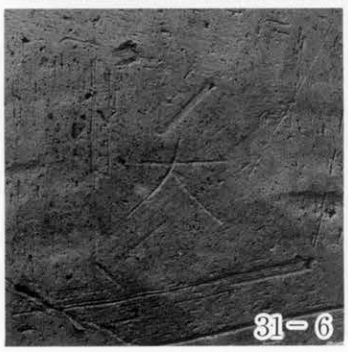

42－3


24－4

37－27

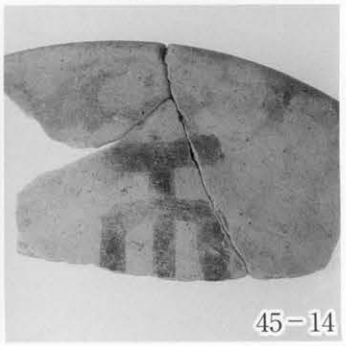
37－35

45－13

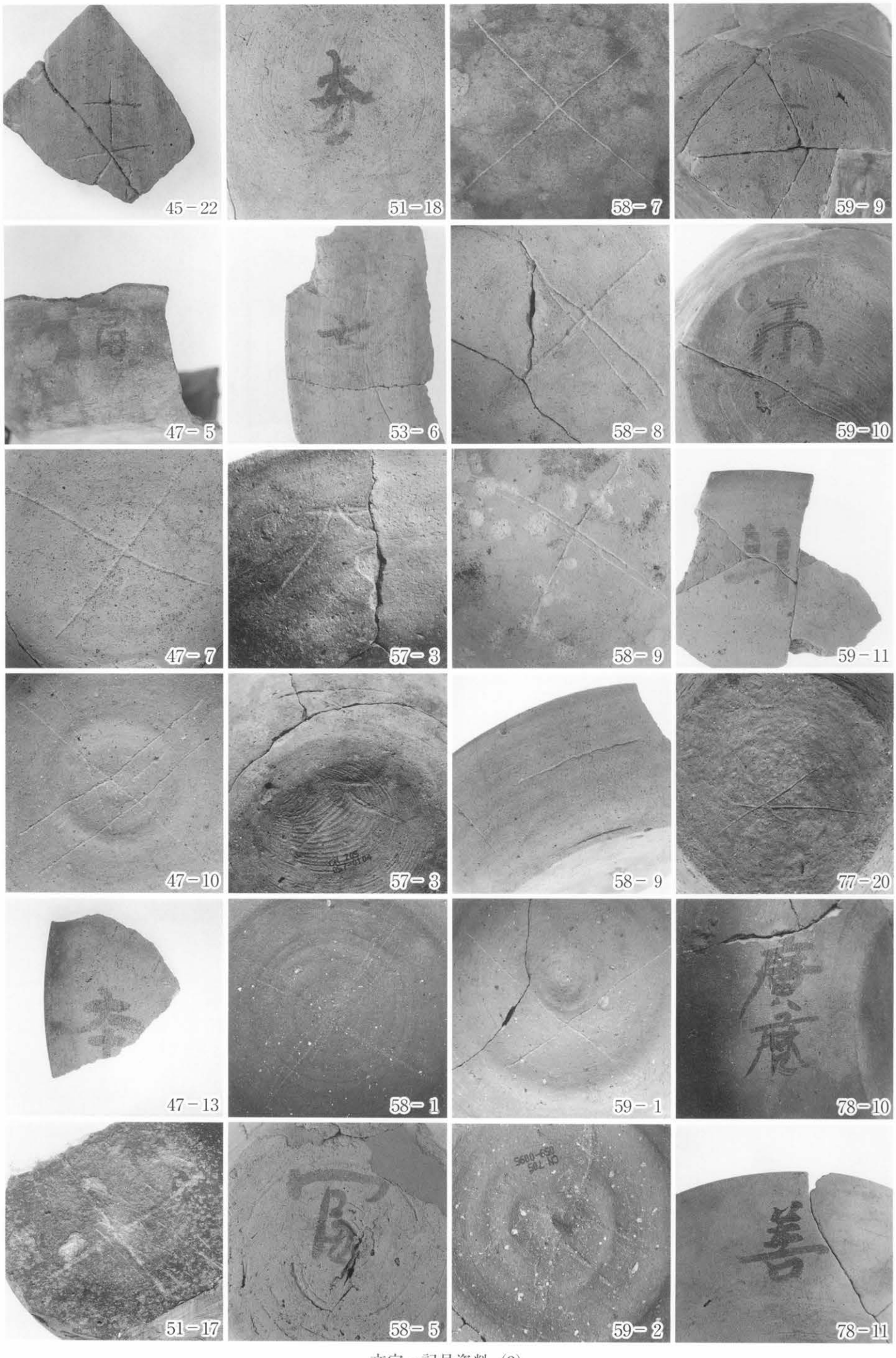

31－6

37－29

37－38

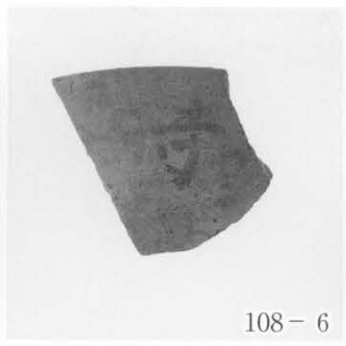

45－14

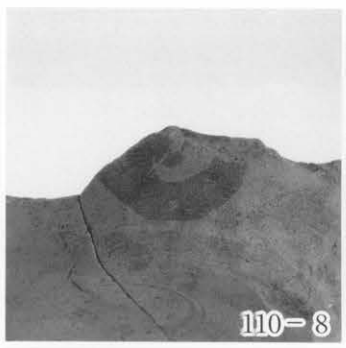
文字・記号資料（2）


45－22
51－18
58－7
59－9
47－5
53－6
58－8
59－10
47－7
57－3
58－9
59－11
47－10
57－3
58－9
77－20
47－13
58－1
59－1
78－10
51－17
58－5
59－2
78－11

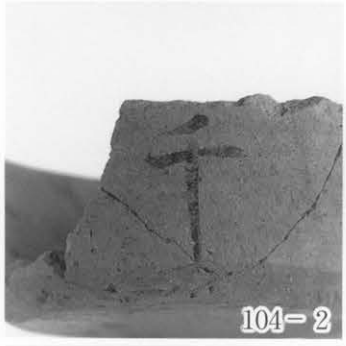
文字・記号資料（3）

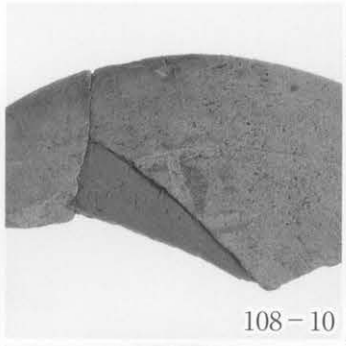
78－12

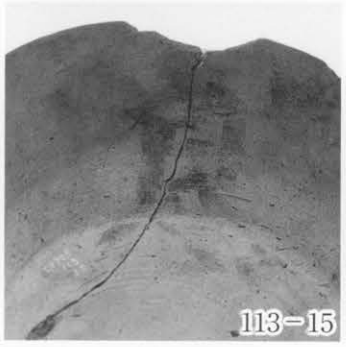

108－6

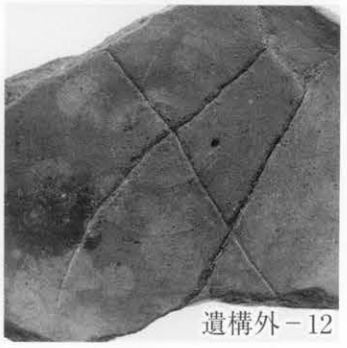

110－8

遺構外－8


104－2


108－10

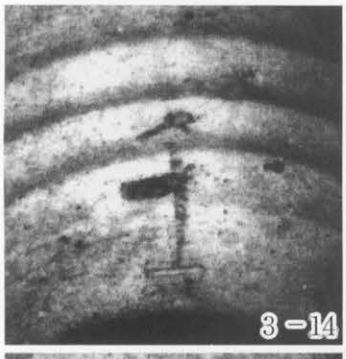

113－15


遺構外－12

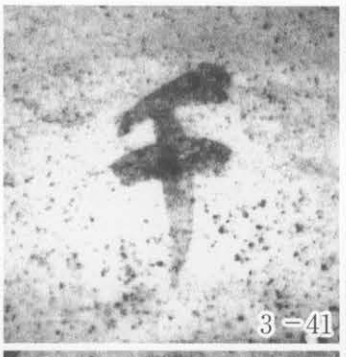
108－2

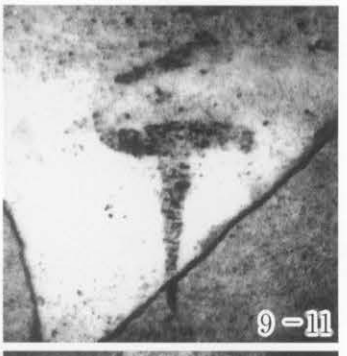
110－1

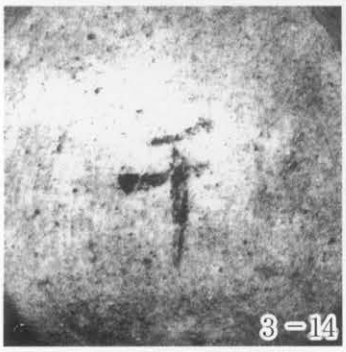
70A－2


3－14

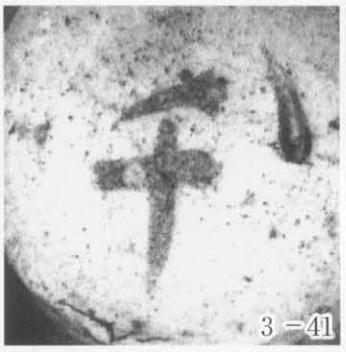
3－18

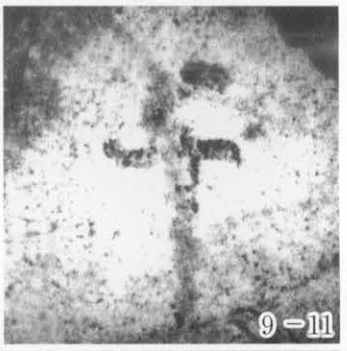

3－41

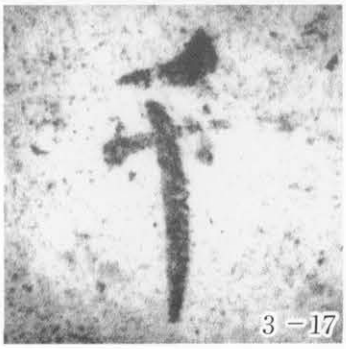

9－11

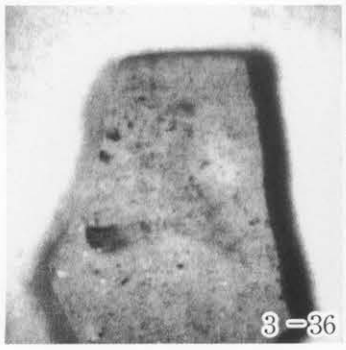

3－14

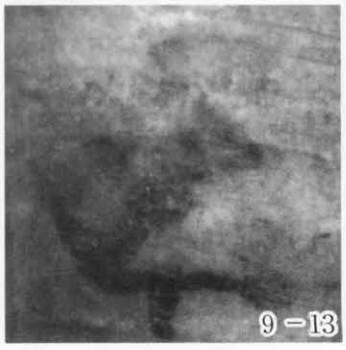
3－33

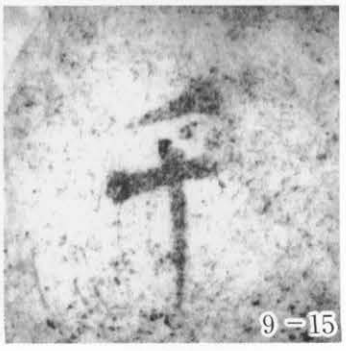

3－41

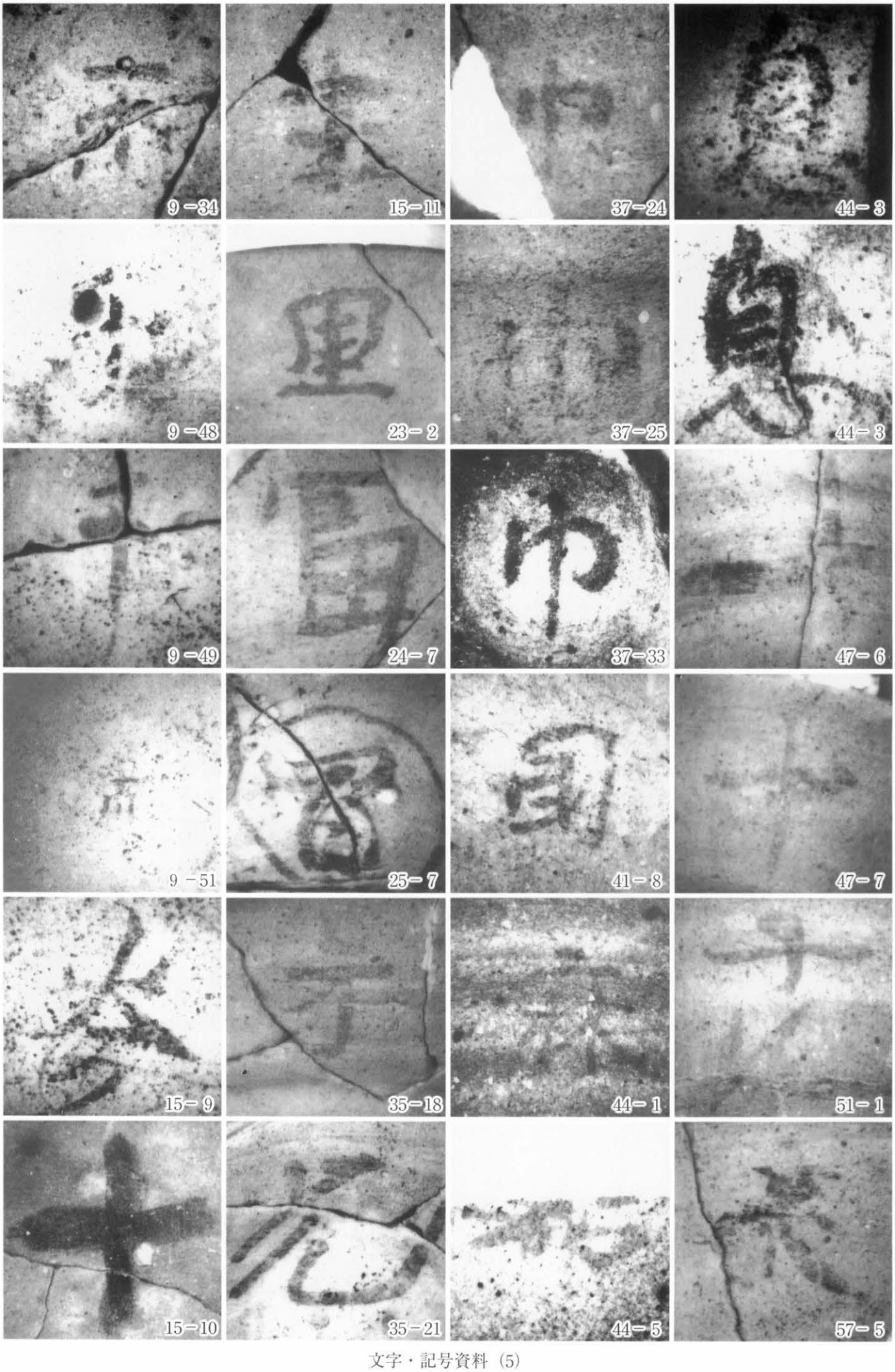

9－11


3－17

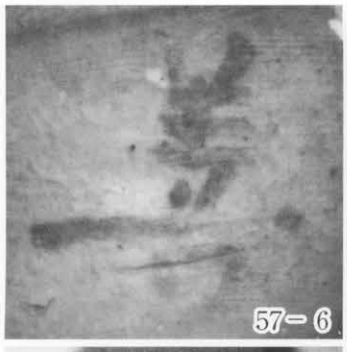

3－36

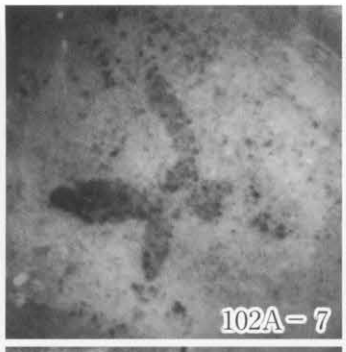

9－13

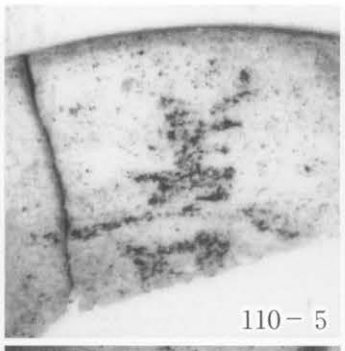

9－15

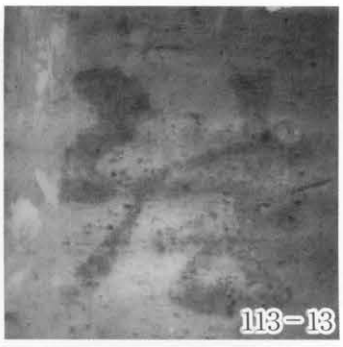

9－34
15－11
37－24
44－3
9－48
23－2
37－25
44－3
9－49
24－7
37－33
47－6
9－51
25－7
41－8
47－7
15－9
35－18
44－1
51－1
15－10
35－21
44－5
57－5

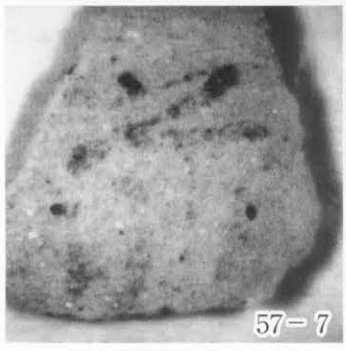
文字・記号資料（5）

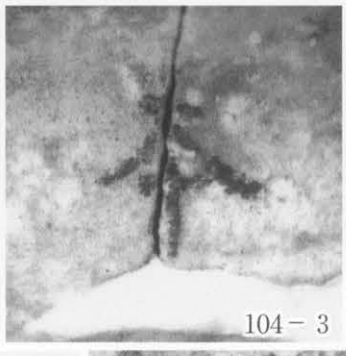

57－6


102A－7

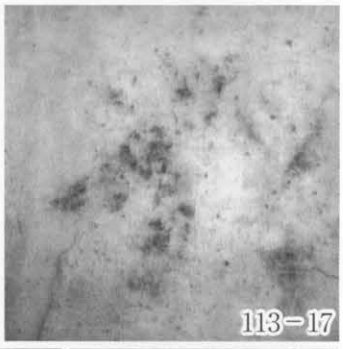

110－5


113－13

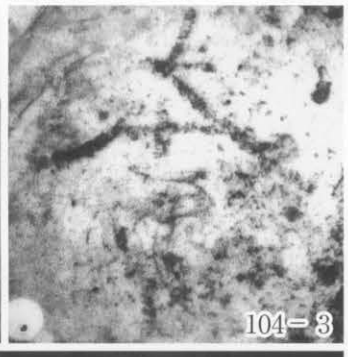

57－7


104－3

110－7

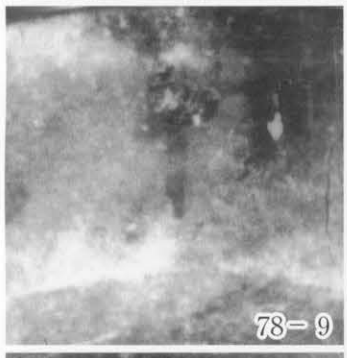

113－17

77－8

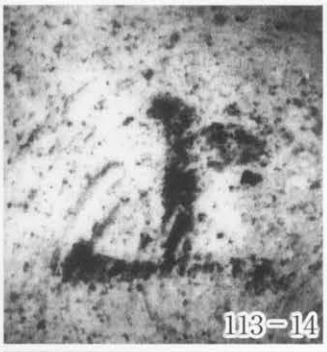

104－3

113－14

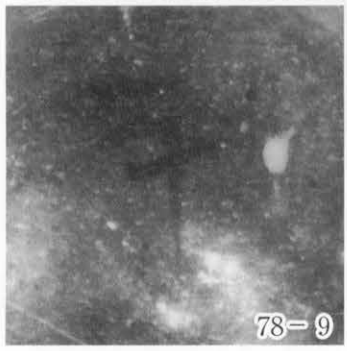
113－17

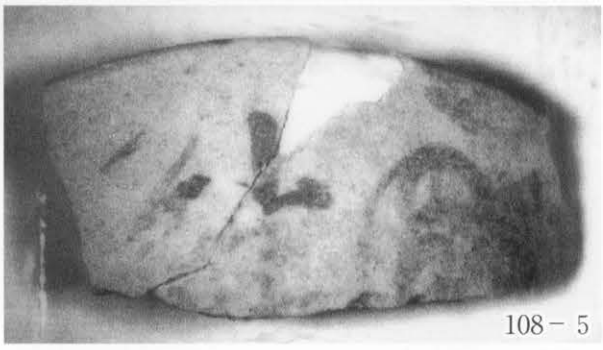

78－9

108－4


113－14

70A－1


78－9


108－5

遺構外－1

遺構外－2

文字・記号資料（6），中・近世陶器，銭貨

2－9

3－4

3－14

24－1

24－2

24－4

35－2

37－1

37－26

37－52

41－1

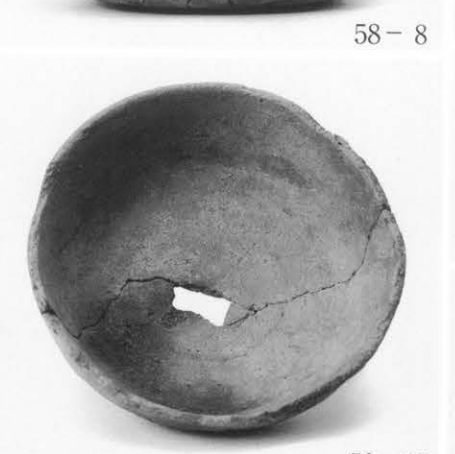
44－2

49－1

58－2

58－6

58－8


59－15

78－1

78－6

78－9

78－11

104－1

108－1

108－2

110－1

113－2

奈良・平安時代土器打ち欠き・穿孔状況

報告書抄録

ふりがな	ちばにゅーたうんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVI
副書名	印西市船尾白幡遺跡
巻次	XVI
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第477集
編著者名	糸川道行・小笠原永隆・田島　新
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地2　TEL043-422-8811
発行年月日	西暦　2004年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふなおしらはたいせき 船尾白幡遺跡	いんざいしふなおあざしらはた 印西市船尾字白幡 322-1 他	12231	CN705	35度 47分 5秒	140度 7分 41秒	19941101～ 19950324	13,100	公園造成
						19950405～ 19950630	2,864	
						19960617～ 19961129	5,318	
						19980706～ 19980812	705	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
船尾白幡遺跡	包蔵地	旧石器	石器集中地点	12地点	ナイフ形石器，剥片	弥生時代後期では印旛沼西部北岸地域における比較的大規模な集落の一つである。 また、奈良・平安時代においても古代印旛郡舩穂郷の中心的集落と考えられる。 墨書・線刻の文字・記号資料を多量に出土する。
	包蔵地・集落跡	縄文	炉穴	3基	縄文土器，石鏃，磨石	
			陥穴	9基		
			竪穴住居・竪穴状遺構	4棟		
	集落跡	弥生	竪穴住居	13棟	弥生土器，石鏃，敲石	
	集落跡	古墳	竪穴住居	3棟	土師器，須恵器	
	集落跡	奈良・平安	竪穴住居	53棟	土師器，須恵器、砥石，金属製品	
			掘立柱建物	17棟		
			ピット群	2基		
			土坑	3基		
			井戸状遺構	1基		
	包蔵地	中・近世	溝状遺構	3条	陶器	
			土坑	57基		

千葉県文化財センター調査報告第477集

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVI

－印西市船尾白幡遺跡－

平成16年３月25日発行

編　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　行　　都市基盤整備公団千葉地域支社
千葉ニュータウン事業本部
千葉県印西市戸神501

財団法人　千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2

印　刷　　株式会社　弘　文　社
千葉県市川市市川南2-7-2